

押野夕千十力遺跡
押野大塚遺跡

1989

石川県野々市町教育委員会

押野夕千十力遺跡
押野大塚遺跡

1989

石川県野々市町教育委員会

例 言

1. 本書は石川県石川郡野々市町押野町に所在する押野タチナカ遺跡、押野大塚遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 押野タチナカ遺跡第1～3次調査は野々市町押野土地区画整理事業に係るもので押野第一土地区画整理組合から委託を受けた。第5～7次調査及び押野大塚遺跡の調査は国庫・県費補助事業である。押野タチナカ遺跡第4次調査は館野小学校建設に伴うものである。以上の緊急発掘調査は野々市町教育委員会が実施した。
3. 調査担当者及び発掘年次は次の通りである。
調査担当 野々市町教育委員会社会教育課 高本 実（現住民課係長）、吉田 淳（同主事）
押野タチナカ遺跡

1980年度（第1次）	11月18日～2月10日	（高本・吉田）
1981年度（第2次）	3月23日～5月2日	（高本・吉田）
（第3次）	11月5日～11月22日	（高本）
1982年度（第4次）	7月2日～10月6日	（吉田）
（第5次）	7月1日～7月27日	（吉田）
1983年度（第6次）	7月27日～10月26日	（吉田）
1984年度（第7次）	7月11日～11月17日	（吉田）

押野大塚遺跡 1981年度 5月20日～6月19日・3月8日～3月29日（吉田）
4. 調査及び整理事業にあたり、次の各氏に御指導を賜った。（敬称略）
高堀 勝喜（石川考古学研究会常任顧問）、荒木 繁行（同会顧問）
橋本 澄夫（石川県立埋蔵文化財センター次長）、湯尻 修平、小嶋 芳孝（石川県文化課）
南 久和（金沢市文化課）、久田正弘（石川県立埋蔵文化財センター）
5. 本書の執筆は吉田、横山貴広（野々市町教育委員会社会教育課調査員）が下記のように分担して行い、藤 則雄氏（金沢大学教授）より玉稿を受けている。
第2章（第1節・第2節1～6の遺構と7の1～2・第3・6・7節）
第3章（第1・2節・第3節1・3・5）……………吉田
第1章・第2章（第2節1～6の遺物と7の2～9・第5節）第3章（第3節2）…横山
第2章（第4節）・第3章（第4節）……………藤
編集は協議のうえ吉田、横山が行った。
6. 遺物の写真撮影は寺尾庄司（野々市町教育委員会社会教育課主事）が行った。
7. 図版の縮尺はすべて図上に標示し、水平基準線レベルは海拔高である。なお方位はすべて磁北を指す。住居跡における柱穴間等の距離は心間である。土器実測図のスクリーントーンは赤彩を表す。
8. 出土した遺物および諸記録は野々市町教育委員会が一括して保管している。

目次

第1章 遺跡の位置と環境	
第1節 位置と地理的環境	1
第2節 周辺の歴史的環境	1
第2章 押野タチナカ遺跡	
第1節 調査の経緯と経過	5
1 調査の経緯	5
2 調査の経過	5
第2節 第1～3・5～7次調査	7
1 遺構の概要と層序	7
2 竪穴式住居	7
3 掘立柱建物	78
4 土坑	86
5 竪穴状遺構	107
6 溝	122
7 縄文時代の土器	126
8 弥生時代初頭の土器	127
9 奈良時代以降の土器	132
10 石器・石製品	133
第3節 押野館跡	168
第4節 縄文時代後期～弥生時代初頭押野 タチナカ遺跡からの石器の石質に ついての一考察	171
第5節 土器群の検討	173
I 弥生時代中期の土器群	173
II 弥生時代後期後半の土器群	173
第6節 館野小学校建設に伴う調査（第4次 調査）	204
1 遺構と遺物	204
2 小結	206
第7節 おわりに	227
引用参考文献	229

写真図版 1～12 第1～3・5～7次調査
13～16 第4次調査

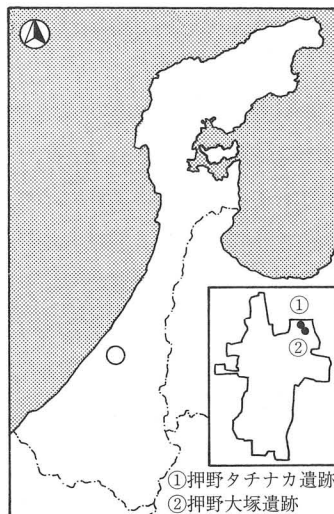
第3章 押野大塚遺跡	
第1節 調査の経過と概要	247
第2節 遺構	247
1 縄文時代	248
2 弥生時代	249
第3節 遺物	264
1 縄文時代	264
2 弥生時代	271
3 石器	287
第4節 押野大塚遺跡からの石器の石質に ついての一考察	293
第5節 まとめ	295

写真図版

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 位置と地理的環境

石川郡野々市町は石川県のはぼ中央南寄りに位置し、町土のほとんどは手取川によって形成された広大な手取扇状地北端に存在する。白山連邦を源とする手取川は鶴来町付近より流路を北から南西方向に転じ、日本海へそそいでいる。手取扇状地はこの県下最大の河川の堆積作用により扇形約12km、展開度約110度の規模を有し、その威容を金沢平野に横たえている。町域の北側から東側にかけての一带を金沢市に、西側から西南にかけての一带を松任市に、また南側を鶴来町に接する当町は、古くから交通の要地、商都として開かれた。その伝統は今に伝えられ、旧国道8号線ぞいに巨大な商業地帯を有し、また膨張著しい金沢に南郊することによる人口の急増という問題を抱えており、今後当町における開発も益々増加していくものと思われる。



第1図 遺跡の位置

押野タチナカ遺跡、押野大塚遺跡はこの野々市町の北部の押野町、通称『タチナカ』、『オオツカ』に所在し、近年市街化が著しい金沢市西部地区に接している。押野タチナカ遺跡は押野町より南東方向へ約400mを測り、北陸鉄道押野駅より南西に約450mを測る標高14mの平野部に位置しており、館野小学校に隣接する。また、押野大塚遺跡は同じく押野町より東へ約400m北陸鉄道押野駅より北西に約200mを測る標高12mの平野部に位置している。両遺跡の距離は直線距離にして約600mであり、ともに現在は土地区画整理事業がほぼ完了しており、都市計画道路の整備および宅地化が進行している。

第2節 周辺の歴史的環境

手取扇状地の扇端、弧状に走る標高10mのラインは地下水の自噴地帯として県内でも有数の遺跡密集地として知られ、縄文時代以降から現在まで数多くの人々の生活の足跡を窺い知ることができる。ここでは本遺跡が所在する押野町周辺の遺跡を時代別に概観し、歴史的な環境の復元に務めることとする。

「縄文時代」

周辺にまず最初に人々が住みついたのは中期に比定される古府ヒビタ遺跡である。その後、後期・晩期に入ると遺跡の数は若干増加の傾向を見せ、押野大塚遺跡、御経塚シンデン遺跡、米泉遺跡、御経塚遺跡、富樫館跡ノダ地区、新保本町チカモリ遺跡、中屋遺跡、野代遺跡などが営ま

れる。これらの遺跡ほとんどが標高6m～12mの地域に集中しており、いまだ採集経済に基盤をおくこれらの遺跡はその選地に生活水の確保が大きく関与していたことを窺わせる。また、新保本町チカモリ遺跡と御経塚遺跡（昭和56年度調査）、米泉遺跡には巨大な樹木を半截した環状列木を持つ遺構が検出されており、御経塚遺跡において大型土坑群とされた環状に巡る土坑群（昭和49年第6次調査）も木柱痕こそ検出されていないが、環状列木であった可能性が高い。これらの遺跡は能都町の真脇遺跡とともになんらかの精神文化的つながりのあったことを窺わせる。

「弥生時代」

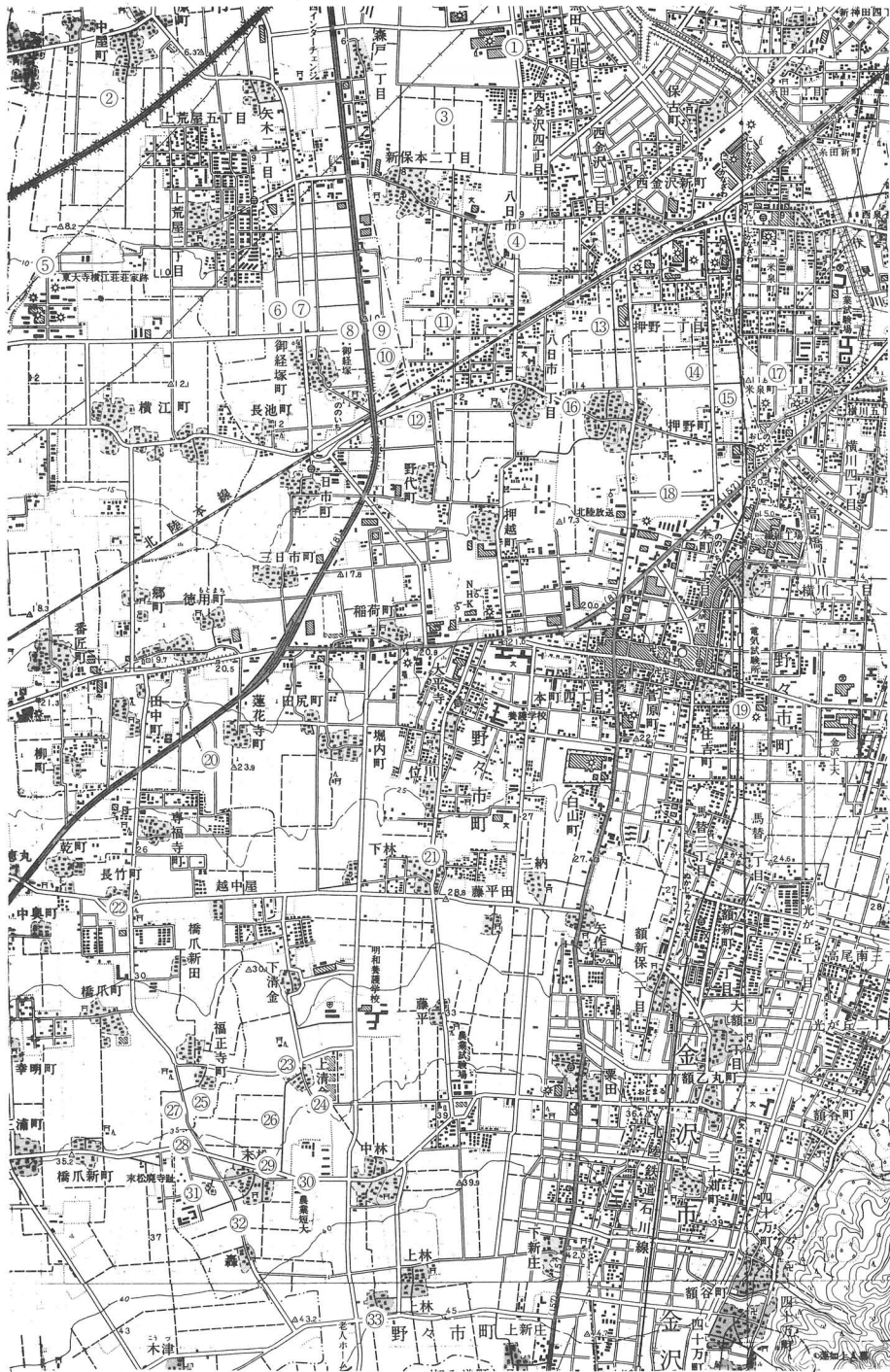
食糧生産を経済基盤とする弥生時代になると、遺跡の動向は縄文時代とは若干趣を異にする。この地域でまず見られるのは、前期後半に比定される柴山出村式土器を検出した押野タチナカ遺跡である。その後中期にかけてはやはり押野タチナカ遺跡があるが、それ以外は目立った遺跡は確認されておらず、該期の遺跡は寺中遺跡、西念・南新保遺跡などに代表される扇状地の影響を受けなかった北加賀低湿平野部と、上安原緑団地遺跡などに代表される海岸砂丘のバックマーシを背景とした地域に営まれるようになる。このことは扇状地の特質としてあげられる砂質で河原石を多く含む土壌と、依然として未熟な技術段階にあったと思われる農耕が要因であろう。後期になると、押野町の周辺でも遺跡の数も規模も爆発的な増加、拡大をみせる。この時期の遺跡として押野大塚遺跡、押野タチナカ遺跡をはじめとして御経塚シンデン遺跡、同ツカダ遺跡、押野西遺跡などが営まれる。これらは先に述べた縄文時代の遺跡と立地をほぼ等しくし、農耕技術の発達に伴う経済基盤の確立と、生活環境重視の選択とがある一定の段階で融合した結果と思われる。集落の増加と拡大は人口の増加を示唆し、県下に広くみられる該期遺跡の急増は農業経営基盤の確立を示している。

「古墳時代」

古墳時代の遺跡は周辺では八日市ヤスマル遺跡、能代遺跡、押野西遺跡、押野大塚古墳が知られている。また、昭和61年から63年にかけて調査された御経塚シンデン遺跡では古墳時代初頭に比定される前方後方墳1基を盟主とする方墳11基（総数12基）が検出されており、当時御経塚一帯のかなりの権力を持った首長が存在したことを窺わせる。昭和62年と63年に金沢市教育委員会が上荒屋地内で行った調査では、該期の集落跡が検出されている。両遺跡の距離は直線距離にして800mならずであり、これらの関係が注目される場所である。

「奈良時代以降」

奈良時代以降では御経塚アスナロ遺跡（奈良～平安）、八日市B遺跡（奈良～平安）、東大寺領横江荘遺跡（平安）、富樫館跡（平安～）、御経塚塚越遺跡（中世）、上宮寺跡（室町）などみられる。また、押野タチナカ遺跡の所在する通称『タチナカ』は富樫氏第15代泰明の子家善（押野氏祖）が居館を構えたことによるもので、押野村史には江戸時代にまだそのなごりを留どめた館跡を測量した地図が残されている。そこには貞和二年（1346年）に家善が自分の土地を大乘寺に寄進したことを示す寄進状もあわせて掲載されており、当時を知ることで資料として興味深い。野々市町では近年富樫館跡周辺の開発が増加する傾向にあり、今後富樫氏関連の遺跡の確認も増加する可能性が高いと思われる。



1. 古府ヒビタ遺跡 (縄文)
2. 中屋遺跡 (縄文)
3. 新保本町チカモリ遺跡 (縄文)
4. 八日市ヤスマル遺跡 (古墳)
5. 東大寺領横江荘遺跡 (平安)
6. 御経塚シンデン遺跡 (縄文～中世)
7. 御経塚塚腰遺跡 (中世)
8. 御経塚遺跡 (縄文)
9. 御経塚遺跡ツカダ地区 (弥生～古墳)
10. 御経塚遺跡アスナロ団地地区 (奈良から平安)
11. 八日市B遺跡 (奈良～平安)
12. 野代遺跡 (縄文・古墳)
13. 押野西遺跡 (弥生～古墳)
14. 押野大塚古墳
15. 押野大塚遺跡 (縄文・弥生)
16. 上宮寺跡 (室町期)
17. 米泉遺跡 (縄文)
18. 押野タチナカ遺跡 (縄文・弥生・室町)
19. 富樫館跡 (縄文・平安～)
20. 田中ノダ遺跡 (弥生)
21. 三林館跡 (安土桃山)
22. 長竹遺跡 (縄文・～中世)
23. 清金アガトウ遺跡 (平安～中世)
24. 末松信濃館跡 (古墳)
25. 末松福正寺遺跡 (古墳)
26. 末松B遺跡 (弥生)
27. 末松ダイカン遺跡 (奈良～中世)
28. 末松廃寺跡 (白鳳～鎌倉)
29. 末松遺跡
30. 末松A・C遺跡 (縄文・平安)
31. 大館館跡 (平安～室町)
32. 法福寺跡
33. 上林遺跡 (弥生・古墳)

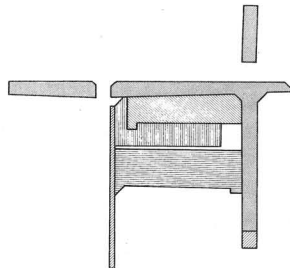
第2図 周辺の遺跡



第1図 押野タチナカ遺跡調査区配置図 (1/3,000)

■ 発掘調査区

- 1930年度
- 1981年度
- 1982年度
- 1983年度
- 1984年度



年度別調査区配置図

第2章 押野タチナカ遺跡

第1節 調査の経緯と経過

1 調査の経緯

野々市町字押野町地内は金沢都市計画にもとづき昭和45年7月1日付で市街化区域として編入された。その後昭和50年代に入ると土地区画整理事業施行の機運が熟し、昭和53年には野々市町押野第一土地区画整理組合が設立されている。この設立にさきだち、石川県教育委員会、金沢市教育委員会、野々市町教育委員会の三者が土地区画整理事業区画内における周知の遺跡についての分布調査を昭和52年(1977)3月29日に実施している。この分布調査は金沢市、野々市町の両教育委員会が合同で実施したものである。この押野タチナカ遺跡(旧名押野館跡)の分布調査により、遺跡は弥生時代後期の集落跡と判明し、おおむねの遺跡範囲が確認された。土地区画整理組合との協議により遺跡の中心約1500㎡が公園として保存されることとなった。その後昭和55年(1980)度より本遺跡地内での街路築造工事が開始されることとなり、昭和55～56年度にかけて街路部分の緊急発掘調査を実施することとなった。調査は押野第1土地区画整理組合から委託を受け野々市町教育委員会が実施した。この調査は街路部分のみであったため、昭和57から59年度にかけて宅地化が必至の情勢である街区部分については国庫補助事業による緊急発掘調査を3次にわたり実施した。また昭和57年度に仮称第五小学校(現館野小学校)建設に伴い調査を実施している。街区内の調査については昭和61年度以降国庫補助事業としての採択が困難となったことから、昭和60年に遺跡の分布調査を再度実施し範囲を確定した。埋蔵文化財について地権者をはじめ一般にひろく理解してもらうため、押野タチナカ遺跡の調査結果を小冊子にまとめている。

2 調査の経過(第1図)

1980年度調査(昭和55年度 第1次調査)

11月18日より翌年の2月10日にかけて街路部分の調査を実施した。11月から12月にかけて遺構の検出や実測作業は順調に進んだのであるが、年が明け調査終了間近に歴史的な大雪(56豪雪)となり除雪しながらの調査であったことは印象深く、記憶に残るものである。弥生時代後期の竪穴住居1～5号の5棟、土坑、溝と中世期の土壌を検出している。調査面積は約600㎡である。

1981年度調査(昭和56年度 第2次調査・第3次調査)

前年度に引き続き街路部分の緊急調査である。第2次調査は年度をまたぐが、1981年度の調査としている。遺跡地の東側を南北に縦断する街路部分の調査として3月23日より5月2日にかけて行い、第3次調査は第2次調査区で実施した街路の南側延長部分と遺跡の西側の南北に走る街路部分である。第2次調査では16号住居及び87号土坑を検出した。第3次東調査区では17号住居、

西調査区では11号・12号住居を検出し、遺跡は当初の分布調査範囲より南側に拡がることが確認された。調査面積は第2次約290㎡、第3次約250㎡である。

1982年度調査（昭和57年度 第4次調査・第5次調査）

第4次調査は館野小学校建設に係る緊急発掘調査である。人口増に伴い押野地区において第5小学校の建設が押野第1土地区画整理事業区域内に計画されたことによるものである。事前の遺跡確認の結果、運動場擁壁部分について調査が必要となり7月1日～7月27日にかけて実施した。この調査区は、遺跡の北西部にあたり巾約2mで南北108m、東西55mの逆L字型の調査区を設定している。西側端部では河道跡を検出した。この調査で遺跡の北側及び西側の範囲を確認した。弥生時代後期の堅穴住居4棟、土坑等を検出している。調査面積は約320㎡である。第5次調査からは国庫補助事業として宅地化を想定した街区内の調査である。第5次調査は第1次調査区の南側集落中心部を調査区とし、5～10号の住居を検出した。このなかで8号住居は弥生時代中期に遡るものである。調査は7月2日より10月16日にかけて実施し、面積は約510㎡である。

1983年度調査（昭和58年度 第6次調査）

本次調査は第5次調査に接し南側に調査区を設定した。6～10号住居を完掘し、2号掘立柱建物を検出した。また遺物包含層より縄文時代後期中葉の酒見式土器が出土し本遺跡の初源が判明した。また晩期の中屋式土器、弥生時代初頭の柴山出村式土器も少量であるが出土している。7月27日～10月26日にかけて現場作業を実施し、調査面積は約360㎡である。

1984年度調査（昭和59年度 第7次調査）

本次調査は前年度の南側に調査区を設定し、7月11日～11月16日にかけて現場作業を実施した。11号・12号住居を完掘し、新たに13～15号住居を検出した。15号住居は弥生時代中期の所産と考えられる。また3～6号の掘立柱建物を検出した。調査面積は約730㎡である。

第7次調査をもって国庫補助による緊急調査は一旦打ち切りとなった。このことから今後の宅地化に備えるため、1985年度（昭和60年度）において本遺跡の分布範囲を確認するための試掘調査を実施している。第1次より第7次までの総発掘調査面積は2,040㎡である。

屋外及び屋内の作業では次の方々の協力を得た、記して謝意を表す。

朝倉功、朝倉静恵、朝倉利子、朝倉豊子、朝倉正子、荒川秀明、粟貴幸、池幡誠、石浦めぐみ、泉紀明、伊勢拓史、稲積道子、井上博志、井上泰之、今川明彦、今川照一、今町真浩、居村拓宏、上田靖隆、大井秀夫、大藤雅男、岡島博史、沖野仁、加藤雄己、金子良平、金崎友厚、菊野庸三、北野賢、北村昭、木田清、口村栄二、小林一人、小林啓子、小村伸次、坂井厚司、阪上直樹、沢田康博、三納友吉、清水俊信、清水フサノ、篠原真人、新久子、仁野小百合、竹本哲行、橋美行、田中修二、田中徹、綱島得実、鶴見美和子、百海京子、中川泰宏、中出正子、中村博昭、中沢毅、中藪久美、西井唯夫、西住昭真、西村茂美、初野文子、広瀬孝次、

深美隆俊、前川紳也、前田晴彦、前田仁司、牧野豊、松井貴至、松寺昭彦、宮前一夫、宮前ミサヲ、宮本洋子、室尚志、森三重子、森良樹、安嶋均、安多真一、山岸秀昭、山辺弥乃助、山元達郎、由比守、吉川均、吉原定伸、鷺北繁房、渡辺修一

第2節 第1～3・5～7次調査

1 遺構の概要と層序

本遺跡は縄文時代後晩期～弥生時代後期、中世期の遺跡である。縄文時代は遺物の出土だけで遺構は確認されなかった。弥生時代に入ると集落が形成され、竪穴式住居19棟、掘立柱建物8棟、竪穴状遺構2基、土坑多数と溝を検出している。竪穴住居は中期の8号住居、また時期不明の15号・17号住居以外はすべて後期の所産である。このうち1号及び5号住居は、径10mを超える円形プランの大型住居である。掘立柱建物8棟のうち2棟は掘り方が布掘方式を取るもので他は通常の柱穴方式である。調査区は集落の中央部分と考えられる一部の範囲内であるが、このなかで竪穴式住居の分布状況はおおまかに見て掘立柱建物群を取り囲む形で検出されている。土壙、ピットは調査区全体に分布しているが、調査区中央部分がより密度が濃い。また中世期の遺構としてピット及び溝を検出している。歴史的環境で触れたが富樫家善の館跡に関連する遺構と考えられる。別項で報告するが調査区の南北で検出された東西方向の溝跡は館を取り囲む掘と考えている。

基本的な遺跡の層序と厚さは上層から水田耕作土・床土約20～30cm、黒色粘質土約5cm、茶褐色粘質土Ⅰ約15cm、黒褐色粘質土約10cm、茶褐色粘質土Ⅱ約10cmで基盤層にあたる黄灰色シルト層に至っている。この中で黒褐色粘質土下層及び茶褐色粘質土Ⅱにおいて遺物が包含されていたが調査においては区別出来なかった。

2 竪穴式住居

1号住居（註1）

《遺構》（第3図）

調査区北東部に位置し約1/2を検出している。複合する土坑及び溝は本住居以降の遺構である。平面形はほぼ円形を呈すると考えられ、検出部分において径は11.5mを測る。壁高は約15cmである。壁溝は幅25～40cm、深さは15～20cmである。主柱穴はP1～P5の5個検出した。柱間はP2～P3間が2.8mで他は3mであり、壁より1.5mを測る。径は50～70cmで深さは45～50cmである。いずれも地山層下層礫層まで掘り込まれている。主柱穴は平面形と同様円形に配置されよう。検出部分より本住居の全体を推定すると床面積は約97㎡、主柱は9本となろう。住居中央部において二段掘りのピットを1/2検出した。深さは段部10cm、底面までは45cmである。段部とほぼ同じレベルより拳大の自然石を10個程検出している。平面形は楕円形を呈するか。P8は径40cm、深さ20cmを測り炭化物及び灰が混入する黒色砂質土が履土で、底より約5cm浮いた状態で高坏の坏部49が置かれていた。炉として使用されたものであろう。床面は主柱穴の内側に囲まれる範囲に

貼り床が行われ固く締まっていた。床面はほとんど平坦であるが支柱穴を結ぶラインより内及び外に向いゆるく傾斜している。床面のレベルは13.8～13.85mである。住居の主軸(註2)は北西方向北63度西となろうか。柱穴等の配置を見るとP3～P4、P2～P5、P8～P10を結ぶそれぞれの線はほとんど平行であり、二段ピットP7の長軸線も平行となるのではないか。

《遺物出土状況》

北側壁際の床面より1・11・56、また東南側壁溝近くの床面では20・34が出土している。P4より25、P8より49、壁溝より33が出土している。これらの他は覆土からの出土であり、上層より2～4・6・8～10・14・17・18・21～23・27・29・31・32・35・36・38～41・43～47・51～55・60・62・63が出土した。下層出土土器は、5・12・13・15・16・19・28・30・37・42・48・56～58・61である。その他は不明である。第6図に示した7は3号住居出土、26は1号土坑出土である。訂正していただきたい。

《出土遺物》(第6～9図)

1は口径23.8cm、器高31.1cmを測る完形のくの字口縁の甕形土器(以下甕と呼称、他の器種も同様)である。面取りした端部にはヘラ状工具による凹線を巡らす。肩部に最大径を持ち、底部にむけてほぼ直線的に収束するプロポーションは若干古い様相を呈する。2、3はともに付加状口縁のくの字口縁甕である。3は頸部以下をヘラ状工具によるナデ、口縁端部外面を細いハケ状工具によるナデで調整する。4～10は擬凹線を施す有段口縁の甕である。4は頸部以下胴部にかけてハケ調整を施す。また、8は擬凹線というよりは細いヘラ状工具を用いた強いナデで凹線状を呈し、厳密にはその他と異なる。11～18は無文有段口縁の甕である。11は口径19.2cm、器高28.0cmを測る中型品であり、胴部内面上位をけずり、下位をナデで仕上げる。1と11はともに口縁部を接するように向かい合って床面より出土している。17は分類上無文有段口縁の甕としたが基本的にはくの字口縁を呈し、端部を直立ぎみに屈曲させることによって段部を作り出している。19は口縁部外面端部にヘラ状工具による細かなキザミを施す。また胎土中にはシャーモットを特に多く含む。20～24はともに甕の底部片である。20は外反して細長く立ち上がり、形態的にみて中期に属するものであろう。25～28はともに長頸壺の系譜を引くものである。25は直立ぎみに立ち上がる頸部の先端をつまみ上げて外反させ、内・外面にハケ調整を施す。26は外傾して立ち上がる頸部に胴部最大径が口径をやや越えると思われる胴部を持つもので、端部を横ナデにより直立ぎみに先細りさせている。また、頸部内面にはハケ調整の後部分的に雑なナデを施す。27は外傾して内湾ぎみに立ち上がり、内・外面ともに丁寧なハケ調整を施す。小片のため判然としないが鉢類の可能性もある。28は大きく外反する口頸部の先端を強いナデによって三角状の断面を作り出している。29～31は擬凹線を持つ有段口縁の壺である。ともに外面および内面頸部以上に赤彩を施している。32はやや小型の無文有段口縁の壺である。器壁は薄く赤彩も施されていない。33は壺の底部であろう。34～36はともに脚台を有する底部である。37～41、44は擬凹線を有する有段口縁の鉢である。いずれも小片で全形を窺えるものはないが、37は内・外面に赤彩を施し、深いヘルメット状を呈するものと思われる。38は口縁帯の内・外面にのみ赤彩を施す。41は端部が欠損している。胴部を丸く張り出すこのタイプは鉢としてはあまり類例を見ないが、口縁部が

やや発達した例として西念・南新保遺跡B-1区出土高坏（宮本他1983）があげられ、本例も脚を持つ可能性がある。42・43はくの字口縁の小型の鉢であり、ともに外面に煤の付着がみられる。45～47はスタンプ文を持つ小片である。45は口縁部内面に径2mmの竹管状工具によるスタンプを3列巡らす。46は有段脚の段部と思われ、S字状スタンプを施す。47は一応口縁部片としたが46と同様有段脚片かもしれない。やはりS字状スタンプを施すが、46のそれとは原体が異なる。48～53はともに高坏の受け部である。48は坏底部より大きく外反して伸びる口縁端部をつまみ上げ垂下させて垂直面を作り出している。類例として吉原七ツ塚墳墓群第11号墓周溝出土土器があげられるが、本例の方が坏底部が平坦で、外反の度合いも強い。49は深い坏底部から鋭い稜を持って口縁部に続く。外傾して立ち上がる口縁端部を外へ強く屈曲させ、平坦面を作り出している。赤彩は内面のみに施す。50は49と基本的には同様の手法であるが、稜は外面には突出せず、口縁部全体の外反度合も強い。外面口縁部と内面端部に赤彩を施す。51は全体はわからないが坏部の体高がかなり高いものと思われ、口縁部の外反度もかなり強い。52・53はやや小型の高坏である。52は口縁端部を外下方へつまみだし、三角状の断面を作り出している。53は外面口縁部および内面に赤彩を施す。54は有段脚を持つ高坏の脚部片である。55・57はともに脚裾部片である。56は高坏の柱状部であるが、やや新相を呈する混入品であろう。58は同じく高坏の柱状部片と思われ、戸水B遺跡4号溝出土高坏と同様のタイプのものであろう。（湯尻他1975）59は上下に大きく開く器台であり外面および内面中位以上（ほぼハケ調整とケズリ調整との境）を赤彩する。60・61はともに器台受け部片である。62は器台の脚裾部であり、段部の外面稜に細かなキザミを施す。63は小型の手捏ね土器である。口縁部外面に先端の鋭利な工具による刺突文を3列施す。

これら1号住居出土土器の胎土は、量の大小はあるが一様にシャーモットを含んでいる。

また、海綿骨片はあまり目立たず第7図18、第8図25、35、第9図49に僅かに認められるだけである。その他の遺物は検出されていない。

2号住居

《遺構》（第4図）

調査区北東部において検出し、1号住居の南約10mに位置する。平面形は隅丸方形を呈し大きさは8.2m×推定8mを測る。床面積は推定50㎡程度であろう。壁の高さは30～40cmである。壁溝は一部途切れるが、幅20～25cm深さ10cmで巡ろう。壁溝底面のレベルは東側が西側より10cm低くなっている。主柱穴はP1～P3であり径及び深さは、P1径80cm深さ40cm、P2径60～80cm深さ45cm、P3径90×70cm深さ40cmを測る。柱間はP1～P2間3.3m、P2～P3は4mである。検出状況より主柱穴は方形配置の4個と見て間違いのないであろう。住居内において主柱穴の方形配置は若干南にずれており、北西壁～P1間2.5m、P2～南東壁間約2.2m、南西壁～P2間1.8m、P3～北東壁間2.3mとなっている。P4は平面楕円形であり大きさは150cm×80cm、深さ35cmである。P2～P3間中点内側に位置する。この中点を通る北31度西の線を住居の主軸と考える。P5は径30cm、深さ10cmのピットであるが履土には多くの炭化物を含み、周辺の床面上にも炭化物が見られ炉として使用されたものと考えられよう。床面は壁より約50cm程ほど離れた内側から貼床が施され固

く締まっていた。また床面は北東方向に傾斜しており10cmのレベル差が生じている。この影響により壁溝底についても東西で10cmの差がある。住居は壁際より中央部が深い凹地状に暗褐色粘質土が堆積し、その後中央部は黒褐色粘質土により埋まっていた。

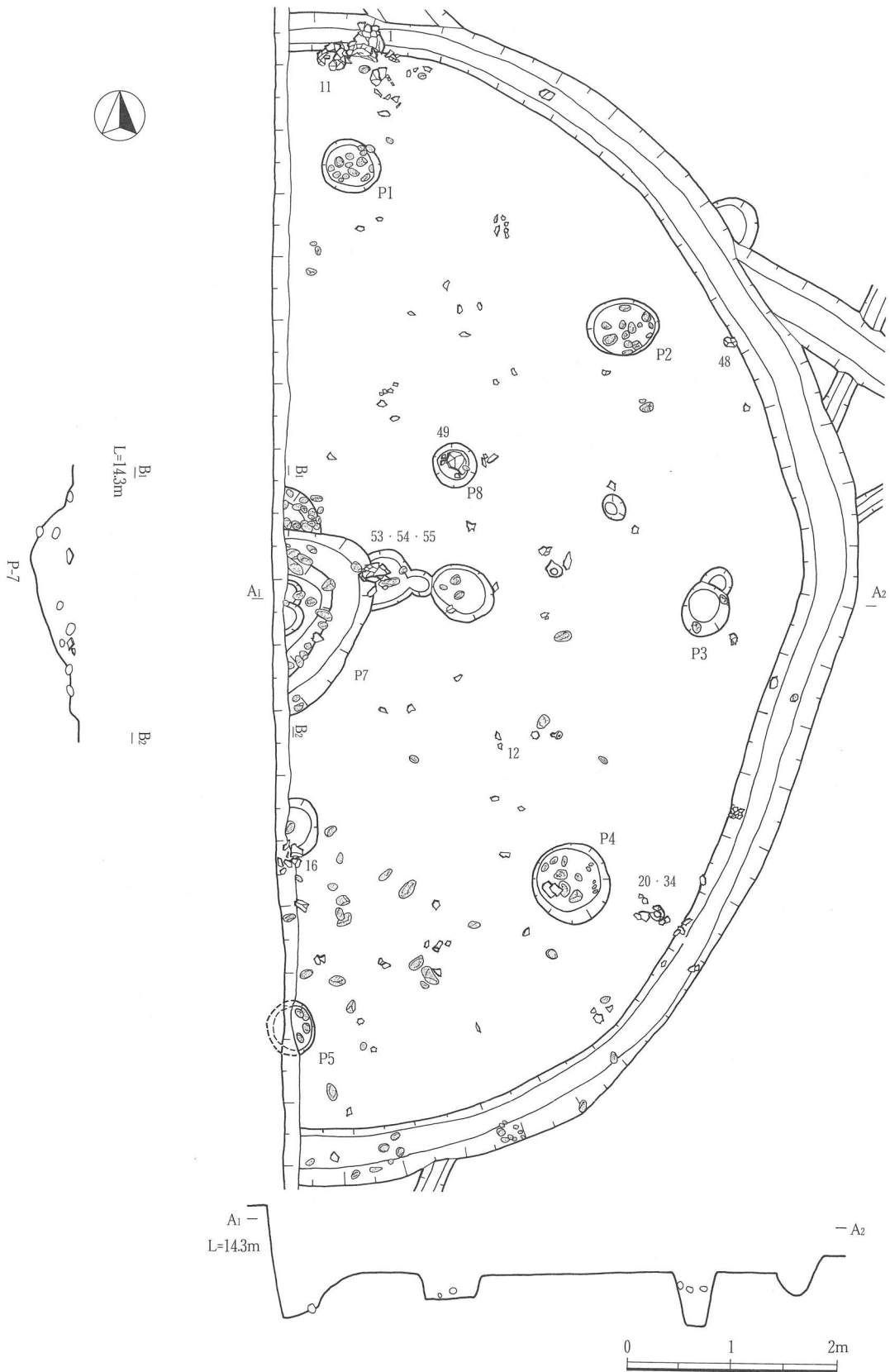
《遺物出土状況》

床面から4・16、履土下層より1・6・9・13・15・17、上層より2・3・5・7・8・10～12・14・18・19が出土した。

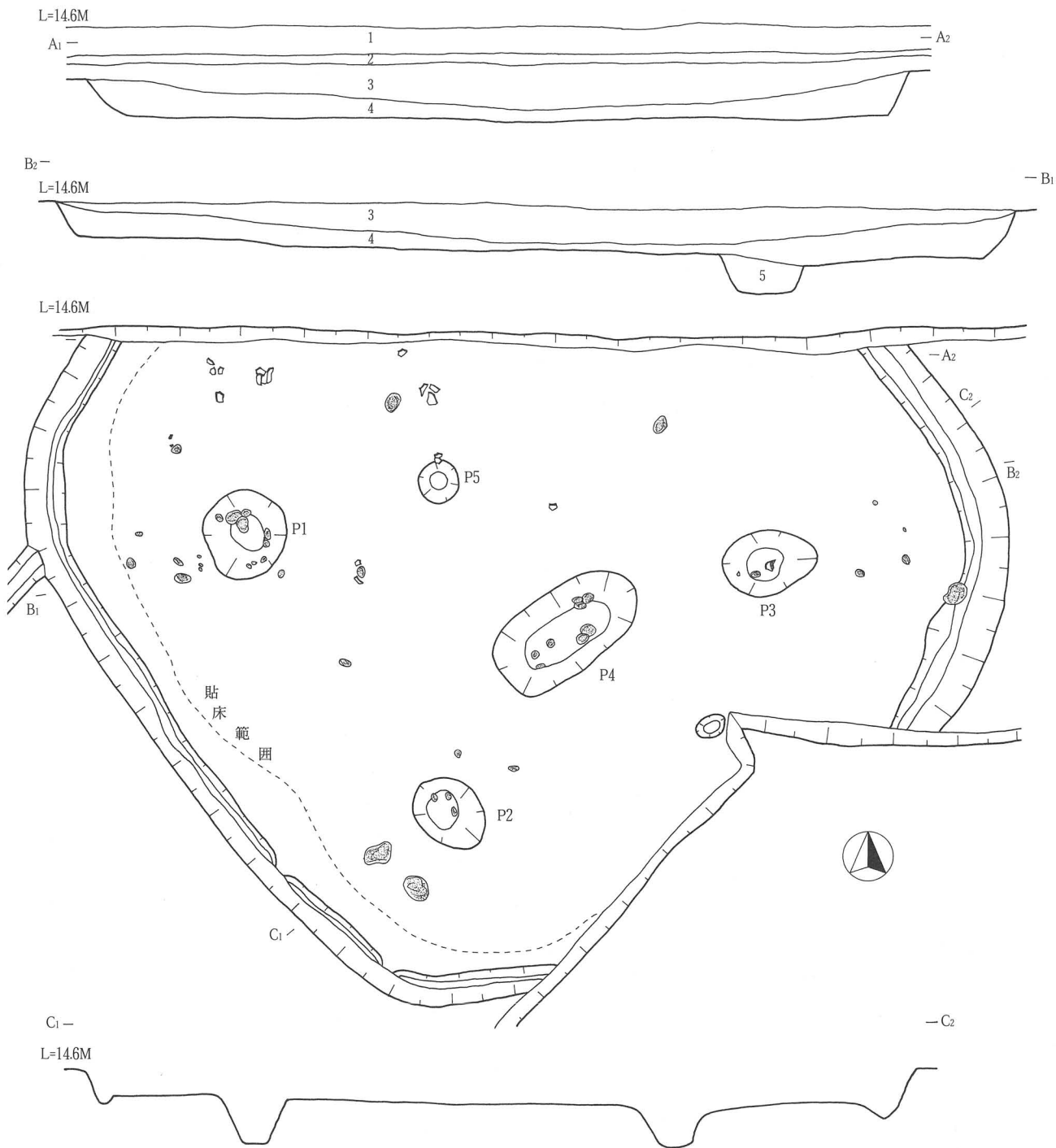
《出土遺物》（第10図）

出土点数が少なく、そのほとんどが小片である。したがって実測し得た資料も必ずしも良好とは言えない。

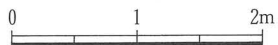
1～3は擬凹線を持つ小型の有段口縁の甕である。1・2はともに器壁も厚く、端部の作りも厚く鈍い。また、擬凹線はともに口縁帯下半に施す。3は外反する口縁部の端部を先細りに仕上げ、内面に指頭圧痕を有する。4・5は同じく擬凹線を持つ中型の有段口縁の甕である。器壁は若干薄い、依然として端部の作りは鈍重である。また4は床面からの出土であり、胎土には海綿骨片をごく僅かに含む。6・7は無文有段口縁の甕である。6は外反する口縁が指頭状の丸縁を呈し、7は口縁部が内傾して立ち上がり、端部はやはり丸縁を呈する。8は口縁部外面にハケ状工具によるキザミを施す受け口状口縁の甕であり、端部にナデにより内傾する面を持たせる。近江の影響下にあるものである。9・10はともに小さな平底を呈する底部である。11～14は有段口縁の壺である。11・12はともに内・外面に丁寧なミガキを施し、12は外面および内面頸部までに赤彩を施す。13は上記2点に比べて口縁部が長く、内面の段もほとんど見られない。外面はミガキを施し内面は口縁部をハケ調整の後ナデ、頸部以下をケズリで仕上げる。14は口縁部が短く断面が指頭状の丸縁を呈し、胎土に少量の海綿骨片を含む。15は緩く外上方へ伸びる坏底部から口縁部が大きく外反する高坏である。端部を欠損しているため口径は不明であるが、この種の高坏としては小型のものである。16は床面出土の高坏の脚裾部である。透孔は小片のため現状で2箇所であるが前周では5箇所施されていたものであろう。また、外面に化粧土を施している。17は外面に赤彩を施した器台の脚部片であり、現状で擬凹線を5条確認できる。18は脚裾部の端部片であり、内・外面にミガキを施す。19は外面に赤彩を施し、半截した竹管状工具を用いたC字状スタンプ文を縦横交互に組み合わせ4列押捺する。また、その他の遺物は検出されていない。



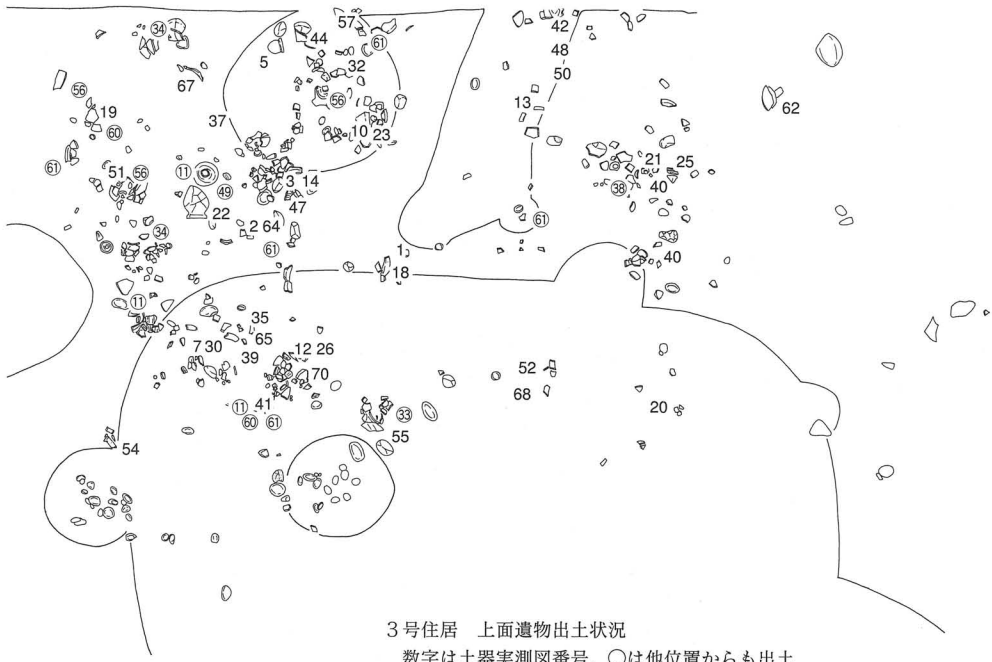
第3图 1号住居 (1/60)



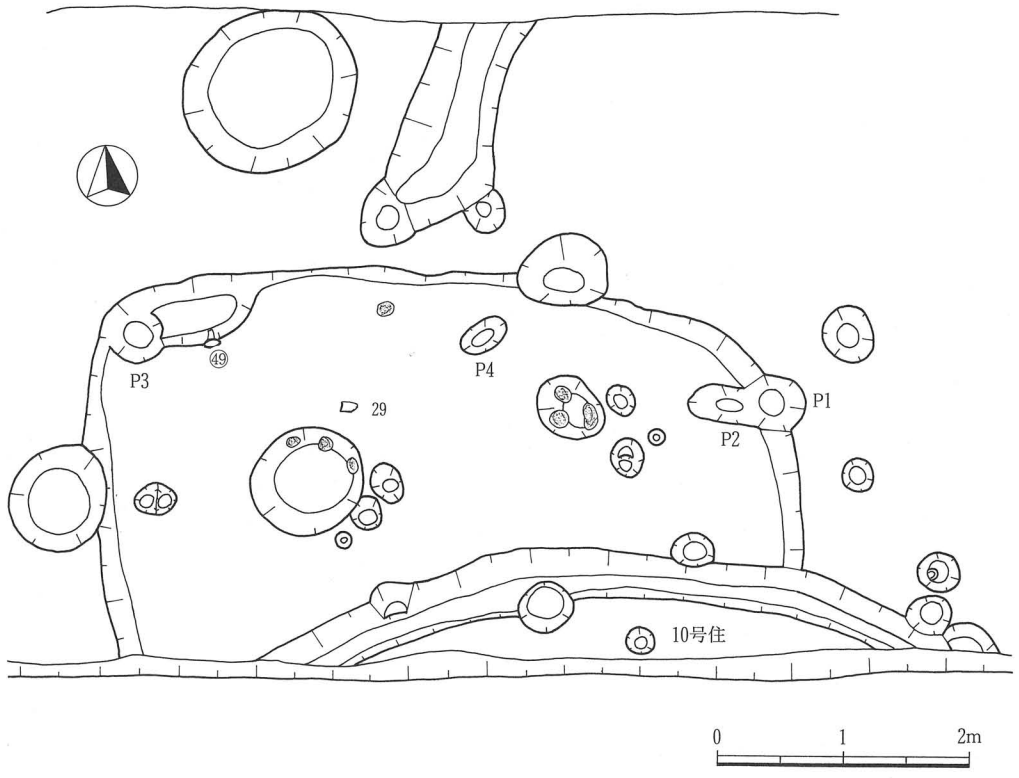
1. 耕作土
2. 黄褐色粘質土 (鉄分混砂混)
3. 黑褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土
5. 暗褐色粘質土 (地山混)



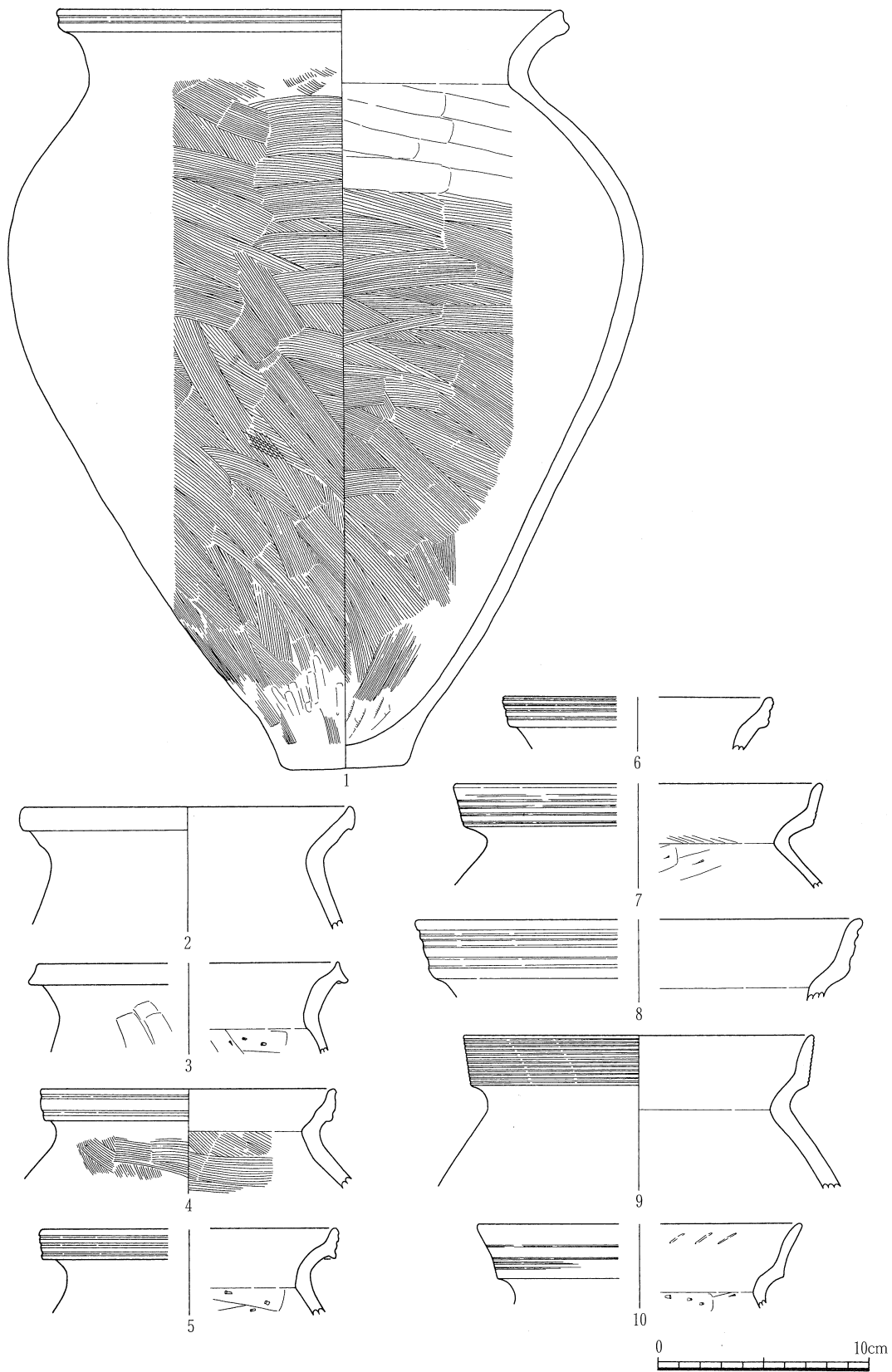
第4圖 2号住居 (1/60)



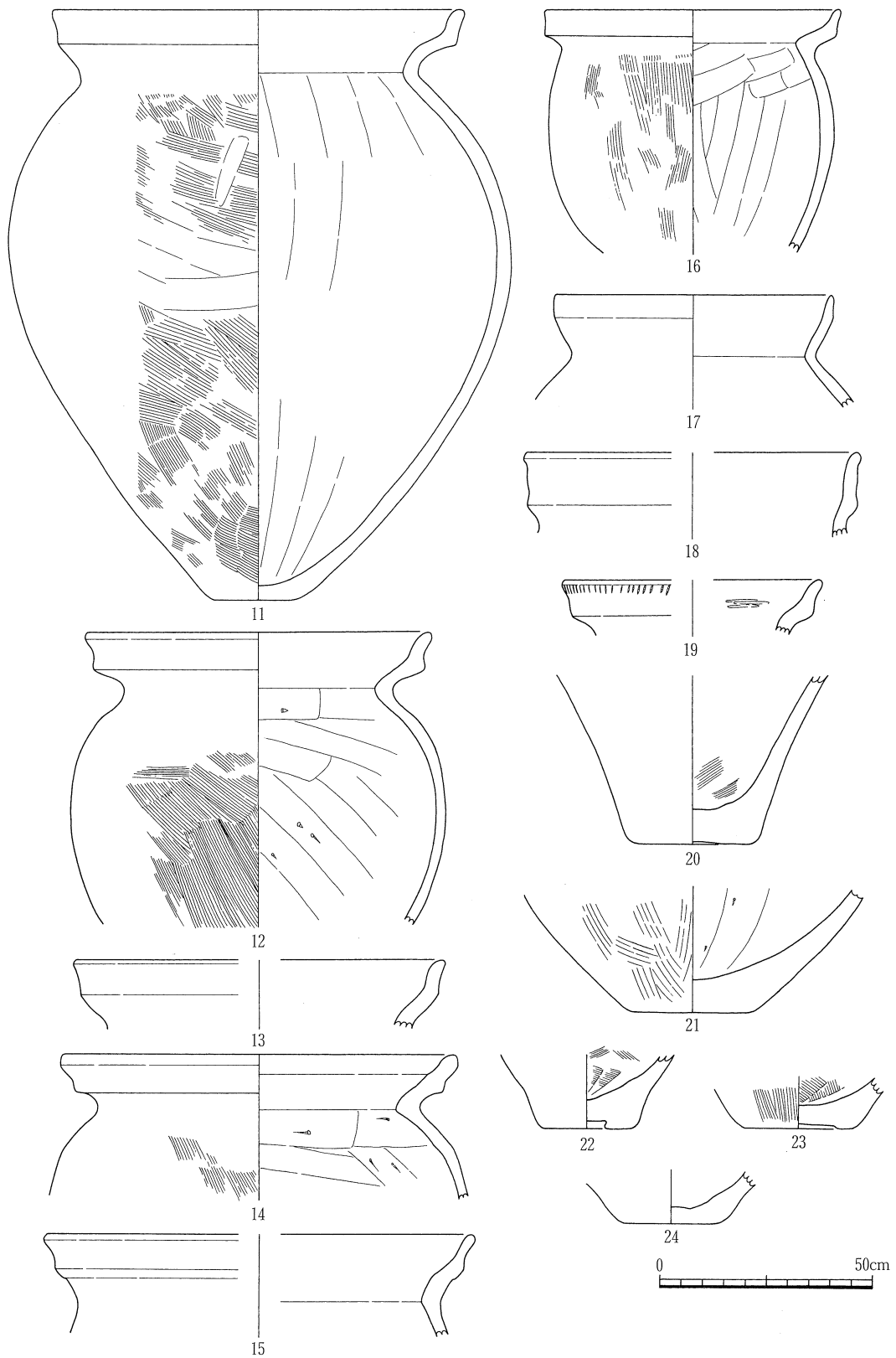
3号住居 上面遺物出土状況
 数字は土器実測図番号、○は他位置からも出土



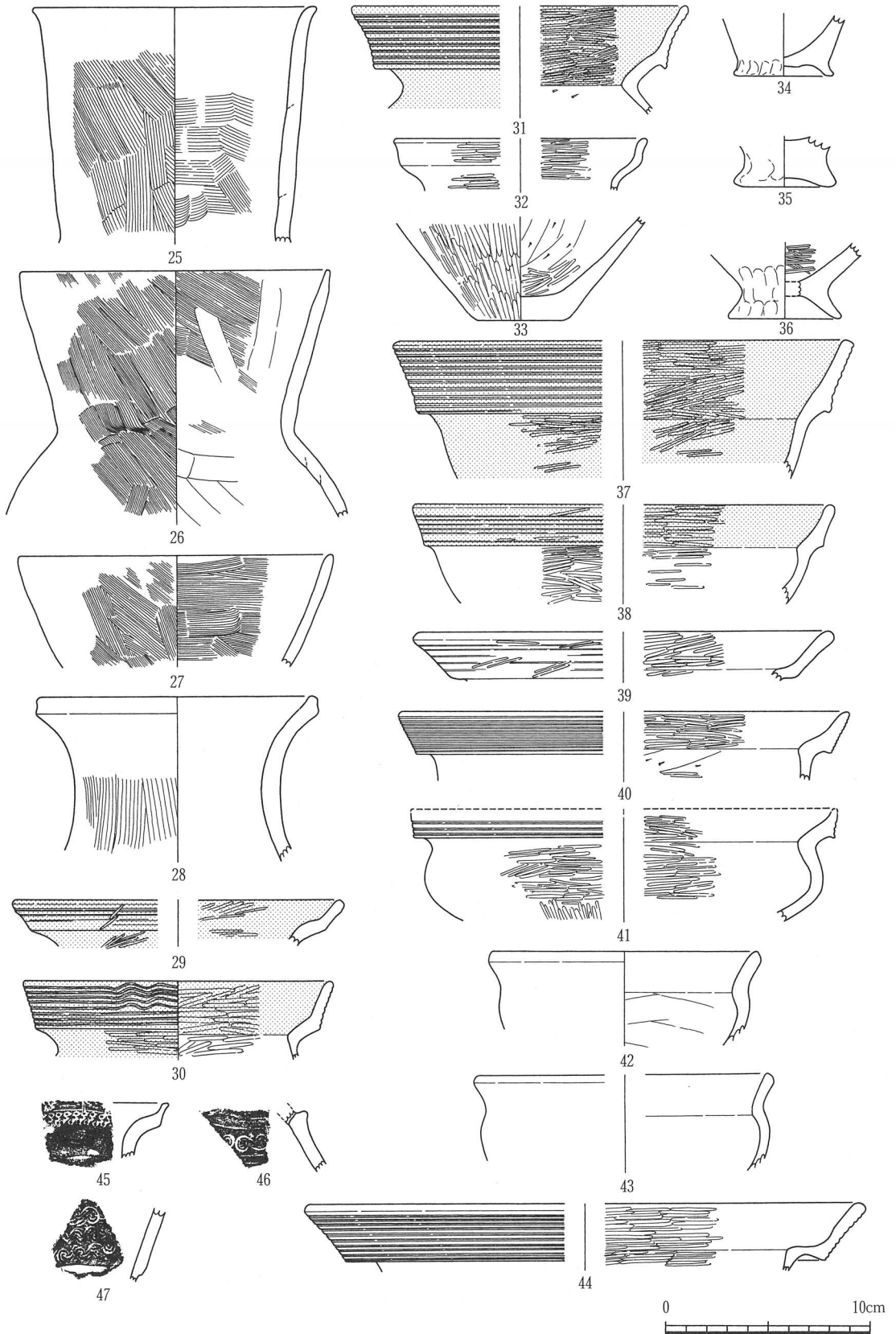
第5図 3号住居 (1/60)



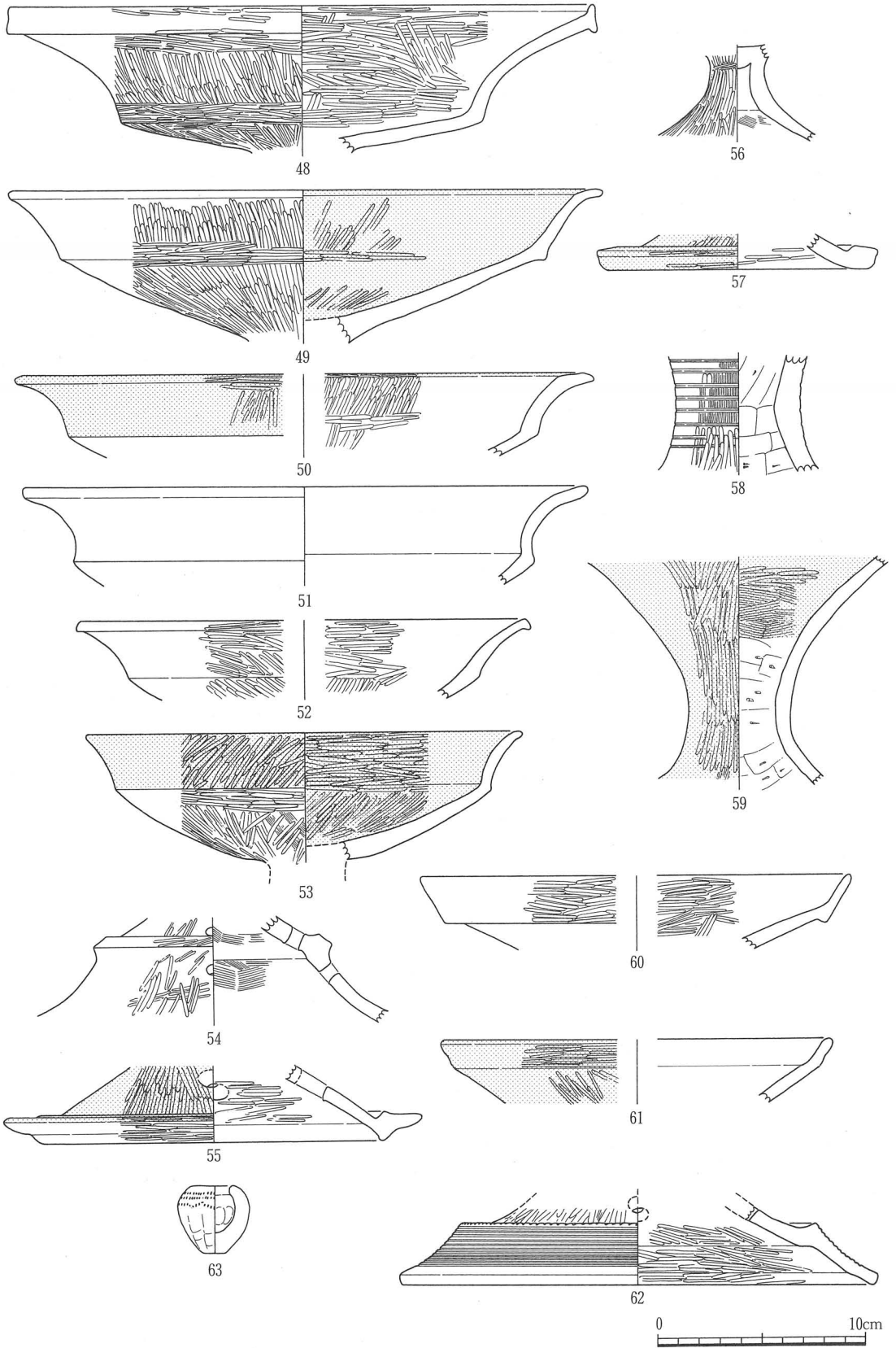
第6图 1号住居 出土土器① (1/3)



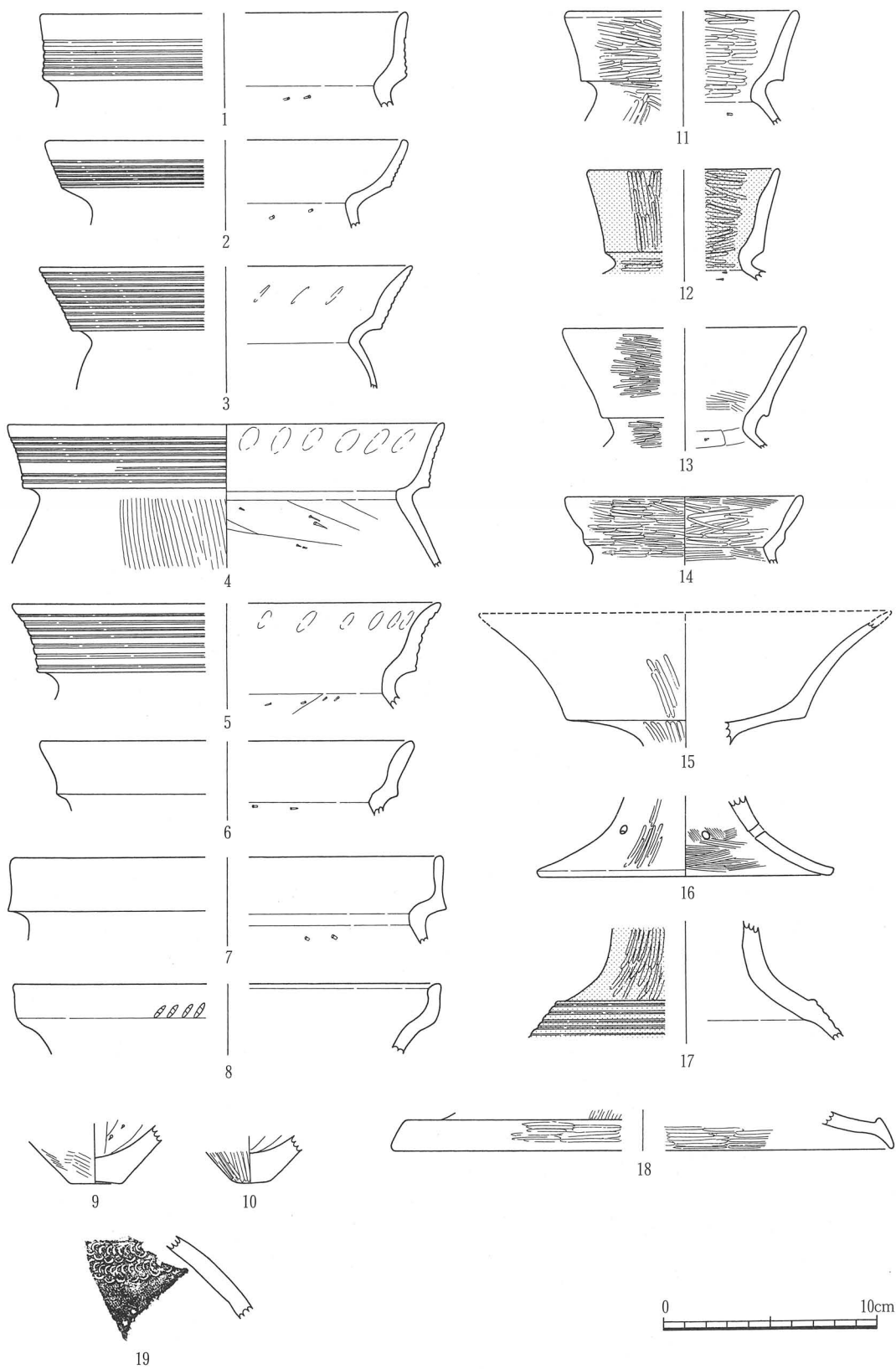
第7图 1号住居 出土土器② (1/3)



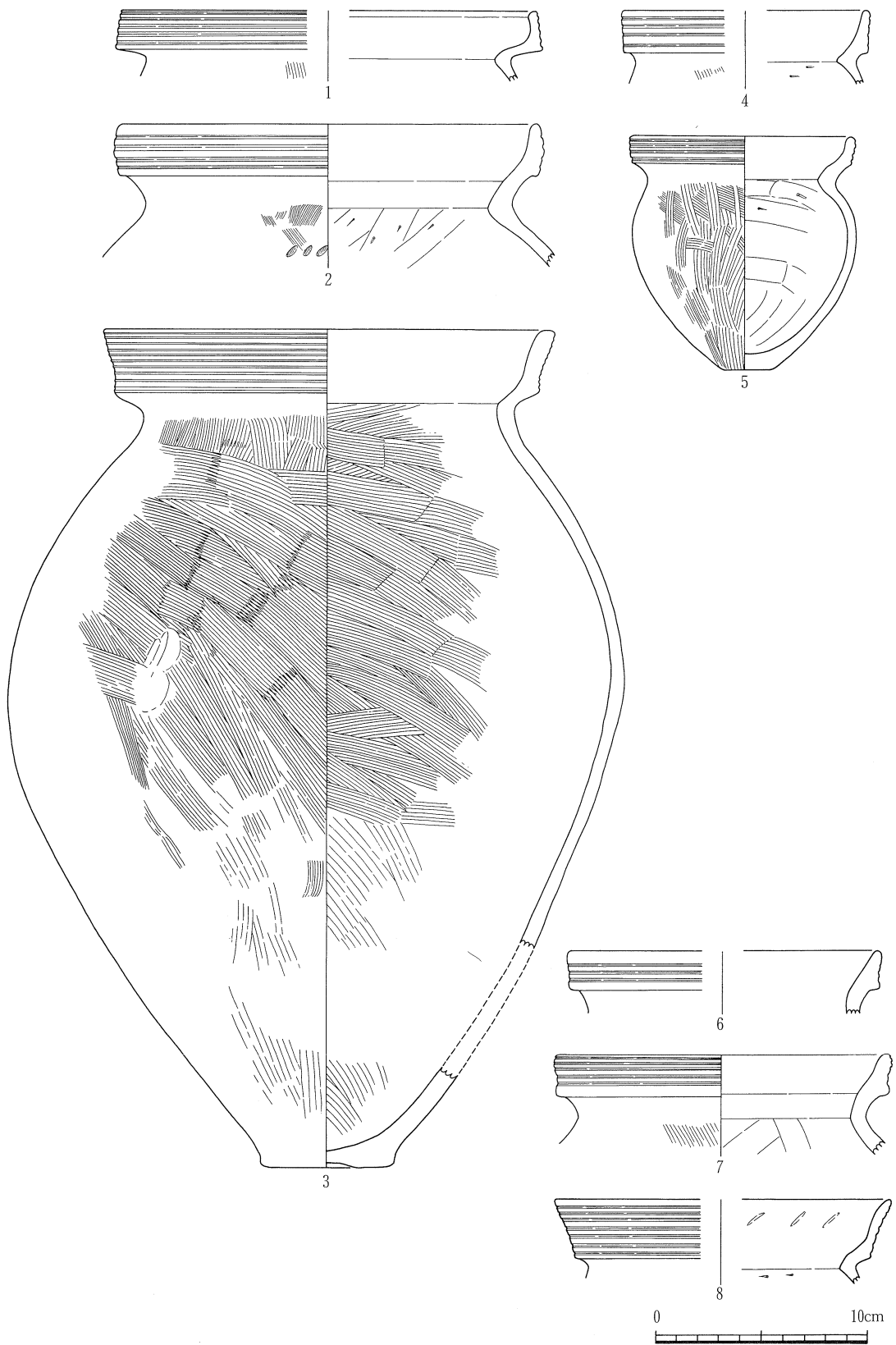
第8图 1号住居 出土土器③ (1/3)



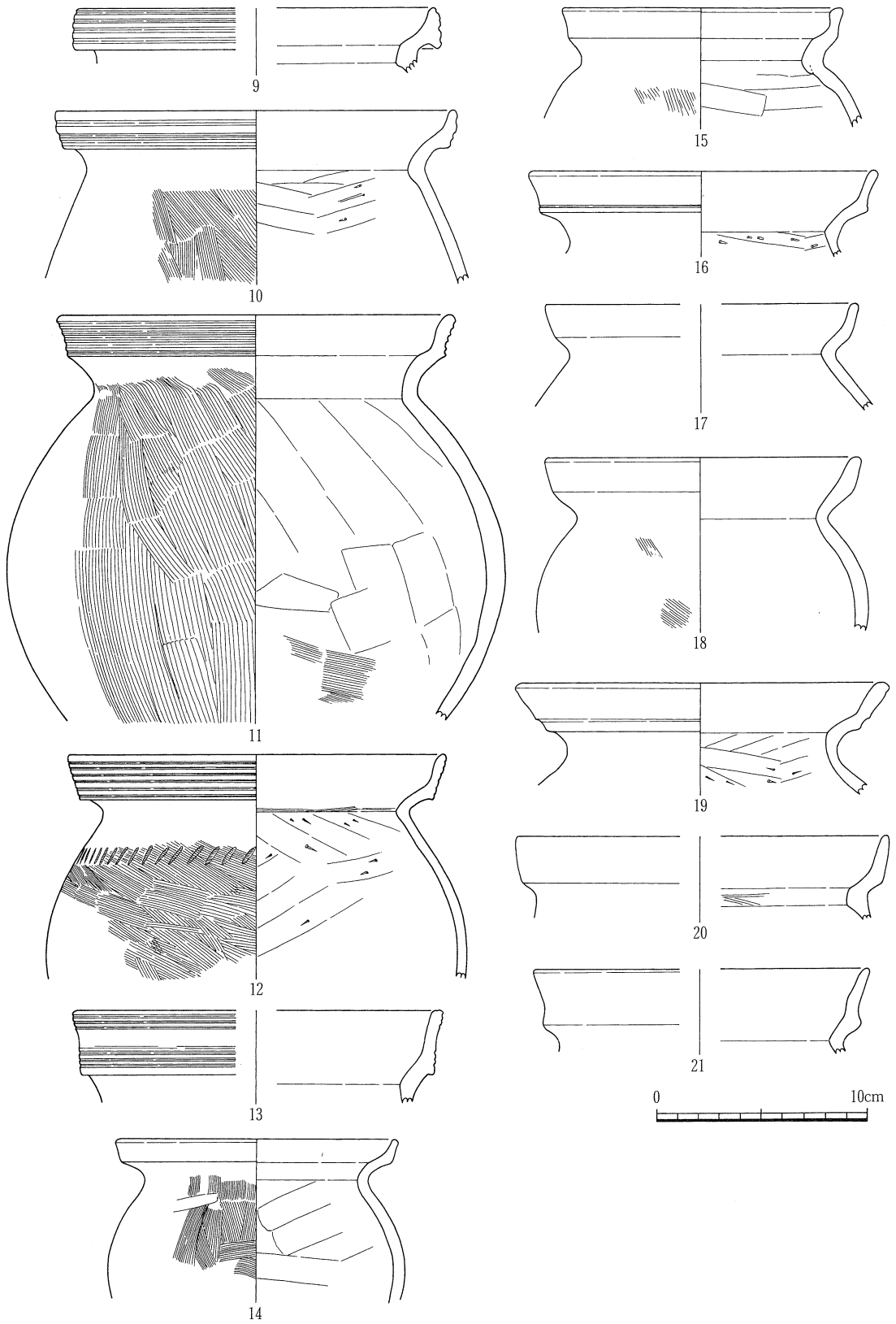
第9图 1号住居 出土土器④



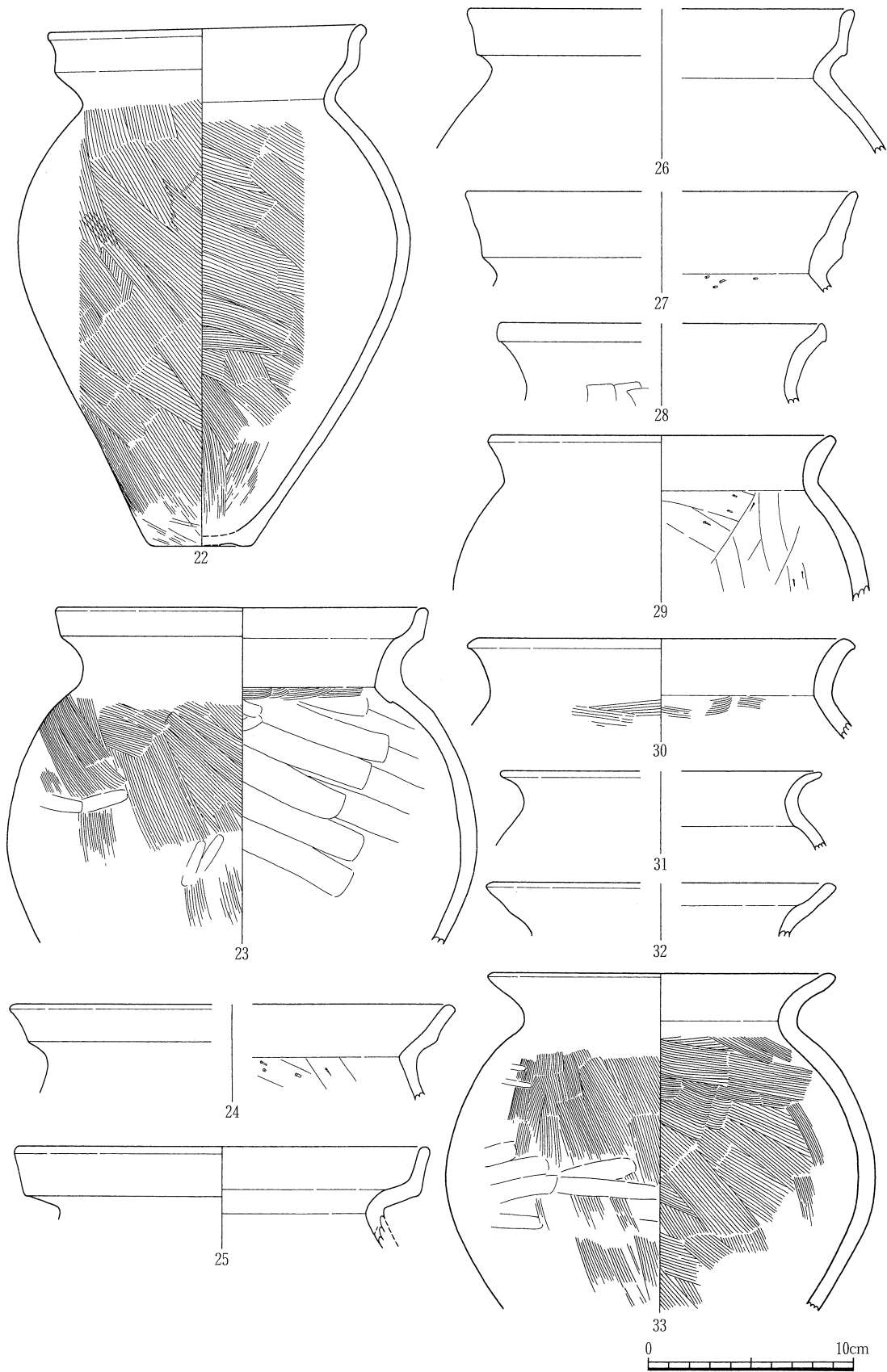
第10图 2号住居 出土土器 (1/3)



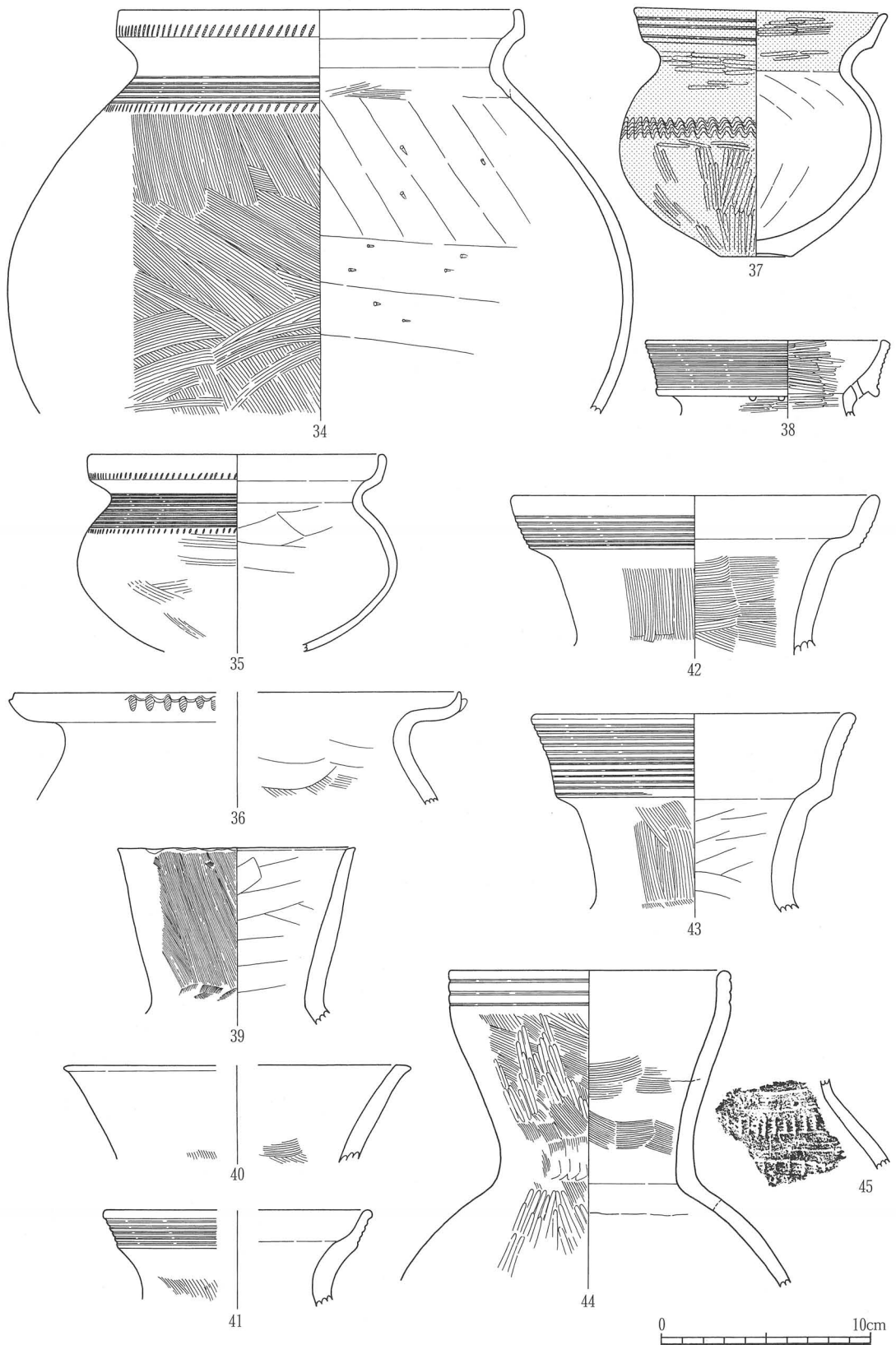
第11图 3号住居 出土土器① (1/3)



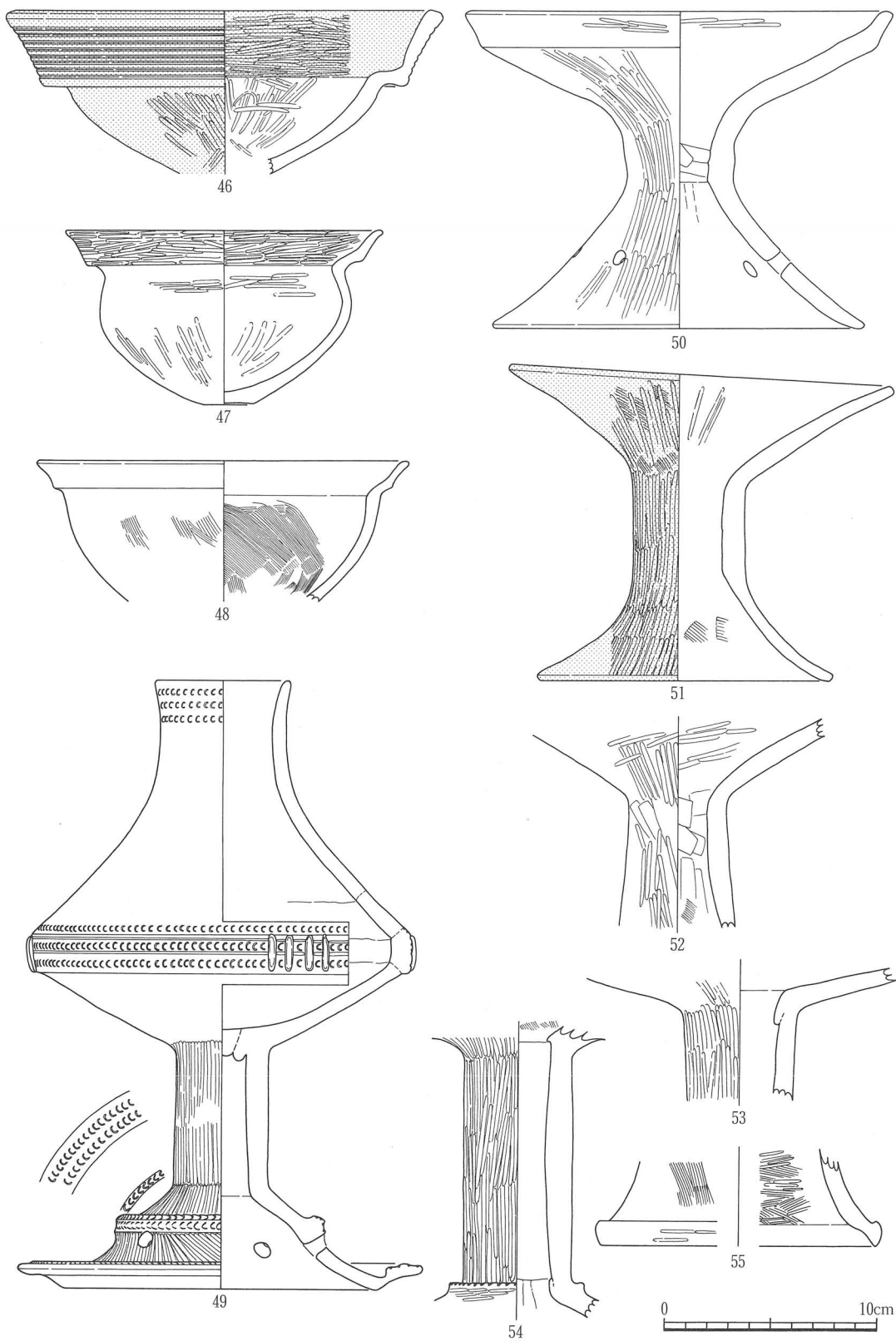
第12图 3号住居 出土土器② (1/3)



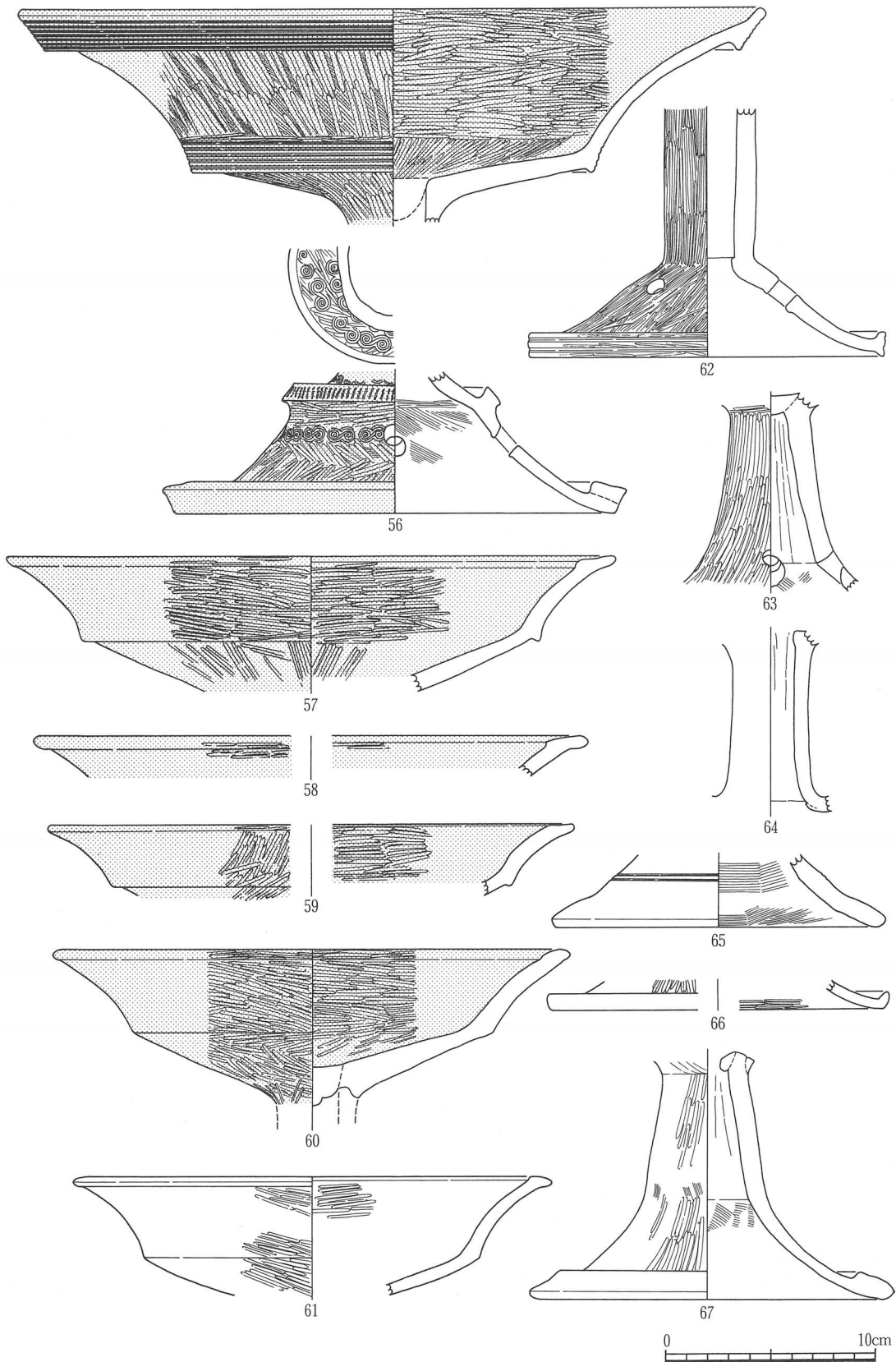
第13图 3号住居 出土土器③ (1/3)



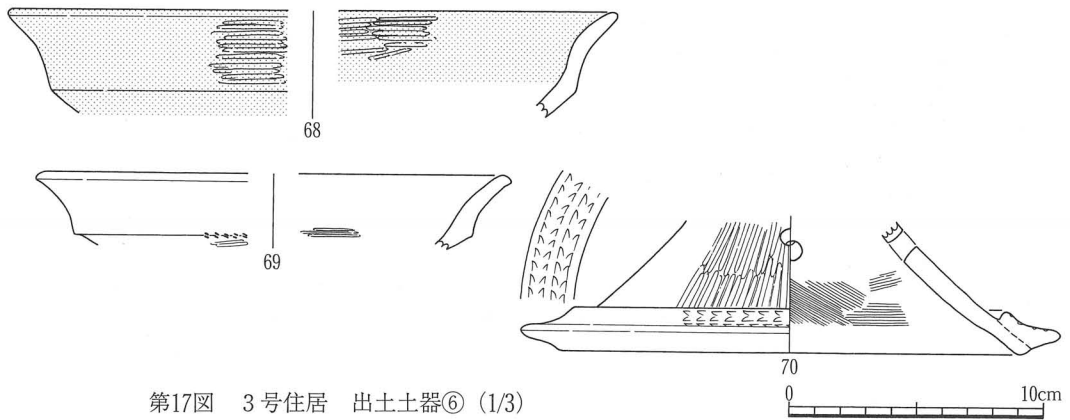
第14图 3号住居 出土土器④ (1/3)



第15图 3号住居 出土土器⑤ (1/3)



第16图 3号住居 出土土器⑥ (1/3)



第17図 3号住居 出土土器⑥ (1/3)

3号住居

《遺構》 (第5図)

調査区北東部に位置する。5号住居に切り込まれており、1/2ほどの検出となる。平面形は隅丸方形を呈しよう。規模は東西5.6mを測る。壁高は8cm~20cmで、北壁が低い。壁溝は検出されなかった。P1~P4が本住居に付属し、他のピットは履土を切り込んでおり廃絶後の所産である。床面を基準とするピットの深さはP1・20cm、P2・15cm、P3・30cm、P4・10cmを測る。P1~P3間は5.1mである。床面は、他の住居のように固く締まっていない。床面レベルはほぼ14.2mである。

《遺物出土状況》

本住居から出土した土器群についての多くは、第5図に出土状況を示すように3号住居プラン上面及び外より出土したものも含んでいる。3号住居廃絶後の土器廃棄とも考えられるが、整理の過程において、3号住居履土からの出土土器とプラン外出土土器の接合がいくつか見られることと、検出当初は同一レベルで一様な出土状況を呈していたことにより、あえて3号住居出土土器として扱った。拡散し出土した主な土器の出土状況を述べる。なお第12図9は1号住居履土から出土したものであり訂正していただきたい。49の台付無頸壺の台部は3号住居P3横の床面から約5cm浮いた状態で出土した。壺部は上面出土状況49の位置に口縁を上にしてほぼ完形の状態で出土した。他の土器は同一地点よりほぼまとまって出土している。3号住居の履土からとして検出した土器は29、49だけである。拡散し出土した土器は11・33・34・49・56・60・61があげられ、これらはほぼ2m以上の距離を隔て同一個体が出土している。11・33・60・61は3号住居プランの上面及び外側より出土している。

《出土遺物》 (第11~17図)

当住居出土土器は前述のごとく住居出土資料として扱うのは問題があるが、個々の資料を見た場合ある程度の一括性を保有するものと思われ、ここでは他の住居出土土器と同列に扱うこととする。

1~3は大型の擬凹線を有する有段口縁の甕である。1は内屈する口縁部に5条の擬凹線を施す。2は直立する短い口縁部に粗い5条の擬凹線を施し、肩部にはハケ状工具による斜行キザミを有する。3は口径21.2cm、胴部最大径29.6cm、底径6.1cm、器高40.6cm、を測る完形品である。

重厚な作りの口縁部には10条の擬凹線を施し、底部もしっかりとした平底を呈する。内・外面ともにハケ調整を施すが、上位に細かい目の原体を用い下位には目の粗い原体を用いている。4・5は小型の甕であるが、本住居では甕の法量による大小が4タイプ認められ、いわゆる小型の甕よりはさらに小さく、その区別を明確にするためここでは特小型と呼称する。4は口径11.6cmを測る小片であり、胎土中に海綿骨片を少量含む。5は口径10.3cm、胴部最大径10.6cm、器高11.3cm、を測る完形品である。6・7は小型の断面三角状の口縁の甕である。6はハケ状工具による強いナデで3条の擬凹線状の文様を作り出し、7は細いヘラ状工具によるナデで5条の凹線状の文様を作り出している。8は同じく小型の擬凹線を有する有段口縁の甕である。外反する口縁部には7条の擬凹線を施し、内面には指頭圧痕が認められる。9～13は中型の擬凹線を有する有段口縁の甕である。9は口縁部下端を垂下させ、重厚な作りの口縁部には4条の擬凹線を施す。10は短い口縁帯に草茎状の工具を用いて3条の太い（擬）凹線を施す。11はやや外反する口縁部から長めの第1口縁を介してほぼ真球状を呈する胴部へと続く。擬凹線を5条施し、頸部以下を外側ハケ調整、内面中位までをケズリの後ナデ、下位をハケ調整で仕上げる。12は外傾する口縁部に6条の擬凹線を施し、肩部にハケ状工具による斜行キザミを施す。13は小片であり摩耗が激しく擬凹線は6条までが確認される。直立する口縁部の端部は面取りされている。14～21は小型の無文有段口縁の甕である。14は頸より強く屈曲する第1口縁に短い口縁部が続き、胴部は外側ハケ、内面ナデで調整する。15は頸部に粘土を貼付して厚みを持たせ、口縁端部は断面指頭状のずんぐりとした作りである。18は口縁部内面に段を持たず、外面を肥厚させることによって有段口縁状に成型している。19は緩やかに屈曲する頸部に外反して続く口縁部を持ち、下端に強いナデにより凹線状の凹みを巡らす。22～27は中型の無文有段口縁の甕である。22は口径15.3cm、胴部最大径19.1cm、底径5.0cm、器高25.4cmを測る完形品である。第1口縁がやや長いタイプであり口縁部内・外面をナデ、頸部以下をハケで調整する。23は真球状を呈する胴部を持ち、その形態および法量は第12図11と共通する。28～33は中型のくの字口縁の甕である。28は端部にナデによる垂直な面を持ち、付加状口縁ぎみに仕上げる。31は口縁部が強く外反し、端部はほとんど水平になるまで屈曲している。胴部外面の剥離が激しいが、ほぼ全面をナデで仕上げていく。33はほぼ真球状を呈する胴部を持つ。外面はハケ調整の後中位に横位のナデを施し、内面はハケ調整で仕上げる。若干法量は小さいが胴部のプロポーシオンは第12図11および23に共通している。また胎土には海綿骨片を少量含む。34は扁平な球胴を持つ大型の受け口状口縁の甕である。口縁部下端と肩部にハケ状工具による斜行キザミを施し、頸部下には6条の浅い平行沈線を巡らす。調整は口縁部内・外面をナデ、胴部外面をハケ、内面は頸部にハケ、それ以下をケズリで仕上げる。35は34と同巧の小型の甕である。胴部外面をハケの後ナデ、内面をナデで仕上げており調整技法において差異が認められるもののこの2点はセットとして存在したものとみてよい。なお35の頸部に巡る平行沈線は9条を数える。36は器種不明である。頸部よりほぼ水平近くまで強く屈曲した口縁の端部を上方に垂直につまみ上げて受け口状口縁を形成する。口縁部外面に粘土帯を貼付し、ハケ状工具によるキザミを施している。37・38は擬凹線を施す有段口縁の甕である。37は全体の約1/3を欠損しているが、口径12.0cm、胴部最大径12.6cm、底径3.4cm、器高12.1cmを測る。

外面全面をミガキ調整、内面口頸部をミガキ、頸部以下をナデで調整し、赤彩を施す部位もミガキ調整に対応する。また外面胴部最大径付近に櫛状工具による5条の波状文を巡らせている。38は口縁部下端が垂下する口縁帯に9条の細い擬凹線を施し、頸部には2孔一対の穴を穿孔する。39～44は長頸壺の類である。39はやや外傾して直線的に伸びる口縁部の端部を面取りし、外面をハケ、内面をナデで調整する小型品である。40は口縁部の外傾度が強く、端部の面取りも若干外へ突出する。41は擬凹線を施す有段口縁をもつものであるが、小片のため口径が明確ではなく長頸壺の類として記述するのは妥当でないかもしれない。42・43もともに擬凹線を施す有段口縁をなすものであり42は頸部内・外面をハケ調整し、43は頸部外面をハケ、内面を方向不定のナデで調整する。44は徳利状のプロポーシオンを呈し緩やかに内弯して立ち上がる口縁端部に3条の平行沈線が施される。調整は端部内・外面をナデ、口頸部外面をハケの後雑なミガキ、内面をハケ、頸部以下を外面はミガキ、内面はナデで仕上げる。45は櫛状工具を用いた平行櫛描文と簾状文を施した体部片である。46～48は有段口縁の鉢である。46はヘルメット状のプロポーシオンを呈し、平縁で重厚な作りの口縁部には8条の擬凹線を施す。外面および内面頸部以上に赤彩を施す。47は口径14.8cm、器高8.3cmを測る完形品であり肩の張った安定したプロポーシオンである。調整は内・外面ともにミガキを施す。49は口径6.3cm、胴部最大径18.5cm、底径14.8cm、器高29.0cmを測る完形の台付無頸壺である。口唇部および胴部中央に半截竹管状工具を用いたC字状スタンプ文をそれぞれ3列施し、胴部中央においてはさらにその間を2条の沈線で区画し中央に4本1組の棒状浮文を3箇所貼付する。また、脚段部にも上下に1列ずつ方向をかえて同様のスタンプ文を施し、さらに裾端部にも2列の同じスタンプを施す。脚裾部の透孔は全周で6箇所認められる。このタイプの土器は富山県小杉町上野遺跡、同富山市大泉遺跡、同高岡市中曽根吉原田遺跡、同須田遺跡などおもに越中地方に多く見られる。県内においても当該期の遺跡には一定量見られるが装飾性において類似が指摘できるものは七尾市国分高井山遺跡第7号土坑、同奥原遺跡第2号住居址に認められるのみであり、本例のごとく棒状有段脚と組み合わされるものは見られない。50～54は器台である。50はX型を呈し、口縁端部を外上方に屈曲させる。透孔は約1/3を欠損しているが全周で6箇所穿孔されていたものと思われる。51は外面に赤彩を施す完形品であり、やはりX型を呈するが筒胴部が長い。端部は外傾して伸び丸縁で収める。52は受け部下半から筒胴部にかけての破片であり51と同タイプのものと思われる。53・54はともに棒状脚をなす器台片であろう。54は脚下部に粘土帯貼付による小さな段を形成し、上部に細かいヘラ状工具によるキザミを施す。55は脚裾部片としたが小片のため不明である。56～61、68・69はともに高坏である。56は口径35.2cmを測る大型品で坏部内・外面と脚裾部外面に赤彩を施す。口縁部は有段口縁状に作り出し、坏底部外面とともに擬凹線をそれぞれ7条と5条巡らす。柱状部は欠損しているが、脚裾部の段上面に現状で2列のS字状スタンプ文、段部突帯に歯数4本の櫛状工具による斜行連続刺突文、段下部に上面と同じ原体を用いたS字状スタンプ文1列をそれぞれ施す。大型加飾の高坏は他に吉原七ツ塚墳墓群第1号墓墳丘下の台状墓盛土上面より細かく破碎されて出土した高坏が知られているが、スタンプ文の意匠や擬凹線の有無などについて違いがみられる。その他の高坏はほとんどが西ノ辻タイプで占められている。57は屈曲部に突出する鋭い稜を持ち、端部は

内面を肥厚させて面を形成する。59は屈曲部の稜が垂下ぎみに突出し、端部には内面肥厚は見られない。60は屈曲部の稜も突出しておらず口縁端部もずんぐりとした指頭状の丸縁を呈する。57～60はいずれも内・外面に赤彩を施している。61はやや小型であり口径に対して坏部が深い。それにしたがって他よりも屈曲部から口唇部に至るまでの口縁部の長さが増している。また、端部内面には小さな肥厚が認められる。68は外面と内面の屈曲部までを赤彩した小片である。69は高坏としたが極く小片であるため判断が難しい。屈曲部外面に小さなヘラ状工具の先端を用いたキザミを施し端部を面取りする。62～67・70は柱状部片および脚裾部片である。62は直線的な柱状部から鋭く屈曲して大きく開き、裾端部には凹線を2条巡らす。70もやはり直線的に大きく開く脚裾部であり、端部には先端が三角形のヘラ状工具を用いて表裏交互に4列押ししΣ状のスタンブ文を巡らせている。また、その他の遺物の出土は見られなかった。

4号住居

《遺構》（第18図）

調査区北西に位置し1980年と1983年に検出した。この付近は、3号・5号・10号住居などが密に分布している。3号住居と2.7m、10号住居とは1.7m隔てている。平面形は円形か。また規模についても推定であるがP2の位置を住居の中心と考えると9m×9mほどの大きさとなろう。推定面積は約58㎡である。壁高は床面より40cmを測る。壁溝は幅20～25cmで深さは10～15cmである。主柱穴はP1と考えており、径55×45cm、深さ35cm、壁から1.6mを測る。P2は径80cm、深さ55cm、位置は北東壁から4.5m、南東壁から4.6m測る。住居の主軸はP1～P2を結んだ線の直角方向、北32度西ぐらいと考えている。床面は貼床となり固く締まっていた。検出部分において炉跡は見つかっていない。

《遺物出土状況》

床面より12・27・28・30が出土した。27の器台受部の一部は図のとおり分かれて出土した。壁溝内より11・13が出土した。履土下層からの出土は13・14・16・19・25・26・32である。他は履土上層より出土している。

《出土遺物》（第21・23図）

全体を図示できる資料は非常に少なく、ほとんどが口径もおぼつかない小片であるため出土状況を確認できるものも少なく（小片のほとんどは履土中よりの出土である）良好な資料とは言い難い。

1～10は擬凹線を有する有段口縁の甕である。1は特小型の甕である。肉厚の端部には2条の擬凹線を施す。2～6は小型の甕である。2は口縁部の断面が三角形ぎみの有段口縁を呈する小片である。4・5はともに口縁部内面に指頭圧痕が見られ、やや外傾する口縁端部は4が丸縁、5はやや先細りぎみに仕上げる。また、いずれも頸部内面にハケ調整を施すが、その位置は4が屈曲部の上であり5は下であるという違いがある。6は頸部の屈曲が強く、外反する口縁部の内面には4・5に比べて間隔の広い指頭圧痕が見られる。端部は先細りさせ頸部内面にはハケ調整は見られない。7～10は中形の甕である。7・8はやや外傾する口縁部の端部を丸縁に仕上げる。いずれも口縁部内面に指頭圧痕はみられず7は頸部内面にハケ調整痕を残す。9・10は7・8に

比べて若干口径が大きい、小片が多いことによる口径の計測誤差を考えてここでは中型甕とする。9は外反する口縁部の端部を丸縁とし、内面には間隔の広い指頭圧痕が見られる。頸部内面は屈曲点が低く面を持たない。11～17は無文有段口縁の甕である。11・12は中型の甕である。12は口径18.5cm、器高24.6cmを測る完形品である。倒卵形の胴部に強く屈曲する第1口縁と横ナデによって外反する口縁部を持ち、端部はずんぐりとした丸縁に仕上げる。13～15は小型の甕であるがいずれも小片である。14は頸部内面の幅が広く口縁部は極めて小さい。15は口縁部がやや内傾して立ち上がる。16・17は特小型である。17は極く小片であり甕として分類したが実測図を見る限りでは壺とした方が妥当かもしれない。18は特小型のくの字口縁の甕である。19は口径14.1cm、胴部最大径26.2cm、器高30.0cmを測る完形の有段口縁の壺である。胴の張る偏球形の体部の外面をハケの後ミガキ、内面をハケで調整し、口頸部をナデで仕上げる。20・21は底部片である。20は底径6.2cmを測るしっかりとした平底である。22・23は高坏の口縁部片である。22は口唇部内面を肥厚させ、上面に5～6条の擬凹線を施す。23も口唇部内面を肥厚させほぼ水平な面を作り出す。いずれも内・外面を赤彩する。24は器台の口縁部であろう。内・外面とも先端が三角形をしたヘラ状工具で表裏を6列押捺してΣ状文様に見せる手法は3号住居出土の脚裾部と共通し、同一個体と思われる。また端部には同じ工具を用いたキザミを2列施している。25は器台の口縁部片である。内・外面ともに丁寧なミガキを施し口縁部外面に赤彩を施す。極く小片のため器形は知り得ないが富山県上市町江上A遺跡SD01出土品（久々1982）と同じタイプのものであろう。26は器台の脚裾部片である。内・外面ともにナデ調整し外面に赤彩を施す。擬凹線は12条を数える。27は受け部が椀形を呈する器台である。内湾して緩やかに立ち上がる受け部は口縁部付近で外反に転じ、丸縁の端部を形成する。筒胴部の一部を剥離によって欠損しているがほぼ全体を窺われる。28は筒胴部より裾端部にかけて大きく開く脚裾部であり擬凹線は8～9条を数える。松任市一塚オオミナクチ遺跡1号土坑出土土器中（木田1987）に類例を見る。29は内・外面にミガキを施す小型の高坏である。25と同じく江上遺跡SD01出土品中に類例を見る。30は高坏の柱状部である。棒状有段脚であり外面全体に赤彩を施す。半截竹管状工具を用いたC字状スタンプ文を段部に1列と端部の返し上面に方向を逆にして交互に3列巡らす手法は、3号住居出土の台付無頸壺（第15図49）と類似する。31は口縁部に凹線を3条施す椀形の土器である。調整は外面口縁部をミガキ、体部をハケの後ナデ、内面口縁部をナデの複雑なミガキ、体部をミガキで仕上げる。類例は根上町中庄遺跡包含層出土土器などに見られる。また、志賀町倉垣遺跡第17号溝出土品は本例より体部が若干直線的であるが器台であり、31も器台である可能性がある。32はくの字口縁の鉢である。口縁端部を強く指でつまむことによって口唇部を波状に見せている。体部外面にハケ調整、内面にケズリ調整を施す。

その他の遺物は検出されていない。

5号住居

《遺構》（第19図）

調査区北西部に位置し、1号住居と同規模の大型住居である。3号住居、49・53号土坑を切り、

10号住居と接する。4.5m離れ東に7号住居が位置する。平面は円形を呈するが東側と南側では六角形状に近い。径11.7m、床面積は93m²を測る。壁高は床面より35～40cm、壁溝は幅25～30cm、深さは15cm前後で北西部には巡らない。この付近の地山は多くの礫を含むもので掘削が非常に困難だったのではないだろうか。主柱穴はP1～P6の6個で径は70～90cm、深さはP4が35cmと若干浅いが他は45～50cmである。柱間は、P1～P2・4m、P2～P3・3.1m、P3～P4・3.9m、P4～P5・3.6m、P5～P6・4.2mを測る。また壁からの距離は、P1・1.8m、P2・2.1m、P3・2.2m、P4・2.0m、P5・1.8m、P6・1.6mで住居の平面形と同心にはならず北北東の方向へ若干ずれている。P7は大きさ100cm×90cm、深さ15cmで住居の中心に位置する。P8、P9は土坑状を呈し、P8は大きさ1.6m×1.2m、深さ15cm、P9は1.8m×1m、深さ10cmである。P8は明確に遺構と判断し得たが、P9は不明瞭であり存在しないかもしれない。その他いくつかのピットを検出しているが配置関係で気付いた点をあげると、P10～P13の4個のピットが2.3m×2.2mの大きさで方形となっており、うち2辺がP1～P4、P2～P6を結ぶ線とほぼ重なる。P14～P15は主柱穴間のほぼ中点に位置している。他の主柱間にも存在していたが検出時に見逃しているのかもしれない。炉跡は不明である。床面は主柱で囲まれた部分に貼床が施され固く締まっていた。また幅20cmのトレンチで床面下の状況を観察したが、地山面は平坦ではなく凹凸が激しかった。貼床は地山に一旦濁黄灰色砂質土（土質は地山とほぼ同じ）を盛った後貼った個所と地山に直接貼った個所が見られた。

《遺物出土状況》

床面からの出土土器は、10・13・25・44・47・67・72であり、主柱穴と壁との間から出土している。壁溝より37・51・55が出土した。また、P1から45、P3から61、P5から9、P8から53、P17から4、P18から14が出土した。

《出土遺物》（第23～27図）

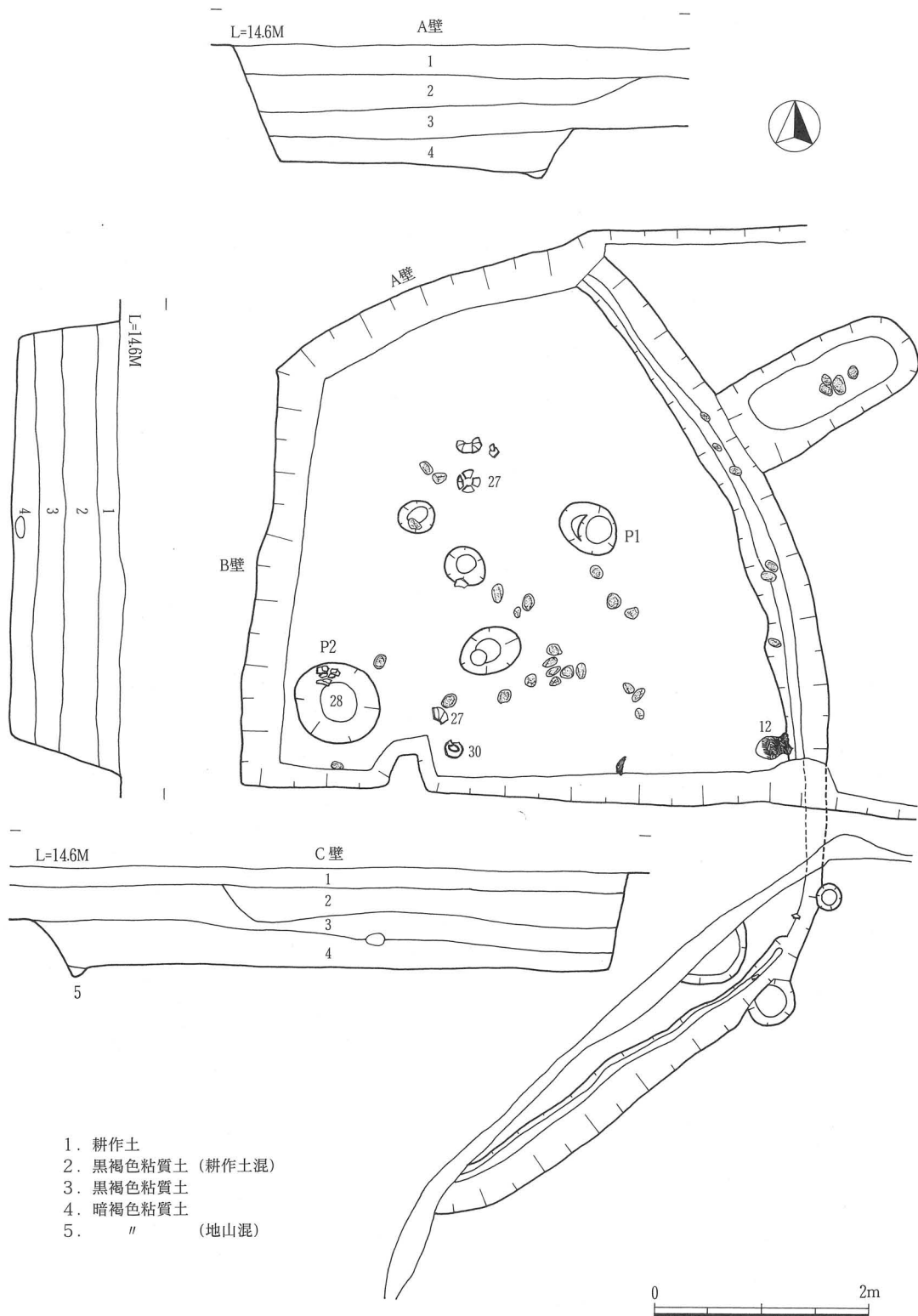
1は小型のくの字口縁甕の端部を幅広く面取りし、2条の擬凹線を巡らせる。口頸部内面は摩擦のため明瞭ではないがハケ調整の痕跡が認められる。2は小型の擬凹線を持つ有段口縁の甕である。短い口縁帯には密に9条の擬凹線が施される。3～8は中形の擬凹線を持つ有段口縁の甕である。3は直立する重厚な作りの口縁部に8条の擬凹線を有し、内面に指頭圧痕が見られる。4は口縁部がやや外反ぎみに立ち上がり、7条の擬凹線を施している。端部を先細りに仕上げ、内面には小さな指頭圧痕が見られる。5～8は先細りする口縁部が外反して立ち上がり、幅の広い口縁帯に擬凹線を施す。いずれも内面に指頭圧痕がみられ頸部にはハケ調整の痕跡を残す。外面屈曲部の稜が鋭く、特に7は下方に突出しているように見える。9～12は大型の擬凹線を持つ有段口縁の甕としたが、いずれも口縁部のみの小片であり、計測誤差を考えると中型とした方が妥当かもしれない。9は頸部の屈曲が緩く第1口縁が斜め上方に伸びる。また内面の段も緩やかに屈曲点在外面のそれより下がるため頸部の器壁が薄くなり面も狭くなる。8条の擬凹線を有し指頭圧痕も口縁部の上方に見られる。10・11は口縁部が大きく外反して立ち上がり端部は先細りに仕上げる。強いナデにより内面は三角状に盛り上がり、指頭圧痕の間隔も広く頸部内面には面を持たない。12はやや外反の度合いが弱く他と異なり胴部内面のハケ調整を施す。13はやや大型

の無文有段口縁の甕である。屈曲が強く口縁帯下端が垂下しており、重厚な作りの丸縁を呈する。床面からの出土である。14～16は小型の無文有段口縁の甕である。14・15は頸部の屈曲が弱く内・外面の段も明瞭ではない。17は特小型の無文有段口縁の甕である。18は小型の受け口状口縁の甕である。口縁部外面下端にヘラ状工具によるキザミを施すが、小片のため現状で5箇所を確認するのみである。端部は外側に若干傾斜する面取りをおこなう。また口縁部内面に粉の圧痕が認められる。19は小型のくの字口縁の甕である。直線的に立ち上がる口縁の端部を面取りし、口縁部外面をナデ、内面をハケで調整し、胴部は逆に外面をハケ、内面をナデで調整する。20・21は有段口縁の壺である。20は外反する口縁部を先細りさせ、外面をミガキ、内面口縁部をナデ(部分的にミガキ)、頸部以下をケズリで仕上げる。口縁部の上位に指頭圧痕が見られ、内面の段も緩やかで屈曲点が高い。21は大きく外反する口縁部の端部を外方につまみ出している。内・外面ともに丁寧なミガキを施す。22は擬凹線を持つ有段口縁の壺である。大きく外反する口縁部には5条の擬凹線を施す。23は器種不明であるが受け口状を呈する口縁部片である。内面段部には2条の深い凹線が巡り一見中央に稜を持たせたように見える。24は有段口縁の壺である。屈曲部の稜が鋭く突出し、端部を平縁に仕上げる。4号住居出土品(第22図19)に比べ大型である。25は胴部下半を欠くが、最大径29.8cmを測る偏球形の胴部を持つ長胴壺の体部である。外面をハケの後ミガキ、内面をハケで調整し、径5.4cmを測る底部の外面には木葉痕が認められる。26は弥生時代中期に属する甕の口唇部片である。内面に櫛状工具刺突による綾杉文を現状で3列認める。また、端部外面に凹線状の凹みを巡らせている。27は24に比べてやや小型の有段口縁の壺である。法量は前出の4号住居出土19にほぼ等しいが、本例の方が若干口縁部が外反するようである。28はかなり胴の張る壺の底部である。29は蓋のつまみ部片である。当初は筆者の不備で脚台部として実測したため掲載した図版上の分類が煩雑なものとなってしまったことをお詫びしておく。30は脚台部である。内・外面を指押さえて成型する。31～36は底部片である。この内32は底部穿孔土器であり孔径は13mmを測る。焼成前穿孔である。37・38は有段状の口縁部を持つ鉢である。37は口径に対して器高の高いものであり、内・外面ともに、ミガキ調整と赤彩を施す。38は口縁部が大きく開き浅い胴部を持つものであり、同じく内・外面にミガキ調整を施す。外面と内面口縁部に赤彩を施す。39は有段状の口縁部を持つ小型土器である。極めて小片のため口径、傾きについては確証がないが、口径に対する器高はかなり高いことは確実である。内・外面に丁寧なミガキを施し精良な作りである。40は椀形の体部に反転する口縁部を持つ小型土器である。端部を指でつまみ弱い波状を呈する。全体に稚拙な作りである。41は椀形を呈する小型土器である。内・外面ともに丁寧なミガキを施している。42も椀形を呈する小型土器である。内弯して開く胴部から口縁部が外反ぎみに上方へ立ち上がる。内・外面ともに雑なミガキを施す。43は口唇部の小片である。器種および法量は不明確であり、調整も摩耗が激しく不明である。端部にハケ状工具によるキザミを施している。44は環状把手を有する大型の鉢である。有段状を呈する口縁部には上位に4条と下端に1条の擬凹線を施す。調整は口縁部内・外面をナデ、胴部外面をハケの後ミガキ、内面をケズリの後ミガキで仕上げ、把手はナデ調整を施す。類例は志賀町鹿首モリガフチ遺跡P4G調査区第4層出土土器や擬凹線を持たないが押水町竹生野遺跡第4号土坑出土土器

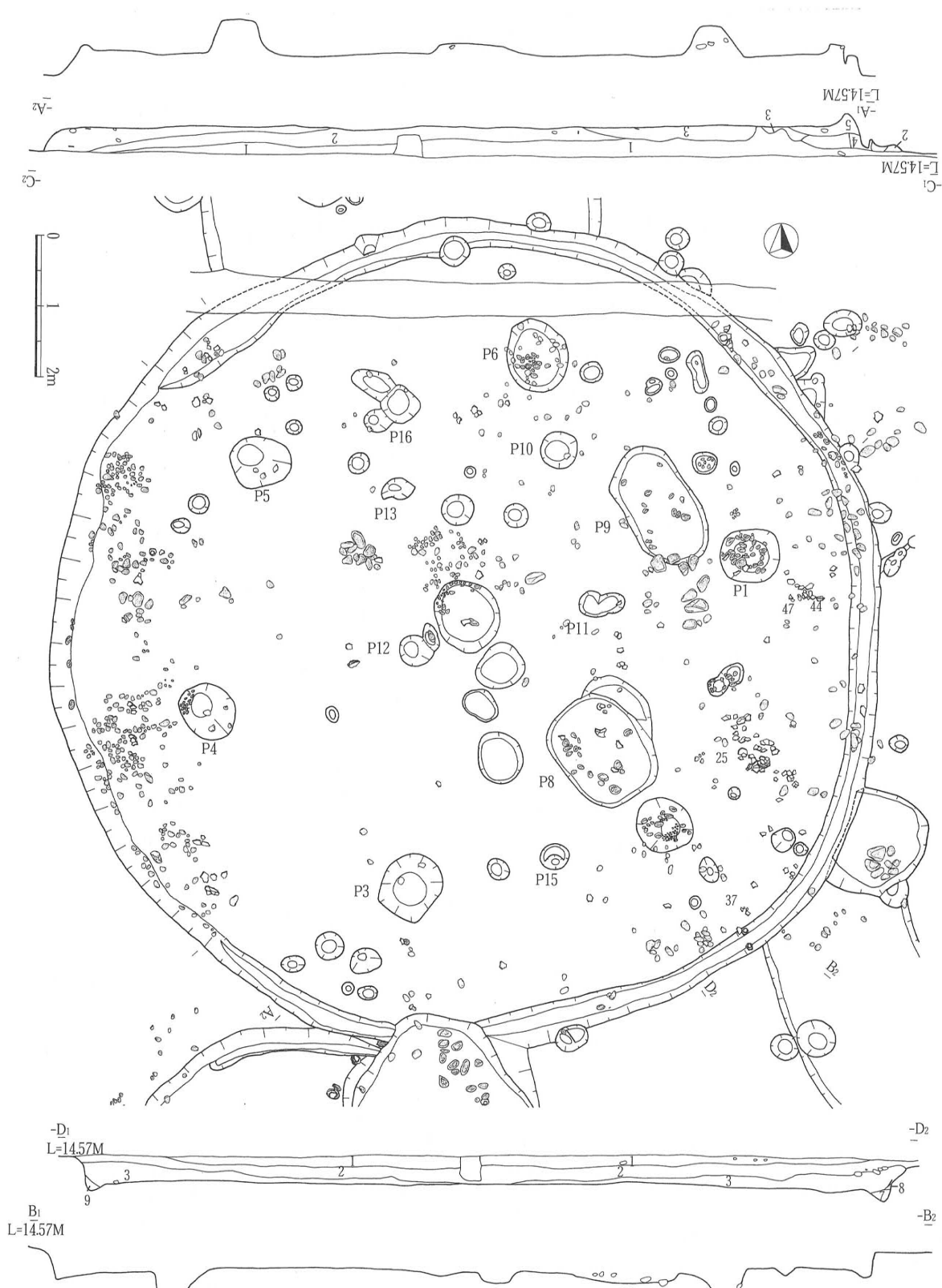
などがあるが、いずれも胴部最大径が口径を越えるものである。45も同じく大型の鉢の把手であるが半円状の貼り付け把手である。46は涙滴状の透かしを持つ結合器台である。涙滴状透かしのほぼ中央で上下に破碎しており、接合点はない。また垂下帯と筒胴部を欠損している。口縁端部が反転しており、類例として野々市町御経塚ツカダ遺跡81-3 D出土土器があげられるが、口縁部もさほど発達していない本例はツカダに先行しこの種の結合器台としてはやや古相を示すものと思われる。47は端部片である。内・外面に丁寧なミガキをおこない2条の擬凹線を施す。脚裾部である可能性もあるが小片のため判然としない。48・49はともに脚裾部である。いずれも返しを有する。50は器台の受け部である。直線的に伸びる受け部底から口縁部がやや外反ぎみに強く屈曲し、下方に若干長めに垂下する。51・52はともに器台の筒胴部である。52は小さな稜を設けて有段状に作り段部上面にヘラ状工具を用いた細かいキザミを巡らす。段部上に透孔を3箇所穿孔し、外面に赤彩を施す。53・54はいずれも脚裾部片であると思われるが小片のため明確ではない。54は端部に1条の凹線を巡らす。55・56は中型の高坏である。ともに水平に広がる坏底部から口縁部が大きく外反して伸びるタイプのものであり、端部を丸く収める。55は柱状部を欠くが坏部と脚裾部は完形である。56は口縁部のみであるが55よりもさらに大きく開く。内・外面に赤彩を施す。57~60は同タイプのやや小型品である。いずれも小片であり全形はわからないが58は内面に段が見られず直線的に脚部に続くようである。61~64は中型の有段鉢形を呈する高坏である。いずれも小片であり、口縁部までを窺えるものは61のみである。ともに内面の屈曲部が外面のそれより下にあり、口径に対して浅いものと思われるが64には内面の屈曲部が見られない。65は脚部から坏部が直接大きく開く口縁部に至る中型の高坏である。やや内弯ぎみに立ち上がった坏部は途中で外反ぎみに転じ、浅い鉢形を呈する。調整は外面にハケの後ミガキを施し、内面はミガキで仕上げる。類例は竹生野遺跡第3号土坑出土品中に見られるが、本例とは脚部の作りが異なるようである。66は口縁部の小片である。小型高坏の類であろうか。内・外面ともに丁寧なミガキ調整を施している。67は床面からの出土である。全形はわからないがおそらくコップ状を呈するものであろう。外面の縦2箇所楕円形の剥離痕が認められ、環状の把手が貼付されていたものと思われる。類例は西念・南新保遺跡A区P7出土土器中に見られるが、本例は内・外面ともにミガキ調整を施している。68~70は蓋である。68はつまみ部の内・外面に指押さえの痕跡を残す。70は摩耗が激しく調整は不明である。71は土師質土器の皿である。口径12.4cmを測る本例は、後に述べる富樫氏押野館跡に関係する混入品であろう。72・73はともに高坏の柱状部である。ともに内面であり絞り目が見られ、72は外面に赤彩を施す。

《その他の遺物》

本住居からは他に砥石1点と金属器1点の出土がある。1はほぼ直方体を呈し、実測図上の上・下面を除く4面すべてに使用痕が認められる。また、図上左側面中央には鋭い刃先のようなものによる断面V字状の溝が縦に1条見られる。2は釘の先端部分と思われ住居上面からの混入品であろう。

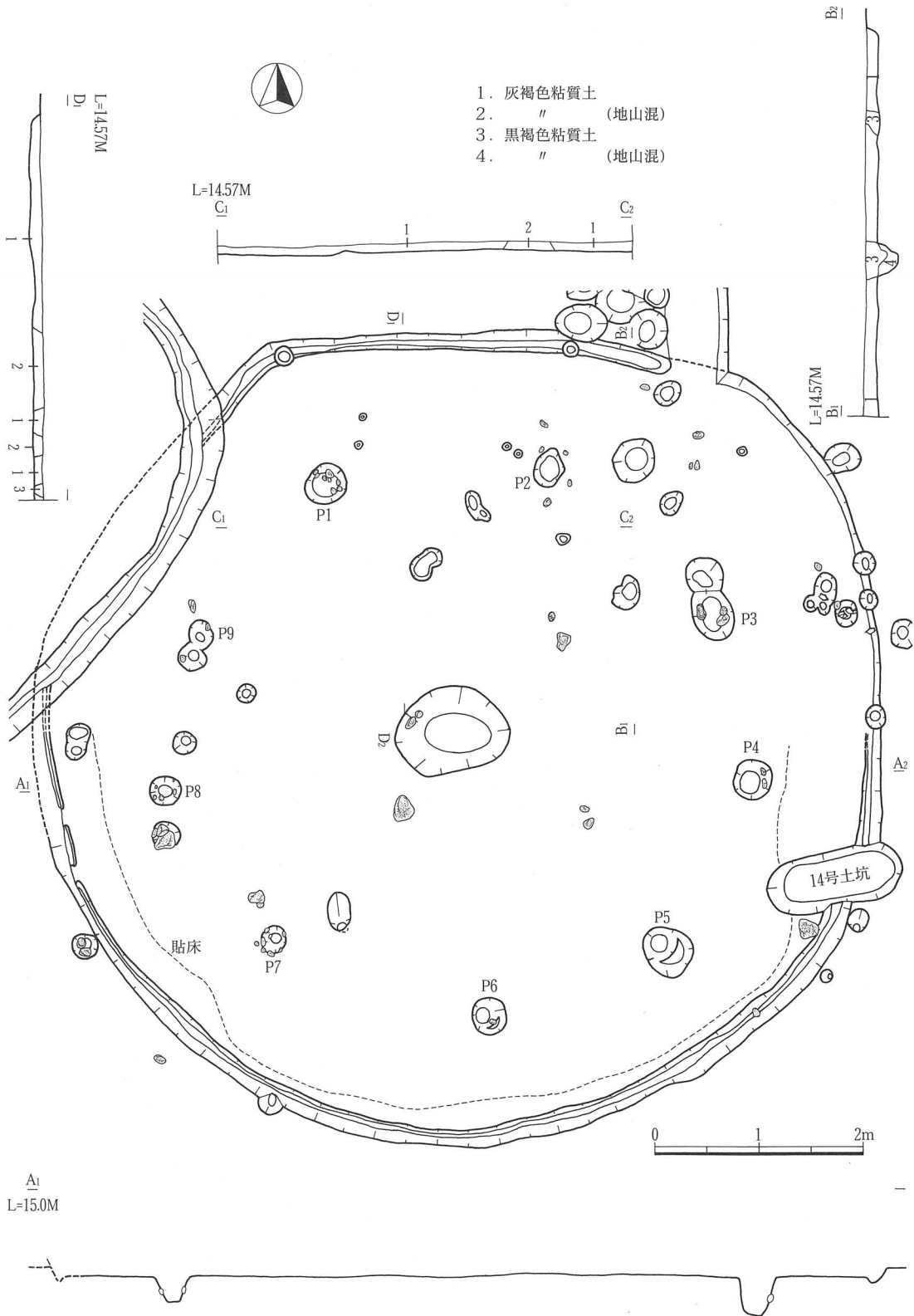


第18図 4号住居 (1/60)

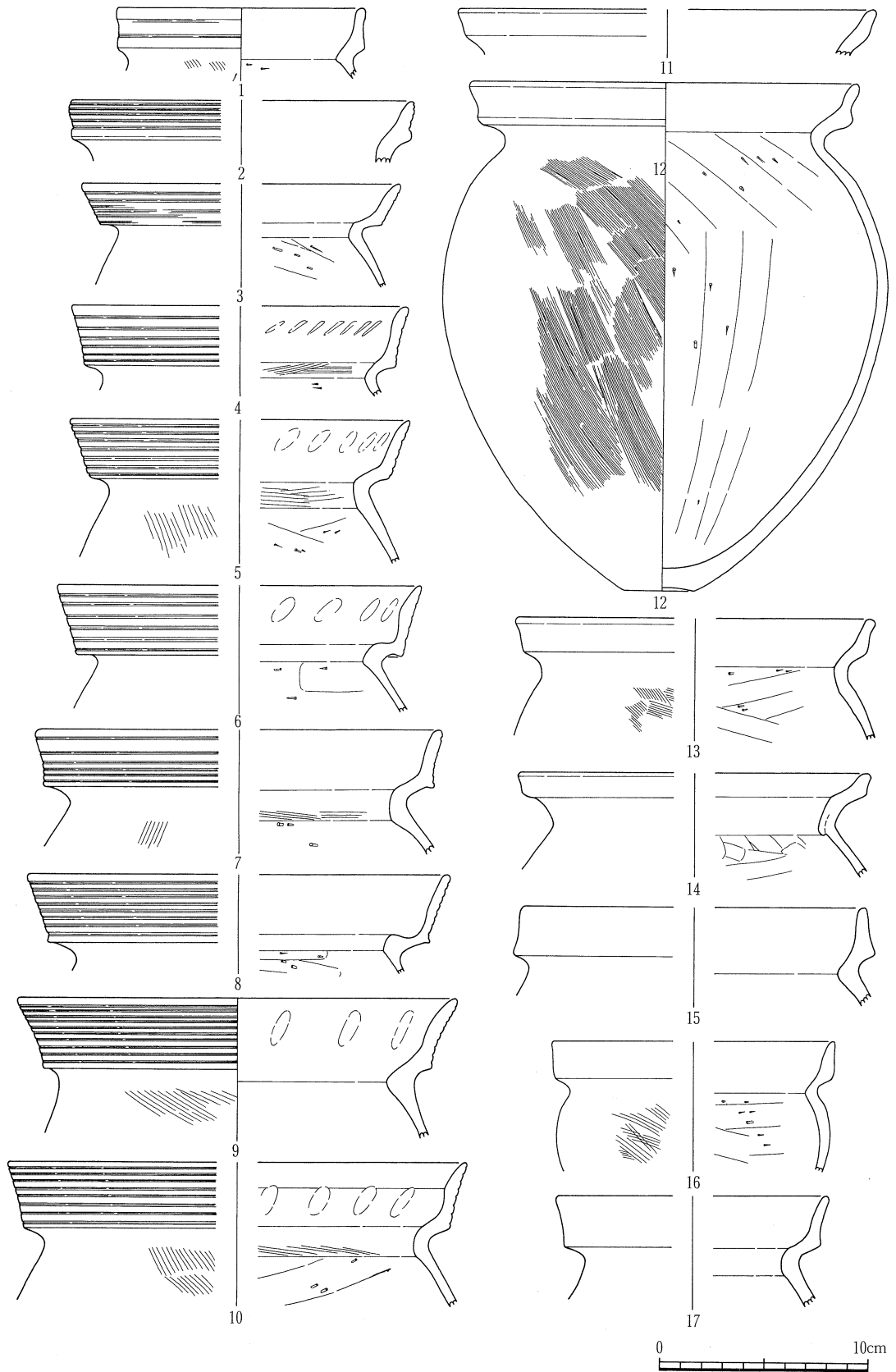


- 1. 黒褐色砂混粘質土
- 2. 黒褐色粘質土
- 3. 茶褐色粘質土 (砂少量混)
- 4. 瀾灰色粘質土 (砂少量混)
- 5. 暗褐色粘質土 (炭化物混)
- 6. 暗茶褐色粘質土 (砂少量混)
- 7. 茶褐色砂質土 (地山混)
- 8. 茶褐色粘質土 (砂少量混)
- 9. 茶褐色粘質土 (地山混)
- 10. はり床
- 11. 瀾黄灰色砂質土

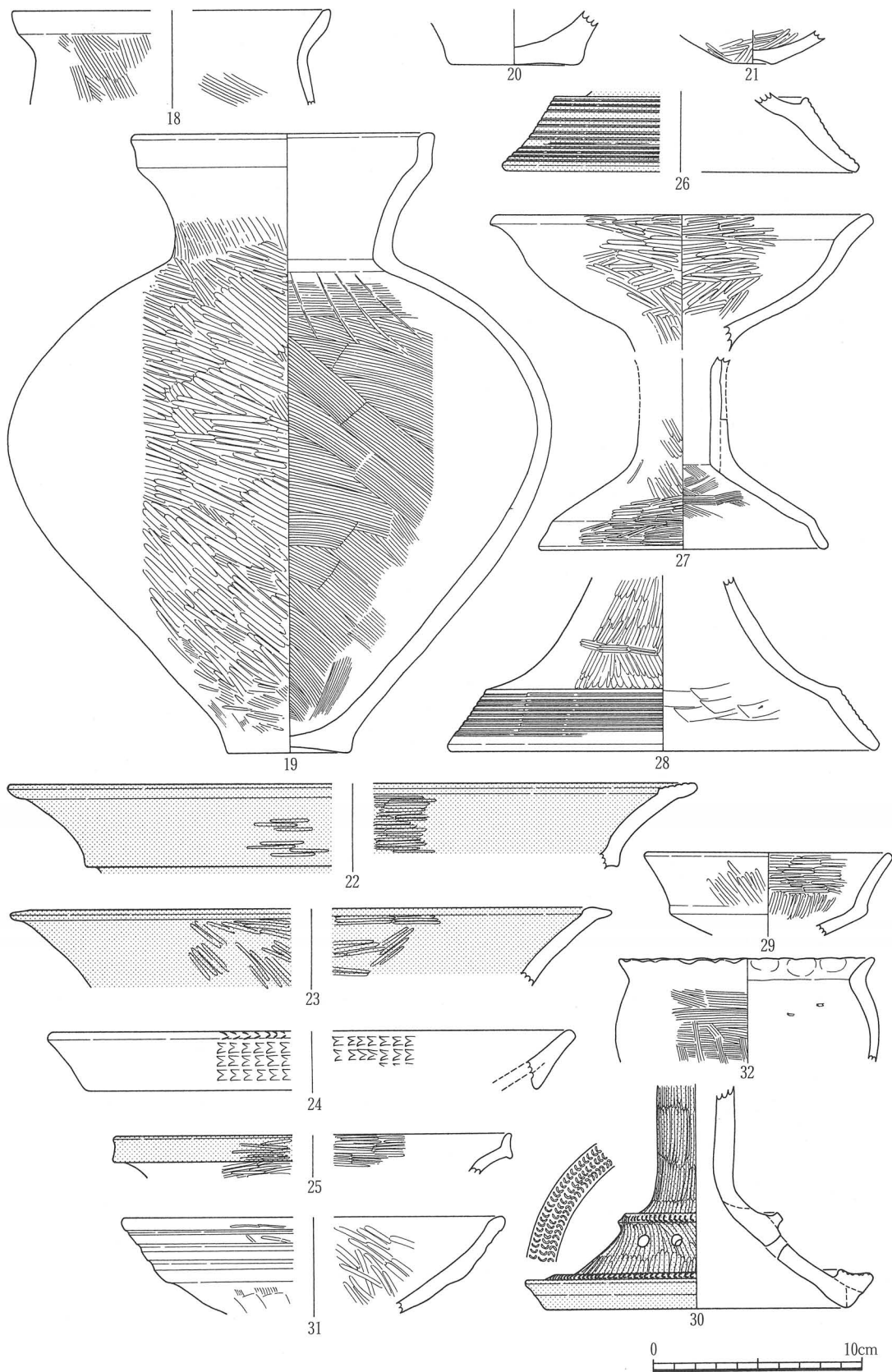
第19図 5号住居 (1/80)



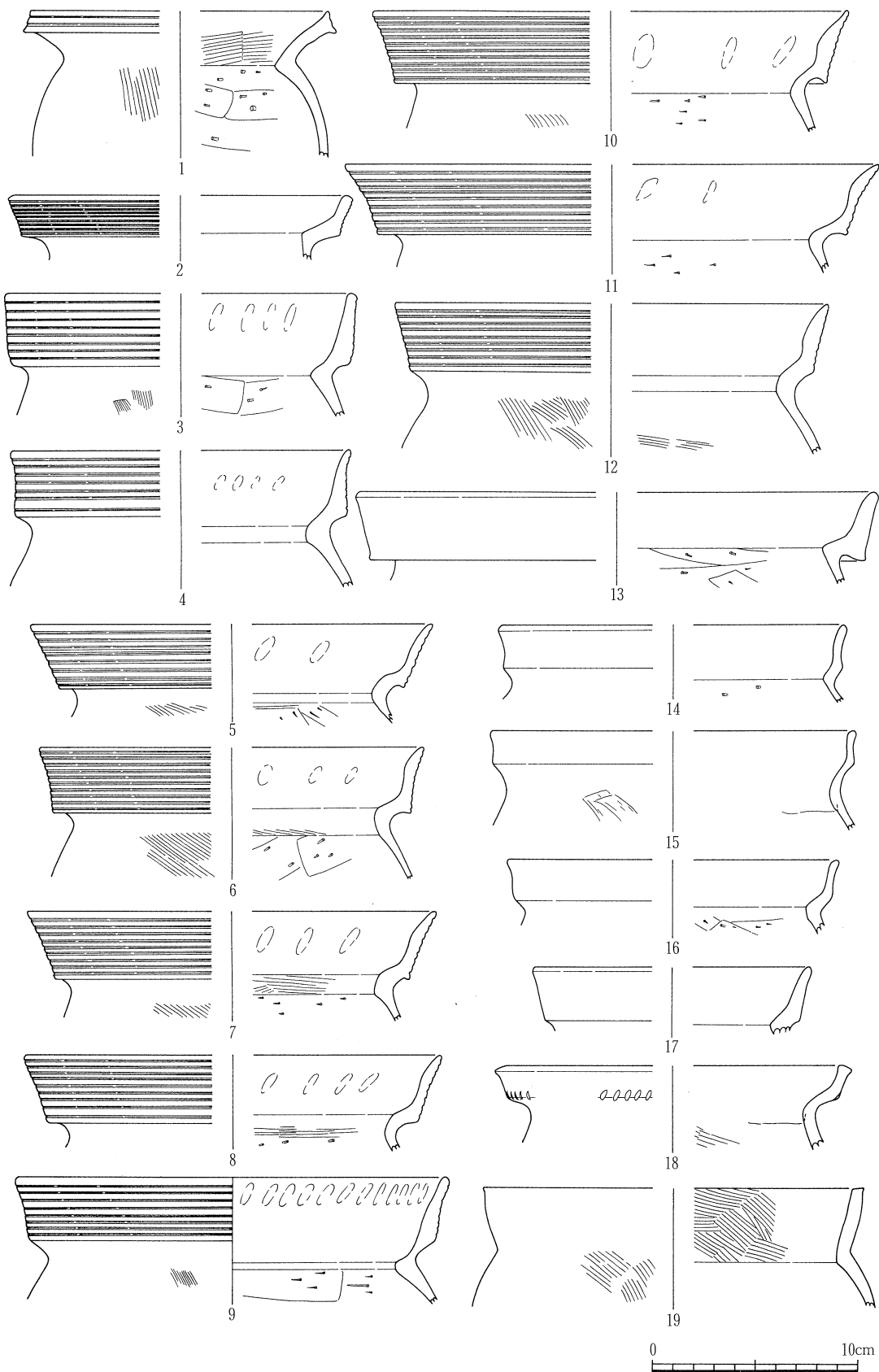
第20图 6号住居 (1/60)



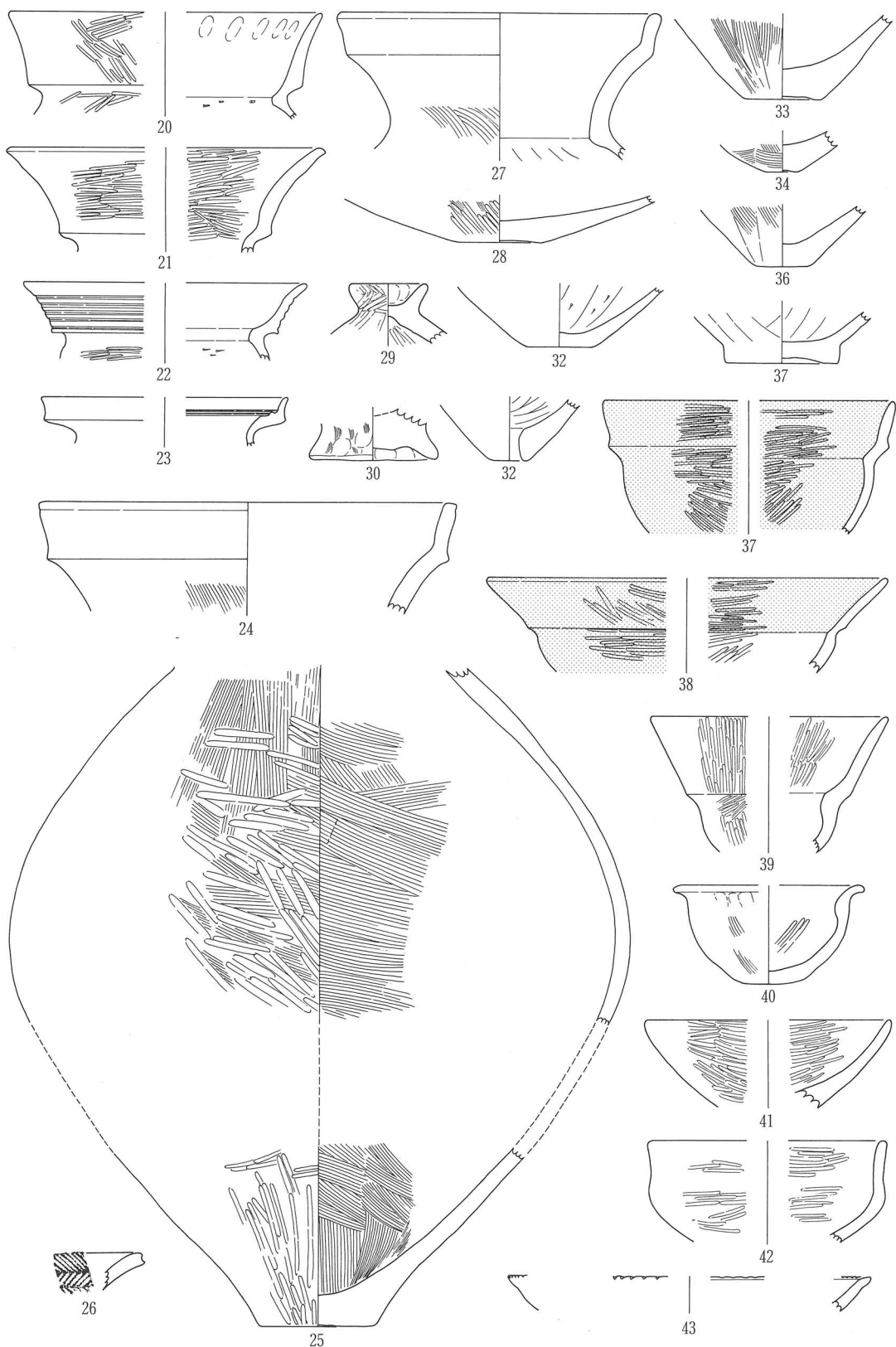
第21图 4号住居 出土土器①



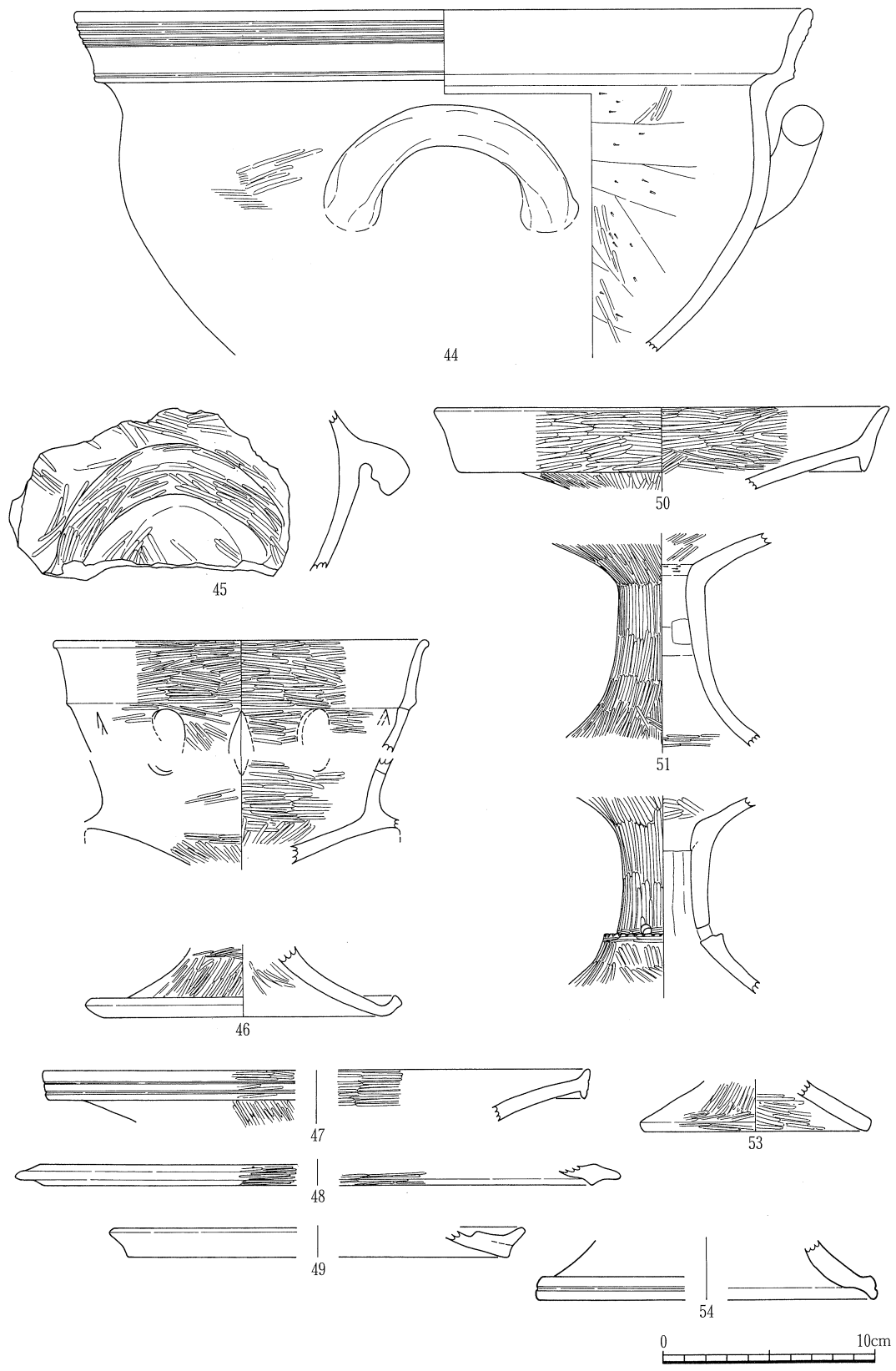
第22图 4号住居 出土土器② (1/3)



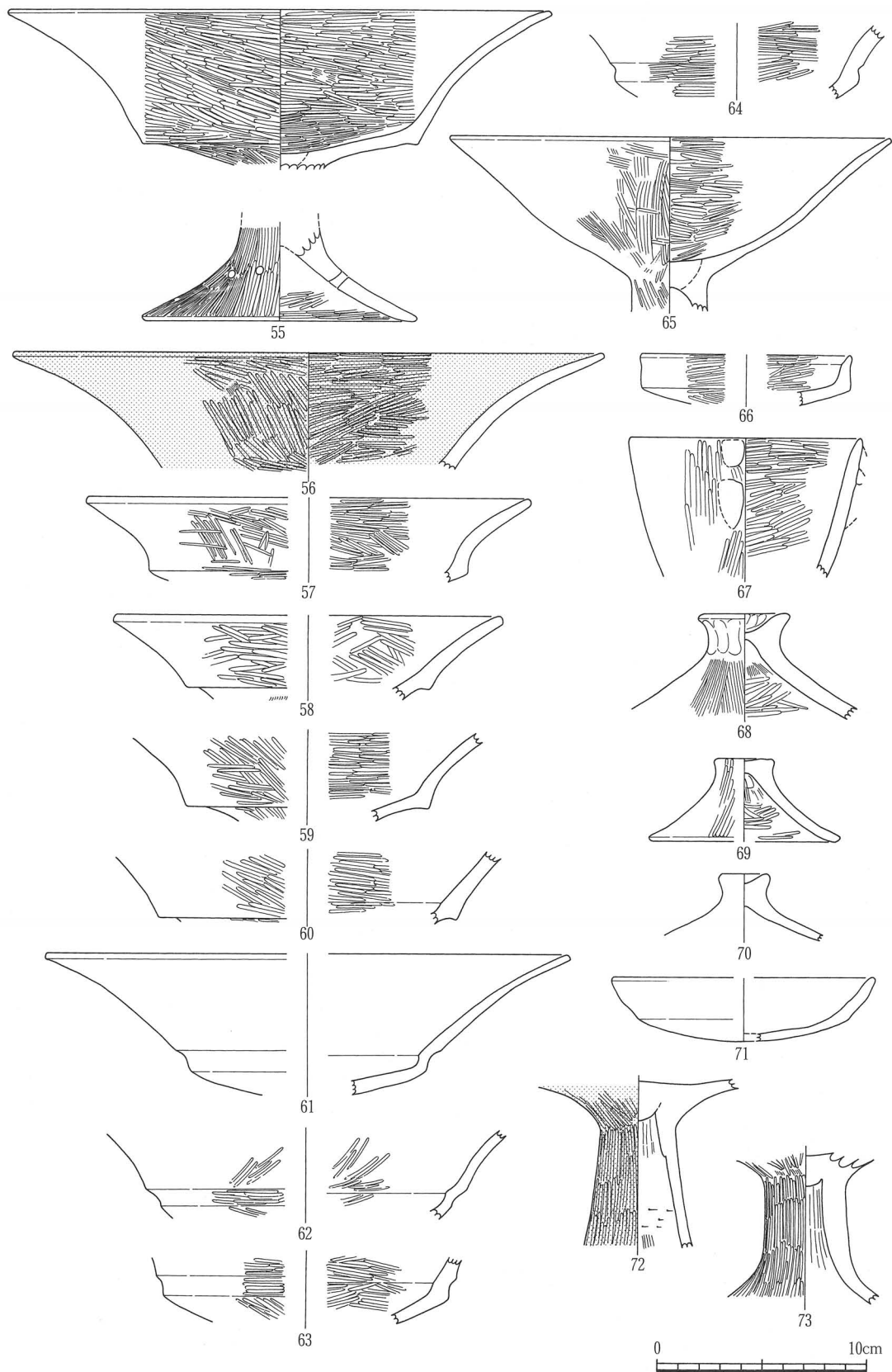
第23图 5号住居 出土土器① (1/3)



第24图 5号住居 出土土器② (1/3)



第25图 5号住居 出土土器③ (1/3)

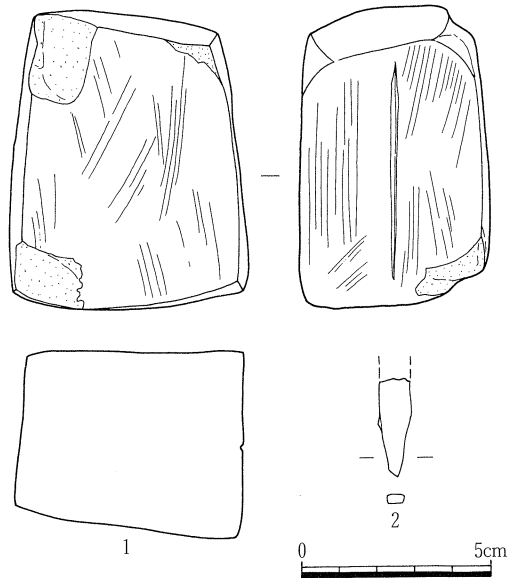


第26图 5号住居 出土土器④ (1/3)

6号住居

《遺構》 (第20図)

調査区のほぼ中央に位置し北西部を7号住居に切られている。また14号、20号、21号土坑にも切られる。検出は1982年と1983年に行った。平面形は不整ではあるがほぼ円形を呈し径は8m、床面積は47㎡程度であろう。壁高は約20cmと低く、壁溝は幅10~15cm、深さ5~10cmで狭く浅い。主柱穴はP1~P9の9個が環状に配置される。径は30~50cm間に収まり、深さはP3・P8・P9が25cm、P5は31cm、他は35~40cm間を測る。柱穴間はP1~P2・2.2m、P2~P3・2.1m、P3~P4・1.7m、P4~P5・1.8m、P5~P6・1.8m、P6~P7・2.1m、P7~P8・1.75m、P8~P9・1.6mである。壁からの距離はP3が1.6m、P8が1.2m、他は1.3mである。



第27図 5号住居 出土遺物 (1/2)

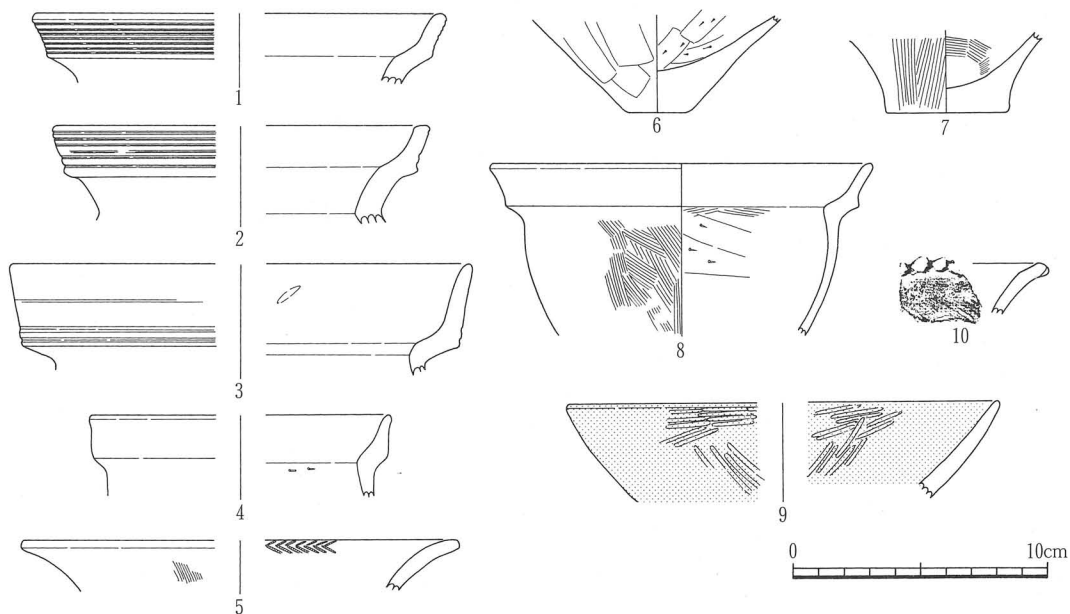
住居中心には楕円形を呈すP10が位置し、大きさは120cm×80cm、深さ30cmである。床面には固く締められた床が破線の内側に貼られていた。床面のレベルはほぼ14.2mである。炉跡は不明である。出土土器は少なく住居検出面付近のレベルから出土した。

《出土遺物》 (第28図)

出土点数が少なくいずれも小片であるため良好な資料とは言えない。

1・2は擬凹線を有する有段口縁の甕である。短く外反する口縁部と長めの第1口縁を持ち擬凹線を1は7条、2は6条施し口縁部下端の稜が突出する。3は中型の有段口縁の甕である。擬凹線は現状で下端に2条確認され上位はナデを施す。内面にはヘラ状工具による圧痕が見られるが、小片のため1箇所だけであり連続するものかどうかはわからない。4は小さい有段口縁状をなす口縁部片である。5は中期に属する甕の口縁部片であり端部内面に櫛状工具による綾杉文を1列施している。6・7はともに平底の底部である。6は外面にヘラ状工具によるナデ、外底面にケズリを施す。胎土に少量の海绵骨片を含む。7は5と同一個体と思われ、外底面に体部と同じ原体でハケ調整を施す。8は有段状の口縁部を持つ鉢である。口縁部が短く口径に対して器高が高い。9は緩やかに内弯し椀状をなす口縁部片である。内・外面ともに丁寧なミガキで調整し赤彩を施す。10は5と同様中期に属する甕の口縁部片であり端部にハケ状工具によるキザミを施している。

その他の遺物の出土は見られなかった。



第28図 6号住居 出土土器 (1/3)

7号住居

《遺構》 (第29図)

調査区の中央部に位置し1982年、1983年に検出した。6号住居、8号住居を切り込んで立地する。平面は隅丸方形を呈するが、幾分歪んでおり菱形ぎみとなる。大きさは7.9m×7.8m、床面積は約47㎡である。壁高は床面より30～40cmを測る。壁溝は幅20～25cm、深さほぼ10cmであり、北西部で50cm途切れるが住居を巡っている。主柱はP1～P4の4個が長方形に配置されるが、これも住居平面形と相似するよう歪んでいる。P1・P3は楕円形を呈し大きさは80×50cm、P2・P3の径は50cmである。深さは、P1・40cm、P2・45cm、P3・35cm、P4・75cmである。柱穴間は、P1～P2・4m、P2～P3・P1～P4・3.7m、P3～P4・4.2mを測る。P1～P2中点西側にP6、P3～P4中点西側にP7がそれぞれ位置している。P6・P7とも深さは10cmと浅いが支柱穴であろうか。またP6～P7間は3.7mで中点に径40cm、深さ30cmのP8が位置する。北34度西である。主軸で対称となる二段掘りのP5が中央南東側に位置する。一段目は長方形を呈し190×95cm、深さは10～15cmである。二段目は楕円形を呈し105×70cmで深さ床面より40cmである。覆土は上下の2層に分かれ、上層下部に木炭状炭化物が凹状に厚さ3～5cmで検出された。住居北西部に壁より1m離れ径35cmほどの焼土を検出したが厚さは2～3cm程度のごく薄いものである。床面は貼床されとくに破線より南側が固く締まっていた。床面レベルはほぼ14.0mである。

《遺物出土状況》

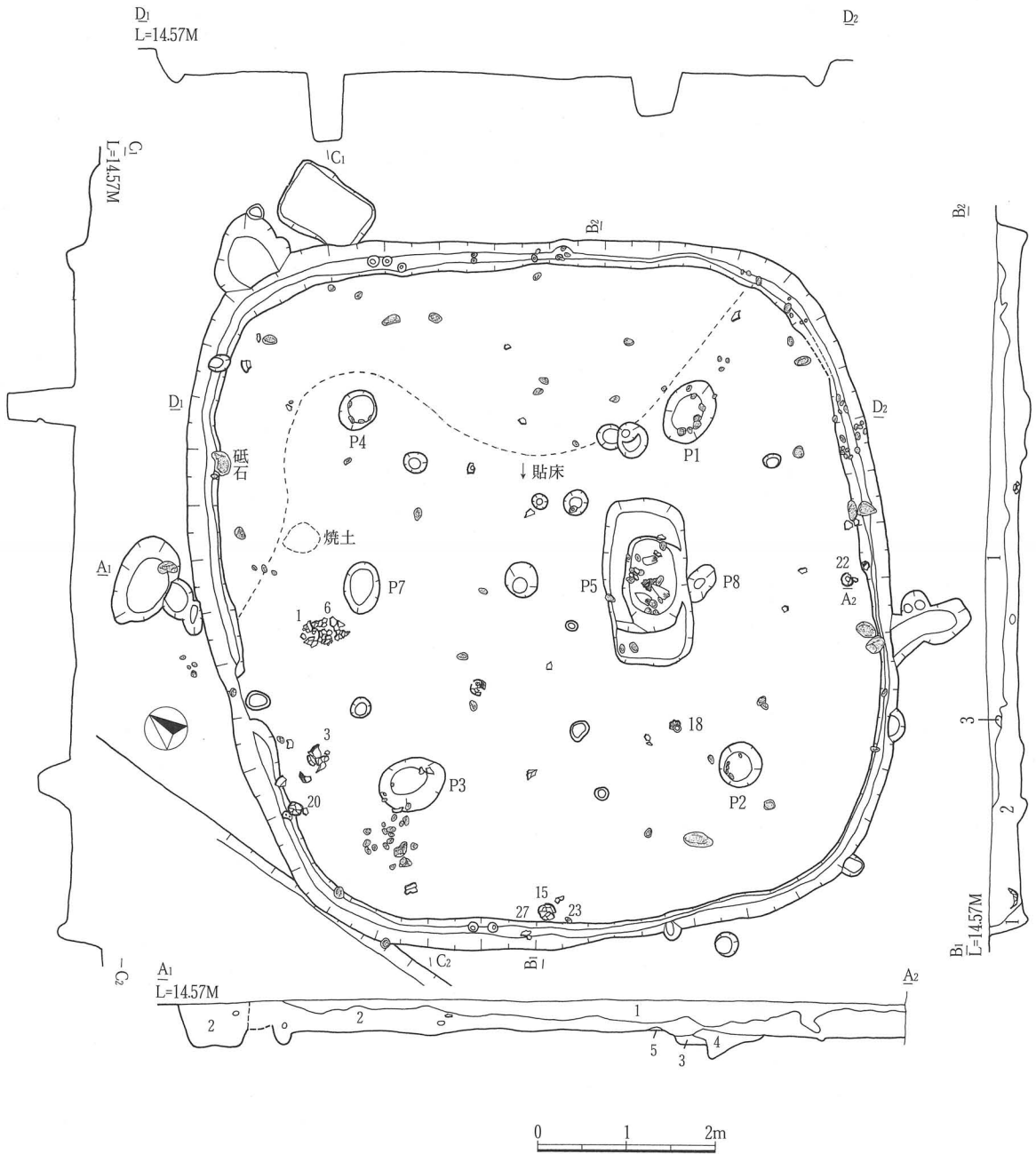
住居床面からの出土土器は 1・3・6・13・15・18・20・22・23・27であり、第29図の番号は出土位置を表す。P5の上層より11、下層より4が出土した。他は覆土からの出土である。第33図

砥石は北西壁際床面より出土した。また床面より緑色擬灰岩片が数点出土している。

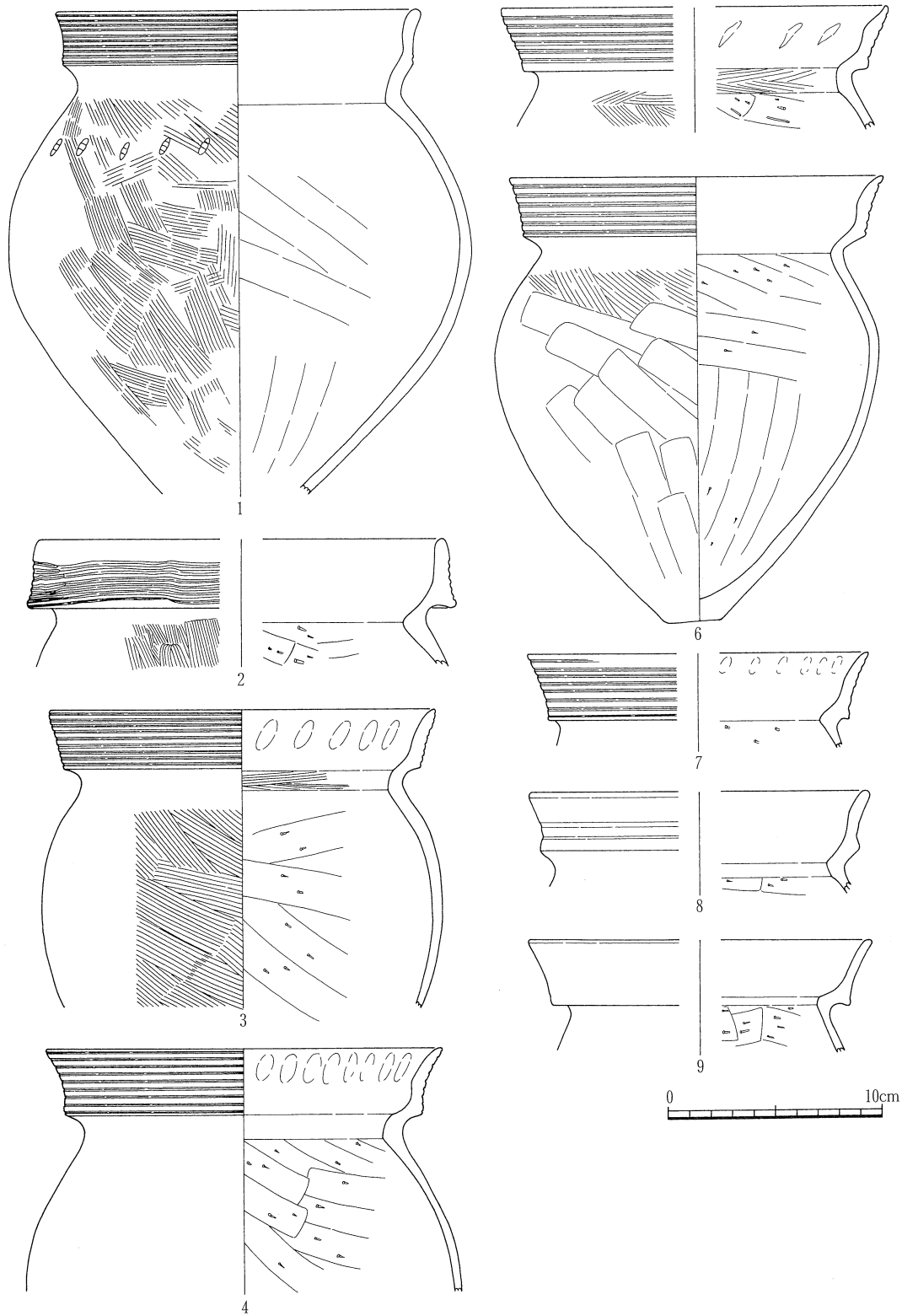
《出土遺物》（第30～33図）

本住居出土土器は床面からの出土が多く、良好な一括資料である。

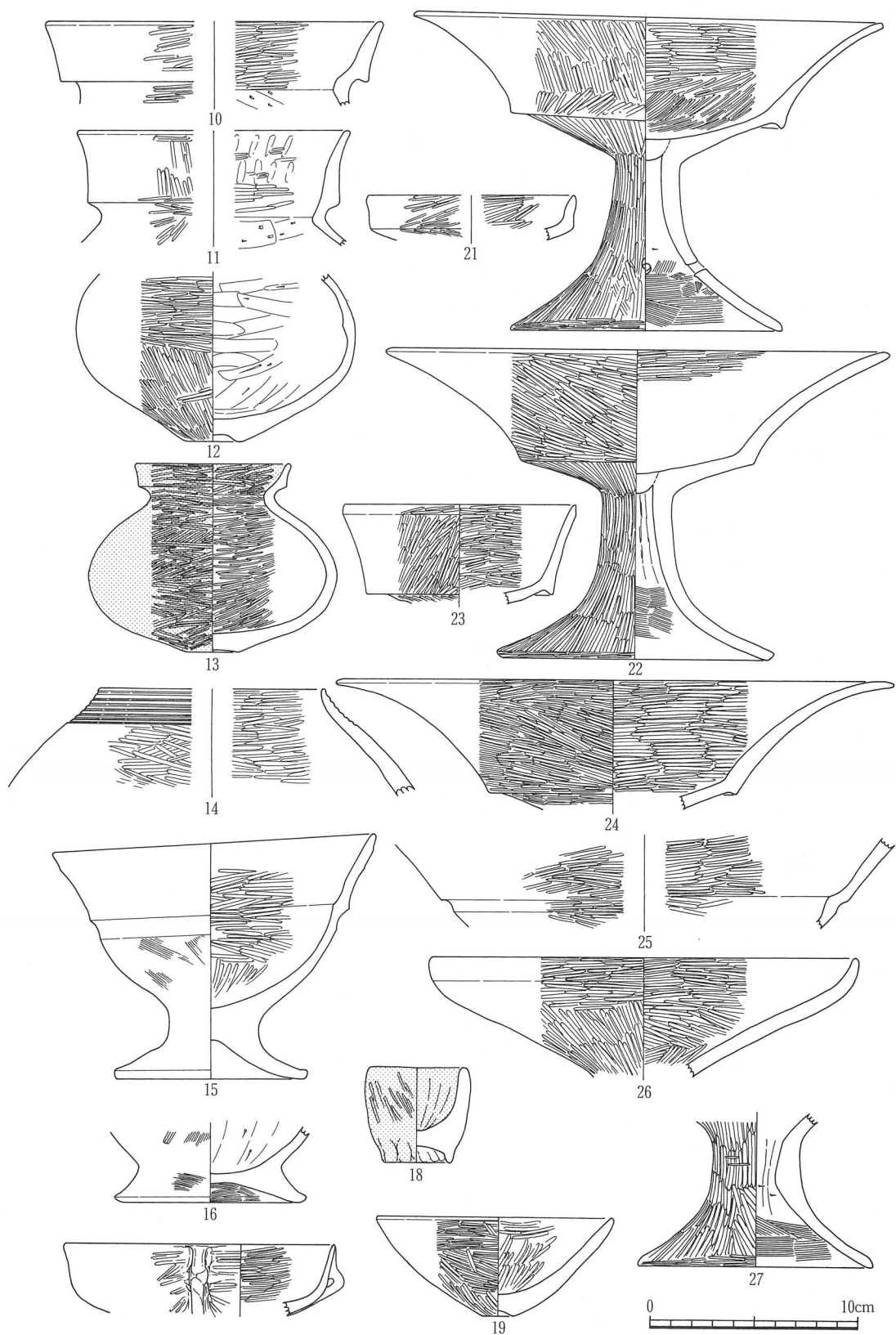
1は底部を欠くがほぼ完形の中型の甕である。頸部から軽く屈曲させ有段口縁状に成型した口縁部に10条の擬凹線を施し、肩部にハケ状工具を用いて列点を巡らす。口頸部内・外面をナデ、体部外面をハケの後ナデで内面をナデで調整する。2～7は中型の擬凹線を有する有段口縁の甕である。2は内屈する重厚な作りの口縁部に3条1組の擬凹線を2段（計6条）施している。頸部内面の屈曲点が下にあり器壁が薄い。3は外傾する口縁部の内面に指頭圧痕を有し、頸部内面にはハケ調整痕を残す。4は外反する先細りの口縁部内面にやや間隔の狭い指頭圧痕を持ち、頸部内面にはハケ調整痕は見られない。また体部外面はハケ調整の後ナデを施してハケ目を消している。5はやや外反する先細りの口縁部内面に指頭状の工具圧痕を持ち、頸部内面にハケ調整を施す。端部を強いナデで先細りさせるため内面中央が稜状をなしている。6は完形品であり口縁部内面には指頭圧痕を持たない。体部外面は肩部にハケ調整痕が残るものの以下をハケの後ナデで調整する。7は小片のため定かではないが2～6よりは若干口径が小さいように思われる。8・9は無文有段口縁の甕である。8は口縁部下位にヘラ状工具による浅い2条の凹線を巡らせている。9は口縁部下端がやや垂下する。10～12は中型の有段口縁の壺である。10は重厚な作りの口縁部下端を若干垂下させている。11は口縁部がやや長く外反する。内面には指頭圧痕が上下に2列巡っている。12は胴部が偏球状に張る体部である。推測される頸部径より口径は10・11よりも若干小さいものであろう。13は完形の小さい有段状の口縁部を持つ壺である。胴中央部が大きく張る偏球状の体部を持つ。内・外面ともに丁寧なミガキを施し、外面および内面頸部以上を赤彩する。14は胴の大きく張る無頸壺である。端部を繊細な先細りに仕上げ、外面に7条の擬凹線を施す。15は口縁部を有段風に仕上げた有台鉢である。調整は口縁部外面をナデ、内面上半をナデ、下半をミガキ、胴部外面をハケ、内面をミガキ、脚台部内・外面をナデで仕上げる。16も同じく有台鉢の脚台部であろう。17は把手付きの鉢である。低平な体部に現状で1箇所把手を付けており下側の先端が底部にまでまわり込んでいる。類例は津幡町刈安野々宮遺跡第1号住居址出土土器中に見られるが本例はやや小ぶりで胴部も若干外側に開いている。18はミニチュア土器である。外面をミガキ、内面をナデで調整し、脚台部を指でつまみ出している。内・外面ともに赤彩を施す。19は小型の浅い碗形を呈する鉢である。内・外面ともに丁寧なミガキ調整を施し、底部が若干凹む。20・22・24は水平な杯底部から大きく上方に開く口縁部を持つ高坏である。20は屈曲部の稜がやや突出して垂下する。22も屈曲部の稜は鋭いが突出することはなく、口縁部の外反度と伸びは20よりも強い。いずれもラップ状に開く脚部を持ち、20は径5mmの透孔を4箇所穿孔する。24は鋭い稜が若干突出し、口縁部内の伸びおよび外反度はこの中であって最も強い。端部は繊細な先細りを呈する。21は水平な底部から垂直に短い口縁部がつき、内・外面に丁寧なミガキを施す。極めて小片のため器種は不明であるが、小型高坏の類の可能性はある。23は小型高坏の坏部である。屈曲部の稜は鋭く若干垂下し、端部をナデ上げる手法はこのタイプにあっては古相を示す。25は有段鉢形の高坏の坏体部である。内面の屈曲点は外面のそれとほぼ



第29图 7号住居 (1/80)



第30图 7号住居 出土土器① (1/3)



第31图 7号住居 出土土器② (1/3)

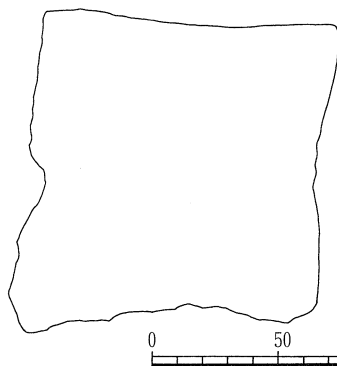
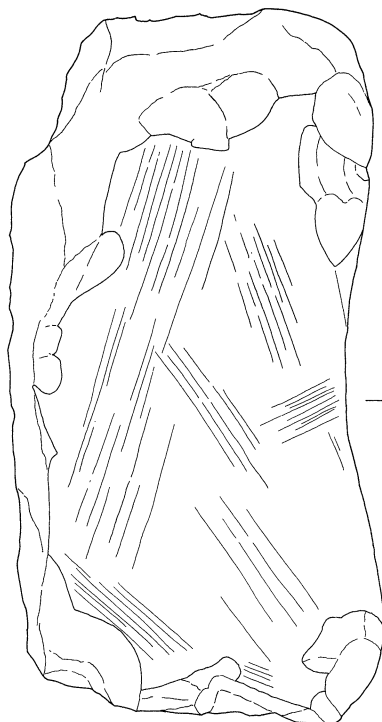
同じ位置にある。26は中型の器台の受け部である。やや外反ぎみに伸びる体部を強く上方に弯曲させ、先細りの口縁部を形作る。類例は管見にないが、竹生野遺跡第8号土坑出土品が弯曲の度合いは弱いものの類似タイプとしてあげられる。27は裾部がラッパ状に開く器台の脚部である。



第32図 7号住居
出土遺物 (1/2)

《その他の遺物》

第32図は横型の石匙である。刃部は片面からのみの加工であり、裏面は基部を除いて自然面を残している。つまみ部の作り出しが不十分であり、石匙とするにはやや難点があるがここでは一応石匙として扱った。8号住居との切り合い部分よりの出土であり、その過程での混入品と思われる。第33図は大形のほぼ直方体を呈する砥石である。実測図上の上・下面を除く4面すべてに使用痕が認められ、特に下面の凹みが著しい。



第33図 7号住居 出土遺物 (1/3)

8号住居

《遺構》 (第34図)

調査区中央やや西側、5号住居と7号住居の間に位置し両住居及び47号・48号・49号土坑に切られている。本住居は同一地点で拡張されており新しい時期を8号-I、古い時期を8号-IIとして報告したい。8号住居-Iの平面は円形であり径は約7m、床面積は約37㎡と想定している。検出時の壁高は10~15cmを測る。壁溝は検出されなかった。P1~P3を支柱穴と考えている。径は30cm~40cm、深さP1・45cm、P2・30cm、P3・40cmである。柱間はP1~P2・2m、P1~P3 2mである。柱穴はいずれもII住居の壁と接している。現場では認識していなかったが、P7の直上に貼床が無いことやP7覆土上面の掘り込みは、I住居に地床炉の存在が想定される。床面は破線内が固く締まり貼床されていた。床面のレベルは14.2m前後である。8号住居-IIは不整な円形を呈し、径は3.4mを測る。床面積は9㎡である。壁高はI住居床面まで20cmである。壁溝は無い。支柱穴はP4~P5の3個を検出している。径はほぼ

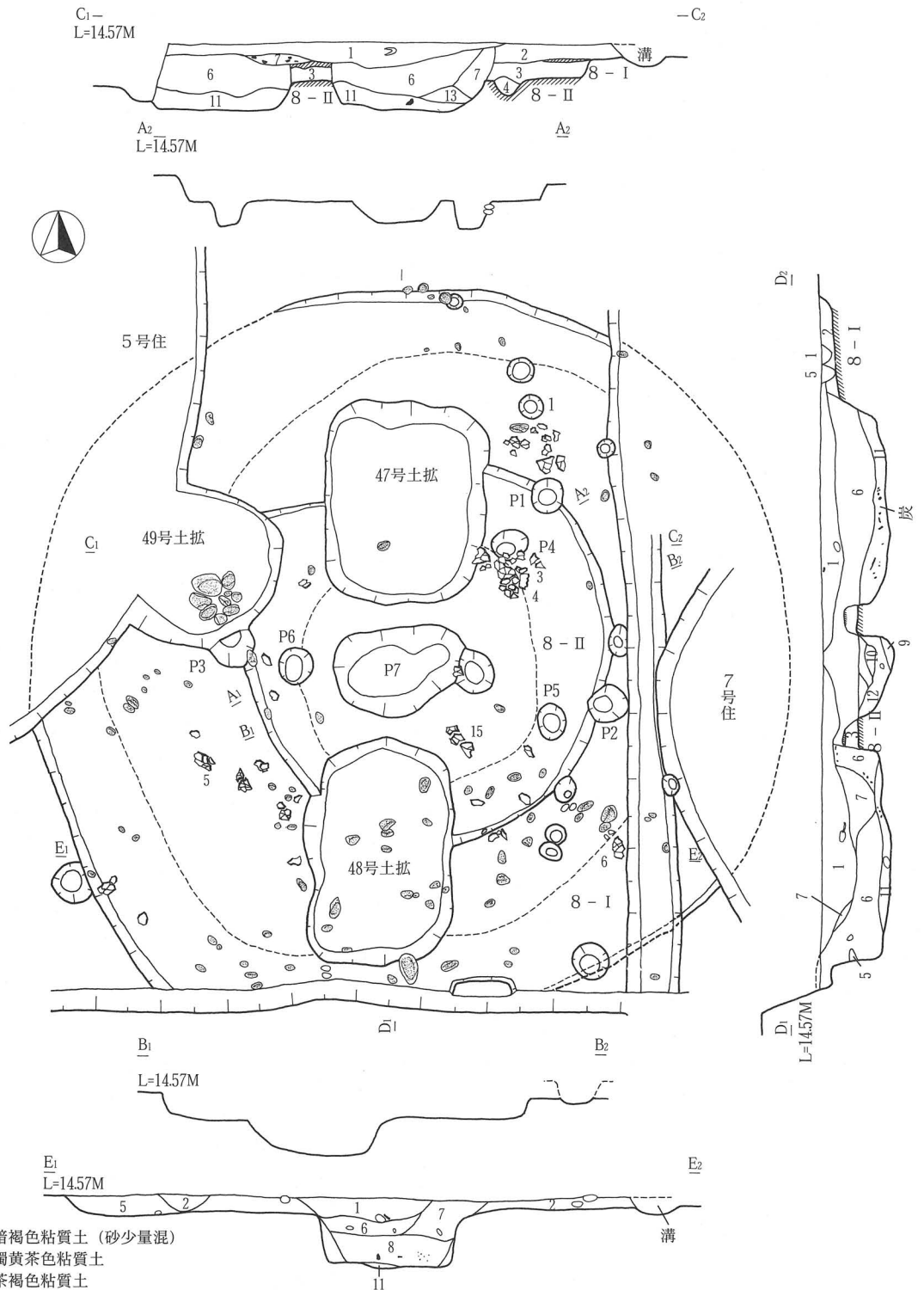
30cm、深さP4・26cm、P5・30cm、P6・24cmである。壁からの距離は、P4・60cm、P5・40cm、P6・45cmである。柱間はP4～P5・1.65m、P4～P6・2.25mである。またI住居主柱穴P1～P3はP4～P5の50～60cm外側に対応して位置する。住居中央に楕円形を呈す土坑状のP7が位置し、大きさ120×80cm、深さ30～35cmである。覆土は炭化物が多く混入する黒色粘質土であり、炉跡と考えられよう。床面は主柱穴で囲まれる内側が貼床され固く締まっている。床面のレベルはほぼ14.0mである。

《遺物出土状況》

8号-I床面からは、1～6・15が出土している。15の土器の一部は床面レベルより約10cm低いP7覆土より出土した。前述のとおり8号-IにP7的遺構の存在を示す要因のひとつであろう。8号-II出土遺物としてP7出土の13、14を考えていたが、15の事例もあり明確にはできない。

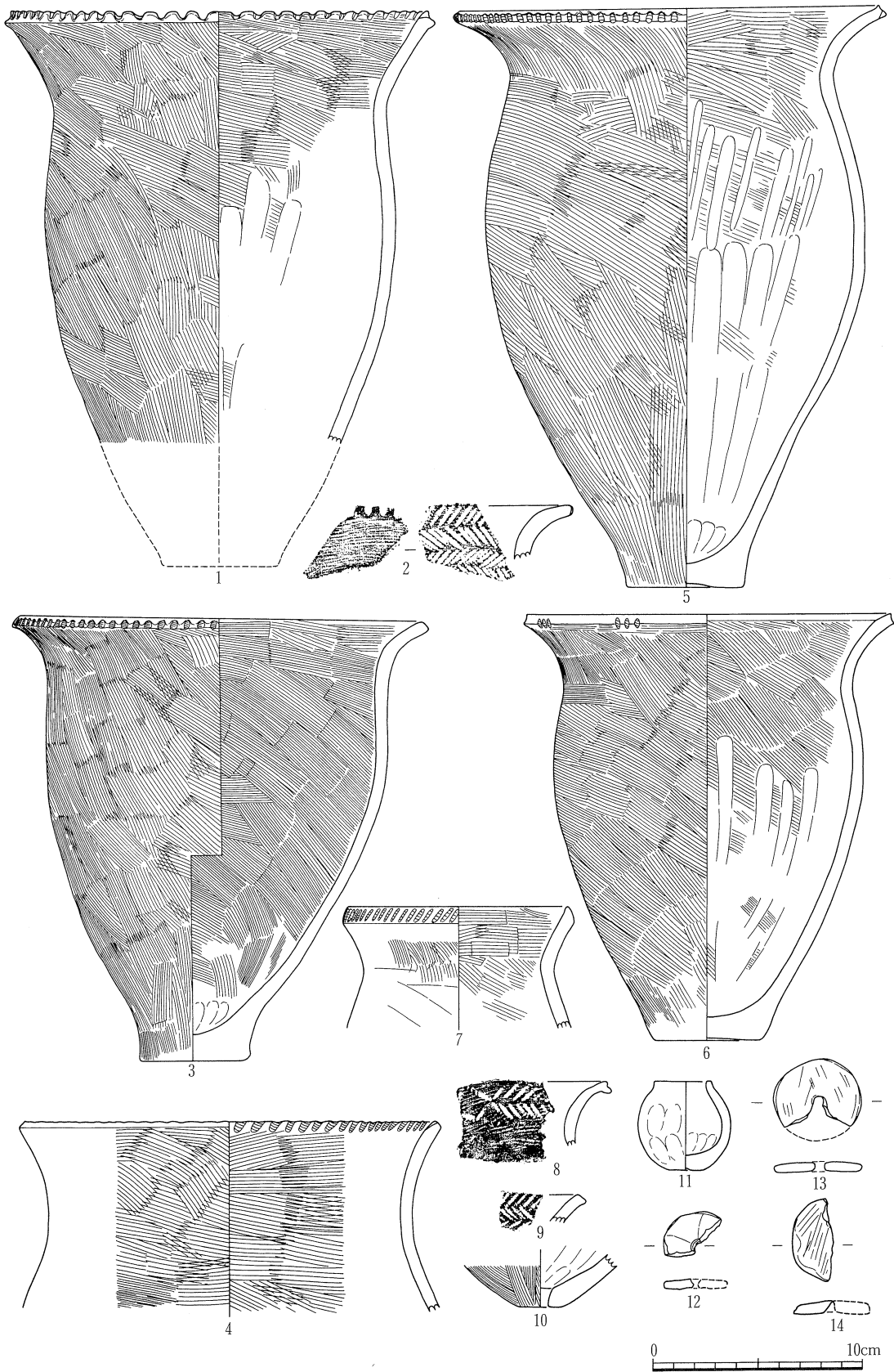
《出土遺物》（第35・36図）

1～6はいずれも甕である。1は底部を欠いているが中型の甕であり、頸部から直線的に立ち上がる口縁部に外反は見られない。一旦成型した口縁部上面に粘土帯を貼付し、両側からつまんでナデを施し略三角形に仕上げた口唇部に内側から細いヘラ状工具によるキザミを施す。そのため端部は小波状を呈する。櫛描文等による加飾は見られず胴部内面下半はハケ調整の後ナデ上げてハケ目を消している。2は甕の小口縁部片である。強く外反する口縁部内面に櫛状工具による斜行刺突文を現状で4列施し、綾杉文を形成する。端部外面は面取りをした後下からハケ状工具によるキザミを施している。3はやや小型の甕である。短く外反する口縁部の端部を面取りし、ハケ状工具によるキザミを下からやや斜行させて巡らせる。内・外面ともにハケ調整を施し内面にナデ上げは見られない。また頸部という意識も薄いようである。4は胴部最大径が口径をやや超えると思われる甕である。肩部より緩く外反して伸びる口縁部端部を面取りし、内面にハケ状工具によるキザミを施す。肩部以下を欠いており全体の器形は不明であるが3にも増して頸部という意識が薄い。5は口縁部が大きく外反する中型の甕である。端部をつまみ上げぎみに面取りし、下からハケ状工具によるキザミを施している。胴部内面はハケ調整の後ナデ上げによりハケ目を消している。6はくの字状の口縁を呈するやや小型の甕である。底部より一旦外反することなく胴部に続くプローションをしており、端部を上下からつまんで面取りし3条1組のキザミを間隔をあけて下から施す。口縁部の遺存状態が悪く全周での数はわからない。胴部内面はハケ調整の後やはりナデ上げによってハケ目を消しているが、少々雑である。7は小型の壺である。胴部はあまり張らず、くの字状をなす口縁部の外側を上方につまみ上げ風に面取りしてハケ状工具によるキザミを密に施す。外面頸部に若干ハケ調整の痕跡を認めるが、口唇部下端および肩部はナデによってハケ目を消している。また内面はハケにより調整するが、特に頸部以上には横ハケを施している。8・9は内面に櫛状工具による綾杉文を持つ口縁部片である。8は端部を下方につまみ出して突出させ、ヘラ状工具によるキザミを施す。小片ではあるが綾杉文がちょうどその向きを変える部位にあたり接点はX状をなしているが、図上左側では変換した向きに従わず、再び右に開く形態をとるため略菱形を呈する。また櫛歯の刺突はともに下から上へ刺き上げてい



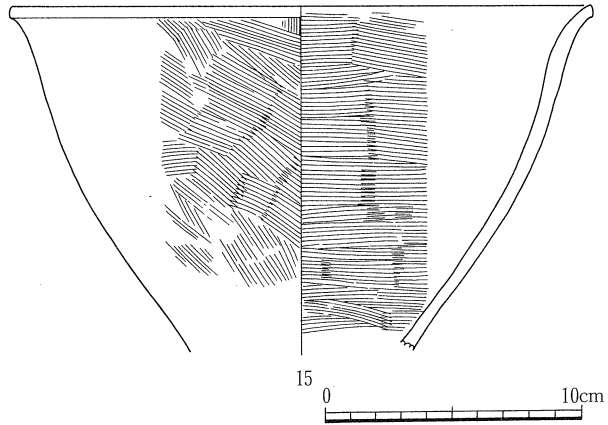
1. 暗褐色粘質土 (砂少量混)
 2. 濁黄茶色粘質土
 3. 茶褐色粘質土
 4. " (地山混)
 5. 茶褐色砂質土 (地山混)
 6. 暗茶褐色粘質土 (炭化物少量混)
 7. " (炭化物混)
 8. " (炭化物、地山少量混)
 9. 灰色粘質土
 10. 灰茶色粘質土
 11. " (炭化物混)
 12. 黒灰色粘質土 (炭化物混)
 13. 焼土
- ▨ 貼床

第34図 8号住居 (1/60)



第35图 8号住居 出土土器① (1/3)

る。9は極めて小さい端部片である。上下からつまむナデで面取りし、綾杉文は現状で3列まで確認できる。10は底部穿孔土器である。11は完形のミニチュア土器である。内面に初圧痕が見られる。12～14は紡錘車である。ともに破損した土器の破片を流用したものでろう。15は口縁部が緩く外反する鉢である。端部は外にむかって面取りされキザミ等は施されない。内・外面ともにハケ調整をおこない頸部もはっきりしない。



第36図 8号住居 出土土器② (1/3)

これら8号住居出土土器は弥生時代中期の櫛描文系土器の影響下にあるものである。その特徴を全形がわかる甕型土器について箇条書にすると

1. 胴部最大径が口径を超えるものは見られない。
2. 口縁部がくの字状を呈するものが見られる。
3. 体部内面のハケ調整痕をナデ上げにより消すものが4点中3点見られる。
4. 口縁部にナデを施すものは見られない。端部のキザミは下から施すのが通有である。
5. 底部から胴部への立ち上がり外反しないものが見られる。

となる。これらの編年的な位置づけに関しては土坑出土分も含めて後に1項を設け検討することとする。また、その他の遺物の出土は見られなかった。

10号住居

《遺構》(第37図)

調査区中央西側に位置する。5号住居に南接し、1982年・1983年に検出した。53号・54号土坑に切り込まれている。平面形は隅丸方形を呈するが各辺は直線ではなく弧を描き円形に近い。大きさは6.5×推定6.8m、床面積は約34m²と推定する。壁高は床面より25～30cmを測る。壁溝は幅10～15m、深さ6～10cmであり北東部には見られなかった。この付近は5号住居と同様地山が礫混りの層である。主柱穴はP1～P3である。P4については1982年の検出時に見落としたもので、反省したい。図上では想定し書き加えた。P1は径60～70cm、深さ43cm、P2は径70cm、深さ34cm、P3は径50cm、深さ40cmである。柱間は、P1～P2・2.9m、P2～P3・2.95mである。主柱穴方形配置は若干南東方向へ偏り、壁からの位置は北東壁～P3・1.7m、P1～南東壁・1.6mを測る。住居中央やや南東寄りに2段掘りのP4が位置する。検出時においては1段目北側の掘り方が不鮮明であり実測図では隅丸となっているが、130×120cmの方形状になろう。1段目の深さは6～14cmで南東側が深い。2段目は径80cmの円形で深さは床面より45cmある。このP4中心を通る北39度西

の線を主軸とする。床面は貼床され平面図破線内が固く締まっていた。床面のレベルは中央部がやや高く壁際へ向かい僅かばかり低くなっている。標高14.0~14.05mである。炉跡は不明である。本住居は一旦凹地状に埋まった後中央北東側で凸状に地山質の覆土が検出された。他の住居では見られない埋まり方である。53号土坑掘削時の排土であろうか。

《遺物出土状況》

住居床面より3、9、11、25、28、30、31が第37図同番号の位置より出土した。14~15の土錘は25と同じ位置の床面より出土した。第41図の打製石斧は土器11の近くで床面より出土した。

《出土遺物》(第38~41図)

10号住居はやはりまとまった資料を出土した53号土坑と切り合い関係にあり、検出時にも多くの混乱をきたした。しかしその様相を検討すると混在した土器群の中に1形式以上の隔たりが見られ、報告にあたり再度机上での分類を施した。したがってここで扱う土器中にも53号土坑と同じネーミングをされたものが含まれており、後述する53号土坑にも同じことが言える。なお、それらの別については土器観察表を参照されたい。

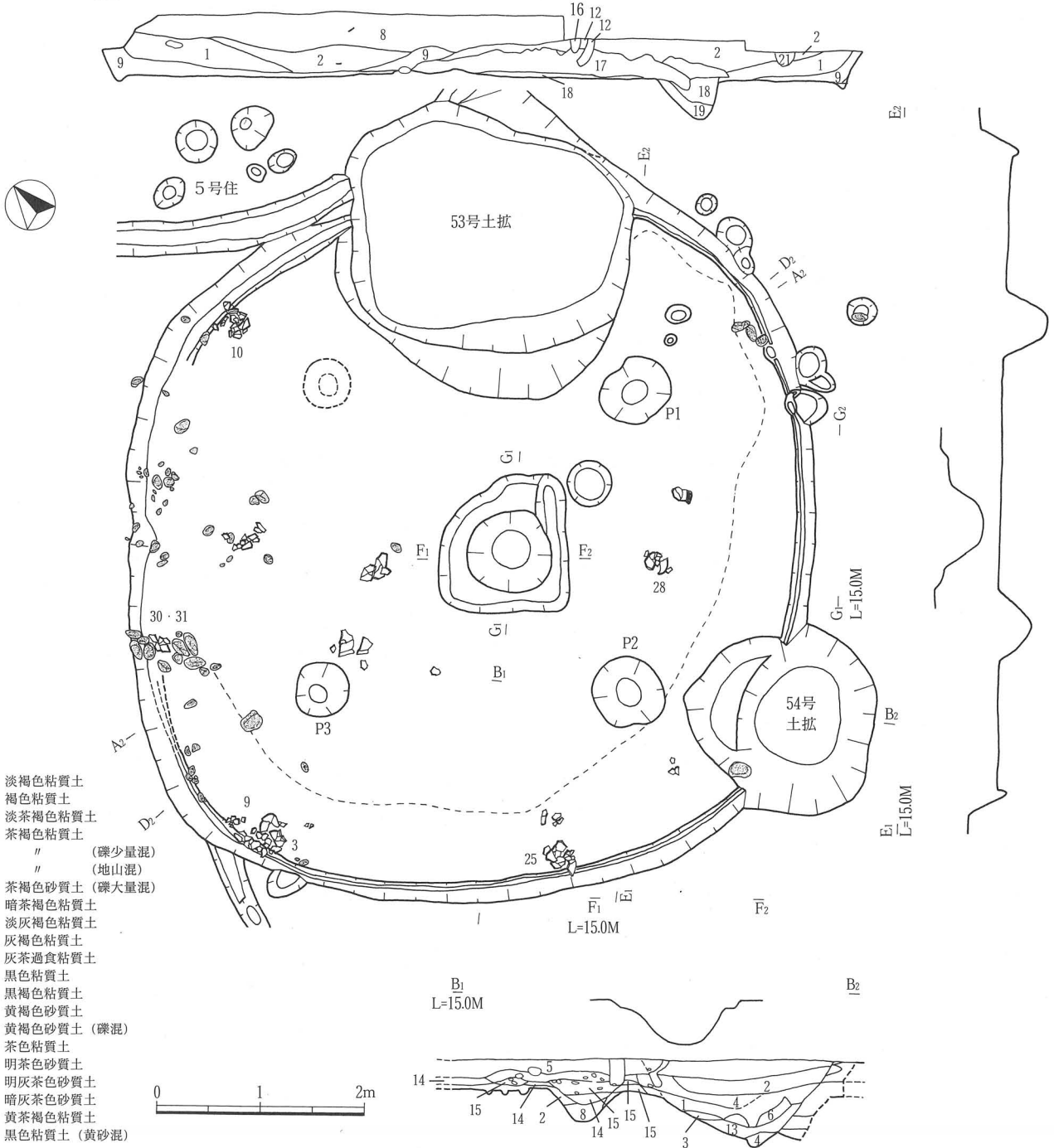
1は大型の断面三角状の口縁部を持つ甕である。端部には3条の擬凹線を施す。2は小型の口縁部断面が三角状をなす甕である。口縁部下端がやや垂下し、外面はハケ状工具を用いたナデを巡らせて浅い擬凹線状をなす。3は中型の完形の甕である。外反する頸部を上方につまみ上げて小さな有段状の口縁を形成する。口縁部内・外面ともナデ、体部内・外面ともにハケ調整を施し、外面に一部ナデを加える。4~6はくの字口縁の甕である。4は小型の完形品であり端部を面取りして1条の凹線を巡らせており、外面のハケ調整は口縁部にまで及んでいる。5は口縁部がやや内湾ぎみに立ち上がり、外傾して面取りを施す。器壁が厚く重厚な作りである。6は球胴を持つ中型の甕であり、口縁端部が反転する。胴部外面はハケ調整の後ナデを施し内面はケズりで調整する。7~9は近江系の受け口状口縁の甕である。いずれも小片であるが、7は端部にほぼ水平な面取りを施し屈曲部の稜をまたぐ形でキザミを巡らす。8は端部の面取りがやや外傾しておりキザミも屈曲部の下に下がっている。9は第1口縁がほぼ水平まで強く屈曲し、端部には面取りは施さない。屈曲部の稜直上に細かいキザミを施す。10は中型の甕の体部であり口縁部を欠損している。胴部外面にハケの後雑なナデ、内面にハケを施し底部は内・外面ともケズリ上げている。11・12はともに無文有段口縁の甕である。11は口径22.4cm、器高36.5cmを測る大型の甕である。摩耗が激しく調整は不明であるが、外面底部には一部ハケ調整の痕跡がみられる。また肩部にハケ状工具による斜行キザミを施す。12は中型の甕である。外反する頸部を上方に屈曲させ短い有段状の口縁部を作り出す手法は3と似ているが、12は体部内・外面ともハケ調整の後ナデによりハケ目を消している。肩部にハケ状工具による斜行キザミを施し、全体の雰囲気としては11の小型品という印象を受ける。13は底径7.0cmを測る大型の底部である。14~17はいずれも土錘である。15を除きすべて床面からの出土である。18・19は無文有段口縁の甕の口縁部片である。18は屈曲の度合いが緩く内面の段も明瞭ではない。20は器台の脚部である。有段となる裾部に8条の擬凹線を施し、外面を赤彩する。21・22はともに脚裾部である。21は返し部に1条の凹線を巡らし、上面にヘラ状工具によるキザミを施す。22は幅の広い返し部上面に細かいキザミを有し

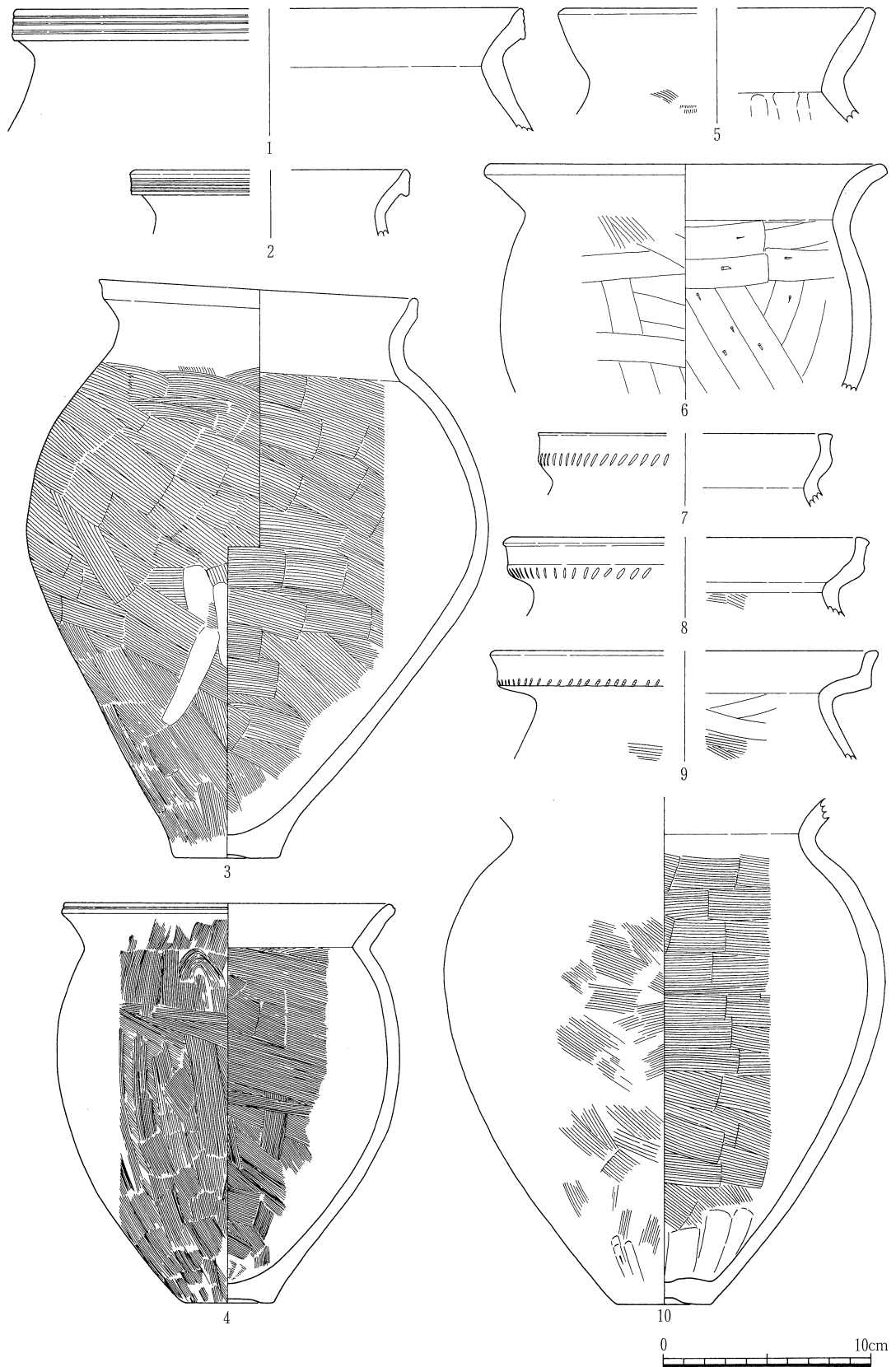
D1-
L=15.0M

-D2

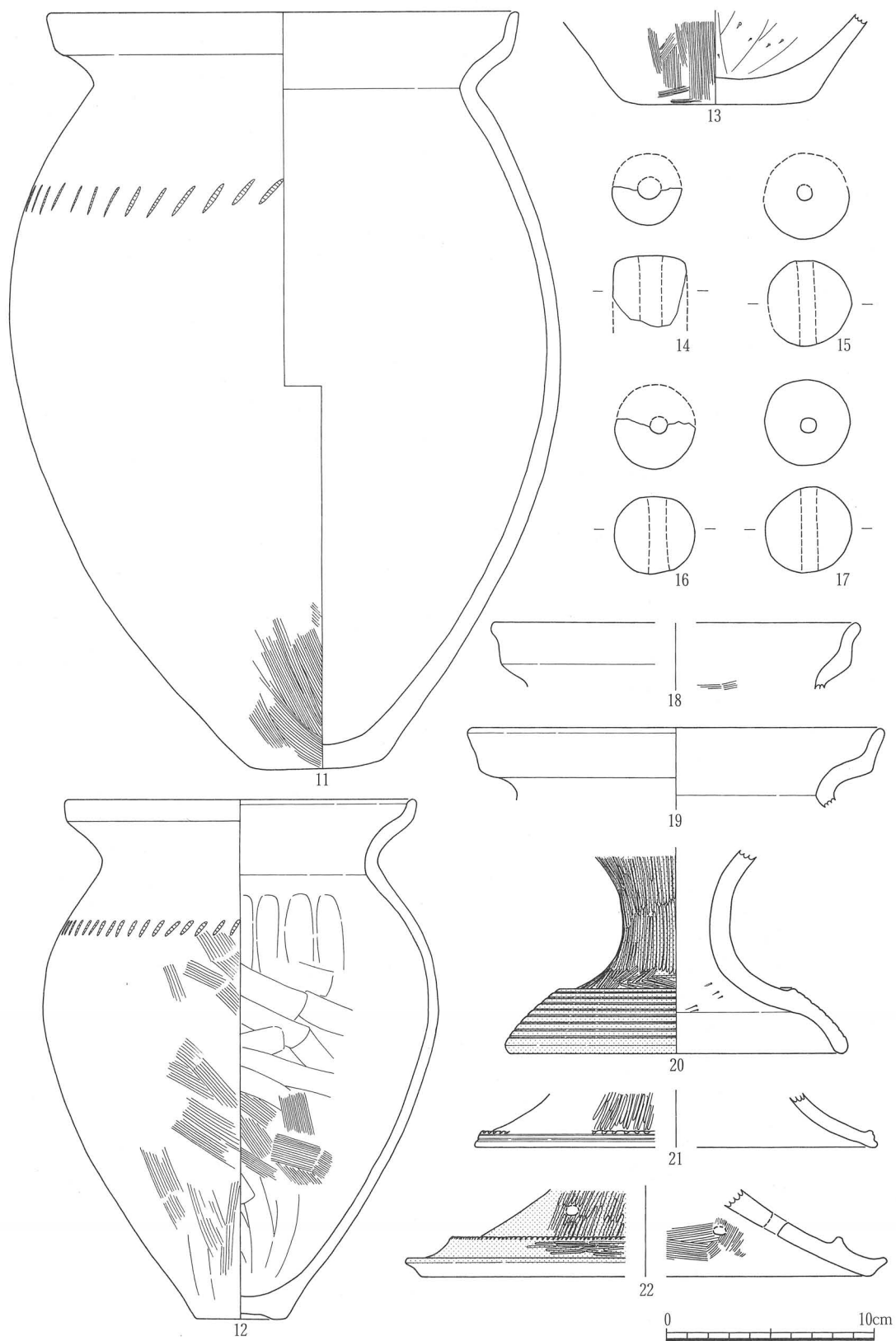
A1-
L=15.0M

-A2

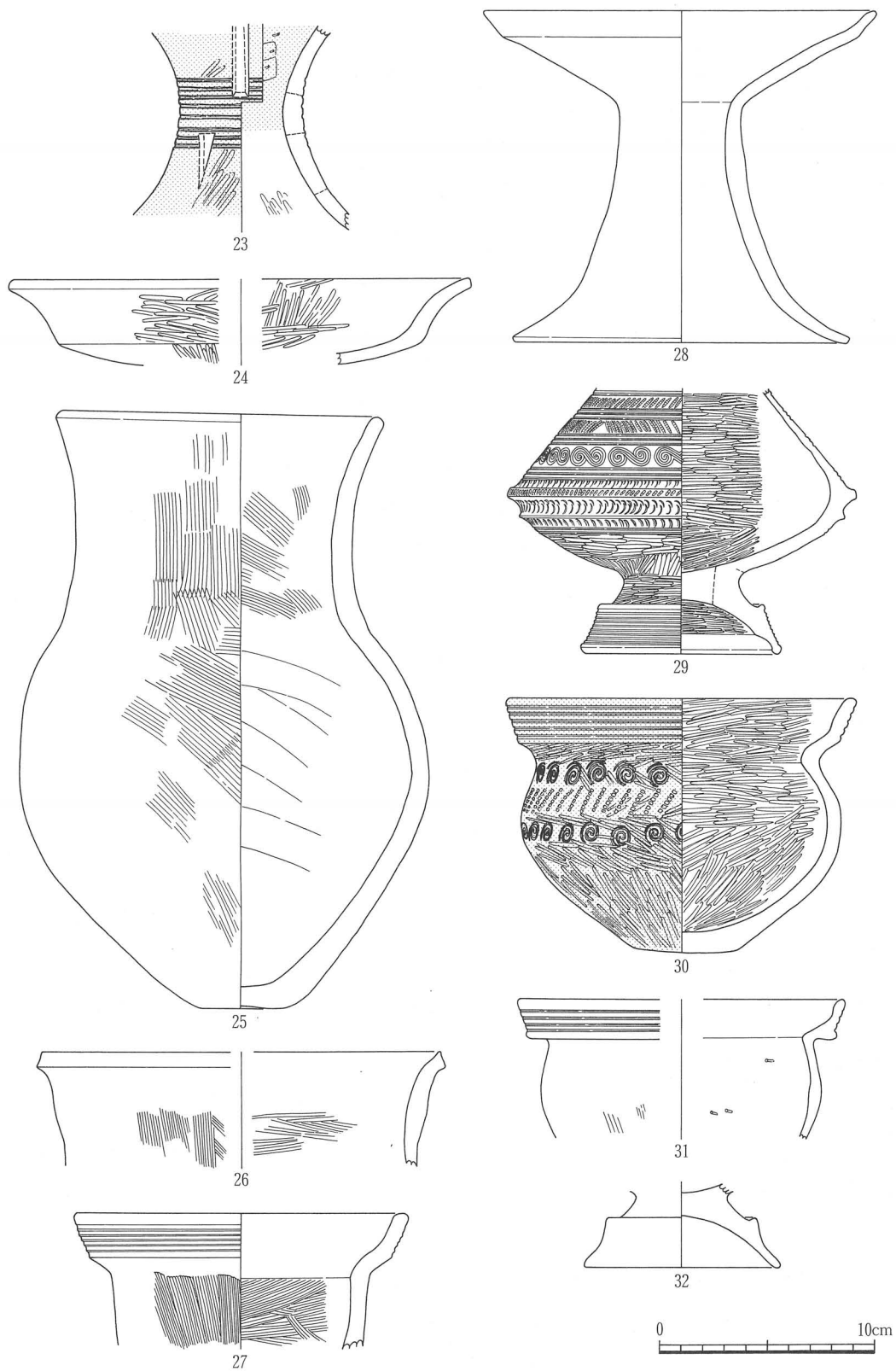




第38图 10号住居 出土土器① (1/3)

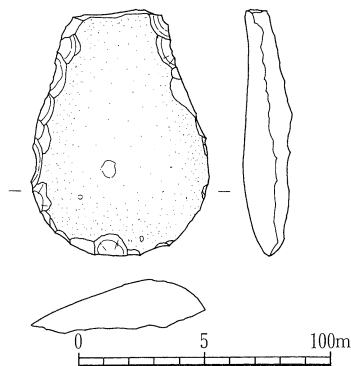


第39图 10号住居 出土土器② (1/3)



第40图 10号住居 出土土器③ (1/3)

外面を赤彩する。23は器台の筒胴部である。中央に8条の凹線が巡り上位に長方形、下位に逆二等辺三角形の透かしを持つ。外面および内面中位までを赤彩する。24はやや小型の高坏である。端部に面取りを施す。25～27は長頸壺の類である。25は口径14.7cm、器高27.7cmを測る完形品である。直立ぎみに外反する口頸部になで肩の胴部を持つ。26は小片のため器種がはっきりしないが、ここでは一応長頸壺の1種として分類した。端部が反転し外傾する面取りをおこなう。27は有段口縁を持つものである。擬凹線は6条施す。28は中型完形の器台である。裾部がラッパ状に開く脚部は端部近くでさらに一段強く屈曲して開き、太い筒胴部に直線的に伸びて端部が弱く上方に屈曲する受け部が付く。調整は内・外面ともに摩耗が激しく不明である。現在の所類例を知らないが、西念・南新保遺跡などに見られる大型器台から派生したものかもしれない。29は口頸部を欠いているが、非常に装飾性に富む台付き装飾壺である。最大径をなす胴部中央の突帯を挟んで上位を3条の沈線で4分割し、上2段に貝殻腹縁による斜行刺突文を施す。その内上側は全周を窺えるわけではないが、現状ではその方向を転じることはなく、下側はほぼ3～4cm間隔で刺突の向きを変えている。3段目はS字状スタンプ文を巡らせ4段目は2個一對の爪型押圧文を施す。中央の狭い突帯には櫛状工具による斜行刺突文、下位は強いナデにより突出させた稜の上下に2列の爪型押圧文を巡らせ最下位を2条の沈線で締めくくる。有段状をなす脚部には9条の擬凹線を施す。内・外面ともに丁寧なミガキで調整し、器壁も薄く非常に精緻な作りである。30は擬凹線を持つ有段口縁の完形の鉢である。肩部に歯数6本を数える櫛状工具による刺突文を挟んで上下に渦巻状スタンプを押捺しており、櫛歯状刺突文は途中で向きを変えることはない。外面全体に赤彩を施している。31は同じく擬凹線を持つ有段口縁の鉢であるが加飾は見られない。32は脚台部であり、後に述べる54号土坑出土の装飾壺（第110図）と同一個体である。擬凹線は持たないが、形態は29とよく似ている。



第41図 10号住居 出土石器 (1/3)

《その他の遺物》

当住居からは土器の他に打製石斧が1点出土している。基部の幅が刃部よりも狭くなるものであり、表裏ともに自然面を多く残し刃部および胴部縁辺への加工は最小限にとどめている。特に実測図上の表面のカーブは原石の形態を想起させている。

11号住居

《遺構》（第42図）

調査区西側に位置し、北東の10号住居とは3.4m、東の13号住居とは6.5m、南の12号住居とは5m離れる。1981～1983年にわたり検出した。27号溝に切り込まれている。1981年検出時は重機での掘削が深くなりすぎてしまい壁上端部は不明である。こういう状況なので隅丸方形を呈する平面形の大きさは推定6.7×6.7mである。床面積は30m²である。壁高は床面から30cm、壁溝は幅30

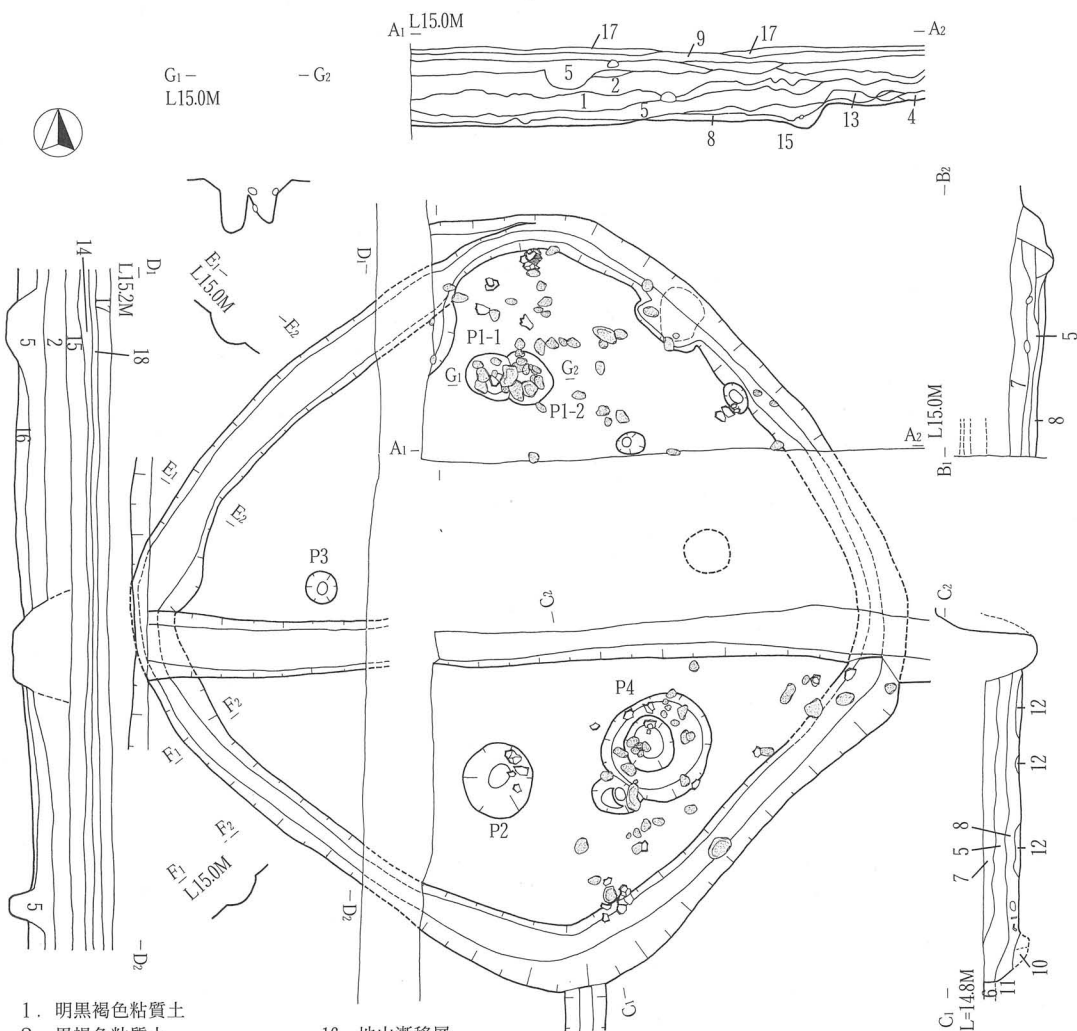
～50cm、深さは床面より5～10cmである。支柱穴は4個が方形に配置されよう。P1-1、P1-2、P2、P3を検出しているが北側の支柱は、P1-1かP1-2か断定しがたい。深さはP1-1・55cm、P1-2・50cm、P2・65cm、P3・60cmである。柱間はP1-1～P3・2.7m、P1-2～P3・2.6m、P2～P3・2.6mである。住居南東壁側中央に壁溝より30cm離れ2段掘りのP4が位置する。平面は円形に近い楕円形であり、大きさ1.1m×1m、2段目は径50cmを測る。深さは床面から1段目10cm、2段目41cmである。P4の中心を通りP2～P3と平行な北40度西の線が主軸となろう。床面は貼床され固く締る。炉跡は不明である。床面のレベルは14.1mである。

《遺物出土状況》

覆土下層からの出土土器は5・6・8・9・13・18・20・29・33である。28はP4から出土した。

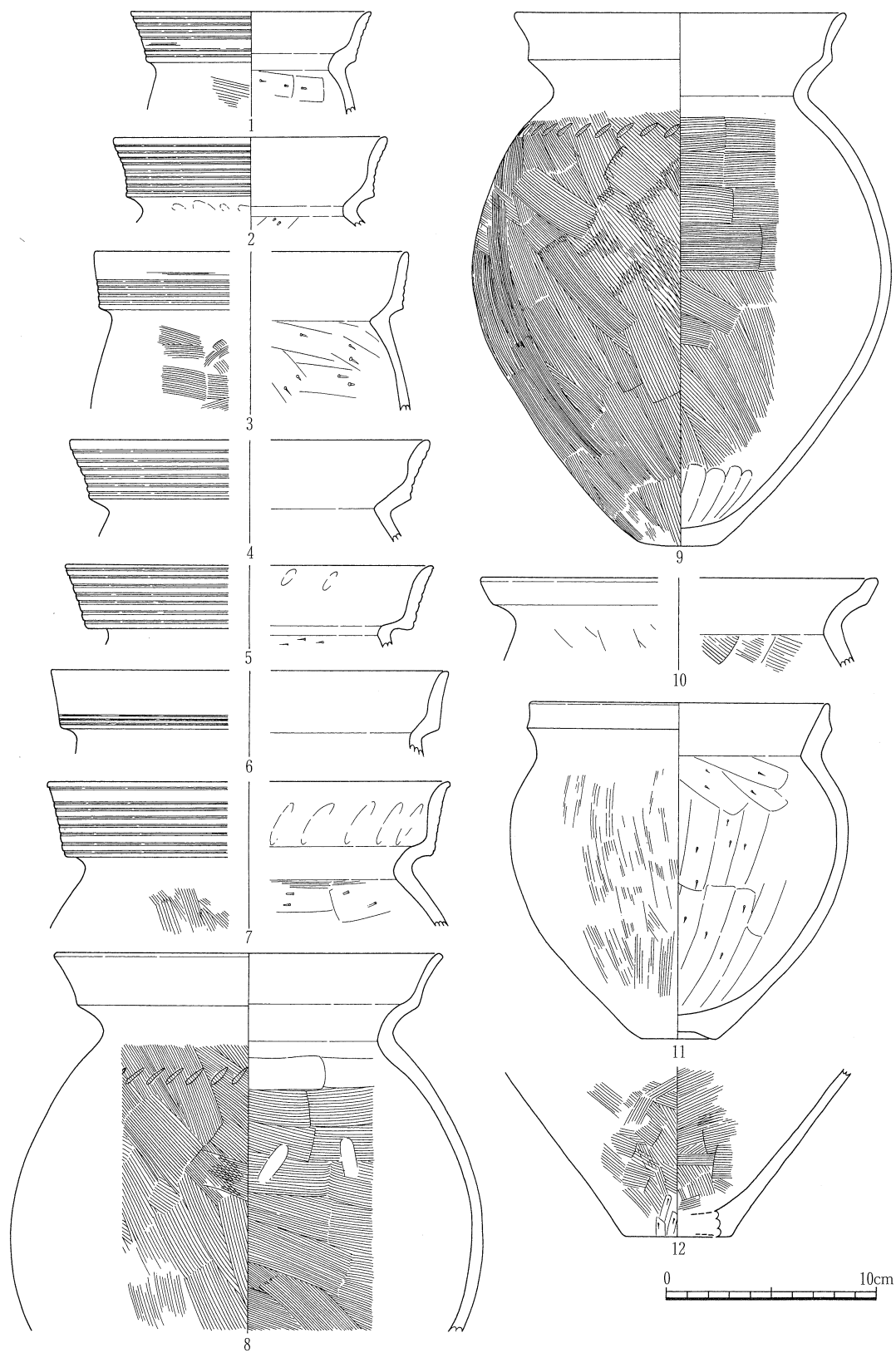
《出土遺物》（第43～45図）

1・2は小型の擬凹線を有する有段口縁の甕である。外反する口縁部に1は7条、2は8条の擬凹線を施している。3～7は中型の擬凹線を有する有段口縁の甕であるがすべて口縁部のみの小片であり、まとまった形での出土はない。3は直立する口縁部に5条の擬凹線を施し上半はナデで調整している。6も同じく口縁部上半をナデ調整しているが擬凹線は下端に3条施されるのみである。8・9は中型の無文有段口縁の甕である。8は胴部下半を欠いているが9よりもひとまわり大きい。これら2点はいずれも口頸部のナデが頸部下にまでおよび、第1口縁がやや長めであることに特徴がある。10は無文の有段状口縁を持つ甕である。11は小型完形のくの字口縁の甕である。端部を強いナデによって先細りに仕上げ、外面は稜を持つため一見有段口縁風に見える。口頸部内・外面をナデ、体部外面をハケ後ナデ、内面をケズリで調整する。12は直線的に伸びる体部を持つ底部片である。内・外面ともに細かいスパンのハケ調整を施し、外面底部は短くケズリ上げる。13・14は長頸壺の類である。13は外反する口頸部の端部を短く屈曲させて小さな有段状の口縁部を作る。器壁は薄い。14は重厚な口縁部がしっかりとした有段口縁をなしており擬凹線が7条巡る。屈曲部下に強いナデを施して凹ませている。15は偏球状の体部を持つと思われる有段口縁広口壺である。内・外面ともに丁寧なミガキを施している。16はかなり胴の張る体部を持つ底部である。17は中型の短いくの字口縁を持つ鉢である。端部は外傾して面取りを施す。18～21は小型のくの字口縁の鉢である。18は内面の屈曲部が鋭く、端部に面取りを施す。19は屈曲の度合いが緩く外傾した面取りは17の手法に類似している。端部に2条の沈線が巡り胴部がやや張る丸い体部を持つ。20は胴部が張らずヘルメット状の体部を持つ。内面の屈曲部が18と同様鋭いが、幅の広い端部には2条の沈線を施している。21はこれらとは異なり口縁部がいわゆる単純くの字の形態をとり、胴部も丸く張る。22・24は脚台付きの底部である。22はやや大ぶりの底部であり重厚な作りの脚台を持つ。端部に面取りを施し弱い返し風に仕上げる。24は小型のもので繊細な作りであるが、脚台部内面に施されたナデはやや雑なままである。23は体部小片である。外面に現状でS字状スタンプ文を3段施している。25・26は高坏の坏部小片である。25は外反する口縁部の端部が反転し、上方に面を持つ。26は有段鉢形を呈する。内面の屈曲点は外面のそれとほぼ同じ位置にある。27～33はいずれも脚部および脚裾部である。27は高坏の脚部であり裾部付近で大きく外方へ開く。28は外面の返し上面までを赤彩する大型の裾端部である。29は外面に

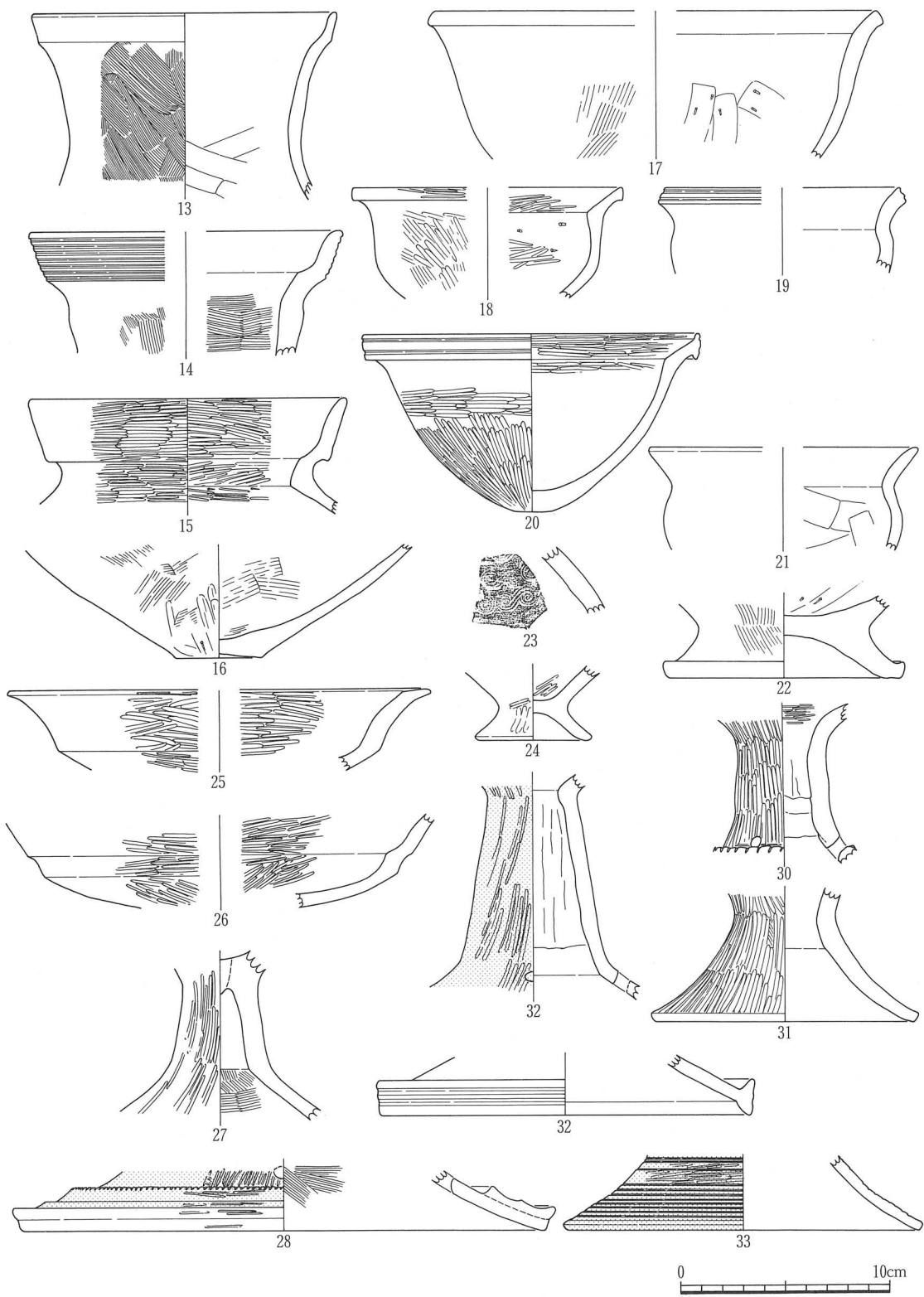


- | | |
|-------------------|-----------|
| 1. 明黒褐色粘質土 | 16. 地山漸移層 |
| 2. 黒褐色粘質土 | 17. 耕作土 |
| 3. 明褐色粘質土 | 18. 床土 |
| 4. 褐色粘質土 | |
| 5. 茶褐色粘質土 I | |
| 6. " (砂粒混) | |
| 7. 暗褐色粘質土 (砂粒混) | |
| 8. " (炭化物少量混) | |
| 9. 明灰色粘質土 | |
| 10. 灰褐色シルト | |
| 12. 灰茶褐色粘質土 (地山混) | |
| 13. 明茶褐色粘質土 | |
| 14. 黒色粘質土 | |
| 15. 茶褐色粘質土 II | |

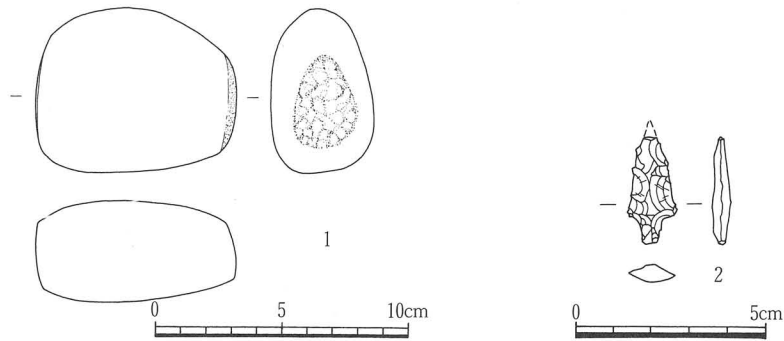
第42図 11号住居 (1/60)



第43图 11号住居 出土土器③ (1/3)



第44图 11号住居 出土土器② (1/3)



第45図 11号住居 出土石器・(1-1/3) (2-1/2)

赤彩を施す器台の筒胴部である。裾部付近で強く外方に開き屈曲部下に穿孔をおこなう。30は段部を有する筒胴部である。上面に穿孔をおこない段部にはキザミを施す。31はラッパ状に開く左脚の筒胴部である。32は端部に垂直な返し風の面を持ち、2条の凹線を巡らせる。33は外面に赤彩を施す裾部であり現状で11条の擬凹線が見られる。

《その他の遺物》

1は磨石である。実測図上の右側面に敲打痕を持ち、磨面は他の全面にわたる。2は有茎の石鏃である。先端を欠損しており、表裏ともに押圧剥離によって刃部を成型している。

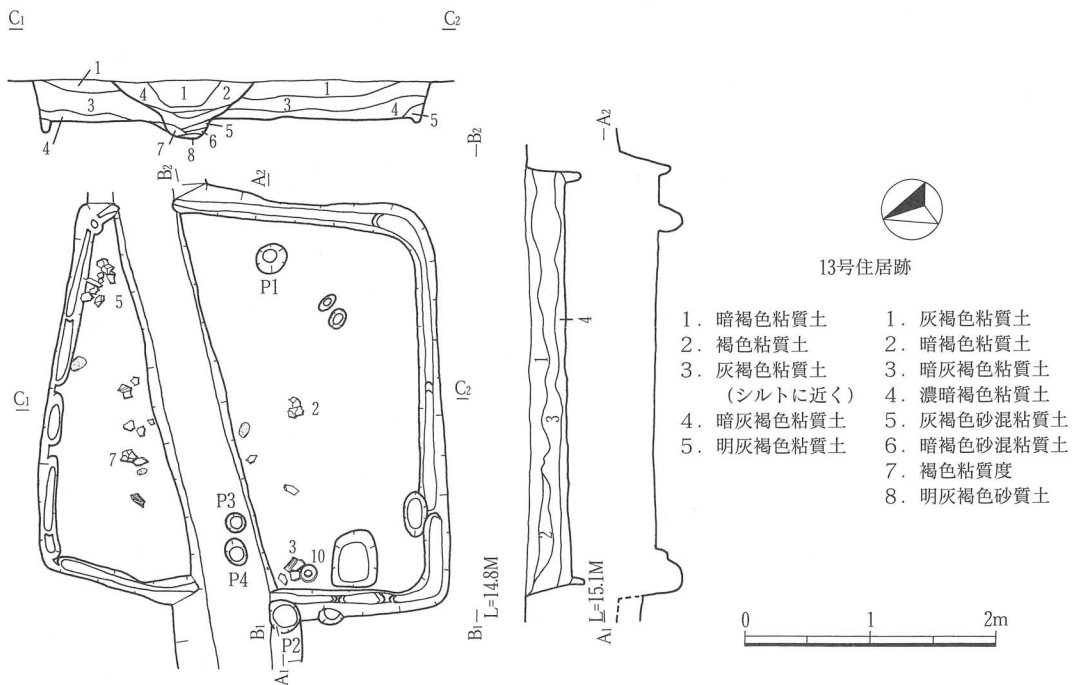
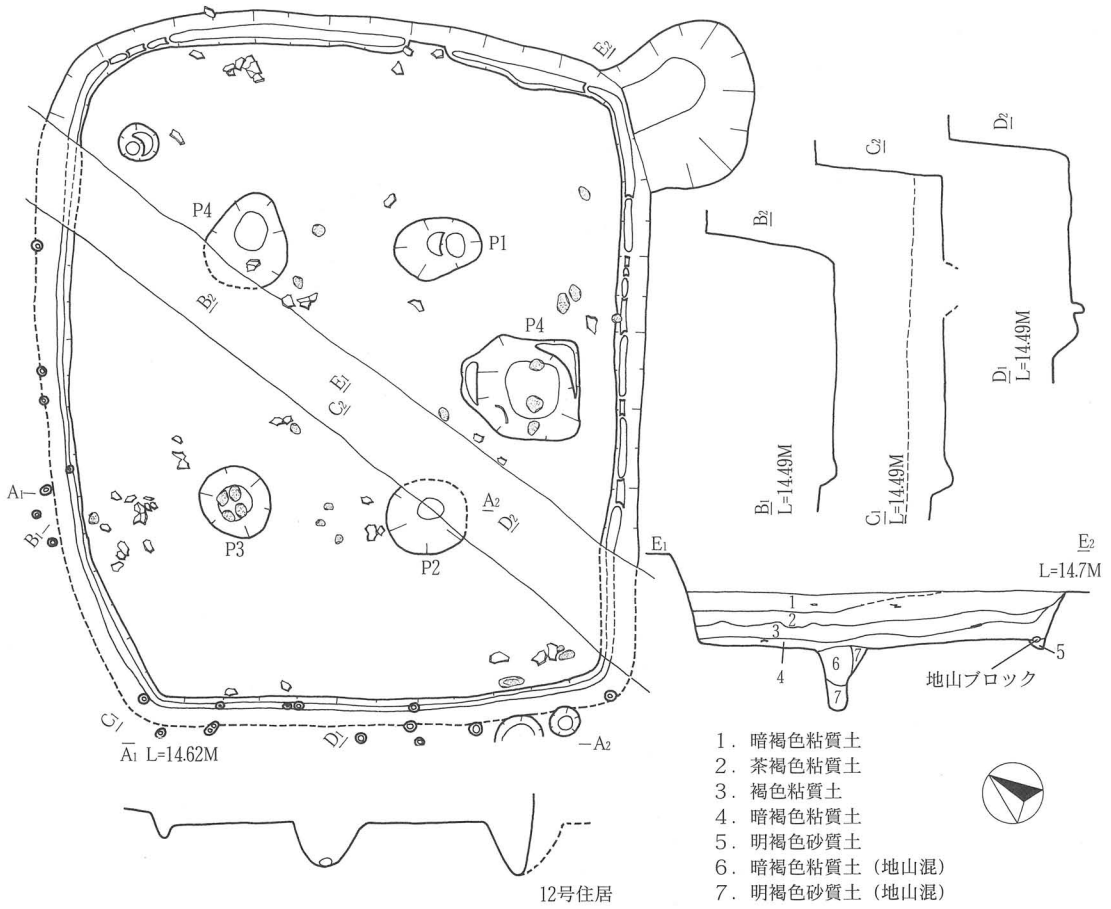
12号住居

《遺構》 (第46図)

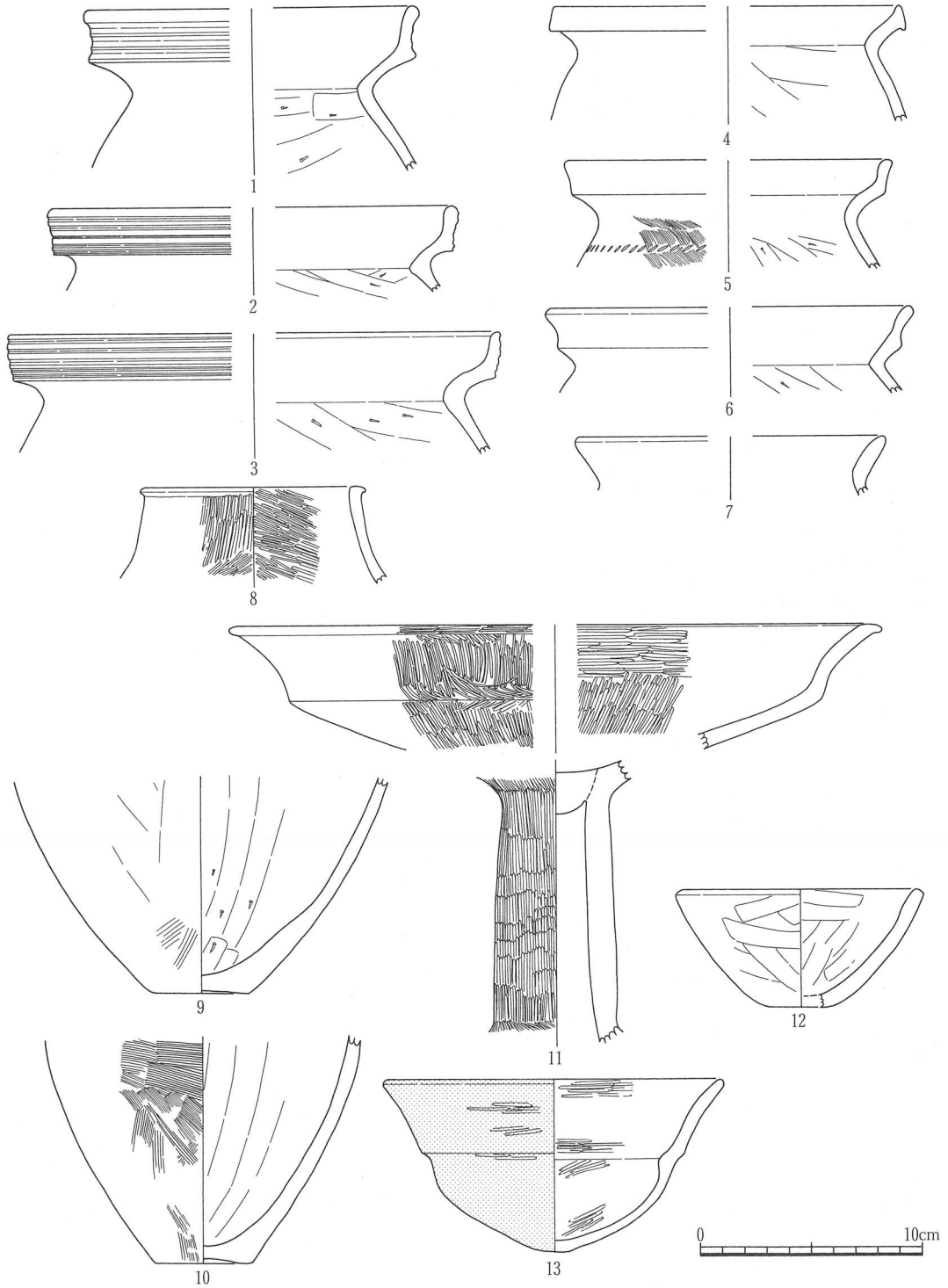
調査区西南に位置し、1981・1984年に検出している。西側約1/2は1981年調査部分であり、11号住居同様壁上端部は不明である。平面形は隅丸長方形を呈し推定5.6m×4.7mを測る。床面積は21㎡である。壁高は床面から30～35cmである。壁溝は幅15cmで巡る。1984年調査時に壁溝底のレベルが凹凸を繰り返す形状で検出された。南東壁の凹部分の長さはほぼ50cmであり、北東壁の凹部分は長い50cmほどの長さで僅かの高低差を有している。コーナー部では凹及び凸部は15～20cmの長さとなっている。土留の板材の痕跡であろうか。壁溝底の凹凸の床面からの深さは凸部7～8cm、凹部10～16cmを測る。支柱穴はP1～P4の4個が長方形に配置される。径はP1・40×70cm、P2・65cm、P3・55cm、P4・50～70cm、深さはP1・50cm、P2・40cm、P3・35cm、P4・47cmを測る。支柱穴間は、P1～P2・2.1m、P2～P3・1.6m、P3～P4・2.2m、P4～P1・1.6mである。南東壁中央の壁溝から30cm離れ2段掘りのP4が位置する。台形と方形を接合した平面形を持つ。大きき95×80cmである。1段目を住居の内と外方向側に有し、深さは内側9cm、外側15cmである。2段目は床面から深さ32cmを測る。P4中央を通る北33度西の線が主軸となろう。床面は貼床され固く締る。床面レベルは14.0mである。P4からは6、10が出土し、他の土器は覆土内からである。

《出土遺物》 (第47・48図)

1は有段口縁の小型の甕であり、口縁部外面にヘラ状工具による凹線を3条巡らせている。強

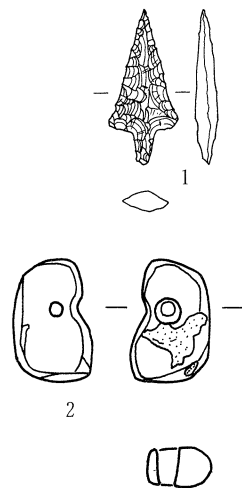


第46図 12・13号住居 (1/60)



第47图 12号住居 出土土器 (1/3)

く屈曲する第1口縁はやや長めであり、端部は断面指頭状を呈する。2は中型の擬凹線を持つ有段口縁の甕である。直立する短い口縁部に5条の擬凹線を施し、端部断面はやはりずんぐりとした指頭状をなす。3は大型の有段口縁擬凹線の甕である。口縁部はやはり短く直立しており5条の擬凹線が巡る。4はくの字口縁の小型の甕であり、端部は跳ね上げ状を呈し下端も垂下する。5は無文有段口縁の小型の甕である。肩部にハケ状工具による斜行キザミを施す。6も小型の甕であり外面に稜を持たせて有段口縁風に見せている。内面に段を持たず端部断面はずんぐりとした指頭状を呈する。7は小型のくの字口縁甕であるが極めて小片であるためそれ以外はわからない。8は無頸壺の類であろうか。体部が若干外へ屈曲し頸部らしきものを形作っており、端部は面取りされ外側に小さく突出する。内・外面ともに丁寧なミガキを施している。9・10はいずれも甕の底部である。11は中型の高坏である。坏底部から外反する口縁部の端部は反転し外方へ小さく突出する。脚部は棒状脚である。12は小型の椀形を呈する鉢である。端部を面取りし、内・外面をナデで仕上げる。13は有段状の口縁をもつ鉢である。外面には赤彩を施している。



第48図 12号住居 出土遺物・
(1-1/2) (2-1/1)

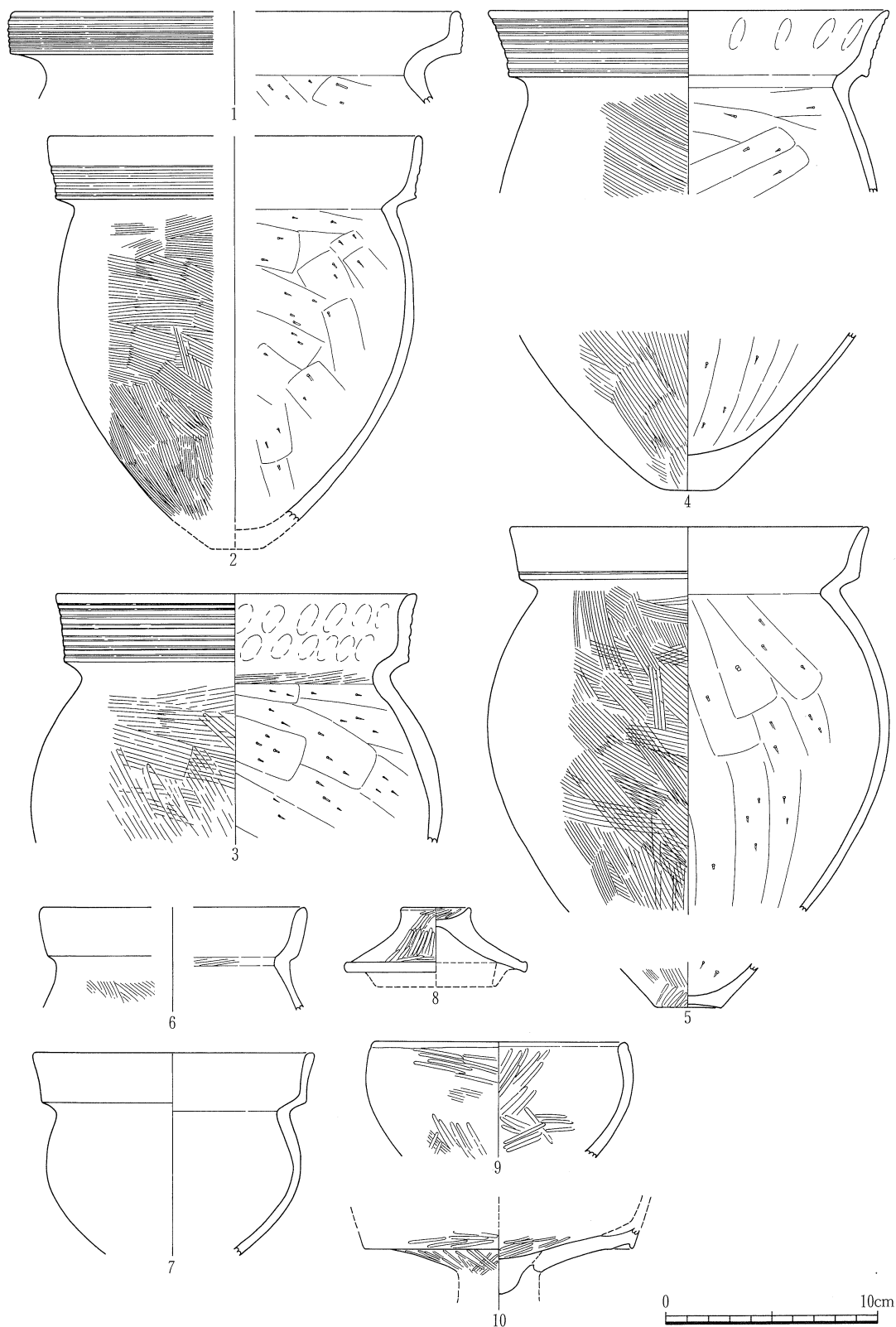
《その他の遺物》

1は有茎の石鏃である。表裏ともに自然面をほとんど残しておらず、細かな押圧剥離によって刃部を成型している。2は硬玉製の勾玉である。断面形は略長方形、平面形はそら豆形を呈し中央部がやや凹む。先端部は上下ともに丸くおさめ、全体に稚拙な作りである。

13号住居

《遺構》(第46図)

調査中央西側に位置する。11号住居と6.5m、3号掘立柱建物と3mの距離を隔て、27号溝に中央部を切り込まれる。平面形は台形を呈し、大きき2.7m×3.2m×3.3m、床面積8m²を測る。壁高は床面より30cm、壁溝は幅7～10cmで、溝底は12号住居と同じ様相の段差を有する。段部の長さは15～90cmと不規則であるが、長さ35～70cmの段が多い。深さは床面から4～14cmである。支柱穴2個の住居と考えられ、1個はP1で間違いのないであろう。一方、対応する部分においてP2～P4の3個のピットを検出している。現場においては壁に彫り込むP2を想定していたが断定できない。位置関係からはP4が妥当であろうか。深さは床面を基準としてP1・20cm、P2・20cm、P3・15cm、P4・15cmを測る。柱間は、P1～P2・2.85m、P1～P3・2.1m、P1～P4・2.35mを測る。柱穴を結ぶ線が、P1～P2は南西壁、P1～P3・P4は北東壁と平行となり興味深い。住居の拡張については判断し得ていない。床面は貼床され固く締まる。床面レベルはほぼ14.1mである。住居の主軸については前述のとおり2つ考えられよう。P1～P2を結ぶ北73度西の線、P1～P3・P4を結ぶ北63度西の線である。炉跡は不明である。



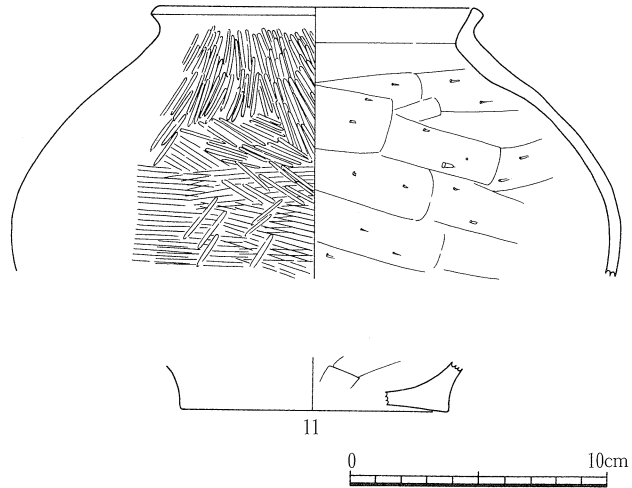
第49图 13号住居 出土土器① (1/3)

《遺物出土状況》

床面より2・3・5・10が出土した。7・11は床面から約3cm浮いた状態で出土している。他は覆土内である。

《出土遺物》（第49・50図）

1～4は擬凹線を有する有段口縁の中型甕である。1はその中でも口径がやや大きいと思われるが、小片のため多少の誤差を考慮しなければならない。強く屈曲する頸部に直立する短い口縁部が付き6条の擬凹線を施す。2は直立



第50図 13号住居 出土土器② (1/3)

する口縁部の下半に擬凹線を4条施し、上半はナデで調整する。3はやや外反ぎみに立ち上がる口縁部に7条の擬凹線を施し、内面には指頭圧痕が2段に巡る。頸部内面にはハケ調整痕がみられる。4は外反する口縁部に7条の擬凹線を有し、内面の指頭圧痕はやや間隔が広い。頸部内面には明瞭な面を持つ。5は無文有段口縁の中型甕であるが、口縁部下端に1条の擬凹線を有する。6・7は小型の無文有段口縁の甕である。6は口縁部の作りがしっかりしており器壁も厚い。7は小さい偏球状の胴部を持ち、器壁が薄く作りも繊細である。磨耗が激しく調整は不明であるが、本例は鉢とした方が妥当かもしれない。8は蓋である。口径に比べてつまみ部径が大きめであり、内面には返しが剥離した痕跡が認められる。9は椀状を呈する口縁部片である。器種は鉢であろうか。10は高坏の坏底部である。屈曲部の下端がやや垂下する。11は壺である。偏球状に大きく張る胴部としっかりした平底をなし、短く屈曲して小さなくの字状をなす口縁端部を面取りする。類例は管見にないが無頸壺との関連も想起させるプロポジションである。

その他の遺物の出土は見られなかった。

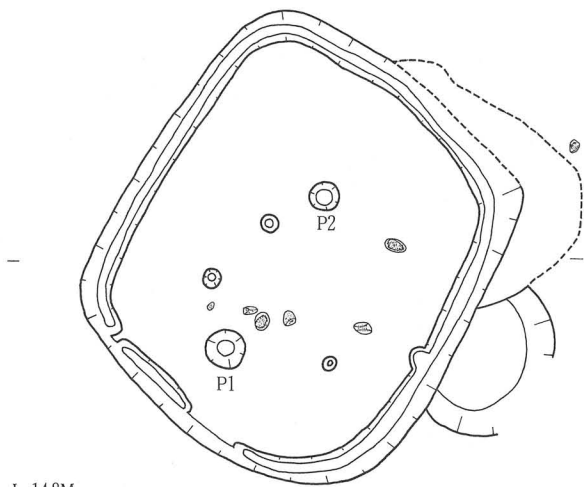
14号住居

《遺構》（第51図）

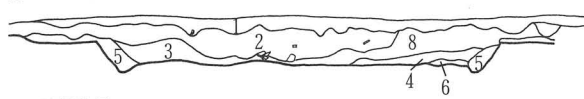
調査区中央部の南端に位置する。13号住居とは4.5mを隔てる。隅丸方形を呈し、規模は3.4×2.9m、床面積6㎡を測る。壁高は床面より15～20cm、壁溝は幅15～20cm、深さ5～10cm。いくつかのピットを検出しているが、支柱穴は不明である。P1は径30cm、深さ15cm、P2は径25cm、深さ5cmと浅い。床面はP1～P2間を直径とした円状に貼床されており、固く締まる。床面レベルは14.25mである。住居主軸は、北56度西の線であろう。多量の土器が出土している。

《出土遺物》（第52～55図）

1は小型の有段風の口縁部を持つ甕であり、端部の断面は三角状を呈する。2～6・9は中型の擬凹線を有する有段口縁の甕である。2は外反する口縁部の下端がやや垂下する。3は直立す

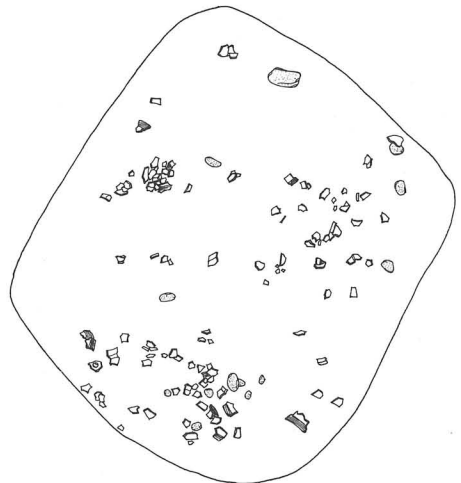


L=14.8M

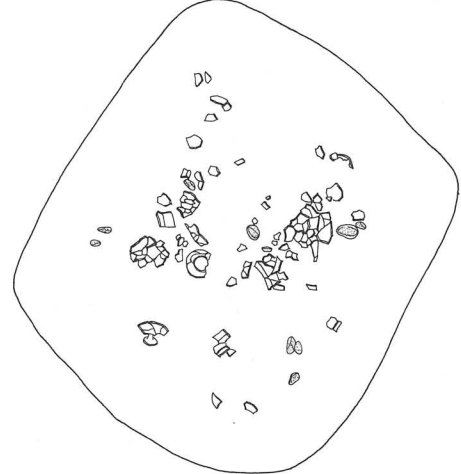


14号住居

1. 黒褐色粘質土 (砂質土少量混)
2. 暗褐色粘質土 (砂質土少量混)
3. 茶褐色粘質土
4. 暗茶褐色粘質土
5. 褐色粘質土
6. 灰褐色粘質土



14号住上層遺物出土状況

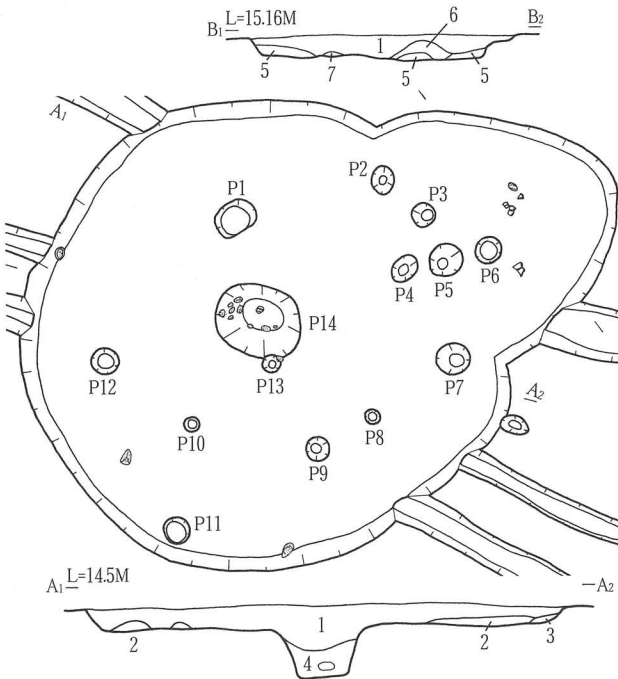


14号住下層遺物出土状況

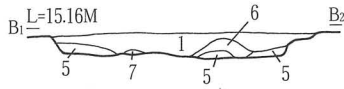


15号住居

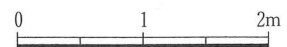
1. 褐色粘質土
2. 明褐色シルト
3. 灰褐色シルト
4. 茶褐色粘質土 (炭化物混)



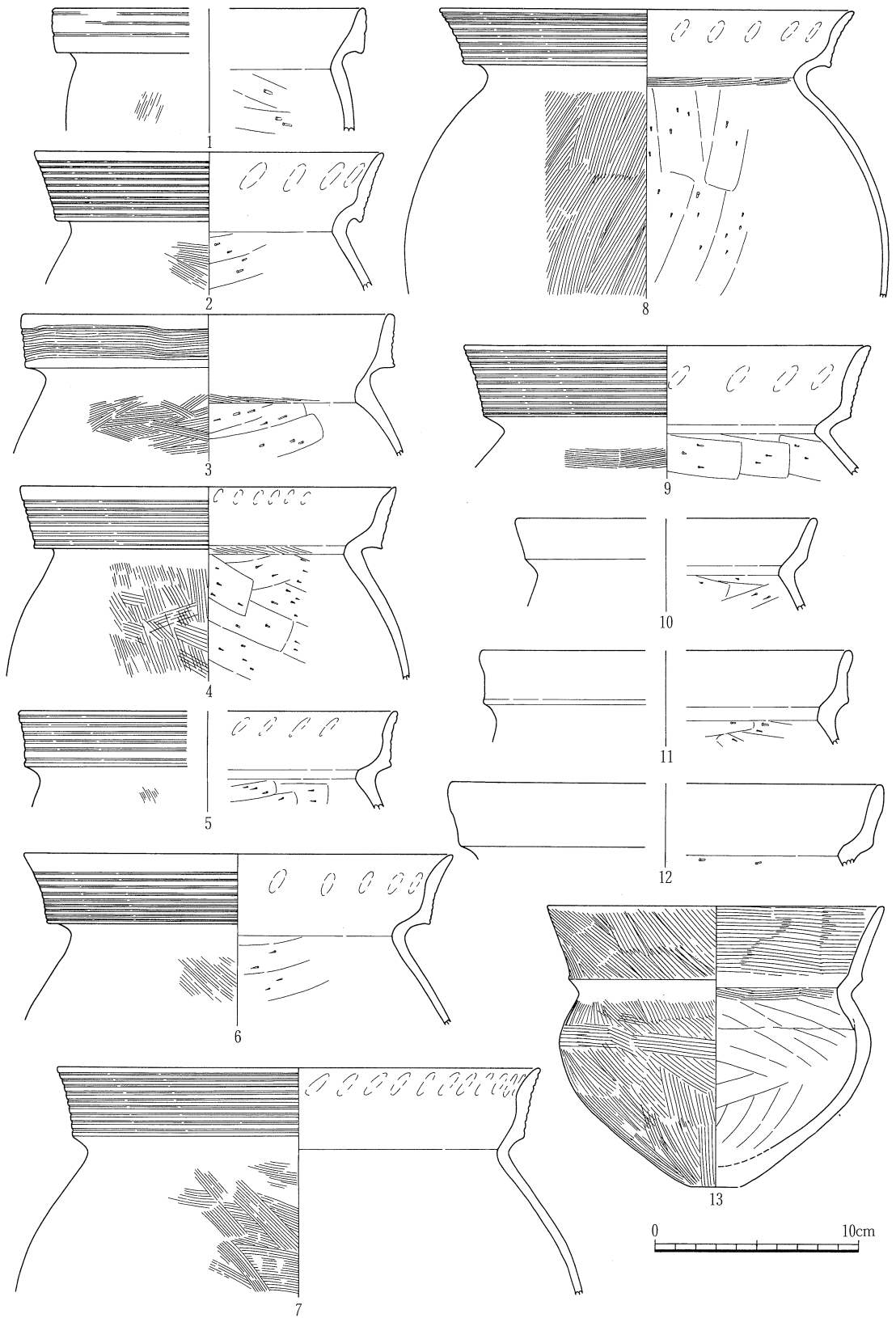
A₁ L=14.5M



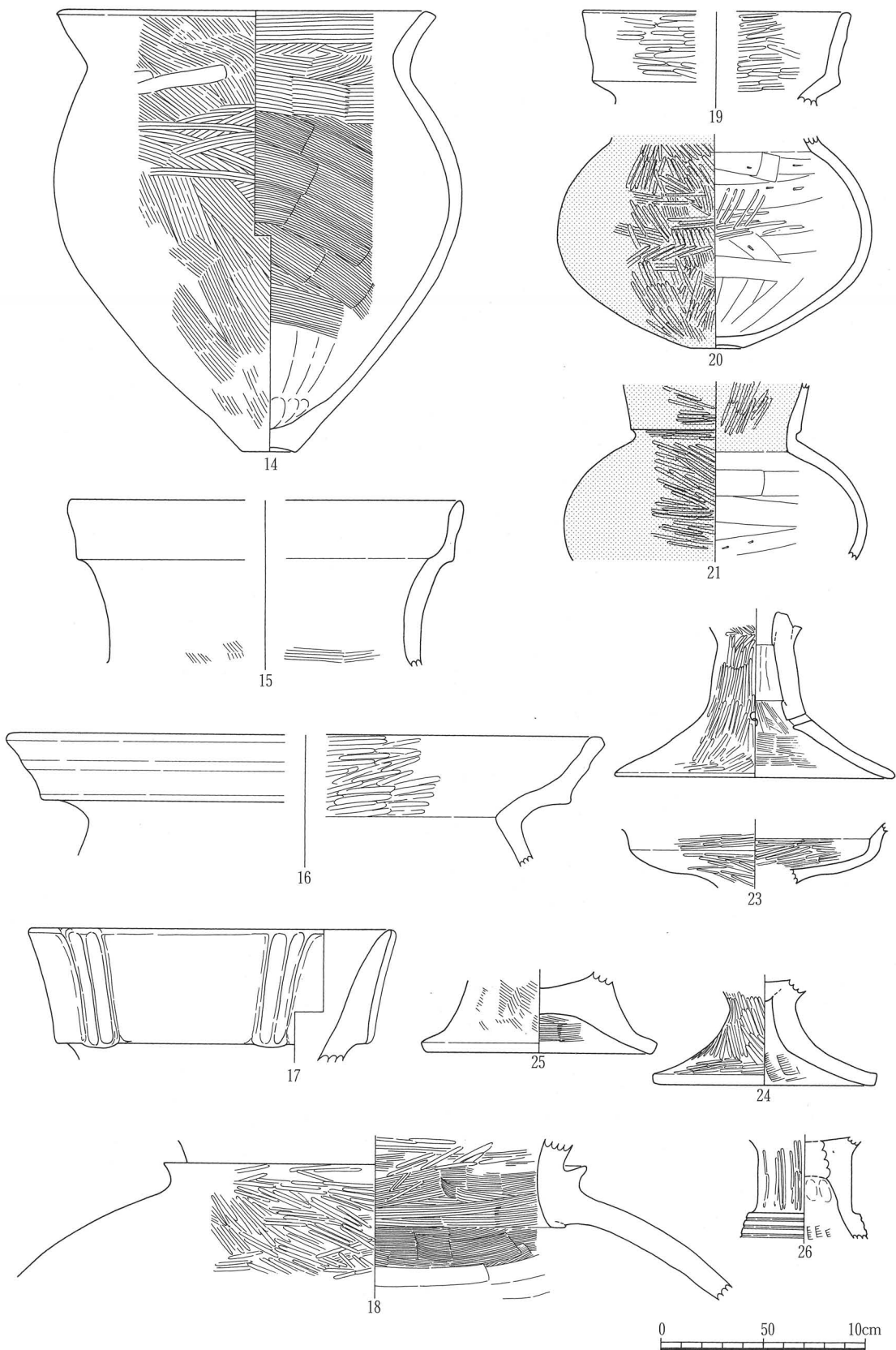
L=15.16M



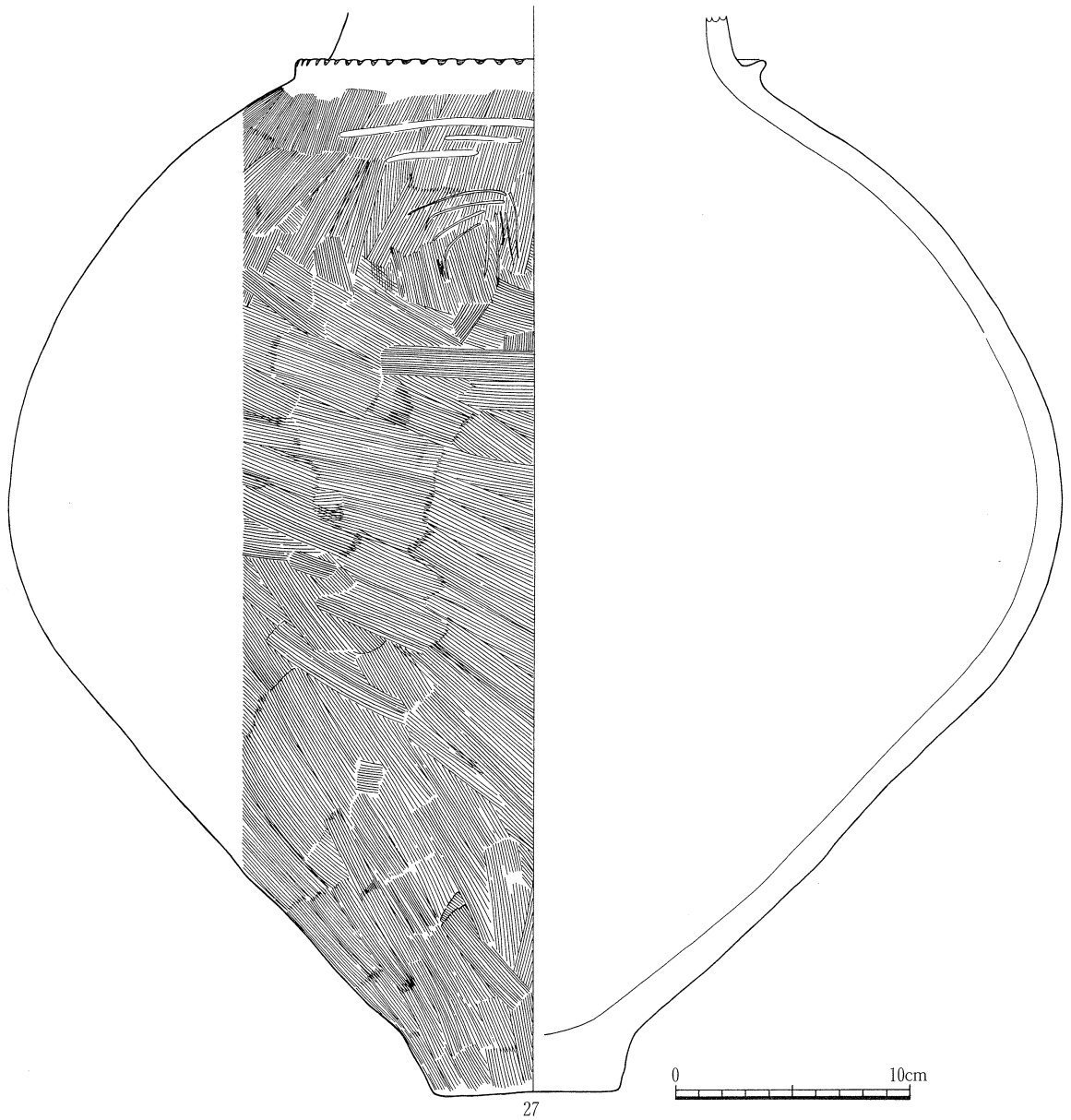
第51図 14・15号住居 (1/60)



第52図 14号住居 出土土器③ (1/3)

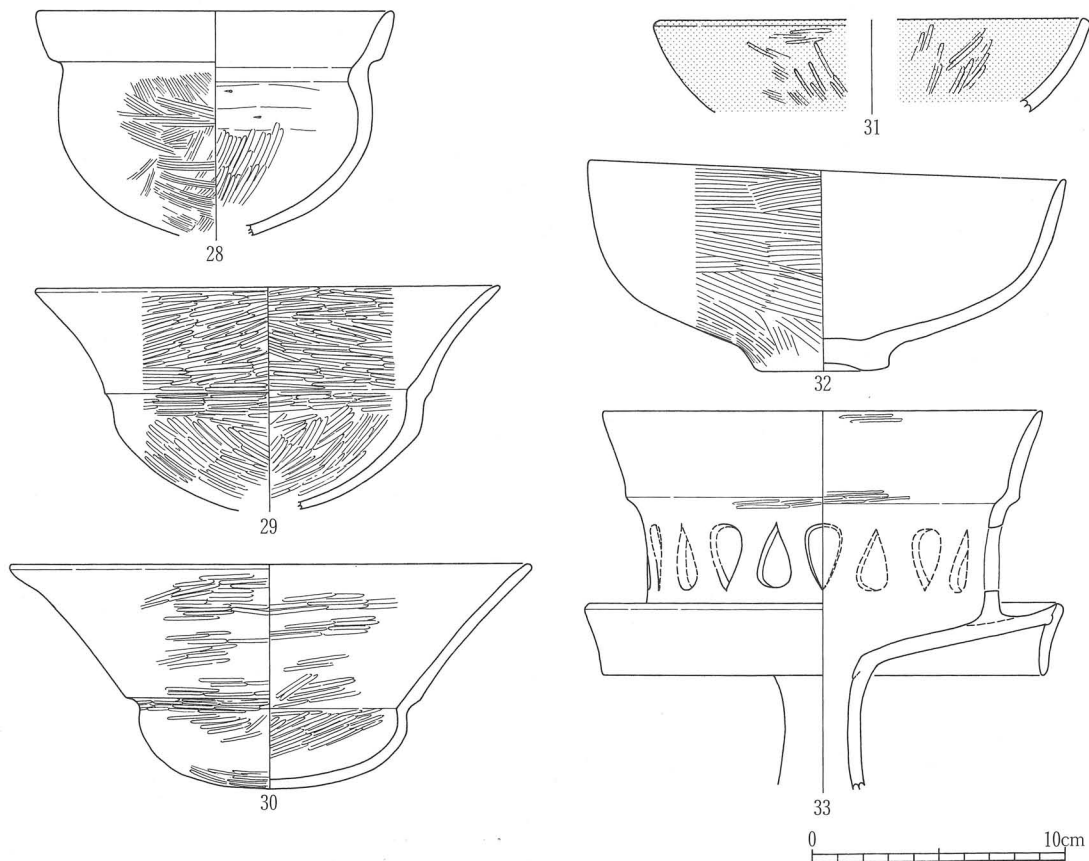


第53图 14号住居 出土土器② (1/3)



第54図 14号住居 出土土器③ (1/4)

る口縁部の内面の段が緩く、屈曲点も下に位置しているため頸部の器壁が非常に薄い。5は緩く外反する口縁部の内面下半に強いナデを施してえぐるように弯曲させており、指頭圧痕はその上部にみられる。6は口縁部の外反度合いが強く長さも長いが端部の作りはやや鈍い。7・8は大型の擬凹線を有する有段口縁の甕である。7は外反する口縁部に9条の擬凹線を施し、内面上位に指頭圧痕を持つ。8は7に比べて頸部の締まりが強く口縁部の外反度も大きい。8条の擬凹線を有し頸部内面にはハケ調整痕が見られる。10~12はともに無文有段口縁の甕である。いずれも



第55図 14号住居 出土土器④ (1/3)

小片であるが10は小型、11は中型、12は大型であろう。13は頸部を軽く屈曲させて有段口縁風に見せる小型の甕である。外面は頸部にナデを施す他は全面ハケ調整をおこない、内面は口頸部にハケ調整、胴部にナデを施し段部もナデている。口縁部が器高に対して長めであり、屈曲部の作りも他の有段口縁の甕よりは有段鉢に類似している。14はくの字口縁の中型甕である。内・外面ともにハケ調整し、内面底部にはナデを施す。端部は平縁である。類例は塚崎遺跡第6号竪穴出土土器中に見られるが、本例は外面のハケが口縁部にまでおよんでおり内面もハケ調整を主体とすることで若干異なっている。また、胎土には海綿骨片を極く僅かに含む。15は短頸壺から派生した有段口縁を持つ壺である。16はかなり大型の有段口縁広口壺である。大きく外反する重厚な作りの口縁部は、外面に強いナデを施して2条の凹帯を巡らせ内面はミガキ調整をおこなう。17は有段状の口縁を持つ大型壺である。外面には3本1組の棒状浮文を全周で6箇所貼付する。18は頸部に突帯を持つ大型壺である。19は小型の有段口縁を持つ壺である。20は同一個体ではないがこのタイプの壺の胴部であり、外面を赤彩する。21は偏球状の胴部に外面に小さな段を持たせて有段口縁風に仕上げた壺であり、内面に段は持たない。外面および内面頸部までを赤彩する。22は器台の脚部、23は高杯の坏底部である。小片であるがおそらく有段鉢形をなすものであろう。

24・26は低脚の高坏の脚である。26は下端に現状で3条の凹線を持つ。27は胴部が丸く張る大型の壺の体部である。頸部に突帯を有し、ハケ状工具によるキザミを施す。また、外面肩部付近にはヘラ状工具による線刻文が見られる。28～32は鉢である。28は通有の有段口縁をなすもので体部外面はハケ、内面はケズリの後下半にミガキを施す。29～30はいわゆる有段鉢でありヘルメット形を呈する。30は口縁部の発達が顕著であり、口縁部高が体高を大きく上回る。31は碗形を呈する小片であり内・外面を赤彩する。32も碗形を呈する完形品であり外面にはハケ調整を施す。33は結合器台である。受け部と口縁部の接合面にはヘラ状工具による刺突をおこない、両者の結合を補強しようとする意図が見られる。端部を先細りさせ口縁部の伸びも5号住居出土品（第25図46）よりも発達した傾向が見られる。

その他の遺物の出土はみられなかった。

15号住居

《遺構》（第51図）

調査区の南東に位置する。南側は85号土坑により一部切り込まれる。平面形は円形に近い隅丸六角形（亀甲形）を呈す。短辺は1.6～1.8m、長辺は2.2m、規模は3.8m×（3.7m）、床面積は10㎡である。壁高は約15cm、壁溝は無い。ピットP1～P12を検出しているが、主柱穴は不明である。P7は後世の所産である。ピットの床面からの深さを記しておく。P1・12cm、P2・14cm、P3・25cm、P4・8cm、P5・25cm、P6・20cm、P8・7cm、P9・12cm、P10・8cm、P11・15cm、P12・5cm、P13・7cmを測る。中央には平面楕円形を呈する土壙状のP14が位置する。覆土に炭化物を多く含み、炉跡であろう。大きさ70cm×55cm、深さ40cmを測る。床面はP14中心として半径1.5mの範囲が固く締まっていた。床面のレベルは14.15～14.2mである。

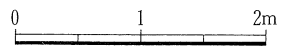
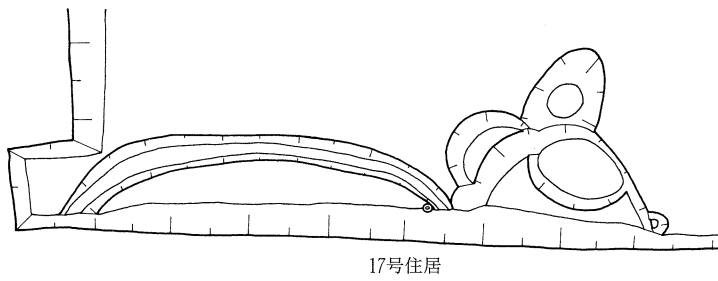
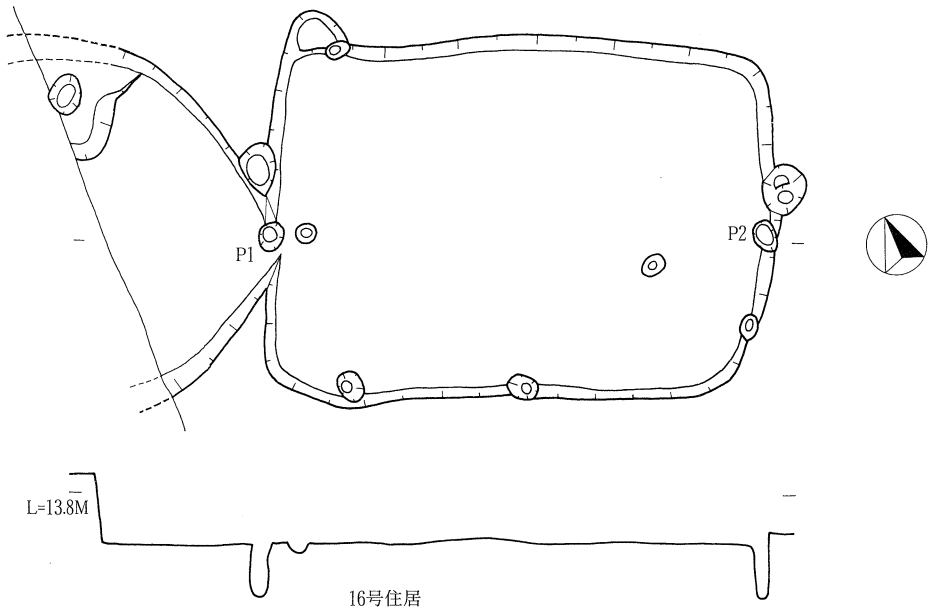
《出土遺物》（第57・58図）

当住居から出土した土器は点数が少なく、そのほとんどが小片であるため実測できたものは極めて少ない。

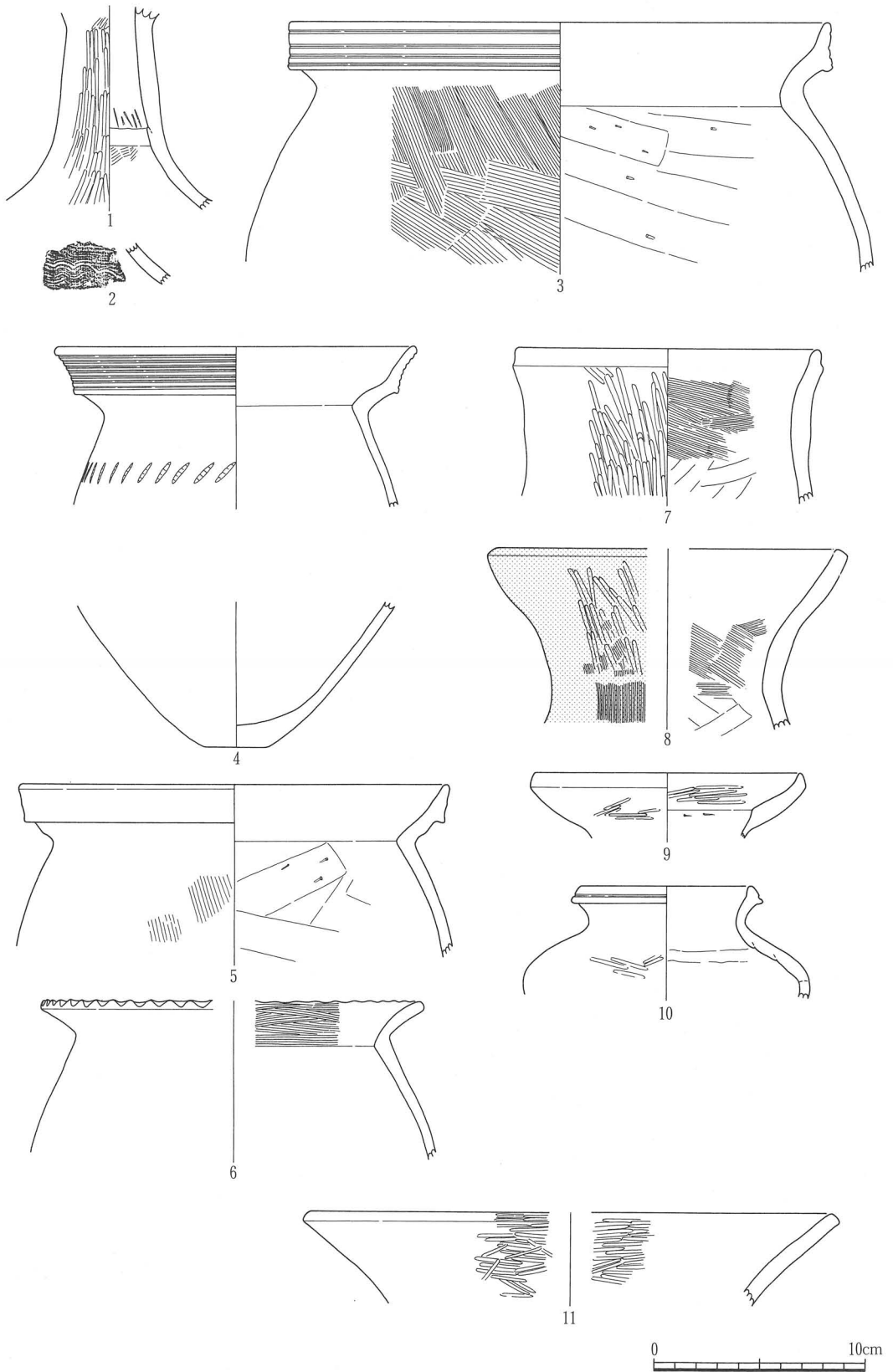
1は85号土坑出土の土器である。注意していただきたい。裾部から端部に向かって大きく開く高坏の脚部である。2は体部小片である。ハケ状工具の一端を中心に交互に回転させ、波状文をなしている。図上部には同じ原体を用いた平行線文を施している。

《その他の遺物》

当住居からは土器の他に石が2点と管玉が1点出土している。1は長さ44.0mmを測る大型の無茎石鏃である。表裏ともに自然面を残しており、刃部および基部を押圧剥離によって成型する。2も同じく無茎石鏃であるが1に比べてひとまわり小さい。自然面を残す割合が大きいので刃部の断面角度はやや大きい。先端を若干欠損している。3は硬玉製の管玉である。両面穿孔とみられ孔径は1.3mmを測る。



第56图 16·17号住居 (1/60)

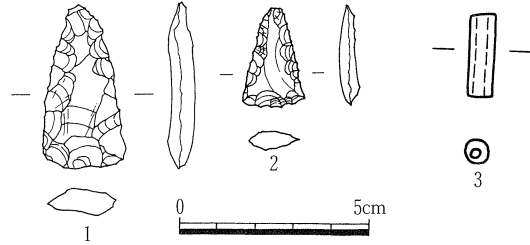


第57图 15~17号住居出土土器 (1/3) 15号 (1·2)·16号 (3~10)·17号 (1)

16号住居

《遺構》（第56図）

調査区中央東端に位置する。竪穴穴遺構2により北西壁1部が切り込まれる。平面形は隅丸長方形を呈し、規模4.1m×2.9m、床面積10㎡を測る。壁高は12cm。壁溝は無い。主柱はP1、P2の2個が壁より掘り込まれる。径は20cm、深さ底面よりP1・42cm、P2・44cmを測る。柱間は3.95m、結んだ線北65度西が主軸であろう。覆土には炭化物を多く含んでおり床面近くで炭化した木材片が検出された。焼失したものであろうか。床面のレベルはほぼ14.2mである。



第58図 15号住居 出土遺物（1/2）

《出土遺物》（第57図）

3は擬凹線を有する有段口縁の大型甕である。短く直立する口縁部に4条の擬凹線を施し、下端が若干垂下する。4は同じく擬凹線を持つ有段口縁の中型甕である。強く外反する口縁部に7条の擬凹線を施し、肩部にはハケ状工具による斜行キザミを巡らせている。5は無文有段状の口縁部を持つ中型甕である。屈曲した頸部が外面で一旦盛り上がり、小さな突起を形成して垂直に立ち上がる。内面には段を持たず口縁端部の段面形は三角状を呈する。6は端部押圧により小波状の口唇部を持つ甕である。中期に属するものと見られ、胴部最大径が口径をやや超えるようである。7・8はともに長頸壺の類であろう。7はほぼ直立する口縁部の端部をつまみ上げるようにしてナデを施し、小さな屈曲を作り出す。8は外反して伸びる口頸部が途中で内弯に転じラップ状に開く口縁部を形成する。外面に赤彩を施すが端部の面取りされた部位にまではおよばない。9は器種不明であるが端部がはね上げ状を呈することから口縁部片とした。内弯して大きく開く口縁部を持ち頸部は異常に細い。内面屈曲点以下はケズリ調整を施す。10は小型の壺の類であろうか。大きく張り出して偏球状を呈すると思われる胴部に、1条の沈線を施す断面三角形をなす小さな口縁部が付く。類例は管見にない。

また、当住居からはその他の遺物の出土は見られなかった。

17号住居

《遺構》（第56図）

調査区南東に位置し15号住居より南へ9m、87号土坑から南へ2m距離を置く。ごく一部の検出であるが、平面形及び規模、壁溝の存在により住居と判断した。検出部より平面形は隅丸方形を呈する1辺3～4mの小型住居であろう。壁高は床面より40cmを測る。壁溝は幅15～20cm、深さは5cmとやや浅い。床面レベルは13.95mを測る。

《出土遺物》（第57図）

当住居からはほとんど実測可能な土器片は出土していない。11は端部に面取りを施した高杯の

口縁部片と思われるが、極めて小片であり無理に実測したという感が強い。なおその他の遺物の出土はまったく見られなかった。

(註1) 高本他1983「北陸の弥生・古墳時代の竪穴住居址 — 弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居址を中心として—」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号にて紹介した本遺跡の竪穴住居跡については本報告書において名称を変更した。下の竪穴住居一覧を参照していただきたい。

(註2) 住居の主軸については、平面形・柱穴、ピット等の配置がほぼ対称となる線としている。

竪穴住居一覧 ()は推定値

竪穴番号	旧番号	形状	規模(m)	床面積(m ²)	主柱	主軸	床面標高(m)	時期
1号	80-1	円形	径11.5	(97)	(9)	N63° W	13.8～13.85	I期
2号	80-2	隅丸方形	8.2×(8)	(50)	4	N31° W	13.8～13.9	II期
3号	80-3	隅丸方形か	5.6×?				14.2	I期
4号	80-4	円形か	径(9.0)	(58)		(N31° W)	13.9	II期
5号	82-3	円形	径11.7	93	6		13.95	III期
6号	82-1	不整円形	径8.0	47	9		14.2	I～II期
7号	82-2	隅丸方形	7.9×7.8	47	4	N34° W	14.0	III期
8号-I	82-5	不整円形	径(7.0)	(37)			14.2	中期
8号-II	82-6	不整円形	径3.4	9			14.0	中期
10号	82-4	隅丸方形	6.5×(6.8)	(34)	4	N39° W	14.0～14.05	I期
11号	81-3	隅丸方形	6.7×6.7	30	4	N40° W	14.1	II期
12号	81-2	隅丸方形	5.6×4.7	21	4	N33° W	14.0	I期
13号	-	台形	2.7×3.2×3.3	8	2か	N73° W	14.1	II期
14号	-	隅丸方形	3.4×2.9	6		N56° W	14.25	III期
15号	-	隅丸六角形	3.8×(3.7)	10	5か		14.15～14.2	中期か
16号	81-1	隅丸長方形	4.1×2.9	10	2	N65° W	13.4	I期
17号	81-4	隅丸方形か					13.95	不明

3 掘立柱建物

掘立柱建物を8棟検出し、うち1～2号は布掘方式の掘り方を持つ。1号・7号は調査区の東側で検出しているが、残りの6棟は調査区中央部南側に集中している。

1号掘立柱建物（第59図）

調査区中央東側に位置する。布堀方式で、桁行3間5.9m、梁行1間3.7m、面積は約21.8㎡、主軸は（北62°西）である。布堀内の平坦部は深さ50cm前後である。柱穴の深さは60～73cmを測る。

2号掘立柱建物（第59図）

調査区ほぼ中央に位置する。掘り方は布堀方式であり、桁行3間5.8m、梁行1間3.4m、床面積は約19.7㎡、主軸は（北62°東）である。布堀内の平坦部は深さ45～65cm、柱穴の深さはばらつくが65～77cmを測る。

3号掘立柱建物（第60図）

調査区の南西部に位置する。桁行2間3.9m、梁行1間3.2m、床面積は約12.5㎡、主軸は（北29度西）である。柱穴はほぼ円形で径35～50cm、深さは43～58cmである。

4号掘立柱建物（第61図）

調査区のほぼ中央やや南に位置する。桁行2間3.5m、梁行1間2.75m、床面積は約9.6㎡、主軸は（北80度西）である。柱穴はほぼ円形で径40～55cm、深さは35～80cmである。

5号掘立柱建物（第62図）

調査区のほぼ中央やや南に位置する。桁行3間4.15m、梁行1間3.0m、床面積は約12.4㎡、主軸は（北9度西）である。柱穴はほぼ円形で径45～60cm、深さは46～72cmである。

6号掘立柱建物（第63図）

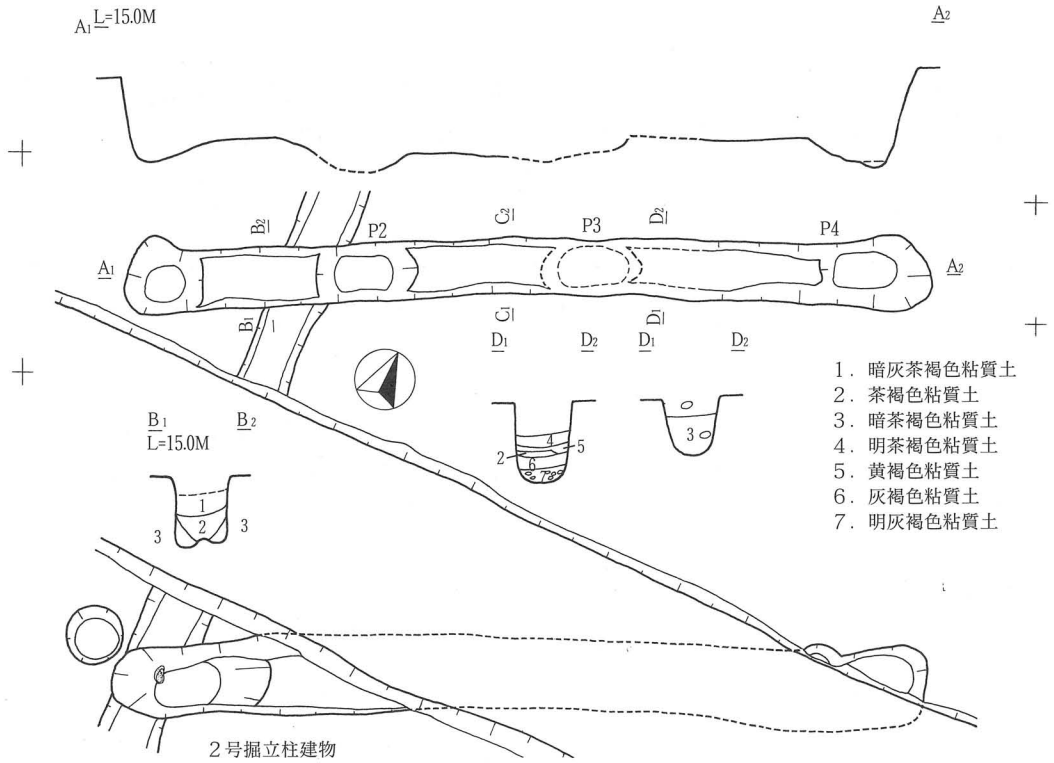
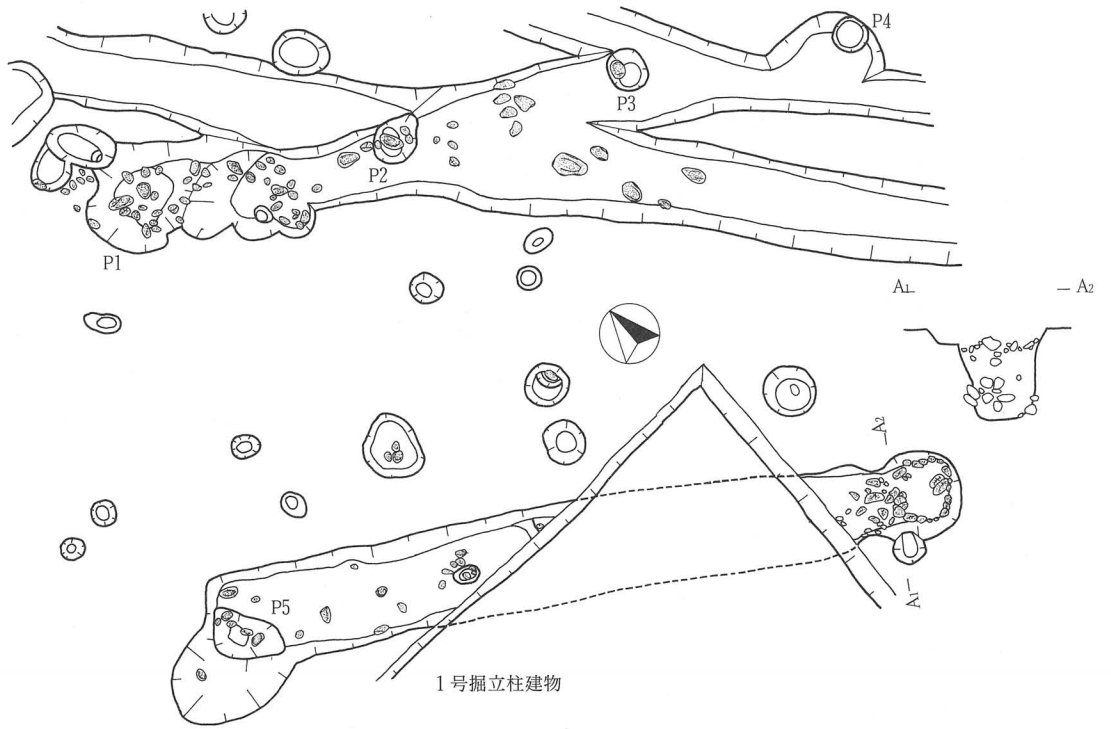
調査区のほぼ中央やや東に位置する。桁行2間4.0m、梁行1間3.9m、床面積は約15.6㎡、主軸は（北53度西）である。柱穴はほぼ円形で径30～40cm、深さは45～50cmである。

7号掘立柱建物（第63図）

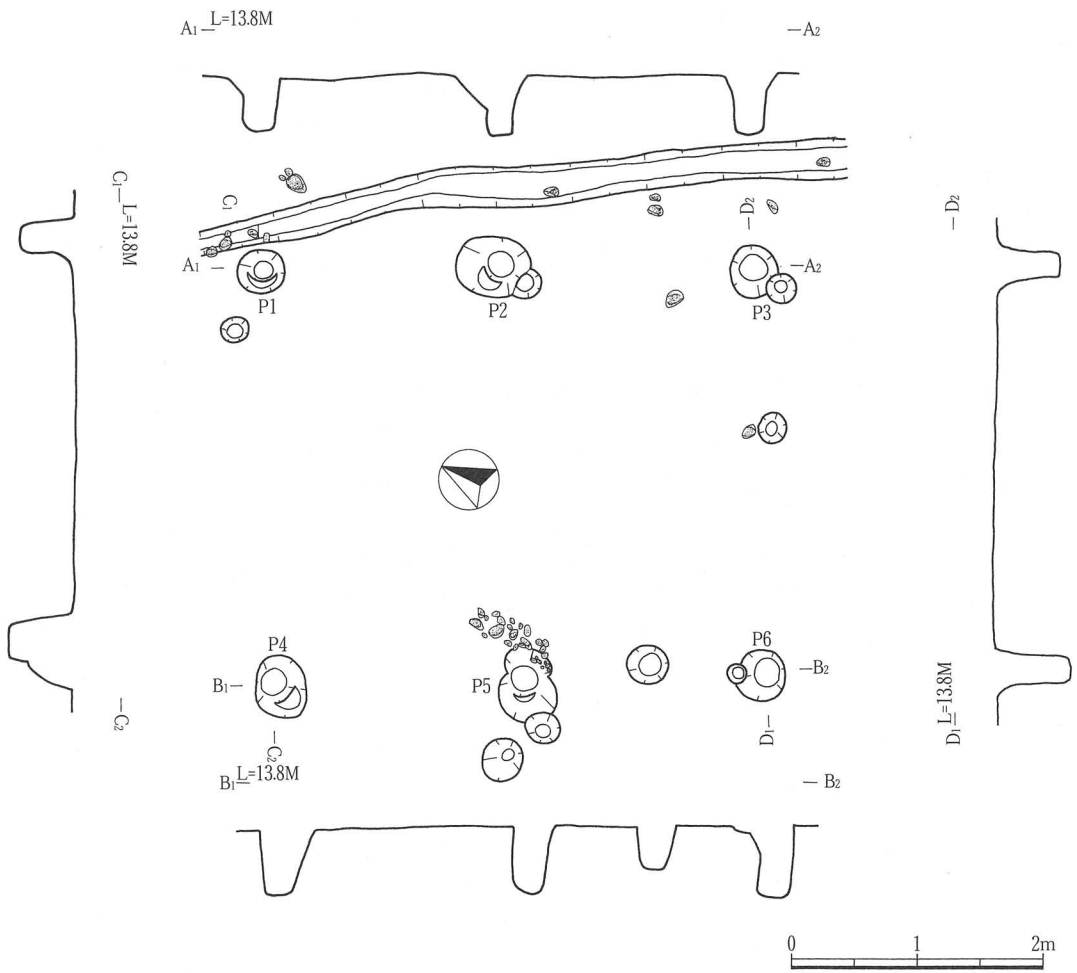
調査区東南部に位置し、東側桁行の検出にとどまる。桁行3間5.0m、主軸は（北5度東）である。柱穴はほぼ円形で径25～40cm、深さは40～55cm。断面図の柱穴南側3個の深さは間違いである。

8号掘立柱建物（第62図）

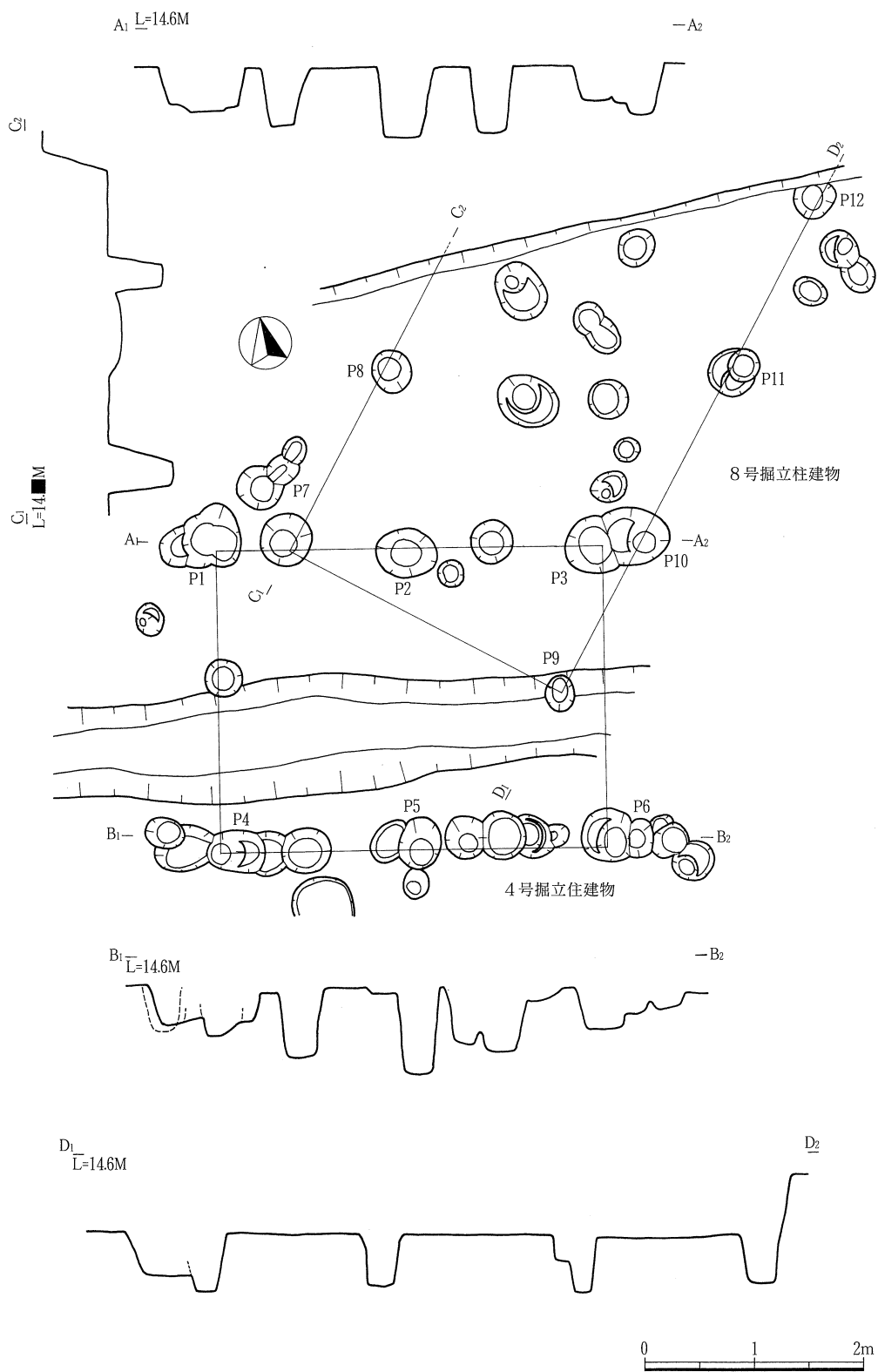
調査区のほぼ中央に位置する。桁行3間5.05m、梁行1間2.9m、床面積は約14.6㎡、主軸は（北39°東）である。柱穴はほぼ円形で径36～50cm、深さは50～62cmである。



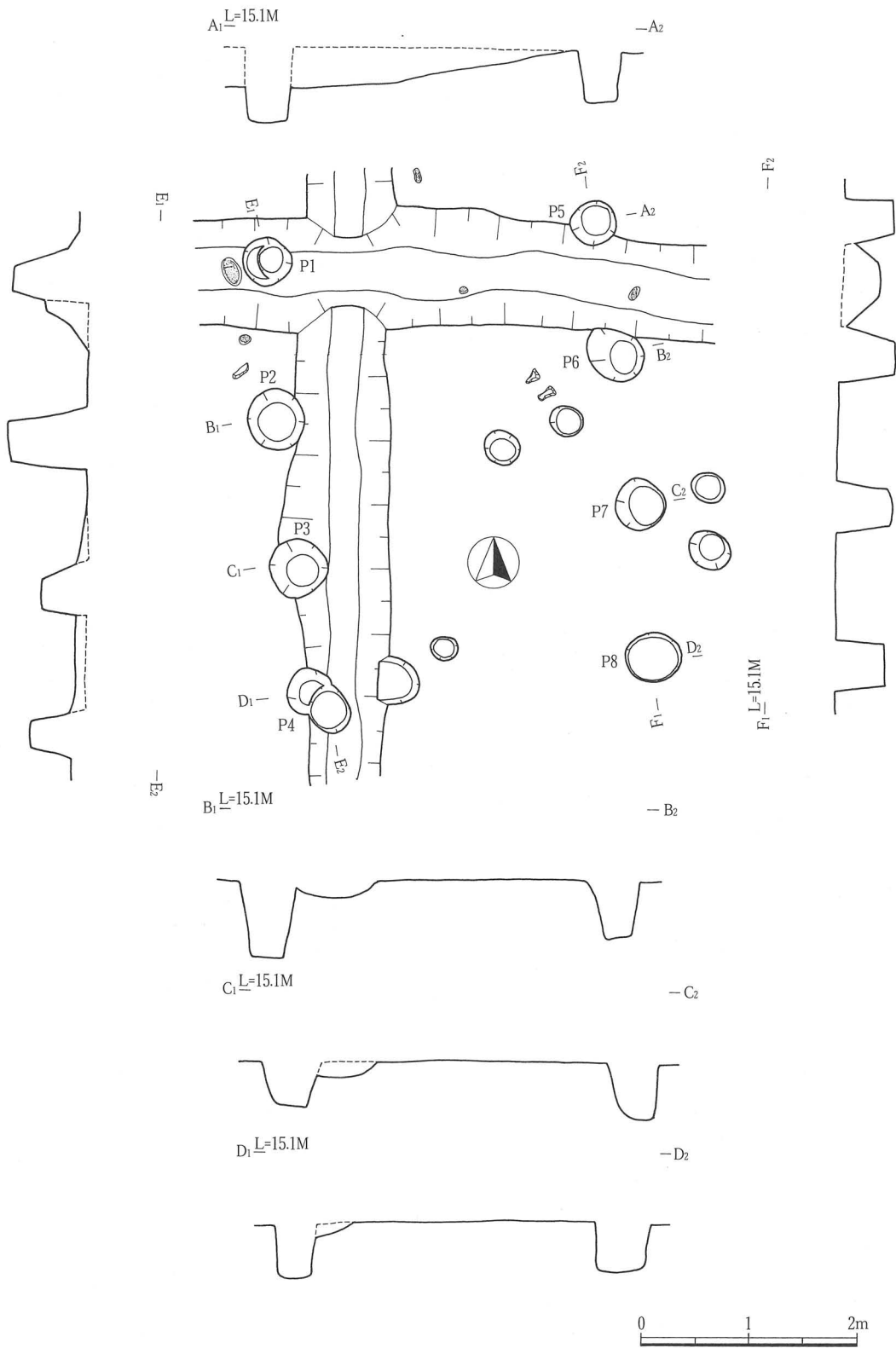
第59图 1·2 掘立柱建物 (1/60)



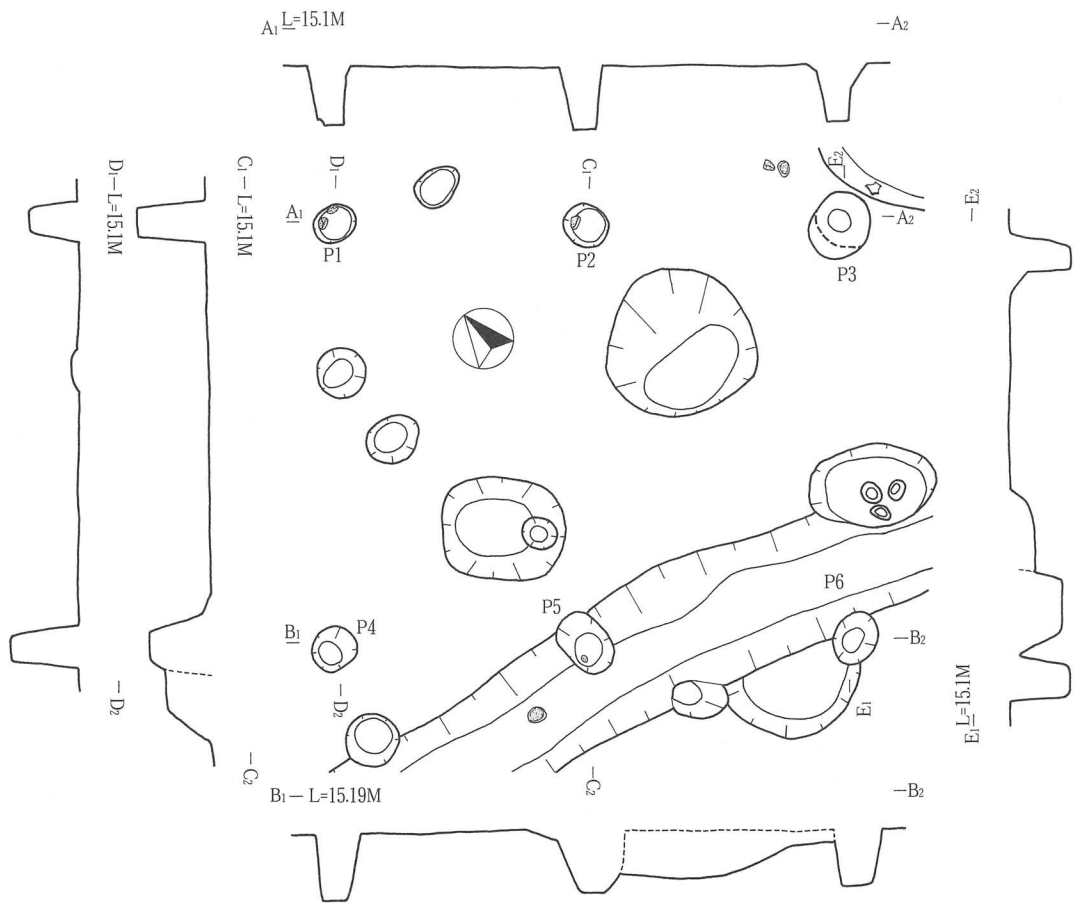
第60图 3号掘立柱建物 (1/60)



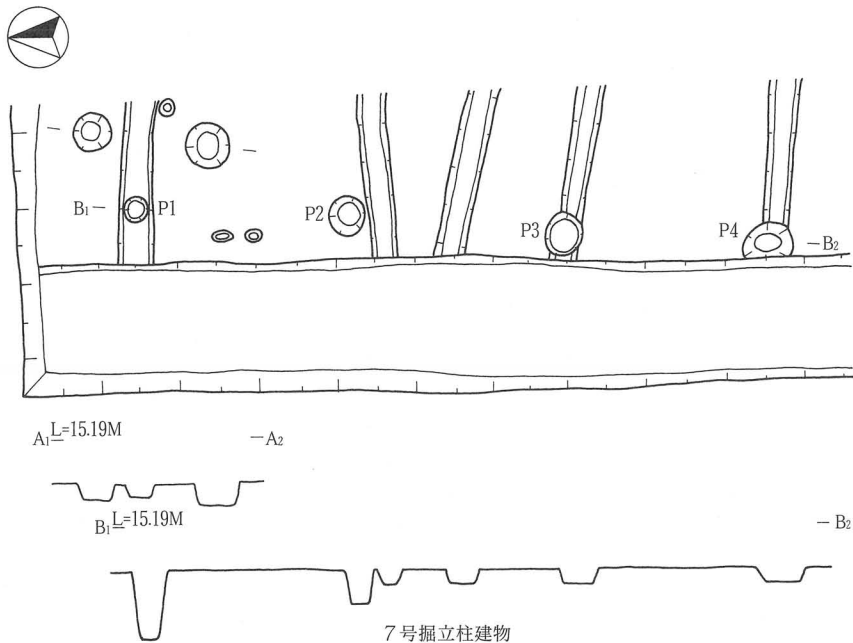
第61图 4·8号掘立柱建物 (1/60)



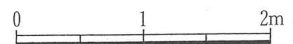
第62图 5号掘立柱建物 (1/60)



6号掘立柱建物



7号掘立柱建物

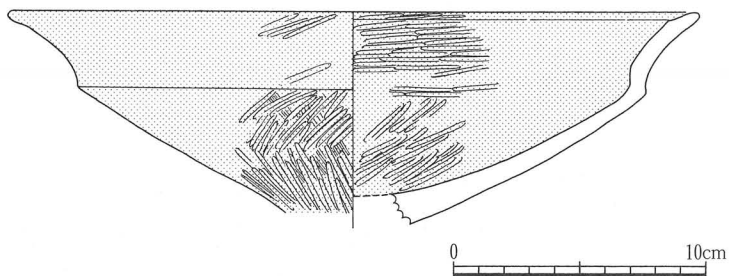


第63图 6·7号掘立柱建物 (1/60)

1号掘立P-1出土土器

(第64図)

中型の高坏坏部である。坏底部が深く口縁部は短い。丸縁を呈する端部の内面にナデを施して弱い稜を形成する。内・外面ともに赤彩を施している。



第64図 1号掘立出土土器 (1/3)

2号掘立P-1出土土器

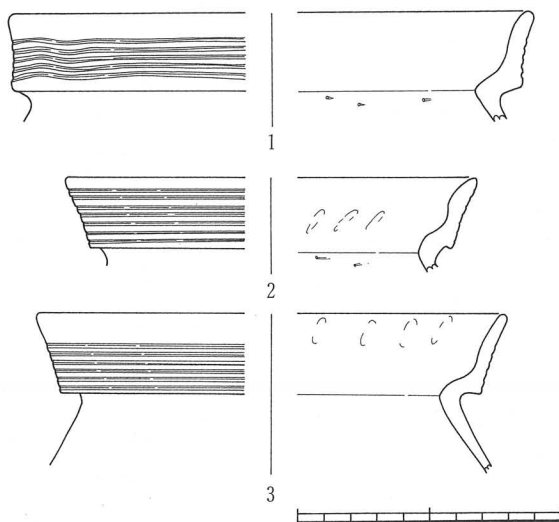
(第65図1)

若干外反する口縁部に5条の擬凹線を施す有段口縁の中型甕である。全体にずんぐりとした作りである。

3号掘立P-1出土土器

(第65図2・3)

2・3ともに擬凹線を有する有段口縁の甕である。2は小型品であり外反する口縁部に7条の擬凹線を施す。外面屈曲部の下端がやや垂下し内面には指頭圧痕が認められる。3は中型品である。外反する口縁部下反に6条の擬凹線を施し、内面の上部に指頭圧痕が見られる。

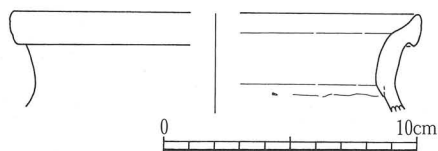


第65図 2号(1)・3号(2・3)掘立出土土器 (1/3)

4号掘立P-1出土土器

(第66図)

はね上げ状の口縁部を持つ甕である。端部は断面三角形を呈し、下端がやや垂下する。



第66図 4号掘立出土土器 (1/3)

4 土坑

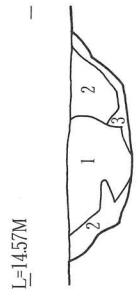
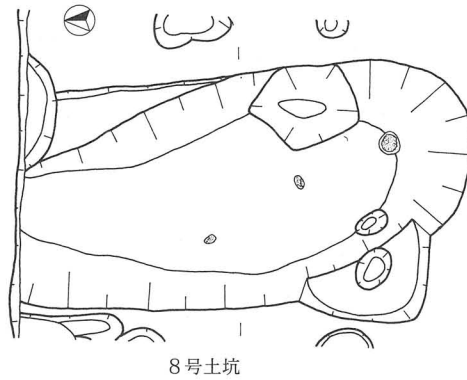
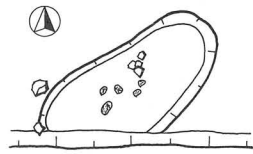
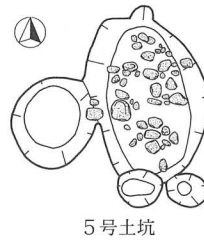
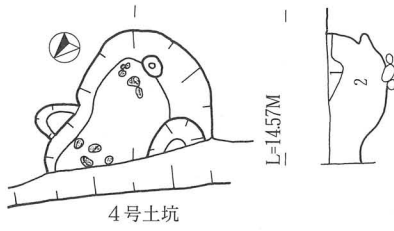
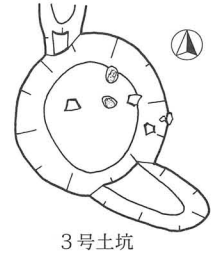
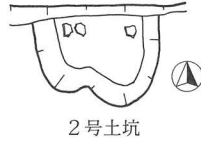
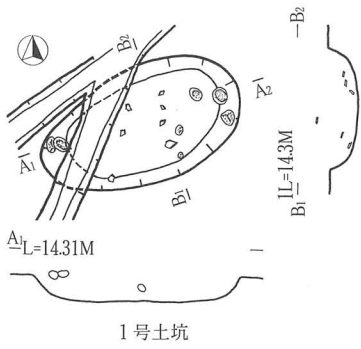
土坑の規模等については下記の土坑一覧表を参照されたい。

土坑一覧表 () は推定値

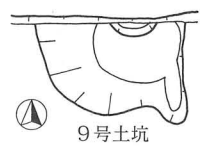
土坑名	図番号	調査年	平面図	規模(cm)	深さ(cm)	軸方位
1号	67・77	1980	楕円形	1.65×0.95	20	北66度東
2号	67・78	1980	楕円形か	1.0×0.75		北0度西
3号	67・79	1980	楕円形	1.35×1.15		北0度西
4号	67	1982	楕円形	1.32×1.0	46	北11度西
5号	67・80	1981東	楕円形	1.49×0.9	23	北29度西
6号	67・81	1981東	楕円形	1.07×0.92	20	北7度西
7号	67・82	1980	楕円形	(1.65)×0.8	40~47	北47度東
8号	67・83	1982	楕円形	(4.0)×1.85	36~48	北14度西
9号	67・84	1982	略円形か	1.2×0.82	39	
10号	67	1982	楕円形	1.1×0.5	35	北23度東
11号	67	1982	楕円形	1.7×1.1	20~25	北60度西
12号 a	68	1982	楕円形	(2.25)×1.35	35~37	北84度東
12号 b	68・85	1982	楕円形	2.25×1.1	35~40	北0度西
12号 c	68	1982	楕円形	2.0×1.2	73	北62度西
13号	68・86	1982	楕円形	(2.4)×2.0	33	北0度西
14号	68・87	1983	楕円形	1.35×0.52	25~48	北74度東
15号	68	1983	楕円形	0.92×0.77	15	北89度東
16号	68	1980	楕円形	1.57×0.98		北17度西
17号	69	1982	楕円形	(1.5)×1.35	36	北41度西
18号	69・88	1982	略円形	0.55×0.4	54	
19号 a	69・89	1982	略円形	(2.95)×0.8	43	北7度東
19号 b	69・90	1982	楕円形	1.5×0.75	34~52	北30度東
20号	69・91	1983	楕円形	1.5×1.15	13	北26度西
21号	69	1983	楕円形	1.28×0.95	13~18	北6度西
22号	69	1983	略円形	1.02×0.95	38	
23号	69	1983	楕円形	0.72×0.5	13	北60度西
24号	69	1980	不整形	3.53×2.75		北89度東
25号	69・92・93	1982	略円形	1.38×1.22	15	北52度西
26号	69・94	1982	楕円形	1.45×1.05	35	北63度西
27号	69	1982	楕円形	1.28×(1.0)	26	北63度東

土坑名	図番号	調査年	平面図	規模(cm)	深さ(cm)	軸方位
28号	70	1983	略円形	1.0×(0.85)	7	
29号	70・95	1983	橢円形	1.9×1.55	16	北42度西
30号	70	1983	橢円形	1.07×0.83	35~50	北40度西
31号	70・96	1983	橢円形	1.2×0.7	20・30	北40度西
32号	70	1983	橢円形	(1.05)×0.82	6	北67度西
33号	70	1980	橢円形	1.37×1.18		北10度西
34号	70・97	1982	橢円形	0.65×0.5	35	北71度西
35号	70・98・99	1980	橢円形	2.38×1.85	40~55	北88度西
36号	70	1980	隅丸長方形	1.15×0.85	16	北88度東
37号	70	1980	略円形	1.02×0.95	19	
38号	70・100	1980	橢円形	(1.5)×(0.92)	27	北75度東
39号	70	1982	橢円形	1.1×(0.9)	6・13	北47度東
40号	70・101	1982	橢円形	1.45×1.0	28~35	北82度東
41号	70・102	1982	橢円形	1.07×(0.65)	60	北83度東
42号	70	1983	橢円形か		50	
43号	71・103	1980	橢円形	2.9×2.55		北23度東
44号	71・104	1980	橢円形	1.15×0.97		北16度西
45号	71	1980	橢円形	1.65×0.92		北8度東
46号	71・105	1982	不明		12	
47号	71	1982	隅丸長方形	1.93×1.5	55~65	北6度東
48号	71	1982	隅丸長方形	2.1×1.42	60~65	北4度東
49号	71	1982	略円形	1.6×(1.45)	60	
50号	71	1983	橢円形	1.3×(0.85)	25	北34度西
51号	71・106	1983	橢円形	2.33×1.0	35~45	北69度東
52号	72・107	1982	橢円形	0.38×0.45	14	
53号	72・108・109	1982・83	隅丸長方形	2.88×2.25	115~120	北54度西
54号	72	1983	橢円形	1.85×1.3	65	北50度東
55号	72・110	1980	略円形	1.42×1.25	13	北60度東
56号	72	1980	溝状	1.75×0.85	28	北21度東
57号	72	1980	長橢円	(2.25)×0.85	20~26	北58度東
58号	72・112	1983	不整橢円形	2.85×2.15	75	北87度西
59号	72・113	1981西	橢円形か	1.15×0.7	23	
60号	73・114	1981・84	橢円形	0.65×0.5	13	北35度東
61号	73	1981	橢円形	1.15×0.9	12	北34度東
62号	73	1981	隅丸長方形	(1.4)×1.15	50	北21度西

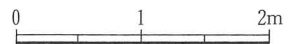
土坑名	図番号	調査年	平面図	規模(cm)	深さ(cm)	軸方位
63号	73・115	1984	橢円形	0.78×0.57	17	北1度東
64号	73・116	1984	隅丸長方形	1.82×1.75	30・40・50	北58度東
65号	73	1984	橢円形	1.93×1.58	28	北39度東
66号	73・117	1984	橢円形	1.2×1.2	40~52	北88度東
67号	73・118	1984	橢円形	1.05×0.7	24	北61度西
68号	73・119	1984	隅丸長方形	1.0×0.8	13	北39度西
69号	73・120	1984	略円形か	0.98×0.65	20~30	
70号	73	1984	橢円形	1.9×0.85	34	北44度東
71号	73・121	1984	円形	0.5×0.5	20	
72号	73・122	1984	橢円形	1.4×0.9	15	北27度西
73号	74	1984	橢円形	0.92×0.65	13	北38度西
74号	74・123	1984	略円形	0.43×0.37	39	
75号	74・124	1984	隅丸長方形	2.03×1.8	10	北39度東
76号	74	1984	橢円形	1.05×0.8	15	北32度西
77号	74	1984	略円形	0.57×0.53	8	
78号	74・125	1984	橢円形	2.0×0.95	56~60	北81度西
79号	74・126	1984	橢円形	1.22×0.88	30	北62度西
80号	74	1984	略円形	1.25×1.18	10	
81号	74・127	1984	円形	径 0.65	10	
82号	74・128	1984	円形	径 0.45	13	
83号	74	1984	橢円形	1.22×0.6	21~30	北11度西
84号	74・129	1981西	橢円形	2.18×1.13	18	北2度東
85号	75・130	1984	橢円形か	(2.2×2.0)	20	
86号	75	1981東	橢円形	3.18×(2.15)	11~15	北1度西
87号	75・131~134	1981東	隅丸五角形	3.25×3.1	60	北70度東
88号	75	1981東	橢円形	1.3×0.75	15	北2度東



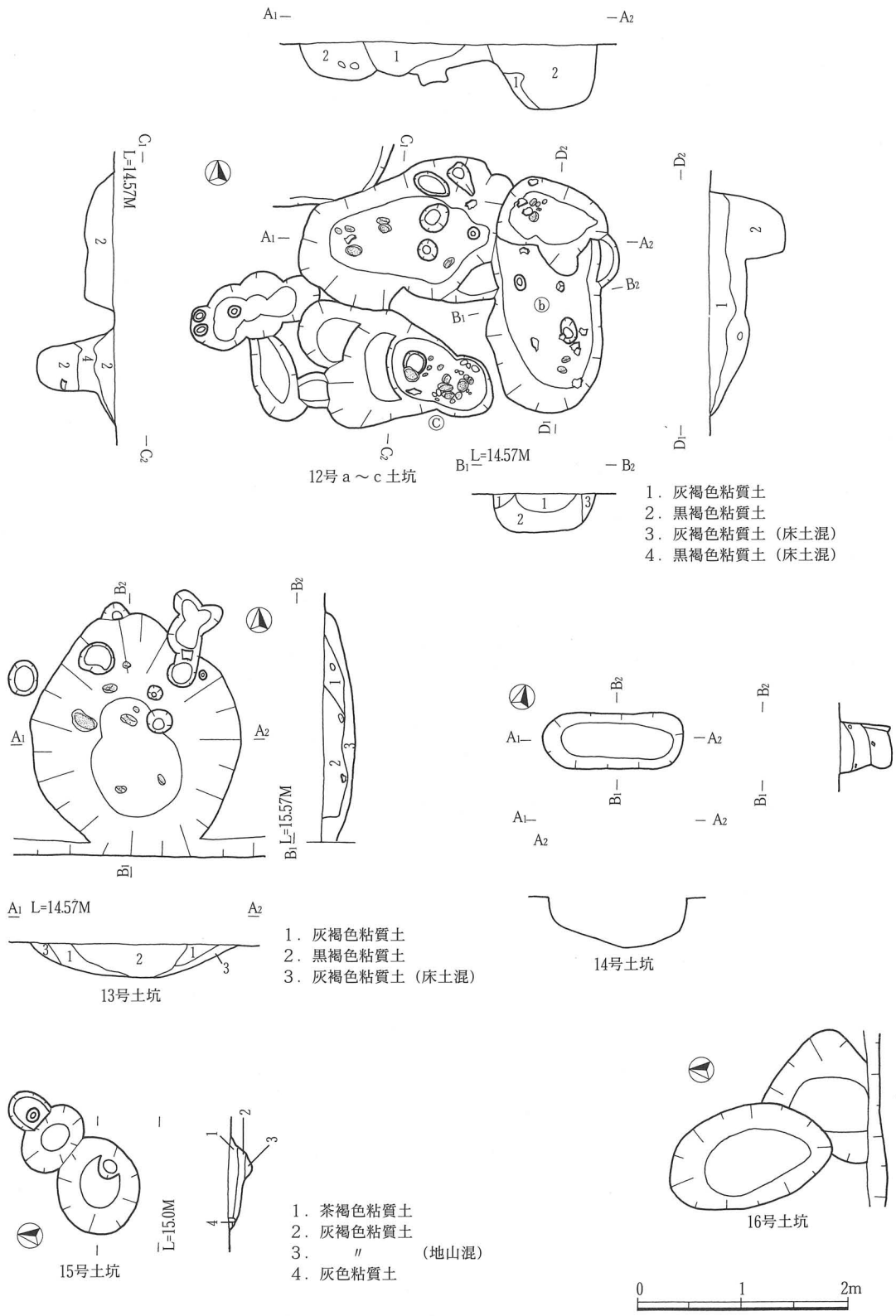
1. 黑褐色粘質土
2. 灰褐色粘質土
3. " (床土混)



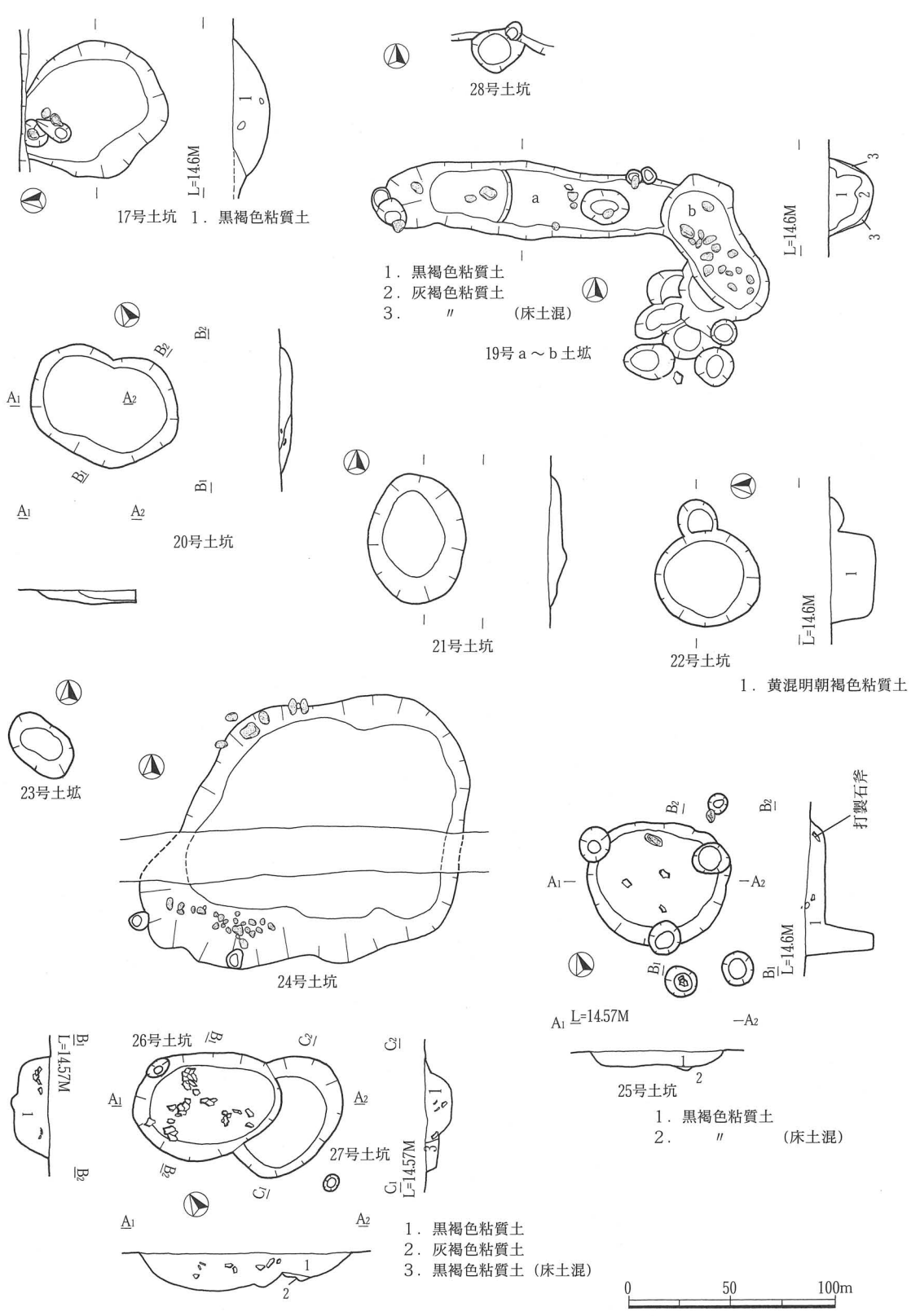
1. 灰褐色粘質土 (床土混)
2. 黑褐色粘質土



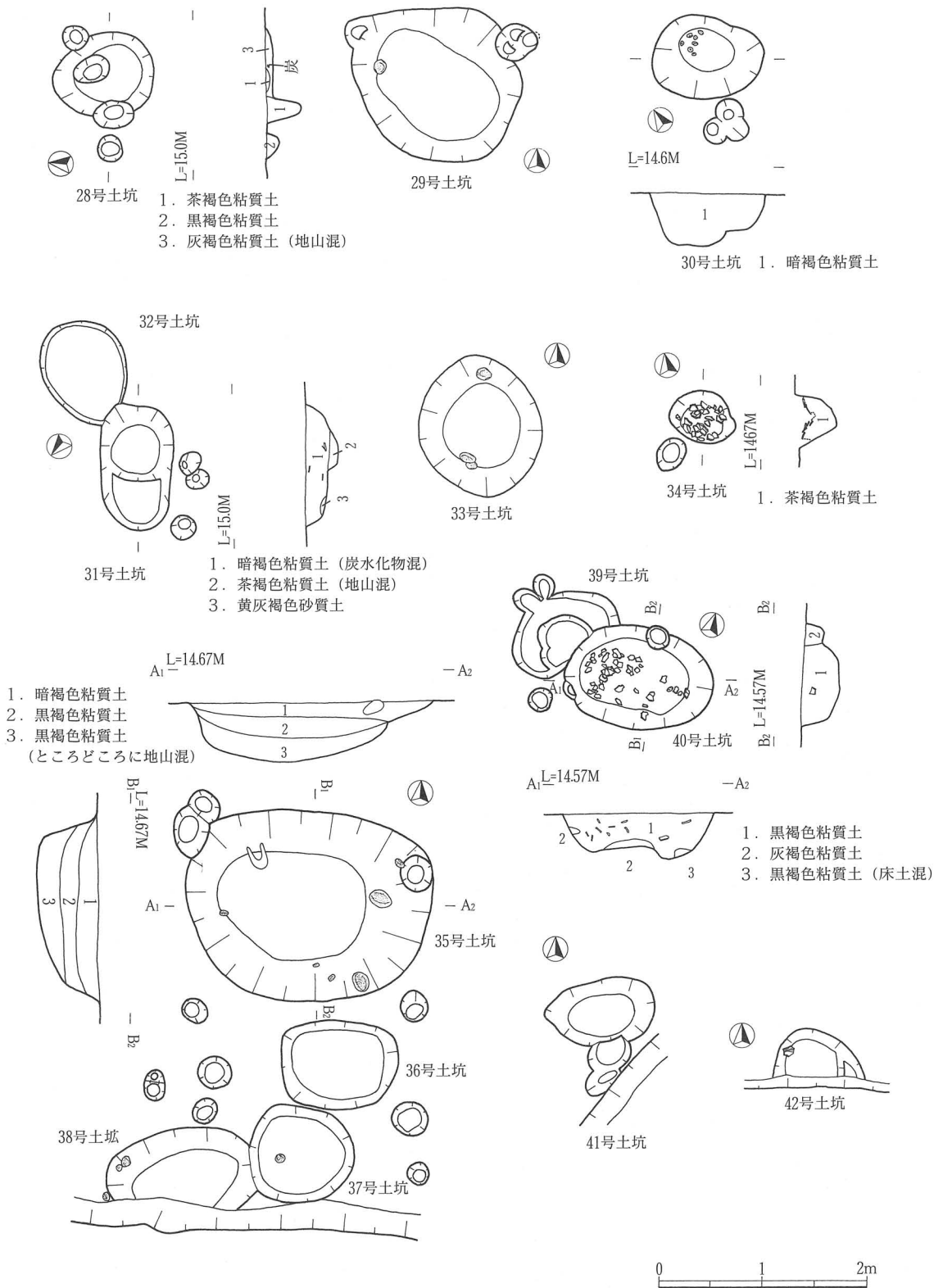
第67图 土坑 (1~11号) (1/60)



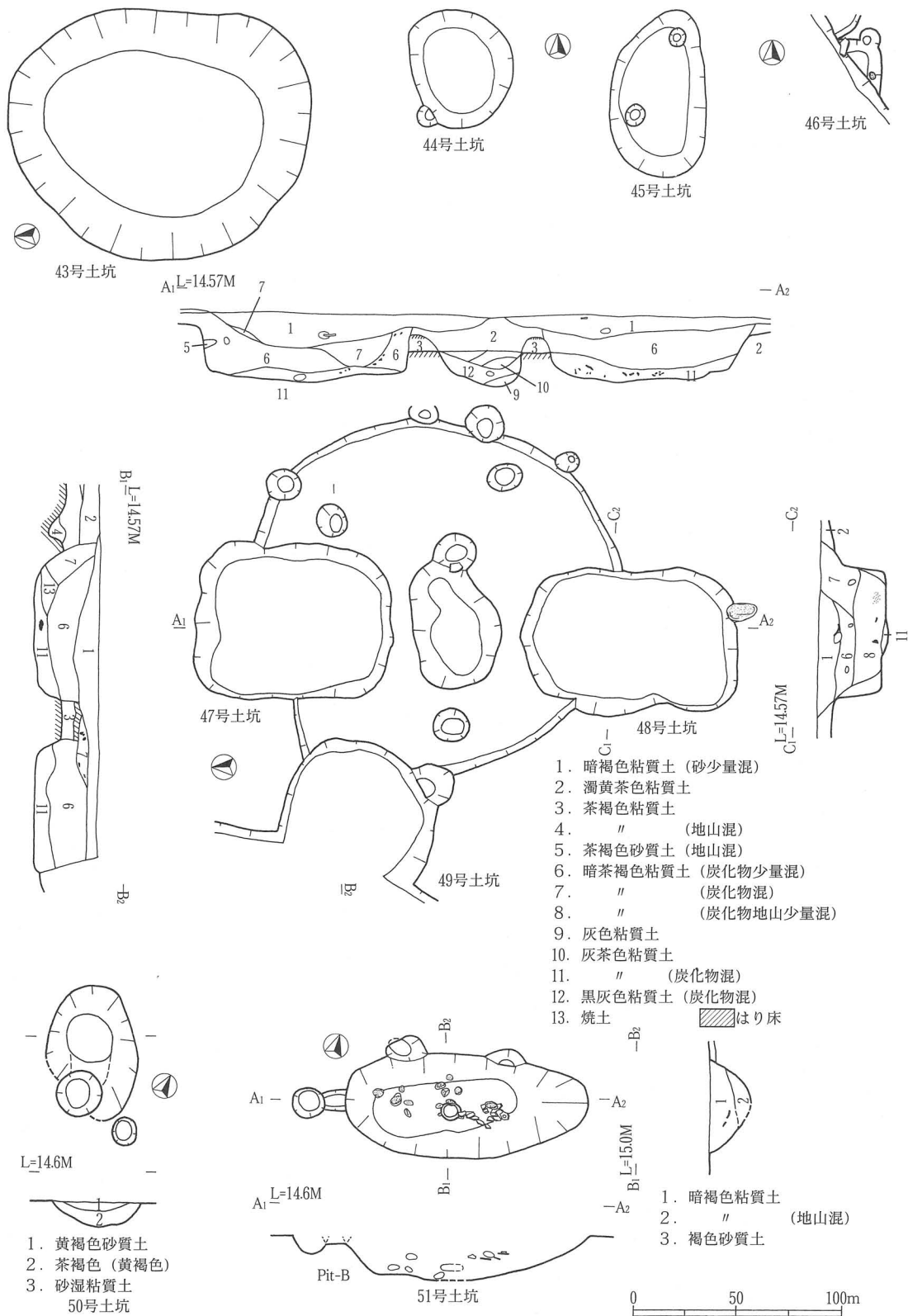
第68图 土坑 (12~16号) (1/60)



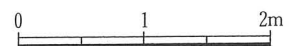
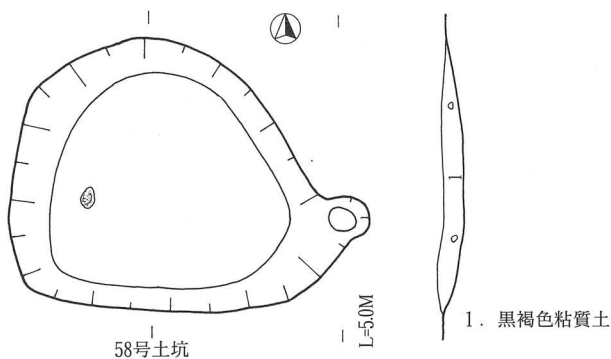
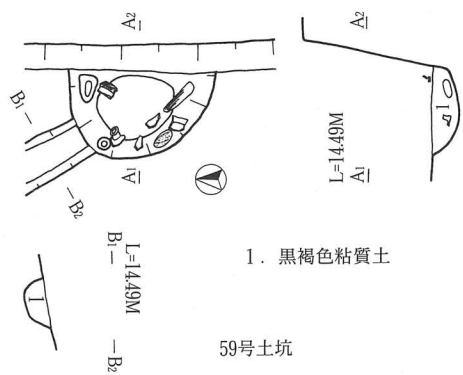
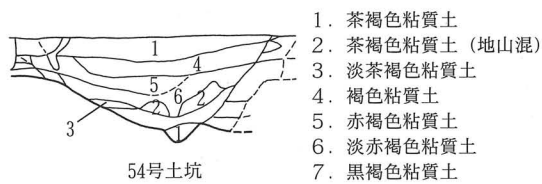
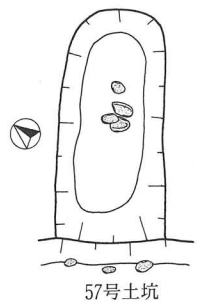
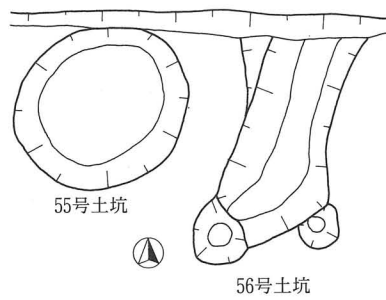
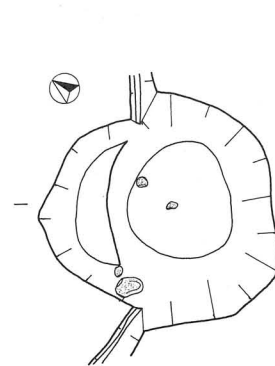
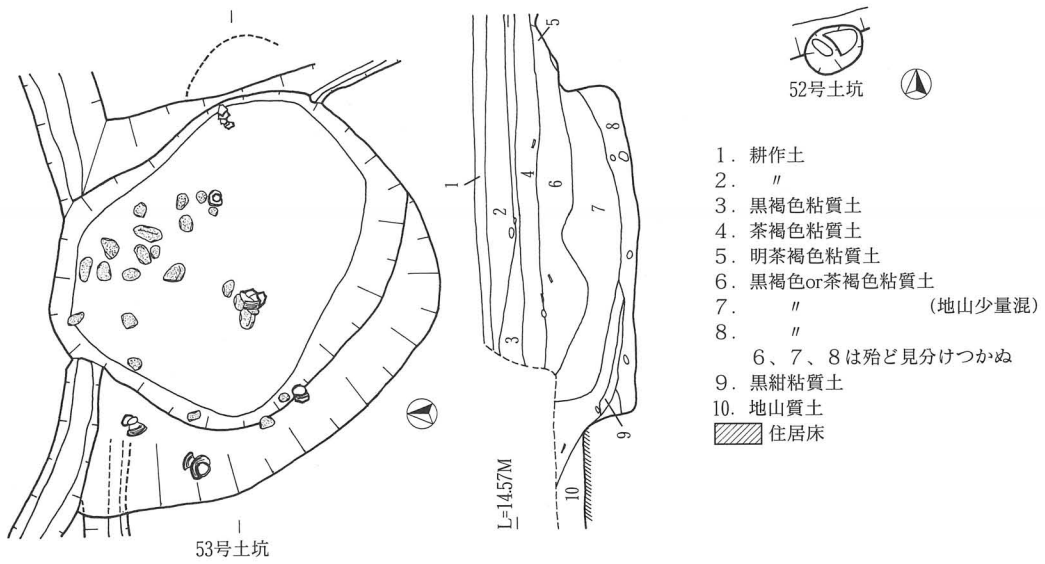
第69图 土坑 (17~27号) (1/60)



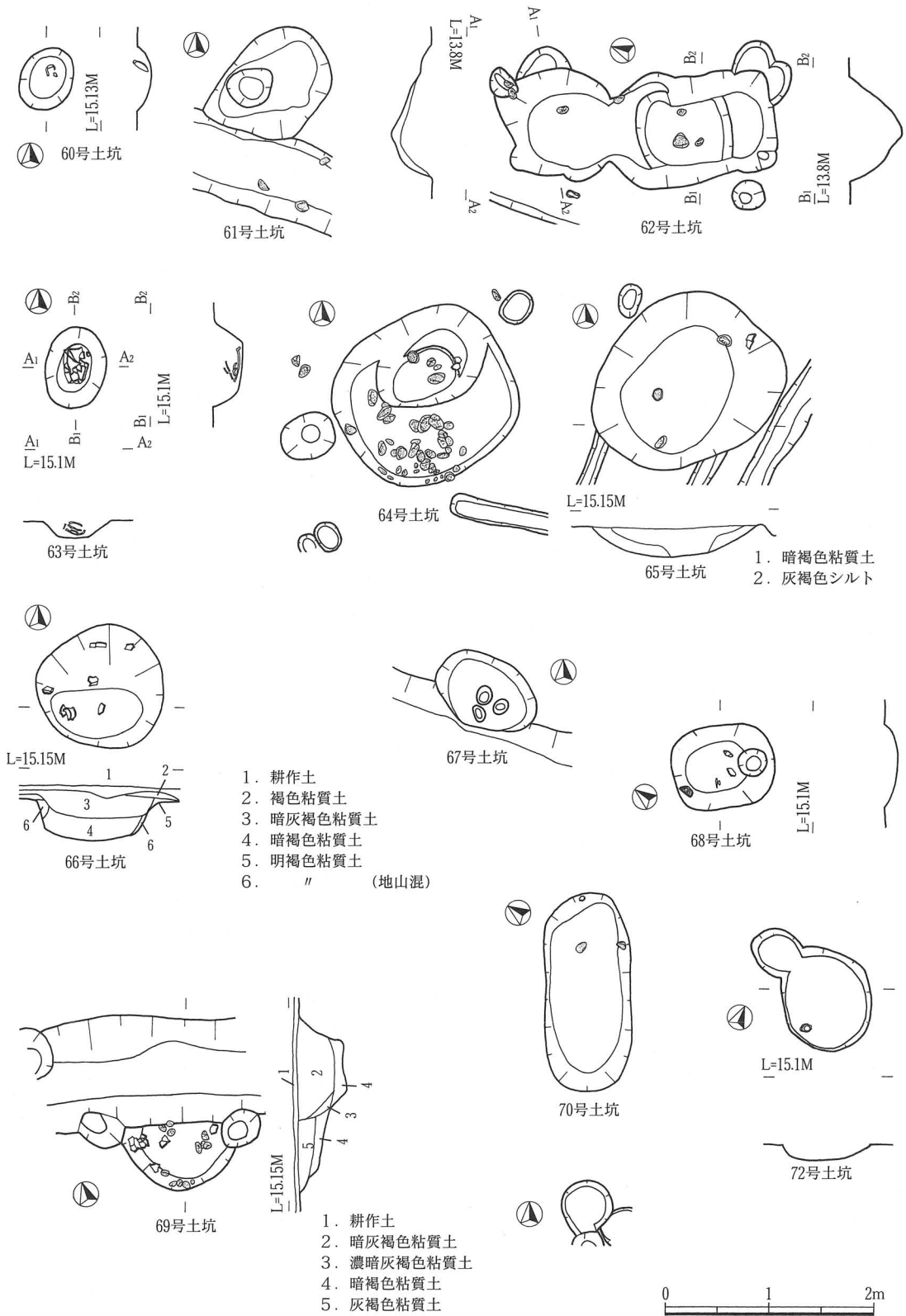
第70図 土坑 (28~42号) (1/60)



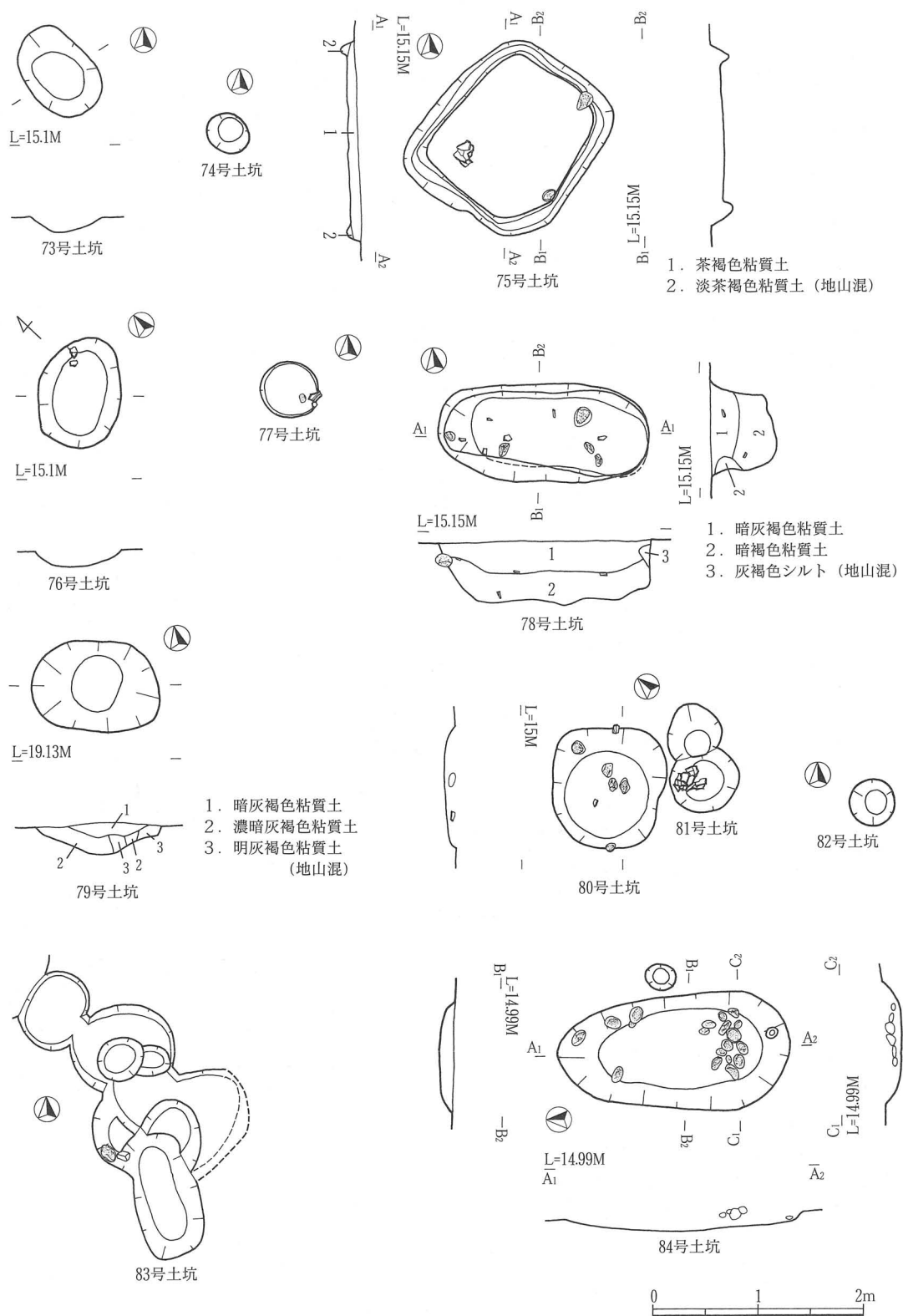
第71図 土坑 (43~51号) (1/60)



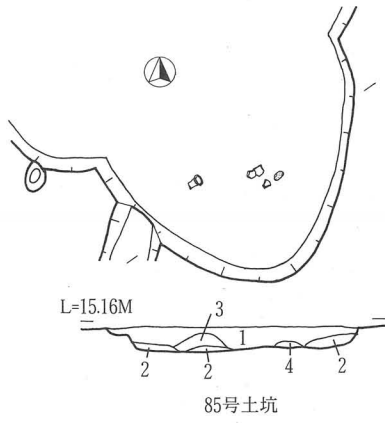
第72図 土坑 (52~59号) (1/60)



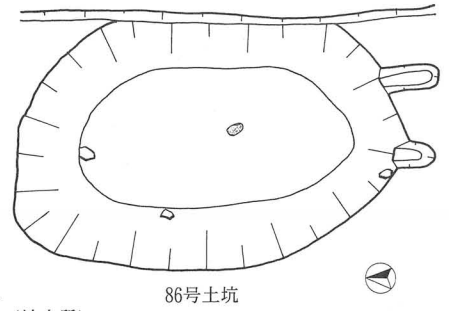
第73図 土坑 (60~72号) (1/60)



第74図 土坑 (73~84号) (1/60)

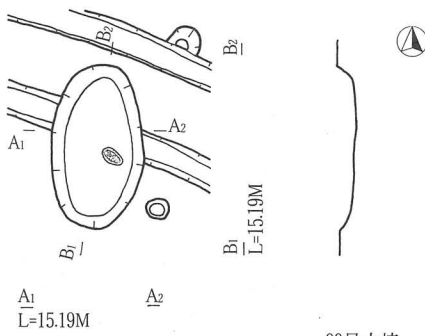


85号土坑

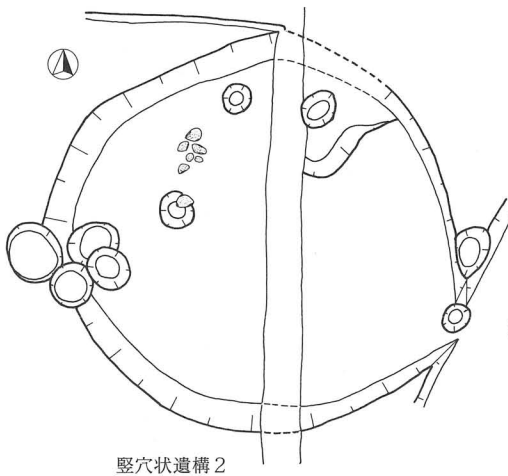
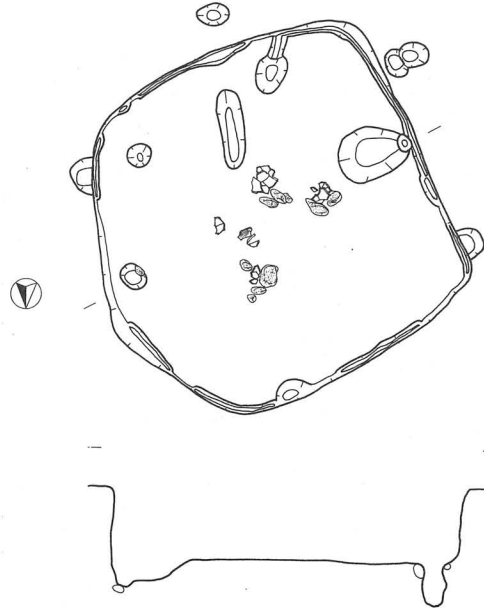


86号土坑

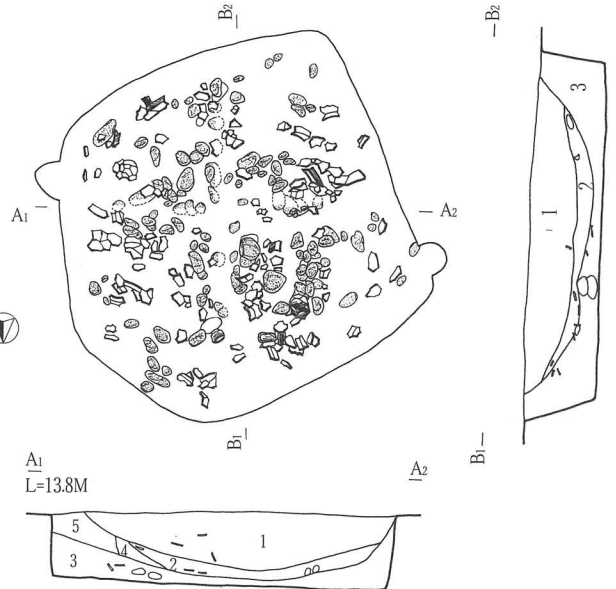
1. 褐色粘質土
2. 褐色粘質土 (地山質)
3. 明褐色粘質土
4. 黒褐色粘質土



88号土坑



竖穴状遺構2



87号土坑 (上段完掘・下段遺物出土状況)

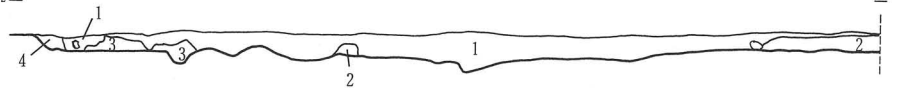
1. 暗褐色粘質土
2. 茶褐色粘質土 (炭化物混)
3. 灰色粘質土 (シルトに近し)
4. 褐色粘質土 (地山混)
5. 褐色粘質土

第75図 土坑 (85~88号)・竖穴状遺構2 (1/60)





B₂L=14.57M



- 1. 黑褐色粘質土
- 2. " (床土混)
- 3. 灰褐色粘質土
- 4. " (床土混)
- 5. " (床土混)
- 6. 欠損



第76圖 豎穴狀遺構 1 (1/60)

1号土坑出土土器（第77図）

1・2はともに無文有段口縁の甕である。いずれも小片のため詳細は不明である。1は内面頸部にハケ調整痕を残し、2は口縁部下端の稜が突出する。

2号土坑出土土器（第78図）

実測にたえる遺物の出土はほとんど見られなかった。図は無文有段口縁の甕の小片である。

3号土坑出土土器（第79図）

1・2はともに擬凹線を有する有段口縁の甕である。1は内屈する短い口縁部に5条の擬凹線を施す。2はやや外反する口縁部に6条の擬凹線を施し、端部は先細りぎみに仕上げる。3は脚裾部である。返し風の面取りを施し1条の沈線を巡らせている。胎土に海綿骨片を僅かに含む。

5号土坑出土土器（第80図）

外反する壺の口頸部であり反転する端部の上面をなでではね上げ状にみせる。外面は面取りされておりハケ状工具によるキザミを施す。胎土に海綿骨片、シャーモットを含む。

6号土坑出土土器（第81図）

高坏の小片1点のみである。坏底部より外反して開く口縁部はやや短めで、端部には面取りが施される。

7号土坑出土土器（第82図）

1・2は擬凹線を有する有段口縁の甕である。1はやや小振りであり口縁部には6条の擬凹線を施す。2は6条の擬凹線を有し内面には指頭圧痕がみられる。また頸部屈曲点下に僅かにハケ調整痕が残存する。3は端部片である。反転した端部を内側に向けて若干屈曲させている。脚裾部片かもしれない。

8号土坑出土土器（第83図）

1はくの字口縁の甕である。端部に面取りを施し内・外面をハケ調整する。内面には僅かにナデ上げの痕跡もみられる。2は平底の底部である。外面はハケ調整をおこなうが内面は磨耗が激しい。いずれも胎土中に海綿骨片を含んでいる。

9号土坑出土土器（第84図）

器種不明の口縁部小片である。内面に歯の長い櫛状工具による羽状刺突文を巡らす。同様なものは西念・南新保遺跡でも散見する。

12号土坑出土土器（第85図）

1は口縁部の断面が三角形を呈する甕である。磨耗が激しいが4条の擬凹線が確認できる。2は外反する有段口縁に7条の擬凹線を施した甕であり、内面口縁部に指頭圧痕、頸部にハケ調整の痕跡が認められる。3は無文有段口縁の甕である。第1口縁部がやや長い。胎土中に海綿骨片を少量含んでいる。4は小さな有段状の口縁部を持つ小型の壺である。胴の張った丸い体部を持つものであろう。5は高坏の坏部である。口径に比べて体高が高い。6・7はともに脚裾部である。6はかなり大型であり返し風に垂直な面を持たせた端部に2条の沈線を巡らせる。7は裾部返し上面にC字状スタンプ文を3列施し外面を赤彩する。

13号土坑出土土器（第86図）

直線的に開く脚裾部である。内・外面ともにハケ調整を施し端部をなでている。胎土には海綿骨片を含んでいる。

14号土坑出土土器（第87図）

珠洲焼の播鉢底部である。播り目は1単位が現状で7条まで確認できる。内面は淡い赤褐色を呈し、若干焼きがあまい。

18号土坑出土土器（第88図）

1は擬凹線を持つ有段口縁の中型甕である。外反する口縁部に8条の擬凹線を施し、内面にはへら状工具による指頭状の圧痕が見られる。2はおそらく器台の受け部であろう。屈曲部外面の稜が若干垂下している。

19号土坑出土土器（第89図）

1は有段風の口縁部を持つ中型壺である。外面に口縁部までハケ調整し、内面はナデを施す。2は甕の底部である。外面はハケ、内面はケズリで調整する。

20号土坑出土土器（第90図）

1～3は擬凹線を有する有段口縁の中型甕である。1は直立する口縁部に7条の擬凹線を施しており、口縁部下端がやや垂下する。2は同じく7条の擬凹線を有するが外面段部の屈曲が1に比べてあまい。内面頸部にハケ調整痕が見られる。3は口縁部がやや外傾し、やはり7条の擬凹線を施す。頸部内面には比較的明瞭な面を持つ。4は有段状の口縁部を持つ小型土器である。外反する口縁部の内面には段が見られず、丸い球状の体部を持つものと思われる。5は小片のため多くはわからない。内・外面ともに丁寧なミガキが施されており、器台の受け部口縁部かと思われる。6は大型の鉢の把手である。平面形が長方形をなす角形に成型されておりミガキ調整をおこなう。類例は刈安野々宮遺跡第23号住居址出土土器中に見られる。

21号土坑出土土器（第91図）

1は無文有段口縁の小型甕である。頸部内面に狭い面を持ちハケ調整痕が見られる。2は蓋である。つまみ部は中凹みであり端部を平縁に仕上げる。内・外面ともに丁寧なミガキを施す。

25号土坑出土土器（第92図）

1・2は擬凹線を持つ有段口縁の甕である。1はやや小振りであり、外反して先細りする口縁部には8条の擬凹線が施される。内面には指頭圧痕が見られる。2はやや外傾する口縁部に7条の擬凹線を施しており、端部は厚く作りも鈍い。3は高坏であろう。屈曲部の稜が突出してやや垂下し、口縁部は大きく外へ開く。2・3の胎土中には海綿骨片を少量含んでいる。

その他の遺物（第93図）

当土坑からは土器の他に打製石斧が1点出土している。基部の幅が刃部のそれよりも狭いタイプのもので、敲打によってくびれ部を作り出している。表裏面ともに自然面を残しており、刃部先端には使用による磨耗の痕跡が認められる。

26号土坑出土土器（第94図）

1は有段口縁の甕であり、小さな口縁部はずんぐりとした作りで指頭状の断面形を呈する。2は高坏の坏部である。坏底部が深く口縁部は短い。内・外面ともに赤彩を施す。

29号土坑出土土器（第95図）

1は小片であるが無文有段口縁の甕であろう。頸部の屈曲が緩やかで第1口縁が長めである。2は底部穿孔の鉢である。重厚な作りの底部に胴部から口縁部までが直線的に伸びる。端部は先細りに仕上げ、外面はハケ調整の後ナデをおこないハケ目を消している。3は偏球状の胴部を持つと思われる有段口縁の小型広口壺である。口縁部外面は4条の擬凹線を施した後ミガキ調整をおこなう。内面の段は弱い。4はくの字口縁を呈する小型土器である。頸部外面に横位の強いナデを施して小さく凹ませ、弱い有段状に見せる。5は小型の高坏の類であろうか。内湾ぎみに立ち上がる体部の外面に稜を持たせて垂直に仕上げる。小片のため器種は不明である。6は小型の脚裾部である。端部に中凹みの面取りを施している。

31号土坑出土土器（第96図）

1は外反する口縁部に7条の擬凹線を施す有段口縁の甕である。端部は先細りぎみに仕上げる。2は大型の高坏の柱状部である。大きく開く裾部との屈曲部に突帯を巡らせ有段風に見せており、キザミなどの加飾はおこなわない。

34号土坑出土土器（第97図）

1はくの字口縁の甕である。外反する口縁文にヘラ状工具によるナデを1巡りさせ、さらにその上部に両側からつまんで強いナデを施すことによって弱い有段口縁風にみせる。肩部にはハケ

状工具によるキザミを巡らせている。2もくの字口縁の甕であるが、やや内弯する口縁部の中程に細い突帯を巡らせており、外面から見ると一見有段口縁風に見える。

35号土坑出土遺物（第98・99図）

第98図は砥石である。実測図の四方すべてを欠損しており、断面形は現状で長方形を呈する。表裏両面に使用痕が認められる。第99図は鉄製の鋏先である。木製の本体にかぶせる形式のもので、木部を受けるV字状の溝が内側に沿って巡る。本品は土坑の上層からの出土であり、年代は中世に帰属させるのが妥当であろう。土坑自体は、図示し得なかったが弥生時代終末期に属する土器の小片が若干出土しており該期のものと思われる。

38号土坑出土土器（第100図）

1は器台の脚部である。緩くラッパ状に開く裾端部は面取りされている。2は高坏の脚部であり、やはり緩くラッパ状態に開く。磨耗が激しく調整は不明である。3は珠洲焼の摺鉢底部である。摺り目は現状で1単位10条を教える。

40号土坑出土土器（第101図）

無文有段口縁の甕である。小片のため詳細は不明である。

41号土坑出土土器（第102図）

端部を返し状に仕上げた脚裾部である。小片のためそれ以上はわからない。

43号土坑出土土器（第103図）

外面に赤彩を施す脚裾部である。端部を小さな返し状に仕上げる。

44号土坑出土土器（第104図）

外反する口縁部に5条の擬凹線を施す有段口縁の甕である。肩部にハケ状工具による斜行キザミを巡らせている。

46号土坑出土土器（第105図）

珠洲焼の摺鉢口縁部である。摺り目は現状で1単位8条を数え、面取りを施した口縁端部には凹線を1条巡らせている。

51号土坑出土土器（第106図）

外反する口縁部に胴部最大径が口径を越えると思われる胴部を持つ甕である。端部をつまみ上げ風になでて、その上端にハケ状工具によるキザミを施している。弥生時代中期に属するものである。

52号土坑出土土器（第107図）

中型の器台の受け部である。筒胴部から直接受け部につながり、突起状の段を形成して口縁部にいたるプロポーションを呈する。内・外面ともに丁寧なミガキを施している。

53号土坑出土土器（第109図）

1～3は擬凹線を有する有段口縁の甕である。1は小型で外傾する口縁部に7条の擬凹線を施す。内面に指頭圧痕がみられ頸部の稜線の下にはハケ調整痕が僅かに残っている。2は中型であり、やや外反する重厚な作りの口縁部に6条の擬凹線を施し頸部内面に面を持つ。3も中型であり外反の度合いがやや強く、外面の稜も鋭い。内面に指頭圧痕を持ち、頸部の面にもハケ調整が見られる。4は無文有段口縁の中型甕である。5は外面および内面頸部までを赤彩する有段口縁の壺である。胴の張る体部を持つものであろう。6・7は同一個体であり、脚台を持つ底部から直線的に立ち上がる体部を持つ椀形の鉢である。外面口縁部をミガキ、体部をナデ、内面にミガキ調整を施して端部はやや内湾ぎみの先細りに仕上げる。脚台部は指押さえによる作り出しである。8は高坏の口縁部である。9は大きく胴の張る壺の底部である。外底面は中凹みに仕上げる。10は内・外面ともに丁寧なミガキを施した脚台部である。

その他の遺物（第108図）

用途不明の石製品である。実測図の上下を欠いており、左右には表裏面ともに押圧剥離により刃部を作り出している。どちらも自然面の残存は認められない。

54号土坑出土土器（第110図）

台付装飾壺の胴部である。胴部最大径付近の突帯を境にして、上部は2条1組の浅い平行沈線を2組巡らせてそれぞれの施文帯に貝殻腹縁状工具による刺突文と、1巻半の単純な陰刻渦巻状スタンプ文を施す。下部はさらに1条の小さな突帯を巡らせて両側に渦巻状スタンプ文のみを施し、2条の浅い平行沈線を挟んで貝殻腹縁状工具のみを刺突する。磨耗が激しく小片であるため施文の規則性などは判別できない。

57号土坑出土土器（第111図）

1は無文有段口縁の甕である。口縁部内面上部に指頭圧痕を持つ。2はやや小振りの高坏である。外面屈曲部の稜が丸みを持ち、端部を下方につまみ出している。

58号土坑出土土器（第112図）

極めて小片であり磨耗も激しい。器種、調整ともに不明である。

59号土坑出土土器（第113図）

1は小型の有段口縁の甕である。短い口縁部に5条の擬凹線を施しており胴部もあまり張らない。2は無文有段口縁の甕である。強いナデによって屈曲部の稜が突出し、肩部はかなり大きく

張り出す。丸い胴部を持つ中型の甕であろう。3は高坏の柱状部である。裾部は緩やかに開きラッパ状をなすものであろう。

60号土坑出土土器（第114図）

大型の磨石が1点出土している。実測図の上端および右下が欠損しており、表面上部が一部剥離している。断面は偏平な楕円形を呈しており、敲打痕は見られずすべて磨面である。

63号土坑出土土器（第115図）

底部を若干欠いているがほぼ完形の長胴甕である。頸部は比較的明瞭であり、直線的に伸びる口縁部は端部を上方につまみ上げてやや内屈させる。胴部最大径は口径をやや上回り、ロクロを用いた成形である。口頸部は内・外面ともにナデ、胴部は外面下半を平行タタキ、上半にかき目調整を施し、内面は下反を同心円タタキ、上半をかき目とナデ調整で仕上げている。9世紀後半代に比定されよう。

64号土坑出土土器（第116図）

1は有段口縁の甕である。頸部までに比べて口縁部の器壁が薄く、下端に擬凹線を2条のみ巡らせている。頸部内面に幅の広い面を持ちハケ調整が施される。2・3はいずれも無文有段口縁の甕である。2は内面に段を持たず頸部の屈曲点の稜が鋭い。外面は断面三角状の稜を作り出して段部としている。3は外面頸部にミガキ調整を施す。段部の稜は鋭い。4は小型高坏の坏部である。内・外面ともに丁寧なミガキを施し、口径に比べて体部が深い。5は高坏の柱状部である。緩やかに開く裾部には全周で4箇所透孔を穿つ。

66号土坑出土土器（第117図）

1・2は小型の擬凹線を有する有段口縁の甕である。1は直立する短い口縁部に5条の擬凹線を施す。2は直立する重厚な作りの口縁部に6条の擬凹線を施し、口縁部下端の稜がやや垂下する。3～5は中型の擬凹線を持つ有段口縁の甕である。3は小さな口縁部に肩の張る丸い胴部を持つもので、6条の擬凹線を施す口縁端部はずんぐりとした丸縁である。4は外傾する口縁部の下半に3条の擬凹線を施し、内面に指頭圧痕を持つ。5は外反する口縁部に8条の擬凹線を有し、内面には指頭圧痕を持つ。4・5ともに頸部内面の屈曲点はかなり下方に下がっている。6・7はいずれも無文有段口縁の小型甕である。

67号土坑出土土器（第118図）

1はくの字状口縁の小型甕であり端部断面形が三角状を呈するものである。2もくの字口縁の甕であるが、長い口縁部の上半を緩く屈曲させている。器壁は薄い。

68号土坑出土土器（第119図）

結合器台の受け部である。垂下帯はかなり内側に向けて取り付けられている。透かし穴の形状および上部構造については小片のため不明である。

69号土坑出土土器（第120図）

1は有段口縁を持つ大型の鉢である。若干外傾する口縁部には8条の擬凹線を施し、内面には指頭圧痕がみられる。胴部はあまり張らず最大径は口径を超えないものと思われる。把手の有無は現状では確認できない。2は有段口縁を持つ小型土器である。推定される器高に比べて長い口縁部の上下に1条ずつの擬凹線を巡らせ、後に内・外面ともにミガキで調整している。体部は肩の張る丸いものであろう。3は1と同一個体の底部である。

71号土坑出土土器（第121図）

脚裾部の小片である。器壁の厚い返し状に作った端部には2条の太い凹線が巡る。

72号土坑出土土器（第122図）

1は擬凹線を有する有段口縁の甕である。6条の擬凹線を施し内面には指頭圧痕を持つ。2は無文有段口縁の甕である。口縁部はやや外反し外面屈曲部の稜は鋭い。

74号土坑出土土器（第123図）

口縁部の小片である。外反する口縁端部を内側につまみ上げて丸縁に仕上げる。器種はわからない。

75号土坑出土土器（第124図）

1は外反する口縁部に5条の擬凹線を施す有段口縁の甕である。頸部内面には面を持たず、屈曲部の稜が鋭い。2は造り出しの脚台を持つ底部である。内・外面ともにハケ調整を施し、中心が凹む。3は内・外面に丁寧なミガキ調整をし、赤彩を施す蓋である。端部は平縁に面取りされている。

78号土坑出土土器（第125図）

1～3はいずれも擬凹線を有する有段口縁の甕である。1は小型品で外傾する口縁部に5条の擬凹線を施す。頸部内面にはハケ調整痕が見られる。2は短い口縁部が直立し5条の擬凹線を持つ中型品である。頸部内面には面が見られない。3も中型品であり外反する口縁部に6条の擬凹線を持つ。内面に指頭圧痕が見られ頸部内面には幅の広い面を持つがハケ調整痕は認められない。4は有段状の小さな口縁部を持つ壺である。端部に内傾する面取りをおこなう。

79号土坑出土土器（第126図）

1・2はいずれも擬凹線を有する有段口縁の甕である。ともに外面屈曲部の稜は鋭いが、1は

下端が若干垂下しており2は内面に指頭圧痕を有する。1・2ともに頸部内面に面は持たない。

81号土坑出土土器（第127図）

1・2はいずれも弥生時代中期に属するものである。1は外反する口縁部が反転し、面取り下端部にハケ状工具によるキザミを施した甕である。内・外面ともにハケ調整が頸部にまでおよび、外面は頸部に横位のナデを、内面は胴部下半にナデ上げをそれぞれ施している。また胴部最大径は口径を超えることはない。2は底部付近より外反して大きく開き、中程で内弯に転じて丸い胴部を形作るものである。外面は斜行するハケ調整を施した後等間隔で直線的なハケ調整をおこない、最後に部分的なミガキを施している。内面はハケ調整のあと一部にナデをおこなう。底部および胴部上半を欠いており全体の器形は不明である。

82号土坑出土土器（第128図）

無文有段口縁の甕である。第1口縁が長く短く屈曲する口縁部を持つ。

84号土坑出土土器（第129図）

小型の高坏もしくは器台の類である。屈曲部の稜は明瞭で、内・外面ともに丁寧なミガキを施している。

85号土坑出土遺物（第130図）

管玉が1点出土している。長さ10.2mm、径2.8mm、孔径1.2mmを測り孔は両面穿孔である。石質は俗に赤岩といわれる含鉄珪質岩である。

87号土坑出土土器（第131～134図）

当土坑からはかなりまとまった量の土器の出土がある。

1は口径32.6cmを測る特大の甕である。屈曲部が突出して外反する口縁部には1単位4条の擬凹線を2巡させており、内面には指頭圧痕が見られる。端部は中凹みの平縁に面取りされている。2は大型の擬凹線を有する有段口縁の甕である。外反する口縁部の下端はやや垂下し、内面に指頭圧痕が見られる。頸部内面には幅の広い面を持ちハケ調整痕が認められる。3～23はいずれも擬凹線を持つ有段口縁の中型甕である。口縁形態や指頭圧痕の有無、頸部内面の仕様や擬凹線が口縁部の一部にのみ施されるなど種々の面でバラエティーに富んでいる。この内7は底部片であり、これらの中型甕に付随するものであろう。なお個々の分類については節末の土器観察表を参照願いたい。24ははね上げ状の口縁を持つ甕である。25は無文有段口縁の甕である。内・外面ともに段部の屈曲は緩く、はっきりとした稜を持たない。27は外面の屈曲部の稜が鋭く内面には上下2段の指頭圧痕を持つ。28は口縁部が僅かに屈曲し、有段風に見せるくの字口縁の小型甕である。胴の張る丸い体部を待つ。29は小片のため不明である。断面が三角形状を呈する端部は下端が垂下し、外面に2条の沈線を巡らせている。30は大型の無文有段口縁の甕である。口縁部は大

きく外反し端部は丸縁である。31～34は有段口縁の小型広口壺である。31は口縁部に8条の擬凹線を施しており外面下端が垂下する。外面および内面頸部までを赤彩する。32は下膨れの胴部である。33は32よりも胴部最大径がやや上位にある。磨耗が激しく調整は不明である。34は口縁端部を欠いている。外面および内面頸部までを赤彩しており、丸く張る胴部はさほど下膨れとはならない。底部付近のミガキ調整の手法は31に類似している。35は有段状の口縁部を持つものである。頸部内面はくの字状を呈し、胴部は丸いが最大径は口径を超えることはない。鉢であろうか。36は肩が大きく張り出し頸部の細い中型壺である。内・外面ともにミガキ調整をおこない内面頸部下にまでおよぶ。37は小型の有段風の口縁部を持つものである。磨耗が激しく詳細は不明である。38～40はいずれも脚台を持つ底部である。38は内・外面ともに赤彩を施している。40は底径の大きなものであり、外面に赤彩を施す。41は中型の有段状の口縁部を持つ壺である。肩部に稜の鋭い突帯を巡らせるが施文はおこなわれない。42は胴部が大きく張り出し偏球状をなす壺の体部である。外面はハケ調整の後ミガキを3段階に分割しておこない、内面はハケ調整の後胴部最大径付近から下のハケ目をなで消している。43は有段状の口縁部を持つ壺である。41よりも屈曲部上の口縁部が長く、外面屈曲部には粘土帯らしきものが剥離した痕跡を残す。44は砲弾形を呈する尖底土器である。端部は先細りしており調整は磨耗のため不明である。45は外傾する胴部を上方につまみ上げて内湾する口縁部を作り出した鉢である。外面のハケ調整および内面のケズリが口縁部近くにまでおよび、端部は両面ともナデを施す。46は底部穿孔土器である。外面はミガキ、内面はケズリの後部分的にミガキを施している。47は小型高坏である。調整は内・外面ともにハケを主体としており、外面は後に雑なミガキを施す。48は低脚の高杯である。口縁部を欠損しているが外上方へ外反して伸びるタイプのもと思われる、脚部は大きく開く。49は端部片である。重厚な作りであり、垂下して三角状の断面形をなす端部には3条のヘラ状工具による凹線を巡らせている。50は器台の受け部であろうか。屈曲して直立する口縁部の外面稜はやや垂下ぐみである。51も器台の受け部である。52～56はいずれも脚部および脚裾部である。52は端部に返しを持ち外面に赤彩を施す。54・56はともに有段状をなし、段部と脚部の境に透かし穴を穿孔している。

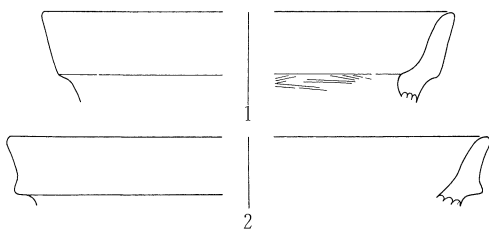
5 竪穴状遺構

竪穴状遺構1 (第76図)

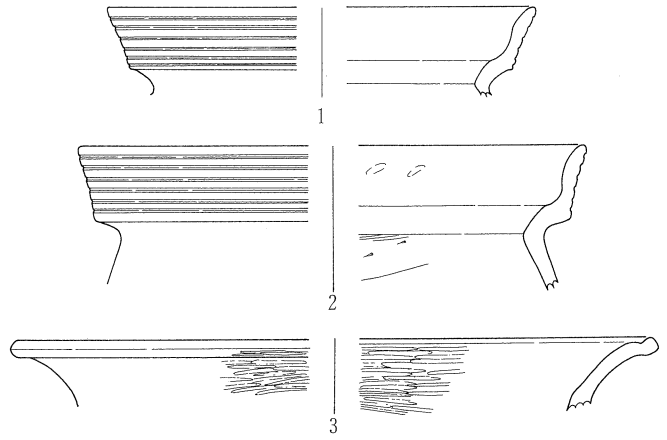
調査区中央やや北、6号住居の北側に位置する。5.7×6.0mの規模を測る。面積は約25m²である。床面は凹凸があるが硬く締まっている。床面に2条対の小溝3対を有するが用途は不明である。不整な隅丸方形の竪穴住居になる可能性を持つ。深さは15～25cmである。

竪穴状遺構2 (第75図)

調査区東側中央に位置し、16号住居に接する。形状は略円形を呈する。径3.1mで、深さ25cmである。



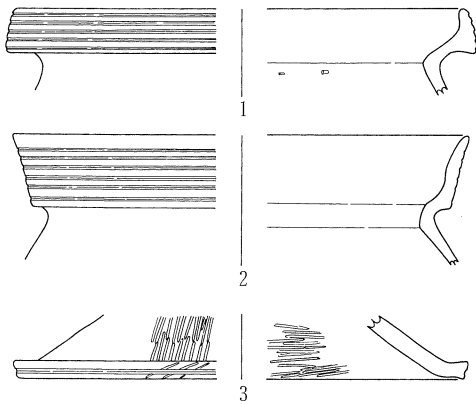
第77图 1号土坑出土土器 (1/3)



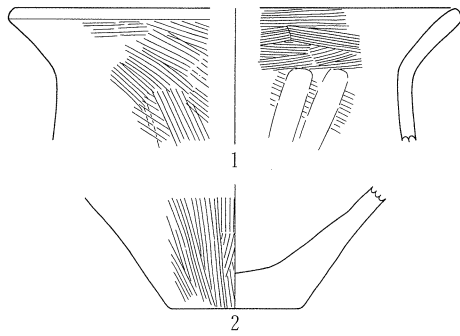
第82图 7号土坑出土土器 (1/3)



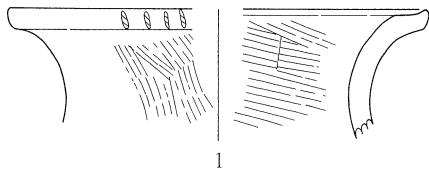
第78图 2号土坑出土土器 (1/3)



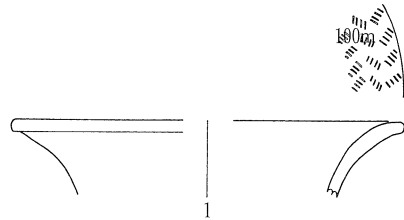
第79图 3号土坑出土土器 (1/3)



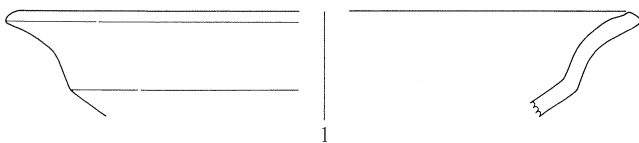
第83图 8号土坑出土土器 (1/3)



第80图 5号土坑出土土器 (1/3)

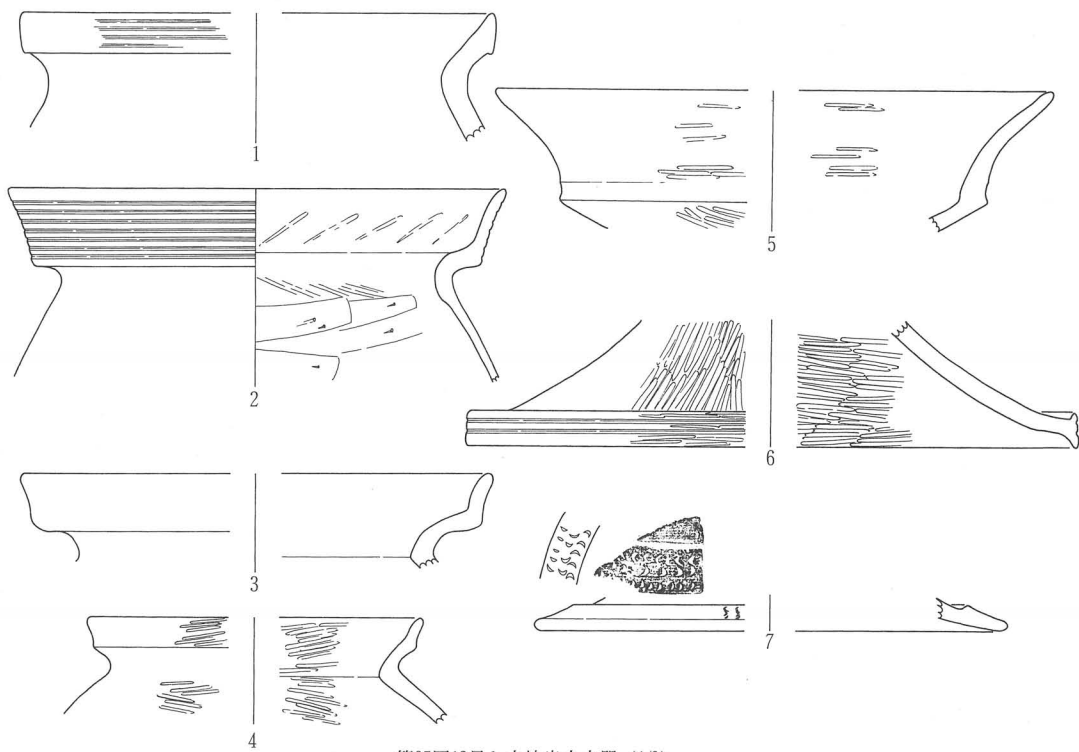


第84图 9号土坑出土土器 (1/3)

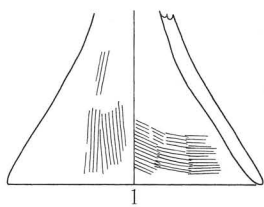


第81图 6号土坑出土土器 (1/3)

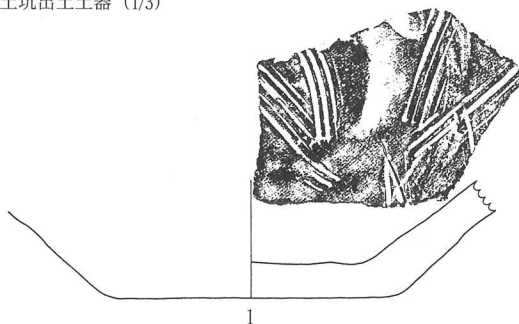
第77~84图 (1~9号土坑)



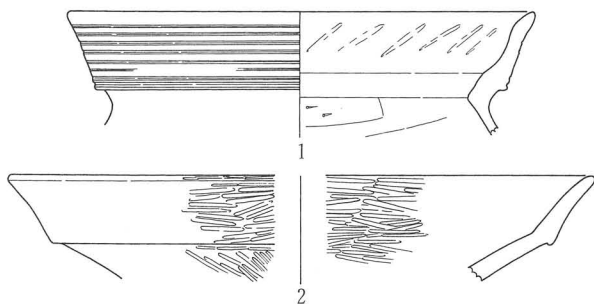
第85图12号b土坑出土土器 (1/3)



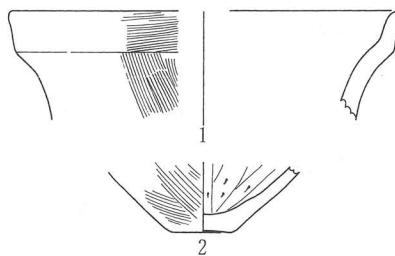
第86图13号土坑出土土器 (1/3)



第87图14号土坑出土土器 (1/3)

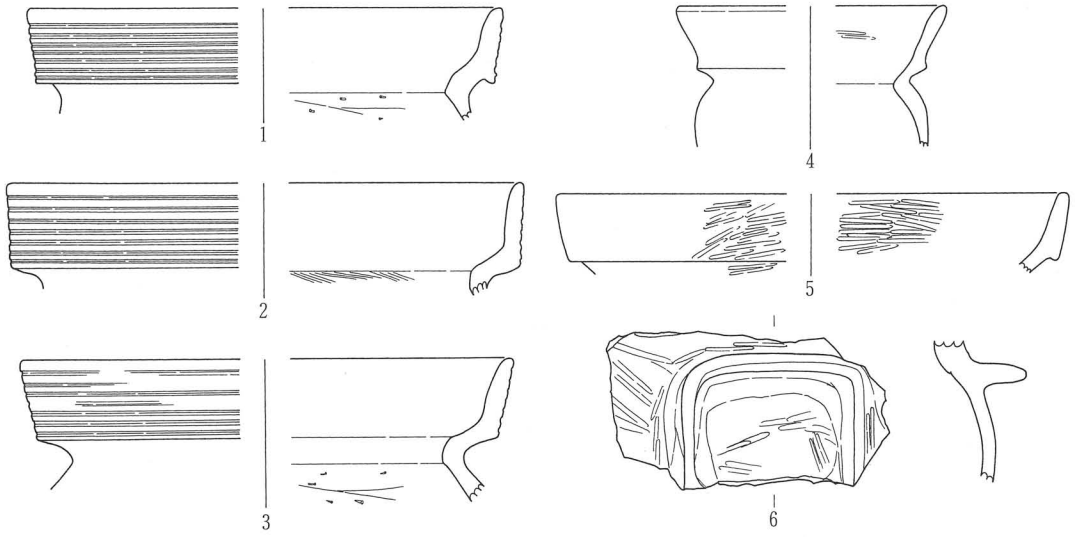


第88图18号土坑出土土器 (1/3)

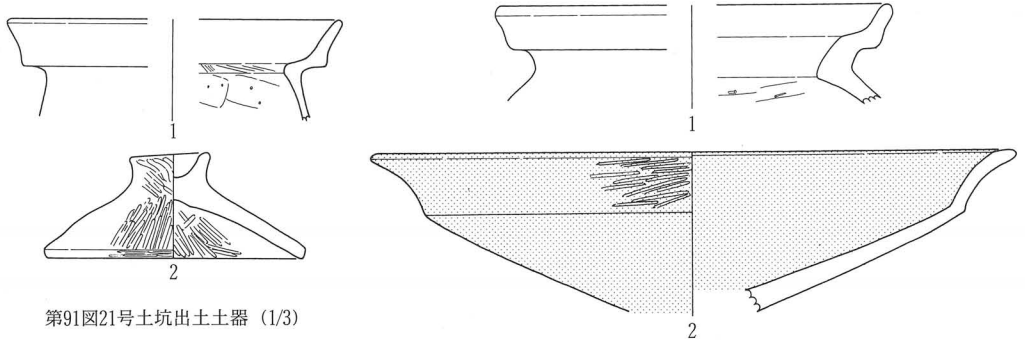


第89图19号b土坑出土土器 (1/3)

第85~89图 (12~14·18·19号土坑)

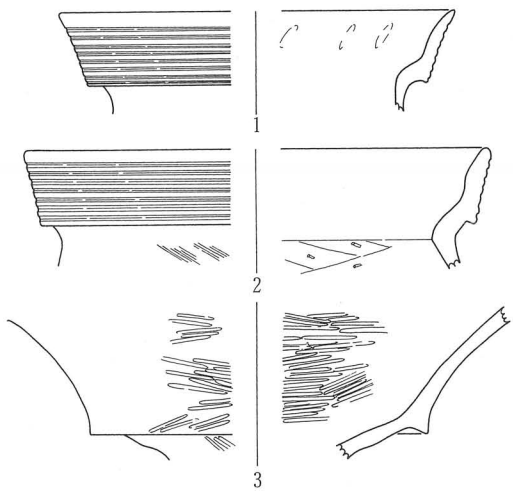


第90图20号土坑出土土器 (1/3)

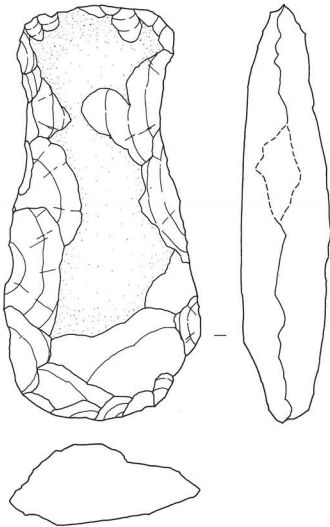


第91图21号土坑出土土器 (1/3)

第94图26号土坑出土土器 (1/3)

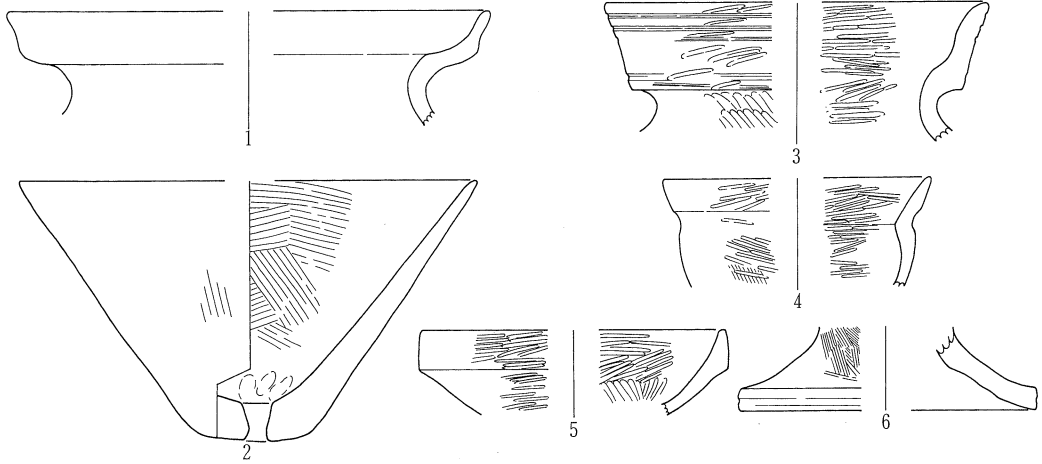


第92图25号土坑出土土器 (1/3)

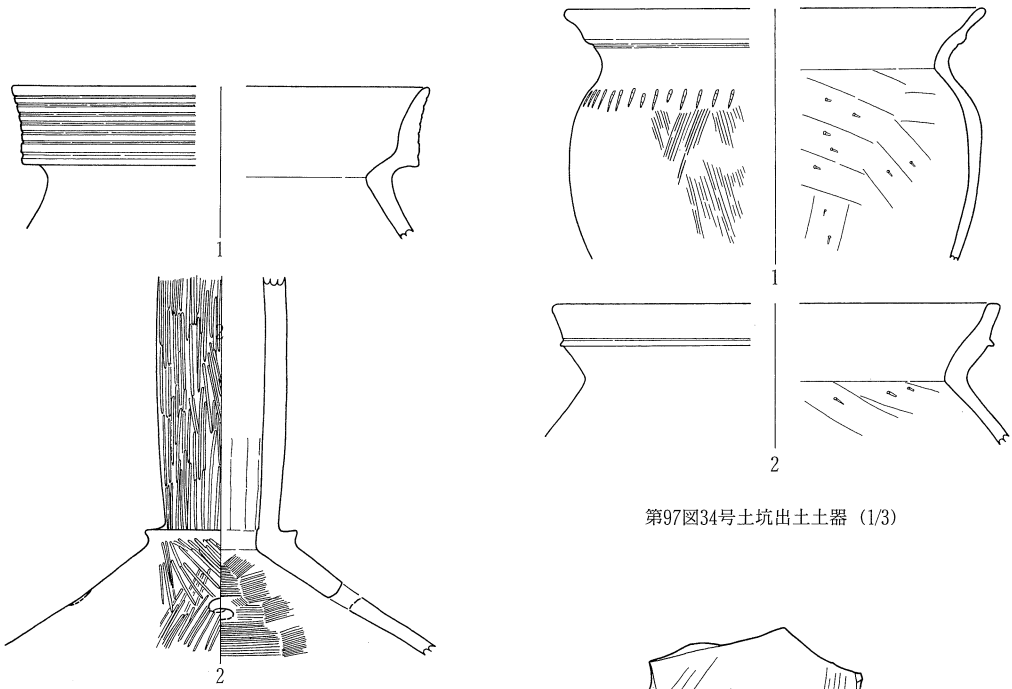


第93图25号土坑出土石器 (1/3)

第90图~94图 (20·21·25·26号土坑)

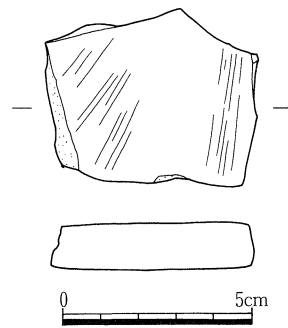


第95图29号土坑出土土器 (1/3)



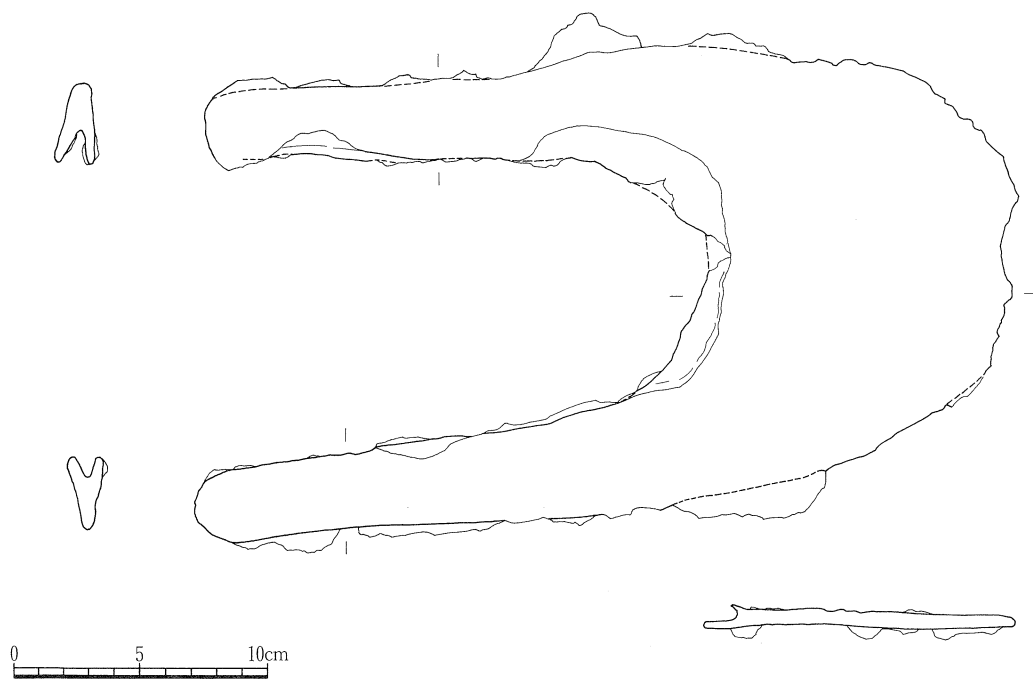
第97图34号土坑出土土器 (1/3)

第96图31号土坑出土土器 (1/3)

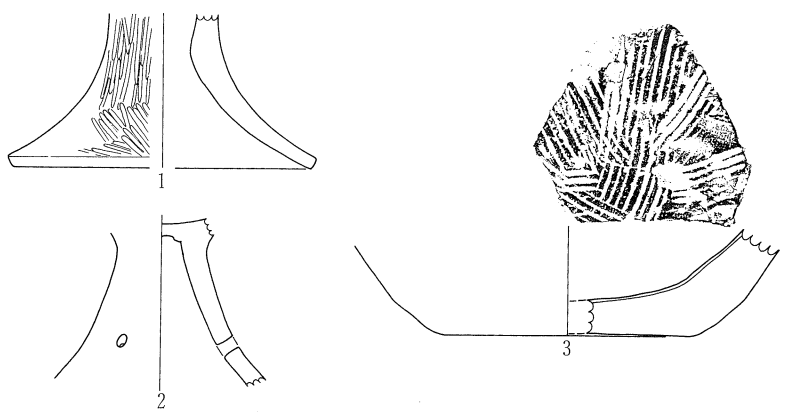


第98图35号土坑出土砥石 (1/2)

第95图~98图 (29·31·34·35号土坑)



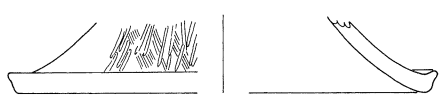
第99图35号土坑出土铁器 (1/3)



第100图38号土坑出土土器 (1/3)

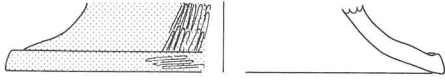


第101图40号土坑出土土器 (1/3)

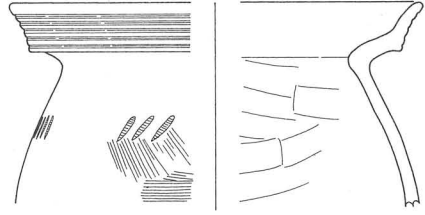


第102图41号土坑出土土器 (1/3)

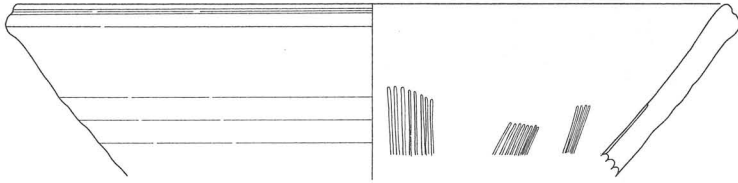
第99图~102图 (35·38·40·41号土坑)



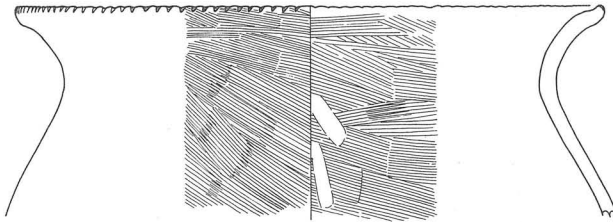
第103图43号土坑出土土器 (1/3)



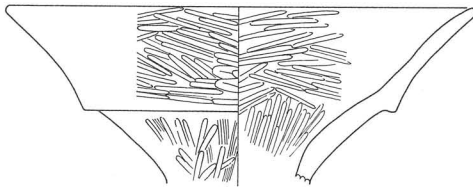
第104图44号土坑出土土器 (1/3)



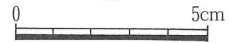
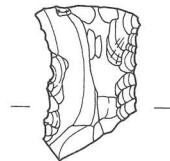
第105图46号土坑出土土器 (1/3)



第106图51号土坑出土土器 (1/3)

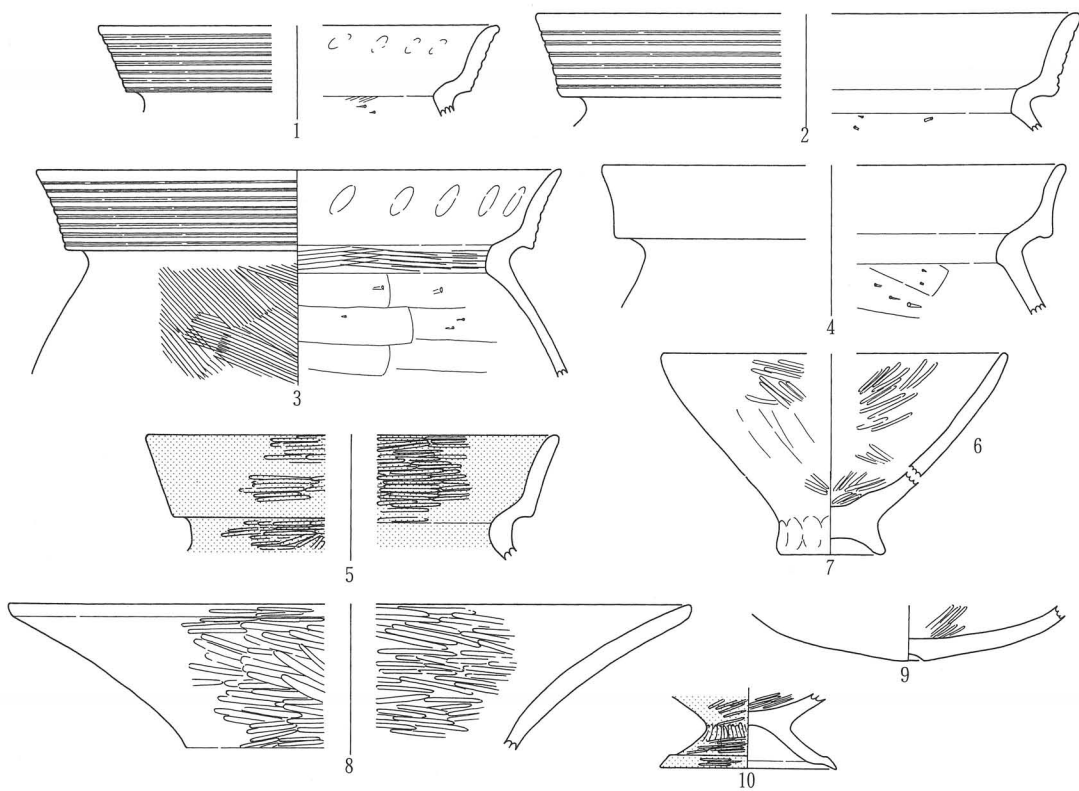


第107图52号土坑出土土器 (1/3)

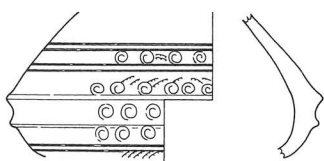


第108图53号土坑出土土器 (1/2)

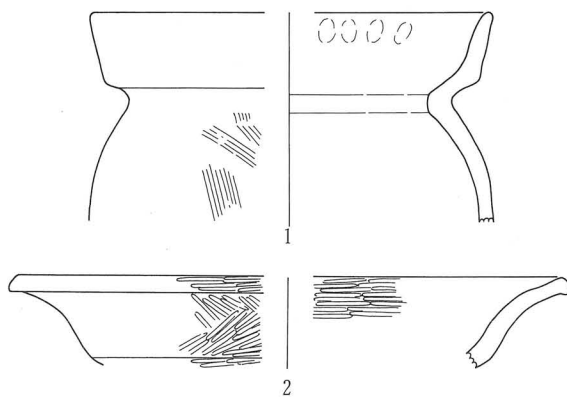
第103图~108图 (43·44·46·51~53号土坑)



第109图53号土坑出土土器 (1/3)



第110图55号土坑出土土器 (1/3)

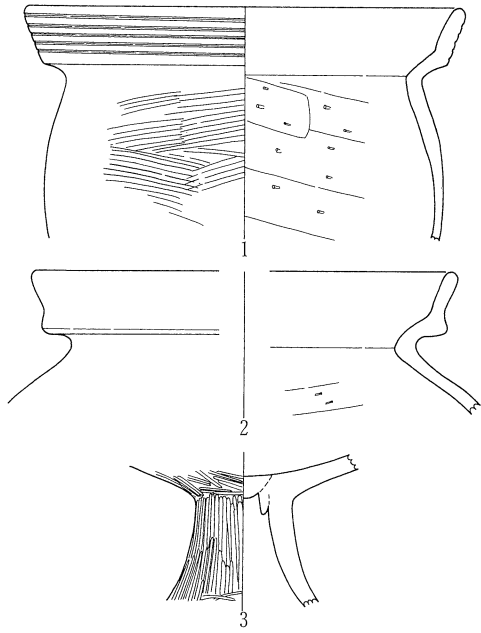


第111图57号土坑出土土器 (1/3)

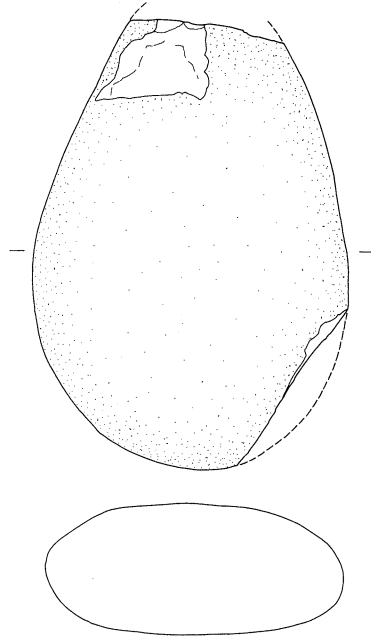


第112图58号土坑出土土器 (1/3)

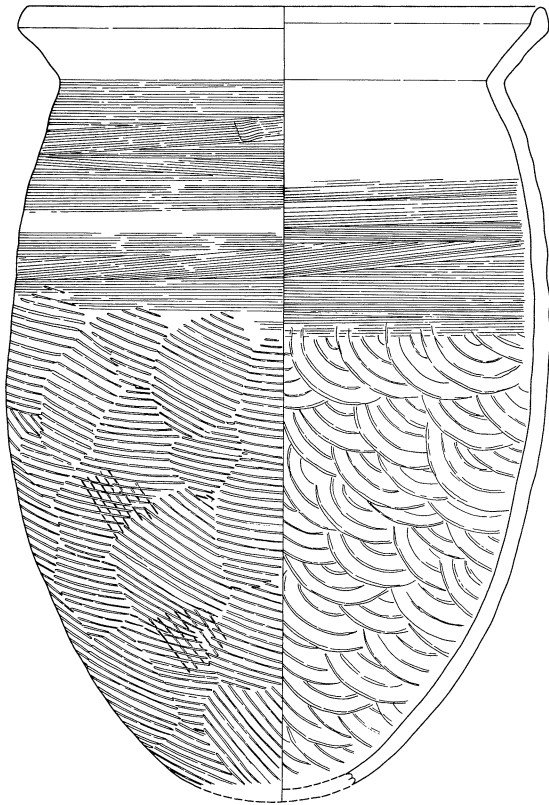
第109图~112图 (53·55·57·58号土坑)



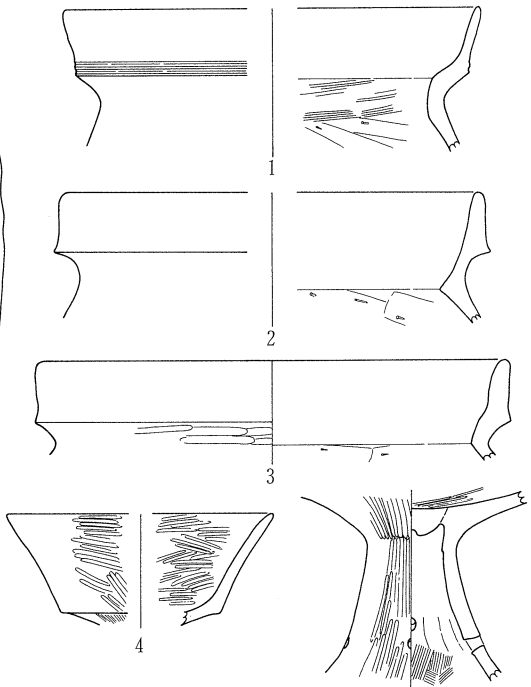
第113图59号土坑出土土器 (1/3)



第114图60号土坑出土土器 (1/3)

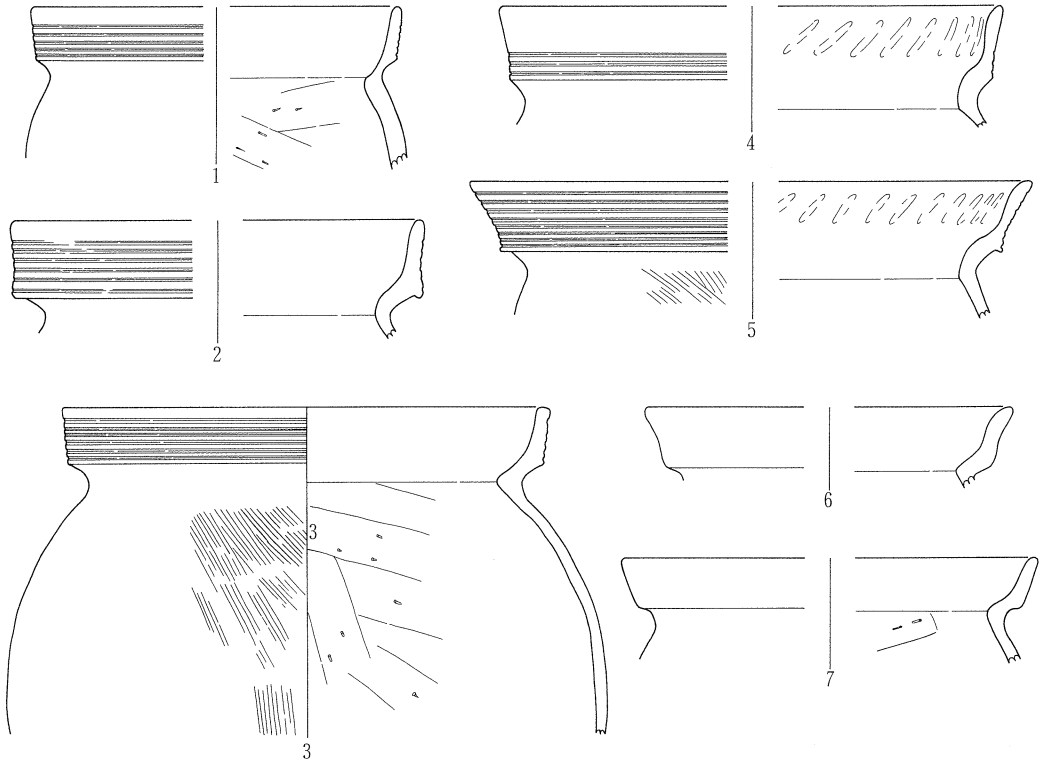


第115图63号土坑出土土器 (1/3)

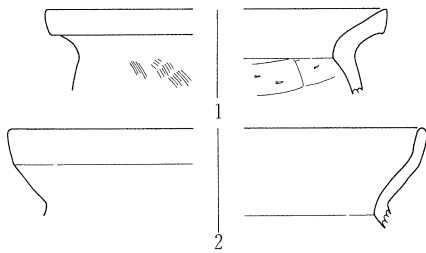


第116图64号土坑出土土器 (1/3)

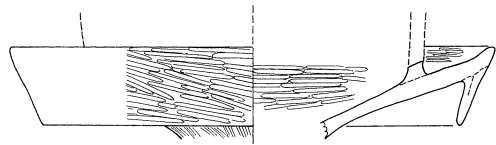
第113图~116图 (59·60·63·64号土坑)



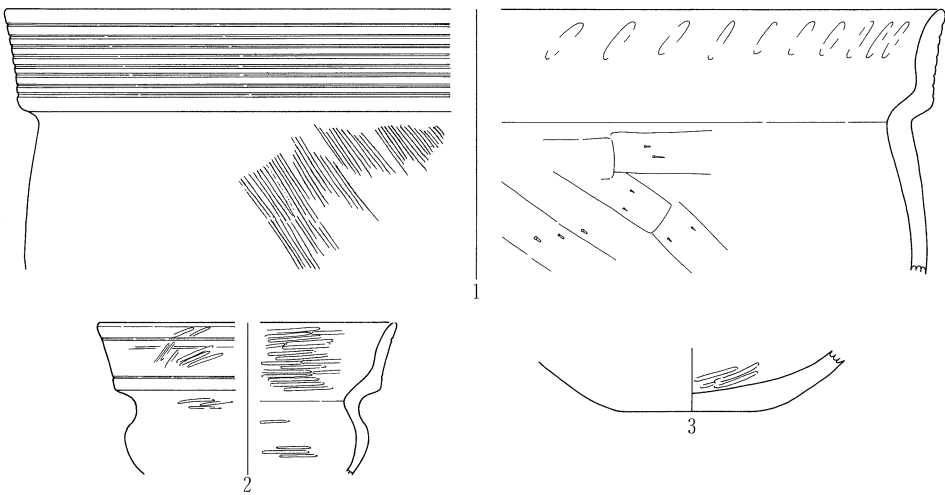
第117图66号土坑出土土器 (1/3)



第118图67号土坑出土土器 (1/3)

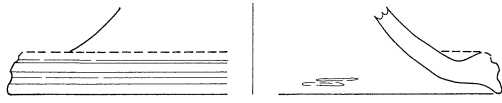


第119图68号土坑出土土器 (1/3)

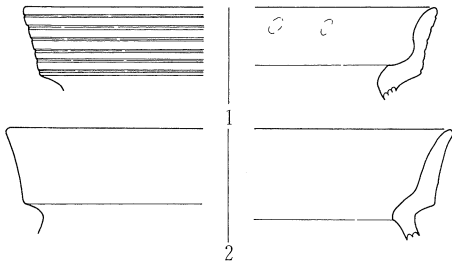


第120图69号土坑出土土器 (1/3)

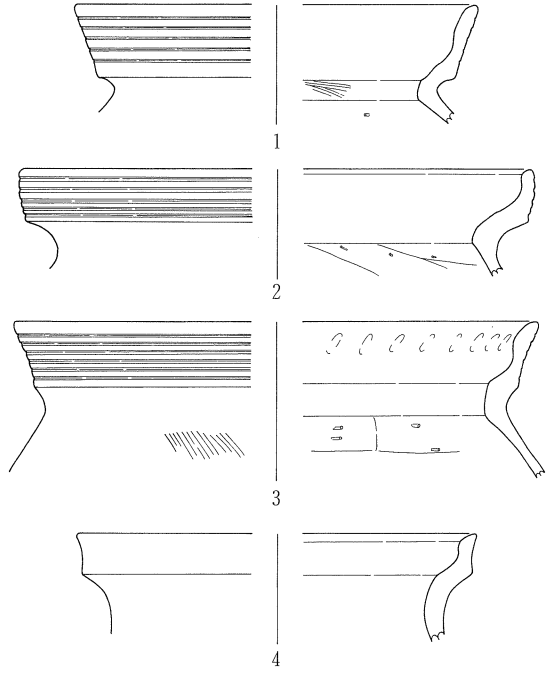
第117图~120图 (66~69号土坑)



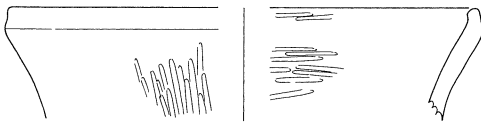
第121图71号土坑出土土器 (1/3)



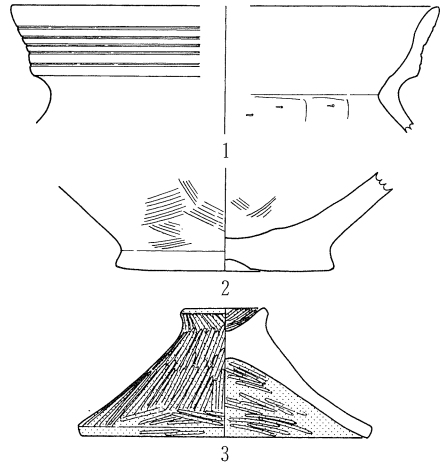
第122图72号土坑出土土器 (1/3)



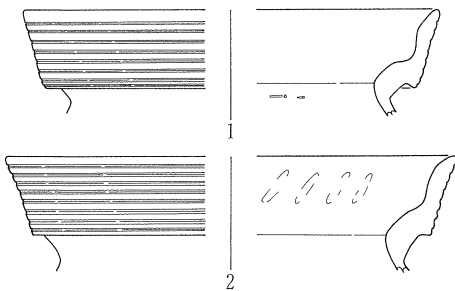
第125图78号土坑出土土器 (1/3)



第123图74号土坑出土土器 (1/3)

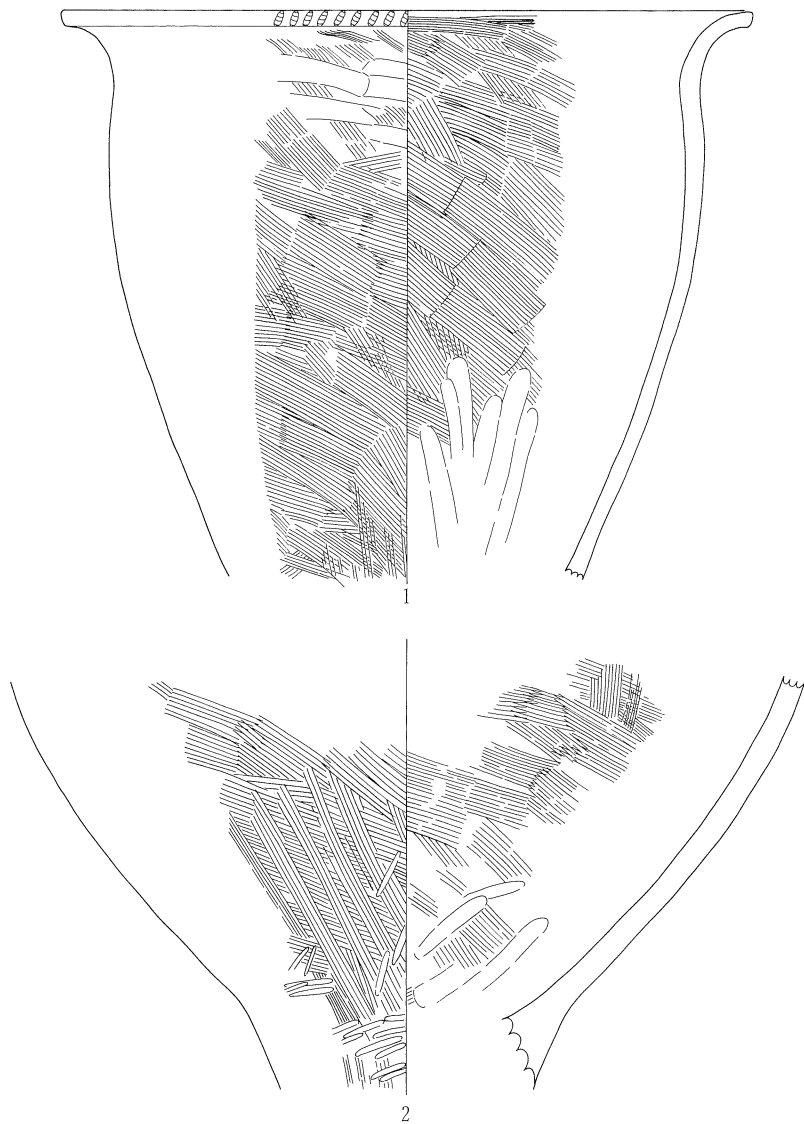


第124图75号土坑出土土器 (1/3)

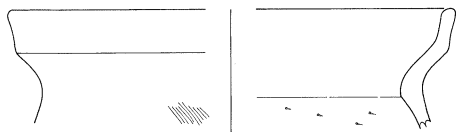


第126图79号土坑出土土器 (1/3)

第121图~126图 (71·72·74·75·78·79号土坑)



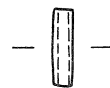
第127图81号土坑出土土器 (1/3)



第128图82号土坑出土土器 (1/3)

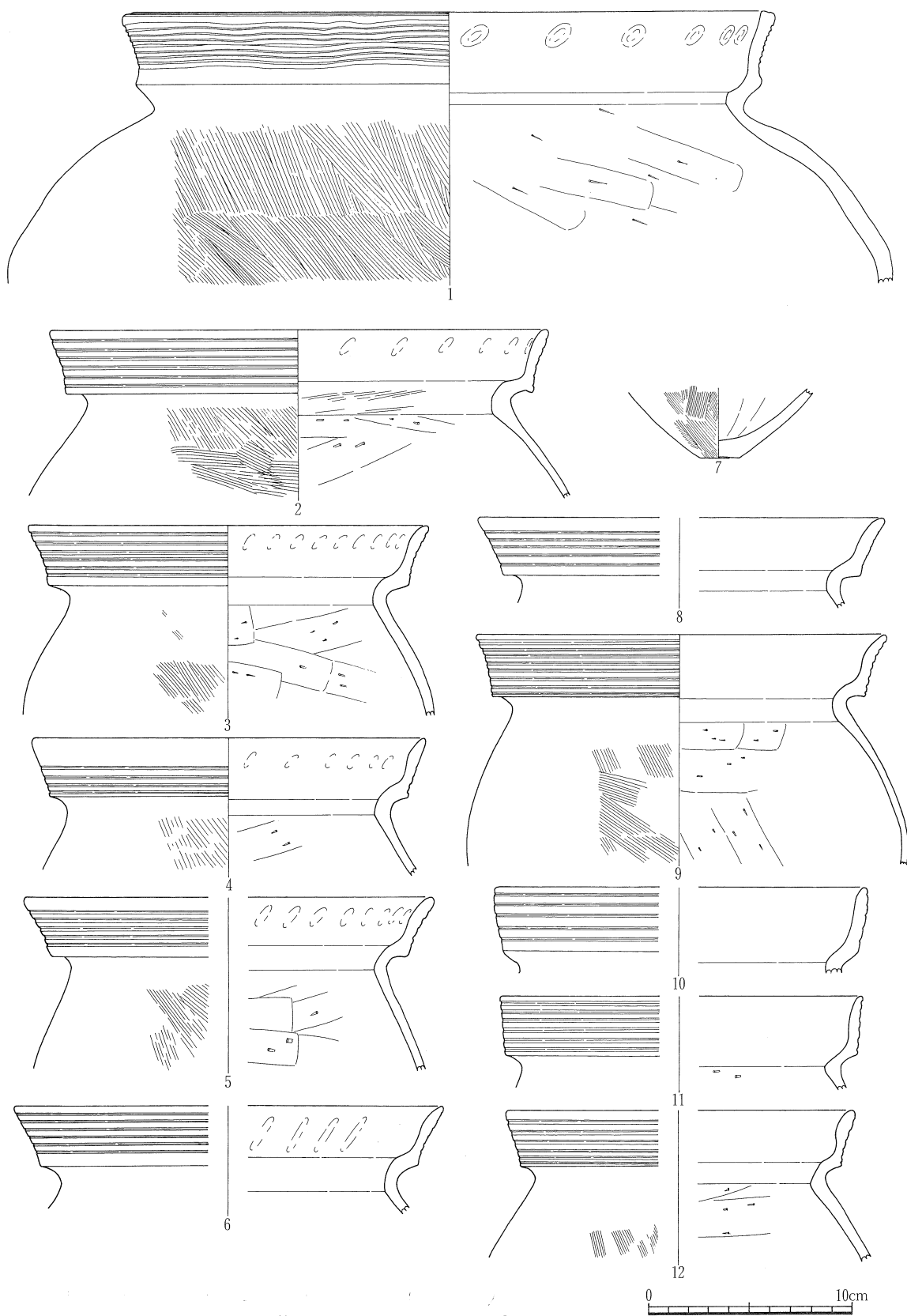


第129图84号土坑出土土器 (1/3)

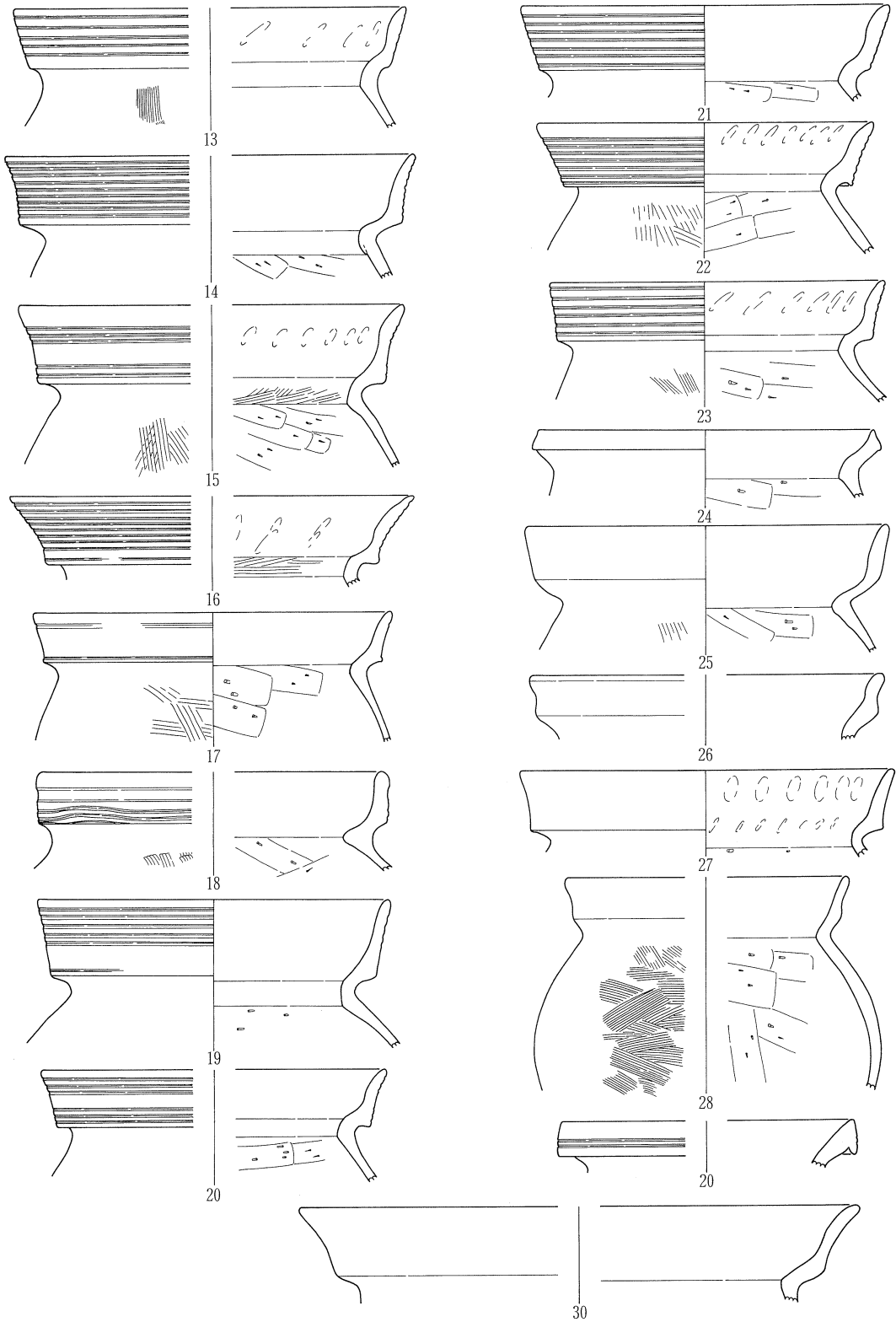


第130图85号土坑
出土管玉 (1/1)

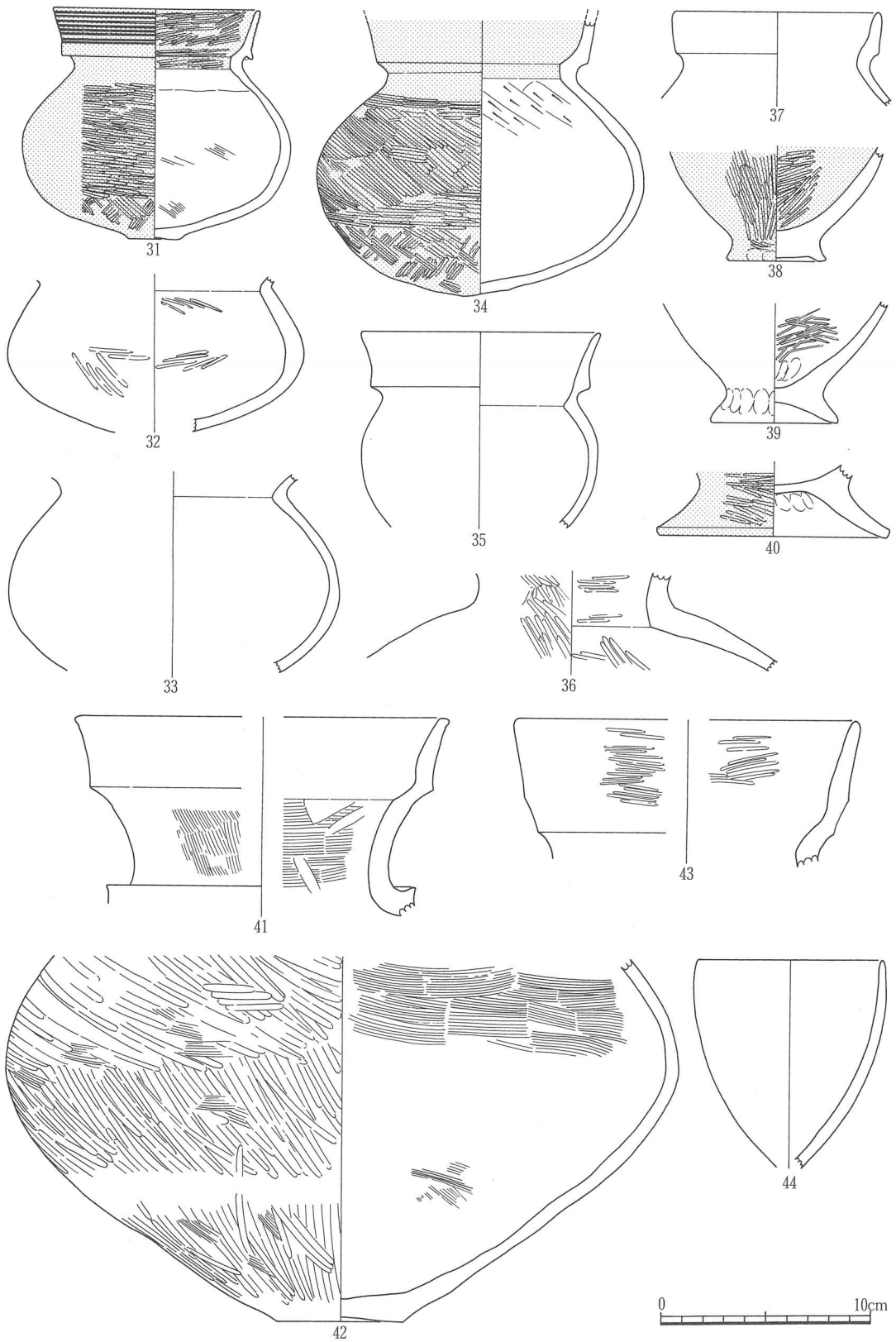
第127图~130图 (81·82·84·85号土坑)



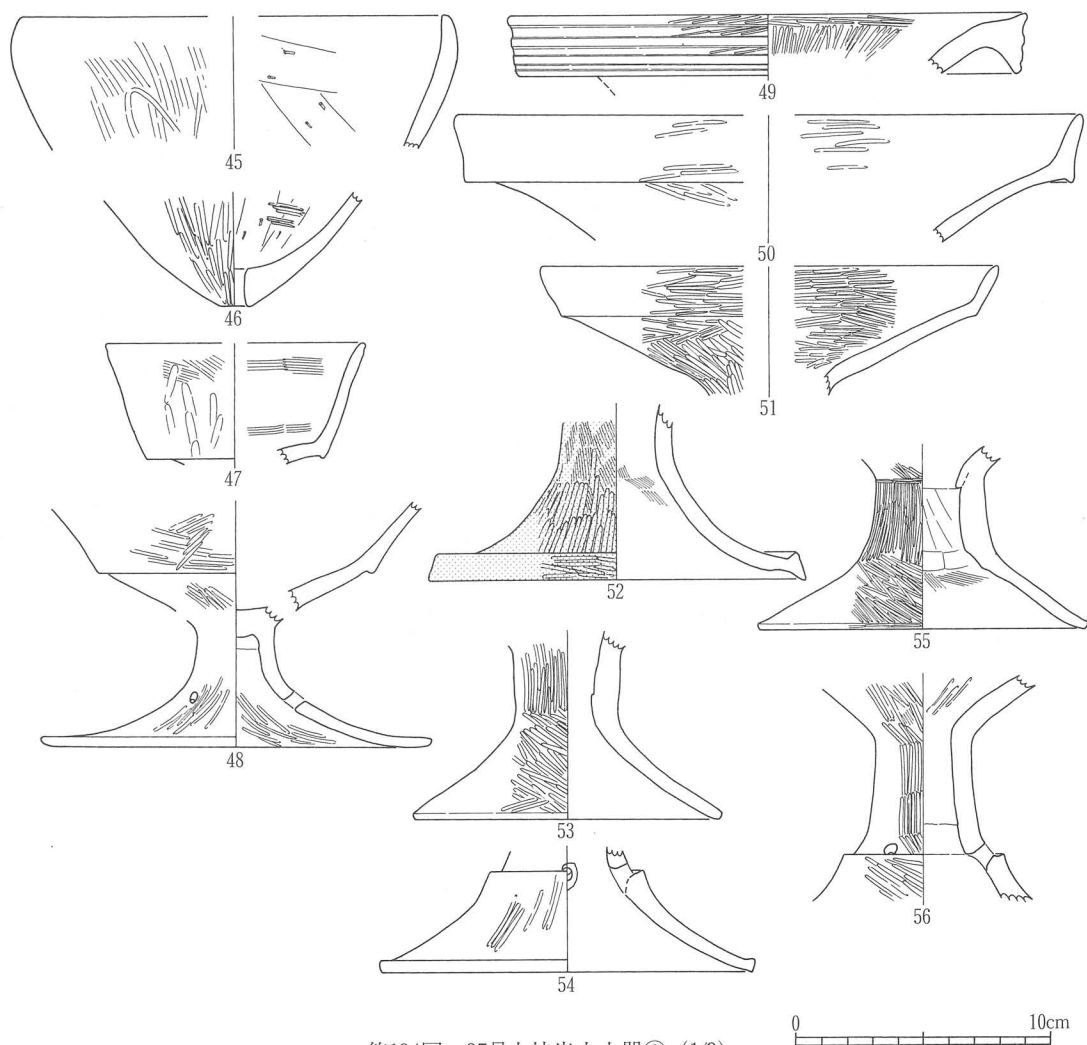
第131图 87号土坑出土土器① (1/3)



第132图 87号土坑出土土器② (1/3)



第133图 87号土坑出土土器③ (1/3)



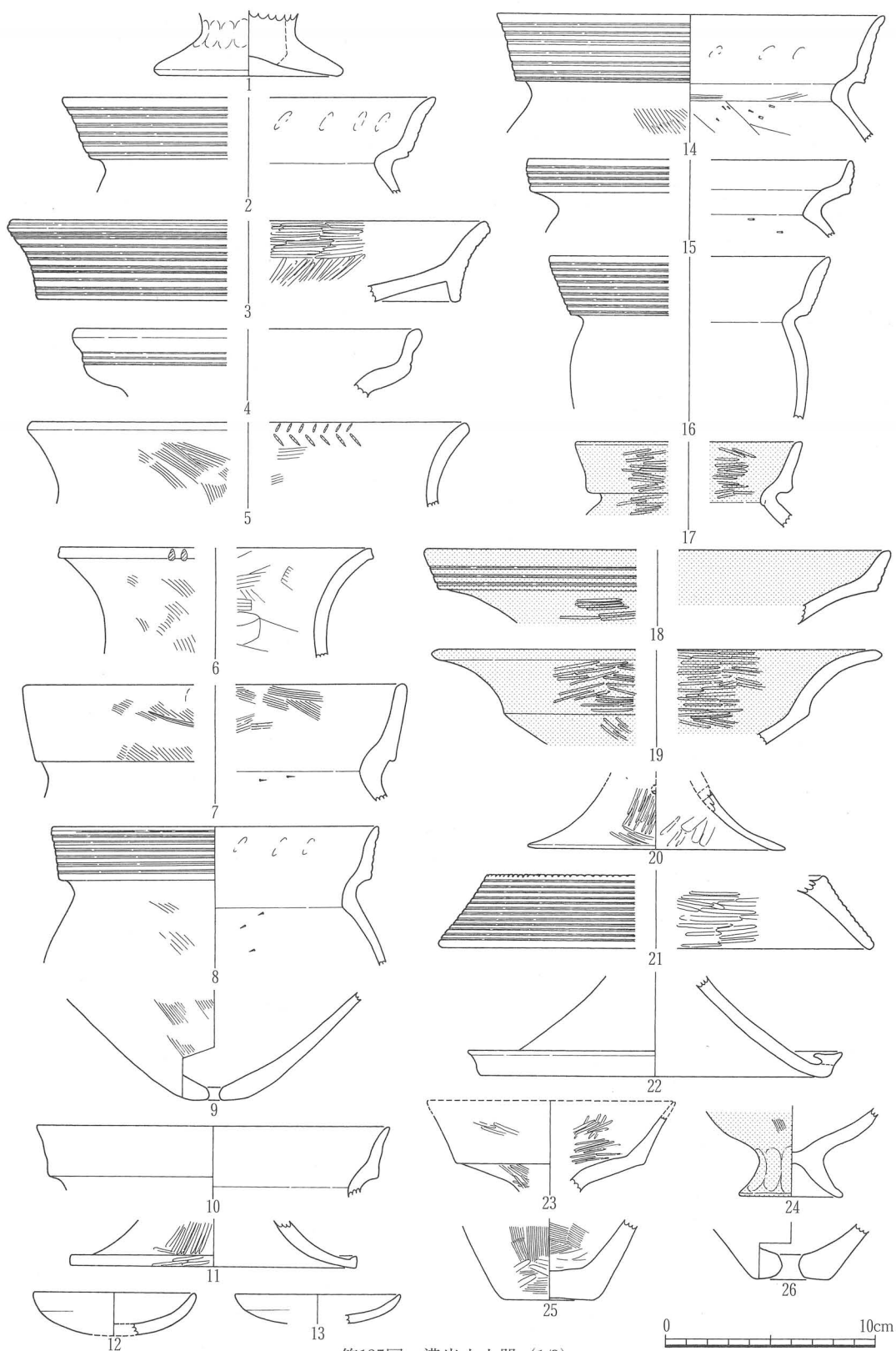
第134図 87号土坑出土土器③ (1/3)

6 溝 (第2図参照・第135~137図)

溝は調査区を縦横斜めに横切り外へ伸びるものと、畑作の耕作溝と考えられる平行する小溝群に大別できる。

大きく横切る溝では19・20・27号溝がみられる。調査区北東部で2条の溝が複合しながらほぼ平行する19号溝は北西方向へ流路をもち、北側の19N号溝が新段階で両溝とも1号掘立柱建物を切っている。19N号溝は幅40~50cm、深さ20cm前後である。19S号溝は幅50~60cm、深さ20cmである。調査区中央やや西側で北方へ流路をもつ20号溝は、屈曲することなく一直線に伸びる。幅50cm、深さはほぼ20cmである。調査区南側においてわずかに蛇行しながら西流する27号溝は、幅70~110センチ深さ40~50cmを測る。

平行する小溝群は、調査区東側において南北の2群を確認している。北群では間隔ほぼ1.8mと



第135图 沟出土土器 (1/3)

1. 1号沟 2. 3号沟 3. 7号沟 4. 10号沟 5. 17号沟 6、7 19N号沟
 8、9. 19S号沟 10~13. 20号沟 14~26. 27号沟 27. 31号沟 28. 43号沟 29. 48号沟
 30. 59号沟

なる北方向の溝と、間隔約1.3mの東北方向の溝がみられる。どちらも幅20~25cm、深さ10~15cmである。切り合いから東北方向の溝群は新段階である。南群では北東方向の溝と、東西方向の溝がみられる。北東方向の溝の間隔はややばらつくが1.5~2.2mを測る。東西方向の溝では、やや南へ屈曲する溝と、これを切りまっすぐな48号溝がある。間隔の広いものは約1.5m、狭いものは約1mである。溝の幅深さとも北群とほぼ同規模である。小溝群は弥生時代の遺構を切り、また中世期の20号溝と同様の覆土をもつことから、中世期の所産と考えられる。

1号溝出土土器 (第135図1)

実測し得たものは脚台部1点のみである。太い棒状の芯に裾部を貼付し指押さえによって整えている。

3号溝出土土器 (第135図2)

擬凹線を持つ有段口縁の甕である。外反する口縁部分に6条の擬凹線を施し内面には指頭圧痕が見られる。頸部内面には面を持たない。

7号溝出土土器 (第135図3)

器台の受け部の口縁部片である。大きく垂下して外反する口縁帯に10条の擬凹線を巡らせ、面取りを施した端部には沈線が1条見られる。

10号溝出土土器 (第135図4)

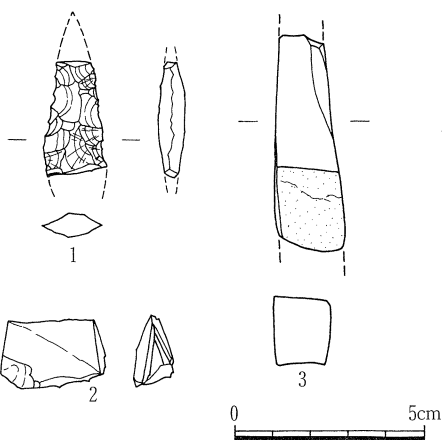
受け口状口縁をなす口縁部片である。口縁部外面には太い凹線と細い沈線を1条ずつ組み合わせて巡らせている。端部断面は指頭状を呈する。

17号溝出土土器 (第135図5)

外反する口縁部の端部を面取りし、内面にハケ状工具による羽状キザミを施す。内・外面ともにハケ調整が頸部上にまでおよぶが端部はナデで調整している。本例は小片のため傾きその他は確かではないが、実際の頸部はもう少し狭くなるであろう。

19N号溝出土土器 (第135図6・7)

6は口縁部が外反する壺である。面取りした端部に下方からハケ状工具によるキザミを施すが、小片のため現状で2箇所を確認するのみである。外面はハケの後ナデを施し、内面は頸部中程までをハケの後ナデ、下半をナデで調整する。7は有段状の口縁



第136図 溝出土遺物 (1/2)
1 (30号溝) 2 (32号溝) 3 (20号溝)

部を持つ甕である。内面は緩やかに弯曲し、外面は小さな段を作って有段口縁風に見せる。内・外面ともに端部までハケ調整を施した後にナデ調整をおこなうがハケ目をなで消しているというほどではない。口縁部外面にヘラ状工具による線刻文が認められる。

19S号溝出土土器（第135図8・9）

8は擬凹線を有する有段口縁の甕である。口縁部に7条の擬凹線を施しており、内面には指頭圧痕がみられる。9は底部穿孔土器である。

20号溝出土土器（第135図10～13）

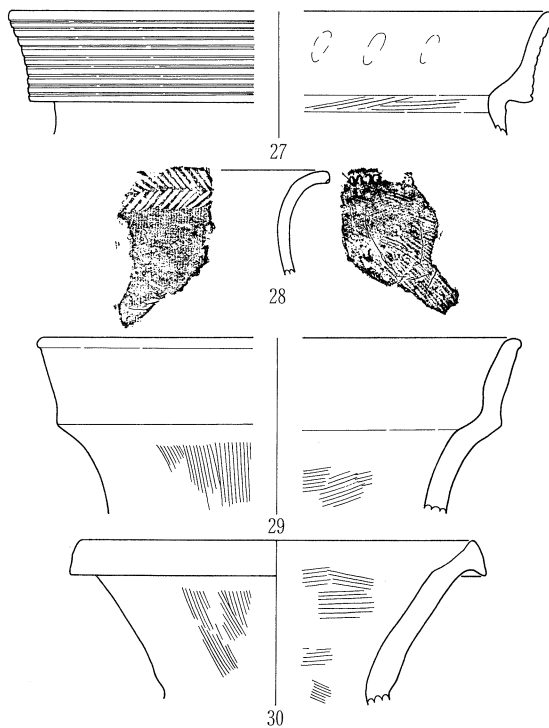
10は無文有段口縁の甕である。端部は先細りし繊細な作りである。11は脚裾部である。端部をはね上げ状に面取りし、外面にミガキ、内面にナデを施す。胎土中に海綿骨片を含んでいる。12・13は土師質土器の皿である。12は口径7.6cmを測り口縁部外面には靱痕が1箇所認められる。13は口径7.8cmを測り12よりも器高が薄い。

その他の遺物（第136図3）

砥石が1点出土している。実測図の上部を欠損しているが、細長い砥面を持ち断面は長方形を呈する。下部をの除く4面すべてに使用痕が認められる。

27号溝出土土器（第135図14～26）

14は外反する口縁部に7条の擬凹線を施す有段口縁の中型甕である。器壁が薄く先細りに仕上げる口縁部の内面には指頭圧痕を持ち、頸部内面にはけ調整痕が認められる。15は短く直立する口縁部に4条の擬凹線を有する有段口縁の甕である。頸部内面の幅が広く、14にくらべてやや小振りである。16は小型の有段口縁を持つ甕である。胴部はあまり張らず、擬凹線は9条を数える。17は外面および内面頸部までを赤彩する小型の有段口縁壺である。18は器台の口縁部である。鋭い稜を持って屈曲する口縁部の外面に3条の擬凹線を施し、内・外面ともに赤彩する。19は大きく外反する口縁部の端部が反転して丸縁をなす高坏である。やや小振りであり内・外面ともに赤彩を施す。20は小型の脚裾部である。21は有段状を



第137図 溝出土土器（1/3） 27（31号溝）
28（43号溝）29（48号溝）30（59号溝）

なす脚裾部である。12条の擬凹線を施し段部上面にはヘラ状工具の先端による細かいキザミを施す。22も脚裾部である。端部に逆台形をなす粘土帯を貼付して返し風に成型し、外側からつまむようにしてナデを巡らせ上部にも中凹みの面を形作る。23は口縁部端部を欠損しているが小型の器台受け部と思われる。24は外面を赤彩する脚台付きの底部である。脚高は底径に比べて高い。25は内・外面ともにハケ調整を施す底部であり、部分的にナデを施している。外底面にもハケ調整を施し、靨痕が1箇所認められる。胎土には海綿骨片が僅かに含まれている。26は底部穿孔土器である。孔径は8mmを測り外底面には靨痕が1箇所認められる。

30号溝出土遺物（第136図）

石槍が1点出土している。先端および基部を欠損している。表裏面ともに押圧剥離により刃部を形成しており、自然面は残さない。

31号溝出土土器（第137図27）

外反する口縁部に9条の擬凹線を施す有段口縁の甕である。外面屈曲部の稜が鋭く、内面に指頭圧痕を持つ。頸部内面にはハケ調整痕が認められる。

32号溝出土遺物（第136図2）

玉類の原石が1点出土している。断面は三角形を呈し、加工面は持たない。

43号溝出土土器（第137図28）

弥生時代中期に属する甕の口縁部片である。外反して反転する口唇部内面にハケ状工具による羽状刺突文を施し、端部外面には下方からキザミを施している。調整はハケでおこない内・外面ともに口唇部にまでおよんでいる

48号溝出土土器（第137図29）

有段状の口縁部を持つ中型の壺である。外面屈曲部の稜は鋭く端部は丸縁を呈する。

59号溝出土土器（第137図30）

端部が断面三角形状を呈し下端が垂下する。内面には強いナデを施して若干屈曲みに仕上げ、内・外面ともにハケ調整を施す。口縁部片として実測したが器台類の脚裾部である可能性もある。

7 縄文時代の土器（第138図）

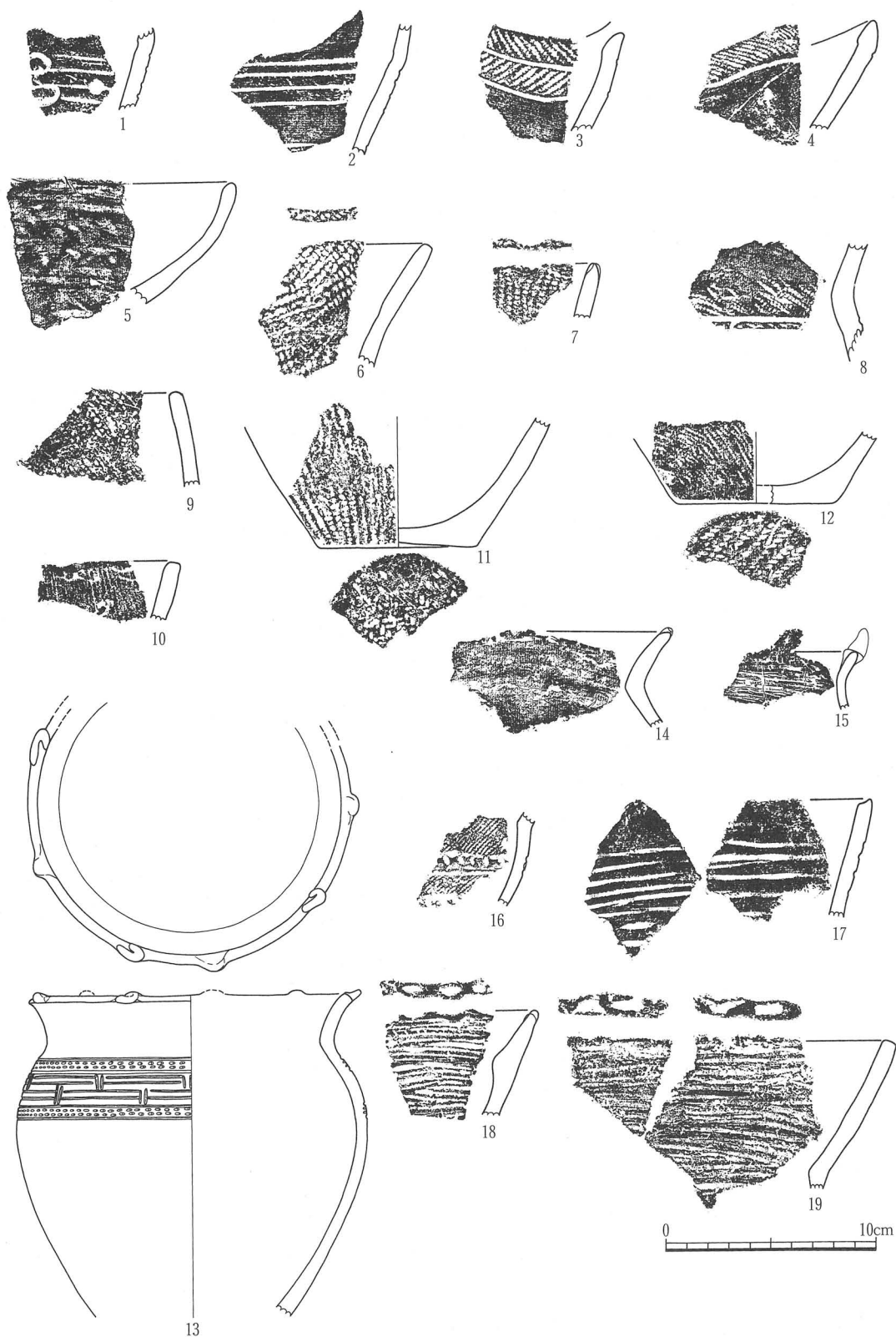
縄文時代の土器は後期中葉の土器群と晩期中葉の土器群に大別できる。後期中葉の所産と考えられる土器は1～4・8・17である。晩期中葉の所産の土器は13～16・18・19であり、これらは大洞C1式に並行する中屋Ⅱ式の所産と考えられる。

1は深鉢の胴部破片で、4条の横位沈線文を蛇行沈線で切る。屈曲部内面に幅広の沈線を施す。1・2は同一固体の可能性が高く、加曾利B2式並行期か。波状口縁深鉢の口縁部破片の3・4は、いわゆる羽状縄文系の土器でLR縄文を施す。酒見式に所属する。5は無文の鉢形土器。8は沈線とRL縄文が施される、酒見式の深鉢胴部片である。図示した拓本は上下が逆であろう。6・7の粗製深鉢は、口唇部に縄文を施す。どちらも、LR縄文である。17は雑な横位沈線を数条入れ、下部の沈線間には列点を持ち酒見式の所産か。6・7・9・10は粗製深鉢の口縁部でいずれもLR縄文を施文する。11・12は粗製深鉢の底部で、11は底径7.6cmでLR縄文、底面には2本越え2本潜り1本送りの網代圧痕。12は底径7.3cmでRL縄文、底面には2本越え2本潜り1本送りの網代圧痕。13は最も遺存のよい深鉢で、口唇部には小突起と逆C字状の粘土貼付が交互につく。突起は2個1対が5単位か。外面全体に煤が付着する。肩部文様帯には鍵の手状文と、これを挟み2列の連続刺突文を持つ。口径15.4cm、頸部径13.7cm、胴部径16.6cmを測る。14はB突起をもつ無文の深鉢。15は鱗状突起を持つ深鉢で西日本の影響を受けている。鶴来町白山町遺跡や金沢市中屋遺跡で類似する突起を持つ土器が出土している。中屋Ⅱ式の後半段階に位置付けられよう。18・19は横位条痕文を施す粗製の深鉢である。18は内面を断面三角状に肥厚させる。

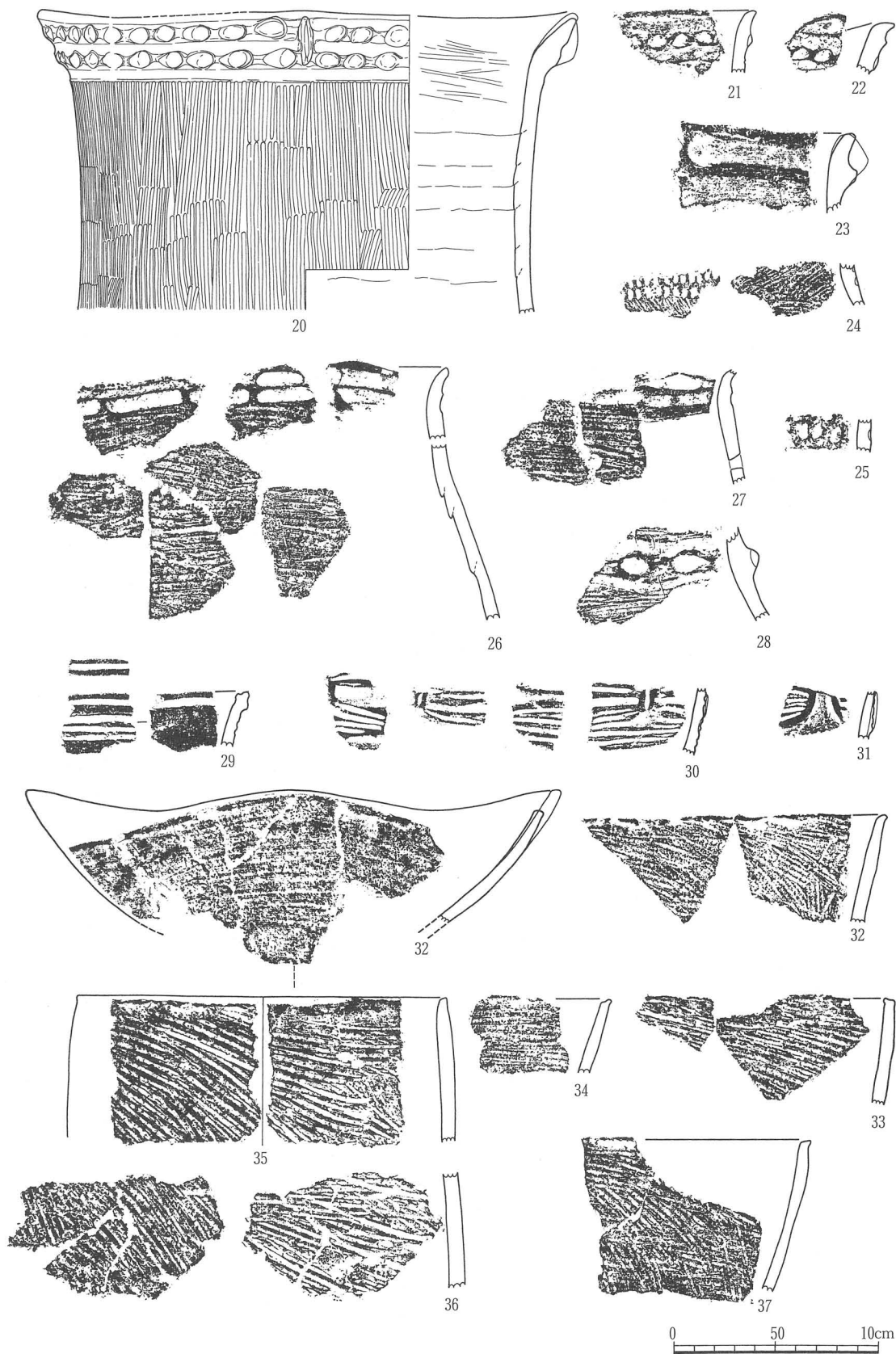
8 弥生時代初頭の土器 (第139~141図)

第139~141図は弥生時代初頭柴山出村式の所産と考えられる。しかし、29~31は浮線網状文系の縄文土器であるが、包含層の同一地点において柴山出村式の土器と相伴する状況で出土したことからここに含めたものである。ここで出土状況について若干の説明を加えたい。柴山出村式土器は調査区の中央部やや東の地点、6号住居跡から2号掘立柱建物の周辺約15m四方の範囲から多くが出土している。1983年調査区出土の23・27・29・30は6号住居跡の南に接する5m四方の同一グリッドから、31・45・55はこれに隣接するグリッドからのものである。20・28・32・38・48・53は1984年調査区の5m四方の同一グリッドから出土している。このグリッドは2号掘立柱建物を含み、23出土グリッドとはグリッドの中心距離で10mを測る。

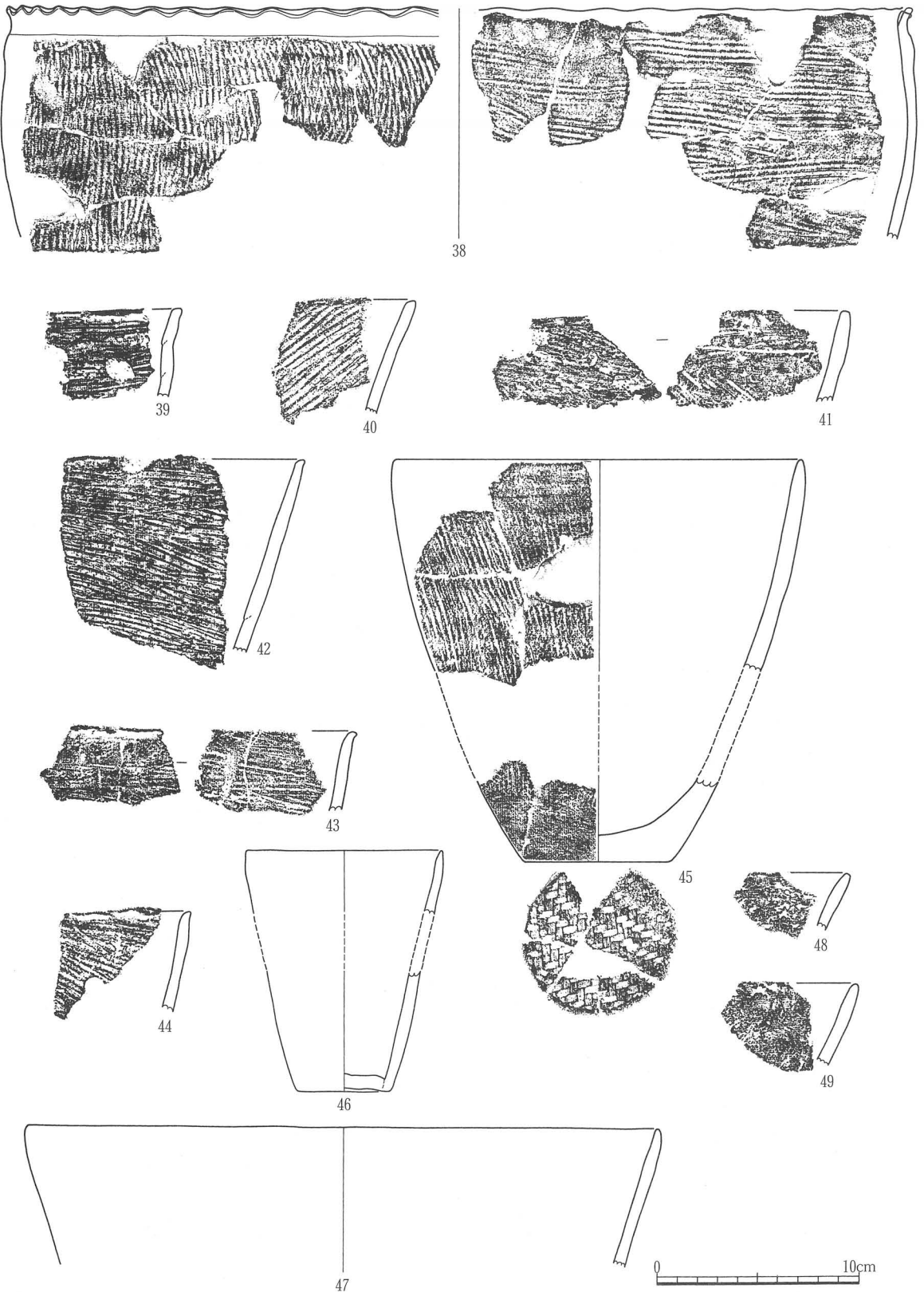
20は推定口径25.6cmを測る壺の口縁部で緩い4単位の波状となる。口縁部に指頭のみによって2条の隆帯をつくり、さらにこの隆帯を連続押圧している。隆帯の区切りとして半円状の突起を波頂部直下に持ち、頸部には縦位の条痕文を施す。外面は赤彩される。21・22は20と同様な土器である。内外面とも赤彩される。23は口縁部隆帯を指頭によって摘み上げている。内外面とも赤彩される。柴山渦底貝塚遺跡出土のものに類似し東海地方の壺王式に比定されている(湯尻1983)。26・27は同一個体と考えられ、口縁部には指頭による3.5cmほどの沈線を2条で連続させる。内外面とも赤彩される。28は壺の肩部で押圧隆帯が廻り、壺王式に類似する。30は浅鉢形土器で、文様から浮線網状文第3段階と考えられる。32~45は条痕文土器である。32は緩く4単位の波状口縁を持つ。38は口唇直下を指でなで、口唇部はさざなみ状とする。32~37・42など口唇部を面取りするものが目立つ。45は口唇部が46や47同様尖り気味となり、底面には2本越え2本潜り1本送りの網代圧痕を持つ。50~59は条痕文土器の胴部破片で、ほとんどが内面も条痕によって調整する。



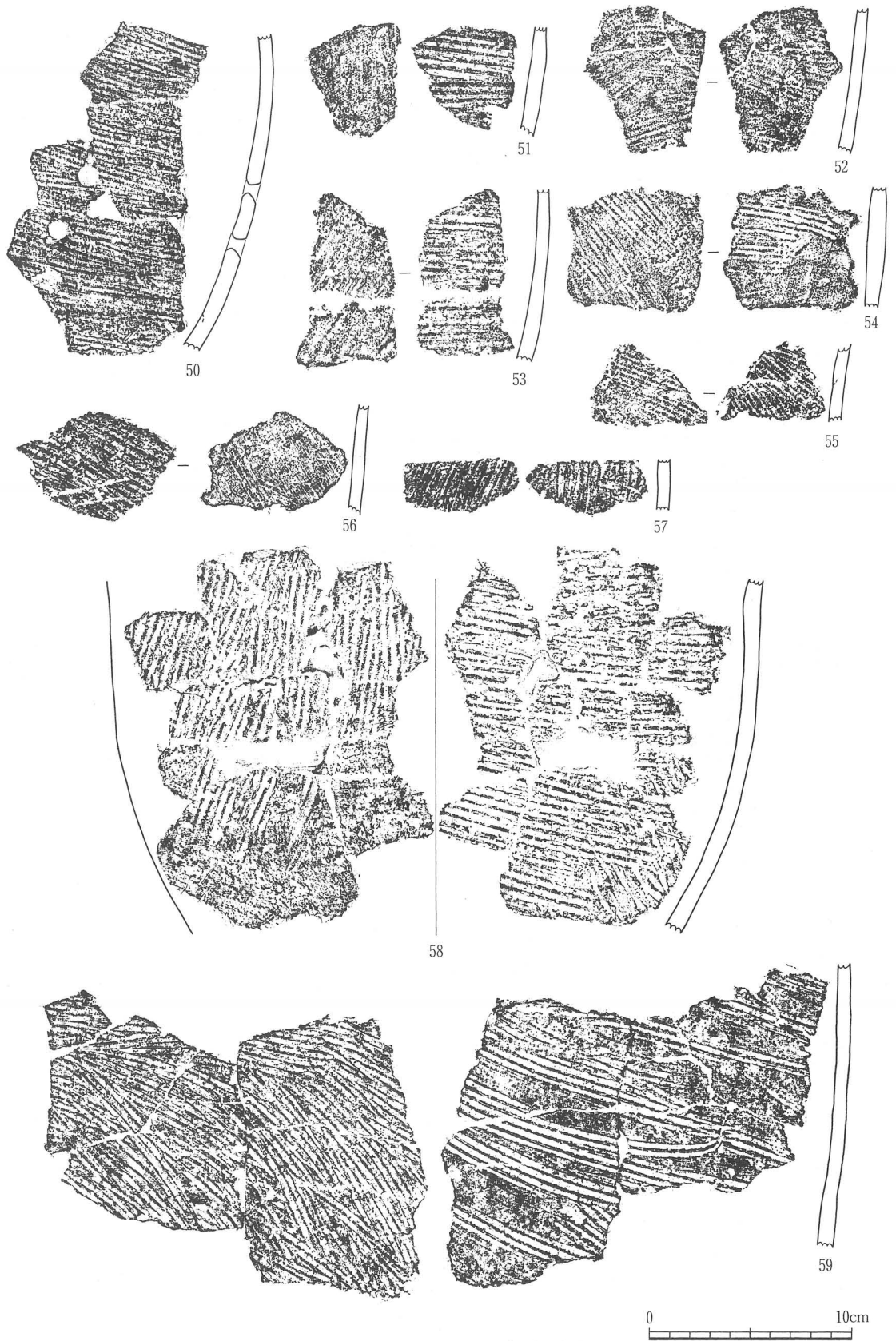
第138图 包含層出土土器① (1/3)



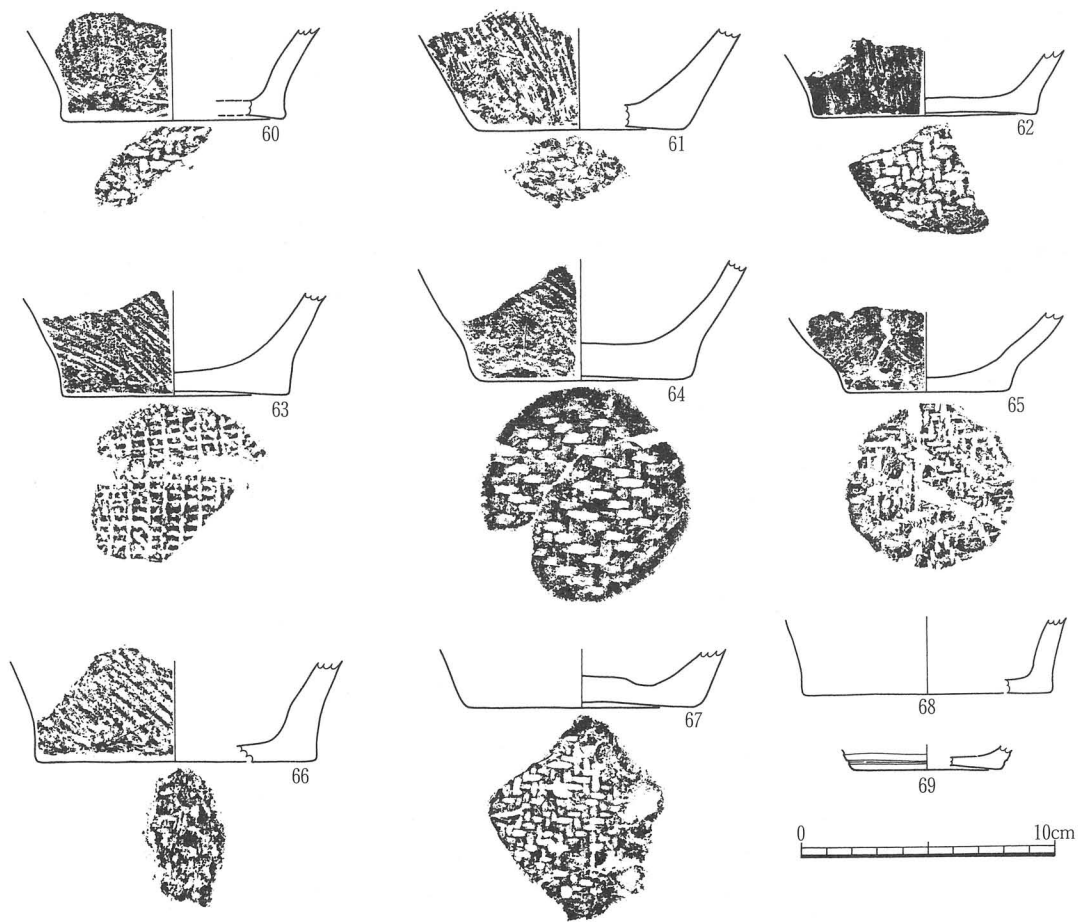
第139图 包含層出土土器② (1/3)



第140图 包含層出土土器③ (1/3)



第141图 包含層出土土器④ (1/3)



第142図 包含層出土土器⑤ (1/3)

底部 (第142図60~69)

底部については縄文時代晩期~弥生時代初頭の一括して扱った。底面の圧痕は簾状圧痕の63を除きほかは網代圧痕であり、網代圧痕は2本越え2本潜り1本送りのものに限られる。60はRL縄文、61~64・66は条痕文が施文される。65・68は外面無文のもので、69の底部外面には沈線がみられる。60は底径90mm、61は底径81mm、62は底径90mm、63は底径90mm、64は底径86mm、65は底径66mm、66は底径111mm、67は底径90mm、68は底径100mm、69は底径58mmである

9 奈良時代以降の土器 (第143図)

出土量が少なくここでは各年度を一括して概説する。出土年度の別は図下に記しておいたので参照していただきたい。

1~5は土師質土器の皿である。1・4はともに口径11.0cmを測る。1は口縁部に幅の広い1段の横ナデを施し端部は丸縁に収める。4もナデは1段であるが、なで方が強いために弱い稜が上下に2本残る。2・3は磨耗が激しく調査はわからない。3は口径10.1cmを測るが器高が

2.6cmと低く、偏平な浅いスタイルである。5は口径8.2cmとこれらの中で最も小さい。ナデは2段で上部はつまみナデである。これらは出土量が少なく主体となるタイプを見出すには至らない。5のごとく若干古相を持つものも存在するがここでは1・4のごとく口径が9cmを越えるようなものがみられることからその時期を14世紀後半代とし、富樫氏の押野館と関係の深いものととらえておく。6・7はともに須恵器の有台坏である。6は図上では底面を除きほぼ完形であるが、小片をつなぎ合わせて図上復元したものである。7も極く小片である。8・9は別年度の検出であるが同一個体の加賀甕である。口縁部および胴部下半を欠いている。10は珠洲甕の口縁部である。頸部の屈曲は弱く端部は反転しない。11～13は珠洲播鉢の底部である。11は底部と胴部の境の稜線が明瞭である。12は同部の稜線は不明瞭である。播り目は10条を1単位とする。13は11と同様底部の稜線が明瞭であり、内面に強いナデを底部にそって巡らせる。14は越前片口鉢の小片である。

10 石器・石製品

打製・磨製石斧（第144図）

打製石斧が9点、磨製石斧が1点出土している。1～9はいずれも刃部の幅が基部のそれを上回る打製石斧であり、敲打によってくびれ部を作り出している。全長16cm前後以上を図る1～7と、それ以下でやや小型の8・9の2タイプに分類される。4をのぞく8点はすべて図上表面に自然面を残しており、特に2・5は表面からの敲打による刃部成形はみられない。4は体部に厚みが薄く、表裏面には自然剥離面を多く残す。やはり図上表面からの刃部成形はほとんどみられない。基部表面に成形を施さないものも相当数みられる。10は全長7.7cmを測る小型品である。丁寧に磨かれており表裏両面に擦痕がみとめられる。

磨石（第145図）

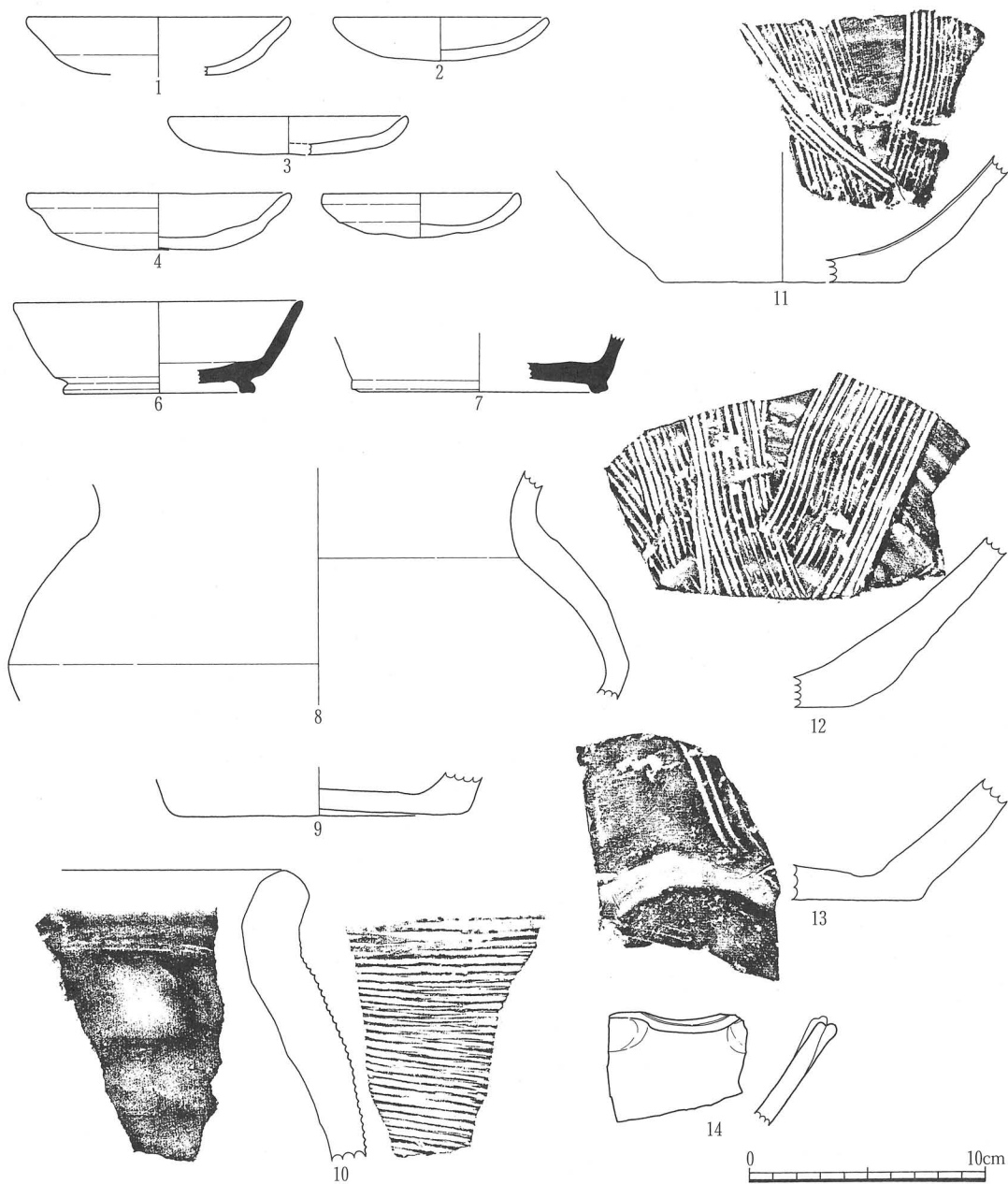
3点の出土である。1は図上表面に2箇所敲打痕がみられ浅く凹む。上部には使用による磨耗の痕跡が認められる。2も表面に2箇所の敲打痕を持ち浅く凸む。右側面下方が若干剥離している。3は断面が偏平な楕円形を呈し、下半を欠損している。敲打痕は認められない。

砥石（第146図）

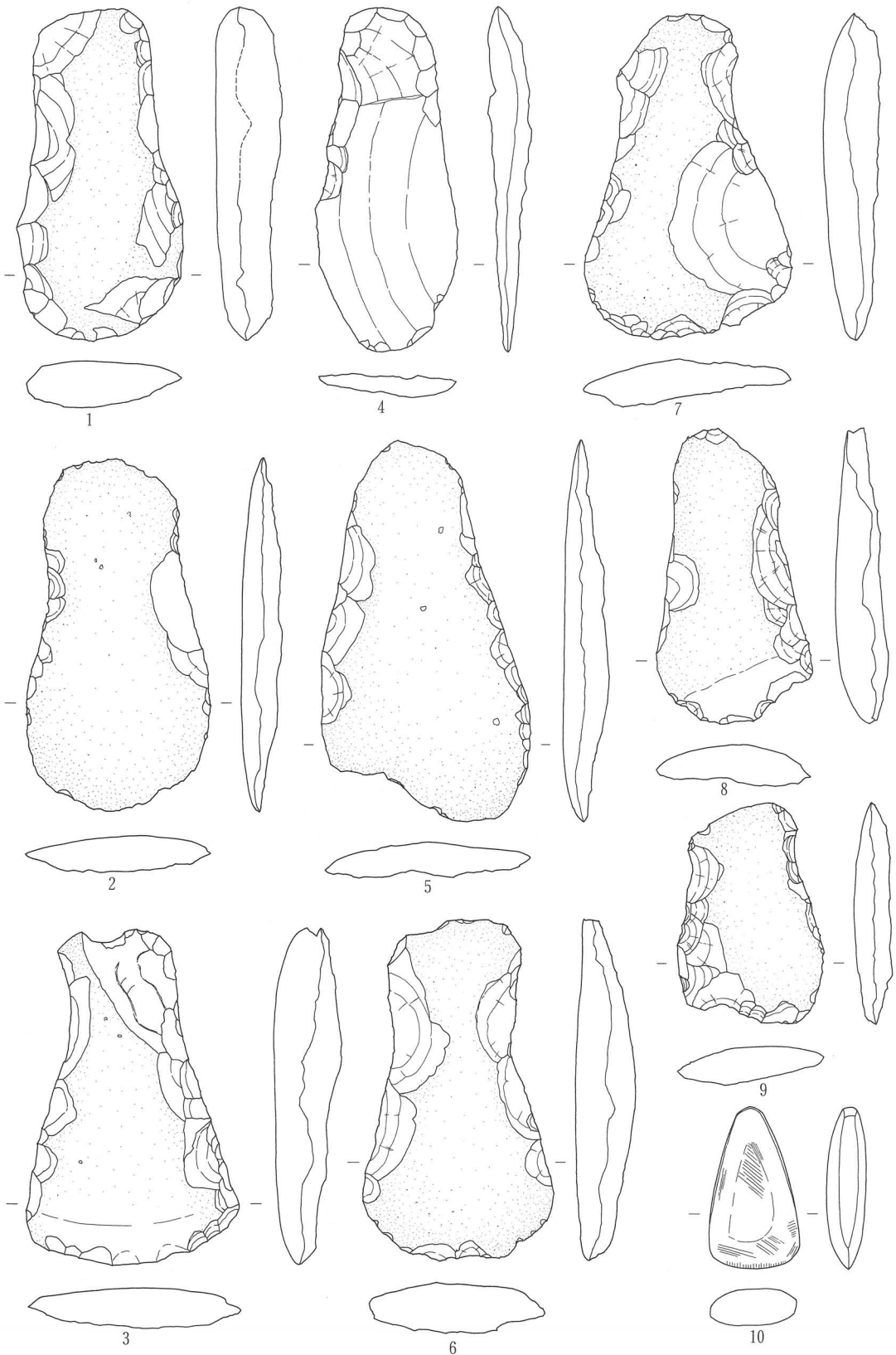
4点出土している。1は上下を欠損している。断面は略三角形を呈し3面すべてが使用されている。それぞれの頂点は使用により面取りを施したような状態をなす。2は下半を欠いており断面は薄い長方形を呈する。破断面を除く5面すべてに擦痕が認められ、表面上部には使用による2条の刻線がみられる。3は図上部および表面に自然面を残しており、下部は自然面のカーブとともに裏面に収束しているため面を持たず、他の3面はすべて使用が認められる。また表面自然面には先端の鋭い刃物状工具による深い線刻が1状認められる。4は断面が正方形を呈する細長い砥石であり、下部を欠いている。上面を除く4面すべてに使用痕が認められる。

玉類 (第147図)

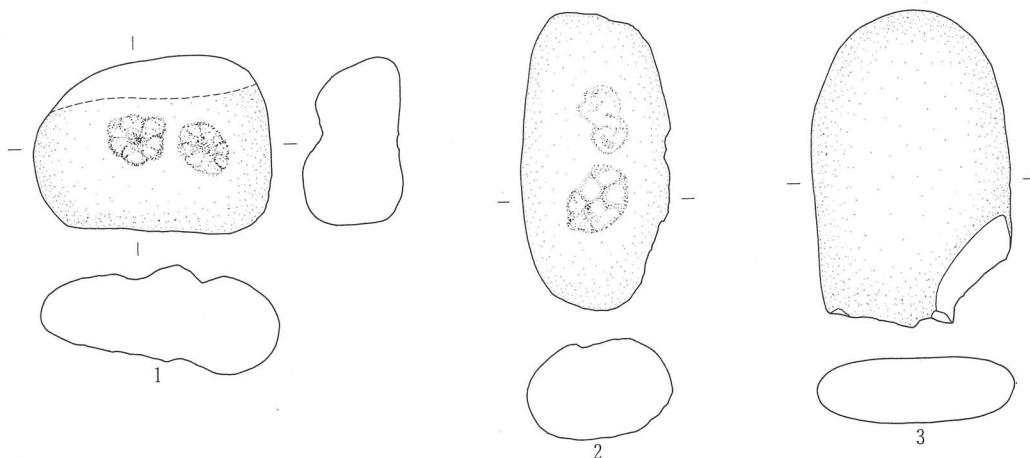
1は管玉の未製品である。1次成形の段階であり周囲には細い面を残しており、未穿孔である。
2はガラス小玉である。



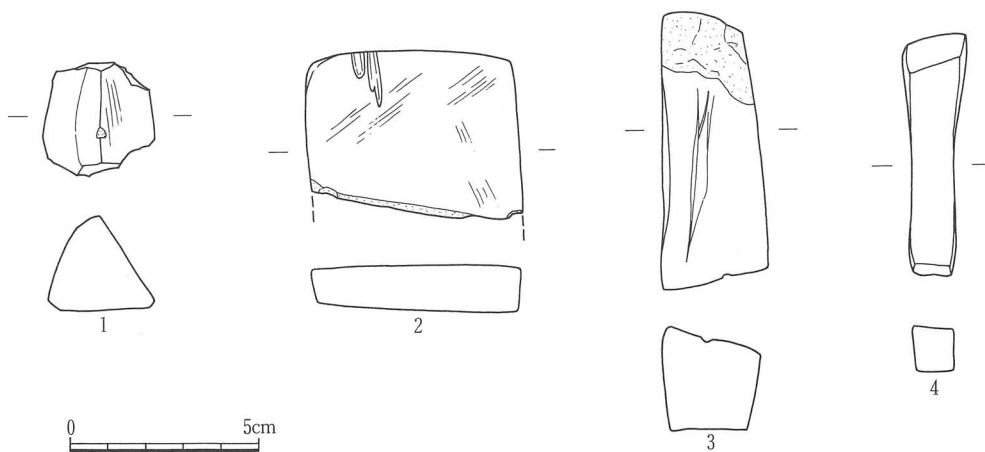
第143図 包含層出土土器⑥ (1/3) (1~3、8、10~14 80年度、4~7 82年度 9 83年度)



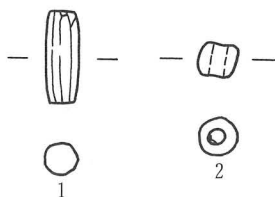
第144図 包含層出土打製・磨製石斧 (1/3) (1 81年度、2~9 84年度)



第145図 包含層出土磨石 (1/3) (1・2 81年度、3 82年度)



第146図 包含層出土砥石 (1/2) (1 80年度、2・3 81年度、4 84年度)



第147図 包含層出土玉類 (1/1)

《土器観察凡例》

1. 図版番号 上段に図版の番号を、下段にその中の通し番号を記入し、通し番号は遺構ごとに更新した。
2. 器種形式 上段に器種を、下段に分類記号を記入した。なお形式の記入は遺構出土品に限り、包含層出土は除いた。
3. 法 量 単位はすべてcmで統一し、Cは口径を、Nは頸部径を、Wは胴部最大径を、Bは底径を、Hは器高を表す。
4. 調 整 口径部、体部、底部を大まかに分けて観察した。外面、内面の区別は前者をaで、後者をbで表している。なお須恵器等調整の部位を区別しなかったものについては先に記述されているものがより上位を表している。
5. 胎 土 主に海綿骨片、シャームット、赤色粒、黒色粒、黒雲母の有無について観察をおこなった。また細礫については粒の大きさをS (1mm以下)、M (1~3mm以上)とし、量を0 (ほとんど含まない)、1 (少量含む)、2 (やや多い)、3 (多い) で表した。
6. 依存状態 実測図に対する依存割合を分数で表した。したがって口縁部のみでも一周すべてが存在していれば「完」と記している。

土器観察表

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
第6図 1	甕 C ₁	C:238 W:302 B:58 H:31.1	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ナデ 肩部以下ハケ	a:ハケ 一部ケズリ b:ハケ	淡橙褐色	良	S・M-2 石英多	完	床面 ヘラ状具による 凹線 1条
	甕 E ₂	C:154 N:130	a:ナデ b:ク			ク	ク	S-2 シャーモット多	1/3	磨耗顕著 一部に煤付着
	甕 E ₂	C:142 N:124	a:ナデ b:ク	a:ナデ b:ケズリ		淡褐色	並	S-1	小片	
4	甕 E ₁	C:140 N:124	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ク		淡橙褐色	良	S-1 石英・シャーモット若干	1/2	口縁外面にヘラ 状具によるナデ を2条施す(凹 線状)
5	甕 E ₁	C:140 N:11.6	a:ナデ b:ク	a:ナデ b:ケズリ		淡褐色 一部淡橙褐色	並	M-1 シャーモット少	小片	擬凹線3条
6	甕 E ₁	C:128	a:ナデ b:ク			淡褐色	ク	0 シャーモット少	ク	擬凹線4条
7	甕 A ₁	C:174 N:144	a:ナデ b:ナデ 頸部にハケ残る	a:ハケ(不明瞭) b:ケズリ		茶褐色	ク	0 シャーモット少	1/4	擬凹線5条か?
8	甕 A ₁	C:212	a:ナデ b:ク			淡褐色	良	S-1 シャーモット少	1/6	ヘラ状具による 凹線状 ナデ3条
9	甕 A ₁	C:166 N:144	a:ナデ b:ク	磨耗顕著		黄褐色	並	M-3 シャーモット 赤色粒	1/4	擬凹線12条
10	甕 A ₂	C:154 N:120	a:ナデ b:ク	a:ナデか? b:ケズリ		暗褐色	ク	0 シャーモット	小片	擬凹線4条確認
第7図 11	甕 D ₁	C:192 W:236 B:3.8 H:280	a:ナデ b:ク	上半a:ハケ b:ケズリ 中央a:ナデハケ b:ナデ	a:ハケ b:ナデ	a:淡橙褐色 一部赤褐色 b:淡褐色	良	S-2 シャーモット 黒色粒	完	外底面ハケ
	甕 D ₂	C:160 N:127 W:17.8	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		淡褐色	ク	M-3 シャーモット若 干	2/3	
13	甕 D ₁	C:174 N:144	a:ナデ b:ク			ク	ク	0 赤色粒	小片	
14	甕 D ₁	C:185 N:152	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		ク	並	S-3 石英多	1/4	
15	甕 D ₁	C:200 N:172	a:ナデ b:ク			ク	ク	0 シャーモット少	小片	
16	甕 D ₂	C:138 N:120 W:13.4	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ナデ		ク	良	M-3 シャーモット 石英	完	体部下外面は 二次加熱により 赤変、剥離
17	甕 D ₁	C:130 N:11.6	a:ナデ b:ク	磨耗顕著		ク	並	S-1 シャーモット少	1/4	
18	甕 B	C:156 N:145	a:ナデ b:ク			a:黒褐色 b:橙褐色	不良	S-2 シャーモット少 海綿骨片	小片	
19	甕 F	C:120	a:ナデ b:ミガキか?			橙褐色	良	0 シャーモット多	ク	端部外面にヘラ状 具によるキザミ
20	底部	B:55			a:摩耗 b:ハケか?	ク	ク	S・M-1 シャーモット	ほぼ 完	
21	底部	B:5.1			a:ハケ b:ケズリ 外底面ハケ→ナデ	a:淡褐色 b:黒褐色	やや 不良	S・M・L-3 シャーモット	ク	
22	底部	B:4.0			a:摩耗 b:ハケ	淡褐色	並	0 シャーモット少	2/3	凹底
23	底部	B:5.0			a:ハケ b:ク	灰褐色	並	S-2 シャーモット少 黒微粒	1/3	

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
24	底部	B : 42			摩耗顕著	淡橙褐色	良	0 シャーモット多	完	
第8図 25	壺 A ₁	C : 138 N : 113	a : 上位ナデ 下位ハケ b : 上位ナデ 下位ハケ			淡褐色	良	0 海绵骨片少	1/4	
26	壺 B	C : 150 N : 116	a : ハケ b : ハケ 一部ナデ	a : ハケ b : ナデ		淡橙褐色	〃	0 シャーモット多	〃	
27	壺 B	C : 152	a : ハケ(斜位) b : ハケ(横位)			淡褐色	〃	0 黒雲母少	小片	
28	壺 B	C : 132 N : 102	a : 上位ナデ 下位ハケ b : 上位ナデ 下位不明瞭			a : 淡橙褐色 b : 灰黄褐色	〃	0 シャーモット多	1/5	
29	壺 (C)	C : 160	a : ミガキ b : 〃			淡橙褐色	並	0	小片	内外ともに赤彩 擬凹線4条か
30	壺 C	C : 150 N : 108	a : 雑なミガキ b : 〃			赤褐色	良	M-1	1/4	内外ともに赤彩 痕あり 擬凹線8条(上 位5条1単位)
31	壺 D ₁	C : 163 N : 115	a : b : ミガキ	a : ミガキか? b : ケズリ		暗褐色	並	S-1	1/5	赤彩痕(内・外面) 擬凹線9条
32	壺 C	C : 122	a : ミガキ b : 〃			淡褐色	良	0 赤色粒	小片	外面に一部煤付 着
33	底部	B : 42			a : ミガキ b : ケズリ ミガキ	a : 淡橙褐色 b : 灰色	〃	S・M-1 シャーモット少	完	
34	底部	B : 46			a : 磨耗 指頭痕あり b : 磨耗	淡橙褐色	〃	M-2 シャーモット多	2/3	
35	底部	B : 44			a : ナデ 指押さえ b : 雑なミガキ	淡褐色	〃	0 シャーモット少 海绵骨片少	完	
36	底部	B : 52			a : ナデ 指押さえ b : 細かいミガキ	淡橙褐色	〃	0 シャーモット	1/3	
37	鉢 B ₁	C : 21.9	a : b : ミガキ	a : ミガキ b : 〃		〃	並	S-1	小片	内外ともに赤彩 痕あり 擬凹線9条か
38	鉢 B ₁	C : 20.4	a : ナデ→ミガ キ b : ミガキ	a : ミガキ b : 〃		〃	良	S-2 M-1	〃	口縁部内外とも に赤彩痕あり 擬凹線6条か
39	鉢 B ₁	C : 20.0	a : ミガキ b : 〃			a : 黒褐色 b : 暗赤褐色	並	0 シャーモット少	〃	擬凹線5条
40	鉢 B ₁	C : 21.8	a : ミガキ b : 〃	a : ナデ b : ケズリ 一部ミガキ		淡橙褐色	良	0 シャーモット少	1/5	擬凹線11条
41	鉢	C : 18.8	a : ナデ b : ミガキ	a : ミガキ b : 〃		〃	並	S-2 赤色粒	小片	擬凹線現状で3 条
42	鉢 H	C : 13.0	a : ナデ b : 〃	a : ナデか? b : ナデ		褐色	〃	S-2	2/3	一部煤付着
43	鉢 H	C : 14.0	a : ナデ b : 〃	a : ナデ b : 〃		淡褐色	〃	0	小片	一部煤付着
44	鉢 B ₁	C : 27.0	a : ナデ b : ミガキ			淡赤褐色	〃	M-3 石英	1/5	擬凹線10条
45	口縁部 片		a : ナデ b : ナデ			茶褐色	並	0 黒雲母	小片	径2mmの竹管状 スタンプを3列 巡らす

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
46	脚部片				a : 磨耗 b : ミガキ	淡橙褐色	〃	0 シャーモット多	〃	透孔現状で1孔 あり S字状スタンプ
47	口頸部 片か		a : b : ミガキ			淡橙褐色	並	0 赤色粒	小片	外面赤彩 S字状スタンプ
第9図 48	高杯 A ₂	C : 28.0	a : ハケ→ミガキ b : ミガキ			淡褐色	良	0 黒雲母少	1/2	
49	高杯 B ₁	C : 28.1	a : ミガキ b : 〃			赤褐色	〃	0 シャーモット少 海綿骨片	完	外面煤付着 内面赤彩痕あり
50	高杯 B ₁	C : 27.0	a : ミガキ b : 〃			淡橙褐色	〃	L-1 シャーモット 石英	小片	口縁部内外面赤 彩
51	高杯 B ₁	C : 27.0	磨耗顕著			〃	〃	S・M-3 シャーモット多	1/3	
52	高杯 B ₁	C : 21.4	a : ミガキ b : 〃			〃	〃	0 シャーモット少	小片	端面面取り
53	高杯 B ₁	C : 21.0	a : ナデ→ミガキ b : ミガキ			淡褐色	〃	S-1 シャーモット多	完	内外面ともに赤 彩痕あり
54	脚部				a : ミガキ b : ハケ	淡橙褐色	〃	0	小片	透孔現状で2孔 (上・下段各1孔)
55	裾部	B : 16.4			a : ミガキ b : ナデ→ミガキ	橙褐色	〃	0 シャーモット多	1/2	透孔現状で1孔 外面に赤彩痕あり
56	高杯脚 部			a : ミガキ b :	a : ミガキ b : ハケ→ナデ	淡橙褐色	〃	0 シャーモット微量	完	
57	裾部	B : 12.0			a : ミガキ b : ナデ→ミガキ	a : 赤褐色 b : 淡橙褐色	〃	S-3 石英少	1/4	外面に赤彩痕あ り
58	柱状部	N : 5.0		a : ハケ→ミガキ b : ケズリ		a : 橙褐色 b : 淡橙褐色	並	M-2 黒雲母・石英	〃	化粧土か? 沈線8条
59	器台		a : ミガキ b : ミガキ ハケ	a : ミガキ b : ケズリ		淡橙褐色	良	S・M-2 シャーモット 石英	完	外面赤彩 内面受部より上 位を赤彩
60	器台	C : 20.6	a : ミガキ b : 〃			淡褐色	〃	M-1	小片	
61	器台	C : 18.5	a : ミガキ b : ナデ			〃	〃	0	〃	外面赤彩
62	裾部	B : 22.8			a : ミガキ ナデ b : ナデ→ミガキ	黄褐色	やや 良	M-2 シャーモット少	1/4	透孔現状で1孔 段部キザミ 擬凹線11条
63	手捏ね 土器	C : 1.8 W : 3.4 B : 1.1 H : 3.3		a : 下半ケズリ b : 指押さえ痕		淡褐色	良	S・M-2 シャーモット多 赤色粒多	3/4	口縁外面に鋭利 な工具によるキ ザミ状文様3条 あり
第10図 1	甕 A ₁	C : 17.0 N : 15.6	a : b : ナデ	a : ナデ b : ケズリ		橙褐色	並	S-2 赤色粒	1/6	擬凹線5条
2	甕 A ₁	C : 16.6 N : 12.4	a : b : ナデ	a : ナデ b : ケズリ		淡褐色	〃	S・M-1 赤色粒	小片	擬凹線6条
3	甕 A ₃	C : 17.4 N : 12.5	磨耗顕著	同左		〃	〃	S-3	1/4	擬凹線10条 指頭圧痕
4	甕 A ₂	C : 20.4 N : 17.4	a : ナデ b : 〃	a : ハケ b : ケズリ		〃	良	S-2 シャーモット 海綿骨片微量	1/3	床面 擬凹線8条 指頭圧痕
5	甕 A ₂	C : 20.0 N : 15.8	a : ナデ b : 〃	a : ナデ b : ケズリ		〃	並	S-3 赤色粒	小片	擬凹線7条 指頭圧痕
6	甕 B	C : 16.4 N : 14.6	a : ナデ b : 〃	a : ナデ b : ケズリ		淡橙褐色 一部灰褐色	良	S-1	1/4	
7	甕 B	C : 20.0 N : 18.6	a : ナデ b : 〃			茶褐色	並	S・M-1 石英少 黒雲母少	小片	指頭圧痕

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
8	甕 F	C:20.0	a:ナデ b:ク			淡褐色	良	S-2	ク	口縁部外面下端に 斜行キザミを施す
9	底部	B:2.4			a:ハケ b:ケズリ	褐色	ク	M-2	完	外底部ハケ目残 存
10	底部	B:1.7			a:ミガキ b:ナデ	橙褐色	ク	S-2	ク	
11	壺 E	C:10.6 N:8.0	a:ミガキ b:ク	a:ミガキ b:ケズリ		橙褐色	並	S-1 シャーモット多	小片	外面に煤附着
12	壺 E	C:8.8 N:6.4	a:ミガキ b:ク	a: b:ケズリ		赤褐色	良	0	ク	赤彩
13	壺 E	C:11.2 N:6.7	a:ミガキ b:ハケ→ナデ	a:ミガキ b:ケズリ		淡褐色	ク	S-1 赤色粒	ク	
14	壺 C	C:10.9 N:8.5	a:ミガキ b:ク	a: b:ハケ		橙褐色	ク	0 海綿骨片 黒色粒	3/4	
15	高杯 C		a:ミガキ b:磨耗			淡橙褐色	やや 不良	S-2	1/4	
16	脚部	B:13.6			a:ミガキ b:ハケ	ク	ク	S-1 赤色粒 石英微量	ク	透孔現状で2カ 所(径45mm) 全周で5孔か? 床面、化粧土
17	脚部				a:ミガキ b:ナデ?	ク	並	S-1 赤色粒	小片	外面に赤彩痕あり 擬凹線現状で5条
18	脚裾部 端部	B:23.4	a:ミガキ b:ク			橙褐色	良	0	ク	
19	体部片			a:ミガキ、半截 竹管状工具押捺 b:ナデ 絞り目 が見られる		淡橙褐色	ク	0	ク	外面赤彩
第11図 1	甕 A ₁	C:19.6 N:17.4	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		淡橙褐色	良	S-2 シャーモット	1/5	擬凹線5条
2	甕 E ₁	C:19.8 N:17.6	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		淡褐色	ク	S・M-2 シャーモット 黒色粒	1/3	肩部に斜行キザ ミあり 擬凹線5条
3	甕 A ₁	C:21.2 N:17.8 W:29.6 H:40.6 B:6.1	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ク	a:ハケ(粗) b:ク	ク	ク	S・M-2 黒雲母	完	擬凹線10条
4	甕 A ₁	C:11.6 N:10.4	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		ク	並	S-1 海綿骨片少	小片	擬凹線4条
5	甕 A ₁	C:10.3 N:8.9 W:10.6 H:11.3 B:2.4	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:肩部ケズリ 下半ナデ	a:ハケ b:ナデ	淡橙褐色	良	S-3 M-2 シャーモット少	完	擬凹線4条
6	甕 E ₁	C:14.8	a:ナデ b:ク			ク	ク	M-1 シャーモット	小片	擬凹線3条 (ハケ状具による 強いナデ)
7	甕 E ₁	C:15.7 N:13.7	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ナデ		淡褐色	ク	S-2 シャーモット 黒雲母	1/3	細いヘラ状具に よるナデで凹線 状に仕上げる
8	甕 A ₂	C:16.0 N:12.8	a:ナデ b:ク	a: b:ケズリ		ク	ク	S-3	小片	擬凹線7条 指頭圧痕
第12図 9	甕 E ₁	C:17.2	a:ナデ b:ク			ク	並	S-1 赤色粒	ク	擬凹線4条
10	甕 E ₁	C:19.0 N:16.2	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		淡橙褐色	良	S-2 L-1 シャーモット	1/3	擬凹線3条(太 い)

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
11	甕 A ₁	C:188 N:15.6 W:240	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ→ナデ 下半ハケ		淡褐色	ク	S-1 海綿骨片少	2/3	擬凹線5条
12	甕 A ₁	C:180 N:14.8 W:204	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		淡橙褐色	ク	S-1 シャーモット 海綿骨片少	1/3	肩部に連続斜行 キザミ 擬凹線6条
13	甕 A ₁	C:170	a:ナデ b:ク			淡褐色	並	M-2	小片	擬凹線6条確認 端面取り
14	甕 D ₂	C:132 N:10.8 W:144	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ナデ		褐色	やや 不良	S-1 石英 海綿骨片	1/4	
15	甕 D ₁	C:130 N:11.6	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ナデ		淡褐色	良	S-2 M-1 赤色粒	ク	
16	甕 B	C:166 N:12.9	a:ナデ b:ク	a:ナデ b:ケズリ		淡黄褐色	ク	S-1 赤色粒	ク	
17	甕 D ₁	C:150 N:12.8	磨耗顕著	同左		橙褐色	並 やや 軟質	S-1 シャーモット 石英	ク	
18	甕 D ₁	C:150 N:12.0 W:160	a:ナデ b:ク	a:ハケ 一部ナデ b:ナデ		赤褐色	並	S-3 石英 黒雲母	2/3	
19	甕 G	C:174 N:130	a:ナデ b:ク	a:摩耗 b:ケズリ		淡褐色	良	S-3 赤色粒 黒雲母	1/4	
20	甕 B	C:176 N:160	a:ナデ b:ナデ 頸部ハケ	a:ナデ b:ケズリ		暗褐色	並	M-1	小片	
21	甕 B	C:160 N:13.6	a:ナデ b:ク	a: b:ケズリ		淡橙褐色	良	S-2 赤色粒 黒雲母	ク	
第13図 22	甕 D ₁	C:153 N:12.4 W:191 H:25.4 B:5.0	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ク	a:ハケ b:ク	茶褐色	良	S・N-2 赤色粒少 黒雲母	完	
23	甕 D ₁	C:180 N:15.6 W:230	a:ナデ b:ク 頸部ハケ	a:ハケ 一部ナデ b:ナデ		淡褐色	ク	S-2 赤色粒 黒雲母	2/3	
24	甕 D ₁	C:210 N:18.2	a:ナデ b:ク	a:ナデ b:ケズリ		ク	並	N-3	小片	
25	甕 B	C:200 N:15.8	a:ナデ b:ク			ク	良	S-3 L-1 赤色粒・石英 黒雲母	1/5	
26	甕 B	C:188 N:16.6	a:磨耗 b:ナデ	磨耗顕著		淡橙褐色	並	S・M-2 L-1 シャーモット	1/4	
27	甕 B	C:190 N:16.2	a:ナデ b:ク	a: b:ケズリ		ク	ク	M-1 シャーモット 石英	小片	
28	甕 E ₂	C:158 N:13.2	a:ナデ b:ク			淡褐色	ク	O	ク	
29	甕 C ₁	C:165 N:15.4	a:ナデ b:ク	a:ナデ b:ケズリ		淡橙褐色	良	M・L-1 石英 黒雲母	1/6	
30	甕 C ₁	C:178 N:16.8	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ク		淡褐色	ク	S・L-1 黒色粒 石英	1/2	

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
31	甕 C ₁	C:156 N:134	a:ナデ b:ク	a:剥離 b:ナデ		a:赤褐色 b:淡橙褐色	並	0 黒色粒	1/8	
32	甕 (C ₂)	C:164 N:126	a:ナデ b:ク			a:淡褐色 b:灰褐色	ク	S-1 赤色粒少	小片	
33	甕 C ₁	C:165 N:134 W:21.0	a:ナデ b:ク	a:ハケ 中位にナデ b:ハケ		a:淡褐色 b:灰褐色	良	0 海綿骨片 黒雲母	完	
第14図 34	甕 F	C:190 N:166 W:30.1	a:ナデ b:ク 頸部ハケ	a:ハケ b:ケズリ		淡褐色	ク	M-2 シャーモット 黒雲母	2/3	口縁部細かいハケ状具によるキザミ
35	鉢 H	C:140 N:120 W:15.4	a:ナデ b:ク	a:ハケ(ナデ?) b:ナデ		淡褐色	良	S-1 赤色粒 黒雲母	3/4	口縁下端、肩部に細かなキザミ 頸部～肩部平行ハケ調整
36	甕か F	C:214 N:166	a:ナデ b:ク	a:ハケ→ナデ b:摩耗		ク	ク	S・L-1 赤色粒 黒雲母	小片	貼り付け粘土帯にハケ状具によるキザミを施す
37	壺 C	C:120 N:92 W:12.6 H:12.1 B:3.4	a:ミガキ b:ク	a:ミガキ b:ナデ	a:ミガキ b:ナデ	ク	ク	M-3 黒雲母	2/3	体部中ほどに櫛状工具による5条の波状文赤彩(内・外面とも)
38	壺 D ₁	C:116 N:82	a:ミガキ b:ク			a:茶褐色 b:橙褐色	並	S-2 赤色粒 黒雲母	1/4	頸部に2孔1対の透孔あり(径4mm) 擬凹線9条
39	壺 A ₁	C:114 N:84 NL:7.6	a:ハケ b:ナデ			灰褐色	ク	S・M-2 シャーモット 黒雲母	1/2	
40	壺?	C:154	a:ナデ 一部ハケ b:ク			ク	ク	M-1	1/8	
41	壺 A ₃	C:126 N:92 NL:4.0	a:上半ナデ 下半ハケ b:ナデ			淡褐色	ク	M-2 赤色粒 石英	ク	擬凹線5条
42	壺 A ₃	C:174 N:114 NL:6.8	a:端部ナデ 頸部ハケ b:ク			ク	良	S-3 赤色粒 石英	1/4	擬凹線7条か
43	壺 A ₃	C:152 N:96 NL:8.7	a:ナデ 頸部ハケ b:ヨコナデ 頸部不定ナデ			ク	ク	S・L-1 黒雲母 石英	1/2	擬凹線9～10条
44	壺 A ₂	C:132 N:96 NL:9.2	a:ナデ 頸部ハケ→ミガキ b:ナデ 頸部ハケ	a:ミガキ b:ナデ		淡褐色	良	S-1 赤色粒 石英	3/4	平行沈線3条
45	体部片			a:平行沈線 簾状文 施文 b:ハケ		ク	並	M-3 シャーモット 海綿骨片	小片	壺肩部片か?
第15図 46	鉢 B ₁	C:194	a: b:ミガキ	a:ミガキ b:ク		茶褐色	良	S-2 黒雲母少	1/4	外面全体及び口縁内面に赤彩痕あり 脚が付く可能性あり
47	鉢 A ₂	C:148 B:24 H:8.3	a:ミガキ b:ク	a:ミガキ b:ク	a:ミガキ(不明 隙) b:ク(ク)	淡橙褐色	ク	M-2	完	
48	鉢 B ₂	C:172	a:ナデ b:ク	a:ハケ→ナデ b:ハケ		淡褐色	ク	S-2 赤色粒 石英	1/5	

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
49	台付無 頸壺 H ₂	C: 63 W: 18.5 B: 14.8 H: 29.0	a: C字状刺突文 擬凹線3条 棒状浮文4本1単 位を4カ所に添付	a: ミガキ	a: ミガキ C字状刺突文 b: 磨耗		〃	O シャーモット	完	スタンプ、棒状 浮文、裾部透孔 6箇所
50	器台	C: 19.6 B: 17.2 H: 15.2	a: ミガキ b: 〃	a: ミガキ b: ケズリ	a: ミガキ b: ナデ	橙褐色	〃	O シャーモット	2/3	透孔6ヶ所 (65 mm)
51	器台	C: 17.8 B: 13.8 H: 14.6	a: ハケ→ミガ キ b: ミガキ	a: ミガキ	a: ミガキ b: ハケ ナデ	淡橙褐色	〃	S-1 赤色粒	完	赤彩痕 (外面)
52	器台		a: ミガキ b: 〃	a: ミガキ 一部ナデ b: ナデ 下半ハケ残る		淡褐色	並	M-1	1/2	
53	器台		a: ミガキ? b: 磨耗	a: ミガキ b: 摩耗		橙褐色	並	S-3 M-1 シャーモット	1/2	
54	器台			a: ミガキ	a: キザミ文	淡橙褐色	やや 不良	S-1 石英微量	完	
55	脚部?	B: 13.0		a: ハケ b: ハケ→ミガキ	a: ナデ→ミガキ b: ナデ	淡褐色	良	M-2	小片	
第16図 56	高杯 A ₁	C: 35.2 B: 21.0	a: 擬凹線→ミ ガキ b: ミガキ		a: ミガキ 端部ナデ b: ハケ 端部ナデ	〃	〃	O 赤色粒 黒雲母	完	赤彩 裾部: S字状ス タンプ文 楕状具刺突文 四方透孔あり
57	高杯 B ₂	C: 29.0	a: ミガキ b: 〃				〃	O 赤色粒	1/5	赤彩 (内・外面 とも)
58	高杯?	C: 26.0	a: ミガキ b: 〃			淡橙褐色	並	M-1	小片	赤彩 (内・外面 とも)
59	高杯 B ₂	C: 25.0	a: ミガキ b: 〃			淡褐色	〃	O 赤色粒	〃	赤彩 (内・外面 とも)
60	高杯 B ₂	C: 23.8	a: ミガキ b: 〃			淡橙褐色	良	S・M-2 赤色粒 海綿骨片微量	完	剥離が激しいが 内・外面ともに 赤彩されていた ものと思われる
61	高杯 B ₂	C: 21.0	a: ミガキ b: 〃			橙褐色	〃	S-2 石英	1/4	
62	脚・裾 部	W: 4.4 B: 16.8		a: ミガキ b: ケズリ	a: ミガキ b: ナデ	〃	〃	L-1 黒雲母多 海綿骨片少	完	三方透孔 (径11 ~11.5mmあり)
63	高杯 (柱状 部)	W: 3.8		a: ミガキ b: 絞り目あり 下半ハケ→ナデ		淡褐色	並	S-2 M-1 赤色粒	〃	透孔現状で2孔あ り (径8.5~9mm) 全周で4孔か?
64	柱状部	W: 3.65		磨耗顕著		橙褐色	やや 不良	S-2	〃	
65	裾部	B: 15.0			a: ナデ b: ハケ	灰褐色	良	M-1 赤色粒 黒雲母	1/4	
66	裾端部	B: 16.0			a: ミガキ 端部ナデ b: 上半ナデ 下半ミガキ	淡褐色	並	O 赤色粒 黒色粒	小片	
67	高杯脚 部	W: 4.2 B: 16.5		a: ミガキ b: 絞り目	a: ミガキ b: 上半にハケ残る 下半ナデ	橙褐色	良	S-1 黒雲母	完	
第17図 68	高杯 B ₂	C: 24.0	a: ミガキ b: 〃			淡褐色	並	S-2 L-1	小片	赤彩 (内・外面 とも)

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
69		C : 18.0	a : ナデ 屈曲部キザミ b : ミガキか? (磨耗)			淡橙褐色	◇	S-1 赤色粒 黒色粒	◇	端面取り
70	裾部	B : 18.0			a : ミガキ 端部ナデ b : ハケ 端部ナデ	淡褐色	良	O 赤色粒 黒雲母	1/8	端部外面にヘラ 状工具先による 押捺文 透孔現状で1孔 (径9~10mm)
第21図 1	甕 A ₁	C : 11.8 N : 10.8	a : ナデ b : ♪	a : b : ケズリ		淡褐色	良	O	1/4	擬凹線 2条
2	甕 E ₁	C : 16.4 N : 14.3	a : ナデ b : ♪			淡橙褐色	◇	S-1 赤色粒	小片	擬凹線 5条
3	甕 A ₁	C : 15.2 N : 11.8	a : ナデ b : ♪	a : ナデ b : ケズリ		暗褐色	並	S-2	◇	擬凹線 6条? (浅い)
4	甕 A ₂	C : 16.0 N : 13.2	a : ナデ b : ナデ 頸部ハケ	a : ナデ b : ケズリ		茶褐色	良	S-1 シャーモット	◇	擬凹線 6条 指頭圧痕
5	甕 A ₂	C : 16.2 N : 12.6	a : ナデ b : ナデ 頸部ハケ	a : ハケ b : ケズリ		灰褐色	並	S-3 砂粒多	1/8	擬凹線 7条 指頭圧痕
6	甕 A ₂	C : 17.6 N : 13.6	a : ナデ b : ♪	a : 摩耗 b : ケズリ		淡褐色	良	S-3 砂粒多 赤色粒	小片	擬凹線 6条 指頭圧痕
7	甕 A ₂	C : 19.2 N : 16.2	a : ナデ b : ナデ 頸部ハケ残存	a : ハケ b : ケズリ		◇	◇	S-2 赤色粒	◇	擬凹線 6~7条
8	甕 A ₂	C : 20.0 N : 15.6	a : ナデ b : ♪	a : b : ケズリ		◇	並	S・M-1 海綿骨片微量	1/6	擬凹線 8条
9	甕 A ₃	C : 21.0 N : 16.8	a : ナデ b : ♪	a : ハケ b : 摩耗		黄褐色	◇	S-2 砂粒多 赤色粒	1/3	擬凹線10条 指頭圧痕
10	甕 A ₂	C : 22.0 N : 18.6	a : ナデ b : ナデ 頸部ハケ残存	a : ハケ b : ケズリ		◇	良	S-3 砂粒多	1/5	擬凹線 8条 指頭圧痕
11	甕 D ₁	C : 20.0	a : ナデ b : ♪			暗褐色	並	M-1	小片	
12	甕 D ₂	C : 18.5 N : 15.4 W : 21.4 B : 3.4 H : 24.6	a : 磨耗 b : ナデ	a : ハケ b : ケズリ	a : ハケ b : ケズリ	淡褐色	良	S-3 赤色粒	完	
13	甕 D ₂	C : 17.0 N : 14.8	a : ナデ b : ♪	a : ハケ b : ケズリ		a : 灰褐色 b : 淡褐色	◇	M-1	小片	
14	甕 D ₁	C : 16.8 N : 13.6	a : ナデ b : ♪	a : ナデ b : ♪ (不定方向)		淡褐色	並	S-2 L-1 赤色粒微量	1/8	
15	甕 B	C : 16.4 N : 16.0	磨耗顕著			赤褐色	やや 不良	S・M-2 赤色粒少	小片	
16	甕 B	C : 13.4 N : 12.0 W : 13.2	a : ナデ b : ♪	a : ハケ b : ケズリ		a : 灰褐色 b : 淡褐色	良	S-2 黑白粒	1/4	
17	甕 B	C : 13.0 N : 10.4	a : ナデ b : 磨耗	磨耗顕著		淡橙褐色	やや 不良	S-3	小片	
第22図 18	甕 C ₂	C : 15.2 N : 13.0	a : ナデ 頸部ハケ b : ナデ	a : ハケ b : ♪		淡褐色	並	M-1	1/4	

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頭部	体 部	底 部					
19	壺 F ₁	C:141 N:109 W:26.2 B:5.9 H:30.0	a:ナデ 頸部ハケ残存 b:ナデ	a:ミガキ b:ハケ	a:ミガキ b:ハケ	〃	良	S・M-2	完	外底部ケズリを 施す
20	底部	B:62			磨耗顕著	a:黄褐色 b:灰褐色	並	S-2	1/4	
21	底部	B:1.8			a:ミガキ b:〃	褐色	良	O	1/2	
22	高杯 (B2)	C:33.0	a:ミガキ b:〃			淡褐色	〃	O 砂粒少	1/8	赤彩痕(内・外 面とも) 内面端部に5~ 6条の擬凹線を 施す。
23	高杯	C:27.0	a:ミガキ b:〃			淡橙褐色	良	M-1 黒色粒	小片	赤彩(内・外 面とも)
24		C:25.0	a:ナデ b:〃			〃	並	O	〃	ヘラ状工具先で押し 引きによる連続キザ ミを内外とも3段施 す。端部は同様の工 具でキザミを施す。
25		C:19.0	a:ミガキ b:〃			暗褐色	良	O 海綿骨片少	〃	赤彩痕(外面)
26	脚裾部	B:16.8			a:ナデ b:〃	淡褐色	並	M-1 赤色粒少	小片	赤彩(外面) 擬凹線12条
27	器台	C:18.0 B:13.6	a:ミガキ b:〃	a:ミガキ? b:	a:ミガキ b:上半ハケ 下半ナデ	淡黄褐色	良	S・M-2 L-1	完	
28	器台 (裾部)	B:20.4			a:ミガキ b:ミガキ ケズリ ナデ	黄褐色	〃	S-2 赤色粒	1/2	擬凹線8~9条
29	高杯 E	C:11.6	a:ミガキ b:〃			淡褐色	〃	S-1	1/3	
30	脚部	B:14.5		a:ミガキ b:	a:ミガキ 端部ナデ b:ナデ	〃	〃	O 赤色粒少	完	赤彩(外面) 外面段部及び端 部にC字状スタ ンプ文を施す。 2孔一対の3方 透孔あり
31	鉢? (E ₁)	C:18.2	a:ミガキ b:ナデ→ミガキ	a:ハケキ→ナデ b:ミガキ		〃	並	O	1/8	脚付きか? 凹線3条
32	鉢? (H)	C:12.2 N:11.4	a:指押さえ→ ナデ b:〃	a:ハケ b:ケズリ		暗褐色	〃	S-2 砂粒	1/5	
第23図 1	甕 E ₁	C:14.4 N:11.3 W:14.5	a:摩耗 b:	a:ハケ b:ケズリ		橙褐色	並	S-2	1/8	擬凹線2条
2	甕 A ₁	C:16.0 N:12.8	a:ナデ b:〃			淡褐色	〃	S-1 黒雲母	小片	擬凹線9条
3	甕 A ₁	C:16.6 N:14.8	a:ナデ b:ナデ	a:ハケ b:ケズリ		〃	〃	S-1 石英少	〃	擬凹線8条 指頭圧痕
4	甕 A ₁	C:16.4 N:14.6	a:ナデ b:〃	a:ナデ? b:ケズリ		淡橙褐色	〃	L-1 赤色粒	1/8	擬凹線7条 指頭状圧痕
5	甕 A ₂	C:19.6 N:15.0	a:ナデ b:〃	a:ハケ b:ケズリ		淡褐色	〃	S-1 砂粒	小片	擬凹線8条 指頭圧痕
6	甕 A ₂	C:18.6 N:15.4	a:ナデ b:ナデ 頸部ハケ残存	a:ハケ b:ケズリ		a:黒褐色 b:淡橙褐色	〃	S-2	〃	擬凹線10条 指頭圧痕

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
7	甕 A ₂	C : 19.8 N : 13.6	a : ナデ b : ナデ 頸部ハケ	a : ハケ b : ケズリ		淡褐色	〃	S-3 砂粒多	〃	擬凹線9条 指頭圧痕
8	甕 A ₂	C : 20.2 N : 15.9	a : ナデ b : ナデ 頸部ハケ残存	a : b : ケズリ		a : 淡橙褐色 b : 黄褐色	〃	S-3 赤色粒 砂粒多	〃	擬凹線9条 指頭圧痕
9	甕 A ₂	C : 21.0 N : 18.0	a : ナデ b : 〃	a : ハケ? b : ケズリ		淡褐色	良	S-3 赤色粒	1/2	擬凹線8条 指頭圧痕
10	甕 A ₃	C : 23.0 N : 18.9	a : ナデ b : 〃	a : ハケ b : ケズリ		〃	並	S-3 赤色粒 砂粒多	〃	擬凹線11条 指頭圧痕
11	甕 A ₃	C : 26.0 N : 20.4	a : ナデ b : 〃	a : 磨耗 b : ケズリ		〃	〃	S-1 赤色粒少	小片	擬凹線9条 指頭状圧痕
12	甕 A ₂	C : 21.0 N : 17.8	磨耗顕著	a : ハケ b : 〃		a : 灰褐色 b : 淡橙褐色	〃	S-3 赤色粒多 砂粒多	1/4	擬凹線9条
13	甕 B	C : 25.0 N : 22.0	a : ナデ b : 〃	a : b : ケズリ		橙褐色	〃	S-1	1/8	床面
14	甕 D ₁	C : 16.6 N : 15.8	a : ナデ b : 〃	a : b : ケズリ		a : 黒褐色 b : 茶褐色	〃	0	小片	
15	甕 D ₁	C : 17.6 N : 16.2	a : ナデ b : 〃	a : ナデ b : 〃		淡暗褐色	〃	0	1/2	
16	甕 D ₁	C : 16.0 N : 14.4	a : ナデ b : 〃	a : b : ケズリ		茶褐色	〃	S-1 黒雲母	小片	
17	甕 B	C : 13.4	a : ナデ b : 〃			淡橙褐色	〃	0 シャーモット少	〃	
18	甕 F	C : 16.2 N : 13.8	a : ナデ b : 〃	a : ナデ b : ナデ 一部ハケか?		淡橙褐色	良	S-1 赤色粒	〃	屈曲部外面にキ ザミを施す。口 縁内面にモミの 圧痕あり 近江系
19	甕 C ₂	C : 18.4 N : 17.8	a : ナデ b : ハケ	a : ハケ b : ナデ		茶褐色	並	S-2 シャーモット 海綿骨片少	1/5	端部面取り
第24図 20	壺 E	C : 14.8 N : 11.7	a : ミガキ b : ナデ 一部ミガキ	a : ナデ→ミガキ b : ケズリ		橙褐色	良	H-1	〃	指頭圧痕
21	壺 E	C : 14.4 N : 8.4	a : ミガキ b : 〃			淡橙褐色	並	L-1 黒色粒	1/2	
22	壺	C : 11.4 N : 9.4	a : ナデ b : 磨耗	a : ミガキ b : ケズリ		〃	〃	0	小片	擬凹線5条か?
23		C : 11.8 N : 8.4	a : ナデ b : 〃			淡橙褐色	良	0	小片	内面段部に2条 の凹線が巡る
24	壺 F ₁	C : 19.0	a : ナデ 頸部ハケ b : ナデ			〃	〃	S-1 砂粒多	1/4	
25	壺	W : 29.8 B : 5.4		a : ハケ→ミガキ b : ハケ	a : ハケ→ミガキ b : ハケ	〃	〃	0	ほぼ 完	外底面木葉痕あり
26	口縁 端部		a : ハケ b : ハケ状工具 による綾杉文			淡褐色	〃	0	小片	
27	壺 F ₁	C : 15.0 N : 11.0	a : ナデ 頸部ハケ b : ナデ	a : ナデ b : 〃		〃	〃	S-2	1/3	
28	底部	B : 3.7			a : ハケ→ミガキ b : 磨耗	淡橙褐色	〃	S-1 砂粒 黒雲母	ほぼ 完	
29	蓋	つまみ : 4.4	a : ミガキ b : ミガキ 指押さえ→ナデ			淡褐色	並	S-1	1/3	

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
30	底部	B : 6.0			a : ハケ→指押さえ b : 脚台内指押さえ	暗褐色	〃	S・M-1 黒雲母	完	
31	底部	B : 3.2			a : 磨耗 b : ケズリ	淡黄褐色	良	S-1 砂粒	3/4	
32	底部穿孔土器	B : 1.5			a : ナデ b : 〃	淡褐色	〃	L-1 海綿骨片微量	完	孔径13mm 焼成前穿孔
33	底部	B : 3.6			a : ハケ b : 磨耗	a : 茶褐色 b : 淡褐色	並	S-2 M-1 赤色粒	1/2	
34	底部	B : 1.5			a : ハケ b : ナデ	a : 暗褐色 b : 淡褐色	〃	S-2	3/4	
35	底部	B : 2.6			a : ハケ 下半ナデ b : 磨耗	a : 淡褐色 b : 黄褐色	良	S-2 赤色粒	完	
36	底部	B : 5.3			a : ナデ b : 〃	a : 茶褐色 b : 淡褐色	並	S・M-1	3/4	
37	鉢 B ₂	C : 13.7	a : ミガキ b : 〃	a : ミガキ b : 〃		赤褐色	良	0	1/8	赤彩 周溝内出土
38	鉢 B ₂	C : 19.0	a : ミガキ b : 〃	a : ミガキ b : 〃		橙褐色	〃	0	小片	赤彩 (内・外面)
39	小型 土器	C : 11.2	a : ミガキ b : 〃	a : ミガキ b : ナデか?		〃	〃	0 赤色粒	〃	〃
40	小型 土器	C : 8.4 B : 2.2 H : 4.3	a : ナデ b : 〃	a : ハケ? b : ミガキ?	a : ハケ? b : ナデ?	淡褐色	〃	S-2 黒雲母	1/8	磨耗顕著
41	小型 土器	C : 11.6	a : ミガキ b : 〃	a : ミガキ b : 〃		淡橙褐色	並	0	〃	〃
42	小型 土器	C : 11.0	a : ミガキ (雑) b : ミガキ	a : ミガキ b : 〃		淡橙褐色	並	M-2 赤色粒少	小片	
43	口縁 部片	C : 17.4	磨耗顕著			淡褐色	〃	0	〃	端部にハケ状工 具によるキザミ を施す
第25図 44	鉢 G	C : 34.8 N : 30.6	a : ナデ b : 〃	a : ハケ→ミガキ b : ケズリ→ミガキ		〃	良	S-2	1/4	環状把手
45	把手 G			a : ミガキ b : 〃		淡褐色	やや 良	M-1 赤色粒 黒雲母	完	柱穴内出土
46	結合 器台	C : 17.7 B : 13.2	a : ミガキ b : 〃		a : ミガキ 端部ナデ b : ナデ→ミガキ 端部ナデ	淡橙褐色	良	0 黒雲母	1/4	涙滴状透かし 全周で推定12~ 14ヶ
47		C : 26.0	a : ミガキ b : 〃			橙褐色	〃	0 黒色粒	小片	擬凹線 2条 床面
48	裾端部	B : 26.0			a : ミガキ b : 〃	黒褐色 (暗褐色)	〃	0	〃	〃
49	裾端部	B : 18.0			a : ナデ b : 〃	淡橙褐色	〃	0	〃	〃
50	器台	C : 21.4	a : ミガキ b : 〃			a : 淡褐色 b : 暗褐色	〃	0 海綿骨片 黒雲母	1/3	
51	器台 (脚部)		a : ミガキ b : 〃	a : ミガキ b : 上位僅かに ケズリ 下位ナデか?	a : ミガキ b : ミガキ (ナデか?)	淡褐色	並	0 黒雲母	ほぼ 完	
52	器台 (脚部)		a : ミガキ b : 〃	a : ミガキ b : 絞り目?	a : ミガキ b : ナデ	淡橙褐色	良	0	〃	段部にヘラ状工 具によるキザミ を施す。赤彩3 方透孔 (径6mm)
53	脚部	B : 10.5			a : ミガキ b : 〃	橙褐色	〃	0 海綿骨片微量	1/4	住居内土坑

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
54	脚裾部	B : 16.0			磨耗顕著	淡橙褐色	並	S-2	小片	擬凹線 1 条
第26図 55	高坏 C	C : 26.1 B : 13.0	a : ミガキ b : ♪		a : ミガキ b : ナデ 下半はミガキ	淡褐色	良	0 海綿骨片 黒色粒	完	2 孔 1 対の透孔 全周で推定 3ヶ所 (孔径45mm~5mm)
56	高坏 C	C : 28.2	a : ミガキ b : ♪			橙褐色	♪	0 赤色粒	1/2	赤彩 (内・外面) 床面
57	高坏 C	C : 21.2	a : ミガキ b : ♪			♪	並	0	小片	
58	高坏	C : 18.4	a : ミガキ 下半ハケ→ナデ b : ミガキ			淡橙褐色	良	M-1	♪	
59	高坏 C		a : ミガキ b : ミガキ			淡褐色	並	S-3 黒雲母	♪	
60	高坏 C		a : ミガキ b : ♪			淡橙褐色	♪	S-1	♪	
61	高坏 D	C : 25.0	磨耗顕著			a : 暗褐色 b : 淡褐色	♪	S-3 赤色粒 砂粒多	1/4	柱穴内出土
62	高坏 D		a : ミガキ b : ♪			淡褐色	♪	0 黒雲母	小片	
63	高坏 D		a : ミガキ b : ♪			淡橙褐色	♪	0	小片	
64	高坏 D		a : ミガキ b : ♪			a : 橙褐色 b : 淡橙褐色	良	0	♪	
65	高坏 F	C : 21.0	a : ハケ→ミガキ b : ♪	a : ミガキ b :		a : 茶褐色 b : 淡褐色	♪	S-2 赤色粒 黒雲母	2/3	
66	高坏 E	C : 10.0	a : ミガキ b : ♪			淡橙褐色	並	0 黒雲母	小片	
67		C : 11.0	a : ミガキ b : ♪	a : ミガキ b : ♪		暗褐色	やや 良	0 黒雲母	1/5	把手状のものが剥 離した痕跡あり 床面
68	蓋	つまみ : 3.8	a : ナデ (指頭 痕) b : ナデ	a : ハケ b : ハケ→ミガキ		淡橙褐色	良	0 シャーモット少	1/6	
69	蓋	つまみ : 2.6 B : 8.7 H : 4.0	a : ミガキ b :	a : ミガキ b : ハケ残存 下半ミガキ	a : ナデ b : ♪	a : 橙褐色 b : 淡橙褐色	♪	s-1 赤色粒 黒雲母	♪	
70	蓋	つまみ : 2.2	磨耗顕著			橙褐色	並	0 赤色粒	♪	
71	土師質 土器 (皿)	C : 12.4 H : 3.1	磨耗顕著	同左	同左	♪	良	0	1/5	
72	高坏 (柱状部)		a : ミガキ b : ♪	a : ミガキ b : 上半絞り目 下半ケズリ		淡橙褐色	並	S-2 シャーモット	完	床面 赤彩 (外面)
73	高坏 (柱状部)			a : ミガキ b : 絞り目 下半ナデか?		♪	♪	S-1 赤色粒	♪	
第28図 1	甕 A ₁	C : 16.0	a : ナデ b : ♪			茶褐色	並	S-2 黒雲母	小片	擬凹線 7 条
2	甕 A ₁	C : 14.6 N : 11.2	a : ナデ b : ♪			淡褐色	♪	0	♪	擬凹線 6 条か?
3	甕 B	C : 19.2	a : ナデ b : ♪			♪	♪	S-2	♪	擬凹線 2 条か? 指頭状圧痕
4	甕 B	C : 11.8	a : 磨耗 b : ナデ	a : 磨耗 b : ケズリ		赤褐色	♪	S-3 黒雲母	♪	

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
5	甕	C : 172	a : 端部ナデ 頸部ハケ b : 磨耗			茶褐色	◇	S-2	小片	端部内面ハケ状 工具による羽状 キザミを施す
6	底部	B : 24			a : ナデ b : ケズリ	a : 淡褐色 b : 黒褐色	◇	M-2 海綿骨片 黒雲母	完	外底面ケズリ
7	底部	B : 48			a : ハケ b : ◇	茶褐色	◇	M-1	ほぼ 完	外底面ハケ
8	鉢 B ₂	C : 15.0	a : ナデ b : ナデ 頸部下に ハケ残存	a : ハケ b : ケズリ 下半磨耗		赤褐色	◇	S-2 黒雲母	1/4	
9	鉢 E ₁	C : 17.0	a : ミガキ b : ◇			淡橙褐色	◇	0	小片	赤彩 (内・外面)
10	口縁部 片		a : 端部ナデ ハケ b : ハケ			a : 茶褐色 b : 灰褐色	◇	S-1 黒雲母	◇	端部ハケ状具に よるキザミ
第30図 1	甕 A ₁	C : 16.8 N : 15.2 W : 21.7	a : ナデ b : ◇	a : ハケ→ナデ b : ナデ	a : ハケ→ナデ b : ナデ	茶褐色	良	0	完	擬凹線10条 肩部ハケ状工具 による 刺突文、床面
2	甕 A ₄	C : 19.0 N : 17.4	a : ナデ b : ◇	a : ハケ b : ケズリ		淡褐色	並	S・M-1	1/8	擬凹線6条 床面
3	甕 A ₂	C : 18.0 N : 15.1 W : 18.8	a : ナデ b : ナデ 頸部ハケ	a : ハケ b : ケズリ		茶褐色	◇	S・M-3	ほぼ 完	擬凹線9条 指頭圧痕 床面
4	甕 A ₂	C : 18.6 N : 15.0	a : ナデ b : ◇	a : ハケ→ナデ b : ケズリ		暗褐色 茶褐色	◇	S-2 海綿骨片微量	◇	擬凹線9条 指頭圧痕 住居土坑
5	甕 A ₂	C : 18.0 N : 14.8	a : ナデ b : ナデ 頸部ハケ	a : ハケ b : ケズリ		a : 淡赤褐色 b : 淡褐色	並	S-3 砂粒多	1/4	擬凹線6条 指頭圧痕状工具 圧痕 床面
6	甕 A ₃	C : 17.4 N : 14.2 W : 18.1 B : 2.5 H : 21.0	a : ナデ b : ◇	a : 肩部ハケ ナデ b : ケズリ	a : ナデ b : ケズリ	淡褐色	◇	S-3 砂粒多	ほぼ 完	擬凹線6条 床面
7	甕 A ₃	C : 16.0 N : 13.0	a : ナデ b : ◇	a : b : ケズリ		茶褐色	◇	S-3 砂粒多 黒雲母	1/4	擬凹線8条 指頭圧痕
8	甕 B	C : 15.8 N : 13.6	a : ナデ b : ◇	a : b : ケズリ		暗赤褐色	◇	S-1 黒雲母	◇	浅い2条の内凹線 あり
9	甕 B	C : 16.0 N : 12.2	a : ナデ b : ◇	a : ナデ? b : ケズリ		茶褐色	やや 不良	S・M-2 黒雲母	1/6	床面
第31図 10	壺 D ₂	C : 16.2 N : 13.0	a : ミガキ b : ◇	a : ミガキ b : ケズリ		淡橙褐色	並	0	小片	
11	壺 E	C : 13.0 N : 10.8	a : ミガキ b : ◇	a : ミガキ b : ケズリ		a : 茶褐色 暗褐色 b : 橙褐色	◇	S-1	◇	指頭状圧痕 住居土坑
12	壺	W : 13.5 B : 2.6		a : ミガキ b : ケズリ	a : ミガキ b : ケズリ	暗褐色 茶褐色	良	S-2	1/2	外底面ナデ 床面
13	壺 D ₂	C : 7.3 N : 6.0 W : 12.0 B : 2.5 H : 9.2	a : ミガキ b : ミガキ 頸部ハケ残存	a : ハケ→ミガキ b : ミガキ	a : ミガキ b : ◇	淡橙褐色	精良	0 赤色粒	ほぼ 完	赤彩 床面
14	無頭壺 G	C : 10.8	a : b : ミガキ	a : ミガキ b : ◇				M-1 シャーモット少	小片	擬凹線7条

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
15	有台鉢 F	C:15.4 B:9.1 H:11.5	a:ナデ b:ナデ 下半ナデ→ ミガキ	a:ハケ b:ミガキ	a:ナデ b:ク	橙褐色	良	S-1 海綿骨片 黒雲母	ほぼ 完	床面
16	脚台	B:8.4		a:ハケ→ミガキ b:ケズリ	a:ハケ b:ハケ	暗褐色	ク	0	1/3	脚台接地面に不 規則な浅いキザ ミあり
17		C:13.0	a:ミガキ b:ク			ク	並	0	小片	把手状粘土紐を 底部に廻りこむ ように貼付
18	手握ね 土器	C:4.6 B:3.1 H:4.6	a:雑なミガキ b:ク	同左	a:指押さえ b:ナデ	淡橙褐色	良	0 赤色粒	ほぼ 完	赤彩 床面
19	鉢 E ₁	C:11.0 B:1.4 H:4.8	a:ミガキ b:ク	同左	同左	ク	ク	M-2	ク	
20	高坏 C	C:22.5 B:13.0 H:15.3	a:ミガキ b:ク	a:ミガキ b:ケズリ	a:ミガキ b:ハケ	ク	ク	M-1	完	透孔4ヶ所(径 5mm) 床面
21	高坏 E	C:10.0	a:ミガキ b:ク			ク	やや 良	0 黒雲母	小片	
22	高坏 C	C:24.4 B:13.4 H:15.0	a:ミガキ b:ミガキ 下半磨耗	a:ミガキ b:絞り目	a:ミガキ b:ハケ 端部ナデ	ク	良	S・M-1 シャーモット	ほぼ 完	床面
23	高坏 E	C:11.2	a:ミガキ b:ク			橙褐色 淡橙褐色	良	0 海綿骨片	1/2	床面
24	高坏 C	C:27.1	a:ミガキ b:ク			淡橙褐色	ク	0	完	
25	高坏 D		a:ミガキ b:ク			ク	ク	0 黒雲母	小片	
26	器台	C:20.6	a:ミガキ b:ク			茶褐色	ク	0 黒雲母	1/2	
27	器台	B:11.2		a:ミガキ b:絞り目	a:ミガキ b:ハケ	橙褐色 淡橙褐色	精良	0	完	床面
第35図 1	甕	C:20.0 N:16.0 W:16.8	a:ハケ b:ク	a:ハケ b:ハケ→ナデ		茶褐色	良	M-L-1	1/2	端部に粘土帯を 貼り付け、ヘラ 状具でキザミを 施す
2	口縁部 片		a:ハケ b:ク			淡褐色	やや 良	S-1	小片	端部外面ハケ状 具によるキザミ 内面櫛状具によ る羽状刺突文
3	甕	C:19.4 N:16.4 W:16.5 B:5.1 H:21.5	a:ハケ b:ク	同左	a:ハケ b:ナデ 指押さえ	暗褐色 褐色	ク	0	ほぼ 完	外底面ケズリ→ ナデ 端部ハケ状具に よるキザミ
4	甕	C:19.8 N:17.6	a:ハケ b:ク	同左		茶褐色 淡褐色	ク	S-1	1/3	床面 端部内面にハケ 状具による刺突 文を施す
5	甕	C:20.1 N:15.6 W:18.2 B:5.5 H:28.1	a:ハケ b:ク	a:ハケ b:ハケ→ナデ	同左	淡褐色	ク	S-1	完	床面 端部ハケ状具に よるキザミ

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
6	甕	C:17.5 N:13.8 W:14.8 B:5.0 H:20.7	a:端部ナデ ハケ b:ハケ	a:ハケ b:ハケ→ナデ	a:ハケ 下半ナデ b:ハケ→ナデ	a:茶褐色 淡褐色 b:暗褐色	並	S-1 黒雲母	1/2	端部ハケ状工具 による3ヶ1対 のキザミあり 全周で9対と推 定される
7	壺	C:10.4 N:9.2	a:ナデ 頸部ハケ b:ハケ	a:ハケ→ナデ b:ハケ		茶褐色 褐色	良	S-1 黒雲母	1/4	端部ハケ状工具に よる連続刺突文 5号住内混入
8	口縁部 片		a:ハケ→ナデ b:ハケ			暗褐色	〃	S-1 黒雲母	小片	端部内面櫛状工 具による羽状刺 突文
9	口縁部 片		a:ハケ b:			淡褐色	並	S-1	〃	〃
10	底部穿 孔土器	B:2.0			a:ハケ b:ナデ	茶褐色	良	S-1	1/3	床面(混入品)
11	小型土 器	C:2.6 W:4.4 B:1.7 H:4.3	a:ナデ b:〃	a:指押さえ b:〃	同左	褐色 灰褐色	〃	S-1 黒雲母	完	内面にモミ圧痕 らしきものあり
12	円盤状 土製品			ハケ 擦痕あり		淡褐色	〃	0	—	土器片転用
13	円盤状 土製品	W:4.2		擦痕あり		〃	〃	S-1	—	住居内土坑
14	円盤状 土製品			a:ハケ b:ナデ		〃	〃	0	—	住居内土坑 未穿孔 土器片転用
第36図 15	鉢	C:22.6	a:ナデ b:〃	a:ハケ b:ナデ		橙褐色	良	S-3 砂粒多	1/2	
第38図 1	甕 E ₁	C:24.4 N:22.6	磨耗顕著			淡橙褐色	良	S-M-3 赤色粒少	1/5	擬凹線3条 53号土坑
2	甕 E ₁	C:13.0 N:11.0	a:ナデ b:〃			〃	並	S-1 黒雲母	小片	擬凹線5条 (ハケ状具ナデ)
3	甕 E ₂	C:15.2 N:13.8 W:22.2 B:5.0 H:27.0	a:ナデ b:〃	a:ハケ 一部ハケ→ナデ b:ハケ	a:ハケ b:〃	茶褐色 淡褐色	良	M-1	ほぼ 完	床面
4	甕 C ₂	C:15.6 N:13.8 W:16.5 B:4.1 H:19.3	a:ナデ 頸部一部ハケ b:ナデ	a:ハケ b:〃	同左	淡褐色	良	0	ほぼ 完	沈線1条 53号土坑
5	甕 C ₂	C:13.6 N:11.2	a:ナデ b:〃	a:ハケ b:指頭ナデ		〃	並	S-2 砂粒	小片	
6	甕 C ₁	C:18.8 N:15.8 W:17.8	a:ナデ 頸部一部ハケ b:ナデ	a:ナデ b:ケズリ		茶褐色	良	M-2 赤色粒	1/3	
7	甕 F	C:14.0 N:12.8	a:ナデ b:〃	a: b:ナデ		淡橙褐色	〃	0 赤色粒	1/4	近江系
8	甕 F	C:16.4 N:14.6	a:ナデ b:〃	a:ナデ b:ハケ		茶褐色	〃	M-1 赤色粒 黒雲母	小片	近江系 53号土坑
9	甕 F	C:18.2 N:14.2	a:ナデ b:〃	a:ハケ→ナデ b:ナデ・ハケ		a:茶褐色 b:灰褐色	〃	S-2	1/3	近江系 床面
10	甕	N:14.6 W:21.2 B:4.5	a:頸部ナデ b:〃	a:ハケ→ナデ b:ハケ	a:ハケ→ナデ 一部ケズリ b:ケズリ	暗褐色	並	M-1	〃	

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
第39図 11	甕 D ₁	C : 22.4 N : 18.4 W : 26.4 B : 6.3 H : 36.5	磨耗顕著	同左	a : ハケ b : 磨耗	淡褐色	良	M-3	3/4	肩部斜行刺突文 床面
12	甕 D ₁	C : 16.6 N : 13.2 W : 19.0 B : 4.4 H : 25.0	a : ナデ b : ♪	a : ハケ→ナデ b : ナデ 一部ハケ	a : ハケ→ナデ b : ハケ→ナデ	茶褐色	やや 良	M-2 石英少	1/2	肩部斜行刺突文
13	底部	B : 7.0			a : ハケ b : ケズリ	淡褐色	♪	S-2 赤色粒	1/4	53号土坑
14	土鐘			磨耗顕著		♪	やや 不良	S-3 砂粒多	1/2	床面
15	土鐘					淡橙褐色	良	0 石英少	1/2	床面
16	土鐘					♪	やや 不良	S・M-3 赤色粒	1/2	
17	土鐘	W : 4.15 H : 4.2				♪	良	0 砂粒少	完	床面
18	甕 D ₁	C : 17.4 N : 14.2	a : ナデ b : ♪	a : b : ハケ		淡赤褐色	並	M-1 石英少	小片	
19	甕 D ₂	C : 19.6 N : 15.2	a : ナデ b : ♪			a : 橙褐色 b : 淡橙褐色	♪	S-2 黒雲母	1/4	53号土坑
20	器台	W : 5.1 B : 16.0		a : ミガキ b : 下半ケズリ	a : ナデ b : ケズリ→ナデ	赤褐色	良	S-3 赤色粒 黒雲母	1/2	擬凹線8条 赤彩痕(外面) 53号土坑
21	脚裾部	B : 21.0			a : ミガキ 端部ナデ b : ナデ	淡橙褐色	並	0 黒雲母	小片	端部ハケ器具に よるキザミ
22	脚裾部	B : 21.6			a : ミガキ 端部ナデ b : ハケ 端部ナデ	淡褐色	♪	0	小片	透孔現状で2ヶ 所(径8~10mm) 赤彩痕・段部キ ザミ 53号土坑
第40図 23	筒胴部			a : ミガキ b : 上半ミガキ 下半ケズリ		赤褐色	並	M-3 黒雲母 石英	小片	平行沈線8条 赤彩痕(内・外 面とも) 53号土坑
24	高杯 B2	C : 21.2	a : ミガキ b : ♪			橙褐色	♪	S-1 黒雲母	♪	
25	壺 B	C : 14.7 W : 19.0 B : 4.0 H : 27.7	a : ナデ ハケ b : ナデ ハケ	a : ハケ b : ナデ	磨耗顕著	茶褐色	♪	S・M-3 砂粒多	完	床面
26	壺 B	C : 18.6	a : ナデ ハケ b : ナデ ハケ			褐色	良	0	小片	
27	壺 A ₃	C : 15.2	a : ナデ ハケ b : ナデ ハケ			淡褐色	並	0	1/4	擬凹線6条
28	器台	C : 17.9 B : 15.3 H : 15.4	磨耗顕著	同左	同左	橙褐色 淡橙褐色	良	M-3 L-1 シャーモット	ほぼ 完	床面
29	台付装 飾壺 H ₁	W : 15.2 B : 9.0		a : ミガキ b : ♪	a : ミガキ ナデ b : ミガキ ナデ	橙褐色	♪	0 砂粒多	完	53号土坑

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
30	鉢 A ₁	C:15.8 W:14.8 B:4.6 H:11.8	a:ミガキ b:ク	同左	同左	淡褐色	ク	M-3	完	櫛状工具斜行刺 突文 渦巻文スタンプ 赤彩(外面)、床面
31	鉢 A ₁	C:15.0 W:13.1	磨耗顕著	a:ハケ b:ケズリ		淡橙褐色	並	S・M-2 赤色粒	小片	床面 擬凹線4条
32	脚台部 H ₁	B:9.0			磨耗顕著	ク	良	M-1	ほぼ 完	54号土坑(第 四) と同一個体
第43図 1	甕 A ₂	C:11.4 N:9.0	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		淡褐色	並	S-2 石英	1/5	擬凹線7条
2	甕 A ₂	C:13.0 N:10.2	a:ナデ 頸部指頭状圧痕 b:ナデ	a: b:ケズリ		a:暗赤褐色 b:橙褐色	ク	S-2 赤色粒	1/4	擬凹線8条
3	甕 A ₁	C:14.8 N:13.2	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		a:暗褐色 b:茶褐色	良	M-1	1/6	擬凹線5条か?
4	甕 A ₃	C:17.0 N:13.6	a:ナデ b:ク	磨耗顕著		淡褐色	並	S-2 砂粒	小片	擬凹線6状
5	甕 A ₂	C:15.4 N:13.4	a:ナデ b:ク	a: b:ケズリ		淡橙褐色	ク	S-1 黒雲母多	ク	擬凹線7条 指頭圧痕
6	甕 A ₃	C:18.8 N:16.4	a:ナデ b:ク			淡褐色	ク	0 シャーモット 砂粒多 海綿骨片少	ク	弱い擬凹線3条
7	甕 A ₂	C:19.0 N:15.6	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ 頸部下ハケ残存		ク	ク	S・M-1 黒色粒	1/8	擬凹線8条 指頭圧痕
8	甕 D ₁	C:18.2 N:13.4 W:22.5	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:上位 ナデ ハケ 後一部ナデ		ク	良	S-2	1/2	肩部に斜位のキ ザミ
9	甕 D ₁	C:15.7 N:12.1 W:20.0 B:3.8 H:25.5	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ク	a:ハケ b:ナデ	ク	ク	S・M-2	ク	肩部に斜位のキ ザミ
10	甕 D ₁	C:18.8 N:15.6	a:ナデ b:ク	a:ハケ a bク		淡橙褐色	並	0	小片	
11	甕 E ₂	C:14.0 N:12.6 W:16.0 B:3.6 H:16.1	a:ナデ b:ク	a:ハケ→ナデ b:ケズリ	a:ハケ→ナデ b:ケズリ	a:茶褐色 b:淡褐色	やや 不良	S・M-3	ほぼ 完	床面
12	底部	B:5.0			a:ハケ 下端ケズリ b:ハケ	a:茶褐色 b:黒褐色	並	S-1	1/2	
第44図 13	壺 B	C:14.4 N:11.8 NL:6.2	a:端部ナデ 下位ハケ b:ナデ			淡橙色	良	0 黒雲母少	ほぼ 完	
14	壺 A ₃	C:14.8	a:上位 ナデ 下位 ハケ b:ク			淡褐色	ク	S-1	1/4	擬凹線7条
15	壺 D ₂	C:15.0 N:12.0	a:ミガキ b:ク	a:ミガキ b:ケズリ→ミガキ		暗褐色 茶褐色	ク	0	完	
16	底部	B:4.2			a:ハケ 一部ナデ・ケズリ b:ハケ	淡褐色	並	S・M-2 赤色粒 黒雲母	1/2	磨耗進む
17	鉢 D	C:21.0	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		ク	良	0 黒雲母	1/5	

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
18	鉢 D	C:128	a:ミガキ b:ク	a:ハケ→ミガキ b:ケズリ→ミガキ		橙褐色	並	M-1 赤色粒	1/8	
19	鉢 D	C:112	a:ナデ b:ク	a:ナデ b:ク		a:淡橙色 b:淡橙褐色	ク	M-1	1/6	擬凹線2条
20	鉢 D	C:160 B:18 H:85	a:ナデ b:ミガキ	a:ミガキ b:ナデ	a:ミガキ b:ナデ	暗褐色	良	0 黒雲母	2/3	擬凹線2条
21	鉢 H	C:126 N:106	a:ナデ b:ク	a:ナデ b:ク		a:淡褐色 b:橙褐色	並	M・L-1 シャーモット	小片	
22	脚台	B:100		a:ハケ b:ケズリ	a:ハケ 端部ナデ b:ナデ	暗褐色	ク	S-2 M-1 黒雲母	1/3	
23	小片			a:ミガキ b:ナデ		黒褐色	並	0	小片	S字状スタンプ 文
24	脚台	B:52		a:磨耗 b:ミガキ	a:ミガキ b:磨耗	淡褐色	ク	S-2	2/3	
25	高杯 B ₂	C:200	a:ミガキ b:ク			暗褐色 黒褐色	ク	0	小片	
26	高杯 D		a:ミガキ b:ク			淡褐色	良	0	ク	
27	高杯 (脚部)			a:ミガキ b:ナデ	a:ミガキ b:ハケ	茶褐色	並	S-3 赤色粒少	ほぼ 完	
28	榫端部	B:25.0			a:ミガキ b:ハケ→ナデ	淡橙褐色	ク	0	1/6	透孔現状で1箇所 赤彩痕(外面)
29	器台 (脚部)			a:ミガキ b:絞り目あり	a:ミガキ b:ナデ	橙褐色	ク	0 赤色粒 海綿骨片	ほぼ 完	透孔現状で1箇所 (径7~8mm) 赤彩痕(外面)
30	器台 (脚部)		a: b:ミガキ	a:ミガキ b:絞り目あり	a:ミガキ b:ナデ	淡褐色	ク	0	3/4	透孔3箇所 (径6~5mm)
31	器台 (脚部)	B:122		a:ミガキ b:ナデ	a:ミガキ 端部ナデ b:ナデ	淡橙色	良	S・M-2 赤色粒 砂粒	2/3	
32	榫端部	B:17.6			磨耗顕著	淡褐色	並	S-2 赤色粒	小片	凹線2条
33	榫端部	B:16.8			a:ナデ b:ク	暗褐色	ク	S-1	ク	擬凹線11条 赤彩痕(外面)
第47図 1	甕 A ₁	C:148 N:108	a:ナデ b:ク	a:磨耗 b:ケズリ		a:淡橙色 b:淡褐色	良	S-2 赤色粒	1/4	凹線3条
2	甕 A ₁	C:180 N:160	a:ナデ b:ク	a: b:ケズリ		淡褐色	ク	0 黒色粒	1/6	擬凹線5条
3	甕 A ₁	C:220 N:190	a:ナデ b:ク	a:ナデ b:ケズリ		茶褐色	ク	S-1 赤色粒	ク	擬凹線5条
4	甕 E ₂	C:154 N:136	a:ナデ b:ク	a:ナデ b:ク		赤褐色	ク	S-2	1/4	
5	甕 B	C:144 N:116	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		茶褐色	ク	S-1 赤色粒	ク	肩部斜行キザミ
6	甕 D ₁	C:162 N:140	a:ナデ b:ク	a:ナデ b:ケズリ		淡褐色	ク	M-1 シャーモット多	小片	特殊ビット内出 土
7	甕 C ₂	C:138 N:122	a:ナデ b:ク			褐色	ク	0	1/4	
8	甕 G	C:94	a:ミガキ b:ク			茶褐色	ク	S-3	1/2	
9	底部	B:42		a:ナデ b:ケズリ	a:ハケ→ナデ b:ケズリ	淡褐色	ク	M-2	完	
10	底部	B:44		a:ハケ b:ナデ	a:ハケ b:ナデ	a:茶褐色 b:淡褐色	ク	M・L-1 赤色粒	1/3	特殊ビット内出 土
11	高杯 B ₁	C:288	a:ミガキ b:ク	a:ミガキ b:		淡橙褐色	ク	S-2	ク	

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
12	鉢 E ₁	C:10.4 B:2.8 H:5.3	a:ナデ b:ク	同左	同左	a:黒褐色 b:褐色	やや 良	M-2 L-1	ク	
13	鉢 C	C:15.0 B:1.8 H:7.8	a:ミガキ b:ク	同左	同左	淡褐色	良	M-1	ほぼ 完	赤彩痕(外面)
第49図 1	甕 A ₁	C:21.0 N:18.0	a:ナデ b:ク	a: b:ケズリ		淡褐色	並	L-1	小片	擬凹線6条
2	甕 A ₁	C:15.2 N:13.1 W:14.2	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ	a:ハケ b:ケズリ	茶褐色	良	S-3 赤色粒	ク	擬凹線4条
3	甕 A ₁	C:17.0 N:14.6 W:18.5	a:ナデ b:ク 頸部ハケ	a:ハケ b:ケズリ		ク	ク	S-3 赤色粒多	1/4	擬凹線7条 指頭圧痕2列
4	甕 A ₂	C:18.8 N:15.2 B:2.6	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ	a:ハケ b:ケズリ	淡褐色	ク	0 砂粒多	ク	擬凹線7条 指頭圧痕
5	甕 B	C:16.8 N:14.3 W:19.0 B:3.0	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ	a:ハケ 下端強いナデ b:ケズリ	茶褐色	ク	S・M-3 赤色粒	完	沈線1条
6	甕 B	C:12.4 N:11.0	a:ナデ b:ク 頸部ハケ	a:ハケ b:ケズリ→ナデ		暗褐色	並	0 黒雲母	小片	
7	甕 B	C:13.0 N:11.0 W:12.1	a:ナデ b:ク	磨耗顕著		橙褐色	良	S-3 M-2 赤色粒 黒雲母	1/2	
8	蓋	つまみ部 3.2	a:ミガキ b:ク	a:ミガキ 端部ナデ b:ナデ		黒褐色	ク	0	小片	
9	鉢 E ₁	C:12.0	a:ナデ b:ク	a:ハケ→ミガキ b:ミガキ		淡褐色	ク	M-1 赤色粒	1/4	
10	高坏		a:ハケ→ミガキ b:ミガキ			茶褐色	ク	0 黒雲母多	完	住居土坑
第50図 11	壺 G	C:12.4 N:12.3 W:23.8 B:10.5	a:ナデ b:ク	a:ミガキ b:ケズリ	a: b:ナデ	暗褐色	ク	S-2 黒雲母	1/2	住居土坑
第52図 1	甕 A ₁	C:15.0 N:13.0	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		淡橙褐色	並	S・M-3 赤色粒	小片	擬凹線3条 大土坑
2	甕 A ₃	C:17.0 N:13.4	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		淡褐色	ク	S-2 L-1 砂粒	ほぼ完	擬凹線10条 指頭圧痕 大土坑
3	甕 A ₄	C:17.6 N:15.9	a:ナデ b:ナデ 頸部ハケ	a:ハケ b:ケズリ		a:灰褐色 b:茶褐色	ク	S-M-2 黒雲母	1/3	擬凹線5条
4	甕 A ₂	C:18.4 N:15.0	a:ナデ b:ナデ 頸部ハケ	a:ハケ b:ケズリ		茶褐色	良	S-3 赤色粒	1/4	浅い擬凹線6条 指頭圧痕 大土坑
5	甕 A ₂	C:18.4 N:16.4	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		ク	並	S-2	小片	擬凹線6条 指頭圧痕 住居内土坑
6	甕 A ₃	C:21.0 N:16.4	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		黄褐色	良	S-3 赤色粒 砂粒	1/4	擬凹線9条 指頭圧痕 大土坑
7	甕 A ₃	C:23.6 N:20.6	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:磨耗		橙褐色	並	S-M-3	2/3	擬凹線9条 指頭圧痕 大土坑

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
8	甕 A ₃	C:20.2 N:15.6 W:23.6	a:ナデ b:ナデ 頸部ハケ	a:ハケ b:ケズリ		黄褐色	良	S-3 赤色粒 砂粒多	完	擬凹線8条 指頭左痕 住居内土坑
9	甕 A ₂	C:19.8 N:16.0	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		淡橙褐色	ク	S-2 砂粒 黒雲母	1/4	擬凹線11条 指頭圧痕 大土坑
10	甕 B	C:14.8 N:12.6	a:ナデ b:ク	a:ナデ b:ケズリ		淡褐色	ク	S-2	1/8	
11	甕 B	C:18.0 N:16.6	a:ナデ b:ク	a:ナデ b:ケズリ		ク	並	S-2	小片	大土坑
12	甕 B	C:21.0	a:ナデ b:ク	a: b:ケズリ		a:淡橙褐色	良	S-1 赤色粒	1/3	大土坑
13	甕 G	C:16.0 N:13.3 W:15.2	a:ハケ 頸部ナデ b:ク	a:ハケ b:ナデ	同左	b:茶褐色	やや 良	S・M-2 黒雲母 シャーモット微量	ほぼ 完	住居内土坑
第53図 14	甕 C ₂	C:17.5 N:15.8 W:19.8 B:2.6 H:21.6	a:ハケ b:ク	a:ハケ 一部ナデ b:ハケ	a:ハケ b:ナデ	ク	良	M-2 黒雲母 海綿骨片微量	ク	大土坑
15	壺	C:19.0	a:ナデ b:ク	a:頸部以下 ハケ b:ク		ク	並	S-3 黒雲母	小片	大土坑
16	壺 I	C:28.0 N:21.2	a:ナデ b:ミガキ	a:ナデ b:ケズリ→ナデ		淡褐色	ク	S-1 黒雲母	ク	大土坑
17	壺 F ₃	C:17.6	磨耗顕著			ク	良	S-3 赤色粒 砂粒多	1/2	3本一對の棒状 浮文を全周で6 ヶ所貼付
18	壺		a:ナデ b:上位ミガキ 下位ハケ	a:ハケ→ミガキ b:上位ハケ 下位ケズリ→ナデ		a:淡橙褐色 b:淡褐色	並	M・L・-1	1/4	大土坑 77号土坑より同 一物体
19	壺 D ₂	C:13.2	a:ミガキ 頸部ナデ b:ク			淡褐色	良	0 黒雲母少	小片	
20	壺	W:15.4 B:2.7		a:ハケ→ミガキ b:ケズリ 一部ミガキ	a:ミガキ b:ナデ	淡橙褐色	ク	M-2 黒雲母多	2/3	赤彩痕 床面
21	壺 E	N:7.8 W:12.8	a:ミガキ b:ミガキ 頸部ナデ	a:ミガキ b:ナデ	a:ミガキ b:ケズリ	a:赤褐色 b:淡褐色	ク	0 黒雲母多	1/3	赤彩痕 大土坑
22	器台 脚部	B:13.5		a:ミガキ b:絞り目あり	a:ミガキ 端部ナデ b:ハケ 端部ナデ	淡褐色	ク	0	完	住居内土坑
23	高坏 (D)		a:ミガキ b:ク			淡褐色	並	0 黒雲母	1/6	
24	脚部	B:10.0		a:ミガキ b:ハケ	a:ミガキ 端部ナデ b:ハケ 端部ケズリ→ナデ	淡橙褐色	良	0	完	住居内土坑
25	脚部	B:11.0			a:ハケ 端部ナデ b:ク	明茶褐色	ク	S-1 赤色粒	2/3	
26	高坏 柱状部			a:ミガキ b:上半指押え 下半ハケ		淡褐色	並	0 黒雲母	3/4	擬凹線現状で3 条、大土坑
第54図 27	壺	W:45.0 B:7.8	a:ナデ b:	a:ハケ b:	a:ハケ b:	淡橙褐色	やや 良	0	完	肩部突帯ハケ状 具によるキザミ ヘラ状具による 線刻文あり

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
第55図 28	鉢 A ₂	C:140 N:121	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:上半ケズリ 下半ミガキ	a:ハケ b:ミガキ	橙褐色	良	S-3	1/2	床面
29	鉢 C	C:184	a:ミガキ b:ク	同左	同左	淡橙褐色	ク	0 黒雲母	ク	大土坑
30	鉢 C	C:205 H:8.9	a:ミガキ b:ク	同左	同左	a:淡橙褐色 b:橙褐色	ク	S-1 黒雲母	完	住居内土坑
31	鉢 E ₁	C:168	a:ハケ→ミガキ b:ミガキ			橙褐色	ク	0	小片	赤彩痕(内外面とも)
32	鉢 E ₂	C:188 B:3.1 H:8.0	a:ハケ b:ナデ	同左	a:ハケ b:剥離	茶褐色	ク	M-3 赤色粒 黒雲母	完	住居内土坑
33	結合器 台	C:174 受部径: 18.5	磨耗顕著	同左		橙色	ク	0	2/3	涙滴状透穴全周 で20ヶ所 大土坑
第57図 1	脚部 (柱状部)			a:ミガキ b:磨耗	a:ミガキ b:ハケ→ナデ	淡橙褐色	並	0 黒雲母	ほぼ 完	
2	小片			a:溝描波状文 平行線文 b:ハケ		ク	ク	0 砂粒	小片	波状文は工具の 一端を中心に交 互に回転させた タイプ
3	甕 E ₁	C:254 N:230	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		淡褐色	並	M-3 石英少	1/2	擬凹線4条
4	甕 A ₁	C:168 N:125 B:3.1	a:ナデ b:ク	a:ナデ b:ク	a:ナデ b:磨耗	茶褐色	ク	S-2 石英	2/3	肩部斜行刺突文
5	甕 E ₂	C:200 N:172	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ→ナデ		a:黒褐色 b:暗褐色	ク	M-1 黒雲母	1/4	
6	甕	C:180 N:150	a:磨耗 b:ハケ	磨耗顕著		明淡褐色	良	S-2	1/5	口縁端部に波状 キザミ(指頭に よる)
7	壺 B	C:142	a:端部ナデ ミガキ b:端部ナデ ハケ・ナデ				ク	S-2 シャーモット少	1/8	
8	壺	C:162 N:10.8 NL:7.1	a:端部ナデ ハケ→ミガキ b:端部ナデ ハケ・ナデ			橙褐色	ク	L-1 石英少	1/6	赤彩痕(外面)
9		C:126	a:端部ナデ ミガキ b:端部ナデ ミガキ、ケズリ			暗褐色	やや 不良	0 砂粒多 黒雲母	1/4	
10	壺か	C:80 N:7.4 W:13.6	a:ナデ b:ク	a:ミガキ b:磨耗		黄褐色	並	S-2 赤色粒	1/6	擬凹線1条
11	高坏	C:24.7	a:ミガキ b:ク			a:黒褐色 b:淡褐色	並	0 砂粒少	小片	
第64図	高坏 B ₁	C:27.2	a:ミガキ ハケ→ミガキ b:ミガキ			淡褐色	良	S-1 ミヤモット 赤色粒	完	赤彩痕(内外面とも)
第65図 1	甕 A ₁	C:19.6 N:18.4	a:ナデ b:ク	a: b:ケズリ		ク	良	S-1	1/5	擬凹線5条
2	甕 A ₂	C:15.5 N:12.5	a:ナデ b:ク	a: b:ケズリ		ク	ク	0	1/6	擬凹線7条 指頭圧痕
3	甕 A ₂	C:17.6 N:14.4	a:ナデ b:ク	磨耗顕著		黄褐色 灰褐色	やや 不良	S-3 砂粒多	小片	擬凹線6条 指頭圧痕
第66図	甕 E ₂	C:16.0 N:14.2	a:ナデ b:ク	a: b:ケズリ		淡褐色	良	M-1	ク	

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頭部	体 部	底 部					
第77図 1	甕 B	C : 16.0	a : ナデ b : ナデ 頸部ハケ			淡褐色	並	S-1	小片	
	2	甕 (B)	C : 18.8	a : ナデ b : ♪			淡橙褐色	♪	S-3 赤色粒 黒雲母	♪
第78図	甕 D ₁	C : 19.0	a : ナデ b : 磨耗			淡褐色	♪	S-2 黒雲母	♪	
第79図 1	甕 A ₁	C : 17.6 N : 15.6	a : ナデ b : ♪	a : b : ケズリ		淡橙褐色	♪	S-2 赤色粒	♪	擬凹線 5 条
	2	甕 A ₂	C : 18.0 N : 15.2	磨耗顕著	同左		茶褐色	♪	S-3 赤色粒 砂粒	♪
3	脚裾部	B : 17.6			a : ミガキ b : ♪	暗褐色	♪	S-1 海綿骨片微量	1/8	
第80図	壺	C : 16.4 N : 11.8	a : 端部ナデ ハケ b : ♪			橙褐色	良	L-1 シャーモット 海綿骨片	小片	端部ハケ状具によるキザミを施す
第81図	高杯 B ₁	C : 24.0	磨耗顕著			淡橙褐色	やや 不良	S-3	♪	
第82図 1	甕 A ₂	C : 16.8 N : 13.4	a : ナデ b : ♪			淡褐色 赤褐色	良	S-2 赤色粒	♪	擬凹線 6 条
	2	甕 A ₂	C : 19.8 N : 16.6	a : ナデ b : ♪	a : ナデ b : 上部ハケ残存 ケズリ	淡褐色	♪	S-1	♪	擬凹線 6 条 指頭圧痕
3		C : 25.0	a : 端部ナデ ミガキ b : ♪			♪	♪	0	♪	
第83図 1	甕	C : 17.4 N : 14.0	a : 端部ナデ ハケ b : ハケ	a : ハケ b : ハケ→ナデ		茶褐色	♪	S-1 海綿骨片 黒雲母少	♪	
	2	底部	B : 5.2		a : ハケ b : 磨耗	淡褐色	♪	M・L-1 海綿骨片 赤色粒	1/2	
第84図	甕か	C : 15.2	磨耗顕著			淡赤褐色	並	L-1	小片	端部内面に櫛状具による羽状キザミを施す
第85図 1	甕 A ₁	C : 18.4 N : 16.4	磨耗顕著	同左		淡橙褐色	良	M・L-3	♪	擬凹線 4 条か
	2	甕 A ₂	C : 19.4 N : 15.4	a : ナデ b : ナデ 頸部ハケ	a : 磨耗 b : ケズリ	淡褐色	並	S-2 赤色粒 黒雲母 砂粒多	1/3	擬凹線 7 条 指頭圧痕
3	甕 D ₂	C : 18.2 N : 14.0	a : ナデ b : ♪			橙褐色	♪	M-2 海綿骨片少	1/4	
4	壺 C	C : 13.0 N : 11.3	a : ミガキ 頸部ナデ b : ミガキ	a : ミガキ b : ♪		淡橙褐色	良	S-1 赤色粒 砂粒	小片	
5	高杯 B ₂	C : 22.0	a : ミガキ b : ♪			橙褐色	♪	S-2 赤色粒 黒雲母	♪	
6	脚裾部	B : 24.0			a : ミガキ b : ♪	♪	♪	0 黒雲母	♪	擬凹線 2 条
7	脚裾部	B : 18.0				淡橙褐色	並	S・L-1	♪	外面C字スタンプ文を3列巡らす 赤彩痕(外面)
第86図	脚部	B : 10.0		a : ハケ b : 磨耗	a : ハケ 端部ナデ b : ♪	橙褐色	♪	M-1 海綿骨片	♪	

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
第88図 1	甕 A ₂	C:182 N:148	a:ナデ b:ク	a: b:ケズリ		淡褐色	良	S-2 赤色粒	1/4	擬凹線8条 ヘラ状具圧痕
2	高杯か (器台)	C:230	a:ミガキ b:ク			ク	並	O	小片	
第89図 1	壺 F ₁	C:152	a:ハケ b:ナデ			淡橙褐色	やや 良	S-1	ク	
2	底部	B:24			a:ハケ b:ケズリ	a:茶褐色 赤褐色 b:黒褐色	並	S-2 黒雲母多	2/3	
第90図 1	甕 A ₁	C:186 N:160	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		暗褐色	ク	S-1 黒雲母	小片	擬凹線7条
2	甕 A ₁	C:200 N:176	a:ナデ b:ナデ 頸部ハケ			a:暗褐色 b:茶褐色	ク	S-1 黒雲母	1/8	擬凹線7条
3	甕 A ₁	C:192 N:154	a:ナデ b:ク	a:ナデ b:ケズリ		a:黒色 b:橙褐色	ク	S-2	ク	擬凹線7条→ナ デ
4	小型土 器	C:104 N:76	磨耗顕著	同左 一部内面ミガキ		橙褐色	良	S-2 赤色粒	ク	
5	壺か	C:188	a:ミガキ b:ク			淡橙褐色	ク	O 黒雲母	小片	
6	把手 G			a:ミガキ b:ハケ		淡褐色	ク	S-1		
第91図 1	甕 B	C:130	a:ナデ b:ナデ 頸部ハケ	a:ナデ b:ケズリ		暗褐色	並	S-3	小片	
2	蓋	つまみ部 30 B:100	a:ミガキ b:ナデ	a:ミガキ b:ク	a:ミガキ b:ク	暗赤褐色	良	O	1/3	
第92図 1	甕 A ₂	C:154 N:114	磨耗顕著			橙褐色	並	S-3 赤色粒 砂粒多	小片	擬凹線8条 指頭圧痕
2	甕 A ₁	C:182 N:154	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		暗褐色	ク	S-2 海綿骨片少	ク	擬凹線7条
3	器台か		a:ミガキ b:ク			淡橙褐色	良	O 海綿骨片少 黒雲母	1/3	
第94図 1	甕	C:152 N:114	a:ナデ b:ク	a:ナデ b:ケズリ		ク	ク	M-1	小片	
2	高杯 B ₁	C:248	a:ミガキ b:磨耗			ク	やや 不良	S・M-1	ほぼ 完	赤彩痕(内・外 面)
第95図 1	甕 D ₂	C:190 N:138	a:ナデ b:ク	a:ナデ b:ク		淡褐色	並	O 黒雲母少	小片	
2	鉢	C:178 B:45 H:104	a:ハケ→ナデ b:ハケ	a:ハケ→ナデ b:ハケ	a:ハケ→ナデ b:ナデ 指押さえ	ク	良	M-1	1/3	底部穿孔
3	壺 D ₁	C:150 N:110	a:ミガキ b:ク	a:ミガキ b:ク		橙褐色	ク	S-2 赤色粒	小片	擬凹線4条→ミ ガキ
4	小型 土器	C:105 N:91	a:ミガキ b:ク	a:ハケ→ミガキ b:ケズリ→ミガキ		茶褐色	ク	S-1 赤色粒少	ク	
5		C:118	a:ミガキ b:ク			淡橙褐色	ク	S-2 黒雲母少	ク	
第95図 6	脚裾部	B:116			a:ハケ 端部ナデ b:ナデ	a:淡褐色 b:黒褐色	やや 不良	S-2 黒雲母	小片	
第96図 1	甕 A ₂	C:164 N:136	a:ナデ b:ク	a:磨耗 b:ケズリ		淡褐色	並	S-2 シャーモット 砂粒多	ク	擬凹線7条
2	脚柱状 部			a:ミガキ b:ケズリ	a:ミガキ b:ハケ	淡橙褐色	良	O 黒雲母	ほぼ完	透孔4箇所 (径7~8mm)

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
第97図 1	甕 D ₁	C : 16.4 N : 13.6	a : ナデ b : ♪	a : ハケ b : ケズリ		淡褐色	♠	S・M-2	小片	肩部ハケ状具によるキザミを施す
2	甕 C ₂	C : 17.2 N : 15.0	a : ナデ b : ♪	a : 摩耗 b : ケズリ		淡橙褐色	♠	M-3 シャーモット 赤色粒	♠	40号土坑より同一個体らしき破片出土(小片)
第100図 1	器台	B : 11.8		a : ミガキ 端部ナデ b : ナデ	a : ミガキ 端部ナデ b : ナデ	暗褐色	並	S-2 黒雲母	1/3	
2	高杯			磨耗顕著		淡橙褐色	やや良	S-2 赤色粒	ほぼ 完	透孔3箇所(径4~5mm)
第101図	甕	C : 16.6	a : ナデ b : ♪			淡褐色	♠	0 赤色粒少	小片	
第102図	脚裾部	B : 16.0		a : ミガキ 端部ナデ b : ナデ		暗褐色	並	0 黒雲母	♠	
第103図	脚裾部	B : 17.2		a : ミガキ b : ナデ		淡橙褐色	良	0 黒雲母	♠	赤彩痕(外面)
第104図	甕 A ₂	C : 16.0 N : 12.0	a : ナデ b : ♪	a : ハケ b : ナデ		♠	♠	S-2 赤色粒	♠	擬凹線5条 肩部ハケ状具によるキザミ
第106図	甕	C : 23.0 N : 19.4	a : ハケ b : ♪	a : ハケ b : ♪		茶褐色	並	S-2	1/4	口唇部ハケ状具によるキザミ
第107図	器台	C : 18.2	a : ミガキ b : ♪	a : ハケ→ミガキ b : ミガキ		淡橙褐色	良	S・M-2	1/3	
第109図 1	甕 A ₂	C : 15.6 N : 12.1	a : ナデ b : ナデ	a : b : 頸部下ハケ残存 ケズリ		淡褐色	並	S-1 赤色粒	小片	擬凹線7条 指頭圧痕 10号住
2	甕 A ₂	C : 21.2 N : 17.4	a : ナデ b : ♪	a : b : ケズリ		♠	♠	S-2 黒雲母	1/3	擬凹線6条 10号住
3	甕 A ₂	C : 20.6 N : 16.6	a : ナデ b : ナデ 頸部ハケ	a : ハケ b : ケズリ		茶褐色	良	S-3 赤色粒	1/2	擬凹線8条 指頭圧痕 10号住
4	甕 B	C : 18.0 N : 14.8	磨耗顕著	a : 磨耗 b : ケズリ		淡褐色	並	S・M-3 赤色粒	小片	10号住
5	壺 D ₂	C : 16.0 N : 12.6	a : ミガキ b : ミガキ 頸部ナデ			♠	良	0	♠	赤彩痕(内・外面とも) 10号住
6	鉢	C : 13.4	a : ミガキ b : ♪	a : ナデ b : ミガキ		橙褐色	♠	S-1 黒雲母	♠	7と同一個体
7	脚台部	B : 4.0		a : ミガキ 指押さえ b : ミガキ		淡橙褐色 灰褐色	やや 不良	S・M-1 黒雲母	ほぼ 完	6と同一個体
8	高杯 C	C : 26.8	a : ミガキ b : ♪			橙褐色	良	0 黒雲母	1/4	10号住
9	底部	B : 1.2		a : ミガキ b : ♪		淡褐色	並	0	3/4	
10	脚台部	B : 7.0		a : ミガキ b : ミガキ ナデ		橙褐色	良	0 赤色粒	ほぼ 完	赤彩痕(外面) 10号住
第110図	裝飾壺 H ₁	W : 12.7		磨耗顕著		淡橙褐色	♠	0	1/4	渦巻文スタンプ 4列 ハケ状具による 羽状キザミ
第111図 1	甕 B	C : 15.6 N : 12.8	a : ナデ b : ♪	a : ハケ b : 磨耗		茶褐色	♠	M-2 砂粒	小片	指頭圧痕
2	高坏 B ₂	C : 21.4	a : ミガキ b : ♪			淡褐色	並	S-1 黒雲母	♠	
第112図		C : 10.0	磨耗顕著	同左		黒褐色	やや 不良	0 黒雲母多	♠	

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
第113図 1	甕 A ₁	C:17.0 N:14.0 W:15.7	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		a:黒褐色 b:橙褐色	ク	S-M-3 赤色粒多	1/4	擬凹線5条
	甕 B	C:16.4 N:13.6	a:ナデ b:ク	a:磨耗 b:ケズリ		茶褐色	良	S-3 黒雲母多	1/6	
3	高坏			a:ミガキ		ク	ク	S-2 シャーモット 黒雲母	ほぼ 完	
第115図	土師器 (長胴甕)	C:20.2 N:18.5 W:21.5 H:31.6	a:ナデ、回転ハケ→ナデ 平行タタキ b:ナデ、回転ハケ同心 円タタキ			淡褐色	並	0	完	
第116図 1	甕 B	C:16.2 N:13.6	a:ナデ b:ナデ 頸部ハケ	a:磨耗 b:ケズリ		淡褐色	ク	S-1	1/6	擬凹線2条
	2	甕 B	C:16.2 N:15.2	a:ナデ b:ク	a: b:ケズリ	ク	並	S-2	1/4	
3	甕 B	C:18.0 N:17.0	a:ナデ 頸部ミガキ b:ナデ	a: b:ケズリ		淡褐色 暗褐色	ク	0	1/2	
4	高坏 E	C:10.4	a:ミガキ 杯底部ハケ →ミガキ b:ミガキ			淡褐色	良	0 黒雲母	小片	
5	高坏			a:ミガキ b:	a:ミガキ b:ハケ	ク	ク	S-2 黒雲母	完	透孔4箇所 (径5mm)
第117図 1	甕 A ₁	C:14.2 N:13.0	磨耗顕著	a:磨耗 b:ケズリ		a:黒褐色 b:茶褐色	やや 不良	S-2 赤色粒	1/8	擬凹線5条
	2	甕 A ₁	C:16.0	磨耗顕著		淡褐色	並	S-2 赤色粒	小片	擬凹線6条か
3	甕 A ₁	C:19.0 N:17.0 W:23.6	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		a:褐色 b:茶褐色	ク	S-M-2	1/4	擬凹線6条 69号土坑より同 一物体出土
4	甕 A ₁	C:19.6	a:ナデ b:ク			淡橙褐色	ク	S-2 赤色粒	小片	擬凹線3条か 指頭圧痕
5	甕 A ₂	C:22.0 N:17.6	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:磨耗		淡褐色	良	S-2 赤色粒	ク	擬凹線8条 指頭圧痕
6	甕 (B)	C:14.4	磨耗顕著			ク	ク	S-1 砂粒多	ク	
7	甕 B	C:16.2 N:13.8	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:磨耗		暗褐色	並	S-1 黒雲母	ク	
第118図 1	甕 E ₂	C:13.4 N:10.8	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		淡褐色	良	S-1	ク	
	2	甕 D ₁	C:16.2 N:13.4	a:ナデ b:ク		淡褐色	並	0 砂粒 黒色粒	小片	
第119図	結合 器台	W:19.0 垂下帯: 16.4	a:ミガキ b:ナデ→ミガ キ	a:ハケ b:垂下帯内面ナ デ		a:淡褐色 b:茶褐色	ク	S-1	1/8	全体に煤附着
第120図 1	鉢 G	C:37.0 N:34.4	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		淡橙褐色	良	S-2 赤色粒 砂粒多	ク	擬凹線8条 指頭圧痕 3と同一物体
	2	小型 土器	C:11.6 N:8.8 W:9.6	a:擬凹線→ミ ガキ b:ミガキ	a:磨耗 b:ミガキ		ク	ク	S-2 赤色粒	1/4
3	底部 G	B:5.6			a:磨耗 b:ミガキか	ク	ク	S-2 赤色粒 砂粒多	ク	1と同一物体

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頭部	体 部	底 部					
第121図	脚裾部	B : 19.2			a : 磨耗 b : ミガキか	〃	並	S-2 砂粒多	小片	凹線2条
第122図 1	甕 A ₁	C : 16.0 N : 13.0	a : ナデ b : 〃			茶褐色	〃	0	〃	擬凹線6条 指頭圧痕
2	甕 B	C : 17.4 N : 14.6	a : ナデ b : 〃			淡褐色	やや 良	0	〃	
第123図	壺か	C : 18.2	a : 端部ナデ ナデ→ミガキ b : 端部ナデ ミガキ			淡橙褐色	良	0 砂粒	小片	
第124図 1	甕 A ₂	C : 16.8 N : 13.6	a : ナデ b : 〃	a : b : ケズリ		淡褐色	〃	S-1	〃	擬凹線5条
2	底部	B : 8.4			a : ハケ b : 〃	〃	並	S-1	1/4	
3	蓋	つまみ 部 : 3.2 B : 11.2 H : 5.1	a : ミガキ b : 〃	a : ミガキ b : 〃	a : ミガキ b : 〃	a : 橙褐色 b : 淡橙褐色	良	S・M-1 赤色粒	完	赤彩痕(内・外面)
第125図 1	甕 A ₂	C : 15.6 N : 12.6	a : ナデ b : ナデ 頸部ハケ	a : b : ケズリ		暗褐色	並	S-1	小片	擬凹線5条
2	甕 A ₁	C : 20.0 N : 17.2	a : ナデ b : 〃	a : b : ケズリ		淡褐色	良	S-1 赤色粒少	1/4	擬凹線5条
3	甕 A ₂	C : 20.6 N : 18.2	a : ナデ b : 〃	a : ハケ b : ケズリ		〃	〃	S-2 M・L-1 赤色粒少	1/6	擬凹線6条 指頭圧痕
4	壺 F ₁	C : 15.6	a : ナデ b : 〃			淡橙褐色	〃	S-2 赤色粒少	小片	上層
第126図 1	甕 A ₂	C : 16.2 N : 12.6	a : ナデ b : 〃	a : b : ケズリ		淡褐色	並	S-3 赤色粒	1/8	擬凹線8条
2	甕 A ₂	C : 17.6 N : 13.6	a : ナデ b : 〃			橙褐色	〃	L-1	小片	擬凹線8条 指頭圧痕
第127図 1	甕	C : 27.0 N : 23.0 W : 23.4	a : ハケ 頸部ハケ→ナデ b : ハケ	a : ハケ b : 〃	a : ハケ b : ナデ	淡褐色	〃	S-2 海綿骨片少	1/4	端部ハケ状具によるキザミ
2	体部～ 底部			a : ハケ b : 〃	a : ハケ→ミガキ b : ハケ→ナデ	橙褐色 茶褐色	良	M-1 シャーモット 海綿骨片少	〃	
第128図	甕 D ₁	C : 17.4 N : 15.0	a : ナデ b : 〃	a : ハケ b : ケズリ		淡橙褐色	並	S-3 赤色粒	1/6	
第129図	高環 E	C : 12.0	a : ミガキ b : 〃			〃	良	0	1/4	
第131図 1	甕	C : 32.6 N : 29.6	a : ナデ b : 〃 端部面取り→ヘ ラ状具によるナ デをめぐらす	a : ハケ b : ケズリ→ナデ		淡褐色	並	S-M-2	1/3	擬凹線8条 (1単位4条を2 回) 指頭圧痕
2	甕 A ₂	C : 24.6 N : 21.0	a : ナデ b : ナデ 頸部ハケ	a : ハケ b : ケズリ		〃	良	S-3 赤色粒 砂粒多	完	擬凹線6条 指頭圧痕
3	甕 A ₂	C : 19.8 N : 15.8	a : ナデ b : 〃	a : ハケ 肩部ハケ→ナデ b : ケズリ		a : 赤褐色 b : 淡橙褐色	並	S-2 赤色粒少	1/5	擬凹線6条 指頭圧痕
4	甕 A ₂	C : 19.4 N : 16.2	a : ナデ b : 〃	a : ハケ b : ケズリ→ナデ		淡褐色	良	S-2 赤色粒 黒色粒	1/4	擬凹線4条 指頭圧痕
5	甕 A ₂	C : 20.2 N : 15.8	a : ナデ b : 〃	a : ハケ b : ケズリ		a : 茶褐色 b : 暗褐色	並	S-1 赤色粒多 砂粒多	1/8	擬凹線5条 指頭圧痕

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頭部	体 部	底 部					
6	甕 A ₂	C : 21.2 N : 16.8	a : ナデ b : ヶ			淡橙褐色	良	S-1 赤色粒 砂粒多	小片	擬凹線 6 条 指頭圧痕
7	底部	B : 21.5			a : ハケ b : ナデ	暗褐色	並	S-1	完	外底面ケズリ
8	甕 A ₂	C : 20.0	a : ナデ b : 磨耗			淡褐色	〃	S・M-1 赤色粒 砂粒多	1/6	擬凹線 5 条 指頭圧痕僅かに 残る
9	甕 A ₂	C : 20.2 N : 16.6 W : 21.9	a : ナデ b : ヶ	a : ハケ b : ケズリ		淡橙色	良	S-3 砂粒多	ほぼ 完	擬凹線 8 条
10	甕 A ₁	C : 18.0 N : 16.0	a : ナデ b : ヶ			茶褐色	〃	S-2 赤色粒	1/8	擬凹線 5 条
11	甕 A ₁	C : 17.6 N : 15.8	a : ナデ b : ヶ	a : ハケ? b : ケズリ		淡橙褐色	並	S-3	〃	擬凹線 6 条
12	甕 A ₂	C : 17.0 N : 14.4	a : ナデ b : ヶ	a : ハケ 肩部ナデ b : ケズリ		淡褐色	〃	S-2 赤色粒	1/6	擬凹線 6 条
第132図 13	甕 A ₂	C : 18.2 N : 15.6	a : ナデ b : ヶ	a : ハケ b : 磨耗		茶褐色	〃	M-1 赤色粒 砂粒多	〃	擬凹線 5 条 指頭圧痕
14	甕 A ₂	C : 19.0 N : 15.4	a : ナデ b : ヶ	a : ナデ? b : ケズリ		淡褐色	〃	S-2	1/5	擬凹線 9 条
15	甕 A ₂	C : 17.8 N : 14.0	a : ナデ b : ヶ 頸部ハケ	a : ハケ b : ケズリ		〃	〃	S-1 黒色粒多	〃	擬凹線 5 条 指頭圧痕
16	甕 A ₂	C : 18.8 N : 13.6	a : ナデ b : ヶ 頸部ハケ			〃	やや 不良	S-1 砂粒	小片	擬凹線 9 条 指頭圧痕上下 2 段
17	甕 A ₂	C : 16.6 N : 14.4	a : ナデ b : ヶ	a : ハケ b : ケズリ		〃	並	S-2 赤色粒	1/5	
18	甕 A ₄	C : 16.0 N : 15.0	a : ナデ b : ヶ	a : ハケ b : ケズリ		淡橙褐色	やや 良	S-1	小片	擬凹線 3~2 条 太い凹線状が 1 条めぐる
19	甕 A ₂	C : 16.4 N : 13.2	a : ナデ b : ヶ	a : ヘラ状工具に よるナデ b : ケズリ		〃	良	S-3 赤色粒多 砂粒	完	擬凹線 6~5 条
20	甕 A ₂	C : 16.0 N : 13.2	a : ナデ b : ヶ	a : ナデ b : ケズリ		a : 淡褐色 b : 茶褐色	並	S-2 赤色粒少	1/4	擬凹線 6 条
21	甕 A ₃	C : 17.0 N : 14.2	a : ナデ b : ヶ	a : b : ケズリ		淡褐色 茶褐色	良	0	〃	擬凹線 7 条
22	甕 A ₂	C : 15.5 N : 12.0	a : ナデ b : ヶ	a : ハケ→ナデ b : ケズリ		淡褐色	〃	S-1 黒雲母	完	擬凹線 7 条 指頭圧痕
23	甕 A ₂	C : 15.5 N : 13.1	a : ナデ b : ヶ	a : ハケ b : ケズリ		茶褐色	並	S-2	完	擬凹線 6 条 指頭圧痕
24	甕 E ₂	C : 15.6 N : 14.2	a : ナデ b : ヶ	a : b : ケズリ		暗褐色	やや 不良	S・M-3 赤色粒	1/2	
25	甕 B	C : 16.6 N : 13.4	a : ナデ b : ヶ	a : ハケ b : ケズリ		淡褐色	良	S-2	2/3	
26	甕 D ₁	C : 16.2 N : 13.8	a : ナデ b : ヶ			〃	〃	0	小片	
27	甕 B	C : 17.2 N : 14.4	a : ナデ b : ヶ			茶褐色	並	S-2 赤色粒	1/2	指頭圧痕 (上下 2 段)
28	甕 D ₁	C : 13.0 N : 11.5 W : 16.2	a : ナデ b : ヶ	a : ハケ b : ケズリ		〃	良	S-2 赤色粒	小片	
29	甕か	C : 13.6 N : 11.2	a : ナデ b : ヶ			淡褐色	〃	S-2 黒雲母	〃	擬凹線 2 条
30	甕 B	C : 26.0 N : 20.4	磨耗顕著			茶褐色	並	M-3 赤色粒少	1/8	中層

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
第133図 31	壺 D ₁	C:9.8 N:8.0 W:12.8 B:2.4 H:11.1	a:ナデ b:ミガキ	a:ミガキ b:ハケ→ナデ	a:ミガキ b:ハケ→ナデ	淡橙褐色	良	0 海綿骨片微量	完	赤彩痕
32	壺	W:14.0		a:ミガキ b:ク		淡黄褐色	ク	S-1	1/3	
33	壺	N:10.7 W:15.8		磨耗顕著		橙褐色	ク	S-2	ク	
34	壺 D ₂	N:9.0 W:15.5 B:2.2	a:ナデ b:ク	a:ミガキ b:ケズリ ナデ	a:ミガキ b:ナデ	暗褐色	良	0	完	赤彩痕(内・外面とも)
35	壺 D ₂	C:11.3 N:9.3 W:11.2	磨耗顕著	同左		淡橙褐色	並	S-3 赤色粒	1/4	
36	壺	N:9.8	a:ミガキ b:ク	同左		淡褐色	良	S-1	1/8	
37	壺 C	C:9.6 N:8.9	磨耗顕著			ク	ク	S-1 赤色粒 砂粒多	1/2	下層
38	底部	B:4.4			a:ミガキ b:ク	赤褐色	ク	S-1 黒雲母	1/4	赤彩痕(内・外面とも)
39	底部	B:5.9		a:磨耗 b:ミガキ	a:指押え b:磨耗	淡橙褐色	やや 良	S-1 黒雲母 赤色粒	ク	
40	底部 (脚台部)	B:10.8			a:ミガキ b:ナデ 指押え	淡褐色	良	S-1 赤色粒多	完	赤彩痕(外面)
41	壺 F ₂	C:17.0 N:12.0	a:ナデ ハケ→ナデ b:ナデ ハケ→ナデ			ク	ク	S-1	1/3	下層
42	壺	W:32.2 B:6.1		a:ハケ→ミガキ b:ハケ→ナデ	a:ハケ→ミガキ b:ハケ→ナデ	a:淡褐色 b:褐色	良	S-1 黒雲母	ほぼ 完	
43	壺 F ₂	C:16.0	a:ミガキ b:ク			淡橙褐色	ク	S-1 赤色粒 砂粒	小片	
44	尖底 土器	C:8.8	磨耗顕著	同左	同左	橙褐色	やや 不良	S-1 赤色粒	1/2	
第134図 45	鉢	C:16.6	a:ナデ b:ク	a:ハケ b:ケズリ		淡褐色	良	M-2 黒色粒	1/5	中層
46	底部穿 孔土器	B:1.0			a:ミガキ b:ケズリ 一部ミガキ	淡橙褐色	ク	S-1 黒雲母	1/3	穿孔部径約10mm
47	高坏 E	C:10.0	a:端部ナデ ハケ→ナデ →ミガキ b:端部ナデ ハケ→ナデ			茶褐色	並	0	1/4	
48	高坏 F	B:13.4	a:ミガキ b:磨耗	磨耗顕著	a:ミガキ 端部ナデ b:ク	淡橙褐色	ク	S-2 黒色粒	1/3	透孔3箇所 (径5~6mm)
49		C:20.2	a:ミガキ b:ク			淡褐色 淡黄褐色	ク	0 赤色粒	1/6	凹線3条
50	器台	C:24.6	a:ミガキ b:ク			a:赤褐色 b:淡橙褐色	良	M-1 赤色粒少	小片	
51	器台	C:17.9	a:ミガキ b:ク			淡褐色	ク	S-1	1/6	
52	器台 (脚部)	B:14.8		a:ハケ b:ハケ→ナデ	a:ミガキ b:ナデ	a:淡橙褐色 b:淡褐色	ク	0	1/3	

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
53	器台 (脚部)	B : 12.0		a : ミガキ b : 磨耗	a : ミガキ b : ナデ	茶褐色 淡褐色	並	0 海綿骨片微量 黒雲母	1/4	赤彩痕 (外面) 中・下層
54	脚裾部	B : 14.6			a : ミガキ b : ナデ	淡褐色	やや 良	S-1 海綿骨片微量 黒色粒	1/2	透孔現状で2箇所 全周で4箇所か?
55	器台 (脚部)	B : 12.8		a : ミガキ b : ナデ	a : ミガキ b : ハケ→ナデ	〃	良	0	1/3	下層
56	器台 (柱状部)		a : ハケ→ミガキ b : ミガキ	a : ミガキ b :	a : ミガキ b : ナデ?	暗褐色 茶褐色	並	S-1 赤色粒	ほぼ 完	透孔3箇所 (径6mm)
第135図 1	脚台部	B : 9.0			a : 磨耗 指押さえ b : 磨耗	淡橙褐色	良	S・M-3	1/3	
2	甕 A ₂	C : 17.6 N : 13.6	磨耗顕著			淡褐色	〃	S・M-3 赤色粒	小片	擬凹線6条 指頭圧痕
3	器台か	C : 22.4	a : ナデ ミガキ b : ミガキ			茶褐色	〃	S-1 赤色粒	〃	擬凹線10条
4	甕	C : 16.2	a : ナデ b : 〃			淡褐色	〃	M-1	〃	擬凹線2条
5	甕	C : 20.6 N : 18.0	a : ハケ b : 〃			〃	〃	S-1	〃	端部内面ハケ状 具による 羽状刺突文
6	壺	C : 14.8	a : 端部ナデ ハケ→ナデ b : 端部ハケ→ ナデ			茶褐色	〃	0	〃	端部ハケ状具刺 突文 現状で2箇所
7	甕 (B)	C : 17.6 N : 15.8	a : ハケ→ナデ 頸部ナデ b : ハケ→ナデ	a : b : ケズリ		褐色	並	S-1	〃	口縁部外面にヘ ラ状具による線 刻状痕あり
8	甕 A ₂	C : 15.4 N : 13.4	a : ナデ b : 〃	a : ハケ b : ケズリ		淡橙褐色	良	S-3 砂粒多	1/5	擬凹線6条 指頭圧痕
9	底部穿 孔土器	B : 2.0		a : ハケ b : ナデ	a : ナデ b : 〃	淡褐色	並	S-2 赤色粒	1/8	穿孔部径7mm
10	甕 B	C : 16.8 N : 14.0	磨耗顕著			茶褐色	やや 不良	S-3 赤色粒	1/4	
11	脚裾部	B : 13.6			a : ミガキ b : ナデ	淡褐色	良	0 海綿骨片	小片	
12	土師質 土器	C : 7.6	a : ナデ b : 〃	a : ナデ b : 〃		淡橙褐色	〃	0	〃	初痕1箇所あり (口縁部外面) 灯明皿
13	土師質 土器	C : 7.8	a : ナデ b : 〃	a : ナデ b : 〃		〃	〃	0	〃	灯明皿
14	甕 A ₂	C : 18.4 N : 15.0	a : ナデ b : ナデ 頸部ハケ	a : ハケ b : ケズリ		淡褐色	並	S-1	1/4	擬凹線7条 指頭圧痕
15	甕 A ₁	C : 15.4 N : 12.5	a : ナデ b : 〃	a : ナデ b : ケズリ		〃	良	S-2 赤色粒	1/6	擬凹線4条
16	甕 A ₁	C : 13.2 N : 10.0 W : 11.3	磨耗顕著	同左		〃	〃	0 赤色粒 砂粒多	1/8	擬凹線9条
17	壺 C	C : 10.8 N : 8.3	a : ミガキ b : 〃			橙褐色	〃	S-2 赤色粒	小片	外面煤付着 赤彩 (内・外面 とも)
18	器台	C : 22.0	a : ミガキ b : 磨耗			淡褐色	並	0 赤色粒	〃	擬凹線3条 赤彩痕 (内・外 面とも)
19	高坏 B ₂	C : 20.6	a : 端部ナデ ミガキ b : ミガキ			淡橙褐色	良	S-2 赤色粒	〃	赤彩痕 (内・外 面とも)

図版 番号	器種 形式	法量 (cm)	調 整			色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
			口頸部	体 部	底 部					
20	脚裾部	B:11.2			a:ミガキ b:ケズリ→ミガキ	黒褐色	並	S-1	〃	透孔現状で1箇所
21	脚裾部	B:20.4			a: b:ミガキ	淡橙褐色	良	S-2 赤色粒	1/8	擬凹線12条 段部上面にキザミを施す
22	脚裾部	B:16.4			磨耗顕著	〃	並	S・M-3	3/4	
23	器台		a:ミガキ b:〃			淡褐色	並	0	小片	
24	脚台部			a:ハケか b:磨耗	a:指押さえ b:磨耗	淡橙褐色	良	S-3 M-1 赤色粒	完	赤彩(外面)
25	底部	B:5.0			a:ハケ 一部ナデ b:ハケ ナデ	a:暗褐色 b:灰褐色	並	S-2 海綿骨片微量	2/3	外底面ハケ、粗 痕あり
26	底部穿 孔土器	B:3.6			磨耗顕著	a:淡橙褐色 b:淡褐色	〃	S-2 黒雲母	1/3	穿孔部径8mm 外底面粗痕あり
第137図 27	甕 A ₂	C:21.2 N:17.6	a:ナデ b:ナデ 頸部ハケ			淡褐色	やや 不良	S-2 砂粒多	1/8	擬凹線9条 指頭圧痕
28	甕		a:ハケ b:ナデ			黒褐色	〃	S-2 海綿骨片	小片	端部外面キザミ を施す 〃内面羽状刺突文
29	壺 F ₂	C:18.4	a:ナデ ハケ b:〃			淡橙褐色	良	S-1 砂粒多	〃	
30		C:15.4	a:ナデ ハケ b:〃			橙褐色	並	M-1	1/6	

図版 番号	器種 形式	出土地点	法量 (cm)	調 整	色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
第87図	珠洲 (播鉢)	14号土坑	B:10.6	a:ケズリ→ナデ b:ナデ	a:淡赤褐色 b:暗緑灰色	並	S-2 砂粒		
第100図 3	〃	38号土坑	B:9.6	a:ナデ、底面ハケ状具ナデ b:	灰黄褐色	やや 不良	M・L-1		
第105図	〃	46号土坑	C:27.8	a:ナデ b:〃	暗青灰色	並	S-1 砂粒	1/8	播り目8条1単 位
第143図 1	土師質土器 (皿)	'80 包含層	C:11.0	磨耗顕著	淡橙色	やや 良	0 シャーモット	1/3	
2	〃	〃	C:9.0	a:ナデ b:〃	淡橙褐色	〃	0	1/4	
3	〃	〃	C:10.1	磨耗顕著	〃	並	0 シャーモット	1/6	
4	〃	'82 包含層	C:11.0	〃	橙色	〃	0 シャーモット	1/4	
5	〃	〃	C:8.2	a:ナデ b:〃	淡橙褐色	やや 良	0	2/3	
6	須恵器 (坏)	〃	C:12.2 B:8.0 H:3.9	a:ナデ b:〃	淡赤灰褐色	やや 不良	0	小片	
7	〃	〃	B:10.8	a:ナデ b:〃	暗青灰色	並	S-1	〃	
8	加賀 古陶	'80 包含層	N:18.5 W:26.3	a:頸部ナデ、ケズリ→ナデ b:ナデ、ケズリ→ナデ	赤褐色	〃	S-1 砂粒少	〃	9と同一個体
9	〃	'83 包含層	B:12.0	a:ナデ b:〃	〃	〃	S-1 砂粒少	1/4	8と同一個体
10	珠洲 (甕)	'80 包含層		a:カキ目 b:ナデ	暗灰色	〃	0 砂粒 黒色粒		

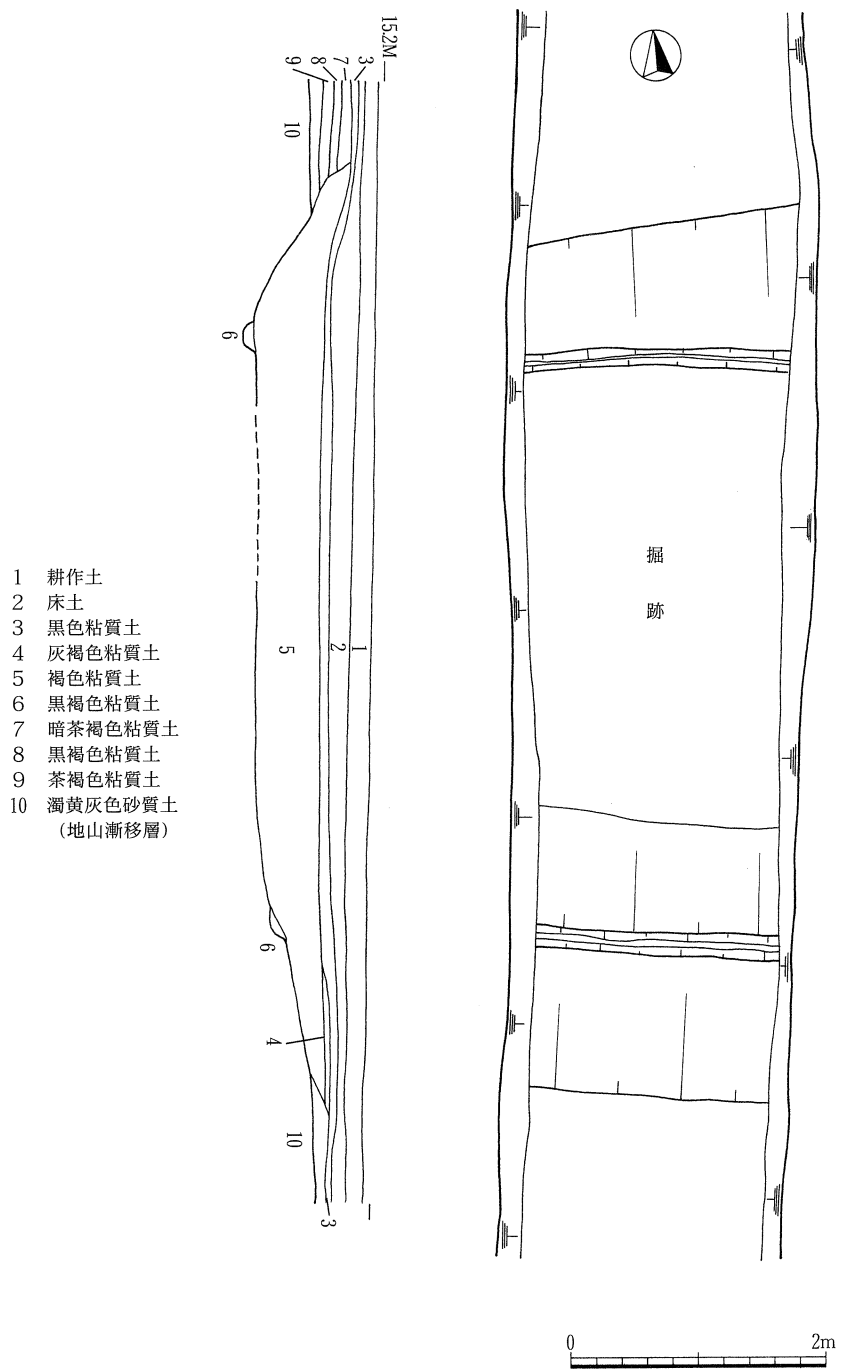
図版 番号	器種 形式	出土地点	法量 (cm)	調 整	色 調	焼成	胎 土	遺存 状態	備 考
11	珠洲 (搦鉢)	〃		a : ナデ b : 〃	灰赤褐色	不良	S-1 赤色粒少		
12	〃	〃		a : ナデ 底面ヘラ状具ナデつけ b : ヘラ状具ナデつけ	a : 灰色 b : 暗灰色	並	S-2		摺り目10条1単位
13	〃	〃		a : ナデ b : 〃	灰白色	やや 不良	S-1		
14	越前 (片口鉢)	〃		a : ナデ b : 〃	茶褐色	並	S-1		

石器一覧表

図番号	番号	器種	出土地点	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考・石質
32図		石匙	7号住居	17.5	41	7	6.7	珪化凝灰岩
136図	1	石槍	20号溝	(30.5)	17	7	(3.4)	輝石安山岩
45図	2	石鏃	11号住居	(29)	13.5	5	(1.4)	フリント
48図	1	石鏃	12号住居	41	18.5	6	2.3	フリント
58図	1	石鏃	15号住居	44	21.5	7	6.7	輝石安山岩
58図	2	石鏃	15号住居	26.5	16.5	5	1.5	石英安山岩
41図		打製石斧	10号住居	98	69	20	143	火山礫凝灰岩
94図		打製石斧	25号土坑	165	75	34	480	火山礫凝灰岩
144図	1	打製石斧	1981年包含層	159	79	31	470	火山礫凝灰岩
	2	打製石斧	1984年包含層	169	89	18	235	花崗岩
	3	打製石斧	1984年包含層	160	102	32	482	玢岩
	4	打製石斧	1984年包含層	166	67.5	21	210	片麻岩
	5	打製石斧	1984年包含層	182	96	22	(351)	火山礫凝灰岩
	6	打製石斧	1984年包含層	162	83	29	374	火山礫凝灰岩
	7	打製石斧	1984年包含層	156	97	27	405	火山礫凝灰岩
	8	打製石斧	1984年包含層	146	72	21	260	細粒砂岩 (中世代)
	9	打製石斧	1984年包含層	106	68	19	142	細粒砂岩 (中世代)
	10	磨製石斧	1984年包含層	77	42	19	81.9	珪化細粒砂岩 (中世代)
27図	1	砥石	5号住居	80	64	51	342	緑色凝灰岩
33図		砥石	7号住居	283	141	123	7,710	緑色凝灰岩
99図		砥石	35号土坑	(47)	(54)	14	(49.4)	白色凝灰岩
136図	3	砥石	20号溝	(58)	15	20	(26.1)	珪化白色凝灰岩
146図	1	砥石	1980年包含層	(30)	28	25	(25.3)	珪化白色凝灰岩
	2	砥石	1981年包含層	(45)	(54.5)	(14)	(45)	緑色凝灰岩
	3	砥石	1981年包含層	74	29	26	77.4	白色凝灰岩
	4	砥石	1984年包含層	64.5	16	12	22	珪化白色凝灰岩
45図	1	磨石	11号住居	65.5	79	41	340	チャート (中世代)
115図		磨石	60号土坑	(179)	125	55	1,700	細粒砂岩 (中世代)
145図	1	磨石(凹石)	1981年包含層	110	71	42	360	花崗岩
	2	磨石(凹石)	1981年包含層	119	(58)	40	(400)	細粒砂岩 (中世代)
	3	磨石	1982包含層	(126)	77	27.5	(420)	細粒砂岩 (中世代)
48図	1	勾玉	12号住居	16.5	10	5	1.7	含硬玉、珪質岩
58図	3	管玉	15号住居	11	3	3	2	含硬玉、珪質岩
130図		管玉	85号土坑	10	2.5	3	1	含鉄珪質岩 (赤岩)
136図	2	玉原石	32号溝	17.5	27.5	10		含硬玉、珪質岩

第3節 押野館跡

押野館跡の堀跡と推定される溝跡をA・B・C地点で検出した。A地点は第6節で報告している。



第148図 押野館跡堀跡B地点 (1/60)

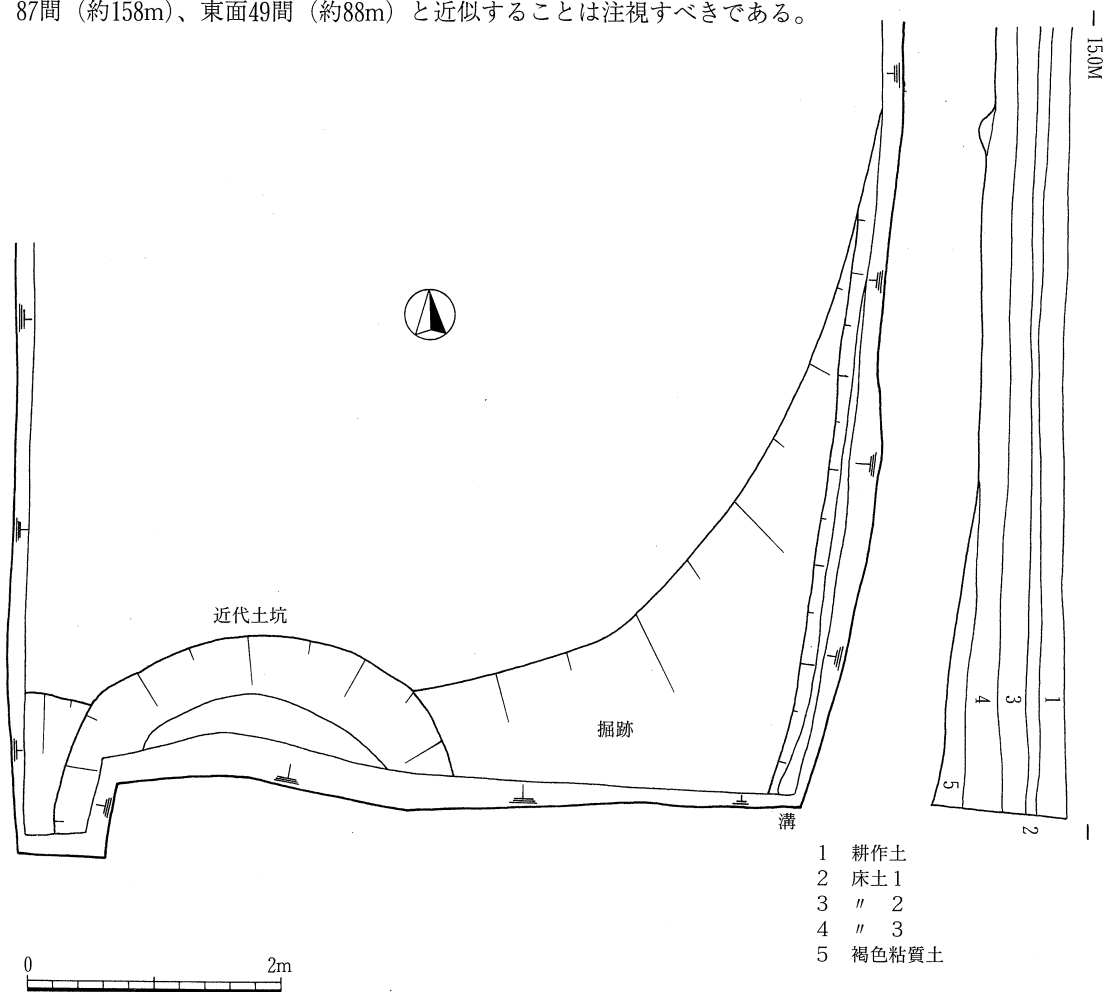
堀跡B地点（第148図）

調査区南西端部に位置する東西方向の堀である。上面幅は6.7～7.15mを測るが、土層断面図では7.6mの幅をもつ。堀底は平坦であり、幅3.8～4.0m、南側の掘り方の傾斜は緩くなっている。深さ65cmを測る。掘り方内には4.5m離れて平行する小溝状遺構を2条検出している。幅20cm、深さ10～14cmを測る。堀底の標高はほぼ14.2mである。

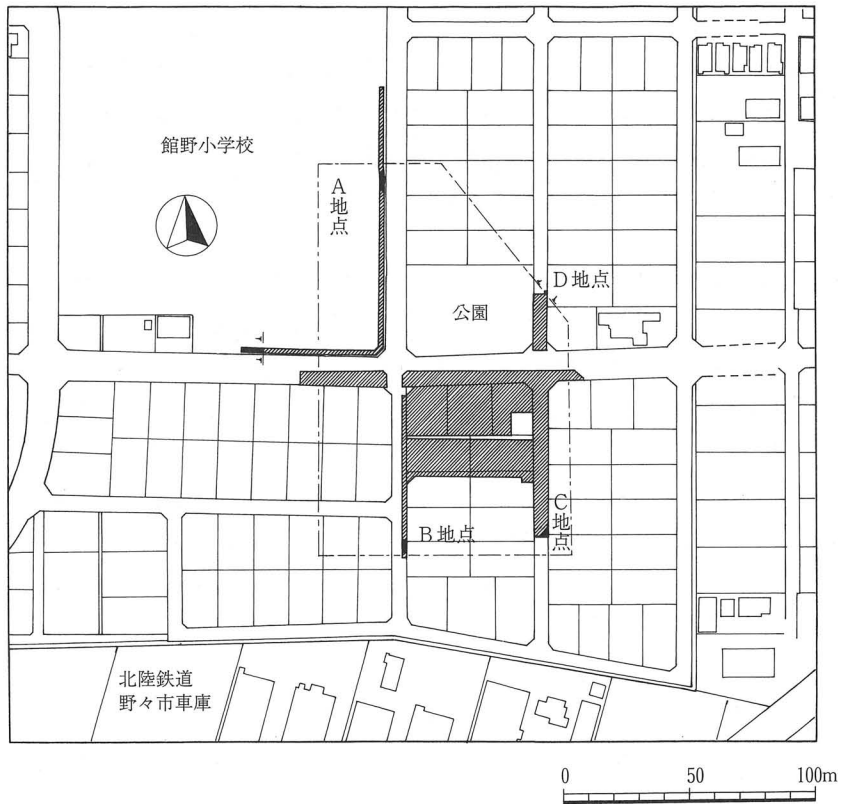
堀跡C地点（第149図）

調査区南東端部に位置する。耕作による削平のため遺構の残存は悪く、地山が緩く傾斜しながら落ち込む状況であり、明確な堀底の端部は不明である。深い部分の標高は14.1m前後を測る。この地点はB地点で検出した南面の堀が北方へ屈折する箇所と推定している。

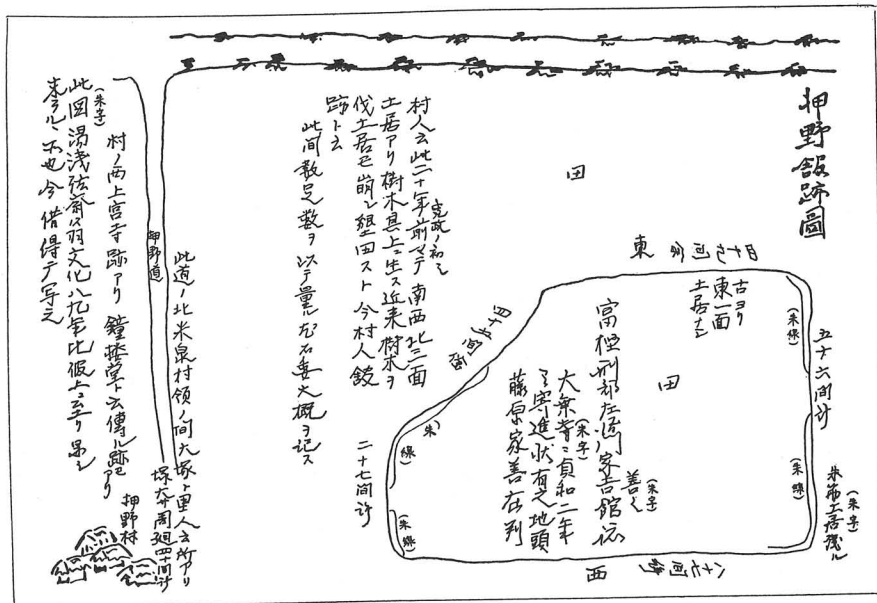
第150図の台形状を呈する1点破線は、第151図「押野館跡図」の記述と、堀跡のA・B・C地点及び河道的な落ち込みを確認したD地点から押野館跡の範囲を推定したものである。「押野館跡図」は加賀藩士であった湯浅弦斎（弥佐衛門）が文化8～9年（1811～1812）頃に実測した図を森田平次が写したものである。館跡の規模や土居の状況、大塚古墳など地誌に関する重要な記述が見られる（押野村史）。A地点とB地点の南北間距離140m、C～D地点間の距離95mは、絵図の西面87間（約158m）、東面49間（約88m）と近似することは注視すべきである。



第149図 押野館跡堀跡C地点 (1/60)



第150図 押野館跡堀跡位置図 (1/3,000)
 (一点破線は「押野館跡図」を推定したものである)



第151図 押野館跡図 (押野村史より転載)

第4節 縄文時代後期～弥生時代初頭押野夕チナ力遺跡からの石器の石質についての一考察

金沢大学教授 藤 則雄

1. はじめに

本遺跡から出土の石器は、その用途の視点から分類すると石匙・石槍・石鏃・打製石斧・磨製石斧・砥石・凹石・磨石・玉類・その他に区分することができ、これ等石器の石質と数については表1に示されている。

この遺跡では、打製石斧の11点と砥石の9点が最多頻度の石器である。

2. 各石器の石質

(1) 石 匙

本遺跡からの石匙の数は1点で、その石質は珪化凝灰岩であり、手取川中流に局所的に分布している。

(2) 石 槍

本石器は、輝石安山岩を石材とし、唯1点出土した。手取川中流域に分布している。

(3) 石 鏃

本石器は4点出土している。その石質は、安山岩類2点とフリント質岩石2点である。両岩石とも手取川中流に分布しているが、手取川扇状地の構成礫となって、本遺跡一帯に広く分布している。

(4) 打製石斧

本石器は11点（約30%）で、その石質は火山礫凝灰岩6点（本石器内で50%）、片麻岩2点、中生代の細粒砂岩2点、及び玢岩1点である。手取川中～上流域にこれ等の石材は分布している。

(5) 磨製石斧

磨製石斧の石質は珪化細粒砂岩（中生代）1点で、この石材は手取川上流に分布しているが、その礫は手取川扇状地の礫として分布している。

(6) 砥 石

本石器は9点出土しており、これ等のうち2点は弥生時代末期の包含層からの出土であるが、8点は凝灰岩類である。他の1点は中生代の細粒砂岩で、弥生時代の石器ではない。細粒砂岩は手取川中流に分布しているが、これ等岩石の礫は手取川扇状地に分布している。

(7) 玉 類

玉類の石質は、含硬玉珪質岩3点、含鉄珪質岩1点よりなる。含硬玉岩は新潟県糸魚川一帯にのみ限定された分布を示しているため、異地性の石材であると言える。

以上総じて、玉類の石材となっている含硬玉珪質岩（石器点数3点）を除いて、他のすべての石材が手取川中・上流域に分布しており、その転石は手取川中・下流に分布し、また、礫として手取川扇状地にも分布している。従って、含硬玉珪質岩は異地性の岩石であるため、恐らくはこの石材を入手すべく交易によったであろうと推定されるが、その他の石材は、恐らくは手取川扇状地の礫を利用したと推定される。

表-1 押野タチナカ遺跡の石器の石質

石器の種類	石質	個体数(個)	頻度(%)	最寄りの分布地
石 匙	珪化凝灰岩	1		倉ヶ岳一帯・手取川中流域
石 槍	輝石安山岩	1		直海谷川
石 鏃	安山岩類	2	50	直海谷川
	フリント	2	50	倉ヶ岳一帯・辰口丘陵
打製石斧	玢岩	1	10	手取川上流・直海谷川
	火山礫凝灰岩	6	50	手取川中流・直海谷川
	片麻岩	2	20	手取川上流
	細粒砂岩（中生代）	2	20	手取川上流
磨製石斧	珪化細粒砂岩（中生代）	1		手取川上流
砥 石	凝灰岩類	8	88	手取川中流
	細粒砂岩（中生代）	1	12	倉ヶ岳一帯・手取川中流
凹石・磨石	花崗岩	1	20	手取川上流
	粗粒砂岩（中生代）	1	20	手取川上流
	細粒砂岩（中生代）	2	40	手取川上流
	チャート	1	20	手取川上流
玉 類	含硬玉珪質岩	3	75	新潟県青海・糸魚川
	含鉄珪質岩	1	25	倉ヶ岳一帯・辰口丘陵
そ の 他	珪化凝灰岩	2	50	倉ヶ岳一帯・手取川中流
	輝石安山岩	2	50	直海谷川

第5節 土器群の検討 —住居跡出土土器を中心として—

I 弥生時代中期の土器群

当遺跡から出土した土器群の中で、弥生時代中期に属するものは8号住居出土土器、5号8号・51号・81号の各土坑出土土器および包含層出土土器があげられる。このうち81号土坑を除く各土坑および包含層より出土したものはいずれも小片であり、また単独出土が多いためここでは8号住居と81号土坑より出土した土器について若干の検討を加えることとする。各土器および土器群の持つ特徴については前に述べた通りであり、これらはすべて櫛描文によって代表される第Ⅲ様式の小松式の影響下に成立したものと見える。しかし、個々の土器を見ていくと前述の5つの特徴に加えて櫛描による施文をおこなうものがみられないなど若干時期的に下る要素も多く認められる。これらの緒特徴は金沢市磯部運動公園遺跡（増山1988）によって抽出された一群の土器が持つ特徴と共通する点が多く、類例も3号建物周溝出土土器中などに認められる。その反面当遺跡出土土器中には磯部運動公園遺跡に一定量みられる凹線文系およびその影響を受けたと思われるものが認められないことも事実である。資料数が少なく、組成も十分把握しきれないためこのことが当遺跡にとってどれほどのファクターとなるかは現状ではわからないが、ここでは81号土坑も含めて概ね磯部運動公園遺跡並行ととらえておきたい。

II 弥生時代後期後半の土器群

1. はじめに

県内における当該期の土器研究は吉岡編年、谷内尾編年はもとより田嶋・栃木・北野・出越各氏による成果^①の発表により近年めざましい進歩をとげている。その結果筆者自身の当該期の土器に対する概念もいささか修正の必要を感じているが依然としてその理解が不十分であり、もとより北陸レベル、県内レベルといった広い視野での概観を試みる力量もない。したがってここでは押野タチナカ遺跡という極く狭い範囲での土器群の検討を通して、小地域差といった問題の一助となり得れば幸いである。押野タチナカ遺跡では5次にわたる調査によって20棟にのぼる住居が検出されており出土した遺物（主に土器）はパンケースにして約50箱を数える。しかしいずれも小片が多く、住居出土土器といえども非常に復元・接合率が低いと言わざるを得ない。したがって後に述べるそれぞれの分類に則した出土点数が必ずしも把握されているとは言えず、壺か鉢か、高坏か器台かといった器種レベルでさえ判断に困難をきたすものが多かったことを予めお断りしておく。ここで対象とする土器群は、住居より出土した土器の内前節で述べた中期に属する8号住居および実測可能なものが少なく、組成的にも十分とは言えない6号住居・15号住居・17号住居を除く1～16号住居の土器群と比較的出土量が多くある程度の様相を窺い知ることのできる53号土坑・69号土坑・87号土坑より出土した土器群とした。また住居出土土器については床面出土土器および完形品を含みある程度の大きさにまで接合でき、埋没時の位置をほぼ保っているとされるものを第1儀とし、その他出土状況より若干の補足をおこなった。なおここで用い

た分類の基準は1次要素を口縁部に代表される形態の差としてとらえ、2次要素をその中での大まかな系譜の差としてとらえておりそれぞれ前者をアルファベットで、後者を小数字で表現している。また器種によっては出土量が少なく分類に耐えないとの判断から2次要素を割愛したものがあり、また3次要素を設けて更に分類する必要があるものもあるが、1分類1・2点となるような極端な細分をさけるためあえて分類をおこなわなかった。したがって器種によっては甚だ繁雑な印象を受けるものも存在する結果となったが、必要に応じて文章中で説明を加えることでご了解願いたい。また、ここで取り上げなかったものについては帰属する分類および調整等を個々の土器観察表の中に記したためそちらも併せて参照戴きたい。

2. 各分類の説明

「甕型土器」 出土量は全土器中最も多い。分量により大（Ⅰ、特大も含む）、中（Ⅱ）、小（Ⅲ、特小も含む）の3タイプが認められる。

A類

有段口縁を有する甕の内口縁部の外面に擬凹線を施すもの。系譜差により4細分する。

A1類 比較的幅の狭い口縁帯が直立もしくはやや外傾するもの。端部はあまり伸びず重厚な丸縁に仕上げるものが多い。擬凹線の形態は未確立であり頸部内面には面を持つものと持たないものが認められる。出土量は多くⅠ～Ⅲのタイプがある。V様式系の甕である。

A2類 比較的幅の広い口縁帯が外反するもの。擬凹線の形態はほぼ確立され2単位以上施されるようになる。外反度は各個体によりバラエティーに富む。端部は先細りで指頭圧痕を持つものを通有とするがそれ以外のものも存在する。出土量は多くⅠ～Ⅲのタイプが認められる。いわゆる月影系の甕である。

A3類 A2類と同様であるが、内面の段の屈曲が弛緩して弱くなるか消滅するもの。その結果頸部内面の屈曲点がヘラ削りの位置にまで下がり頸部内面に面を持たなくなる。出土量は一定量見られⅠ～Ⅲのタイプが認められる。月影系の甕の中でもやや新相を示すものである。

A4類 口縁部が内屈し頸部の器壁が薄いもの。擬凹線は2単位をいわゆるフリーハンド的に施すため雑な印象を受ける。出土量は少なくⅡタイプのみ認められる。

B類

有段口縁を有する甕の内口縁部外面をナデで仕上げるもの。いわゆる無文系。系譜の差により前出のA1類、A2類に準じた細分が可能と思われるが、当遺跡例では特にA1類に相当する資料が希薄でありあえて分類をおこなわなかった。出土量は少ないがⅠ～Ⅲのタイプが認められる。

C類

くの字口縁の甕である。単純に口縁部の形態のみで2細分した。したがって各細分類の中には相当数の別系譜に属するものが混在している。

C1類 口縁部が外反するもの。外反度は各個体によりバラエティーに富む。端部の成形は丸縁を通有とするが若干先細りぎみに仕上げるものや面取りするもの、また面取りした後に凹線を

巡らせるものなどが見られる。胴部の形態と併せ数系譜存在するものと思われる。出土量は一定量見られⅠ～Ⅲタイプが認められる。

C 2 類 口縁部が直線的に伸びるもの。頸部の屈曲が強いものと弱いものがみられる。面取りされるものが多く凹線を巡らせるものもある。出土量は一定量見られⅡ・Ⅲタイプが認められる。

D 類

無文有段口縁の甕の内第一口縁部の長いもの。B類とは製作の意匠が異なり、付加ぎみに付けた短い第二口縁部の両側を強くつまみナデて内・外面ともに凹ませ、一見外反しているように見せる。口縁部の断面は指頭状を呈するのが通有である。おもに頸部の形態によって2細分した。

D 1 類 長い第一口縁部が外上方へ緩く屈曲するもの。口縁端部を通常のナデにより凹ませないものも見られる。また形態的にみて本類に擬凹線を施したと思われるものも存在するが、その区別は容易ではなく、今回は無文系に限った。出土量は多くⅠ・Ⅱタイプが認められる。

D 2 類 長い第一口縁部が外へ強く屈曲しほぼ水平となるもの。口縁端部に面取りをおこなった近江受け口系の影響を感じさせるものも若干量含むが個体数が少なく、しかも小片が多いためここでは特に細分しなかった。また本類末期と思われるものの中にはB類との区別が困難なものも存在するようである。出土量は少なくⅡ・Ⅲタイプが認められる。

E 類

付加状口縁の甕である。はね上げ状口縁や若干垂下するものも含む。擬凹線等の有無により2細分した。

E 1 類 口縁部を擬凹線、凹線などで加飾したもの。出土量は少なくⅠ・Ⅱタイプが認められる。

E 2 類 口縁部が無分ナデのもの。出土量は少なくⅡタイプのみ認められる。

F 類

近江系受け口口縁の甕である。出土量は少なくⅠ・Ⅱタイプが認められる。細分はおこなわない。

G 類

その他の甕。上記分類のいずれにも属さず、出土点数が少なくしかも各タイプともバラエティーに富み分類に耐えないものを一括した。

「壺型土器」

A 類

長頸壺の系譜で考えられるものである。全体の器形を窺える資料がなく不明な点が多い。形態により3細分する。

A 1 類 直線的に伸びる口縁部の端部に加飾しないもの。端部成形は面取りをおこなうものや反転ぎみに先細りするものなどが見られる。出土量は少ない。

A 2 類 口縁端部外面に凹線を用いて加飾するもの。肩の張る胴部を持ち端部は丸縁に仕上げ

る。1点のみの出土である。

A 3類 口縁部を有段状に仕上げた擬凹線を巡らせるもの。丸縁を通有とする。出土量は少ない。

B類

短頸壺の系譜で考えられるもの。体部は肩が張らずやや長胴ぎみである。口縁部の形態は外反するもの、直線的なもの、内湾するものなどがあるがおのおの1点ずつの出土でありここでは細分せず必要に応じて適宜文中で説明を加える。

C類

中型の有段口縁壺の内口縁部の成形が鈍いもの。擬凹線を有するのを通有とし、肩部に波状文を持つものも見られる。胴部最大径の位置は中程にあるようである。若干の法量差があるが出土量が少なくここでは細分しない。

D類

中型の有段口縁壺の内口縁部が短く下膨れの胴部を持つもの。口縁部の成形は鋭く段部が明瞭である。V様式の系譜で考えられるもの。擬凹線の有無により2細分する。

D 1類 口縁部に擬凹線を有するもの。一定量見られる。

D 2類 口縁部に擬凹線を持たないもの。一定量見られる。

E類

中型の有段口縁壺の内口縁部が一層伸長したもの。内面の屈曲は弱いかほとんど見られない。擬凹線を持たないのが通有である。月影式に特徴的に見られるものであり細頸壺からの系譜で考えられるものである。一定量の出土がある。細分はおこなわない。

F類

有段口縁の広口壺である。法量差により大（Ⅰ）・中（Ⅱ）がある。口縁部の形態により2細分する。

F 1類 口縁端部が比較的短いもの。面取りするものや丸縁のものが見られる。全体を窺えるものは少ないが肩の張る偏球状の胴部を持つ完形品が1点ある。一定量出土しておりⅠ・Ⅱ両タイプが認められる。

F 2類 口縁端部が比較的長いもの。肩部に突帯を持つものも見られる。全体を窺えるものはない。出土量は少なくⅠタイプのみ認められる。

F 3類 比較的長い口縁部に浮文等で加飾するもの。小片1点のみの出土である。全形がわからず不明な点が多く、ここでは一応F類としたが別分類した方が適切であるかもしれない。

G類

無頸壺の類である。口唇部に擬凹線を巡らせるものや端部を上方へ屈曲させて小さなくの字状の口縁部を形成するものが見られる。出土量は少ない。

H類

台付裝飾壺である。形態差より2細分したがおのおの1点ずつの出土にとどまる。

H 1 類 体部が算盤玉状を呈するもの。

H 2 類 台付無頸壺。棒状有段脚を持つ。

I類

その他上記分類に属さないもの。

「高坏型土器」

A類

脚部より強く屈曲して開く坏底部に大きく外反して伸びる口縁部を持つもの。端部は付加状を呈する。特大型（X）、大型（I）がみられる。形態により2細分するが出土量は各1点のみである。

A 1 類 大型加飾のもの。丁寧な作りで内・外面に赤彩を施す。柱状部を欠くが棒状有段脚を持つものである。Xタイプ。

A 2 類 端部に垂直な面を持つもの。V様式前半の系譜で考えられるものである。Iタイプ。

B類

広い坏底部に強く外反する口縁部を持つもの。坏部の形態はいわゆる「西の辻」タイプであるが脚部まで確認できるものは少ない。Iタイプとやや小さい中型（IIタイプ）が認められる。おもに坏部の深さとそれにかかわる口縁部の伸びによって2細分する。

B 1 類 坏受け部が相対的に深いもの。口縁部は短く反転して丸縁をなすものが多い。一定量出土している。

B 2 類 口縁部の伸びが坏受け部の深さを上回るもの。反転する端部の内面を肥厚させて面を持たせるものが多いが丸縁に仕上げるものも若干存在する。一定量出土している。

C類

脚部より水平近くにまで屈曲する狭い坏底部に大きく外反して伸びる口縁部を持つもの。端部は丸縁、脚部は緩やかに開く無段脚を通有とする。I・IIタイプが認められる。一定量出土している。

D類

坏部がいわゆる有段鉢形を呈するもの。全形どころか口縁部までを窺えるものも僅かしか見ら

れない。当遺跡出土例は内面の稜線が外面のそれに比べてほぼ同一かやや高いところにあるものが多く、相対的に浅いものと思われる。出土量は少ない。

E類

小型高坏の類である。小さな椀形の坏部を持つが、脚部まで窺えるものはない。出土量は少ない。

F類

その他上記の分類以外のもの。出土量は少ない。

「器台型土器」

器台全体を合わせても出土量が極めて少なく、分類に耐え得るものではない。IV様式からの系譜で考えられるものやX型を呈するもの、椀形のものなどバラエティに富む。器台については必要に応じて文中で取り上げることとしここでは分類はおこなわない。

「鉢型土器」

A類

胴部が張り安全感のある平底を持つもの。短い有段口縁を持ち特小型の甕型土器と区別の難しいものもある。擬凹線の有無により2細分する。

A 1類 短い口縁部の外面に擬凹線を施すもの。端部の成形は一般に重厚でありスタンプ文などの装飾性に富むものも見られる。一定量出土している。

A 2類 擬凹線を持たないもの。端部を先細りに仕上げるものも見られる。出土量は少ない。

B類

胴部が張らず体部がヘルメット状を呈するもの。全形を窺えるものはないが丸底をなすものである

B 1類 擬凹線を持つもの。端部は一般に重厚な作りであり体部の深さにも違いが見られる。出土量は少ない。

B 2類 擬凹線を持たないもの。口縁部の伸びはB 1類に比べてやや短いようである。端部の成形も繊細なものが見られる。出土量は少ない。

C類

口縁部の伸びが胴部を上回るもの。丸底を呈し有段状の口縁部を持つ。口径に対して体部の深いものと比較的浅いものが見られる。出土量が少なくここでは包括して扱う。

D類

ヘルメット状の胴部にくの字の付加状口縁を持つもの。口縁部外面に凹線を施すものと施さな

いもの、また頸部の屈曲が明瞭でないものなどが見られる。出土量は少ない。

E類

胴部が碗形を呈するもの。形状により様々なバリエーションがある。2細分する。

E 1類 体部が弯曲して丸いもの。出土量は少ない。

E 2類 体部が比較的角張るもの。出土量は少ない。

F類

脚台を有するもの、本類に属すると思われる脚台部片は一定量認められるが上部の器形を窺えるものは1点のみである。有段状の口縁部を持ちC類の古相に似るものである。

G類

大型で体部に把手を持つものである。有段口縁に擬凹線を施すものを通有とする。ほぼ全形を窺えるものは環状把手を持つもの1点のみであるが、半円形または角形を呈する張付把手片も若干量出土している。

H類

その他上記分類に属さないもの。近江系と思われるものやくの字口縁を呈するものなどが見られる。くの字口縁系については出土量自体は一定量見られるが、いずれも小片であり出土状況にも不明な点が多いためここでは分類の対象としなかった。

「その他の土器」

その他の土器群を包括した。蓋型土器やミニチュア土器、底部穿孔土器や尖底土器などが見られる。いずれも出土量が極めて少なく、バリエーションに富んでいるため分類に耐えない。

3. 各住居ごとの組成の抽出

ここでは前に述べた視点に沿って各住居ごとの土器群の組成の抽出をおこなった。なお甕型土器については、その量比の検討によって小地域相の解明にアプローチがおこなわれている現状から末尾に各住居の甕型土器の分類別のパーセンテージを付記しておいた。しかし小片については出土状況による区分が明確にはなし得ずこれがそのまま当地の甕型土器の組成を表しているとは考えていない。計測法はおもに個体識別法によっている。以下順に1号住居から器種別に説明を加える。

1号住居（第6～9図）

甕型土器1・2・4・9・11・12・16を抽出する。大型・中型・小型が認められる。大型甕1はC類として分類したが他のいわゆるくの字口縁の甕とは様相を異にする。柳田うわの遺跡溝状

遺構Aに類品が見られるが、肩部の張り（本例の方が最大径の位置がより上位にある）や底部の形態などから本例はうわの例に若干先行するものと思われ戸水B遺跡甕C 5類の系譜で考えられる。D 2類とした中型甕11は1と口縁部を接するような形で床面より検出された完器である。類例は多くおもに当該期の口能登地域に広く見られる。12とともにその成立は法仏A群に見られるくの字口縁の甕に粘土帯を付加したものの系譜（法仏A群-D類）が考えられる⁽²⁾。このタイプは第一口縁が長いことをひとつの特徴とし、その中で第一口縁が斜め上方に緩く立ち上がり口縁端部へ緩い屈曲を持ってつながるもの（D 1類）と、水平近くにまで強く屈曲する第一口縁にやはり強く屈曲する口縁端部を持つもの（D 2類）が見られる。これらそれぞれの系譜の違いは現状では不明な点が多いが後者の実測し得なかったものの中に端部を面取りしたものが僅かではあるが認められることや、時期的にさかのぼる松任市八田小鮎遺跡⁽³⁾（猫橋式～法仏式）に相当量の近江系受け口口縁の甕が見られることなどから、D 2類としたものの一部に近江系受け口の影響下にあるものの存在も想定できるがその区別は容易ではない。その他2はE 2類に、4はE 1類に、9はA 1類に、16はD 2類にそれぞれ属する。

壺型土器25・26・30・31を抽出する。長頸壺系（A 1類）、短頸壺系（B類）、擬凹線を持つ有段口縁広口壺系（C・D 1類）が見られる。25は鉢状茶白山遺跡第13号住居床面出土土器に、26は柳田うわの遺跡溝状遺構Aにそれぞれ類品が見られる。

高坏型土器 48・49・51・53を抽出する。A 2類とした48は金沢市吉原七ツ塚第11号墓周溝にやや先行すると思われるものが見られ、羽咋市柴垣須田遺跡1号住居址には端部を肥厚させた祖形らしきものも見られる。B 1類とした49～53は坏部の形態が西ノ辻タイプで占められるものであるが脚部まで窺えるものは存在しない。全体的に柳田うわの遺跡溝状遺構Aに比べて坏受け部の体高が高い本例は若干先行するものと思われる。また51は西念・南新保遺跡F区T-2に類品が見られるが本例の方が口縁部がやや発達しており若干後続するものと思われる。

器台型土器 出土量が少なく小片が多いため積極的に組成として抽出できるものはない。59は受け部の方が脚部よりも大きくなるX型と思われるが全形は不明である。

鉢型土器 出土量は一定量見られるがいずれも小片ばかりであり精彩に欠ける。B 1類に属するものがほとんどを占めるがくの字口縁を持つものも若干認められる。

2号住居（第10図）

出土量が少なくほとんどが小片であるため十分に把握されているとは言い難い。したがってここではその様相を概観するにとどめる。甕はA 1類とともにA 2類が見られその量比もA 1類を上回るようになる。壺はほとんどがE類によって占められており大型となる類の破片は確認されていない。高坏はC類が1点見られる。類例は津幡町谷内石山遺跡第1号住居址に見られる。こ

の内甕A 2類は端部の整形がさほど鋭くなく内面の指頭圧痕もやや上位に位置するようである。

3号住居 (第11～16図)

甕型土器 2・3・5・7・10・11・12・14・15・18・22・23・29・33・34を抽出する。この内口縁部に擬凹線を持つものはA 1類(3・5・11・12)とE 1類(2・7・10)に限られる。A 2類の古相に属するもの(口縁部がやや長めで内面に指頭圧痕を持つようなもの)も存在すると思われるが明確には確認できていない。15は前述のごとくD 2類としたものの中でも受け口系の影響を窺わせるものである。23とともに頸部内面に粘土を貼付し肥厚させる手法は別に考えた方が適切であったかも知れない。22はD 1類の典型である。類例は多くみられるが胴部があまり張らず長胴ぎみでしっかりとした平底を持ち、内面の調整にハケを用いる本例はその中でも若干古い様相を持つ。29はC 2類、33はC 1類に属するくの字口縁の甕である。これらの内11・23・33の3点は球形を呈する胴部の形態と法量においてほぼ共通するが、それぞれ組み合わせられる口縁部の形態と胴部の調整技法が異なる。いささか乱暴ではあるが製作の同時性を想起させるものがある。しかし他に同様な規制を受けているものが確認されていないためここでは観察を通して得た感想の付記とするととどめたい。34は口縁部の外面にキザミを持つ近江系と思われる大型の甕である。鉢とした35と一見して同巧にありセットとして考えられる。類例は西念・南新保遺跡などに見られる。

壺型土器 37～39、42～44、47を抽出する。37は擬凹線を持つ有段口縁広口壺である。38は法仏式期に出現する頸部に2孔1対の貫通孔を持つもので、装飾性に富む算盤玉状の体部を持つ10号住居出土土器(第40図29)のタイプの口縁部である。類例は擬凹線を持つ口縁部片としては根上町中庄遺跡に見られる。A 2類とした44は金沢市無量寺B遺跡3号土壙や押水町宿東山遺跡6号住などに類例が見られるが本例は頸部外面にハケ調整の後ミガキを施している。47は前述のごとく棒状有段脚と組み合わせられる例は県内では知らず、管見では越中地方の江上A遺跡SD01出土土器1点を知るのみであるが上部の形態は系譜を異にするものであろう。

高坏型土器 56・57・60・61を抽出する。56は法仏式で出現する大型で装飾性の強いものである。類例は前述の七ツ塚墳墓群のほかやや稚拙なものとして押水町上田出西山遺跡採集品、器台ではあるが無量寺B遺跡包含層出土品などがあげられる。この他の高坏は坏部の形態が1号住居と同じくB類で考えられるが、坏部がやや浅く口縁部の伸びるB 2類とした本例は1号住居のものよりは新相を持つものであり柳田うわの遺跡溝状遺構Aに類例が多い。

器台型土器 50・51・54を抽出する。すべて中型で占められ該期に通有の大型器台およびその粗形と思われる上下有段の対象形を呈するいわゆる中型器台は認められない。50・51は栃木分類(栃木1983)⁴⁾のCタイプかと思われるが類例はあまり見られない。江上A遺跡SD01や西念・南新保遺跡などにやや類似したものがみられるが細部において意匠が異なる。54は棒状脚を呈す

る筒胴部であり裾部に小さな有段状の突起を持つ。

鉢型土器 46～48を抽出する。B 1類とした46は鹿首モリガフチ遺跡P 4 G調査区出土土器よりも口縁部が大きく伸長し体部も小さい。A 2類とした47は小さな有段口縁に胴の張る安定感のある体部を持つものであり、口縁部が一層伸長し体部の小さくなった塚崎遺跡第21号堅穴床面土器よりはやや古相を呈する。B 2類とした48は小さい有段口縁を持つヘルメットの形のもので該期に広く見られるものである。

4号住居（第21・22図）

甕型土器 小片が多く出土状況も信頼し得るものが少ない。D 2類とした12は胴部の張りにおいて僅かに1号住居出土のもの（第7図11・12）に勝り、胴部最大径の位置が若干下がり底部がやや小さくなるという傾向が看取される。口縁部の形態等にはあまり変化は見られないが本例は1号住居のものよりはやや新相を持つものである。

壺型土器 出土量が少なく実測し得たものも完形となった19の1点のみである。F 1類とした本例はA 3類との関係等不明な点が多いがどちらかと言えば短頸壺の系譜下にあるものであろう。口頸部のみの類例は法仏遺跡などに見られるが全形を窺えるものとしての比較資料は良好なものを知らない。ただ類似した体部形態と法量を持つ有段口縁広口壺との比較では本例は胴部最大径の位置がやや上位にあり底部からの立ち上がりも直線的で若干古相を呈するようである。

その他の器種 上記以外のものは出土量が僅かであるためここではその様相を包括して記述する。高坏型土器は現状ではB類以外のものは見られない。その中でも端部が反転して上部に面を持つ本例（22・23）はB 2類に属するものである。椀形を呈する器台27は筒胴部を欠いているがほぼ全形を窺われるものである。類例は法仏遺跡に半環状把手を持つものが見られるが本例にくらべて口縁部の作りが繊細である。

5号住居（第23～26図）

甕型土器 出土個体数は各住居中最も多いが、復元・接合率が極めて低く小片が多いため口径を明確に知り得るものすらほとんど見られない。実測図に掲載したものは床面もしくは下層から検出されたものであり大型・中型・小型が見られる。有段口縁擬凹線系はほとんどA 2・A 3類で占められているが3・4のようなV様式系のもも若干みられる。その他B・D 1類が一定量見られC・E 1・F類が各1点ずつ見られる。

壺型土器 20～22・24・25・27を抽出する。中型有段口縁壺、有段口縁広口壺よりなる。E類とした20・21は内面の段が緩いかほとんど見られないもので月影式に通有のものである。D 1類とした22はV様式後半の系譜下にあるもので口縁部外面に擬凹線を有する。口縁部が大きく伸長

し外反度も強い。24・27はF 1類に属する。27は4号住居（第22図19）とほぼ同じであるが24はやや口径が大きく屈曲部の稜も鋭い。また端部は平縁である。

高坏型土器 55・56・61・65・66を抽出する。C類とした55・56はやはり月影式によく見られるものである。D類とした61は有段鉢形を呈するものであり月影式以降月影Ⅱ式の段階で最も盛行するものである。⁶⁾その中でも本例は口径に比べて体部が浅くこの類にあっては古相を持つものである。65は現在のところ類例は管見にない。可能性としては漆8群土器中に類似したものを見かけるが時期的に難がありここでは保留しておく。66は小型高坏の類である。御経塚ツカダ遺跡80-6H等に類例が見られる。

器台型土器 46・50～52を抽出する。結合器台46は口縁端部が未発達であるが定形化した涙滴状透かしを持ち一応月影Ⅱ式の範疇にあるもの⁶⁾であるがその中でも古相を備える。50は下安原遺跡土器溜りに類例が見られる。51は同一個体ではないがこのタイプに付く脚部であろう。52は小さな有段状を呈する筒胴部であり貫通孔を持つ。

鉢型土器 37・38・44・45を抽出する。37・38はともにB 2類として分類したものである。体部の深さおよび口縁部の伸びの差は小時期差かバリエーションかは現状では不明である。44・45は把手を持つ大型の鉢およびその把手片である。44は環状把手を持つものであり、法仏式の中で多く見られるものであるが本例は前述の結合器台46と伴出している。また半環状の粘土紐を貼付する形式の把手45も同時に存在するようである。

その他の土器 39・40・42などの小型土器がある。40は新保本町東遺跡6号土壙、南新保D遺跡B G-20土壙などに類例が見られる。42は鉢状茶臼山遺跡第11号住居跡に類例が見られるが本例の方が屈曲が弛緩している。

7号住居（第30・31図）

当住居からは多くの床面土器が検出されており資料的には良好な一括資料である。実測図に掲載したもののほとんどは床面出土である。

甕型土器 A 1類とした1は口縁部にV様式後半の特徴を強く残すもので肩部にもハケ状工具によるキザミを巡らせている。A 4類とした2は重厚な端部の作りや稚拙な擬凹線など技術的には古相を窺わせるが当住居より古い様相を呈する一群の中には確認されておらず当遺跡では本例が初現である。3～5はA 2類、6・7はA 3類、8・9はB類である。

壺型土器 中型の有段口縁壺と無頸壺1点よりなる。10・13はD 2類、11はE類に属する。その中でも13は国分高井山遺跡第2号住居跡に見られる下膨れの体部に付加状口縁を持つものの系譜で考えられよう。

高坏型土器 20・22・24はC類であり当住居の主体を占める。坏部外面下の稜が若干垂下するものとしなないものがある。いずれも口縁部の伸長が著しく2号住居などに比べて後出する。D類とした25は小片であるが、内面の稜が外面のそれよりも高い位置にあり比較的浅い体部を持つものであろう。21・23は小型高坏である。この内23の端部をつまみ上げぎみになでる手法はこの種にあっては古相を示す。類例は宇ノ気町塚越遺跡3号住に見られる。

器台型土器 1点のみである。口縁端部の屈曲が緩く明瞭な稜線を持たない本例はあまり類例は見られない。

鉢型土器 出土量は少ない。15は脚台付きの有段鉢である。類例は鹿首モリガフチ遺跡第5号竪穴住居に見られるが本例はやや体部が深く後出するものである。

その他の土器 小型土器、手捏ね土器が見られる。17は偏平な低い器形に把手を持つもので津幡町刈安野々宮遺跡第1号住居址に類例が見られる。19は浅い腕形を呈するもので国分高井山遺跡第6号土壙に類例が見られるが本例の方が直線的で底部も小さい。

10号住居（第38～40図）

甕型土器 1・3・4・6～12を抽出する。大型・中型・小型がある。3はくの字口縁の端部をつまみナデで付加状に仕上げたE2類であるが小さな有段口縁との区別は難しい。胴部が大きく張り底部に向けて直線的に収束するプロポーシオンは1号住居（第1図1）に似てやや古相を帯びる。C2類とした4は形態的には西念・南新保遺跡G区T-2に類似器種がみられる。口縁端部を面取りして1条の凹線を巡らせる手法は1号住居（第6図1）と系譜的につながる可能性もあるが、倒卵形の胴部を持つ本例は明らかに後続するものである。7～9は近江系受け口状口縁の甕F類である。7・8と9に見られる形態の差はおもに近江における小地域差の反映によるようである。（栃木1986）。11はD1類とした大型品である。12は一見して11に似るが細部の意匠において若干異なる。類例は鉢状茶臼山遺跡第7・9号住居跡に見られる。

壺型土器 25・27・29を抽出する。B類の25は二口六丁遺跡第4次1号溝に類例が見られる。27はA3類の中でも端部が短く頸部もあまり伸びないようである。装飾性が強く精良な作りの29は岡山県久米町法事坊遺跡に類例が求められ、小松市佐々木アサバタケ遺跡にも酷似するものが見られる。⁹⁾それによると本例は擬凹線を有する有段口縁を持つものであり頸部に2孔1対の貫通孔を持つ。3号住居から出土した口縁部片（第14図38）は胎土、色調ともに本例に共通しており同一個体と思われる。またS字状をなすスタンプ文は栃木分類D類（栃木1987）に属し、その分布は中国から北陸西部の福井県を中心に日本海に沿って新潟県にまで達している。

高坏型土器 出土量が少なく抽出し得ないがB2類に属する小片が認められる。

器台型土器 20・28を抽出する。28は類例は管見にないが西念・南新保遺跡に見られる大型器台が類似として考えられる。端部が上方に屈曲し筒胴部の径が締まった本例はそれに後続するものであろう。

鉢型土器 30・31を抽出する。スタンプ文で加飾、赤彩された30は壺29とともに当住居の祭式を司るものである。スタンプは陰刻渦文でありその分布は山陰地方および北陸西部に見られる。⁶⁾ 鉢型土器にスタンプを施す例はあまり知られておらず、県内では小松市高堂遺跡に見られる⁹⁾とのことであるが報告されたものについては未確認である。

11号住居(第43・44図)

甕型土器 5・6・8・9・11を抽出する。5・6はA2類に属するものであり6は擬凹線を施した後上半部をナデ消している。8・9はD1類としたが口縁部の伸長が著しい。同様な時期相を持つ土器群および後続する土器群の中にはD1類の典型と思われるものが確認されておらず、本例はD1類の最終的な形態であり以後B類に同化していくものと考えられる。

その他 甕型土器以外は出土量が少なく小片が多いためここではそれらを包括して述べる。壺型土器はD2類とした15を抽出する。高坏型土器、器台型土器は抽出できるものが見られないが、前者にはB2類、D類の小片が見られる。鉢型土器は18・20を抽出する。D類としたこれらは19や国分高井山遺跡第4号土壇出土品からの発展形であり体部の変化はB1類などと同様の動きを示すものと思われる。

12号住居(第47図)

出土量が少なく抽出し得るものがない。したがってここではその様相を概観するにとどめる。甕は有段口縁擬凹線系がA1類で占められA2類は確認されない。その他C類、D類、E類が見られる。壺は実測し得たものは8の無頸壺1点のみである。高坏はB2類が1点、鉢は浅い椀形の12とC類の13が見られる。13は完形品であるが上層からの出土である。類例は塚崎遺跡第21号竪穴や額谷ドウシダ遺跡円形周溝状遺構に見られる。

13号住居(第49・50図)

甕型土器 2～5・7を抽出する。A1類とした2は上半の擬凹線をナデ消しており胴部も長胴ぎみである。3は外反度が弱く指頭圧痕も2段にわたって確認される。4はA2類、5・7はB類に属する。

その他 甕型土器以外を包括する。8・9・11を抽出する。高坏、器台は見られない。

14号住居（第52～55図）

甕型土器 1～9・13・14を抽出する。ほとんどがA2類、A3類で占められ1のような古相を持つものも僅かに見られる。A4類とした3は7号住居（第30図2）よりも内面がより直線的になり屈曲点も下がる。口縁部にまでハケ調整を施す13の類例は管見にない。14は塚崎遺跡第6号竪穴に似るが内面の調整は塚崎例がヘラ削りである。

壺型土器 17・18・20・21・27を抽出する。17は鹿首モリガフチ遺跡第7・8号竪穴住居跡に類例が見られる。21は該期に通有のものである。27は御経塚ツカダ遺跡81-2Hや塚越1号墳などに見られるような有段口縁をなす口縁部を持つものと思われる。体高が高く底部に直線的につながる本例は若干先行するものであろう。

器台型土器 結合器台33を抽出する。5号住居（第25図46）よりも端部は伸長しているが、涙状透かしの数は多いが幅広のプロポーションはこの種では古相を持つものである（宮本1986）。⁹⁰

鉢型土器 28～30・32を抽出する。29・30は該期に一般的なものである。E2類とした32は底部が角張るものとして近岡遺跡大溝下層出土土器が、しっかりした底部を作り出したものとして御経塚ツカダ遺跡80-4H出土土器があげられるが類例としてはあまり見られない。

16号住居（第57図）

出土数が少なく良好なものは抽出できないためここではその様相の概観にとどめる。甕型土器は有段口縁擬凹線系がA1類のみ見られる。その他口縁部断面が三角状を呈するE2類が1点みられる。壺型土器はA類系が少量見られ小型土器10は口縁部に凹線を持たない例として近岡ナカシマ遺跡2号溝下層出土土器があげられる。

4. 押野タチナカ遺跡における時期区分について

ここではこれまで抽出された土器（群）の様相のまとめとして、それらをもとに当遺跡の時期的な流れを3期に区分する。具体的にはタチナカI期を1・3・10・12・16号住居で、同II期を2・4・11・13号住居で、同III期を5・7・14号住居で形成し補鎮的に26号土壙をI期に、53号土壙をII期に、69・87号土壙をIII期にそれぞれ含める。表-2はこれらI～III期内での各器種各々の消長を表したものである。それによると

I期・・・V様式前半からの系譜で考えられるもの（甕A1・C・E類、壺A・B類、高坏A2・B類など）と新たに出現するもの（壺H類、高坏A1類など）からなる段階。

II期・・・I期から引き続き見られるものと次のIII期に続く発展・派生型式からなる過渡的な段階。

III期・・・甕C類などの一部を除いてII期に見られる発展・派生型式と新たに出現したものからなる段階。この段階にはI期に見られた主要なもの（壺A類、高坏B類など）

はほとんど姿を消す。

に要約できる。⁴³系譜的に見て欠落していると思われるものも若干あるが、その主要な時期は北加賀ではそれぞれⅠ期が法仏式に、Ⅱ期が月影Ⅰ式に、Ⅲ期が月影Ⅱ式に比定されると思われる。この内Ⅰ期はより古相を呈する1号住居の大型甕（第6図1）の存在や、前述のごとく高坏に見られる形態差などから1号住居および26号土壇を古相に、それ以外を新相に細分できる可能性を残す。また法仏式で一般的なこと（栃木1987）⁴⁴とされる出現・派生型式を基本的に含まない前者の様相は二口六丁遺跡第4次調査1号溝でも確認できる。二口六丁例は溝資料であり、当1号住居も組成上十分な資料が得られているとは言えないが、将来的に法仏式の細分に関わる一要素となり得るかどうかは他遺跡を含めた検討を為し得なかったため現状ではわからない。また祭式土器についてはともにスタンプ文や赤彩などで装飾性に富むが、大型高坏や台付無頸壺といった高脚器種でなる3号住居と、鉢や有段口縁壺といった低い器形のものでなる10号住居といった対比がみられる。このことが即どういうことなのかはわからないが抽出したものに限って言えば能登・越中系を含む広義の北陸型土器組成をもつ前者と、有段口縁に擬凹線を持つものをほとんど含まない後者とに識別できるようにも思える。前述のような理由により甕型土器の数量比を明確に把握しているとは言えない状況から、ここではその可能性の指摘のみにとどめる。Ⅱ期については現在筆者自身が月影Ⅰ式について十分な定見を持っていないため手にあまるものがある。谷内尾氏によって月影Ⅰ式の標式土器とされた辰口町高座遺跡に見られる一群の土器は当遺跡では確認されておらず、筆者の不勉強に加えて南加賀という小地域差および変化の漸移性ということを考慮しても未だ月影Ⅰ式の具体的な姿は不明確な点が多いように思われる。Ⅲ期については付近に御経塚ツカダ遺跡という良好な比較資料が存在する。80-7H等月影Ⅰ式に上がるものを除けば概ね月影Ⅱ式の範疇におさまるものであるが、その中でもツカダに一般的に見られる高坏D類（タチナカ分類）や結合器台などに見られる形態差はタチナカⅢ期に見られるものよりも新相を持つものである。住居の切り合い関係（80-2Hと80-3H）からその中にも新古関係があると思われ、一部タチナカⅢ期と並行しながらも80-3Hに代表されるような器台および中（小）型丸底の有段口縁広口壺が欠落した段階は、時期差を持ってタチナカⅢ期に続くものと思われる。そうした場合タチナカⅢ期の位置付けにも流動性を帯びる可能性があるが、ここでは月影Ⅱ式内の細分視点のひとつとしてとらえておきたい。

5. 各期における住居の推移

押野タチナカ遺跡では集落跡としての遺跡全範囲を調査できた訳ではないが、検出された住居跡および掘立柱建物などの配置からその中核をなす部分をほぼ明らかにすることができたものと考えている。それによると、遺跡を構成する住居は大きく分けて次の3タイプに分類できる。

1. 大型住居 主柱穴の数は6～9本を数え、床面積は98㎡前後を標準とするもの。平面プランは円形を呈すると思われる。（1・4・5号住居）
2. 中型住居 主柱穴の数は4本で、床面積は16㎡前後のもの（2・7号住居）、12㎡前後のもの（3・10・11号住居）、6.5㎡のもの（12号住居）の3タイプが認められる。

平面プランは隅丸方形である。

3. 小型住居 主柱穴は2本もしくは明確な形では検出されていないものがある。床面積は3㎡前後を標準とし、平面プランは隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するもの。
(13・14・16号住居)

これらを前述の出土土器より区分した3期に照らしたものが第～図である。それによるとタチナカⅠ期は大型住居1棟、中型住居3(2)棟、小型住居1棟で、同Ⅱ期は大型住居1棟、中型住居2棟、小型住居1棟で、同Ⅲ期は大型住居1棟、中型住居1棟、小型住居1棟でそれぞれ構成されていることがわかる。このことは麻柄氏の分析された「富山平野以西で普遍的にみられ、安定した住居群の構造」(麻柄1986)とも合致し、当該期の集落構造を明らかにし得た点で意義の高いものとする。またいわゆる特殊ピットについてであるが、当遺跡ではそれらしきものがⅠ期より普遍的に検出されているが、方形2段掘りの定形化したものが見られるのはタチナカⅢ期の7号住居の段階になってからである。次にこれらに付随すると思われる掘立柱建物群であるが、総数で8棟の掘立柱建物(内2棟は布掘り式)が検出されている。しかしながら出土した遺物のごく僅かであり、時期的な検証をおこなえるものは1号掘立柱建物と2号掘立柱建物(ともに布掘り式)の2棟のみである。それによると前者はタチナカⅠ期に、後者はタチナカⅢ期にそれぞれ帰属するものと思われ、布掘り式の掘立柱建物はⅠ期～Ⅲ期を通じて普遍的に構築されたものと考えられるのが自然であろう。他の6棟の布掘り部を持たないものとの関係はここでは明らかにし得ないが、ひとつの時期を構成する構築物の単位は前述の住居群に加えて掘立柱建物が1～2棟ほどで構成されていたものと考えられる。また1986～88年にかけて調査された御経塚シンデン遺跡では約20棟にのぼる布掘り式の掘立柱建物が検出されている。現在整理中の段階であるが掘り方によっていくつかのパターンに分類できる可能性を持っており、出土遺物や切り合い関係からその時期的変遷を追える見通しを抱いている。今後の整理の進展とともに検討を加えていきたい。

6. おわりに

本書は筆者が担当した最初の報告書らしい報告書であり、不勉強および不慣れから当初予定していた体裁とはかなり異なるものとなってしまった。その結果良好な資料としての大方の御期待に沿うような活用ができなかったことが悔やまれる。また他遺跡との比較検討は類例の抽出のみにとどまり組成としての検討はまったくなされておらず、特に今回薨D類として分類した無文有段口縁系の妥当性など今後大きな課題を残す結果となった。これらはひとえに筆者の怠慢に起因するものであり今後の糧とすることで御容赦願いたい。

最後に本稿を記すにあたり当町職員はもとより石川県立埋蔵文化財センター職員の田嶋明人、湯尻修平、栃木英道、藤田邦夫、垣内光次郎、北野博司の各氏、金沢市教育委員会文化課の増山仁、楠正勝の各氏、松任市教育委員会社会教育課の木田清氏、高松町教育委員会社会教育課の折戸靖幸氏に御教示、御指導を受けた。また実測を担当した川端敦子氏には口径もままならないような小片を多数無理に実測していただいた。記して謝意を表するとともに御叱正をお願いするものである。

《註》

- (1). 1986年9月 “シンポジウム「月影式」土器について” 各氏の発表要旨による。
- (2). 谷内尾晋司 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会 1983 谷内尾氏によればD類は法仏B群段階で消滅するとされる。
- (3). 調査担当の松任市教育委員会木田 清氏の御教示による。氏の御好意により実見を得ている。
- (4). 栃木英道 「器台形土器の形態の変遷について」『北陸の考古学』石川考古学研究会 1983
- (5). 田嶋明人 「Ⅳ 考察 - 漆町遺跡出土土器の編年的考察-」『漆町遺跡 I』石川県立埋蔵文化財センター 1986
- (6). 石川県立埋蔵文化財センター栃木英道氏の御教示による。
- (7). 石川県立埋蔵文化財センター垣内光次郎氏の御教示による。氏の御好意により実測図の実見を得ている。
- (8). 栃木英道 「第3節 スタンプ文について」『吉竹遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1987
- (9). (8)に同じ。
- (10). 宮本哲郎「装飾器台等の展開—これまでの検討から—」 文献註(1)に同じ
- (11). これらの要素が該期のすべてにあてはまるとは考えていない。例えばタチナカⅡ期の様相などはそのまま栃木氏の言われる法仏式概念にあてはまるものであるが、それはⅢ期において新たに出現するとしたもの(高坏D・E類など)が、当遺跡においてⅡ期にさかのぼるものとして明確には確認されていないことに起因するものであり、器形の完成度および他遺跡との照合からその成立はⅡ期(器種によっては一部Ⅰ期も含む)に求めることが依然として妥当視されるからである。
- (12). 栃木英道「第2節「月影式」土器をめぐる編年的な問題について」『吉竹遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1987

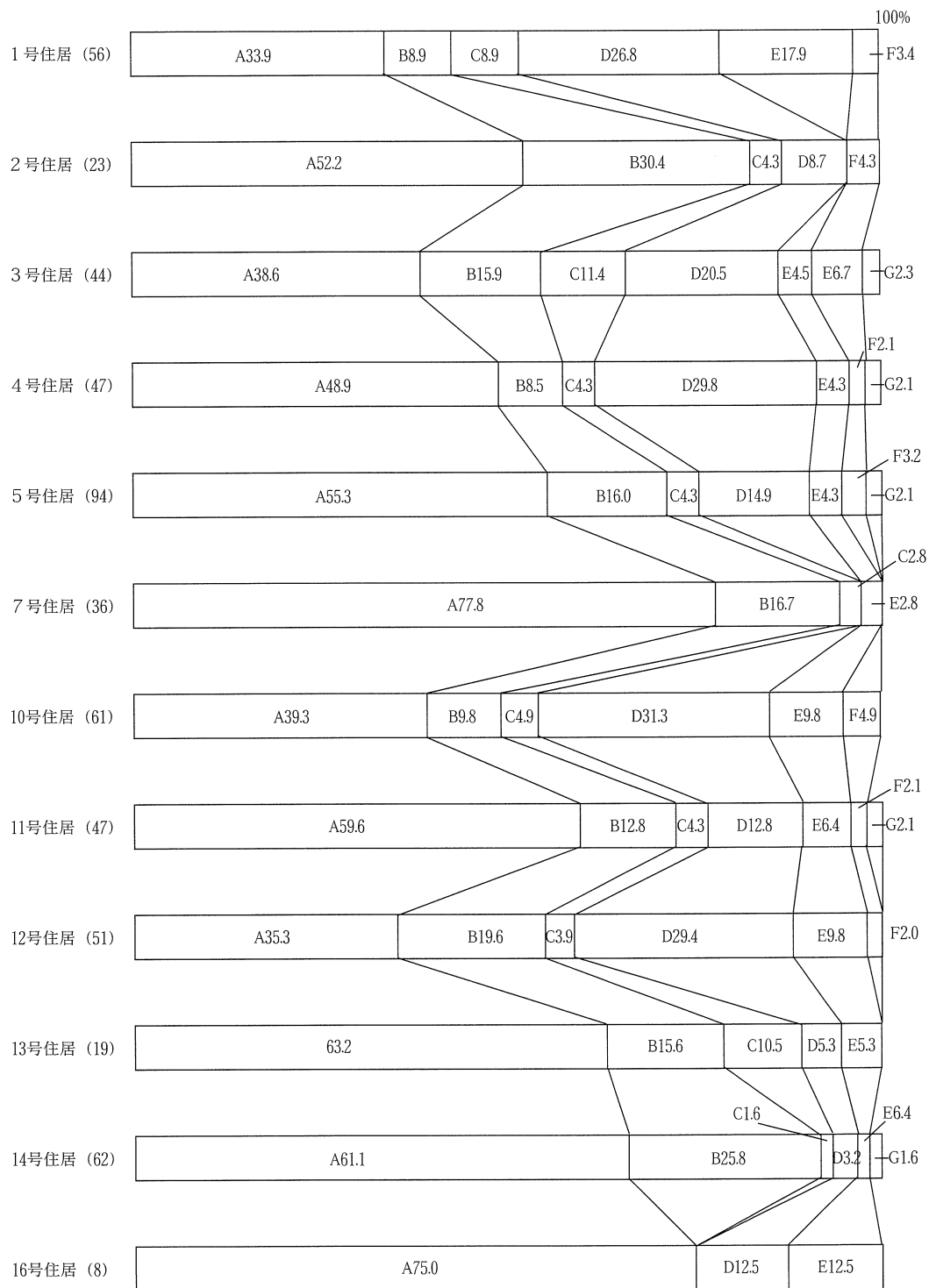
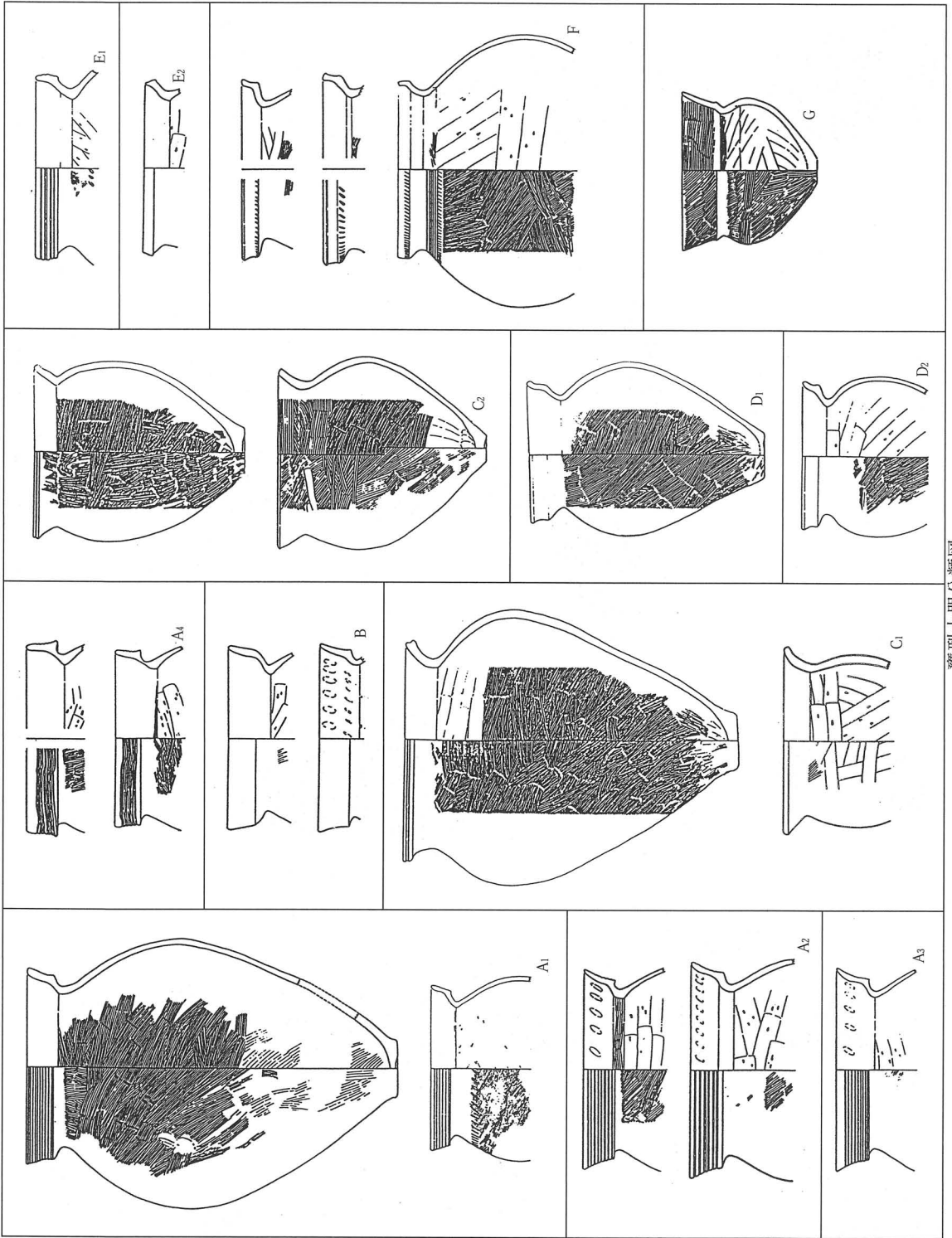
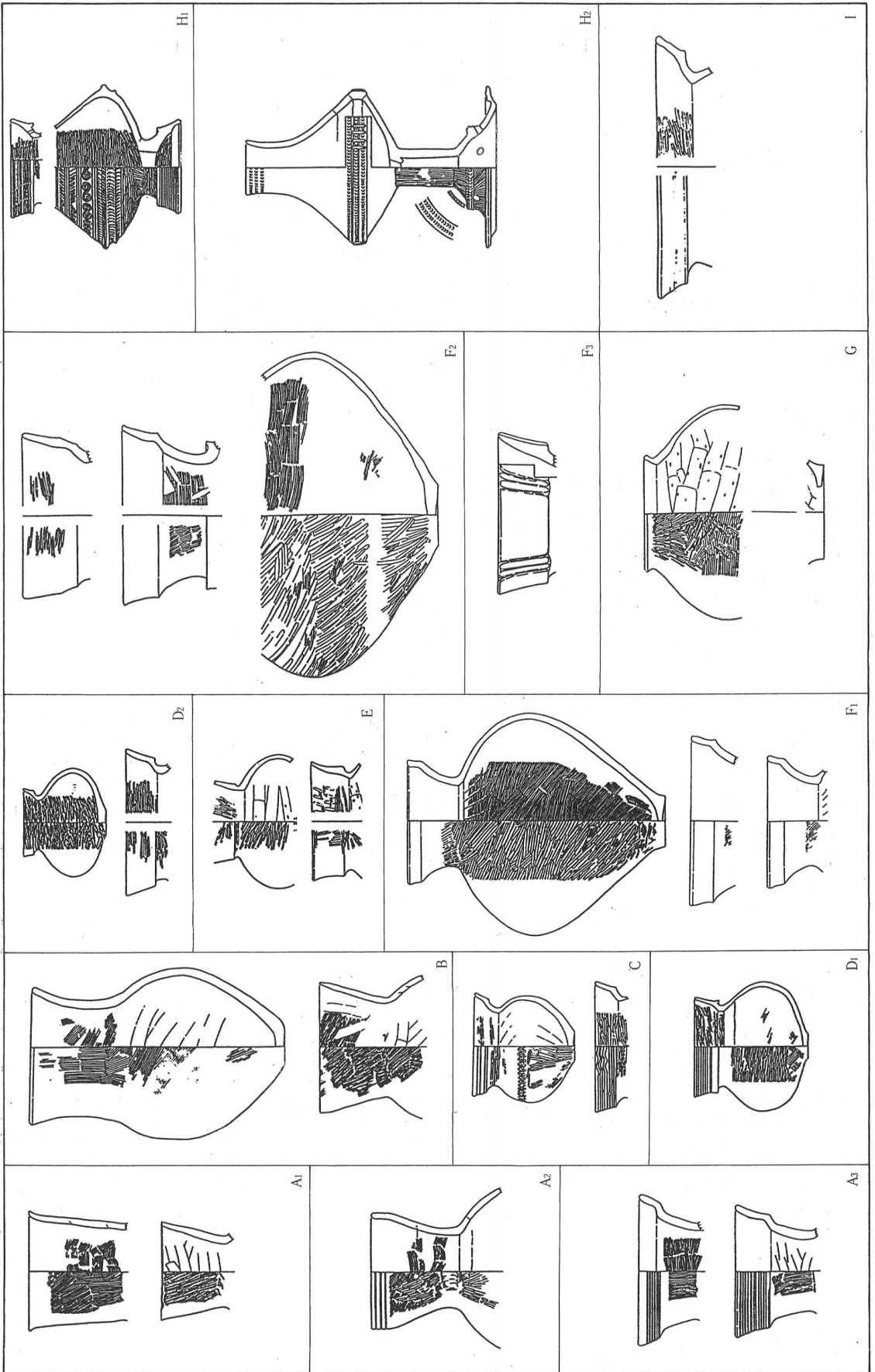
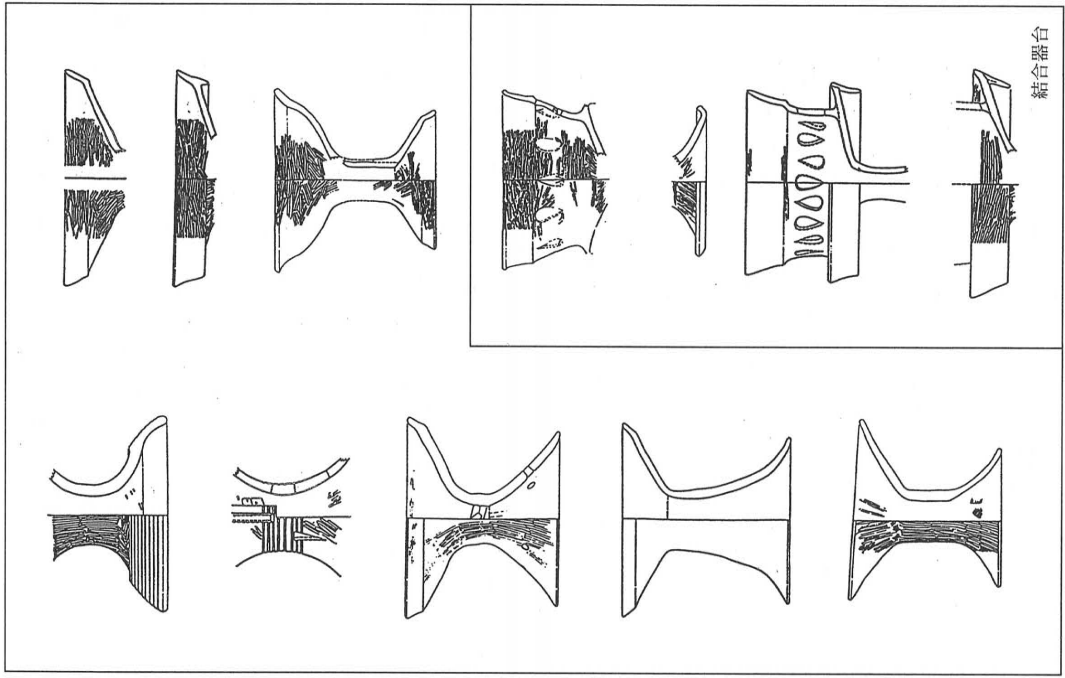


表-1 甕型土器類別数量比 (%)

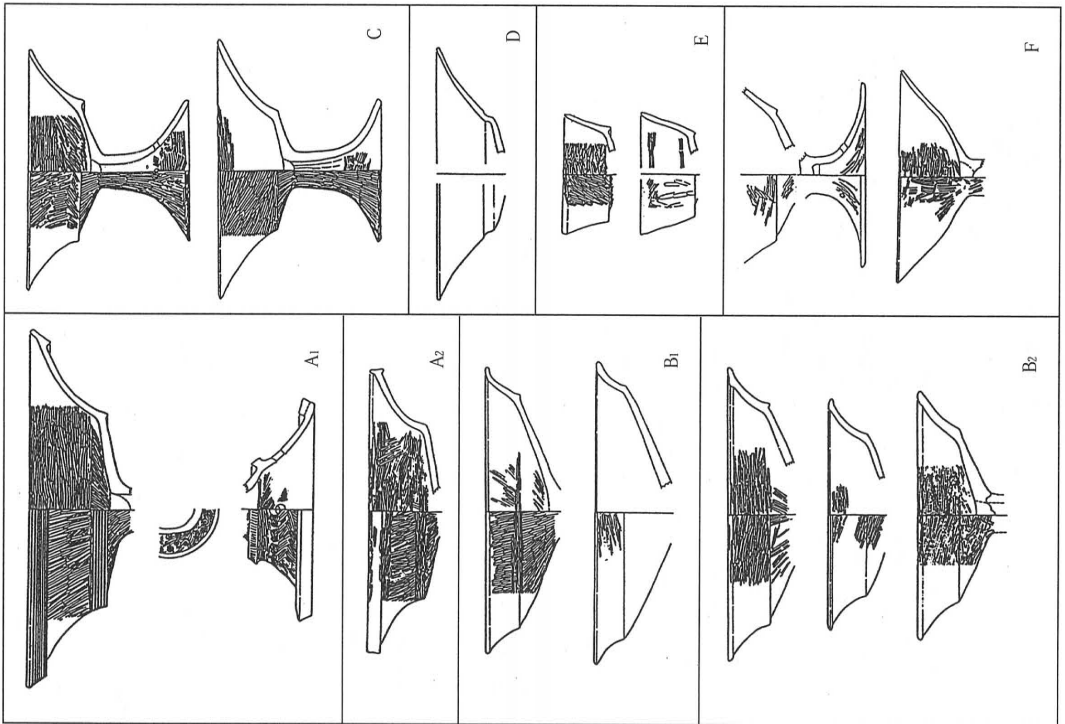


甕型土器分類図

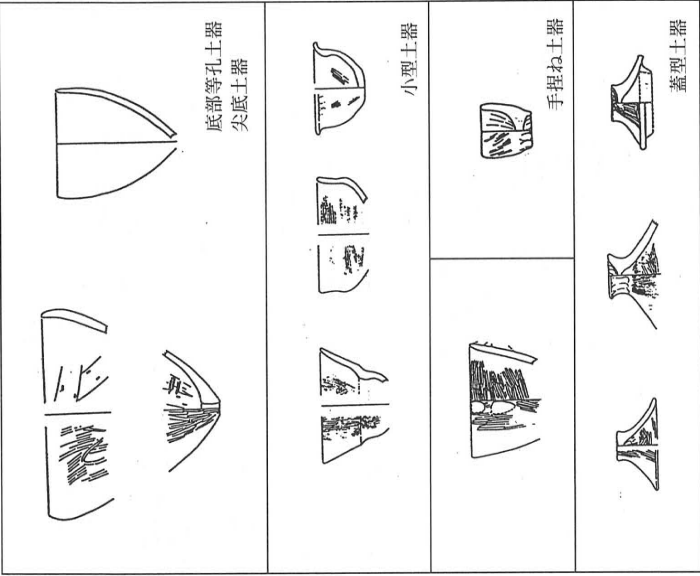
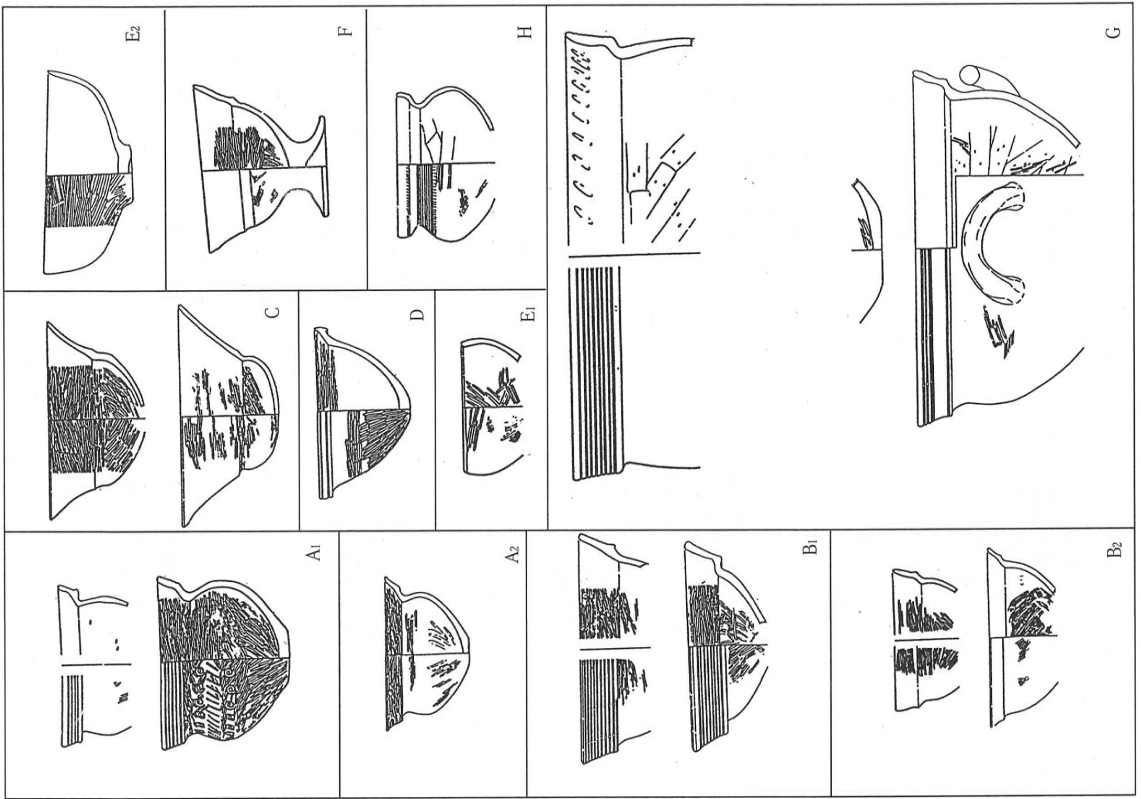




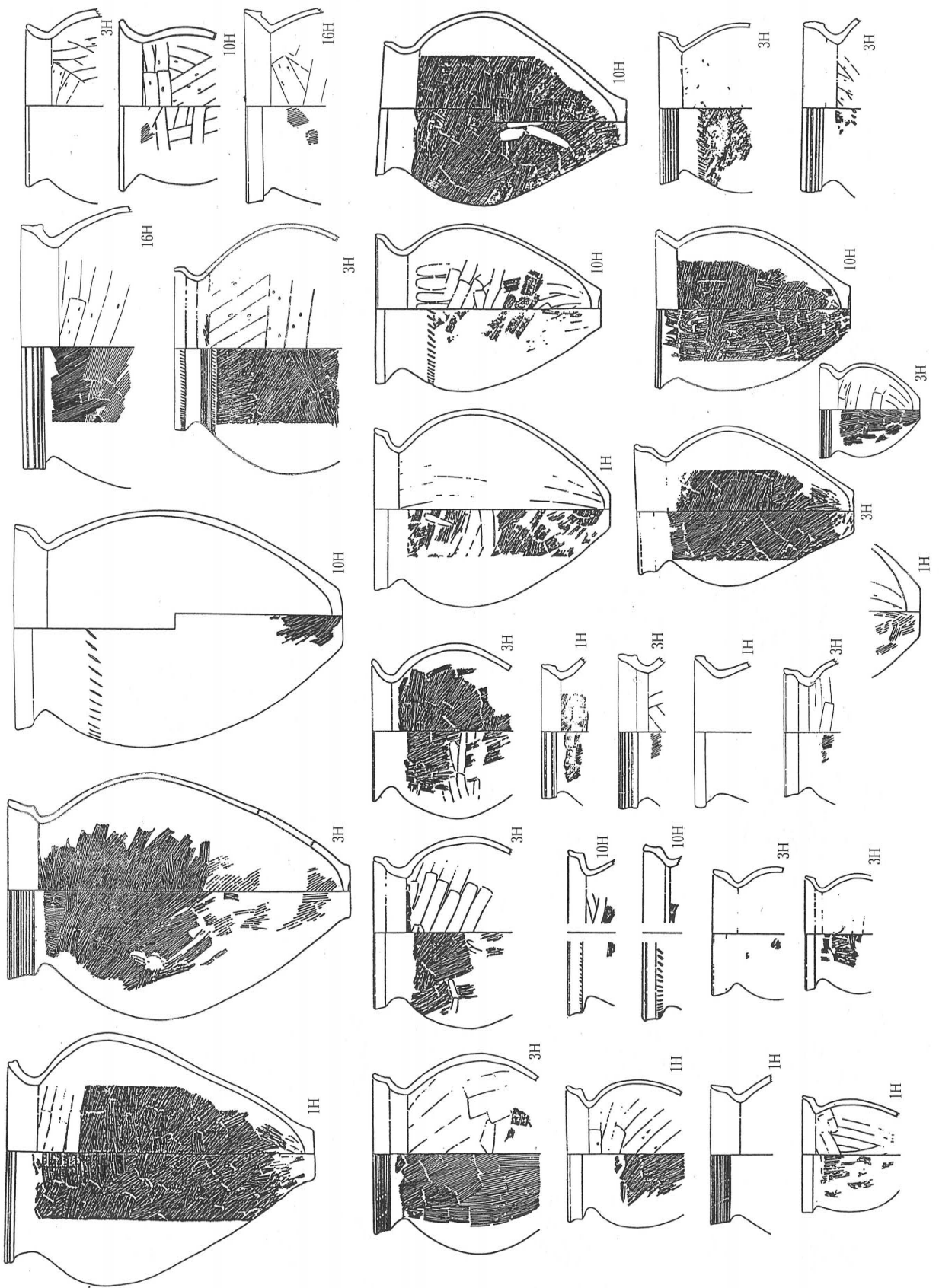
器台土器分類図



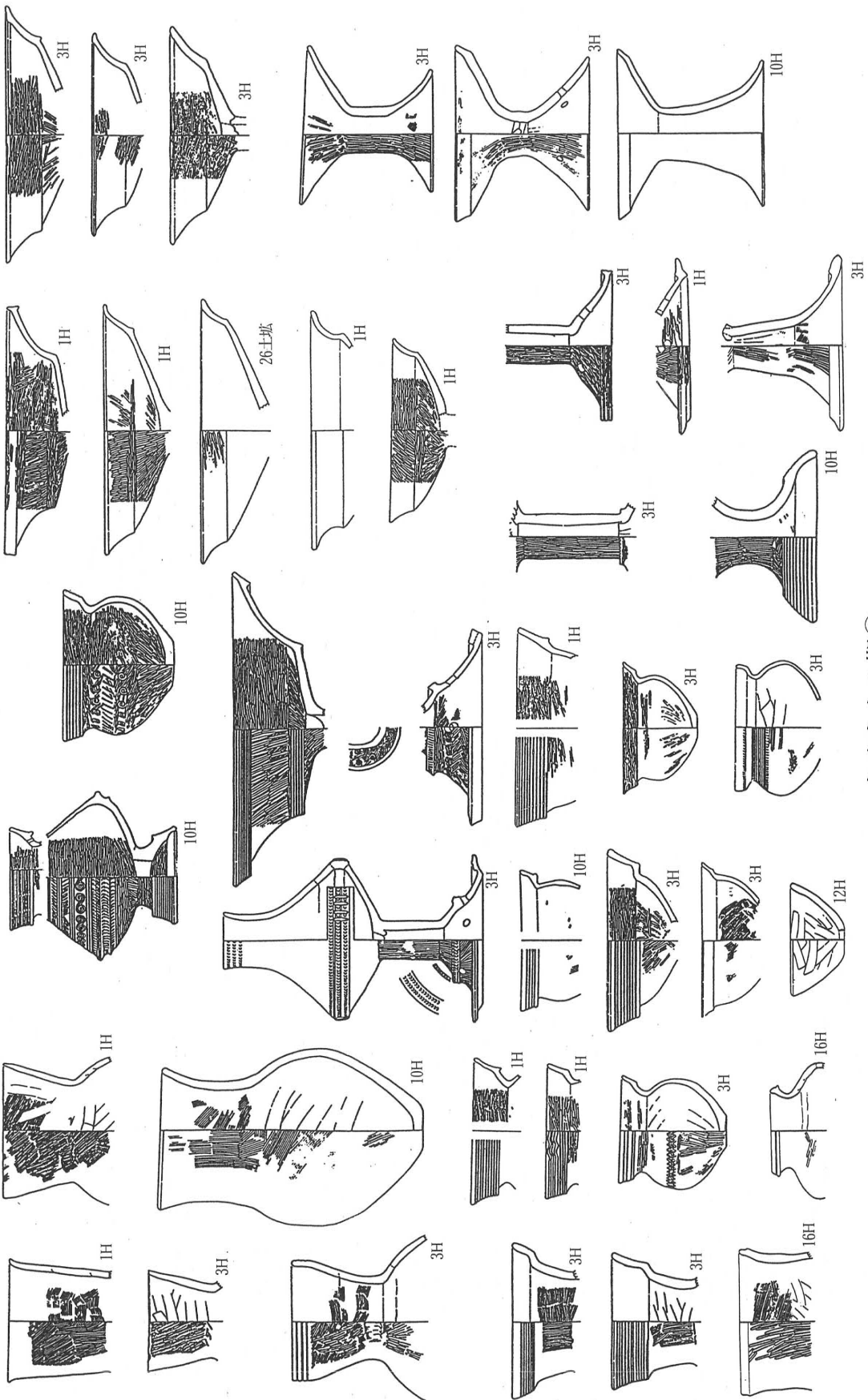
高坏型土器分類図



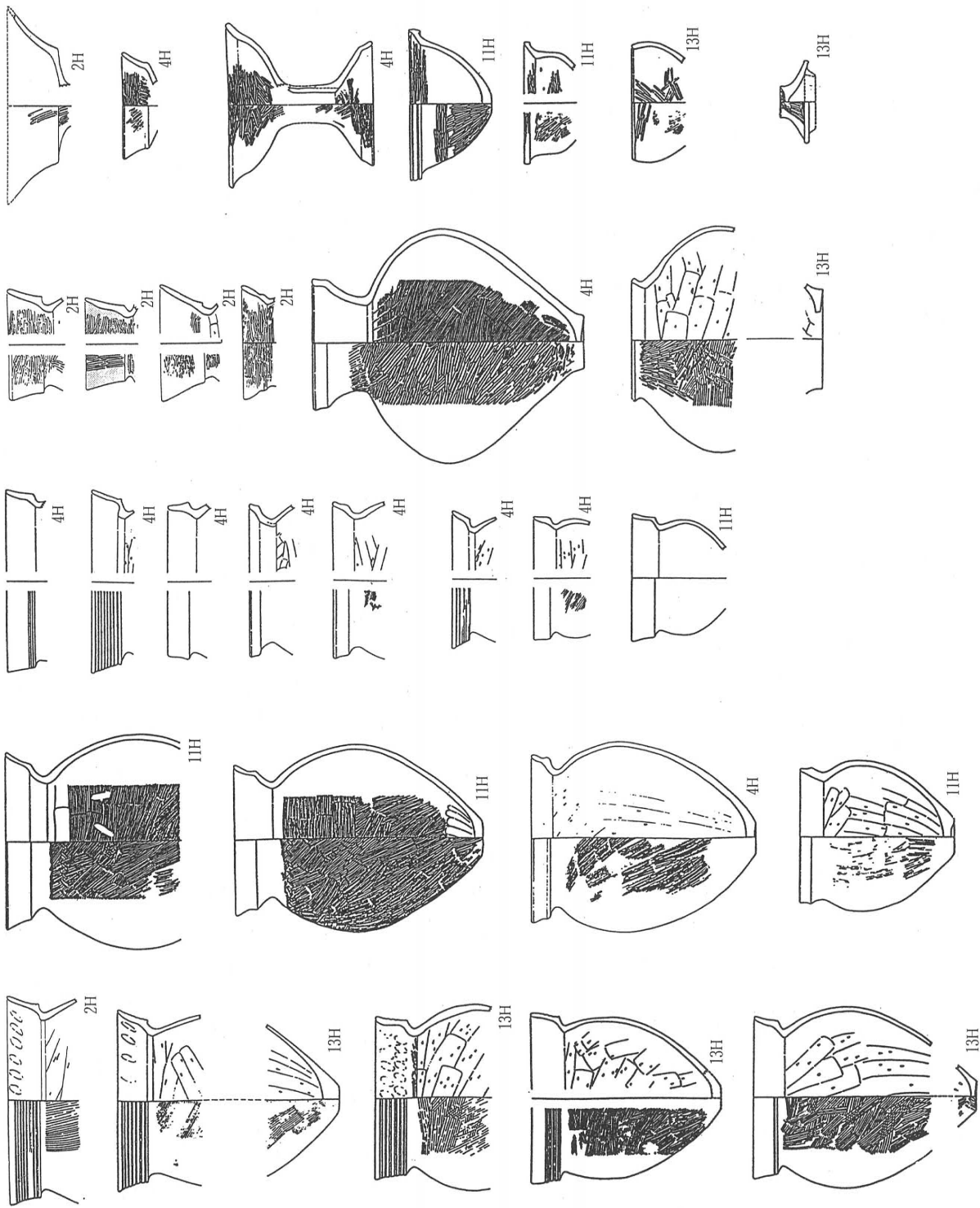
その他の土器分類図



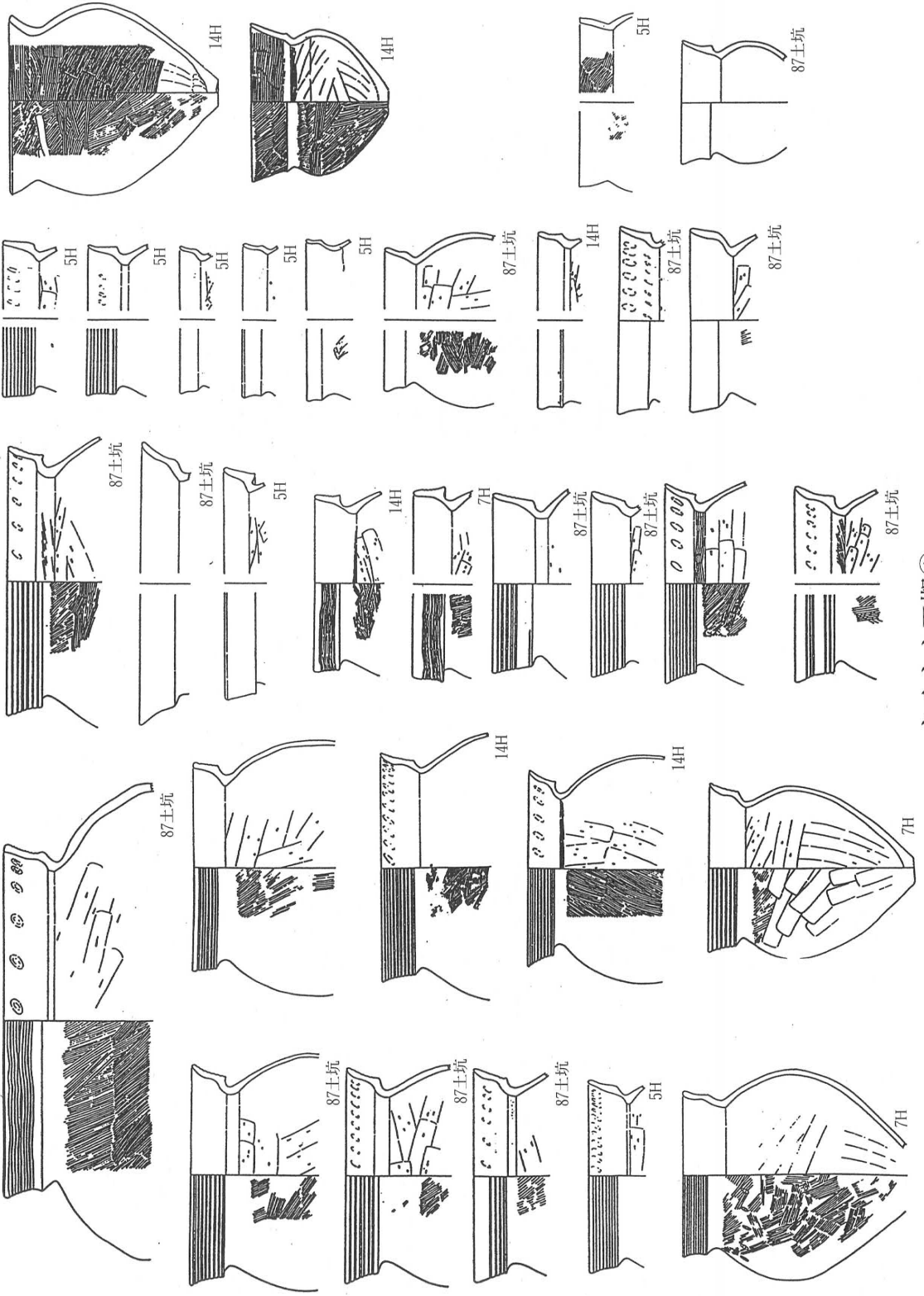
タチナカ I 期①

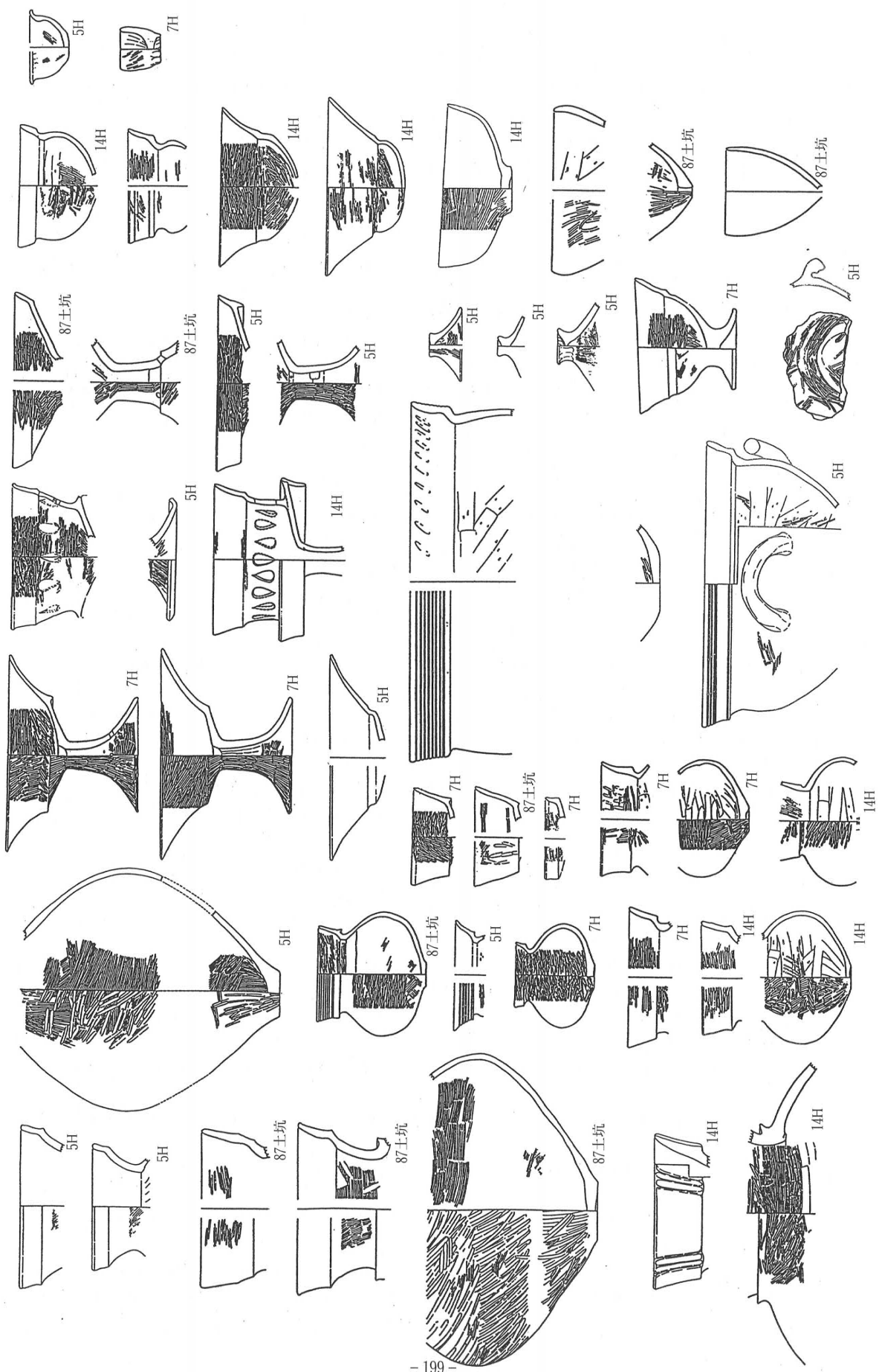


タチナカ I 期②



夕子ナカⅢ期①

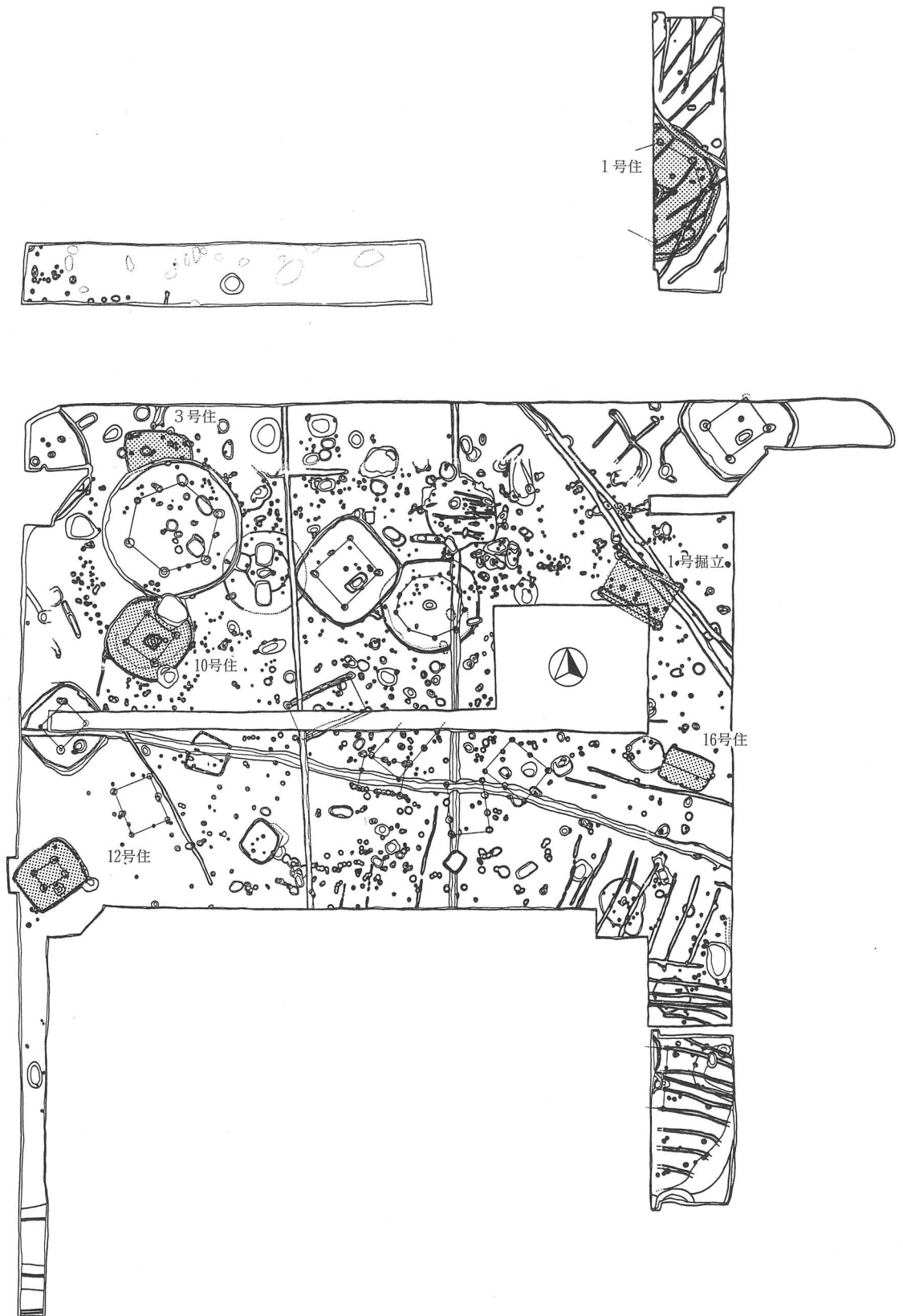




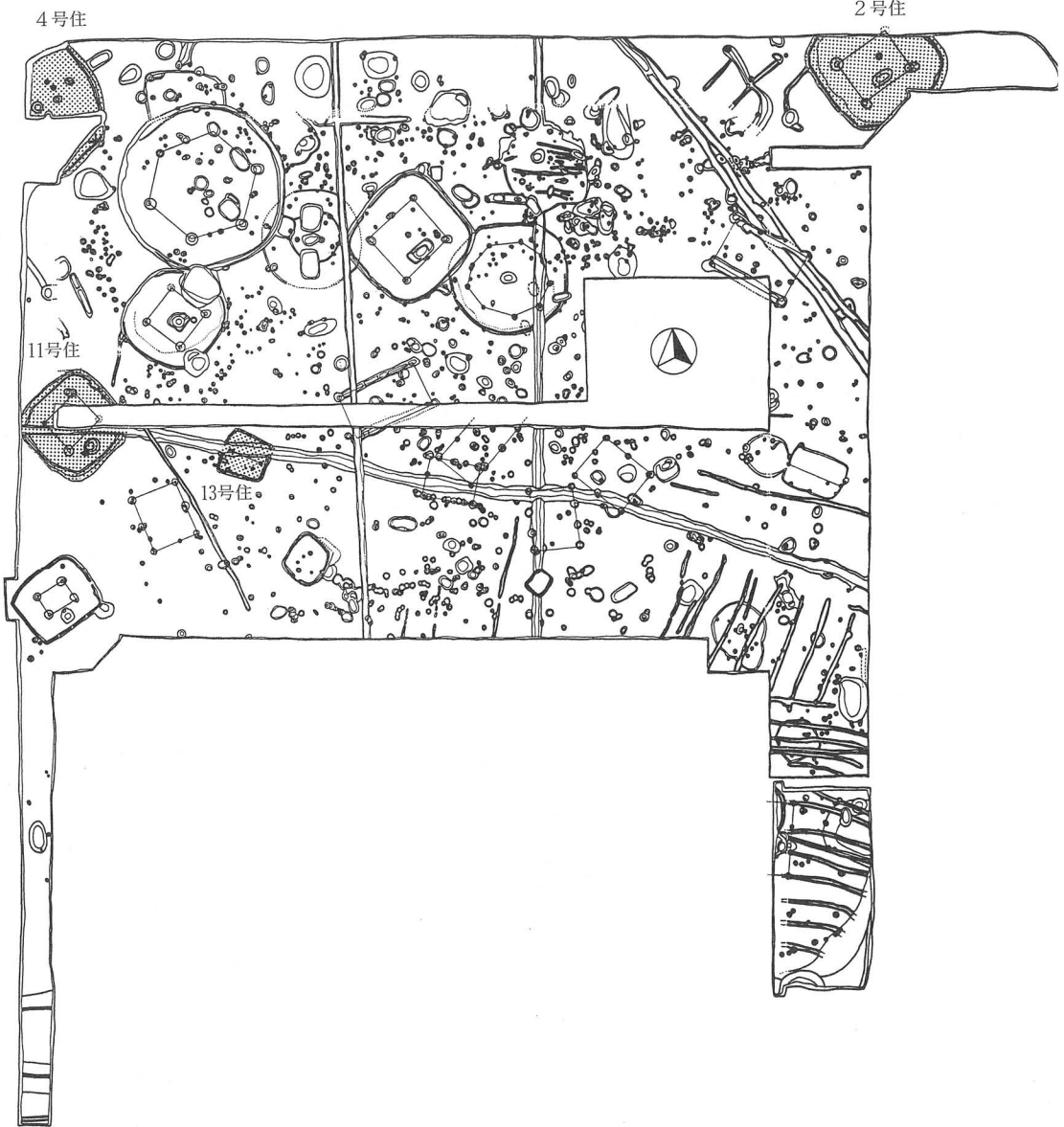
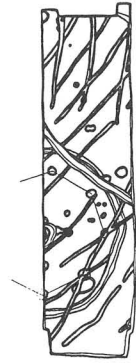
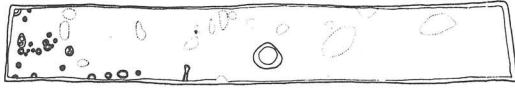
タチナカⅢ期②

甕	I 期	II 期	III 期		I 期	II 期	III 期
A ₁ 類				F ₃			
A ₂	-----			G			
A ₃				H ₁			
A ₄				H ₂			
B	-----			高坪			
C ₁		-----		A ₁ 類			
C ₂		-----		A ₂			
D ₁			-----	B ₁			
D ₂			-----	B ₂			
E ₁		-----		C			
E ₂			-----	D		-----	
F		-----		E		-----	
壺				鉢			
A ₁ 類				A ₁		-----	
A ₂				A ₂		-----	
A ₃				B ₁		-----	
B		-----		B ₂		-----	
C		-----		C		-----	
D ₁		-----		D	-----		
D ₂	-----			E ₁			
E				E ₂		-----	
F ₁				F		-----	
F ₂			-----	G	-----		

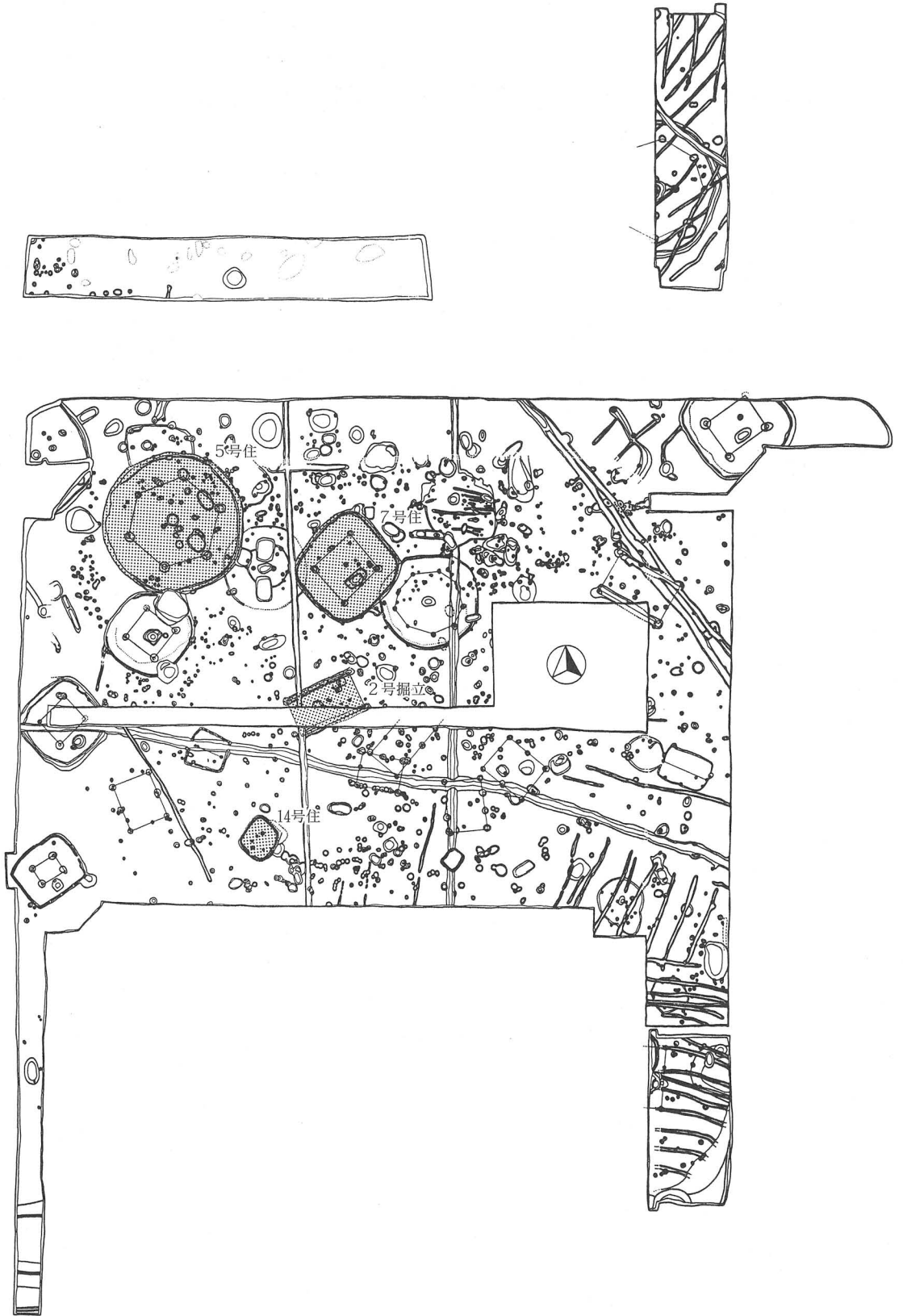
表-2 各器種推移表



第161図 タチナカ I 期



第162図 タチナカⅡ期



第163図 タチナカⅢ期

第6節 館野小学校建設に伴う調査（第4次調査）

1 遺構と遺物

遺跡の北西部にあたる運動場擁壁部分の調査区は、巾約2mで長さは東西55m、南北108mの逆L字型となった。この調査において押野タチナカ遺跡の北側及び西側の範囲を確認したものと考えている。幅の狭いトレンチ状の調査区のため、遺構はいずれも部分検出となった。弥生時代後期では、竪穴住居4棟、土坑4基、溝が主要遺構である。押野館跡に関係する中世期の遺構も確認し、土坑2基と堀跡と推定する遺構を検出した。このなかで6号土坑からは土師質土器が集中して出土している。遺構の分布は第164図主要遺構位置図を参照していただきたい。東西調査区の西側端部において自然河道跡を検出している。小学校校舎建設予定地の事前調査でも北流する河道跡を確認しており、同じ河道であろう。また小字名として「法鎮川」（ホウチンガワ）の呼称が残っている。

調査区の逆L字状屈曲部に原点を設け、東西にX軸、南北をY軸とした。単位は1mである。遺構の位置について東西区はX、南北区はYによって説明したい。遺構の数量は少ないため一括して報告する。土器については遺物観察表を参照願いたい。

18号住居（第166図・第170図1～4）

調査区屈曲部に位置する。平面形は隅丸長方形と推定する。竪穴の深さ40～45cmを測る。北側壁には深さ6cmの壁溝を有する。一部には貼床が残る。床面の標高は13.95～14.0mである。遺構の時期は出土土器から法仏Ⅱ式、タチナカⅠ期の所産であろう。

19号住居（第167図・第170図5～18）

南北調査区7Yに位置する。平面形は隅丸長方形と推定する。検出形状から南側は隅に近い部分であり、短辺は3.5mほどか。竪穴の深さは10～15cmと浅い。全周すると考えられる壁溝の深さは5～7cmである。北東の隅丸部には土器の混在する礫群がみられる。床面の標高は14.25mである。遺構の時期は出土土器から月影Ⅰ式、タチナカⅡ期の所産であろう。

20号住居（第166図・第171図19～23）

東西調査区12Xに位置する。平面形は円形か。検出した部分で長さ8.7mを測る。竪穴の深さは10～15cmと浅い。東側の壁溝の深さ7cmを測る。東側の一部には貼床が残る。床面の標高は14.45～14.50mである。遺構の時期は法仏Ⅱ式、タチナカⅠ期の所産であろう。

21号住居（第165図）

東西調査区26Xに位置する。平面形は隅丸長方形と推定する。竪穴の深さ3cm前後と浅い。壁溝を有し、深さ7～11cmを測る。主軸は北65度西であろう。床面の標高は14.6～14.64mである。出土遺物は細片であり実測に耐えがたい。

9号掘立柱建物（第167図）

南北調査区25 Yに位置する。ひとつの桁行の検出にとどまる。桁行3間3.9m、主軸は北2度東である。柱穴間はP1～P2間1.3m、P2～P3間1.2m、P3～P4間1.4mである。柱穴は略円形と推定する。深さは20～22cmである。遺構の時期は、覆土の状況から弥生時代後期と推定する。

89号土坑（第167図・第171図24・25）

南北調査区31.5 Yに位置する。方形の平面形を呈し、1.4×1.35mの規模を測る。深さは50cmである。底部のみの出土であるが形態から法仏Ⅱ式頃のタチナカⅠ期か。

90号土坑（第167図・第171図26～28）

南北調査区32.5 Yに位置する。平面形は楕円形か。長軸約1.0m、深さ61cmを測る。柱穴の可能性も否定できない。遺構上面の包含層中には礫が分布していた。実測図の5は天地逆である。遺構の時期は法仏Ⅱ式頃でタチナカⅠ期であろう。

91号土坑（第168図・第172図29～33）

南北調査区51 Yに位置する。平面形は楕円形か。深さ15cmを測る。実測図の9は天地逆である。遺構の時期は法仏Ⅱ式頃でタチナカⅠ期であろう。

92号土坑（第168図・第182図34～38）

南北調査区52.5 Yに位置する。平面形は楕円形か。深さ22cmを測る。遺構の時期は法仏Ⅱ式頃でタチナカⅠ期であろう。

93号土坑（第168図）

南北調査区75 Yに位置する。平面形は楕円形か。長軸1.8m、推定短軸1.4mである。弥生時代後期の土器底部を図示したが第172図39は混入品であり、土層の状況から中世期に属するものと考えられる。土坑としたが、素掘りの井戸と考えられよう。検出作業は崩土により危険となったため、深さ1.6m付近で断念している。

94号土坑（第166図・第173・174図）

調査区屈曲部に位置し、1号住居と複合する。平面形は楕円形を呈し、短軸1.1m、推定長軸1.7mである。深さは25～30cmである。土師質土器が一括廃棄された土坑であり、大きさ15cmと30～50cmの礫が多く混入する。土師質土器は金沢市普正寺遺跡地山面出土のものに類似し14世紀後半から末頃に位置付けられている（垣内1984）。

60号溝（第168図・第172図40・41）

南北調査区59.5 Yに位置する東西方向の溝である。幅45～60cm、深さ21cmを測る。珠洲焼の甕

と壺の口縁部破片が出土した。珠洲Ⅲ期で14世紀代の所産であろう（吉岡1982）。

堀跡A地点（第168図）

南北調査区65～72 Yに位置する。押野館跡の周囲に廻らされた北面における東西方向の堀跡の一部と推定する。検出部分では上面幅6.9m、堀底幅5.5m、深さ70cmを測る。堀底は平坦であり、標高は13.5mである。土師質土器の細片が出土した。

他に土坑状遺構や溝跡が存在するが、遺物の出土はなかった。平面図、土層断面図を参照していただきたい。

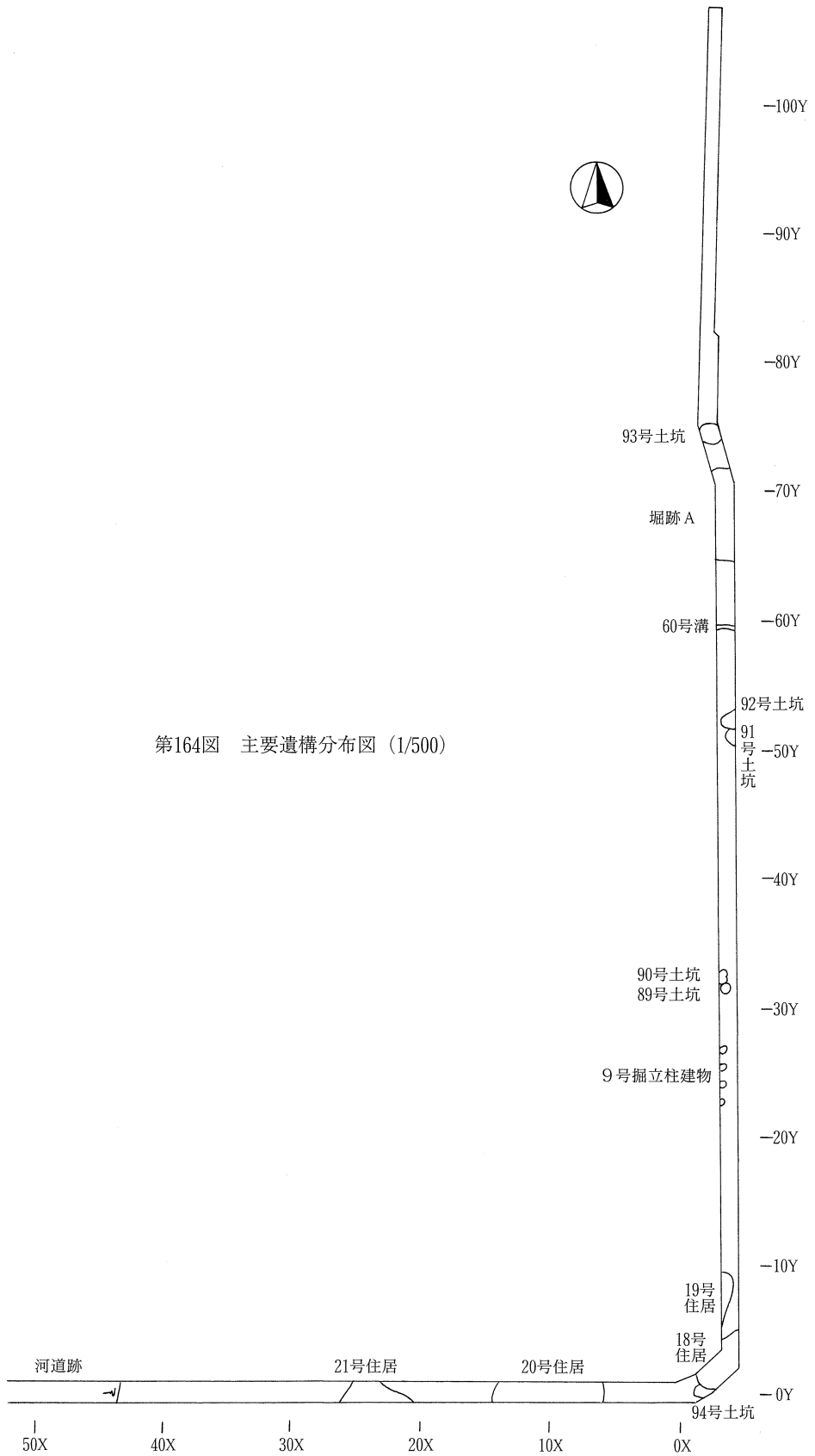
石器（第176図）

撥形の打製石斧が2点出土した。80は長さ13.3cm、幅7.9cm、厚さ2.6cm、重さ323 gである。81は刃部が欠損する。長さ10.9cm、現存最大幅6.8cm、厚さ2.6cm、重さ240 gである。石質はどちらも火山礫凝灰岩である。

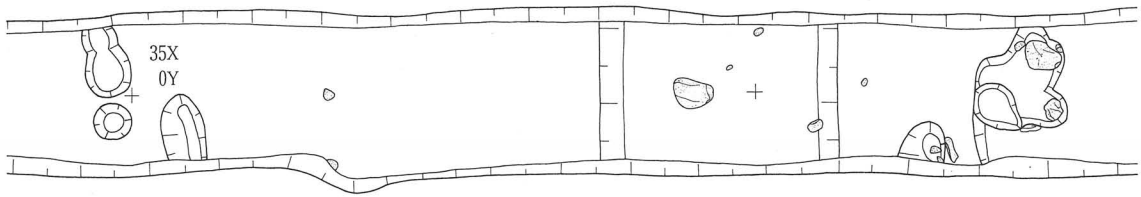
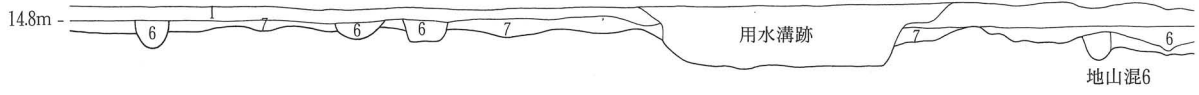
2 小結

本調査区は押野タチナカ遺跡分布範囲の西側にあたる。トレンチ調査であり、検出した遺構の性格については不明な点が残るものである。しかし、弥生時代後期に営まれた竪穴住居4棟と掘立柱建物1棟、土坑4基を確認している。4棟の竪穴住居は約30mの距離内に近接して存在し、18・20号住居のタチナカⅠ期（法仏Ⅱ式）3棟と19号住居のタチナカⅡ期（月影Ⅰ式）1棟により構成される。また、2号住居のから北へ10m離れる1号掘立柱建物は、いずれかの時期の倉庫棟と考えられる。89～92号土坑の時期もタチナカⅠ期（法仏Ⅱ式）に属するもので、本期を主体とする遺構の集中する地区である。92号土坑以北及び4号住居以東の区域では、弥生後期に属する明確な遺構の分布は見られない。集落の北と西の範囲を示唆するものと言えよう。

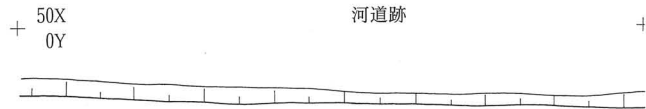
中世期の94号土坑と60号溝は、14世紀後半頃の時期である。押野館跡北面の堀と推定する堀跡Aの南側に位置し、同時期の併存が確実視される館跡に関係する遺構と考えられる。東西調査区で館跡西面の堀跡は確認していない。西面の堀に関しては、第3節での館跡の範囲推定とともに検討を要する課題である。

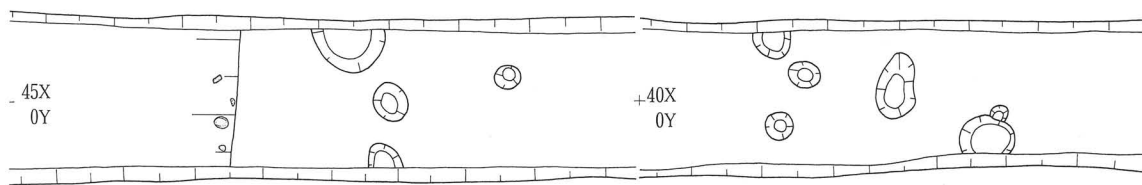
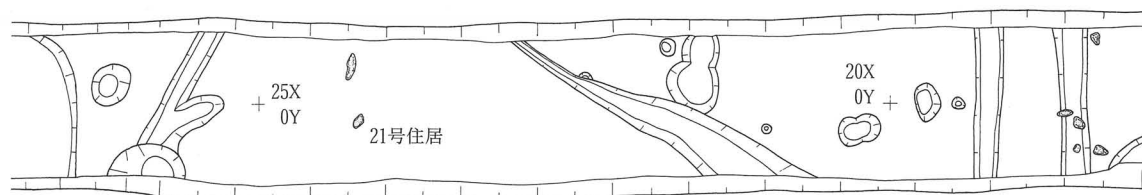
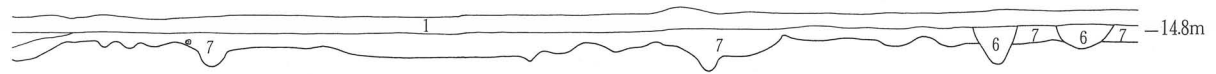


第164图 主要遺構分布图 (1/500)



14

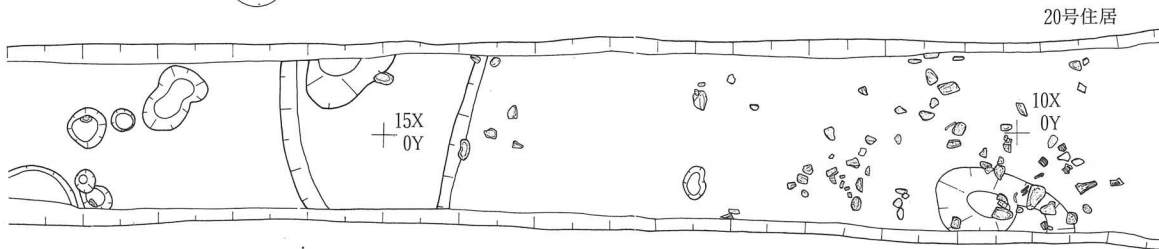
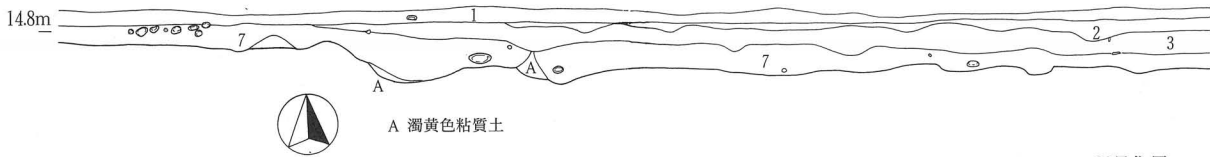


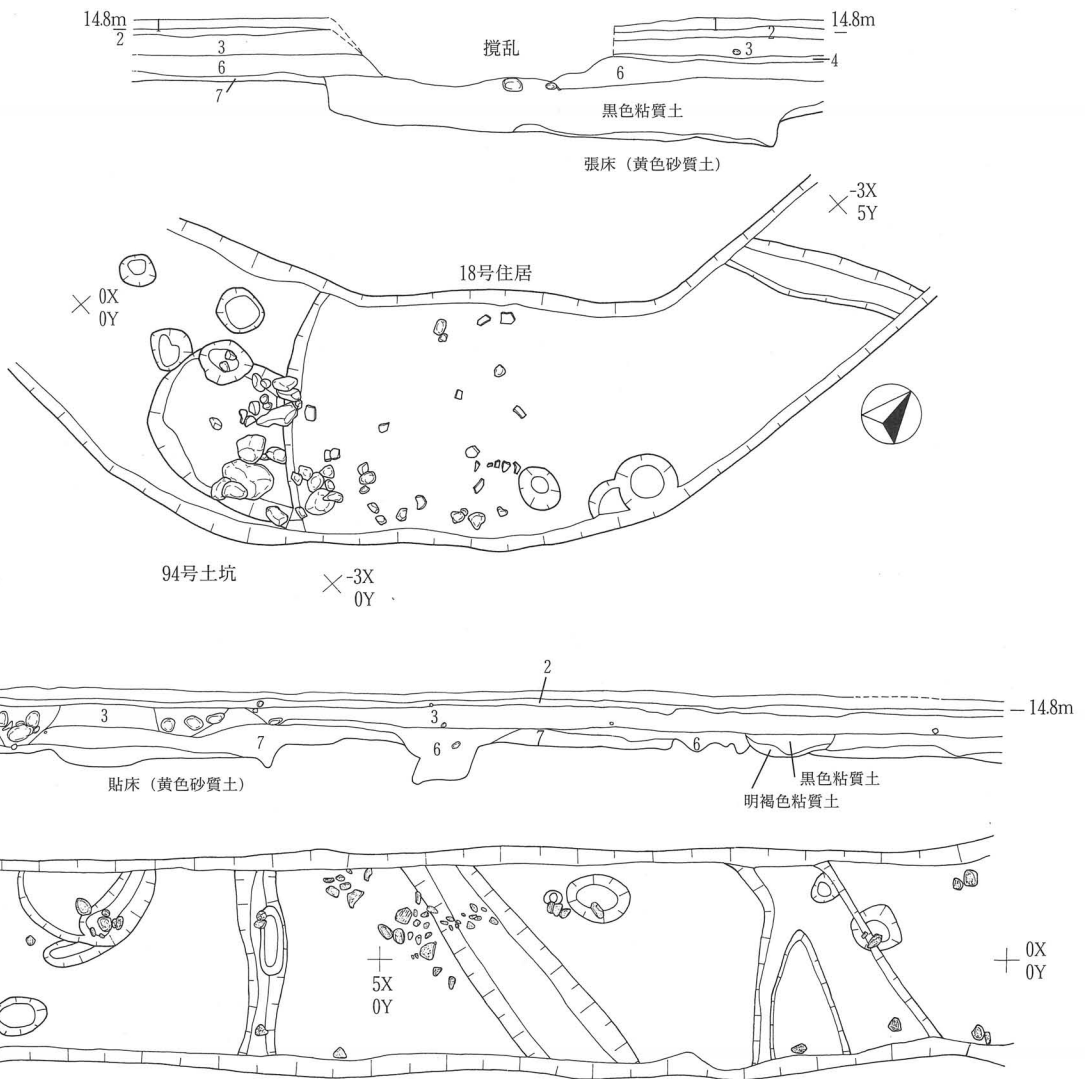


第165図 東西区18~50X遺構図 (1/60)

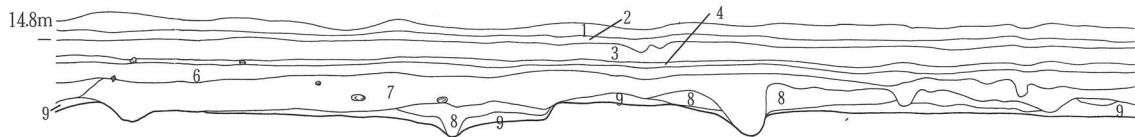
土層凡例

- 1. } 耕作土及び床土
- 2. }
- 3. }
- 4. }
- 5. 灰色粘質土
- 6. 暗褐色粘質土
- 7. 褐色粘質土
- 8. 黄灰褐色粘質土 (砂混)
- 9. 灰褐色粘質土

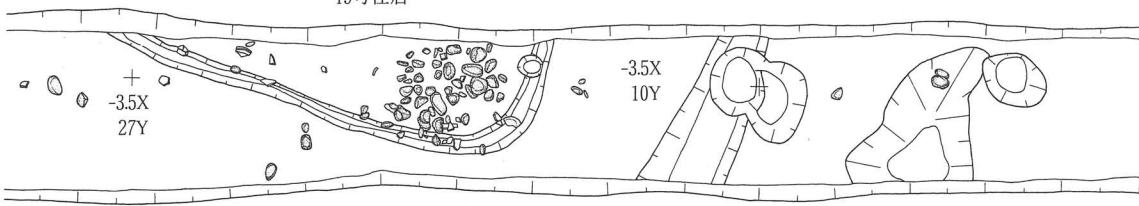




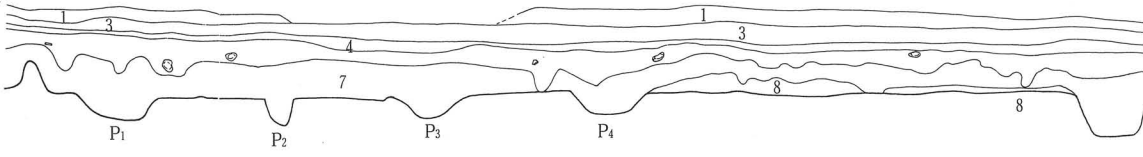
第166図 東西区0~15X・屈曲部0~-3X遺構図遺構図 (1/60)



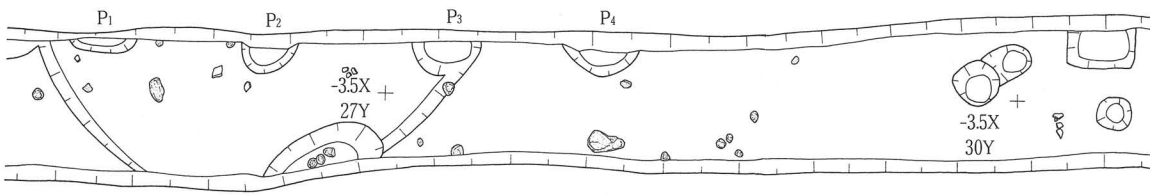
19号住居

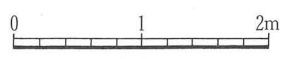
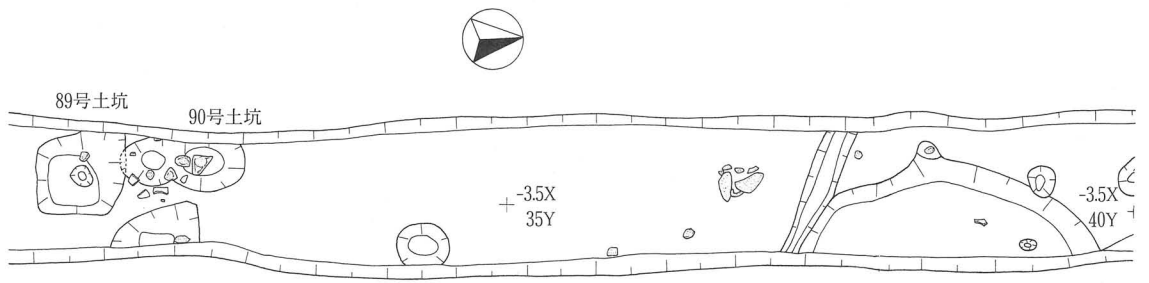
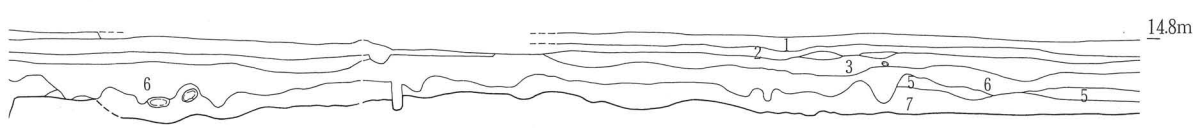
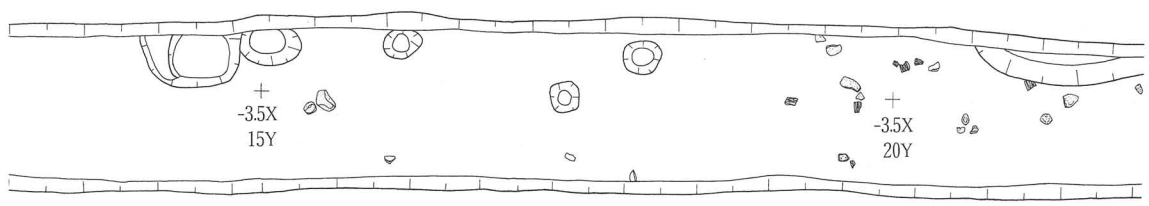
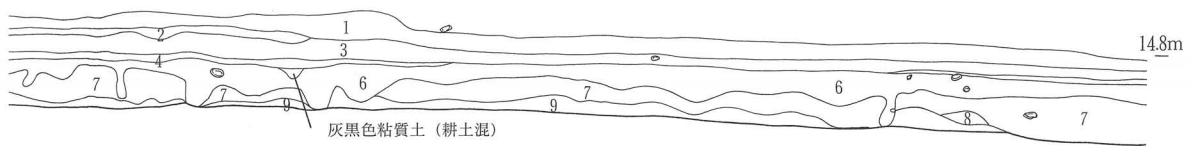


14.8m

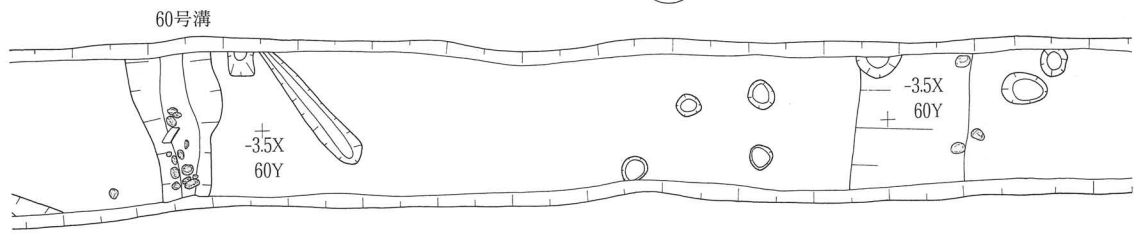
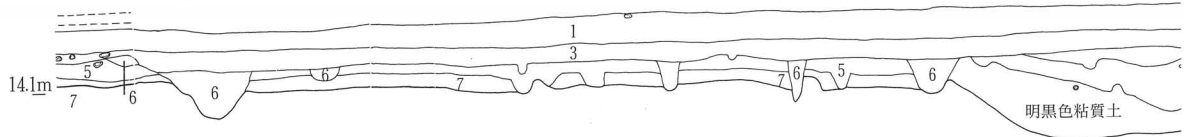
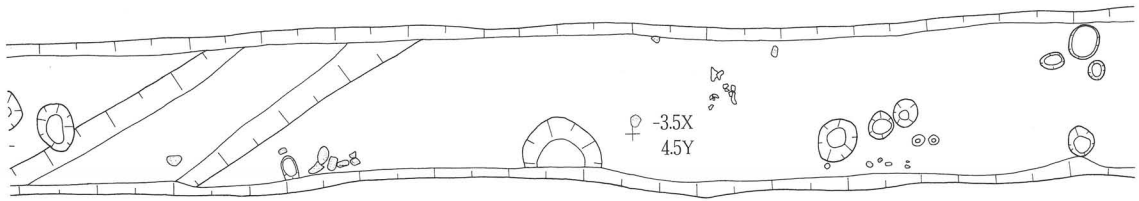
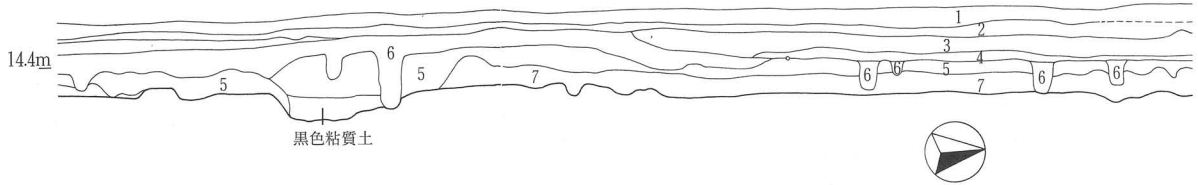


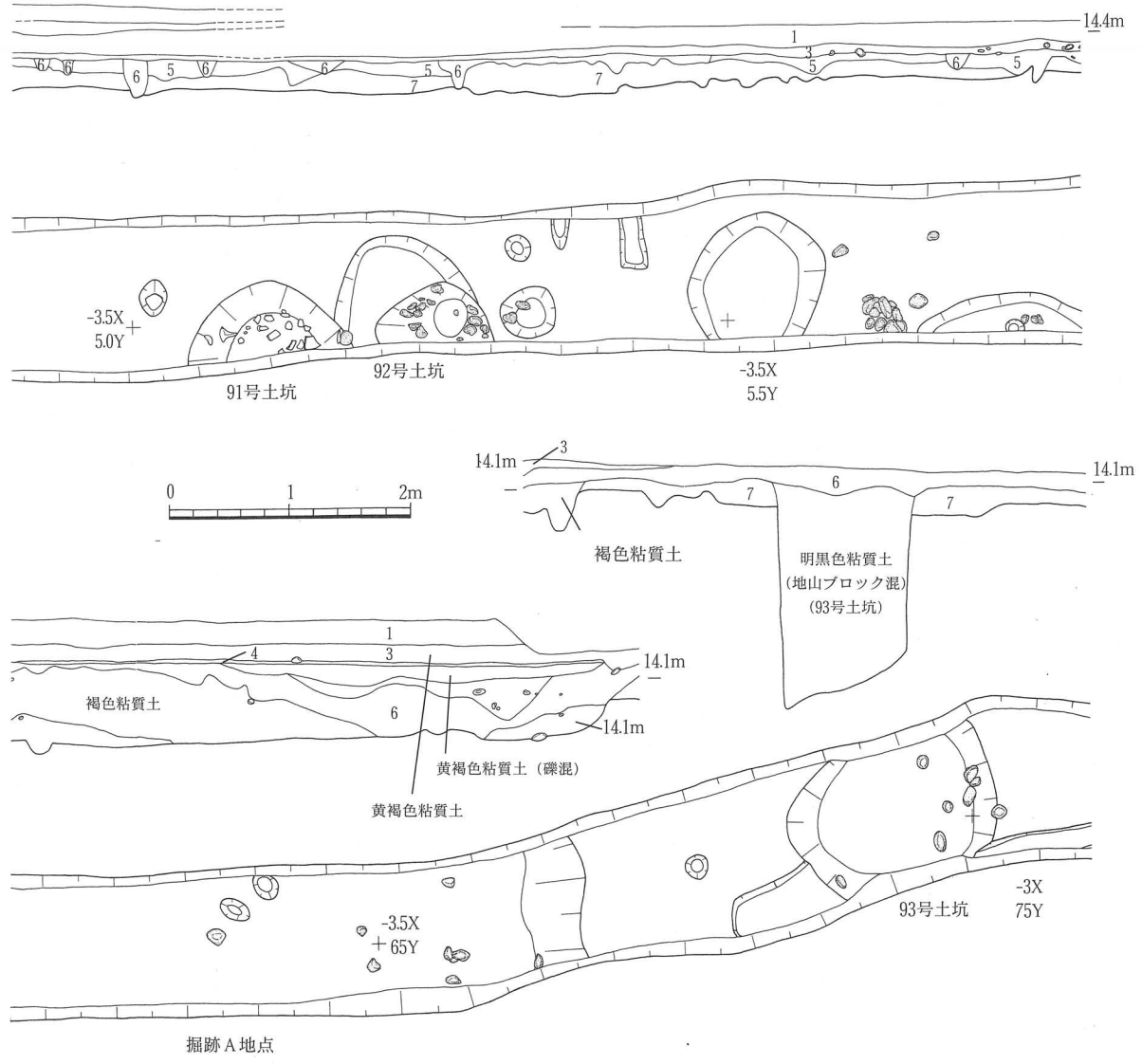
9号掘立柱建物



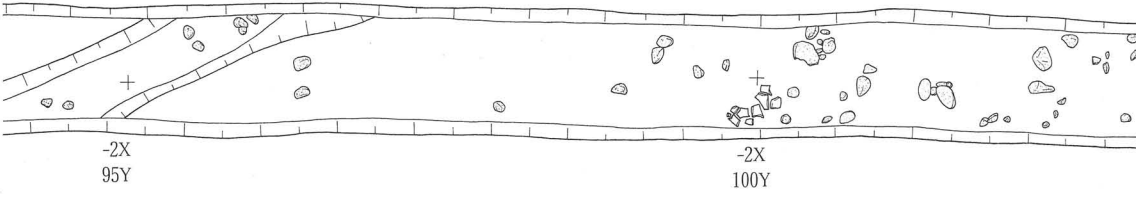
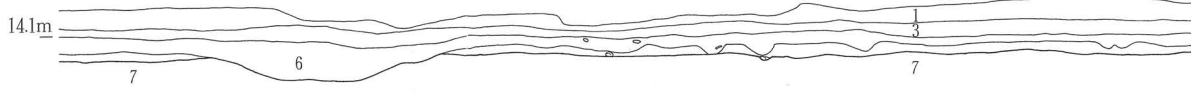
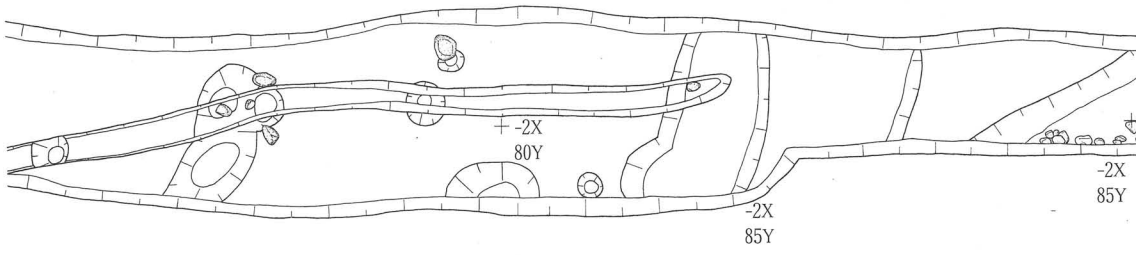


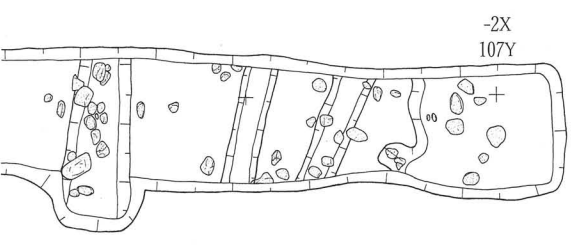
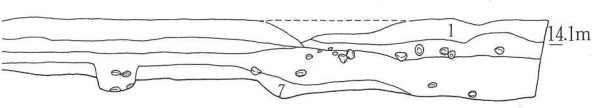
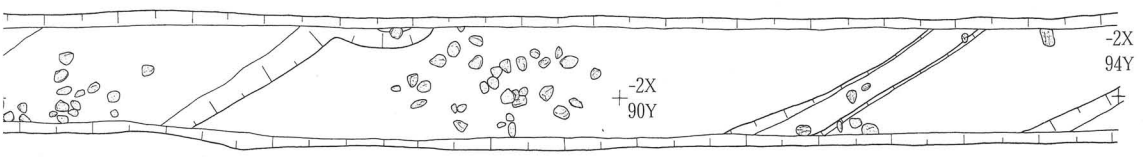
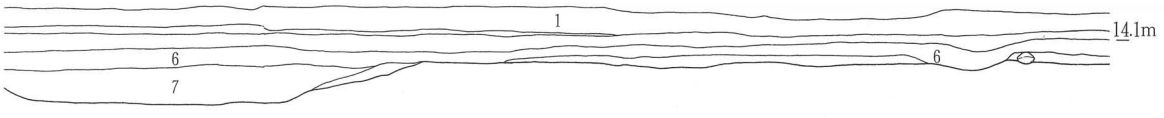
第167图 南北区4~40Y遺構図 (1/60)



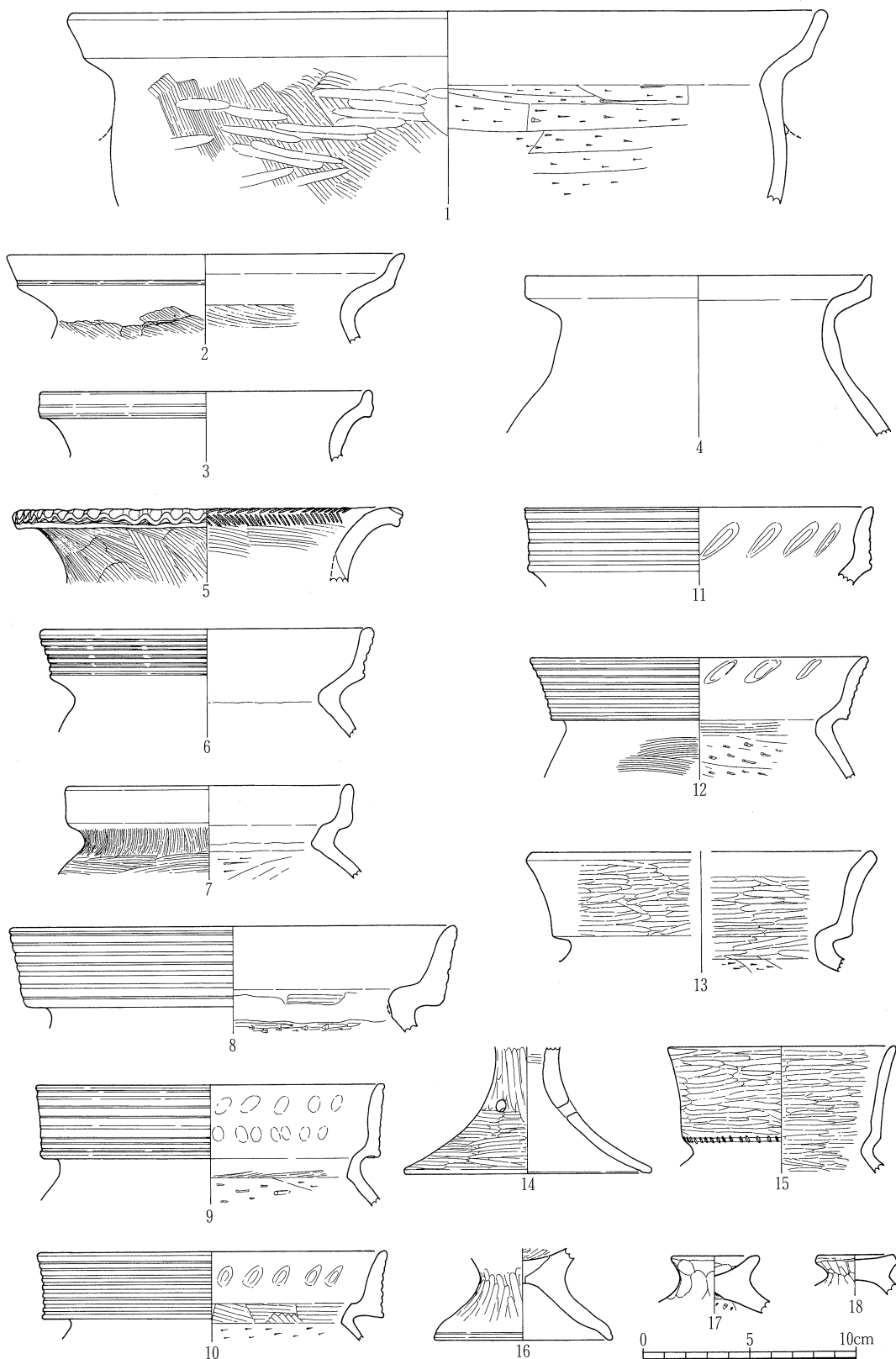


第168図 南北区40~76Y遺構図 (1/60)

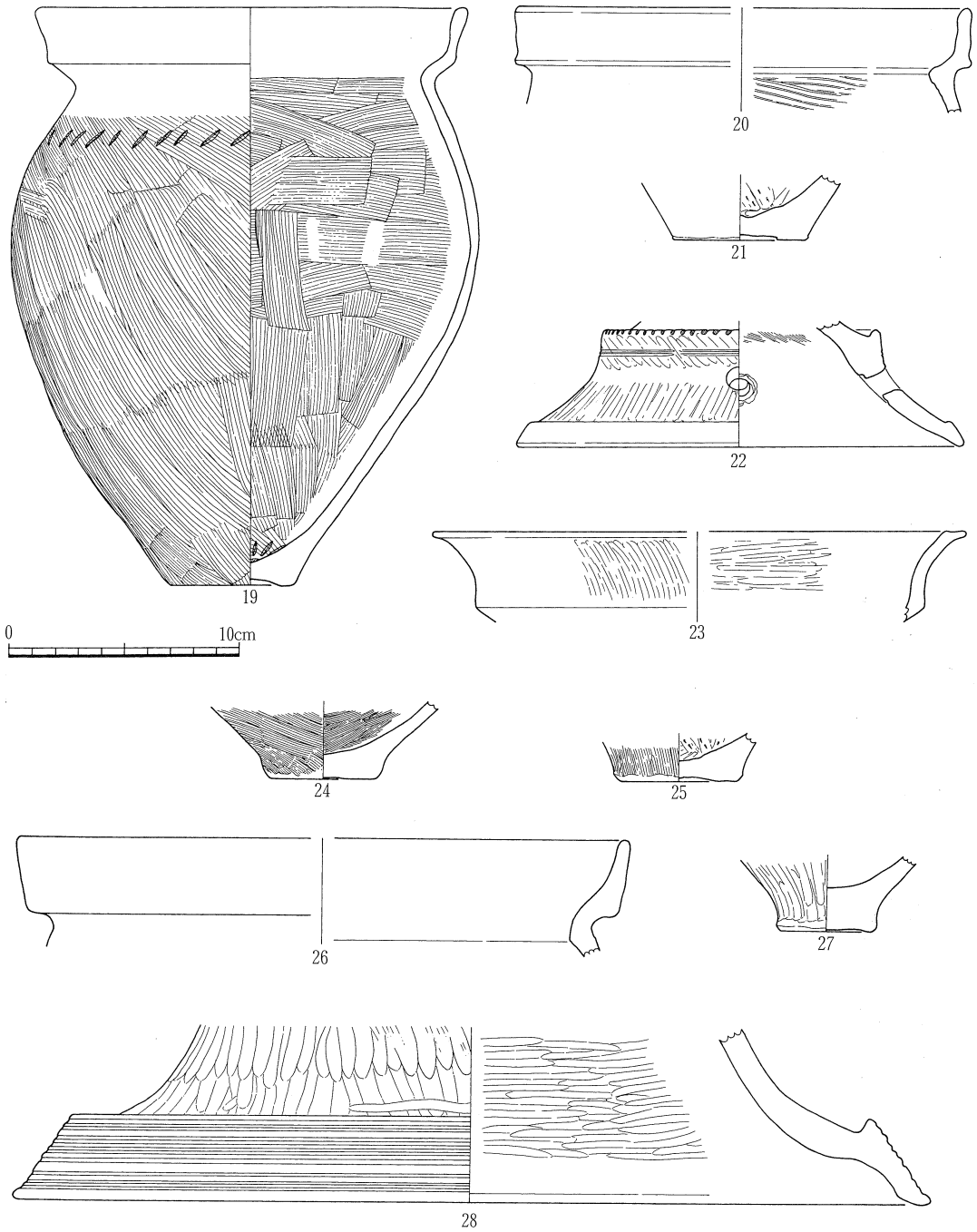




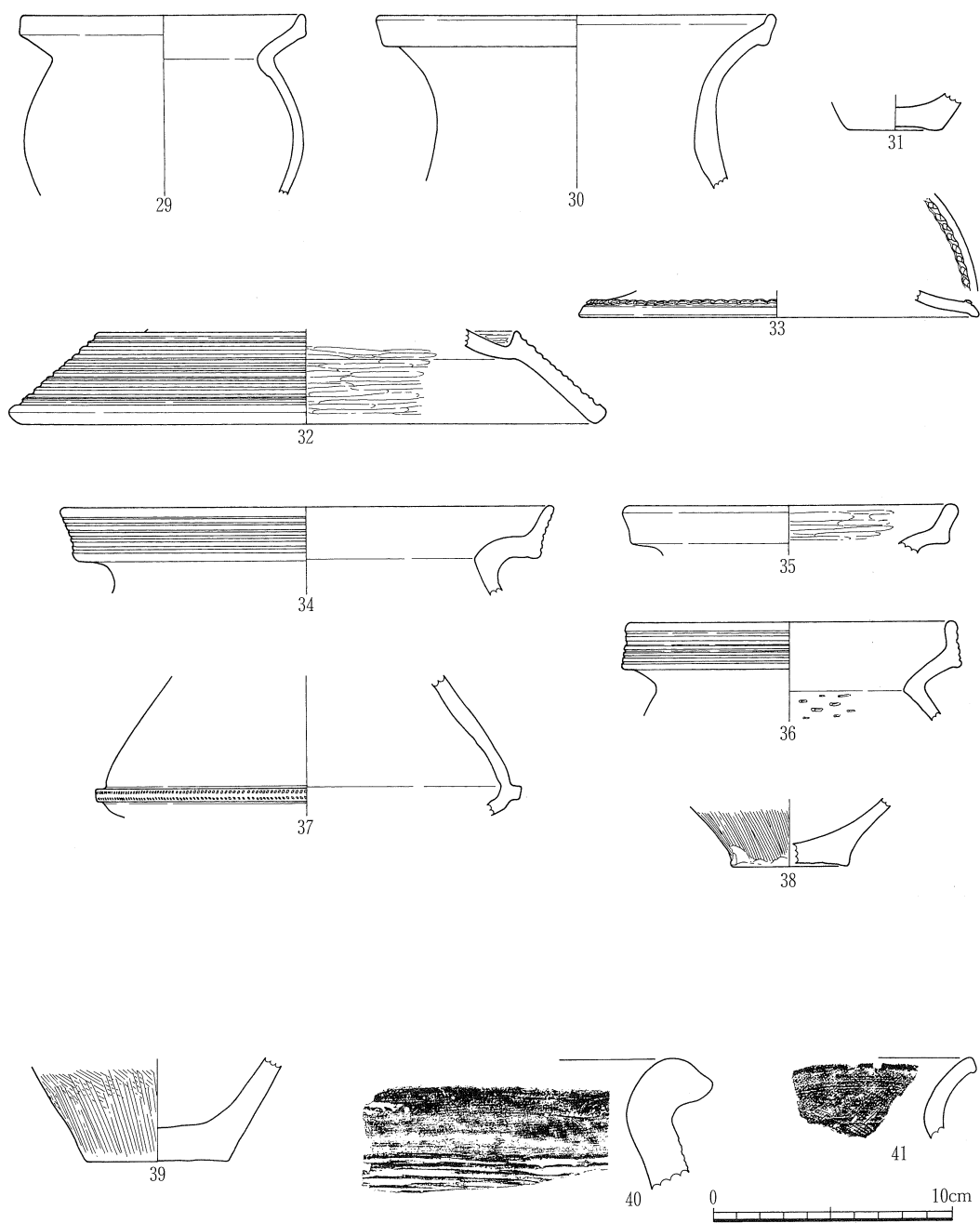
第169図 南北区76~107Y遺構図 (1/60)



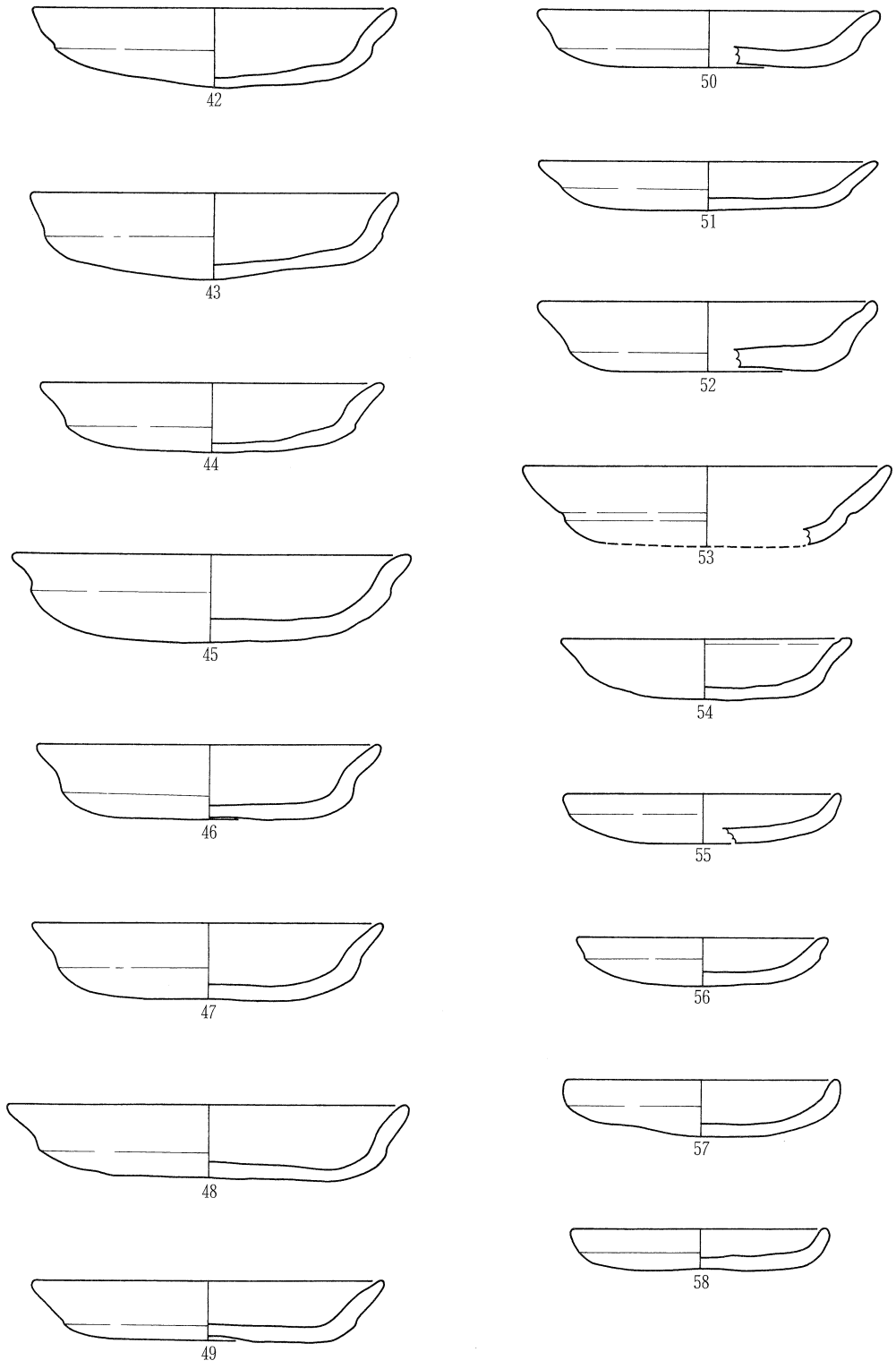
第170图 1号(1~4)·2号(5~18)住居出土土器(1/3)



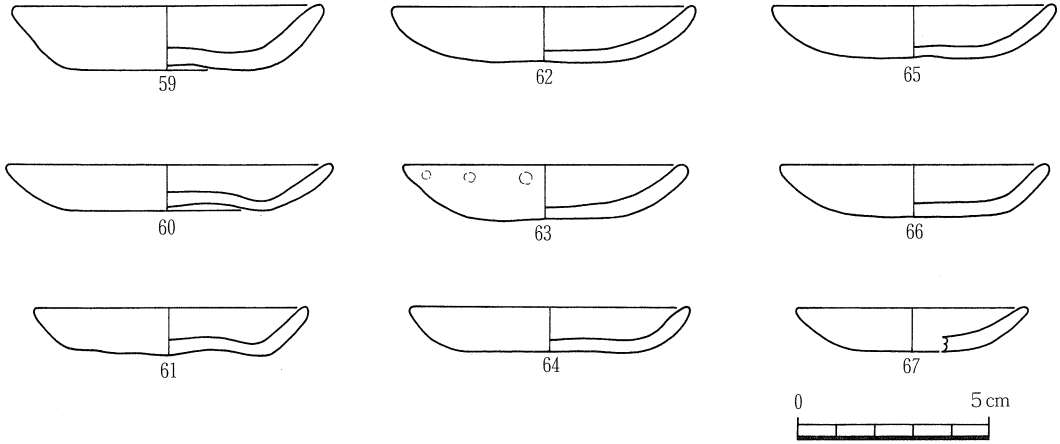
第171图 20号住居 (19~23) · 89号土坑 (24·25) 90号土坑 (26~28) 出土土器 (1/3)



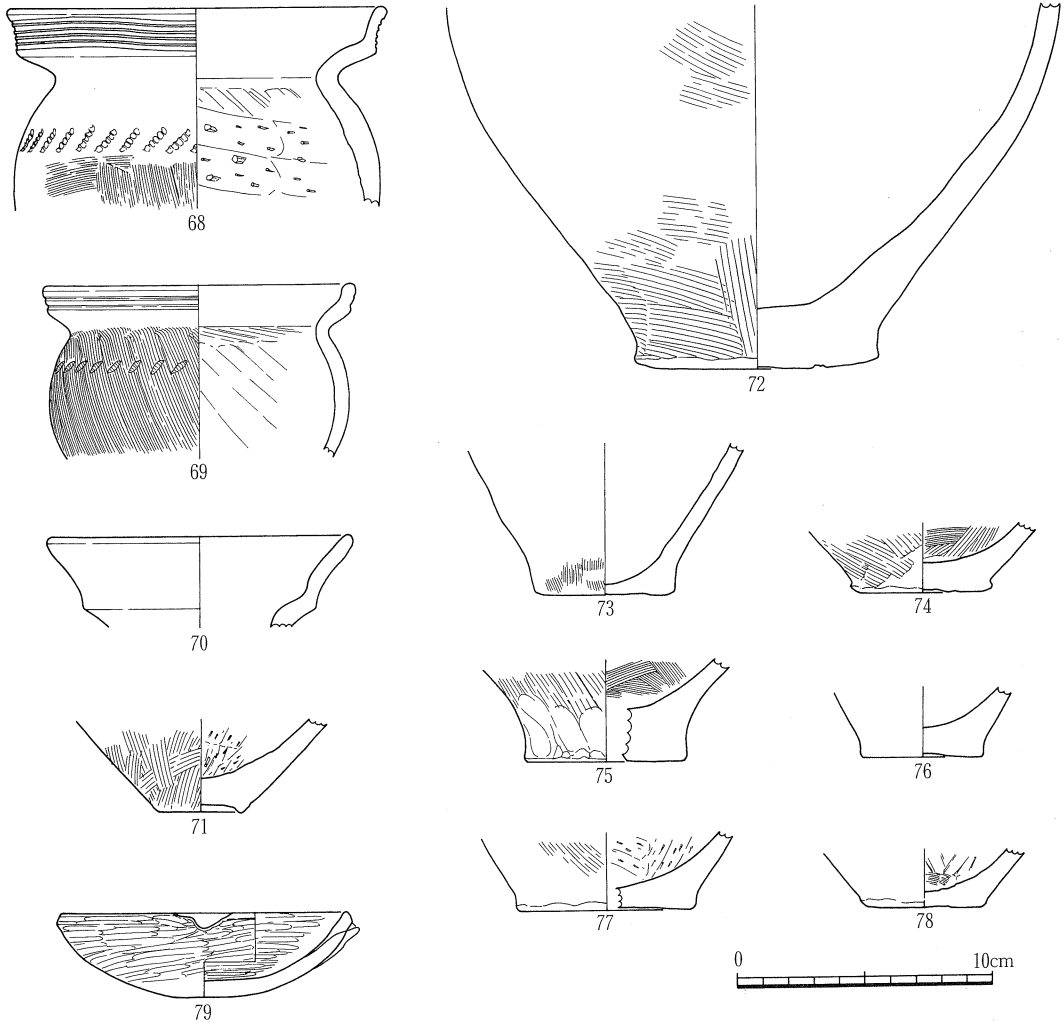
第172图 91号土坑(29~33)·92号土坑(34~38)·93号土坑(39)·60号沟(40·41)出土土器(1/3)



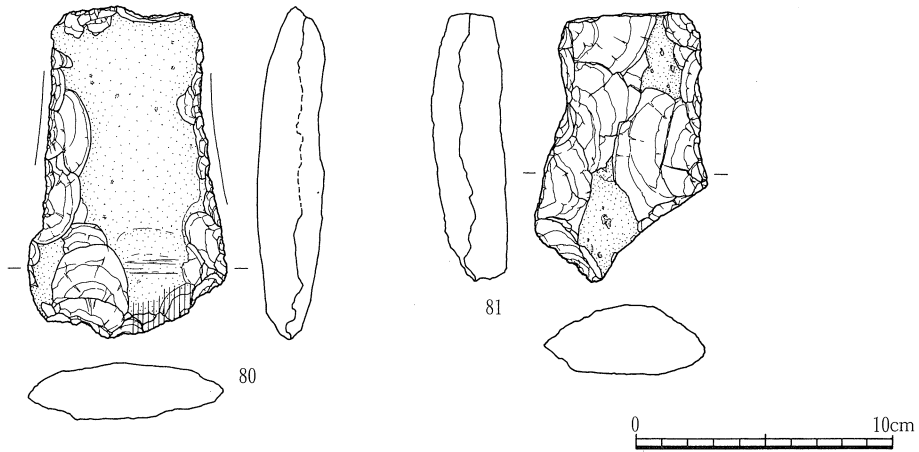
第173图 94号土坑出土土器1 (1/2)



第174図 94号土坑出土土器 2 (1/2)



第175図 調査区出土土器 (1/3)



第176図 調査区出土石器 (1/3)

土器観察表 () は推定値

遺構	番号	器種	法量(cm)	口 頸 部	体 部	胎 土	色 調	焼成
18号 住居	1	甕	口径356	外 横ナデ、横ナデ 内 横ナデ	外 ハケのあとミカキ、把 手の基部か 内 ケズリ	細礫 少 微礫 多 微粒砂 多	乳褐色	良
	2	壺	口径186 頸径141	外 横ナデで浅い擬凹線5、 ハケ 内 横ナデ、ハケ	外 ハケ 内 肩部ケズリ	大礫 少 微礫 少 微粒砂 多	乳褐色	良
	3	壺		外 横ナチ、横ナデ、煤付着 内 横ナチ、ナデ		中礫 多 細礫 多	褐色	良
	4	壺	口径162 頸径130			細礫 多	橙褐色	並
19号 住居	5	甕	口径178	外 波状凸帯、ハケ 内 上半羽状櫛描文 下半ハケ		中礫 少 微礫 少 微粒砂 多	橙褐色	良
	6	甕	口径156 頸径126	外 横ナデ、擬凹線5、横ナデ 内 横ナデ	内 肩部ケズリ	細礫 やや多	淡橙褐色	並
	7	甕	口径134 頸径118	外 横ナデ、ハケ 内 横ナデ、横ナデ	外 ハケ 内 ケズりのあとナデ	微礫 多 微粒砂 多	橙淡褐色	良
	8	甕	口径209 頸径172	外 擬凹線7だが磨耗 内 横ナデ	内 肩部ミカキ	中礫 少 細礫 多 細粒砂 多	橙淡茶褐色	不良
	9	甕	口径163 頸径142	外 口唇部面取り、横ナデ し擬凹線、横ナデ 内 横ナデで2列の連続指頭 庄痕、横ナデ	内 肩部ケズリ	細礫 やや多	淡褐色	良
	10	甕	口径164 頸径134	外 擬凹線8、横ナデ、煤付 着 内 横ナデで指頭庄痕、ハ ケ	内 ケズリ	微礫 多 細粒砂 多	乳褐色	並
	11	甕	口径163	外 横ナデで擬凹線6 内 横ナチで指頭庄痕		細礫 少 微礫 多 微粒砂 多	橙淡茶褐色	良
	12	甕	口径158 頸径126	外 横ナデで浅い擬凹線8、 横ナデ 内 横ナチで指頭庄痕、ハ ケ	外 肩部ハケ 内 肩部ケズリ	細礫 多 微粒砂 多	茶褐色	良
	13	壺	口径160 頸径124	外 口唇部面取り、ヘラミ ガキか、横ナデ、黒斑 内 ヘラミガキ	内 ケズリ	細礫 少 微粒砂 多	淡茶褐色	良
	14	器台 脚部	脚部径117		外 ヘラミガキ、透穴推定3 内 横ナデ	微粒砂 少	橙褐色	良

遺構	番号	器種	法量(cm)	口 頸 部	体 部	胎 土	色 調	焼成
19号 住居	15	壺	口径107 頸径85	外 ヘラミガキで下半刻目、 横ナデ 内 ヘラミガキ		細粒砂 多 微粒砂 多	橙淡褐色	良
	16	器台 脚部	脚部径83		外 ヘラミガキ、赤彩 内 ナデ	細礫 少	紅色	良
	17	蓋	つまみ径 40	外 指頭のナデ 内指頭 のナデ		微礫 少 細粒砂 多	淡褐色	良
	19	甕	口径188 頸径156 胴径204 底径53 器高254	外 横ナデ、横ナデ 内 横ナデ、横ナデ	外 肩部に刻目、ハケ、底 ナデ後ハケ 内 ハケ	大礫 少 細礫 多 微粒砂 多	橙褐色 (煤付着)	良
20号 住居	20	甕	口径(196) 頸径(184)	外 横ナデ、横ナデ 内 横ナデ	内 肩部ハケ	細礫 多	淡褐色	並
	21	底部	底径58		外 ナデ 内 ケズリとナ デ	細礫 やや 多	淡褐色	良
	22	高坏	脚径(194)		外 ヘラミガキで有段、上段 に刻目擬凹線2、透穴推定6で 径12mm、裾端部横ナデで有段 内 横ナデ	細礫 多	橙褐色	良
	23	高坏		外 口唇部横ナデ、ヘラミ ガキ 内 ヘラミガキ		細礫 多 微粒砂 多	灰褐色	並
	24	底部	底径46		外 ハケ 内 ハケ	細礫 少	橙褐色	並
89号 土坑	25	底部	底径52		内 ケズリ	細礫 多	黒褐色	良
	26	甕	口径(264)	外 不明 内 横ナデか		細礫 多	乳褐色	並
90号 土坑	27	底部	底径39		外 ヘラミガキ、外底面て いねいなナデ	細礫 多	淡茶褐色	良
	28	器台	底径396		外 ヘラミガキ、裾部浅い 擬凹線0赤彩 内 ヘラミガキ、横ナデ、 黒斑	細礫 多 細粒砂 多 微粒砂 多	橙乳褐色	良
	29	甕	口径119 頸径94 胴部径119			細礫 多 微粒砂 多	灰褐色	不良
91号 土坑	30	壺	口径168			中礫 少 細礫 多 微粒砂 多	橙褐色	並
	31	底部	底径40			細礫 多	暗灰褐色	不良
	32	器台	脚径(244)		外 ヘラミガキ、擬凹線12、 台端部横ナデ、赤彩 内 ヘラミガキのあとナデ、 赤彩	細礫 多	赤色	良
	33	高杯	脚径(168)		外 ヘラミガキ、裾端部有 段横ナデで隆帯と連続刻目文 内 横ナデ、端部面取り	微粒砂 少	淡褐色	並
92号 土坑	34	甕	口径208 頸径163	外 横ナデで擬凹線6、横ナ デ 内 横ナデ、ナデ		細礫 やや多	淡褐色	並
	35	甕	口径138	外 横ナデ、煤付着 内 横方向のヘラミガキ		1細礫やや多	褐色	並
	36	甕	口径137	外 横ナデで擬凹線5、横ナデ 内 横ナデ、下半ケズリ		中礫やや多	灰茶褐色	並
	37	台付壺	胴径181		外 ヘラミガキか、凹帯部 及基部横ナデ 内 指頭による横方向のナ デ	細粒砂 少 微粒砂 少	橙褐色	並
	38	底部	底径50		外 内 ハケ、外底面荒いハケ ナデ	細礫 多	淡褐色	良
93号 土坑	39	底部	底径60		外 内 ハケ、外底面ナデ ケズリのあとナデか	細礫 少 微粒砂 多	黒褐色	並

遺構	番号	器種	法量(cm)	口 頸 部	体 部	胎 土	色 調	焼成
60号溝	40	珠洲甕		外 ナデ	外 肩部横方向のタタキ 内 肩部横ナデ	大礫 少 細礫 少 微粒砂 多	青灰色	良
	41	珠洲壺		外 口唇部面取りナデ、横 ナデ 内 横ナデ	外 肩部ハケか	大礫 少 中礫 少 微粒砂 少	橙褐色	良
遺構	番号	器種	法量(cm)	口 頸 部	体 部	色 調	遺 存	備 考
94号土坑	42	土師質 土 器	口径105 器高24	外 ヨコナデ	外 ナデ	淡橙色	ほぼ完	
	43	土師質 土 器	口径107 底径75 器高26	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	外 ナデ	灰茶褐色～ 橙褐色	1/2	口縁部から 内底面に燈 心油痕
	44	土師質 土 器	口径100 底径58 器高21	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ		淡褐色～ 黒褐色	1/2	全面燈心油 痕
	45	土師質 土 器	口径116 底径50 器高27	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	外 不定方向ナデ 内 細かいハケ跡、不定方向 ナデ	淡紅乳白 色	ほぼ完	
	46	土師質 土 器	口径100 底径55 器高23	外 ヨコナデ	外 ていねいなナゲ	褐色	1/2	
	47	土師質 土 器	口径102 底径55 器高23	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ		淡褐色	2/3	
	48	土師質 土 器	口径117 底径65 器高23	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	外 未調整 内 不定方向ナデ	淡褐色	1/2	
	49	土師質 土 器	口径102 底径65 器高18	外 逆時計方向にヨコナデ 内 時計方向にヨコナデ		淡褐色	ほぼ完	
	50	土師質 土 器	口径(100) 底径(60) 器高17	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ		淡褐色	1/4	
	51	土師質 土 器	口径99 底径65 器高15	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ		橙褐色	1/2	内外面口縁 部と内底部 に燈心油痕
	52	土師質 土 器	口径(99) 底径(65) 器高26	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ		淡褐色	1/3	
	53	土師質 土 器	口径107 底径60 器高24	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	内 指オサエ痕	淡褐色	1/5	
	54	土師質 土 器	口径84 底径45 器高18	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	外 ナデ 内 指頭による不定方向の ナデ	淡紅色～ 乳白色	完	口縁内外に 燈心油痕
	55	土師質 土 器	口径(80) 底径(40) 器高(15)	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ		淡褐色	1/3	
	56	土師質 土 器	口径73 底径40 器高15	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ		淡褐色	1/2	
	57	土師質 土 器	口径79 底径55 器高18	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ		乳褐色	ほぼ完	口縁内外に 燈心油痕
58	土師質 土 器	口径(75) 底径(50) 器高(13)	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ		淡褐色	1/4		
59	土師質 土 器	口径80 底径50 器高17	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ		乳褐色	1/4		

遺構	番号	器種	法量(cm)	口 頸 部	体 部	色 調	遺 存	備 考
94号 土坑	60	土師質 土器	口径(84) 底径(50) 器高12	内 不定方向ナデ		淡橙褐色	1/3	口縁内外に 燈心油痕
	61	土師質 土器	口径71 底径50 器高13	内 ヨコナデ	内 ナデ	淡灰色～ 淡橙色	1/2	口縁内外に 燈心油痕
	62	土師質 土器	口径78 底径30 器高15	内 一定方向のヨコナデ 外 指頭圧痕のこる		淡褐色	1/2	
	63	土師質 土器	口径73 底径33 器高16	内 不定方向のナデ		淡褐色	ほぼ完	
	64	土師質 土器	口径73 底径46 器高12			淡褐色	1/2	
	65	土師質 土器	口径(74) 底径(40) 器高14	外 ナデ 内 不定方向ナデ	外 ナデ 内 不定方向ナデ	橙色	1/3	
	66	土師質 土器	口径70 底径38 器高15	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	淡紅色～ 淡橙色	2/3	やや楕円形 に変形
	67	土師質 土器	口径(60) 底径(28) 器高12	内 ヨコナデ	内 ヨコナデ	淡橙色	1/4	

調査区出土土器 (第185図)

番号	器種	法量(cm)	口 頸 部	体 部	胎 土	色 調	焼 成	
68	甕		外 デで擬凹線5、横ナデ、 煤付着 内 横ナデ、横ナデ	外 肩部斜行列点文、ハケ 内 ケズリ	中礫 多 細礫 多	乳褐色	良	-3.5X37Y3層
69	甕	口径(121) 頸径102 胴径118	外 横ナデで浅い擬凹線2、 横ナデ 内 横ナデ、ハケ	外 縦ハケ、肩部斜行刻み 内 ナデ	中礫 多 細礫 多	赤褐色	良	-2X72.8Y2層
70	壺	口径118	外 横ナデ、赤彩痕 内 横ナデ、赤彩痕		微粒砂 多	淡褐色	並	-3.5X10Y2層
71	底部	底径33		外 ハケ、底面ケズリ 内 ケズリ	細礫 多 微粒砂 多	黒褐色	良	-3.5X10Y2層
72	底部	底径96		外 ハケだが磨耗 内 不明	細礫 多	橙褐色	並	-2X100.1Y3層
73	底部	底径55		外 ハケだが磨耗 内 不明	細礫 少	橙褐色	並	-3.5X37Y3層
74	底部	底径56		外 ハケ、外底面未調整 内 ハケ、内底面炭化物付 着	細礫 多 微粒砂 多	灰茶褐 色	良	-2X72.8Y2層
75	底部	底径(64)		外 ハケ、底部付近指頭の オサエ 内 ハケ、内底面ナデ	細礫 多	淡褐色	良	-2X75.7Y3層
76	底部	底径47			微礫 少 微粒砂 少	淡褐色	並	
77	底部	底径70		外 ハケか、外底面ナデ、 煤付着 内 ケズリ	細礫 多	褐色	良	4X0Y2層
78	底部	底径46		外 不明 内 ハケだが磨耗	細礫 多 微粒砂 多	淡褐色	良	-3.5X35Y2層
79	壠	口径116 器高34	外ヘラミガキ 内ヘラミガキ	外ヘラミガキ 内ヘラミガキ	微粒砂少 細礫少	橙褐色	良	

第7節 おわりに

押野タチナカ遺跡は標高14mを測る手取川扇状地の北端部に立地する縄文時代後期中葉から中世後期にかけての複合遺跡である。縄文時代後期中葉・晩期中葉、弥生時代初頭では遺物が若干みられるものの遺構は確認していない。確実な集落は弥生時代中期と後期にあり後期の段階が最も充実する。9世紀前半の少量の遺物と土坑1基があるも空白期が続き、中世後期の南北朝期になって在地領主の館が造営される。以下、気付いた点を若干記述しおわりとしたい。

弥生時代初頭の柴山出村式土器は古段階に位置づけられるもので、畿内第Ⅰ様式中段階併行とされている（久田1986・1988、増山1987）。僅かの量ではあるが柴山出村式土器と共伴した浮線網状文系の土器は浮線網状文第3段階と考えられるものである（石川1985）。東海地方の影響を受けたいわゆる条痕文系の土器と希少ではあるが浮線文系土器の共伴は、縄文時代晩期後葉以降少ないながらも浸透しつつあった東海系の影響が強まった段階としての様相を表わしたものである。

弥生時代において住居が伴う集落は中期の小松式期に開始するが一旦途絶え、後期の法仏式期から再び始まり月影Ⅱ式前半頃をもって営みを終了する。円形の平面形を呈す8号住居は小松式期の段階であり、石鏃の出土した15号住居も平面形と規模からこの時期に属するものと推定している。中期については他に土坑も検出しているが詳細な検討は次回の課題としたい。

後期以降の集落については第5節「5各期における住居の推移」を参照して頂きたい。ここでは第6節として分けた第4次調査分を含めて集落の様相を補うことにする。検出した後期の建物は竪穴式住居18棟、掘立柱建物9棟となった。竪穴住居と掘立柱建物は複合することなく分布している。とくに調査区中央から南側に集中する掘立柱建物の分布は高い意図性が窺われるものである。倉庫棟と推定される掘立柱建物を広場状の地区に1～2棟建て、この地区を囲むように竪穴住居の区域を設けたことが考えられよう。竪穴住居の時期別棟数はタチナカⅠ期が7棟、Ⅱ期5棟、Ⅲ期3棟、時期不明3棟の内訳となった。調査区内での状況に限られるが時期を降るに従って住居数が減少する傾向がみられる。Ⅲ期になって棟数が増加する御経塚遺跡ツカダ地区の集落とは対照的である。集落は第4次調査において北と西の範囲を抑えることができた。また1985年に実施した確認調査の結果を含めると径約120m、約11000㎡の分布範囲をもつ集落となる。

遺跡地に小字名として残る「タチナカ、タチナカ」の呼称は押野館跡に由来するもので、今回の堀跡の検出から館跡の位置をおおむね特定できたことは特筆すべき成果と言えよう。この地に居を構えたとされる富樫家善は押野荘の在地領主で、南北朝初期に守護となった富樫高家の弟にあたる。貞和2年（1346年）に田地5町と敷地を大乘寺に寄進しており、寄進地の四至は「限東山王西江、限南富樫堺、限西白山大道、限北敷地堀」と記されている（大乘寺文書）。このなかの「限北敷地堀」は1346年に館が存在していたことを提示し、今回検出した館の南面にあたる堀跡B・C地点を結ぶ東西ラインとの対応が推定されるもので、大乘寺の敷地を検討するうえで重要な手掛かりになるものである。寄進状の年代とほぼ符合する14世紀中葉～後半頃の土師質土器

や珠洲焼を出土した46・94号土坑・60号溝などは館跡に関連したものとして問題ないであろう。また、現在のところ新しい時期の遺物は、20号溝から15世紀前半～中頃の土師質土器、調査区からは15世紀後半頃の珠洲焼甕（143図10）が出土している。「押野殿」と称された一族が加賀一向一揆に敗れる富樫氏嫡流に組したかは知らないが、15世紀後半頃の遺物と長享2年（1488年）高尾城落城との年代の近似は注目すべきものである。短絡的に結びつけることは危険であるが、嫡流とともに戦い敗れたとすれば「押野館」の廃絶時期に相当する遺物とも考えられる。

最後に地誌に記述された押野館跡を紹介したい。第151図『押野館跡図』には、館跡は東北隅を斜めに欠く長方形の形状として表わされている。図記載の大きさは南面56間（約102m）、西面87間（約158m）、北面27間（約49m）、東北面45間（約82m）、東面49間（約88m）となる。また村人の言として「二十年前マテ南西北の三面土居アリ」や、「古ヨリ東一面土居ナシ」の記述がみられる。津田鳳卿が天保11年に（1840年）著した『石川訪古遊記』には「土居高さ壹丈許、南面残壘長さ二三十歩。その北百余歩に高墩あって広さ十余歩、之を鐘撞堂という」と書かれている（日置1956）。これから高さ1丈（約3m）の土壘が40～60mほど残っており、南面の土壘から北へ約180mのところには広さ20m四方ほどが1段高くなる個所があって鐘撞堂と呼ばれていたことがわかるものである。18世紀末から19世紀前半頃の近世後期においても依然館跡の形状を留めていたことを認識し、今後の検証に関する重要な情報としたい。

引用・参考文献

- 石川県石川郡押野村史編集委員会 1964 「石川県押野村史」
- 石川日出志 1985 「中部地方以西の縄文晩期浮線文土器」『信濃』第52号 信濃考古学会
- 岡本 恭一・伊藤 雅文 1988 『下安原海岸遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 折戸 靖幸 1987 『高松町中沼C遺跡』高松町教育委員会
- 垣内光次郎他 1984 『普正寺遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 垣田 修児他 1984 『根上町中庄遺跡』根上町教育委員会
- 北野 博司他 1987 『宿東山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 〃 他 1982 『敷地町後方遺跡発掘調査報告』加賀市教育委員会
- 木田 清 1987 『松任市一塚オオミナクチ遺跡』松任市教育委員会
- 久々 忠義 1982 「江上A遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器編－』
上市町教育委員会
- 楠 正勝 1985 『金沢市新保本町東遺跡・西遺跡』金沢市教育委員会
- 小嶋 芳孝他 1973 『河北郡宇ノ気町宇気塚越遺跡』石川県教育委員会
- 高堀 勝喜他 1983 『御経塚遺跡』野々市町教育委員会
- 田嶋 明人他 1986 『漆町遺跡 I』石川県立埋蔵文化財センター
- 出越 茂和 1984 『金沢市額谷ドウシダ遺跡、金沢市無量寺B遺跡・II』金沢市教育委
員会
- 〃 1986 『金沢市近岡ナカシマ遺跡』金沢市教育委員会
- 〃 1986 『金沢市無量寺B遺跡Ⅲ・Ⅳ』金沢市教育委員会
- 寺沢 薫他 1980 『奈良市六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書第34集 奈良県立橿原考
古学研究所
- 栃木 英道 1986 『近岡遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 〃 1987 『吉竹遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 土肥富士夫 1984 『国分高井山遺跡』七尾市教育委員会
- 土肥富士夫・久田正弘 1986 『小島六十刈遺跡』七尾市教育委員会
- 中島 俊一他 1978 『辰口・高座遺跡発掘調査報告』石川県教育委員会
- 中西 常雄他 1979 『北大津の変貌－弥生時代から古墳時代へ－』
- 西野 秀和 1980 『津幡町谷内石山遺跡』津幡町教育委員会
- 〃 1988 『津幡町刈安野野々宮遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 橋本 澄夫・土肥富士夫 1985 『倉垣遺跡』志賀町教育委員会
- 浜野 伸雄他 1988 『竹生野遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 原口 昭三他 1979 『世界陶磁全集1 日本原始』小学館
- 久田 正弘他 1988 『八田中遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 日置 謙 1956 『改訂増補加能郷土辞彙』北国新聞社

- 麻柄 一志 1986 「弥生・古墳時代集落の変貌」『大境』第10号 湊晨会長古希記念号 富山考古学会
- 増山 仁 1986 『金沢市二口六丁遺跡Ⅱー第4次調査報告ー』金沢市教育委員会
- 〃 1987 『金沢市矢木ジワリ遺跡・矢木ヒガシウラ遺跡』金沢市教育委員会
- 〃 1988 『金沢市磯部運動公園遺跡』金沢市教育委員会
- 三浦 純夫 1980 『上田出西山遺跡』押水教育委員会
- 湊 晨・上野 章他 1972 『富山県史』考古編
- 南 久和・宮本 哲郎・出越 茂和 1987 『金沢市押野西遺跡』金沢市教育委員会
- 宮本 哲郎・楠 正勝・栃木 英道他 1983 『西念・南新保遺跡』金沢市教育委員会
- 〃 〃 〃 〃 1986 『南新保D遺跡』金沢市教育委員会
- 谷内 視央他 1986 『柴垣須田遺跡』羽咋市教育委員会
- 谷内尾晋司 1973 「柳田うわの遺跡」『羽咋市史（原始・古代編）』羽咋市
- 〃 1976 「七ツ塚墳墓群」『北陸自動車道関係調査報告書Ⅰ』石川県教育委員会
- 〃 ・栃木 英道 1984 『鹿首モリガフチ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 湯尻 修平 1975 『金沢市戸水B遺跡調査報告』石川県教育委員会
- 湯尻 修平 1983 「柴山出村式土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号
- 吉岡 康暢他 1976 「塚崎遺跡」『北陸自動車道関係調査報告書Ⅱ』石川県教育委員会
- 吉岡 康暢 1982 「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」『庄内考古学』18
- 野々市町教育委員会 1984 『御経塚ツカダ遺跡』
- 〃 1986 『野々市町押野タチナカ遺跡、押野大塚遺跡』
- 米沢 義光・栃木 英道他 1987 『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡』宇ノ気町教育委員会



遺跡近景 (南東から、1982年)



1982年調査区近景 (西から)



1980年東西調査区近景 (東から)



1983年調査区近景 (東から)



1980年南北調査区近景 (南から)



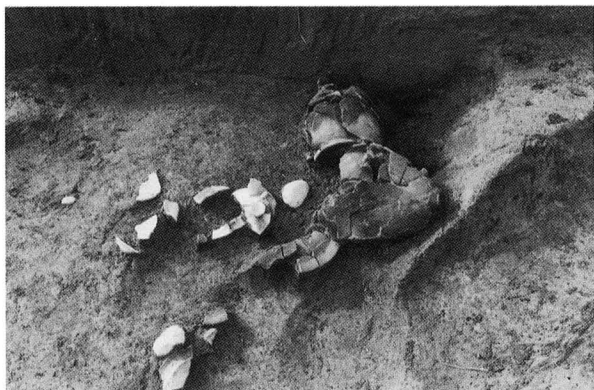
1984年調査区近景 (西から)



1981年東調査区近景 (南から)



1号住居 (南から)



1号住居土器出土状況



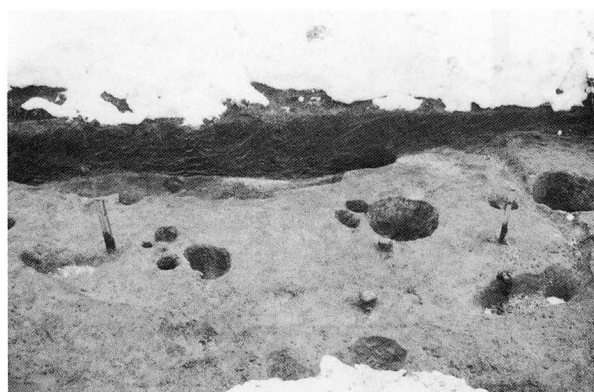
5号住居 (南東から)



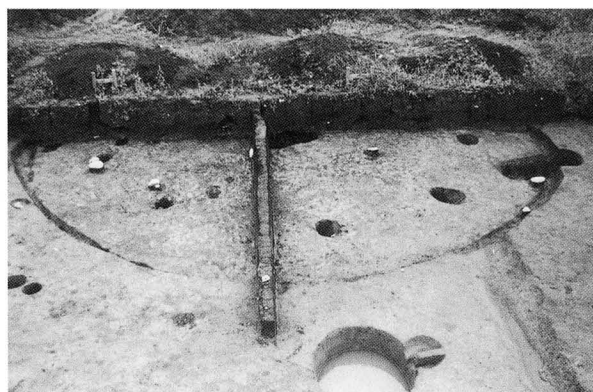
2号住居 (南西から)



6号住居北半部 (南から)



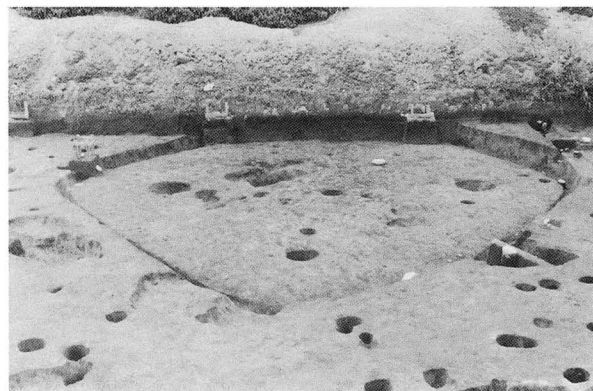
3号住居 (北から)



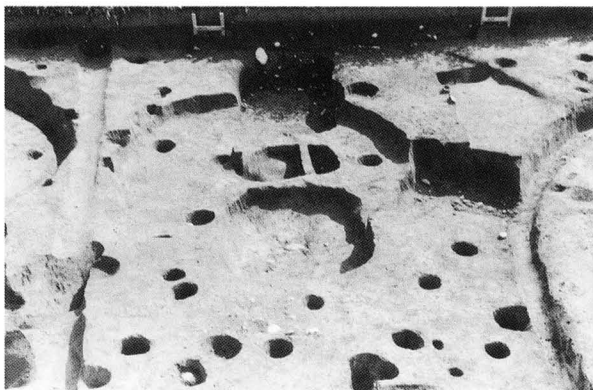
6号住居南半部 (南から)



4号住居 (東から)



7号住居 (北から)



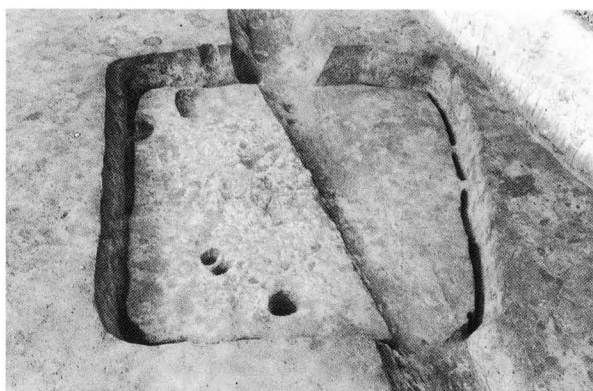
8号住居、47号(下)・48号(上)・49号(右) 土坑 (北から)



12号住居 (東から)



10号住居 (南から)



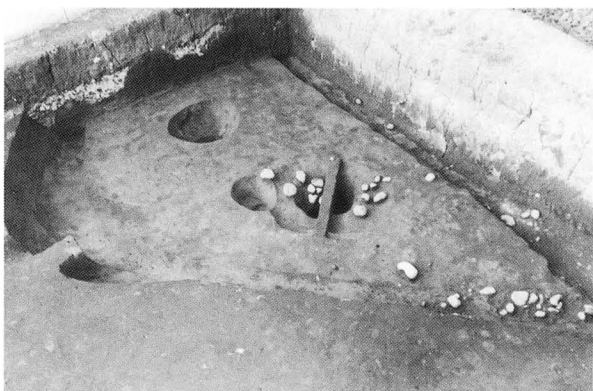
13号住居 (東から)



11号住居北半部 (東から)



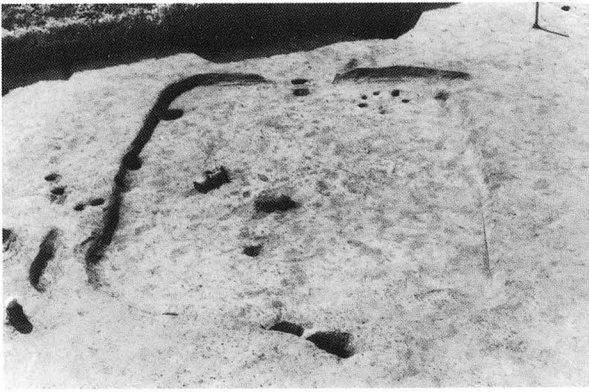
14号住居 (北から)



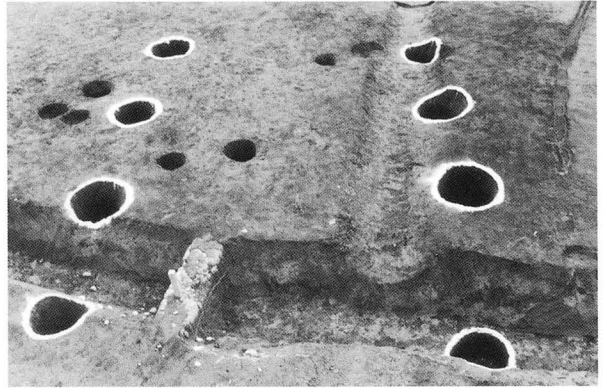
11号住居南半部 (東から)



15号住居 (北から)



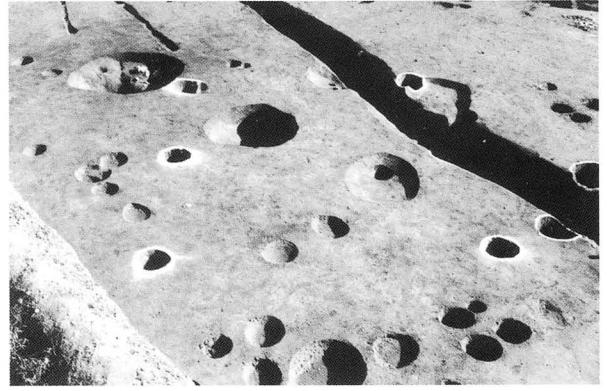
16号住居 (東から)



5号掘立柱建物 (北から)



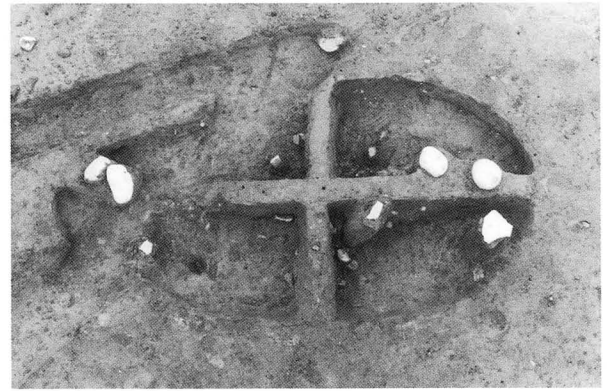
2号掘立柱建物 (西から)



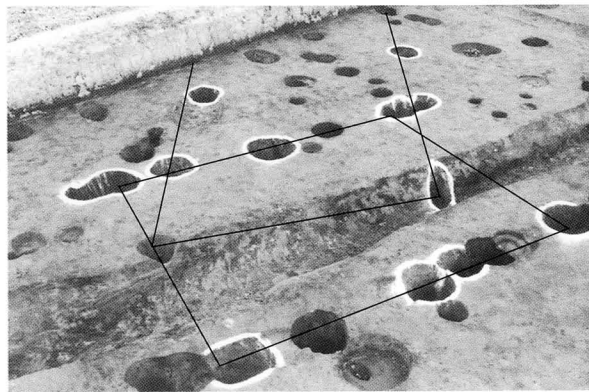
6号掘立柱建物 (北西から)



3号掘立柱建物 (北から)



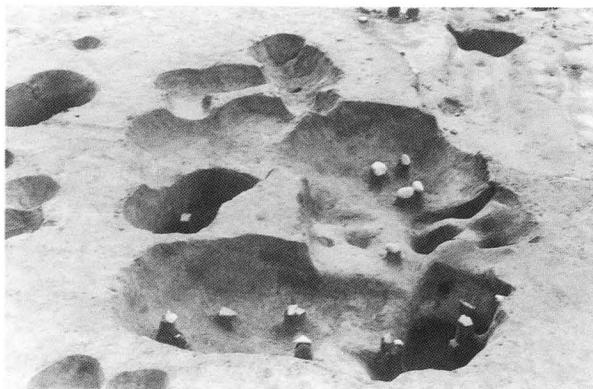
1号土坑



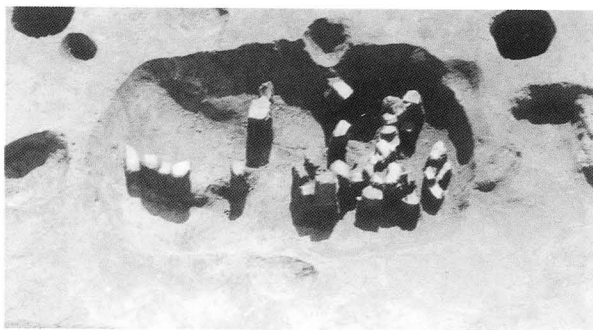
4号(下)・8号掘立柱建物 (南から)



8号土坑 (東から)



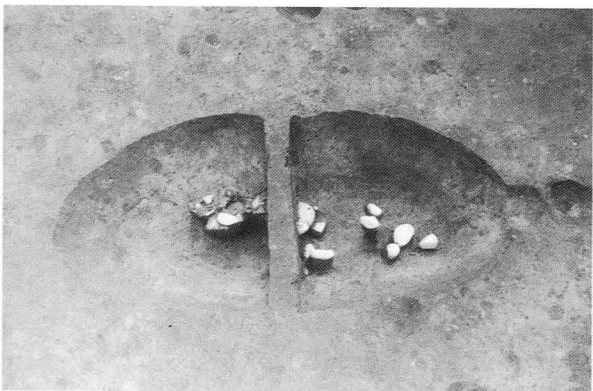
12 a ~ c 号土坑



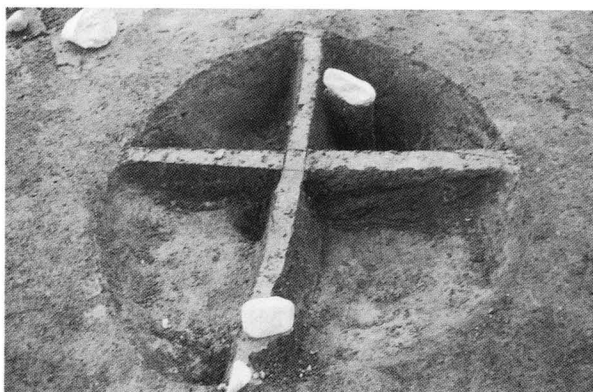
40号土坑



26 · 27号土坑



51号土坑



33号土坑



53号土坑



35号土坑



54号土坑



57号土坑



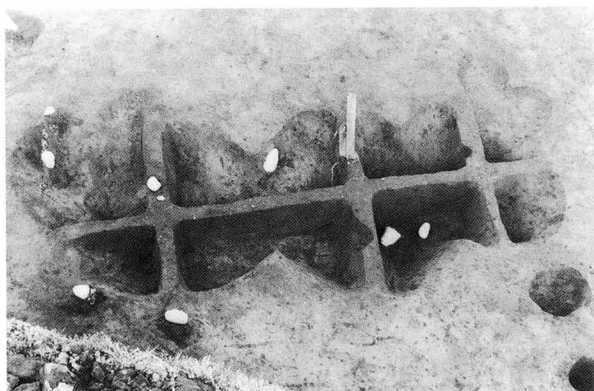
64号土坑



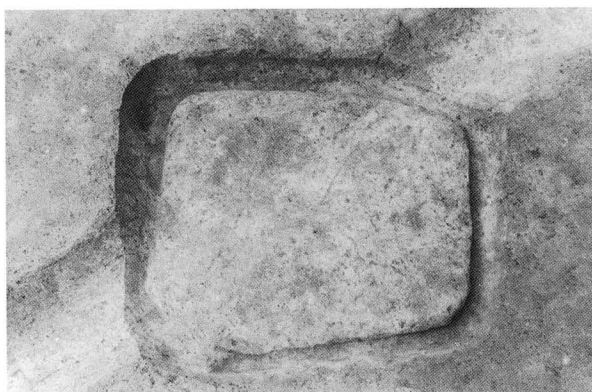
58号土坑



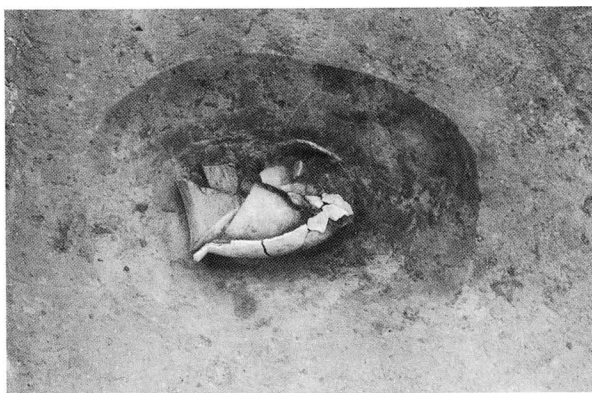
66号土坑



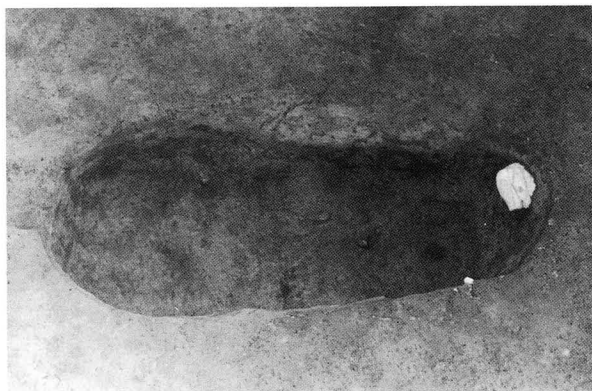
62号土坑



75号土坑



63号土坑



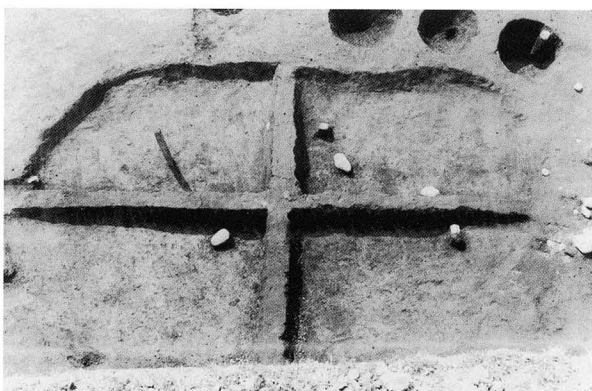
78号土坑



80・81号土坑



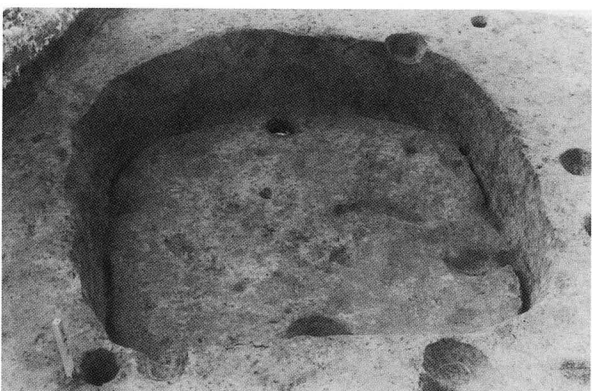
19号溝 (南から)



86号土坑



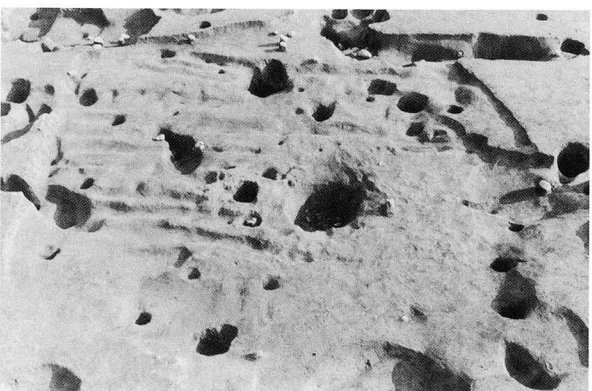
27号溝 (東から)



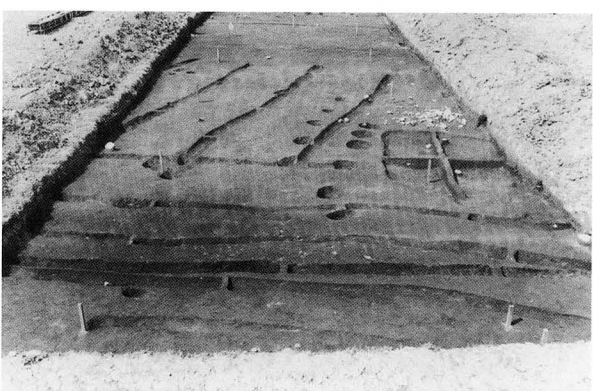
87号土坑



小溝群 (南から)



竪穴状遺構1 (北から)



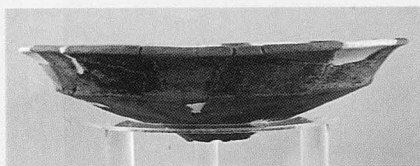
小溝群 (南から)



1号住 1



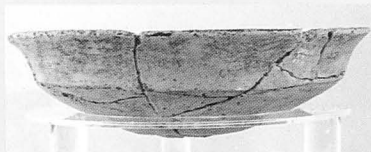
1号住 16



1号住 49



1号住 59



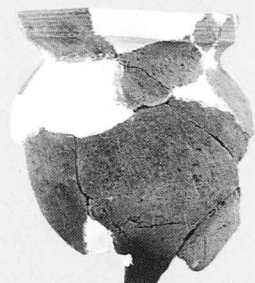
1号住 53



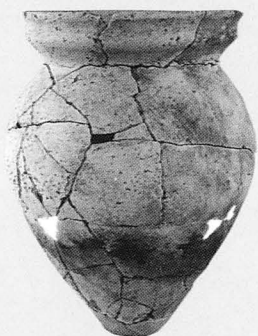
3号住 3



3号住 5



3号住 11



3号住 22



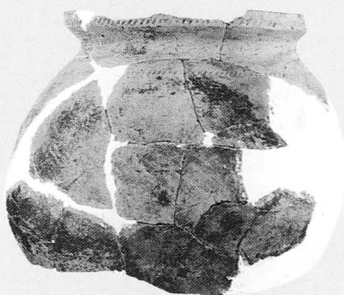
3号住 23



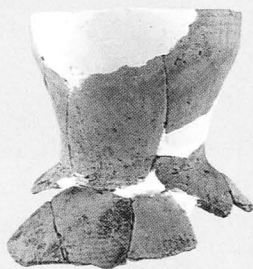
3号住 33



3号住 37



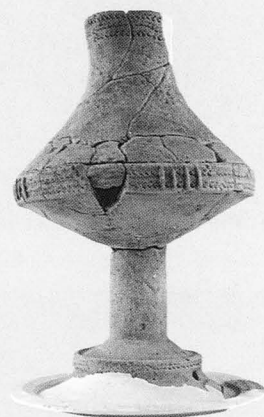
3号住 34



3号住 44



3号住 47



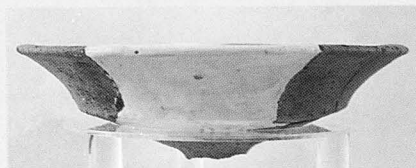
3号住 49



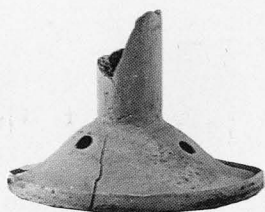
3号住 50



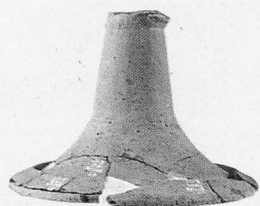
3号住 51



3号住 57



3号住62



3号住67



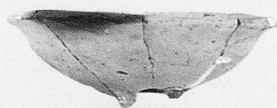
3号住56



4号住19



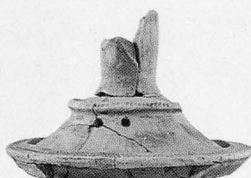
4号住12



4号住27



4号住28



4号住30



5号住27



5号住40



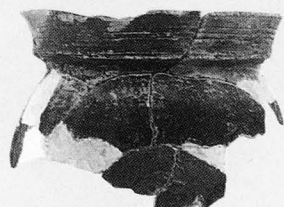
5号住55



7号住 1



7号住 3



7号住 4



7号住 6



7号住12



7号住13



7号住15



7号住18



7号住19



7号住20



7号住22



7号住23



7号住24



7号住27



7号住26



8号住1



8号住3



8号住5



8号住6



8号住11



10号住3



10号住11



10号住29



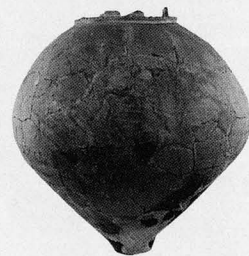
10号住28



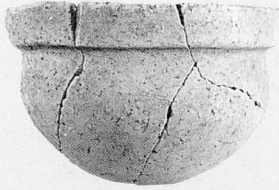
10号住30



11号住9



14号住27



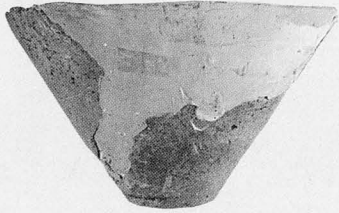
14号住28



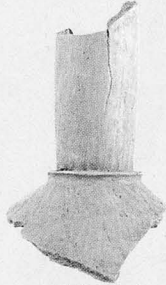
14号住30



14号住4



29号土坑2



31号土坑2



38号土坑1



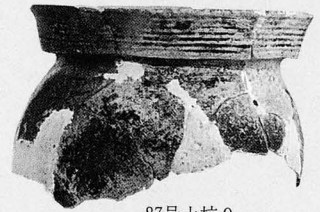
64号土坑5



66号土坑3



75号土坑3



87号土坑9



87号土坑22



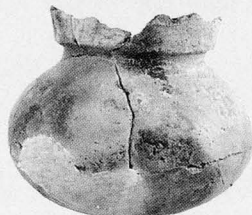
87号土坑23



87号土坑25



87号土坑31



87号土坑34



89号土坑42



87号土坑40



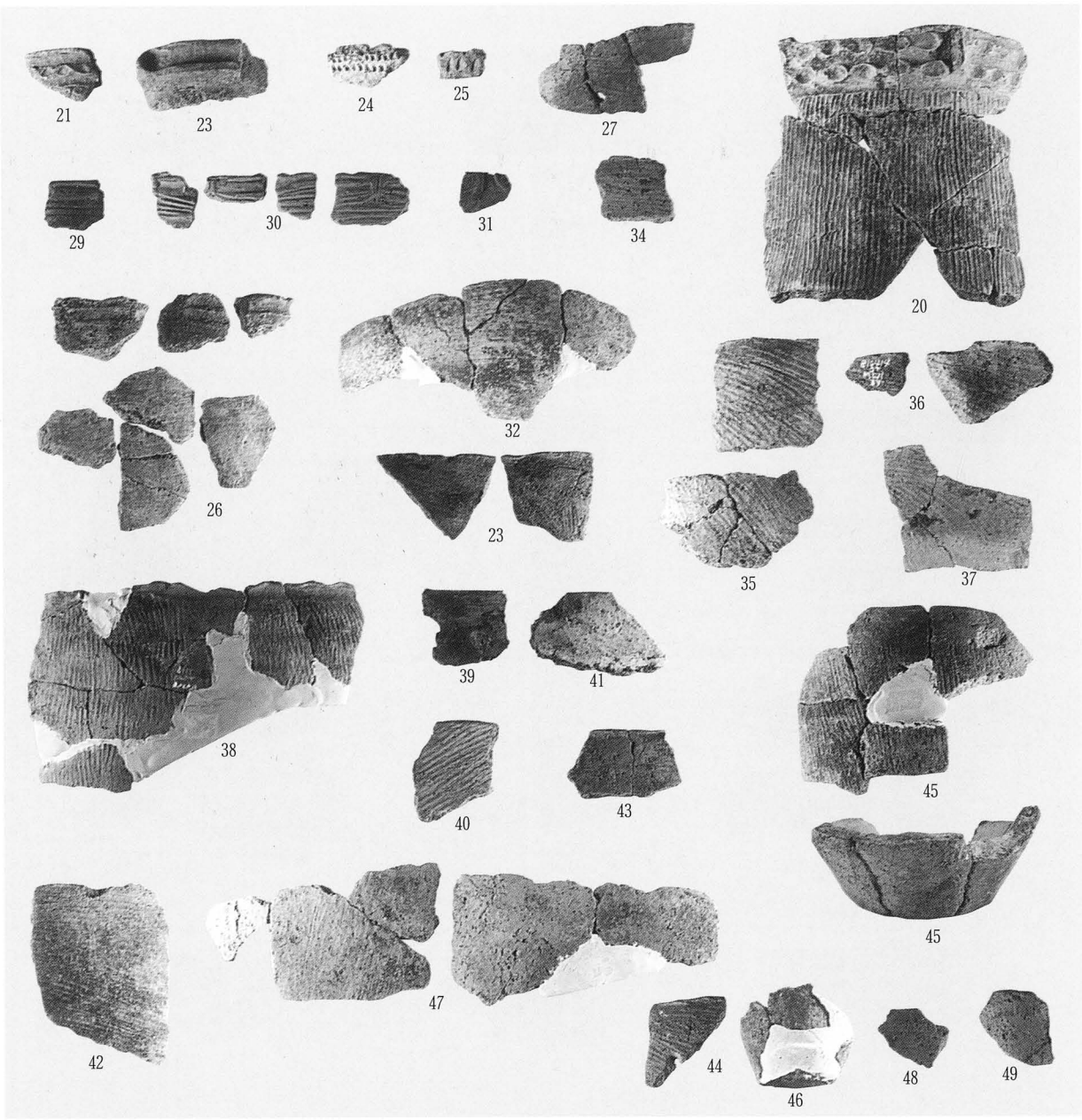
87号土坑52



87号土坑54



87号土坑56



弥生時代初頭の土器（第139・140図）



南北調査区作業風景 (南から)



20号住居 (西より)



東西調査区近景 (東から)



21号住居



18号住居



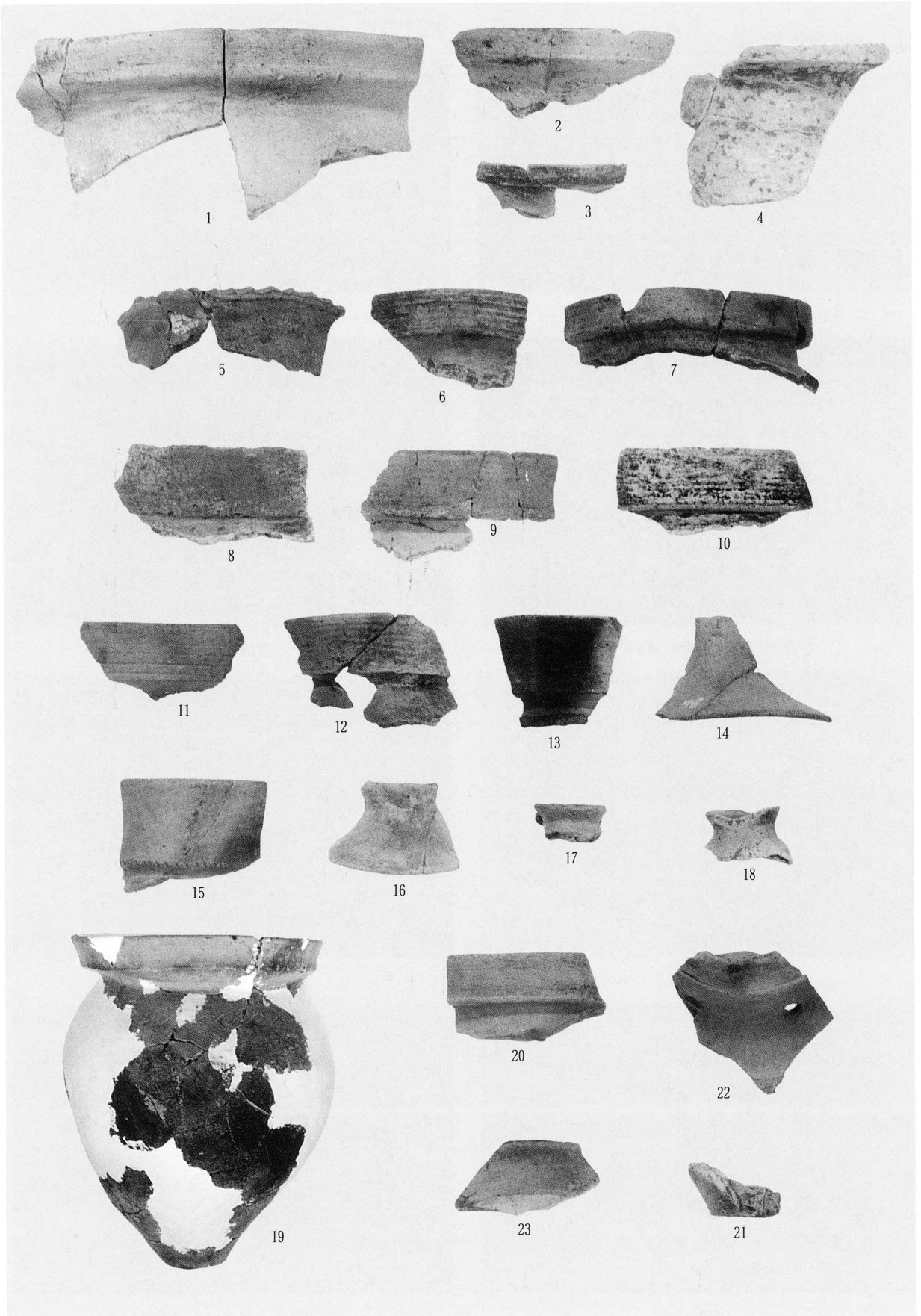
89号(左)・90号土坑



19号住居



94号土坑 (右) と18号住居

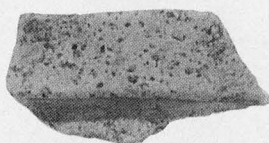




24



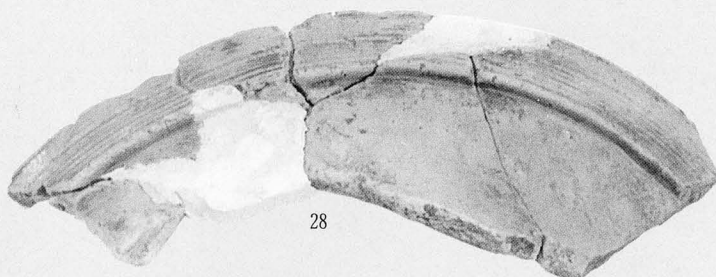
25



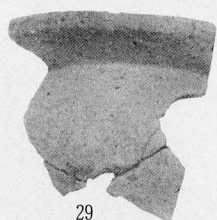
26



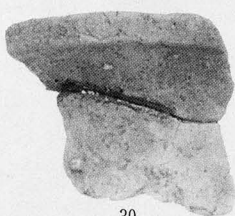
27



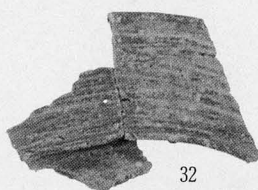
28



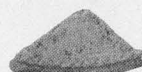
29



30



32



33



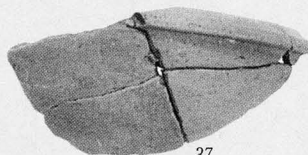
31



34



35



37



36



38



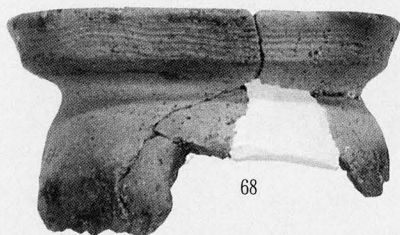
39



40



41



68



69



70



79



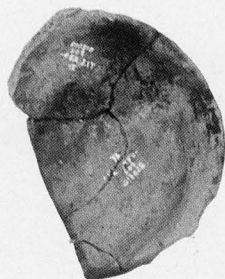
80



81



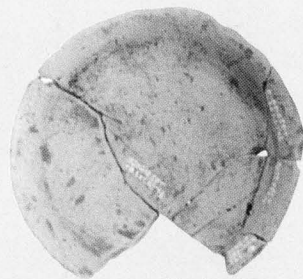
42



43



44



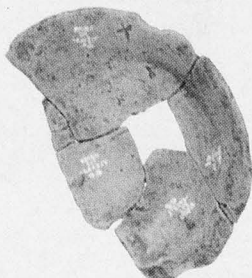
45



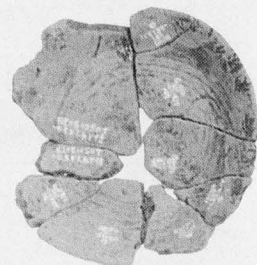
46



47



48



49



50



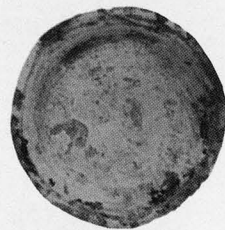
51



52



53



54



55



56



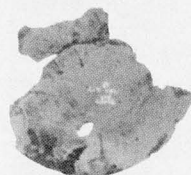
57



58



59



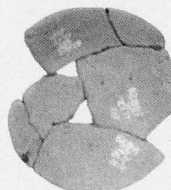
60



61



62



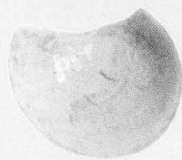
63



64



65



66



67

押野大塚遺跡

第3章 押野大塚遺跡

第1節 調査の経過と概要 (第1・2図)

押野大塚遺跡は、押野町より東へ約400m、北陸鉄道押野駅より北西に約200mの距離を測る標高12mの平野部に位置している。野々市町押野第1土地区画整理事業の道路築造工事の際、昭和54年(1979)2月に発見された遺跡であり、3月には道路部分の緊急発掘調査(第1次調査)が実施されている。

第2次となる今回の調査は、住宅築造の計画が立案した街区内の調査である。緊急を要する調査であったが、他遺跡の調査日程が既に決定しており、調査は昭和56年度内において2期に分け行うことになった。第1期の調査は昭和56年(1981)5月20日に調査を開始している。調査では明確でなかった遺跡の状況把握を行うため、まず街区の東西に長さ139m、幅2.5mのトレンチを設け、西側から順に東へ向かい調査を進めた。この結果西側端部から20mまでに弥生時代後期の遺構と遺物が集中していた。遺構の密度はあまり高くなく、西側では3基の土坑と溝を検出したにすぎない。40mほど石原が続き、90m付近では縄文時代後期の土器と炉跡を確認した。これより東側は攪乱がひどい状況で遺物包含層である厚さ25~30cmの黒褐色粘質土が続いていたが、遺構は検出されなかった。翌年3月実施予定の第2期調査は、トレンチ西側端部と炉跡周辺を拡張し調査を行なうこととした。第1期の調査は6月19日に一旦調査を中断している。第2期の調査は翌年の3月8日から3月29日にかけて実施した。西側拡張部において新たに3基の土坑と掘立柱建物1棟を検出した。炉跡拡張部分では住居跡との関連から柱穴の検出につとめたが確認できなかった。しかし周辺からは縄文時代後期前葉後半頃の土器が一定量出土している。

地山は調査区の西端から東端に向かい標高差20cmでわずかに傾斜している。AⅠからAⅡ区にかけての基本的な層位は、耕作土及び床土の直下に遺物包含層である黒褐色粘質土、次にやや淡い土色の茶褐色粘質土が続き、以下地山となる単純なものである。BⅠ区ではAⅠ区での茶褐色粘質土下に縄文後期土器を包含する地山と同様の黄灰色砂質土が存在した。

調査面積は、第1期と第2期の調査を合わせて約560㎡である。

第2節 遺構

調査区が細長いため地区割を行った。西側拡張部をAⅠ区とし炉跡拡張部までのトレンチ部分をAⅡ区とした。炉跡発見地点拡張部をBⅠ区としこの東側のトレンチ部分をBⅡ区とした。

調査ではBⅠ区において縄文時代後期の炉跡1基と集石群を検出した。AⅠ区では、弥生時代後期の竪穴住居と推定されるもの1棟、掘立柱建物1棟、土坑7基、溝4条、ピット多数、AⅠ区で溝2条を検出した。



1 縄文時代

1号炉 (第5・7図)

B I区に位置する単式の石組炉である。55×50cmの規模で、やや楕円状に石組みする。長さ15～25cm程度の石5個と10cm前後の石5個を用いている。また最も大きい北東部の長さ25cmの炉石は玉砥石として使用されている。炉跡周辺において柱穴は確認できなかった。調査区の一部において掘り下げ地山を確認しようとしたが、黄色砂質土が続いており明確な地山面は確認できなかった。しかし1号炉の検出面や遺物の出土レベル面がほぼ生活面にあたるであろう。このような状況のため、1号炉周辺で柱穴が確認できなかったのではと考えている。1号炉周辺からは土器の出土が多く、これらの様相から1号炉の時期は後期前葉後半に属しよう。

B I 区集石（第5図）

B I 区では、まとまった自然石の分布が認められ、分布からA・B・Cの3群が存在するものと考えている。この分布状況について若干ここで触れておきたい。A群は、1号炉を中心として径6mほどの分布と考えられる。A群の南側には密な集石がみられ、自然石は大きさ25～30cm程度の大きいものと、10cm前後の小さいもので構成されている。この集石の50cm西側には土器片が集中する。A群は、1号炉を中心とすることから、この自然石の分布は住居の範囲を現しているものかもしれない。西側のB群は、土器集中個所を中心として、径ほぼ3.5mの範囲に自然石が分布している。南西側のC群も径ほぼ3.5mの範囲と推定される。

2 弥生時代

1号住居（第8図）

A I 区中央部やや西側に位置する。P1・P2が主柱穴、溝a・bが壁溝の残存部と考えられる。P1～P2間は2.9m、P1は規模63×53cm、深さ40cm、P2は規模50×推定45cm、深さ45cmを測る。平面形は隅丸長方形で推定規模6×4.6m、床面積27㎡ほどの竪穴式住居になるであろう。主軸は北53度東である。また4号・5号土坑としたものは、住居隅の壁沿いにハの字状に配置された住居に関連する施設の可能性がある。

1号掘立柱建物（第9図）

A I 区西側に位置する。東側桁行の検出にとどまる。桁行2間6.4m、主軸は（北54°西）である。柱穴間はP1～P2間、P2～P3間ともに3.7mである。P1は楕円形で、120×70cm、深さ55cm、ピット1基と複合か。P2は円形で、径70cm、深さ58cm。P3は楕円形で、径94×70cm、深さ65cm。検出面の標高は11.32mである。

1号土坑（第10図）

A I 区北西端に位置し2号土坑と複合する。切り合いは不明である。平面隅丸方形を呈するものと考えられる。深さ10～15cmを測る。

2号土坑（第10図）

A I 区北西端に位置し1号土坑と複合する。平面隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は推定2×2m、主軸は（北54°東）である。深さは10～15cmを測る。

3号土坑（第10図）

A I 区西端に位置する。平面楕円形を呈し、規模は1.6×0.7m、主軸は（北43°西）である。深さは15～25cmを測る。

4号土坑（第10図）

A I 区中央やや北に位置する。平面隅丸長方形を呈し、規模は2.2×1.2m、主軸は（北67°東）である。深さは18cmを測る。5号土坑と「ハ」の字状にほぼ直交する。

5号土坑（第10図）

A I 区中央やや東に位置する。平面隅丸長方形を呈し、規模は2.2×1.15m、主軸は（北16°西）である。深さは15～18cmを測る。4号土坑と同規模である。

6号土坑（第10図）

A I 区中央の東側に位置する。平面楕円形を呈し、規模は2.4×1.95m、主軸は（北30°西）である。深さは25～35cmを測る。

7号土坑（第3図）

A I 区中央の北側、2号土坑と4号土坑の間に位置する。平面楕円形を呈し、規模は0.8×0.7m、主軸は（北35°東）である。深さは43cmを測る。

1号溝（第11図）

A I 区北端に位置し北西方向に伸びるものと考えられる。調査区端部では他の溝と複合している。幅は45～105cmほどで、深さは25cm前後である。

2号溝（第11図）

A II 区東端に位置し北西方向に伸びるものと考えられる。幅は105～140cmで、深さは26～40cmである。

3号溝（第5図）

A II 区東側に位置するが方向は不明。幅は45～105cmほどで、深さは6～11cmである。

4号溝（第3図）

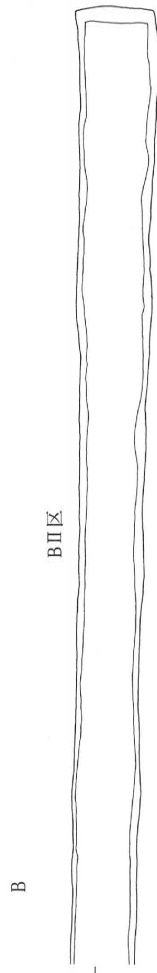
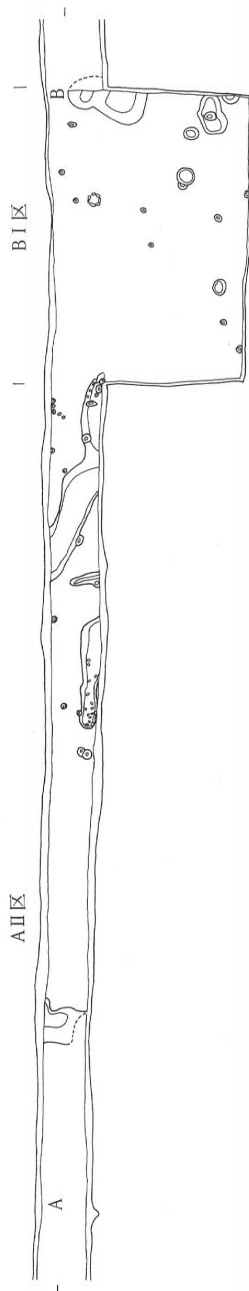
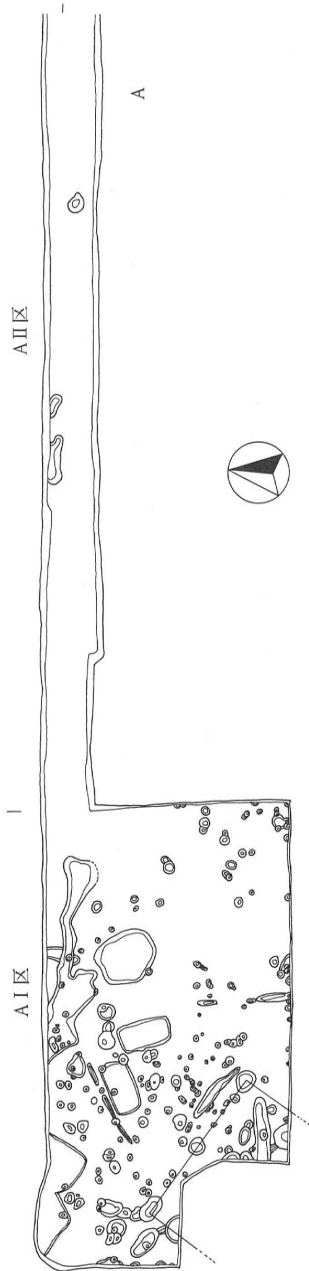
A I 区南西部に位置するが、長さは2.7mと短い。方向は北西である。幅は23～40cmで、深さは8～23cmである。は2.7mと短い。方向は北西である。

5号溝（第3図）

A I 区南西端に位置し西方向に伸びるものであろう。幅は60～75cmで、深さは12～15cmである。端部において土器が出土している。

6号溝（第3図）

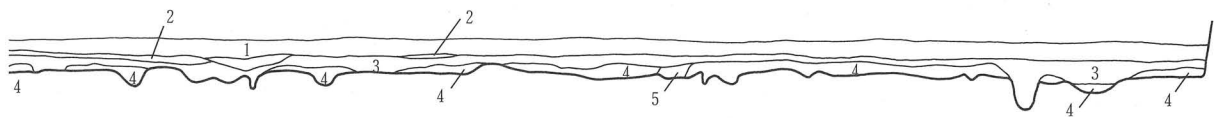
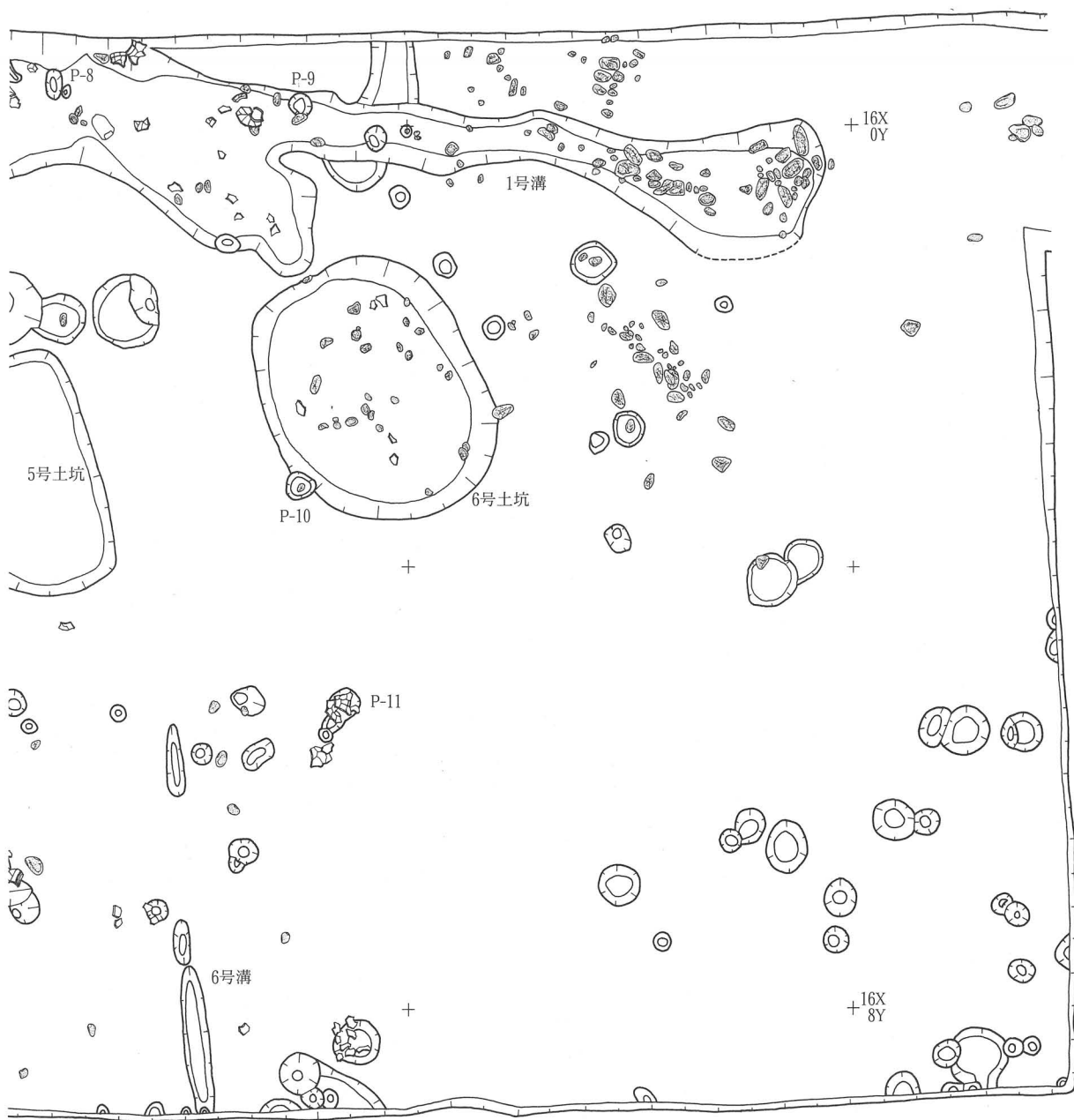
A I 区南端中央に位置し、残存状況は悪いが北方向に伸びるものであろう。幅は20～25cmで、深さは4cmと浅い。

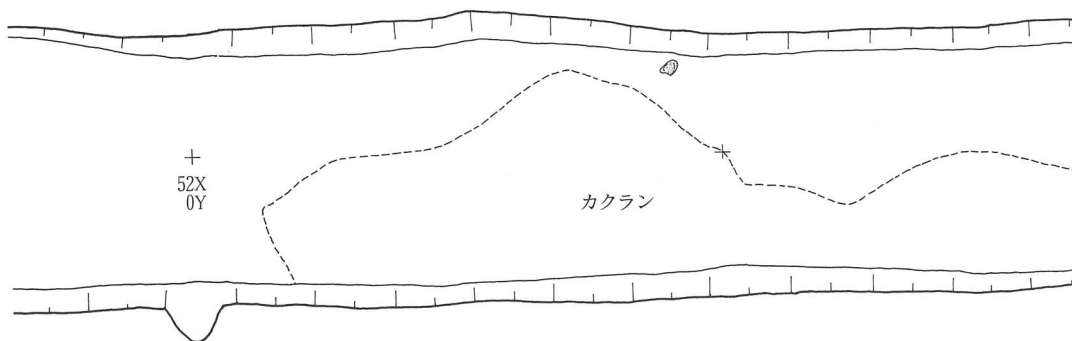
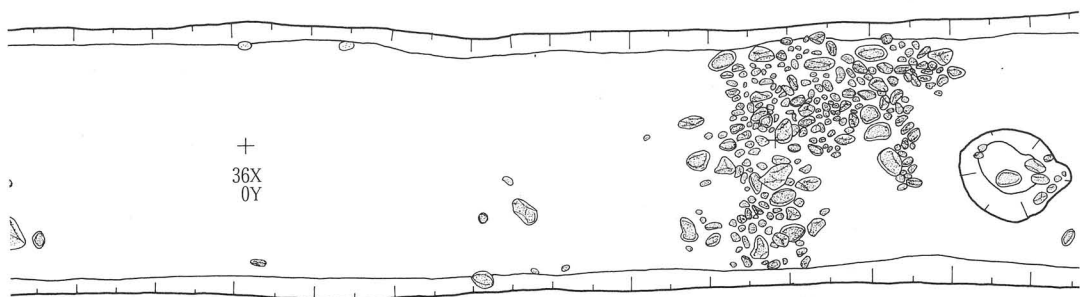
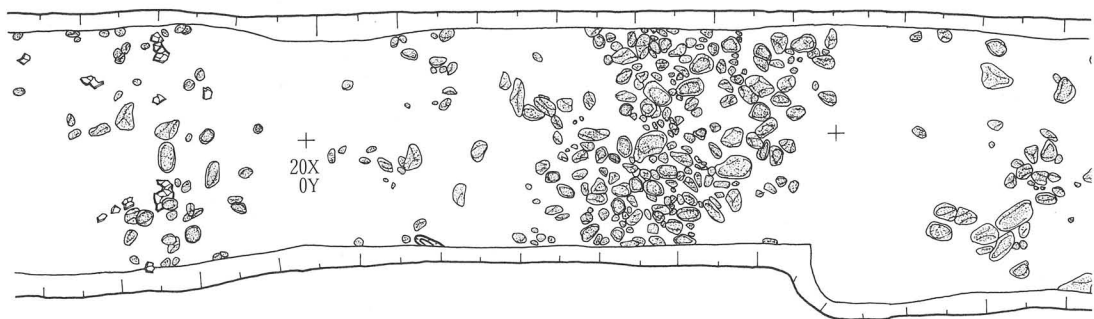


第2図 遺構全体図 (1/300)

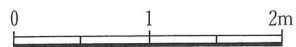
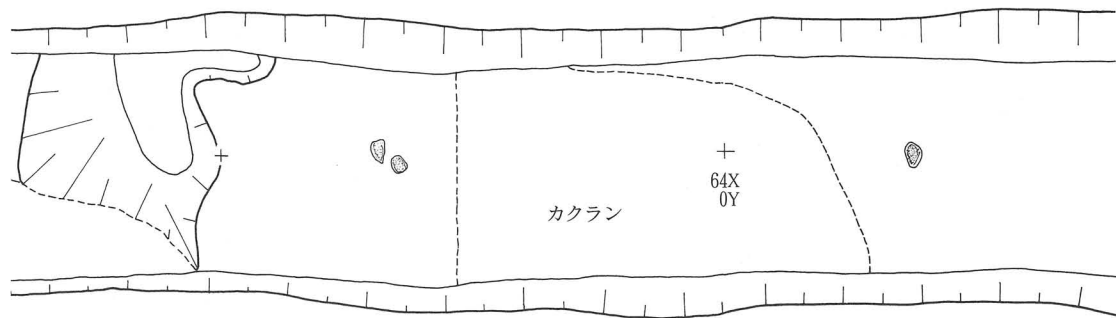
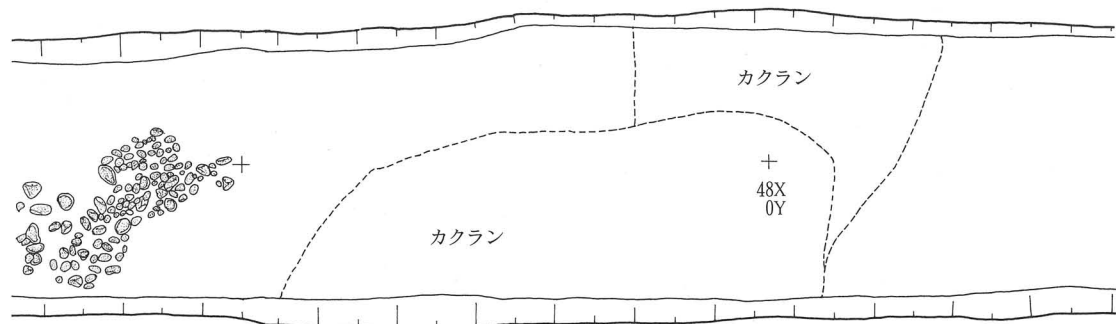
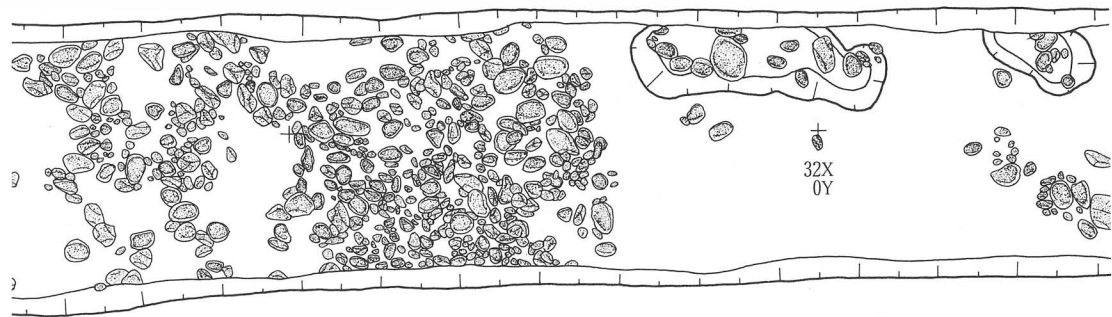


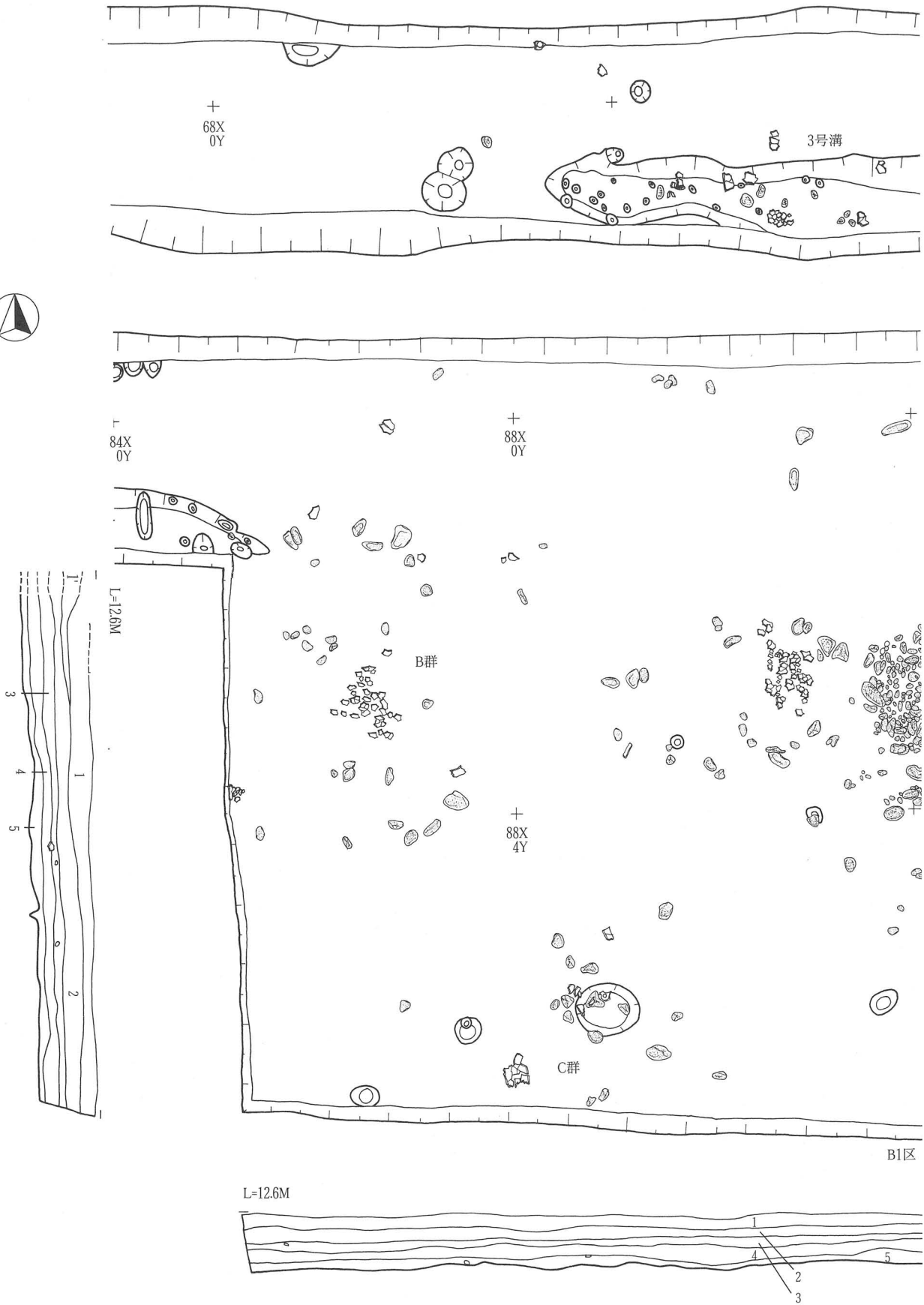
第3图 AI区遺構図 (1/60)



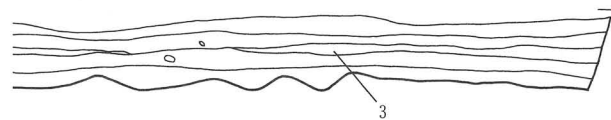
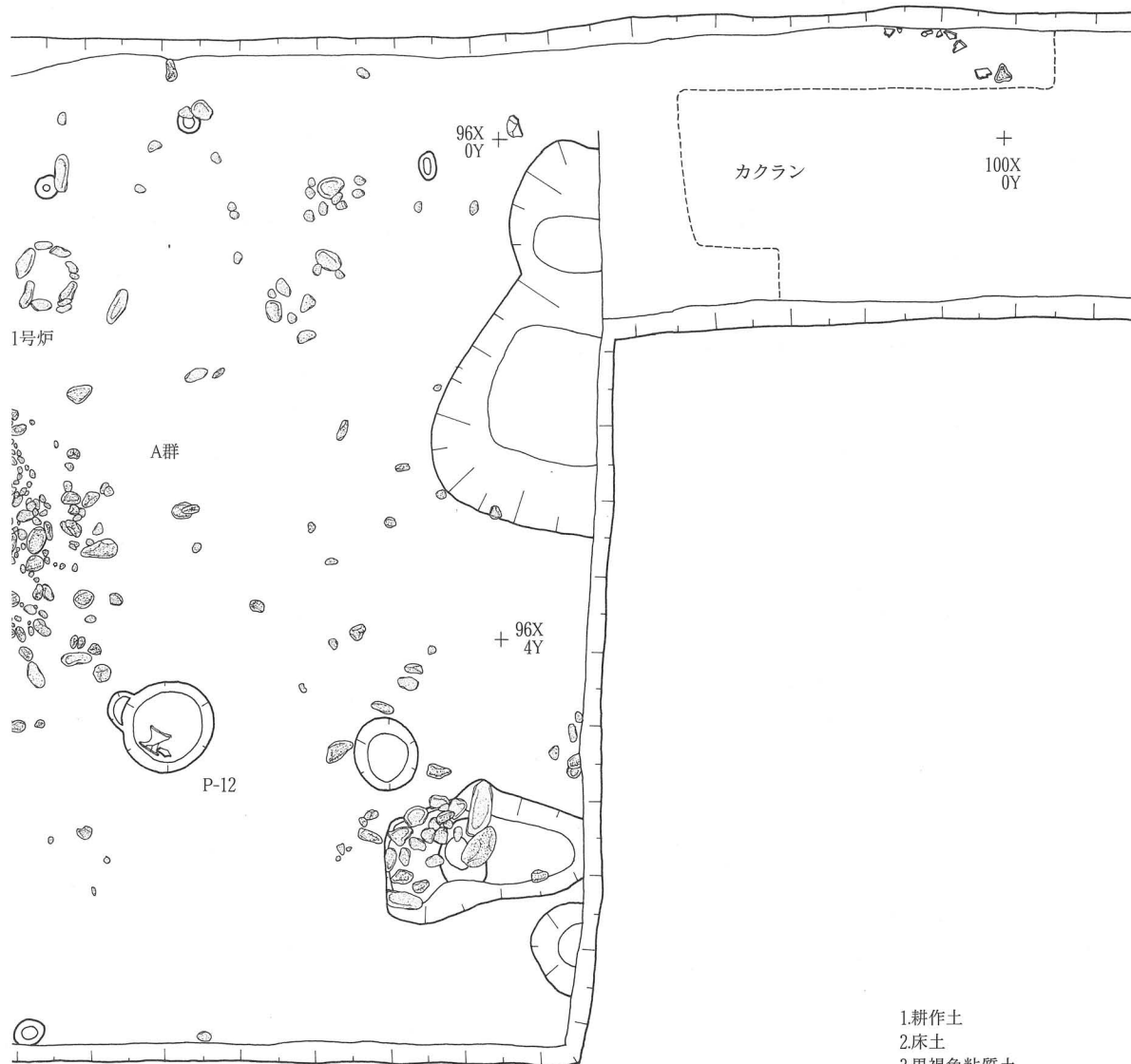
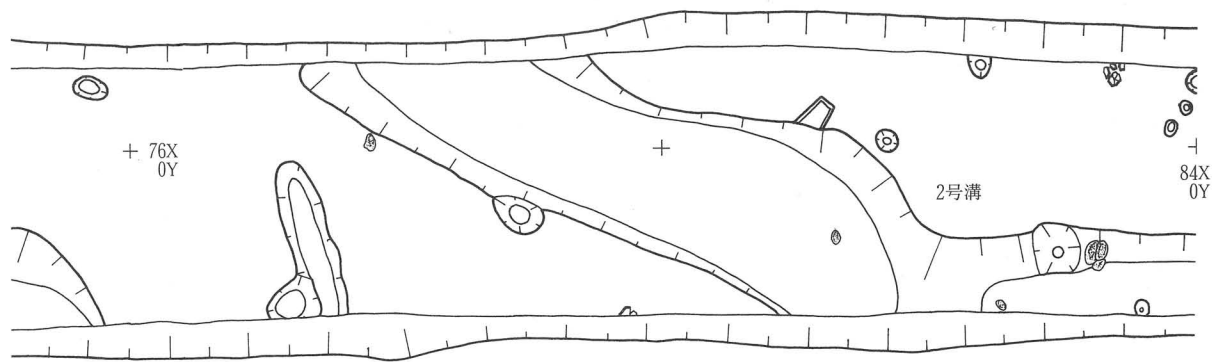


第4図 A II区遺構図 (1/60)

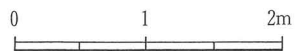


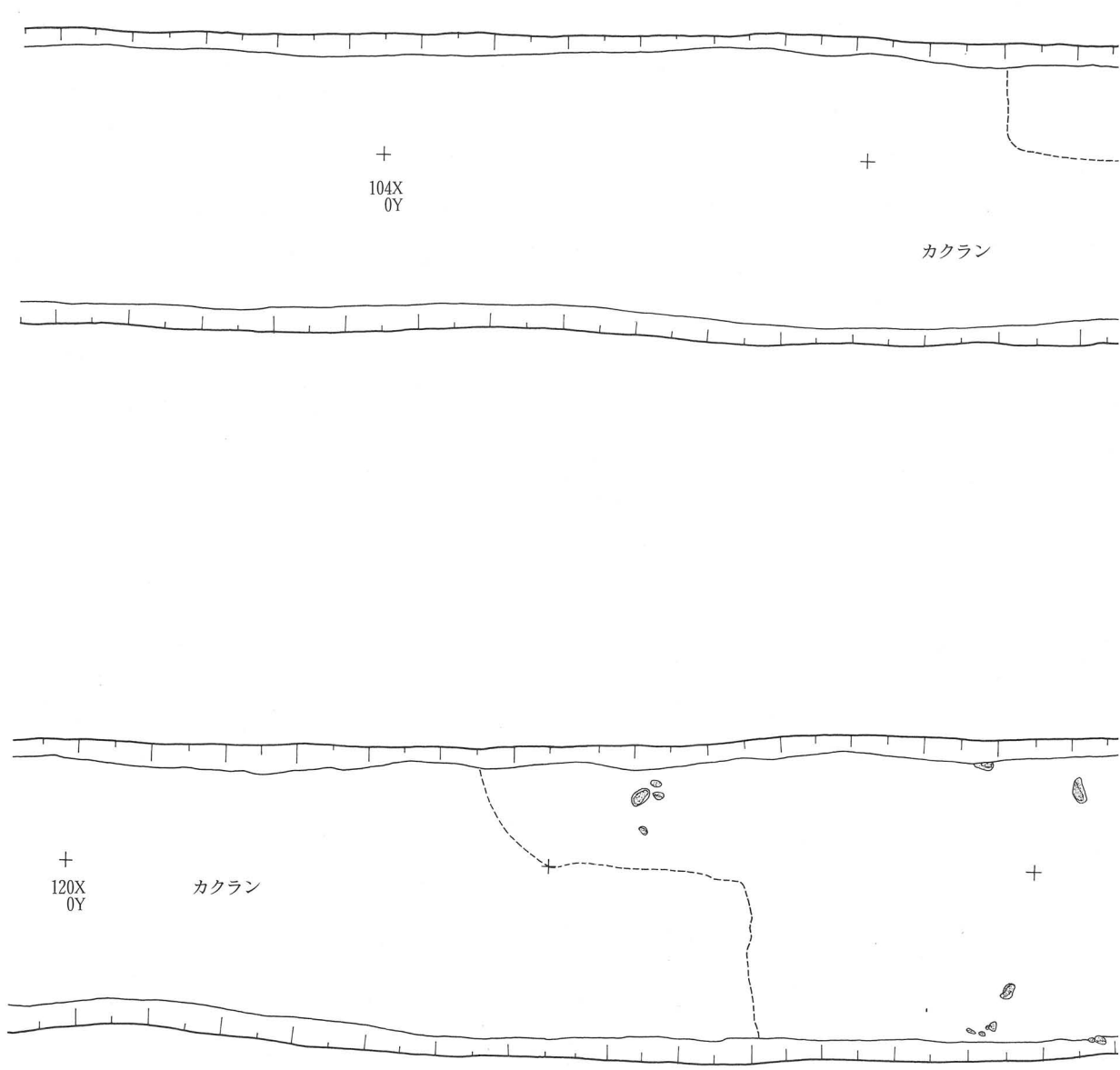


第5图 A II · B I区遺構图 (1/60)

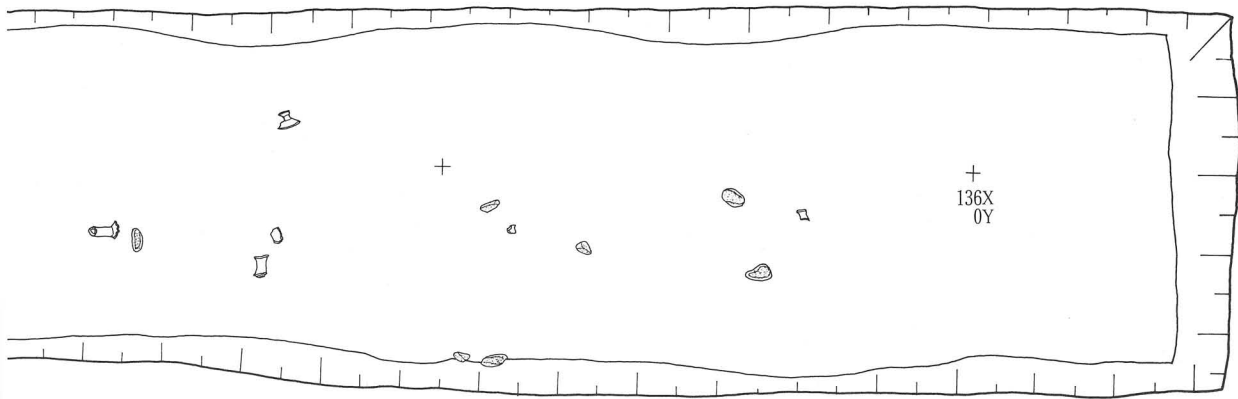
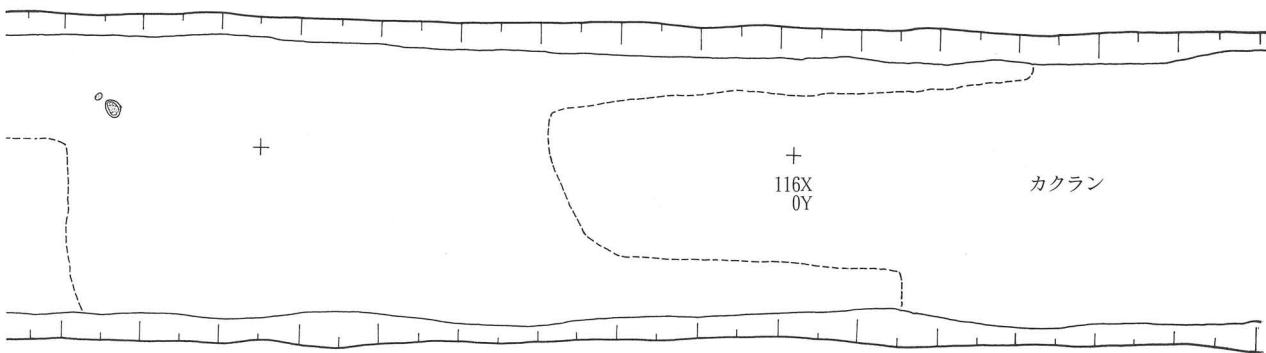


- 1.耕作土
- 2.床土
- 3.黒褐色粘質土
- 4.茶褐色粘質土
- 5.黄灰色粘質土

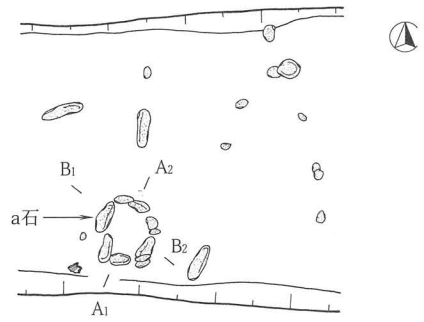




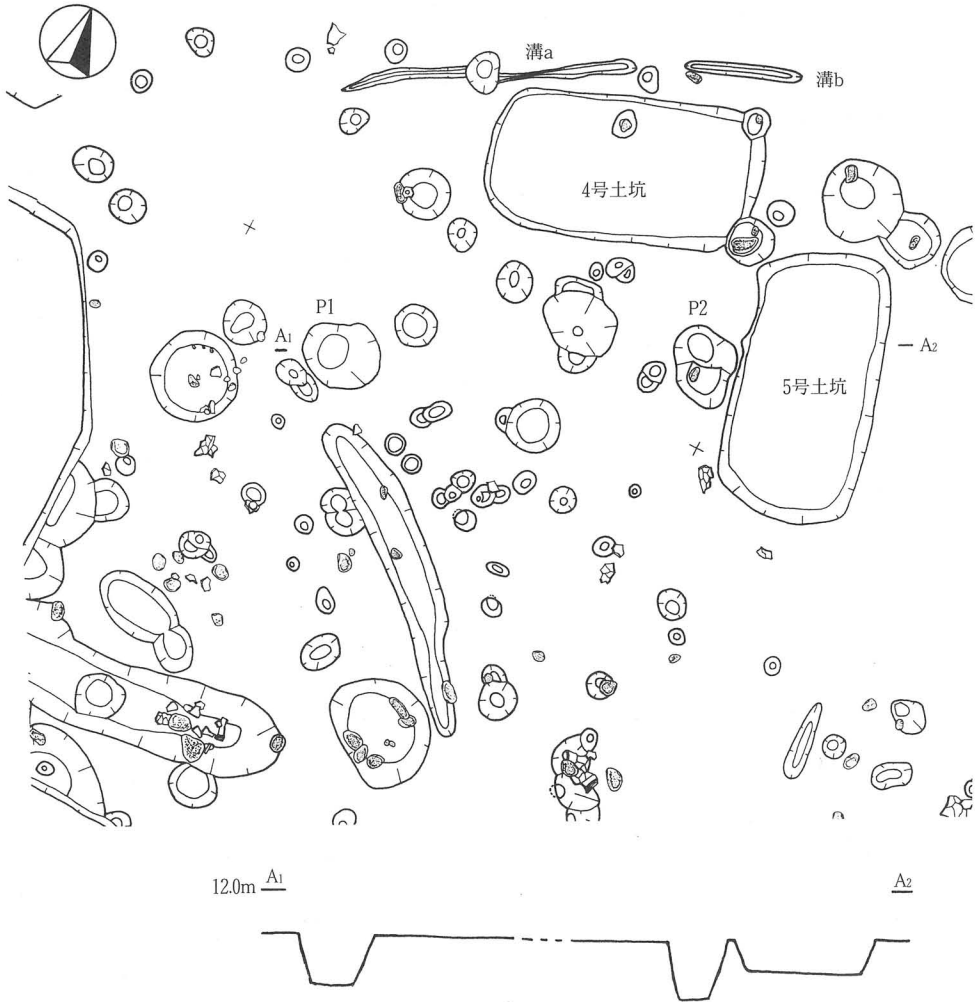
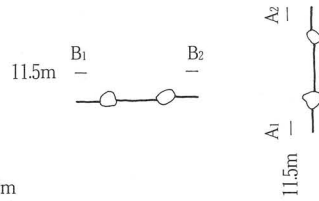
第6図 B II区遺構図 (1/60)



(a石は第28図1)



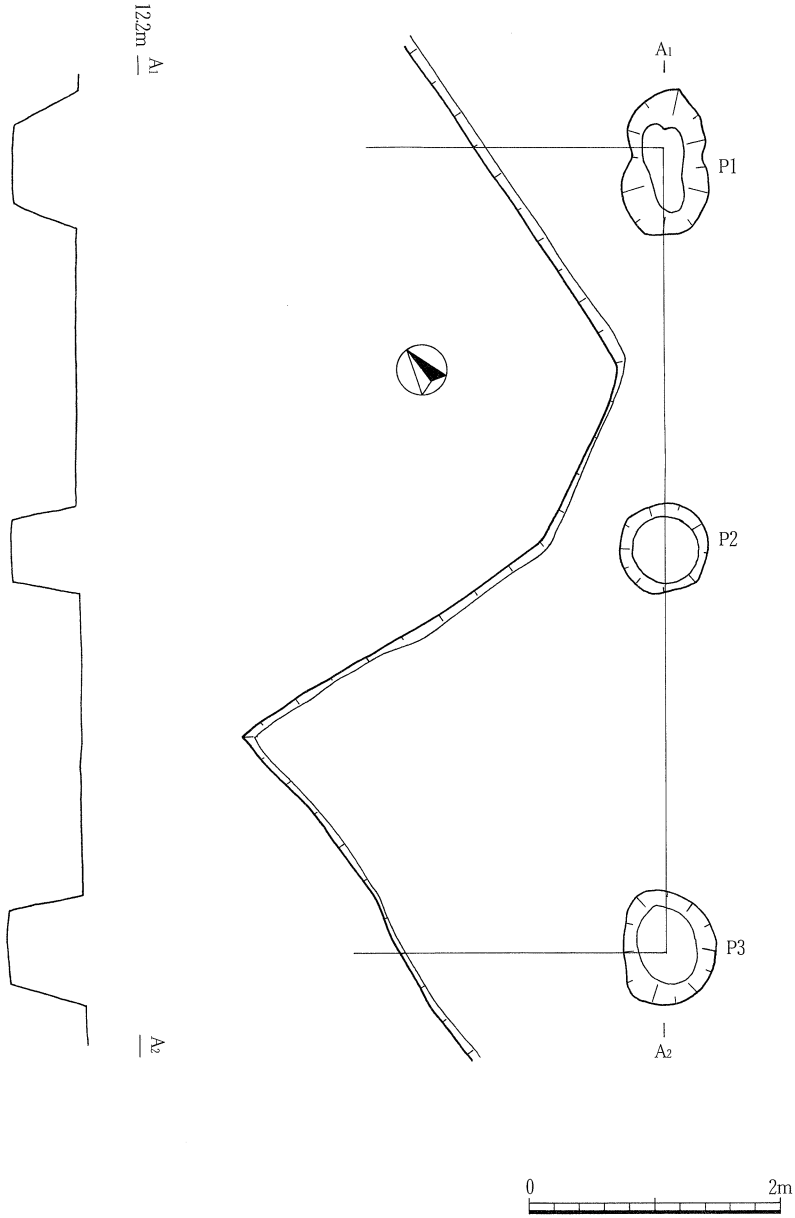
第7図 1号炉 (1/60)



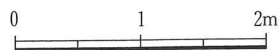
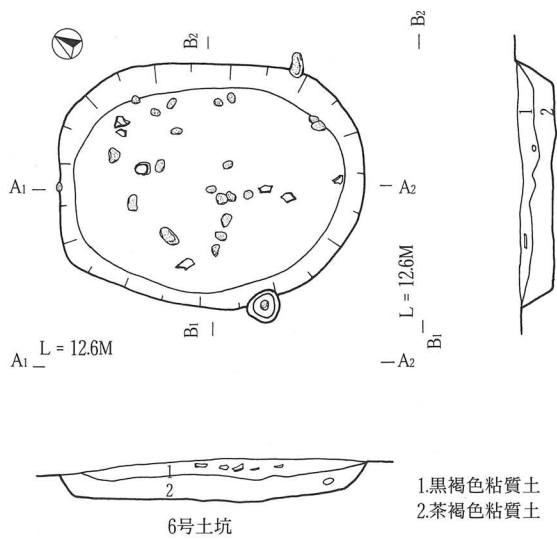
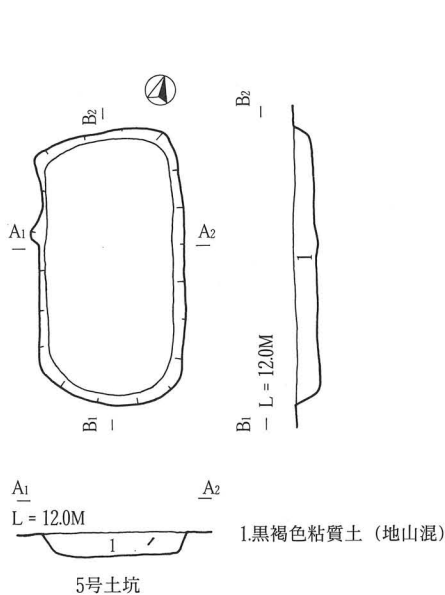
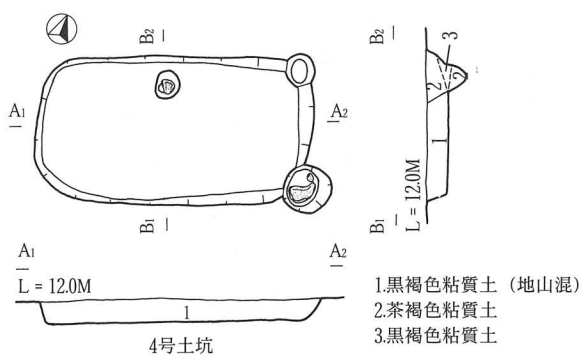
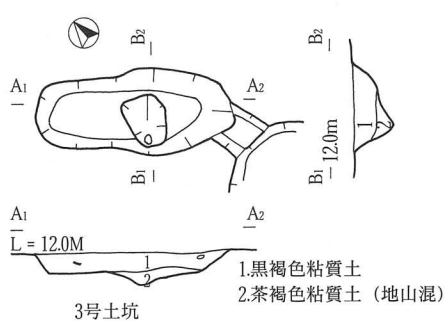
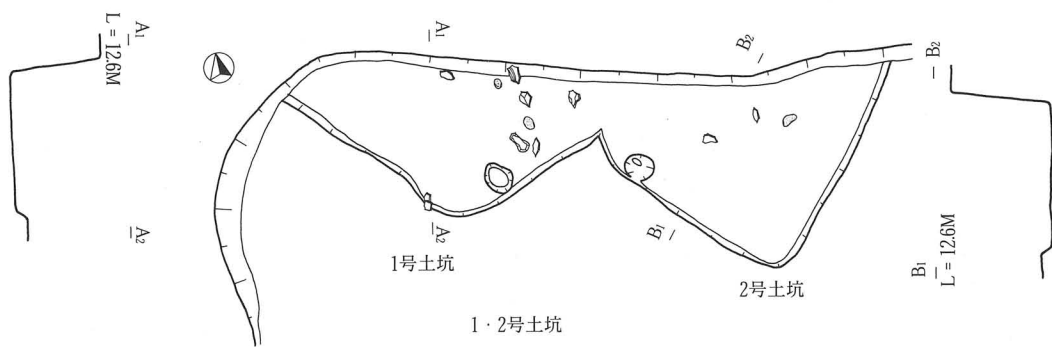
12.0m A1

A2

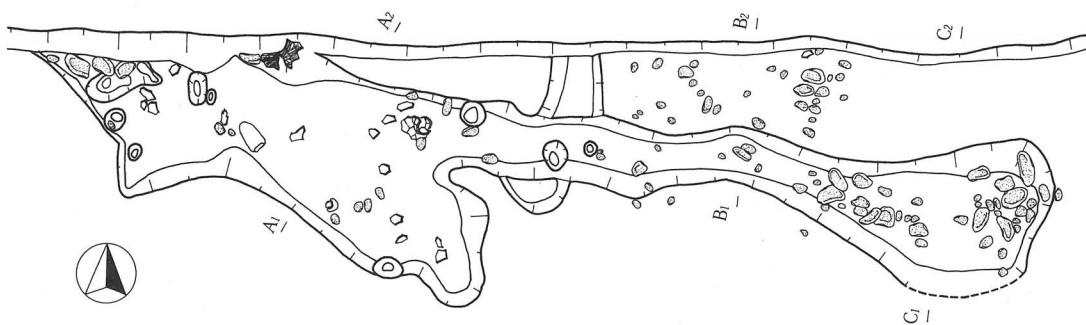
第8図 1号住居 (1/60)



第9图 1号掘立建物 (1/60)



第10图 A I区1~6号土坑 (1/60)



A₁
L = 12.6M



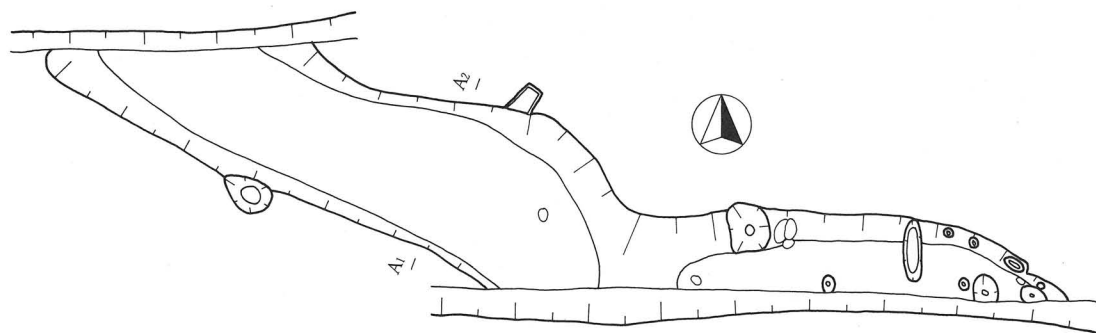
B₁
L = 12.6M



C₁
L = 12.6M



1号沟 (A I 区)

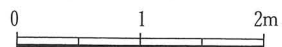


A₁
L = 12.6M



A₂

2号沟 (A II 区)



第11图 A I · A II 区沟 (1/60)

第3節 遺物

1 縄文時代

土器は、縄文時代後期（1～78）と晩期（79～94）に大別できる。この二時期の土器群はそれぞれ地点を異にし、後期土器群のほとんどはB I区から、晩期土器群はA I区北側から出土している。

まず、出土状況について若干の説明を加えておきたい。図化した後期の土器群のうち、A I区出土の8・16・79とA II区からの42、B II区からの71を除き他はすべてがB I区からの出土である。10はA I区とB II区の土器が接合している。出土位置が明確な土器の出土状況をみると、B II区の北東部と西南部出土のものとして2つの区域に分布が分かれる。さらに、土器の分布は第2節の遺構で述べた自然石群のA群（北東部）・B群（西部）・C群（南西部）の分布とおおまかであるが重なる状況を呈す。北東部の1号炉周辺のA群から、4・6・13・17・20・24・25・27～30・33・34・38～40・46～49・52～55・59・62・65・70・73・77が出土した。西部のB群では9・10・12・32・56・57である。南西部のC群からは43・78が出土した。これらB I区の土器群は淡黒色粘質土とこの直下の黄灰色砂質土から出土した。しかし、両層間の土器接合例が多いことから一括して報告する。晩期の土器群は第1期のトレンチ調査時のA I区付近において出土したもので、他の地区では見られなかった。

(1)後期の土器

有文深鉢（第12・13図1～37・39・40）

有文の深鉢で全体の器形を窺えるものはなく、口縁部破片の提示にとどまる。口縁部の形態は外反し緩い波状口縁をなすものと、平縁のものがある。口唇部の形態により、A類：面を持ち縄文を施文するものが多いもの、B類：口唇部が先細りするもの、C類：端部が肥厚し丸く仕上げられるもの、に区分できる。A類及びB類は口縁部に沈線と斜縄文による文様帯をもつものがほとんどである。

A類 1～4は縦位の沈線により口縁部文様帯を区画するものである。1～3は同一個体である。沈線を引いた後RL縄文を充填する。波頂部の口唇部には棒状具によって半円状に押圧がくわえられる。5・23・25・49の個体でも確認できる。4の文様は区画内に蛇行沈線を施すもので、RL縄文が充填される。7～7・20は渦巻き状文を持つものである。沈線施文後RL縄文を充填する。5～7は同一個体であろう。17は横位沈線を逆「ノ」字状に折り返すもので、口唇部はA類とB類の中間的である。LR縄文が充填される。18・19は沈線端部をつの字状にするもので、LR縄文を充填する。19の頸部以下は原体の違う太い縦位のRL縄文を施す。22～25・27～30平行沈線をもつが、破片のため文様構成は不明といえる。22・23は同一個体。24はRL縄文地に沈線を施文する。22・28・29はLR縄文を、25・30はRL縄文を充填する。36は関東地域の影響を受けたもので、口縁部に刻み目隆帯をもち、この下には斜行する磨消縄文帯をもつ。

B類 8～16・26は同一個体と考えられるもので、沈線の幅は5～6mmとやや広い。10より文様は、口唇部から第1条目の沈線が、逆Z字状に屈曲し、この下部に11～13・16の幾何学的文様帯をもつものであろう。文様帯にはRL縄文を充填し磨り消しとし、この下は19同様、原体の異なる太い縦位のRL縄文の痕跡がみられる。32は無文地に横位沈線がひかれるものである。

C類 33～35は無文地に横位の平行沈線が施されるものである。

浅鉢（第13図37～39・41～47）

浅鉢の形態は、口縁部がくの字に屈折する38・43、逆ハの字状に大きく開く41・44・45・46・47、内湾する37・39・42がみられる。38は口縁端部を外側へ直角に折り沈線を加えるもので、外面に赤彩が残る。浅鉢43の小突起は、左側に短沈線を連続する緩い立ち上がり部分と、内面には円形刺突をもつ。屈折した口縁部には5本の平行沈線がひかれ、最上部の沈線内には先端三角形のへら状具により連続刺突が加えられている。器高131mm、推定口径254mm、屈折部径330mm、底径70mmを測る。41は口唇部に細かいRL縄文を施文する。44～46は内面に1条の沈線をもつ。37・39は壺状の器形に近いもので細かいLR縄文を施す。42の遺存状態は良くないが、突帯ぎみとなる部位の沈線間にはかすかにRL縄文の施文を確認した。

粗製・無文深鉢（第14・15図48～68）

全体の器形のわかるものは少ない。緩い波状口縁と平口縁があり、波状口縁は49～51の3点を図示したにすぎない。口縁部の形態から、外反するもの48～55・67、外反し端部で小さく内湾ぎみとなるもの56～59、直線的に開くもの60・61、内湾するもの62～66・68と分類できる。口唇部に面をもち縄文を施文するものが多い。62は推定口径275mm、推定胴部最大径307mm、底径118mmを測り、器高は450mm程度であろう。67・68は無文である。縄文施文の土器はすべてにRL縄文が施されている。

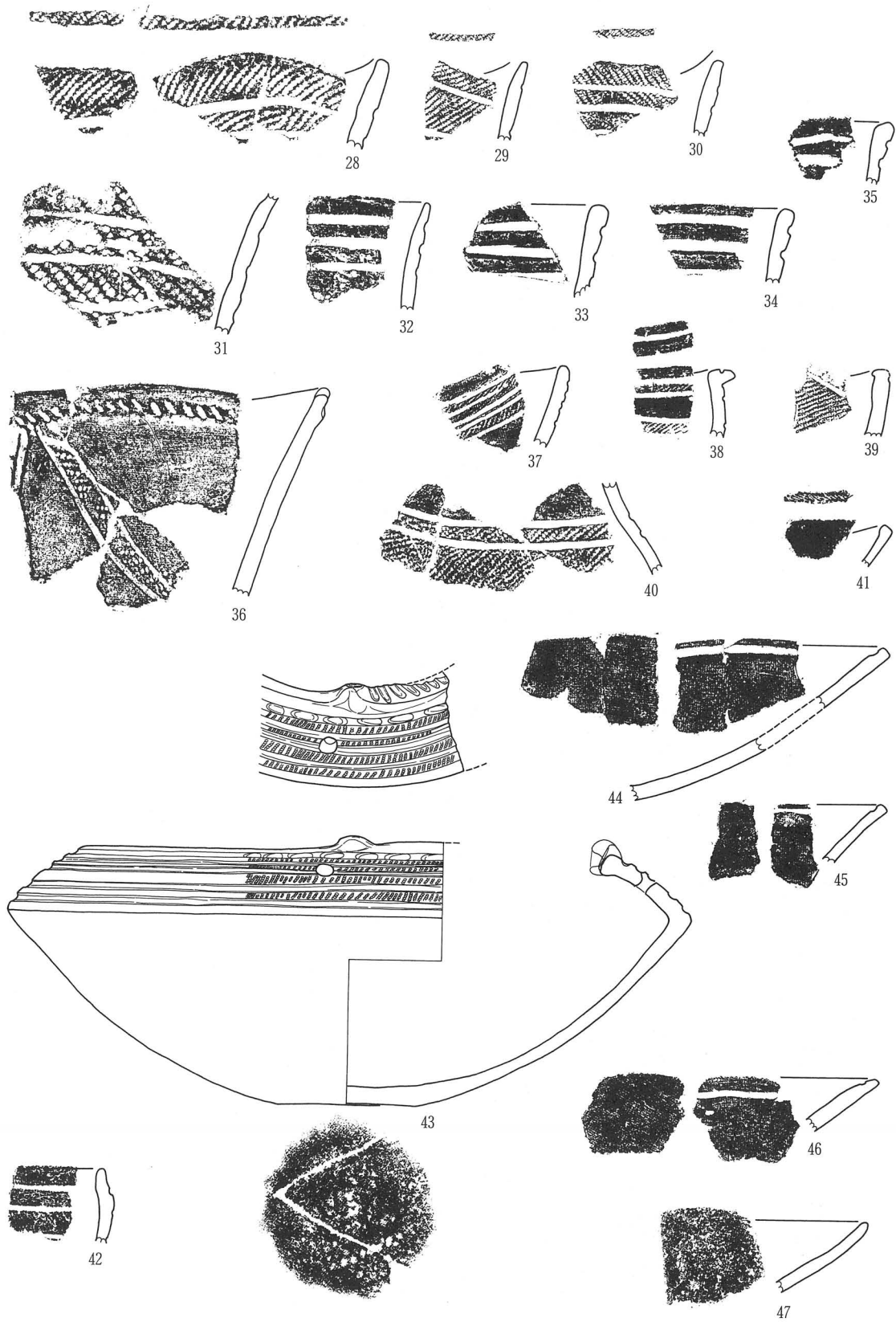
底部（第15・16図69～81）

底面の圧痕は不明の70を除きすべてが網代圧痕であった。また網代圧痕は詳細不明の78を除き、他の個体は2本越え2本潜り1本送りの編み方である。71・80・81は外面無文のもので、71は68の底部である。外面に縄文を施文するものは、70がLR縄文で他はすべてRL縄文である。

69は底径98mm、70は底径64mm、71は底径108mm、72は底径104mm、73は底径143mm、74は底径110mm、75は底径106mm、76は底径113mm、77は底径110mm、78は底径98mm、79は底径108mm、80は底径88mm、81は底径70mmである。



第12図 繩文土器 1 (1/3)



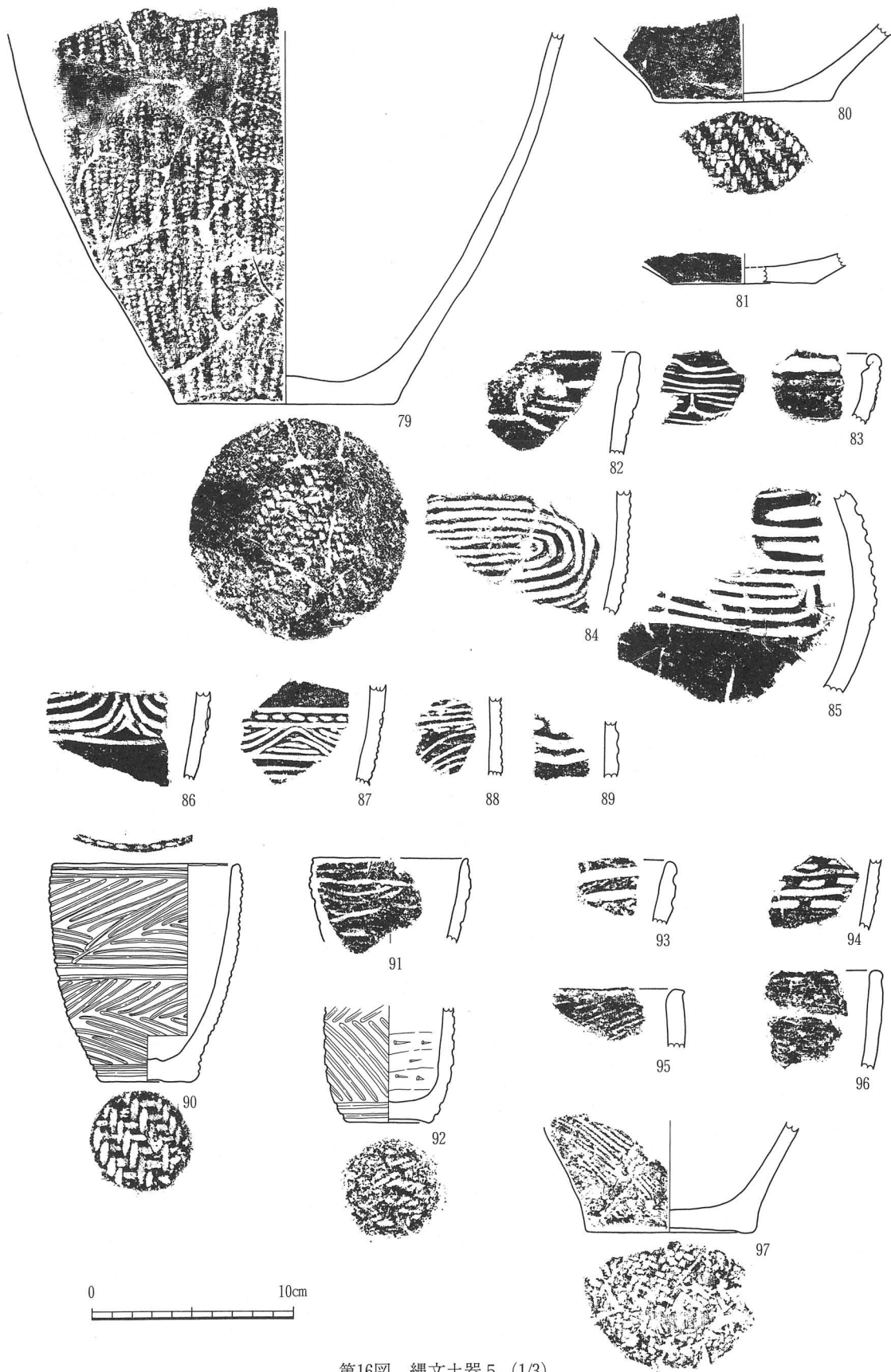
第13図 縄文土器 2 (1/3)



第14図 縄文土器 3 (1/3)



第15図 縄文土器 4 (1/3)



第16図 縄文土器 5 (1/3)

(2)晩期の土器 (第16図82~97)

82は工字状文をもつ深鉢であろう。83の浅鉢は工字状文をもつ。内面に沈線を入れ、口縁端部を内側に折り返している。84は楕円状の工字状文をもつ深鉢の口縁部か。85・86は胴部から口縁部にかけて内湾する器形の深鉢で、数段の工字状文をもつであろう。浅鉢87の文様は変形した工字状文か。88・89の器形は不明。88には沈線、列点、多重弧線文がみられる。89は2条沈線の上に列点文を配置する。90~92は小型の深鉢である。90は2条の沈線の区画内に横位の矢羽状沈線文を施す。口径92mm、底径44mm、器高109mmを測る。底面の網代圧痕は2本越え2本潜り1本送りである。91は推定口径76mmで口縁端部の2条沈線下に2重の弧線文をもつ。92は90と同じく横位の矢羽状沈線文をもち、底径41mmを測る。底部圧痕は不鮮明であるが、2本越え2本潜り1本送りの網代圧痕であろう。93は条痕地に平行沈線を施す深鉢である。94は沈線と列点文を交互に繰り返す文様の深鉢であろう。95・96は条痕文の深鉢である。条痕文をもつ底部97は底径80mmを測る。底面の網代圧痕は2本越え2本潜り1本送りである。

2 弥生時代

(1)中期の土器 (第17図)

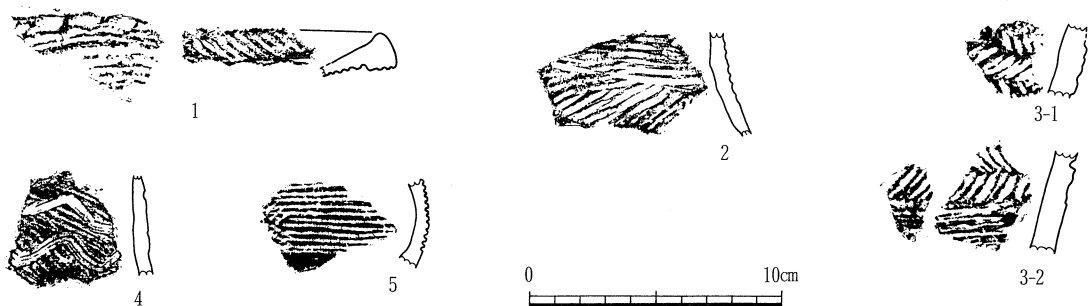
条痕文系の土器1~4がAⅠ~AⅡ区にかけて出土した。1は壺の口縁部にあたる。口唇部の幅広の面に斜条痕を入れ、この端下部を連続して押圧する。2は壺の肩部である。3・4の器形は不明である。へら状具で施文する5は時期不明の土器である。

(2)後期の土器

AⅠ区遺構出土の遺物

1号土坑出土土器 (第18図1~4)

1は口径26.6cmを測る大型の無文有段口縁の甕である。口縁部は短く垂直に立ち上がり、内・外面ともにナデで調整する。また、頸部は外面のハケが段部直下にまで及び内面はケズリ調整を施している。2は小型の無文有段口縁の甕である。口径14.2cmを測り、口縁部は強いつまみナデのため外面が凹む。体部は内面にケズリを施すが外面は磨耗のため不明である。3・4はともに内・外面にハケ調整を施す平底の底部である。3は底径9.4cm、4は同じく6.5cmを測る。



第17図 弥生時代中期の土器 (1/3)

2号土坑出土土器（第18図5）

5は小型の無文有段口縁の甕である。口径は10.2cmと1号土坑の2よりもひとまわり小さい。口頸部は小さな有段状を呈し内・外面をナデで仕上げる。体部は内面にケズリを施すが外面は磨耗により不明である。

3号土坑出土土器（第18図6・7）

6は口径14.4cmを測る無文有段口縁の甕である。口頸部は外面がナデ、内面は口縁部がナデ、頸部にハケを施し頸部以下をケズリ調整する。7は底径5.4cmを測る。外面はハケ調整の後ミガキを施し内面はケズリで調整する。

7号土坑出土土器（第18図8）

口径12.5cmを測る把手付きの鉢であろう。椀形を呈し内・外面にミガキ調整を施す。把手の痕跡は現状で1箇所のみ確認できる。

6号土坑出土土器（第18図9～16）

9は疑凹線を有する有段口縁の甕である。口径は14.7cmを測り直立する口縁部に7条の擬凹線を施し、口頸部は内・外面ともにナデ、内面頸部以下をケズリで仕上げる。10は口径13.2cmを測る小型の無文有段口縁の甕である。小さな口縁部はつまみナデにより外面が外反する。体部は外面がミガキ、内面はケズリ調整を施す。11は底径4.2cmを測る。外面にナデ、内面にケズリを施し外底面はケズリで仕上げる。12は口径14.3cmを測る有段口縁の壺である。短く外反する口縁部の稜は鋭く、口頸部は内・外面ともにミガキ、内面頸部以下にケズリを施す。13も同じく有段口縁の壺であるが系譜が異なる。外反する口縁部は長く発達し内・外面ともにミガキを施す。口径は12.4cmを測る。14は口径8.3cmを測る小型土器である。外傾する口縁部の端部を上方につまみ上げ、有段口縁状をなす鉢形を呈する。口縁部は内・外面ともナデ、体部は外面にミガキかと思われる痕跡を残すが概ね内・外面ともに磨耗が激しい。15は口径29.1cmを測る高坏の坏部である。ほぼ水平な坏底部に大きく外反する口縁部を持つ。端部は面取りされ内・外面ともに丁寧なミガキを施す。相対的に口径に対して坏部が浅い。16は足裾部の小片であり、底径は推定で17.9cmを測る。内・外面ともに丁寧なミガキを施している。

1号溝出土土器（第19図1～9）

1は外反する口縁部に9条の擬凹線を有する有段口縁の中型甕である。端部は先細りせず丸縁に仕上げ、内面には指頭圧痕を密に施す。また頸部内面にはハケ調整の痕跡が認められる。口径は19.8cmを測る。2は口縁端部が屈曲して有段状を呈する短頸壺である。端部をつまみナデし、頸部は磨耗が激しいが外面に僅かにハケ調整痕が見られる。内面肩部以下はケズリを施す。口径は15.0cm。3は口径14.8cmを測る壺である。頸部下半を欠くが2よりはやや長いようである。小さな有段状の口縁部を持ち屈曲部内面にはハケ調整痕が認められる。4は底径4.5cmを測る平底

の底部である。磨耗外面激しく内面にケズリ調整が見られる以外は不明である。5は内・外面にハケ調整を施す底部穿孔土器である。底径は3.0cmを測り穿孔は両面よりおこなわれている。6は底径3.4cmを測る壺の底部である。内・外面をミガキで仕上げ、底部は中凹みする。外面下端に剥離痕がみられる。7は口縁部が大きく外反して伸びる高坏である。口径は33.7cmを測り内・外面ともに丁寧なミガキを施す。口縁端部は丸縁を呈する。8は裾部に4箇所の透孔を持つ器台の筒胴部である。外面の調整は磨耗のため不明であるが、内面は透孔以上をケズリ、以下をハケで調整する。9は長さ98.5mm、幅39.0mm、厚さ33.5mm、重さ209.5gを測る砥石である。実測図の上下面を除く4面すべてを用いており、表および裏面には1～4条のやや深い擦痕が見られる。断面形は台形を呈し、石質は白色凝灰岩である。

4号溝出土土器（第19図10）

実測し得たものは蓋のつまみ部片1点のみである。つまみ部径3.9cmを測り頂部は浅く凹み平坦な面をなす。調整は内・外面ともに磨耗のため不明である。

5号溝出土土器（第19図11～16）

11・12はともに口縁部につまみナデを施した無文有段口縁の甕である。外反する口縁部は中程で器壁が薄くなり、端部は丸縁に仕上げる。11は口径19.3cmを測り口頸部内・外面にナデを施す。胴部は外面が磨耗のため不明であるが内面はケズリで調整する。12は口径20.6cmを測り口頸部内・外面は同じくナデである。胴部は内面がケズリ、外面はハケで調整し肩部にハケ状工具によるキザミを巡らす。13は口縁端部が緩く上方に屈曲して有段状をなす甕である。口径は14.6cmを測り口縁部内・外面をナデ、胴部外面をミガキ、内面をケズリで仕上げる。14は底径4.3cmを測る平底の底部である。調整は外面はハケの後ミガキ、内面は磨耗のため不明である。15・16はともに棒状脚をなす高坏の脚部である。15は底径15.2cmを測り端部が反転して丸縁を呈する。調整は外面がミガキ、内面は裾屈曲部以上に絞り目が見られ以下をハケ調整する。透孔は全周で5箇所施されている。16は底径15.7cmを測り柱状部は15よりも細い。端部は反転せず平縁に面取りする。調整は外面にハケの後雑なミガキ、内面は裾屈曲部以上にケズリをおこない中程に絞り目を残す。以下は上半にハケ、下半にナデをおこなう。

6号溝出土土器（第19図17・18）

17は口径12.5cmを測る有段状の口縁部を持つ小型の甕である。胴部は丸い偏球状をなし外面をハケ、内面をケズリで調整する。口頸部は内・外面ともにナデで調整する。18は底径3.4cmを測る平底の底部である。内面をハケ、外面をケズリで仕上げる。

ピット出土土器（第20図）

各ピットからはまとまった形での土器の出土が見られないため、ここではそれらを一括して順次記述することとする。なお各土器の出土したピットの別は実測図上に記入してあるのでそちら

を参照願いたい。

1は口径27.0cmを測る大型の壺の口縁部であり頸部が若干屈曲して有段状を呈する。端部は平縁に面取りし、内・外面ともにハケの後ミガキを施す。2は口径17.2cmを測るくの字口縁の甕である。端部は重厚な作りの丸縁を呈し、口頸部は内・外面ともナデ調整を施す。胴部はさほど張らないものと思われ外面にミガキ、内面にケズリを施す。3は底径2.9cmを測る底部である。外面はハケ調整のあとナデを施す。4は器種不明である。径8.4cmを測るが磨耗が激しいため調整はわからない。5は口径21.4cmを測る大型の有段口縁の甕である。やや外反する口縁部には10条の擬凹線を有し、内面には指頭圧痕が見られる。また頸部内面にハケ調整痕が認められる。6は有段状の口縁を持つ広口壺である。口頸部内・外面にミガキを施し内面頸部以下をナデで仕上げる。口径は14.7cmを測る。7～9はいずれも擬凹線を持つ有段口縁の甕である。7は口径13.1cmを測る小型品であり5条の擬凹線が巡る。胴部外面の調整は磨耗のため不明である。8は口径16.1cmを測り、口縁部には4条のヘラ状工具による太い擬凹線が巡る。内面には指頭圧痕が認められる。9は口径18.3cmを測る内屈する口縁部に8条の擬凹線を巡らしている。10・11は無文有段口縁の甕である。10は口径16.3cmを測り、肩があまり張らず長い胴部を持つものと思われる。11は10とは対照的に丸い球胴を持ち形態としては壺に近いものである。体部内面は頸部以下にケズリを施した後肩部までナデ上げており、頸部に指頭圧痕が巡っている。口径は15.1cmを測る。12は口径13.2cm、胴部最大径20.4cmを測る有段口縁の壺である。端部を面取りし、外面には櫛状工具による連続円弧文を施している。体部外面はミガキ、内面はケズリで調整している。13・14は擬凹線を持つ有段口縁の甕である。13は口径19.5cm、14は口径16.9cm、胴部最大径19.7cmを測る。また14は体部外面のハケが段部直下にまで及んでいる。

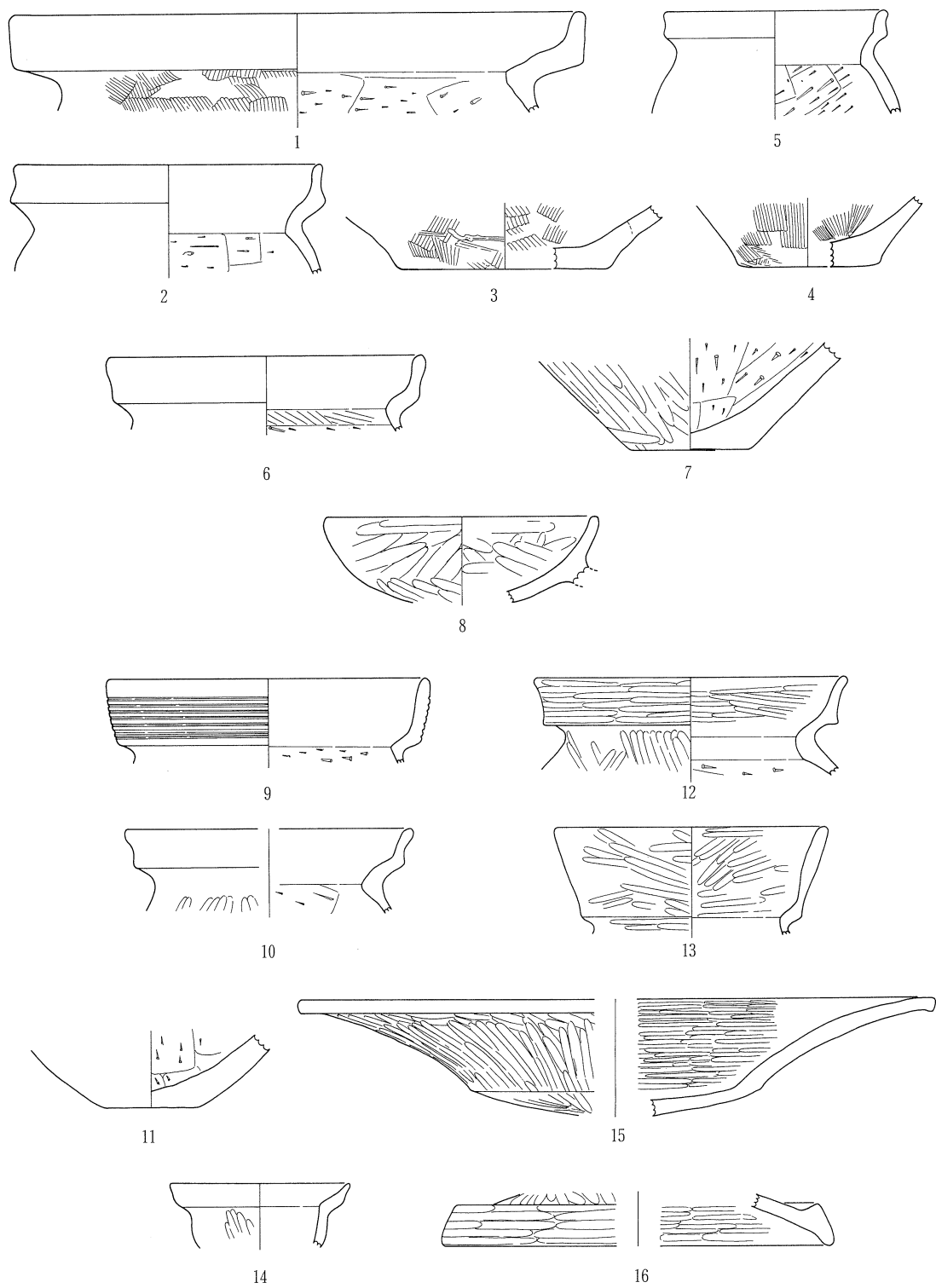
A II区・B I区遺構出土土器（第21図）

A II区、B I区において遺物の出土が見られた遺構は溝2条、ピット1基であるが、それらの殆どが散発的な出土状況を示しているに過ぎないためここでは一括して記述することとする。1・2は3号溝からの出土である。1は口径17.6cmを測る壺である。頸部より外反して開く口縁部は端部でやや屈曲し、弱い受け口状の口縁をなしている。調整は口唇部内・外面をナデ、頸部外面にハケ、内面は上半に同じくハケ、下半屈曲部以下にケズリを施している。2は有段口縁の完形の鉢であり、口径17.6cm、胴部最大径15.0cm、底径2.6cm、器高11.4cmを測る。端部に面取りを施し、内・外面ともに丁寧なミガキで調整する。3・4は12号ピットからの出土である。3は口径18.6cm、底径18.4cm、器高16.4cmを測る完形の器台である。上下にほぼ対称なプローションを持ち、端部にはそれぞれ3条の凹線を巡らせる。類例は西念・南新保遺跡などに見られるが、本例は透かしの形状が円形である。4はつまみ部径3.9cm、口径15.2cm、器高4.9cmを測る大型の蓋である。口径に対して器高が小さく扁平なプローションを呈する。つまみ部は大きく中凹みし指押さえとナデで成形し、体部は外面にハケ、内面上半をナデ、下半をハケで調整し端部はナデで丸縁に仕上げる。5～9は2号溝から出土している。5・6はいずれも擬凹線を持つ有段口縁の甕であり、5は口径16.8cm、6は20.6cmを測る。7は大小の山形を組み合わせた波状

口縁をなすものと思われる。端部は内側へつまみ上げぎみに成型し肩部の張りは鋭い。口頸部は内・外面ともにナデ、体部は外面がハケ、内面がケズリで調整されている。8は高坏の坏部である。口径は推定23.7cmを測り体部がやや深いタイプのものである。端部は上方に向けて面取りし、内面が若干肥厚する。9は口径20.0cmを測るくの字口縁の甕であり、端部を外へつまみ出して垂下させる。調整は外面の口縁部はナデ、頸部以下はハケ調整をおこなう。特に肩部以下には横ハケが見られるようである。内面は口縁部にハケ、頸部以下にケズリを施している。

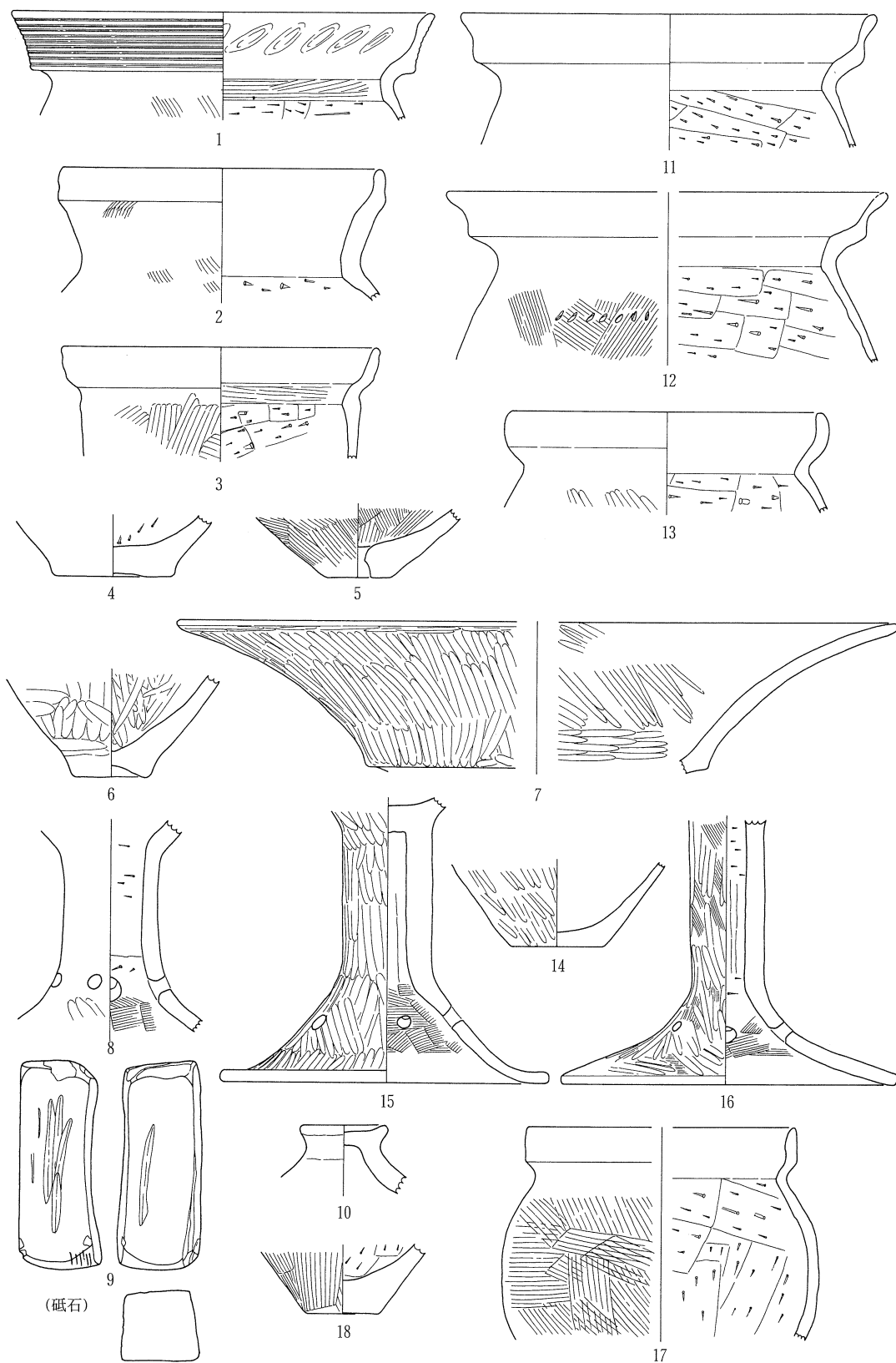
A | 区包含層出土土器（第22図・第23図1～3）

1・2は擬凹線を持つ有段口縁の甕である。1は短い口縁部に擬凹線というよりはヘラ状工具を用いた2条の凹線を巡らせたものである。口径は16.5cmを測り調整は口頸部が内・外面ともナデ、胴部は内面がケズリ、外面は磨耗のため不明である。2は口径15.7cmを測り口縁部には8条の擬凹線を有する。3は口径12.8cmを測る有段口縁の甕であり、内屈する口縁部の外面にハケ調整痕を残す。4は口径11.7cmを測る小型の甕である。器壁の厚い口縁端部を屈曲させて小さな有段風の口縁部を形作る。肩はあまり張らない。調整は口縁部が内・外面ともナデ、胴部は内面がケズリ、外面は磨耗のため不明である。5は口径16.8cmを測る甕であり、くの字口縁の端部をつまみ上げて丸縁に仕上げる。口頸部は内・外面ともナデ、胴部は同じくハケで調整する。6～9はいずれも無文有段口縁の甕である。この内6～8は短い口縁部に強いつまみナデを施しており、9とは製作の意匠において違いをみせる。口径は6が16.6cm、7が15.5cm、8が16.4cmであり9が19.9cmを測る。10は口径14.7cmを測るくの字口縁の甕である。肩部の張りが顕著であり内・外面ともにナデ調整をおこなう。11～13はいずれも小型の有段口縁の壺である。口径は11が12.8cm、12が10.5cm、13が11.0cmを測る。14は台付き無頸壺である。口径8.9cm、胴部最大径16.6cmを測り口縁端部は面取りを施している。口頸部の伸びない本例は宇ノ気町鉢伏茶白山遺跡E地点環溝などに類例を見る。15～22は底部を一括した。この内20は脚台付きの底部であり底径6.4cmを測る。外面は磨耗のため不明であるが内面は体部がナデ、脚台部にはミガキを施している。21・22はともに底部穿孔土器である。内面の調整はいずれもケズリであるが外面は21がハケ、22がミガキで仕上げる。23～27はいずれも蓋である。この内26・27はつまみ部に貫通する孔が穿たれている。第23図1・2は高坏の坏部である。1は口径27.0cmを測り端部が肥厚して指頭状の断面形を呈する。屈曲部の稜は鋭く下方へ垂下する。2は口径推定で31.0cmを測る大型品で、口縁部は2段階に屈曲して大きく外反する。やや肥厚する端部は上面で緩い面を持つがその稜線は明瞭ではなく、坏底部外面の屈曲点も若干垂下するがやはり稜線は鈍い。器壁が厚く全体に重厚な作りである。3は脚裾部である。底径13.6cmを測り端部は丸縁に仕上げる。調整は外面がハケの後ミガキ、内面は柱状部に絞りが目が見られ裾部は上半がハケ、下半がミガキで調整されている。



1~4 1号土坑 5 2号土坑 6·7 3号土坑
 8 7号土坑 9~16 6号土坑

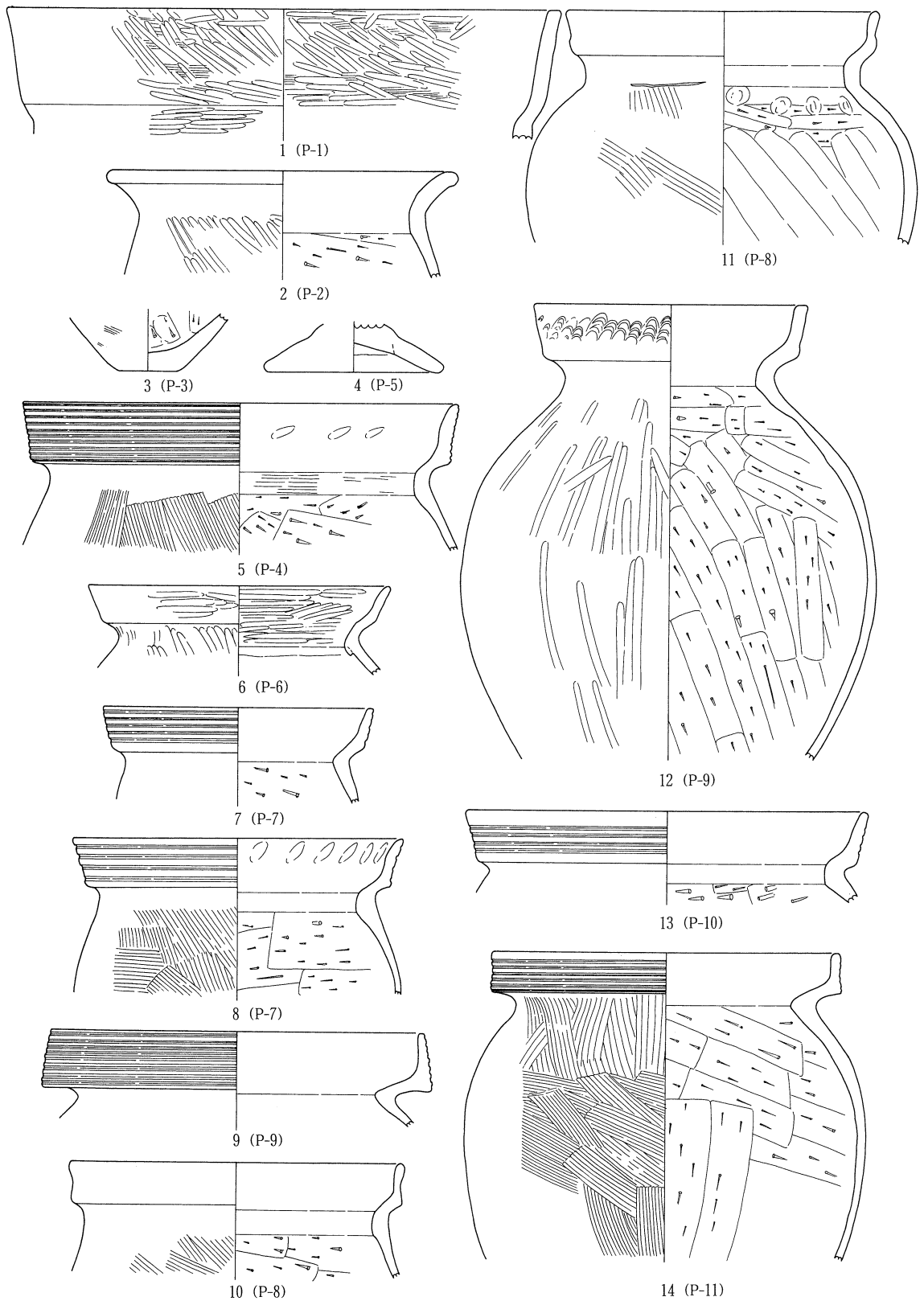
第18图 A I区土坑出土土器 (1/3)



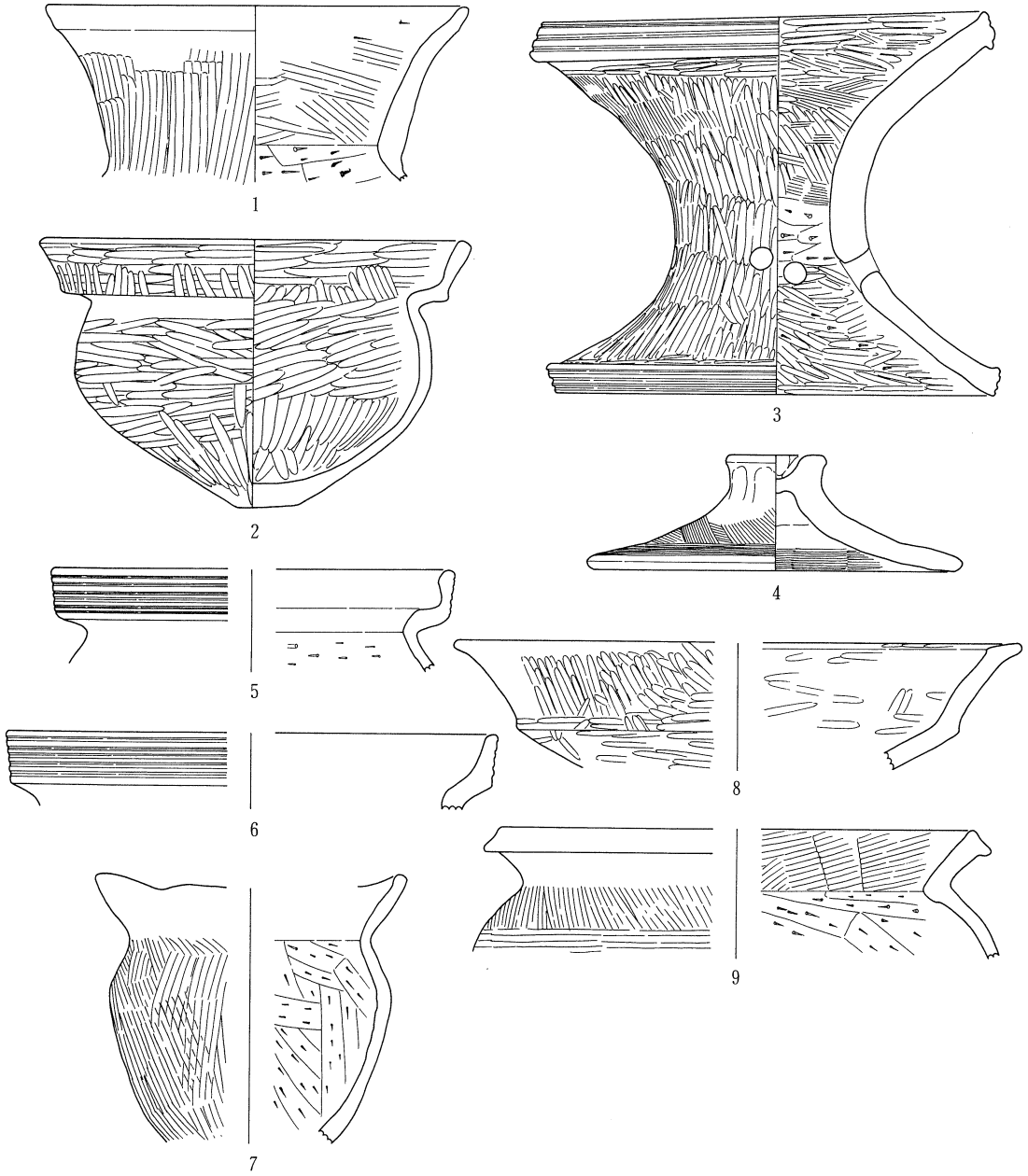
1~9 1号溝 10 4号溝

11~16 5号溝 17·18 6号溝

第19图 A I区溝出土土器 (1/3)

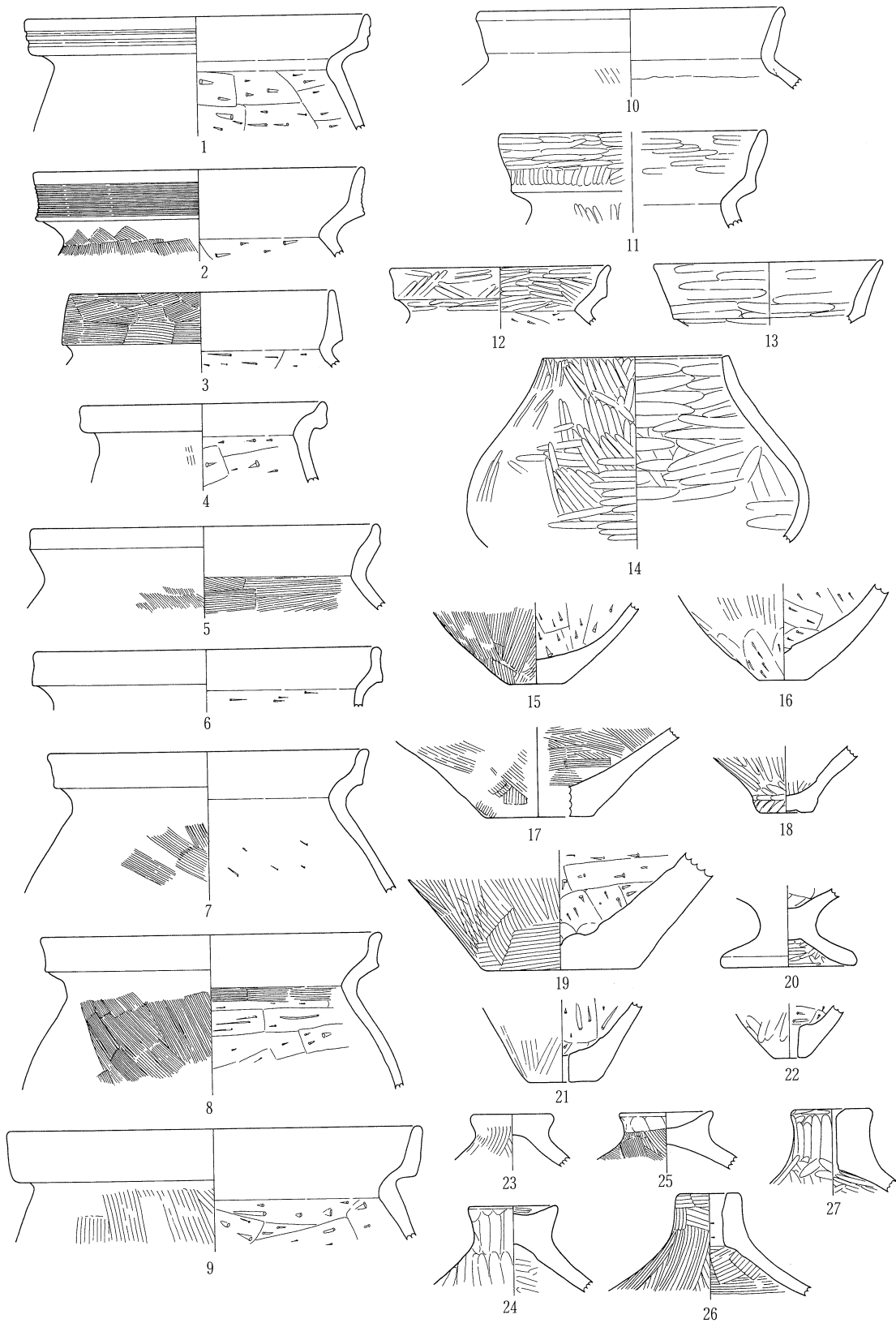


第20図 AI区ピット出土土器 (1/3)

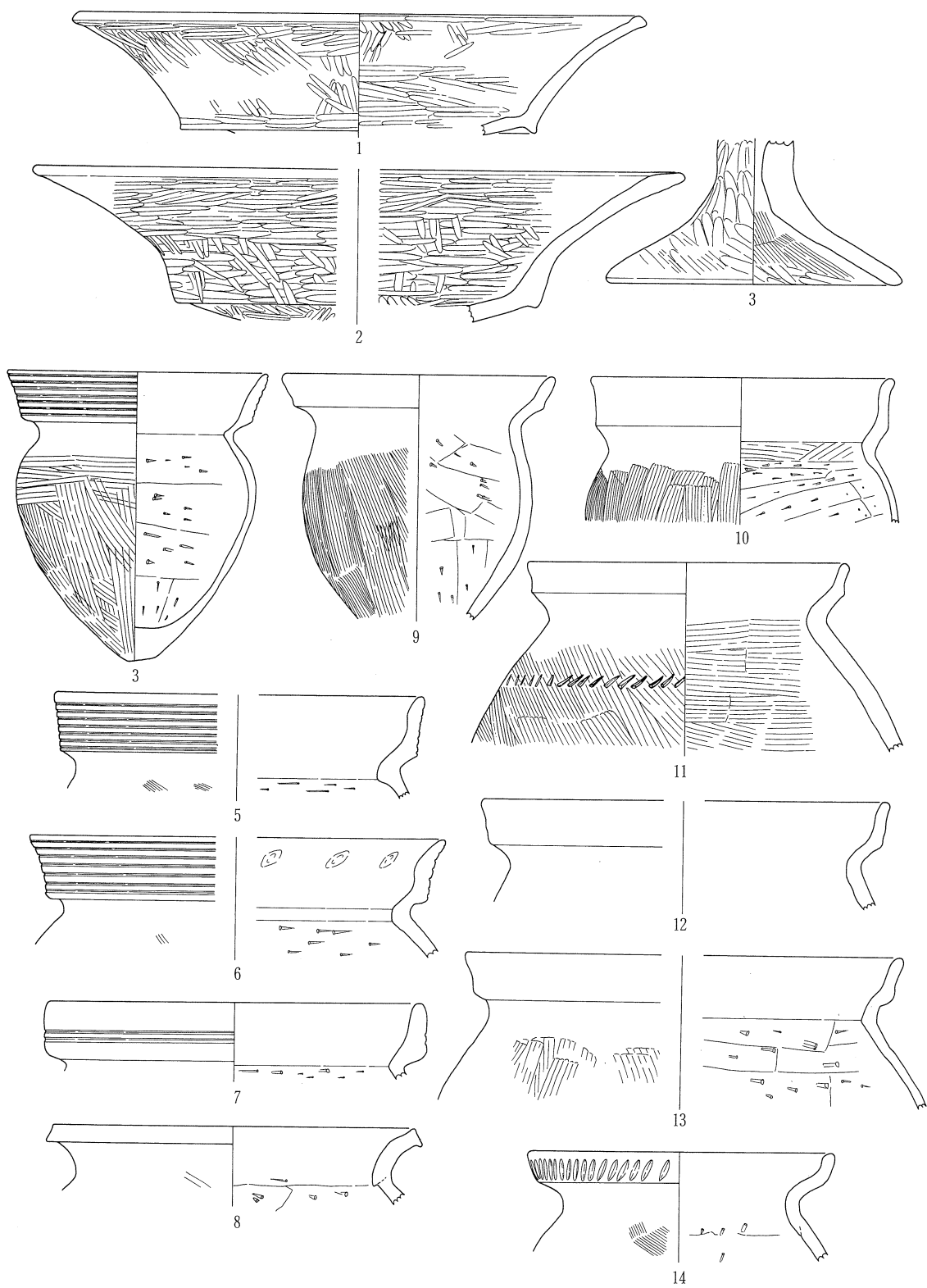


1·2 3号溝 3·4 P-12 5~9 2号溝

第21图 A II区·B I区遺構出土土器 (1/3)



第22图 A I区包含層出土土器 (1/3)



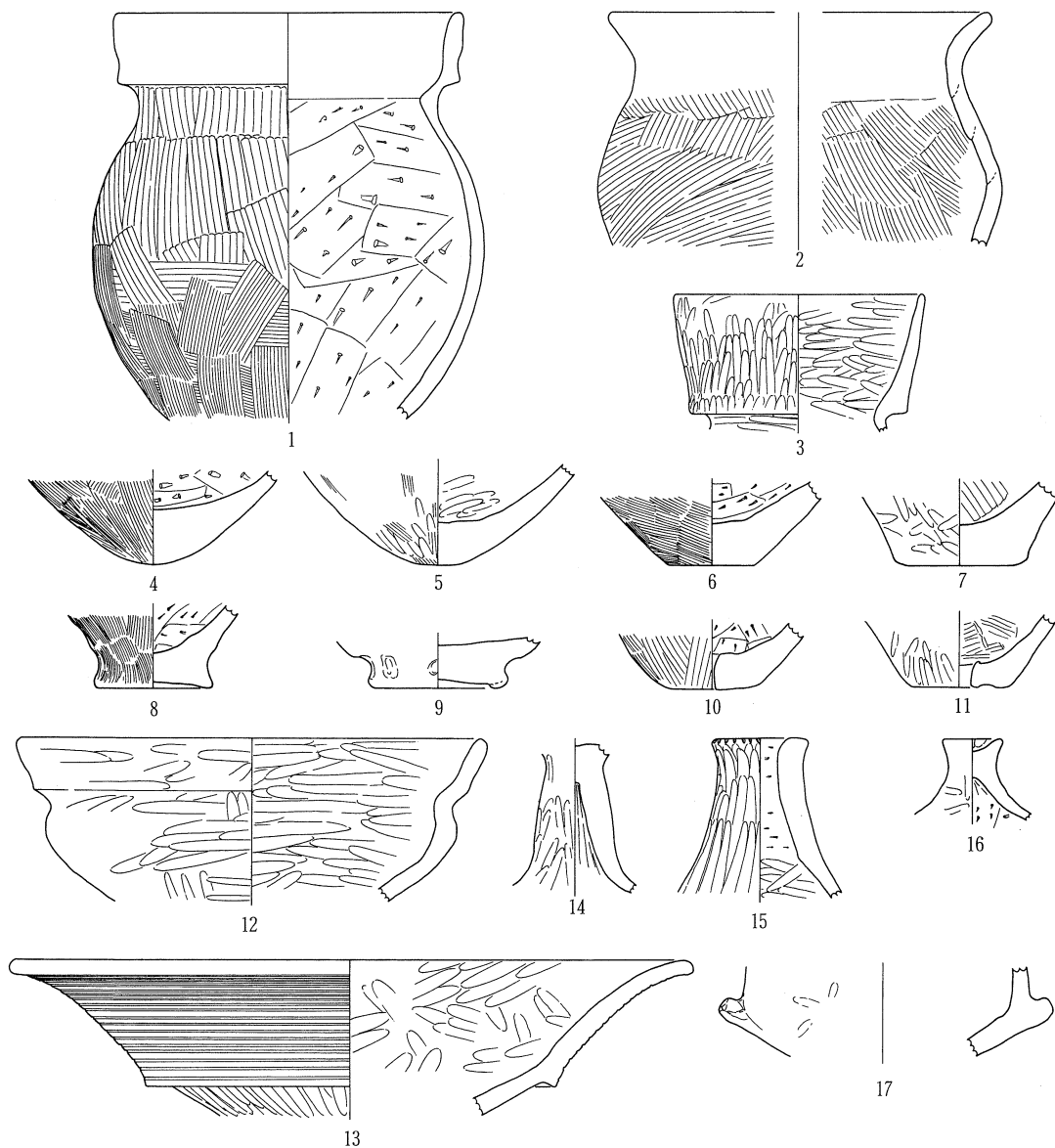
1~3 A I 区

4~14 A II 区

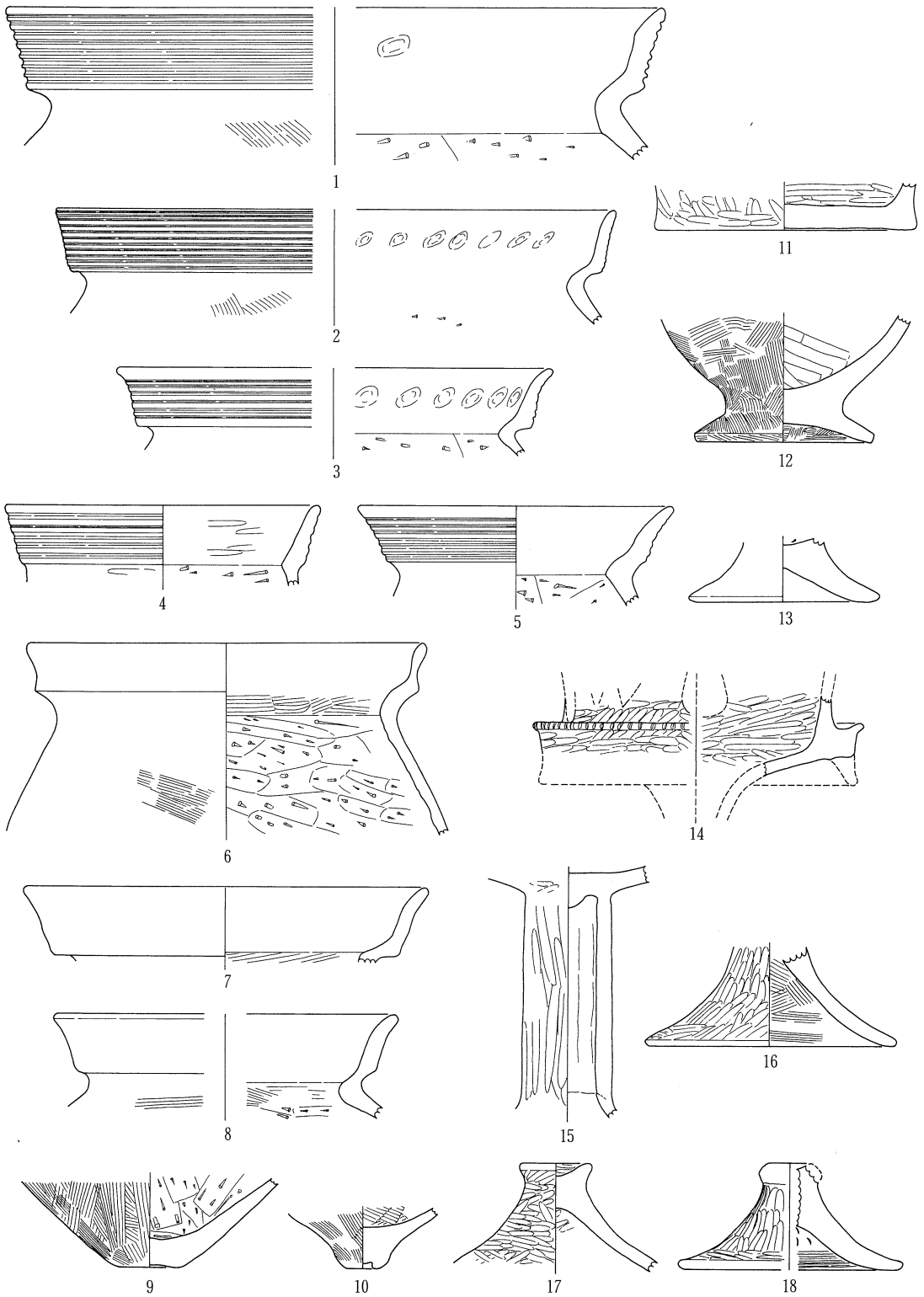
第23图 A I · A II 区包含層出土土器 (1/3)

A II 区包含層出土土器 (第23図4~14・第24図)

4~7はいずれも擬凹線を持つ有段口縁の甕である。4は口径12.4cm、胴部最大径11.6cm底径1.4cm、器高14.0cmを測る完形の小型甕である。口縁部には浅い擬凹線を7条巡らせ、調整は外面頸部にナデ、胴部から底部にかけてはハケを施すが肩部には横ハケが見られる。内面は口頸部をナデ、頸部以下をケズリで仕上げる。7はずんぐりとした作りの口縁部中程に2条の擬凹線を巡らせている。口径は17.8cmを測る。8は口縁部の断面が三角形状を呈するくの字口縁の甕である。口径17.4cmを測り端部下端が下方へ突出する。全体に磨耗が著しく胴部内面にケズリ調整



第24図 A II 区包含層出土土器 (1/3)



第25图 B I 区包含層出土土器 (1/3)

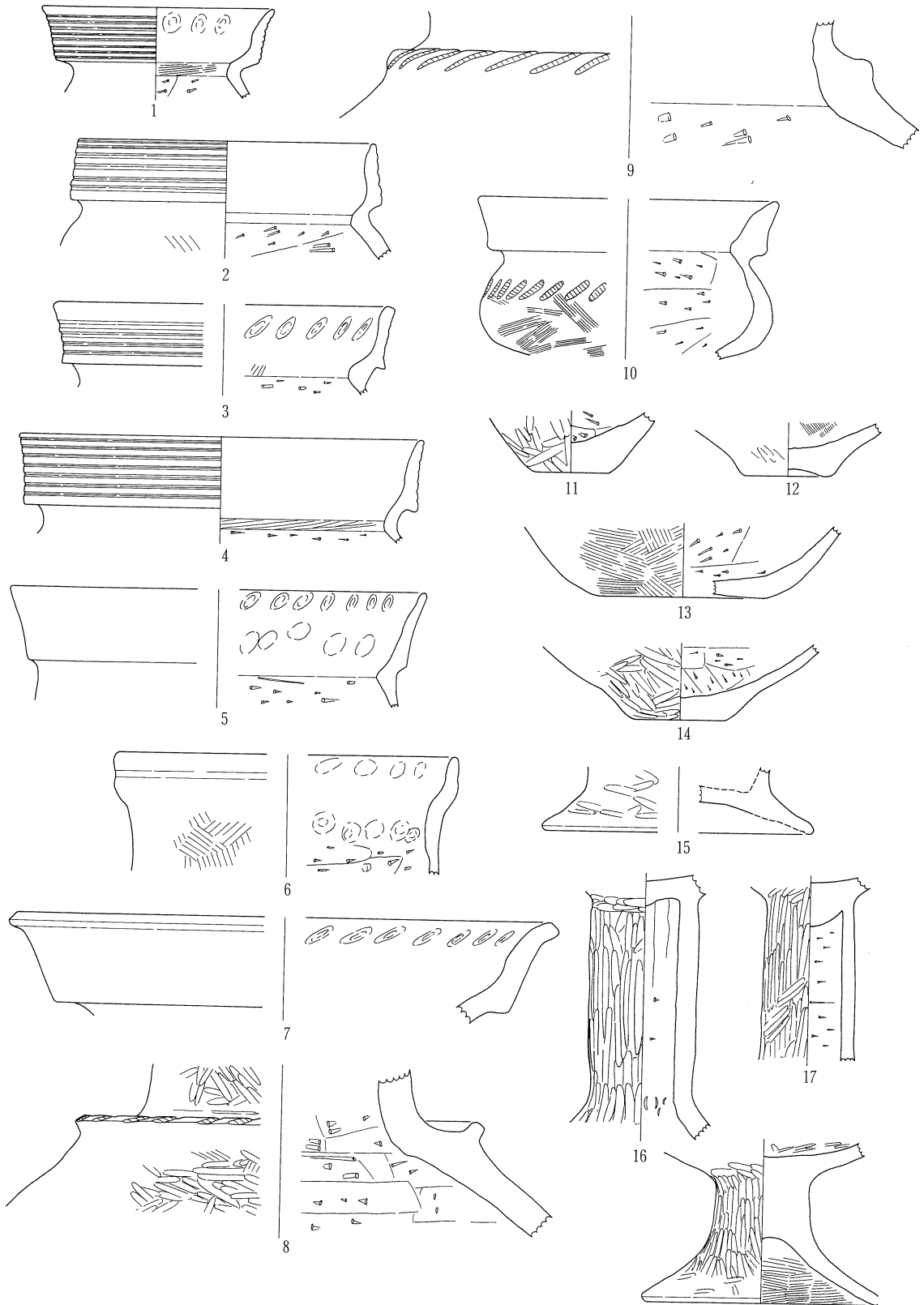
が見られる以外は不明である。9～13は無文有段口縁の甕である。9は4と法量がほぼ等しく、口縁部の意匠や肩部の張りについて違いが見られる。また外面肩部にもハケ調整は見られない。10は口径14.4cmを測り、口縁部は直立してやや外反する。頸部内面にはハケ調整痕が認められ、外面のハケ調整も斜行せずにはほぼまっすぐ引き上げられる。11はつまみナデの小さな口縁部を持ち胴部は内・外面ともハケで調整される。肩部にハケ状工具によるキザミが巡らされている。口径は15.2cmを測る。14は口径14.4cmを測る受け口状口縁の甕であり、口縁部外面にハケ状工具によるキザミを巡らせている。調整は口頸部内・外面がナデ、胴部は磨耗が激しいが外面ハケ、内面はケズリと思われる。第24図1は口径13.8cm、胴部最大径15.8cmを測る無文有段口縁の甕である。口縁部内・外面はナデ調整をおこなう。また胴部外面はハケ調整が段部直下にまで及んでおり、その順序はまず段部直下にまでまっすぐ引き上げた後胴部中程に横位のハケ調整を施し、さらに下半に原体の異なるやや目の細かいハケ状工具を用いて再び引き上げている。内面は方向不定のケズリを施す。2は口径15.2cmを測るくの字口縁の甕である。口頸部は内・外面ともにナデ、胴部は同じくハケ調整を施す。3は口径10.0cmを測る有段口縁の壺である。口縁部は長く伸び、内面には段を持たない。内・外面とも丁寧なミガキを施している。4～11は底部を一括した。この内10・11は底部穿孔土器である。10は焼成前の両面穿孔であるが孔径が2mmと非常に小さい。12は口径18.6cmを測る有段口縁の鉢である。浅いヘルメット形を呈し、重厚な作りである。13は高坏の坏部である。大きく外反する口縁部は全面を18条の擬凹線で埋めつくし、外面屈曲部の稜は鋭く垂下する。坏底部および内面をミガキで調整し口径は27.1cmを測る。14・15は高坏の柱状部である。15は上部が剥離して失われており、端部外面にヘラ状工具による細かいキザミが巡っている。16は蓋であろう。17は胴部の屈曲部に棒状の突起を持つものである。鉢の類と思われる。

BⅠ区包含層出土土器（第25図）

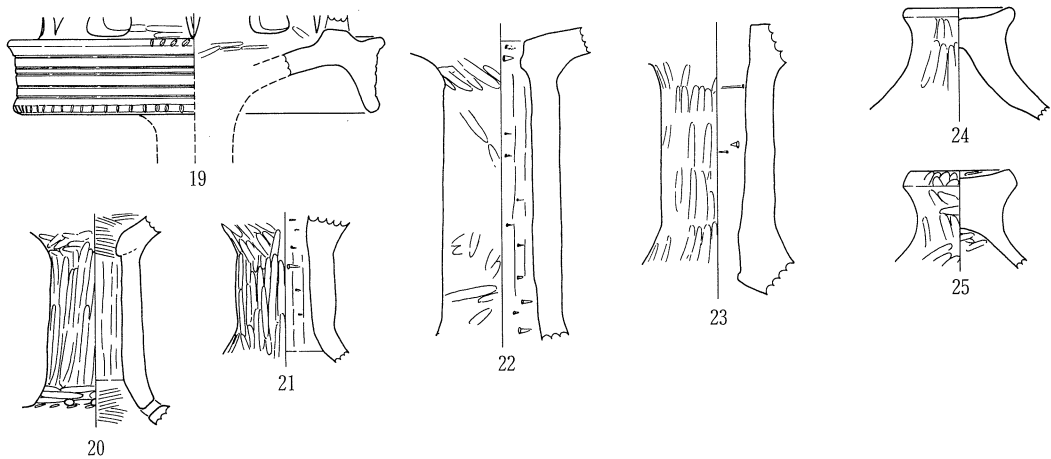
1～5は擬凹線を持つ有段口縁の甕である。1は推定で口径30.6cmを測る特大の甕である。8条の擬凹線を有し内面には指頭圧痕が見られる。6～8は無文有段口縁の甕である。6は中型品で口径18.4cmを測り、口縁部の成形はつまみナデによる。またいずれも頸部内面にはハケ調整が認められる。9～11は底部である。10は底径1.4cmを測る小さな突起状を呈しており中央部が凹む。11は底径11.8cmを測るどっしりとした平底であり、内・外面にミガキを施す。12・13は脚台付きの底部である。12は底径8.0cm、13は同じく8.0cmを測る。14は結合器台であるが胴部上半および脚部、垂下帯を欠いている。涙滴状透かしを持つものであり、垂下帯上端にはヘラ状工具によるキザミが巡らされている。15は高坏の柱状部であり棒脚である。16は脚裾部である。底径は11.7cmを測る。17・18は蓋である。18は推定で口径9.8cmを測る。

(6) BⅡ区包含層出土土器（第26・27図）

1～4は擬凹線を有する有段口縁の甕である。1は口径11.0cmを測り8条の擬凹線が施されている。内面頸部にハケ調整痕が見られ、指頭圧痕も確認される。2は内屈する口縁部に5条のへ



第26图 B II区包含层出土土器 (1/3)



第27図 B II区包含層出土土器 (1/3)

ラ状工具による太い凹線を巡らせ、上端に細い沈線を1条施している。口径は14.4cmを測る。5は無文有段口縁の甕である。段部の屈曲は弱く胴部もあまり張らないようである。内面の指頭圧痕は2列にわたって施されるが下段は規則性がみられずランダムである。6は長頸壺の類であろうか。口縁部が緩く屈曲して段をなし、外面に浅い凹線が1条巡る。内面の指頭圧痕は口縁端部と頸部中程の2箇所に見られる。7は大型の有段口縁広口壺である。端部は外に向けて面取りし、内面には指頭圧痕が見られる。口径は推定で26.0cmを測る。8・9はともに大型の壺の肩部である。いずれも頸部下に突帯を持ちハケ状工具によるキザミを施している。また8は内面のケズリ調整が頸部上にまで及ぶ。10は有段口縁の鉢である。やや外反する口縁は肉厚で、体部は胴の張る偏球状を呈する。肩部にはハケ状工具によるキザミを巡らす。11~14は底部である。15は脚台付きの底部である。剥離が激しく、底径は推定で12.8cmを測る。16・17はともに高坏の柱状部であり棒状脚である。18は脚部であるが上部の器形は不明である。A I区に見られる無頸壺(第22図14)の類であろうか。底径は11.2cmを測る。19は結合器台である。涙滴状透かしを持ち、垂下帯には5状の擬凹線を巡らせ上端および下端にヘラ状工具によるキザミを施す。20~23は器台の筒胴部である。また24・25は蓋のつまみ部である。

3 石器 (第28~32図)

石器は点数が少ないため一括して報告したい。図示した33点の内訳は打製石斧9点、凹石3点、敲石3点、磨石10点、石皿1点、砥石3点（うち1点は1号溝出土、第19図9）、石棒1点、不明3点である。出土地点、寸法、石質については石器一覧表を参照願いたい。

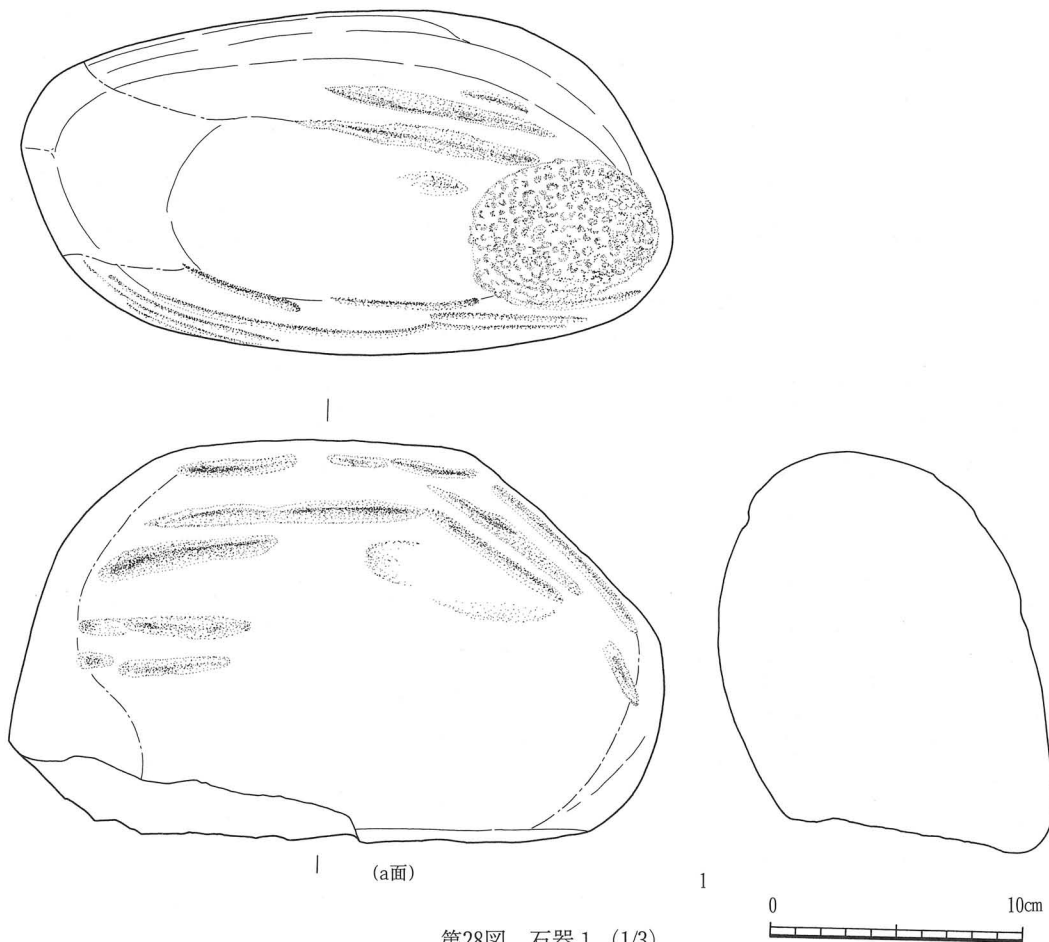
1の砥石は、1号炉の炉石で同時に砥石の用途も兼ね使用されていたものである（第7図a石）。実測図のa面を炉の内側にして据えられていた。火熱をうけ焼けひびが入る。上部両面には幅6~11mmの砥ぎ溝がみられる。砥ぎ溝の長さは3~5cmで、深さは1.5mm程度である。また、上面斜部の面は敲打を受けている。

打製石斧の側縁部の形状は、外湾がきつく石斧最小幅が基部より小さくなるもの2~4、外湾の緩い6、緩く内湾する7・8がある。9は側縁部外湾のものとして推定するが、刃部の幅はくびれ部幅のほぼ2倍となる。17~26は磨石とした。扁平な形態となる磨石は長さ10cm級、15cm級、20cm級の3つのクラスに分かれる。15cm級以上の磨石は置いて使用したものと考えられ、石皿的な要素をもつものであろう。29の石棒は両端を欠損するが、丁寧な磨きである。30~32は磨痕や敲打の使用痕が認められるが、器種不明としたものである。

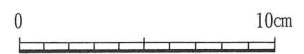
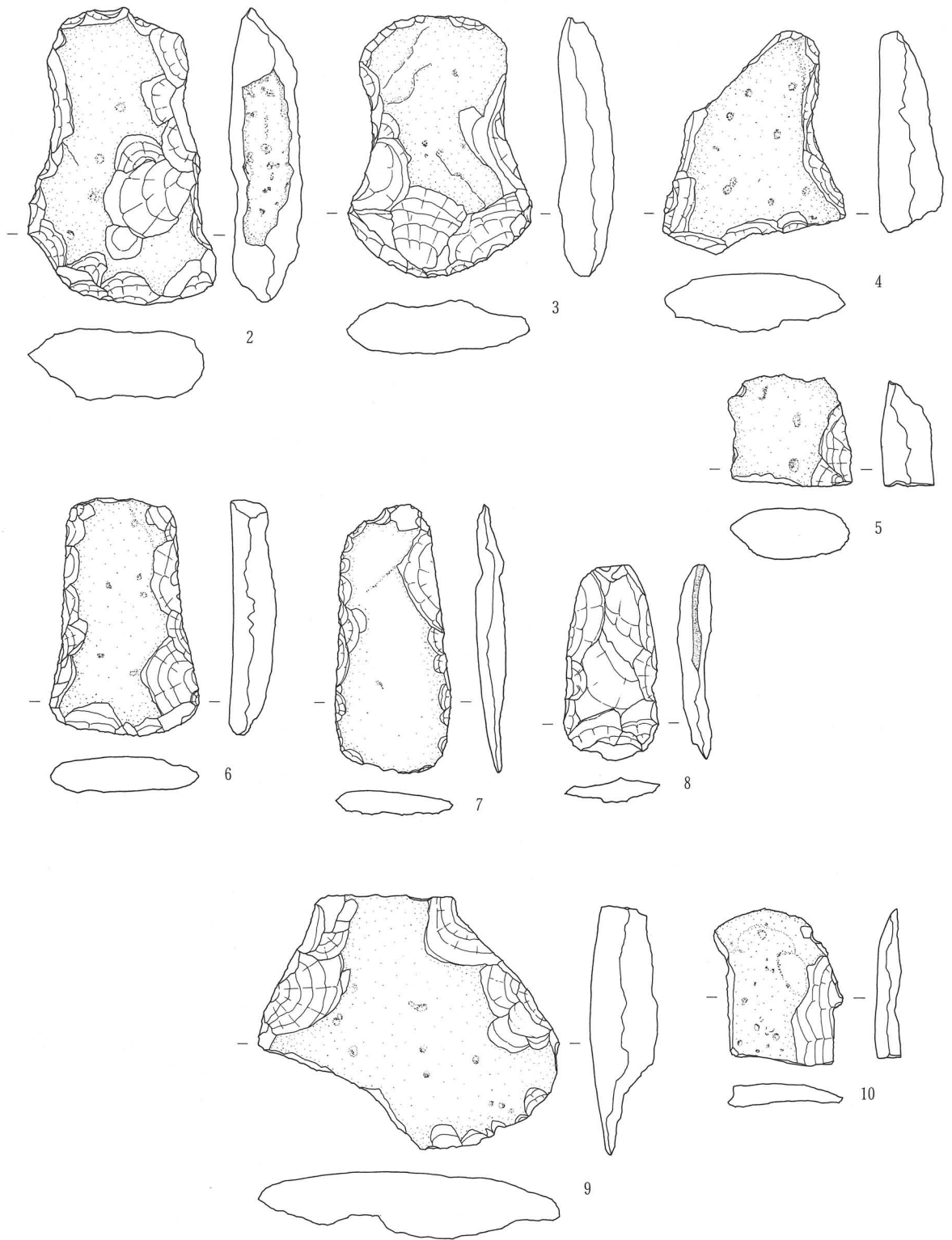
石器一覧表 () は欠損部

番号	器種	出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質
1	砥石	B I 区 1号炉石 (a 石)	260	158	137	7,600	細粒砂岩 (中世代)
2	打製石斧	不明	145	86	35	615	火山礫凝灰岩
3	打製石斧	A I 区 17X-0.8 Y 2層	129	88	27	361	火山礫凝灰岩
4	打製石斧	A I 区 1号溝	99	88	31	301	火山礫凝灰岩
5	打製石斧	A I 区 10.5X8.2 Y 2・3層	(54)	58	25	111	火山礫凝灰岩
6	打製石斧	B II 区 130X付近	116	72	21	250	変朽安山岩
7	打製石斧	B I 区 92X付近 2層	132	56	14	128	緑色凝灰岩
8	打製石斧	B II 区 108X 2層	95	46	17	74	珪化凝灰炭質岩
9	打製石斧	B II 区 130X付近	(124)	167	33	640	火山礫凝灰岩
10	打製石斧	B II 区 133X 2層	(74)	(56)	(12)	70	珪質岩
11	凹石	A I 区 1号溝	155	82	53	901	中粒砂岩 (中世代)
12	凹石	B I 区 90X2.1 Y	101	83	52	612	中粒砂岩 (中世代)
13	凹石	B I 区 96X2.8 Y 2・3層	83	66	41	292	角閃石安山岩 (第四紀)
14	敲石	B I 区 94.7X2.3 Y 2・3層	193	47	47	630	中粒砂岩 (中世代)
15	敲石	B I 区 90.3X3.1 Y	130	61	27	293	細粒砂岩 (中世代)
16	敲石	B I 区 86.3X4.3 Y 2・3層	144	54	39	472	細粒砂岩 (中世代)
17	磨石	A I 区 11X 2層	102	70	52	532	中粒砂岩 (中世代)
18	磨石	B I 区 89.6X6.1 Y 2・3層	98	87	24	300	粗粒砂岩 (中世代)
19	磨石	B I 区 90.4X3.3 Y	108	(77)	30	350	粗粒砂岩 (中世代)

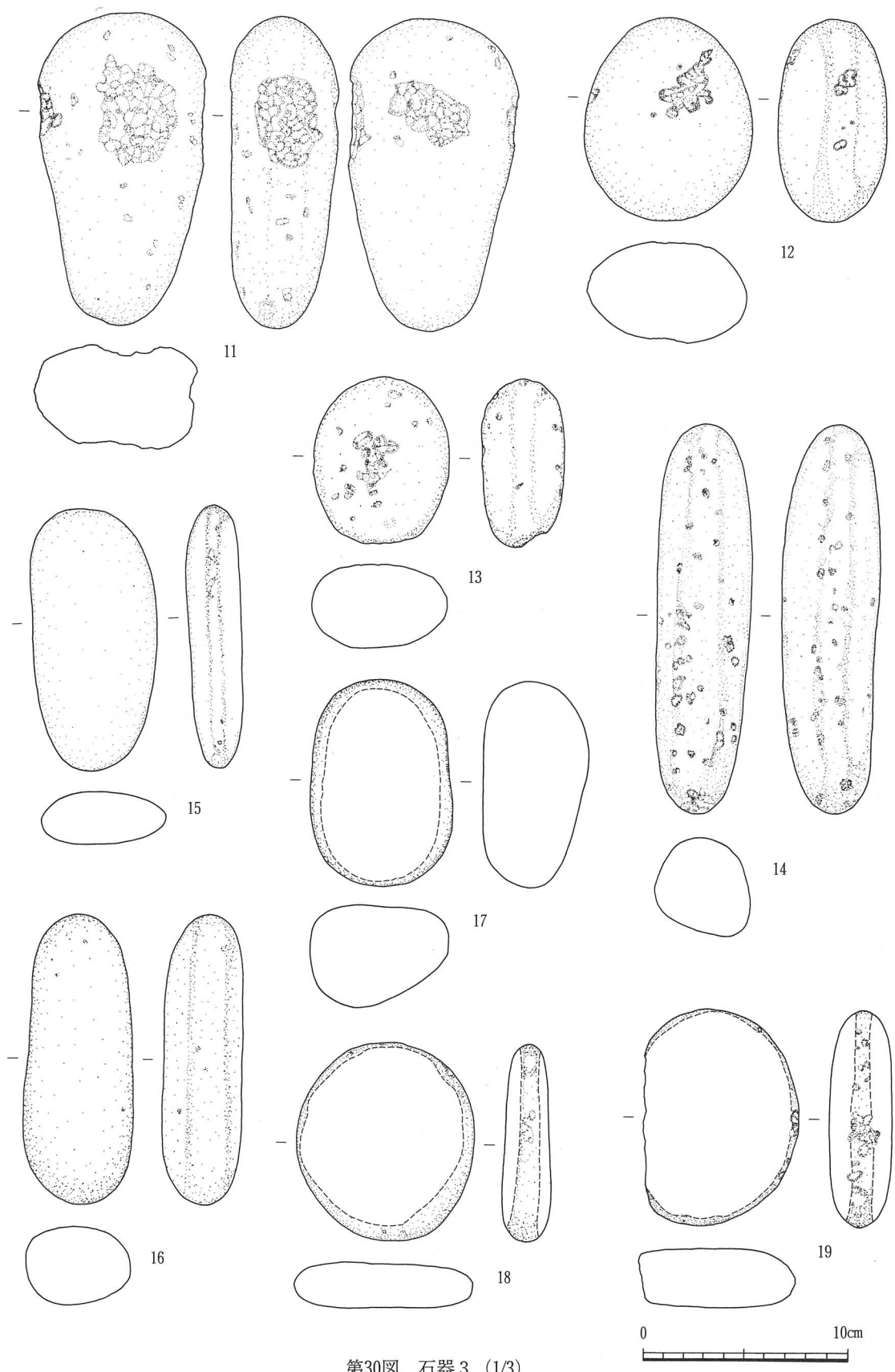
番号	器種	出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質
20	磨石	B I 区 92.6X2 Y	184	147	39	1,605	複輝石角閃石安山岩(第四紀)
21	磨石	B I 区 91.9X3 Y	147	116	38	910	粗粒砂岩
22	磨石	B I 区 92.2X3 Y	160	112	29	733	中粒砂岩(中世代)
23	磨石	B I 区 93.5X3 Y 2・3層	145	152	36	1,219	中粒砂岩(中世代)
24	磨石	B I 区 91.6X2.5 Y	198	101	33	924	中粒砂岩(中世代)
25	磨石	B I 区 92X3.2 Y	(138)	119	31	675	中粒砂岩(中世代)
26	磨石	B I 区 12X2.6 Y	144	107	30	630	中粒砂岩(中世代)
27	石皿	B I 区 95.5X5.5 Y ピット	(206)	(203)	29	2,640	緑色凝灰岩
28	砥石	A I 区 8.6X6.7 Y 2・3層	182	128	48	1,780	中粒砂岩(中世代)
29	石棒	B I 区 4層	167	17	16	63	粘板岩
30	不明	B I 区 94.8X3.9 Y 2・3層	116	117	27	610	変朽石英安山岩
31	不明	B I 区 93.6X1.8 Y	194	188	59	2,520	中粒砂岩(中世代)
32	不明	B I 区 95.5X5.5 Y ピット	201	109	51	1,490	中粒砂岩(中世代)



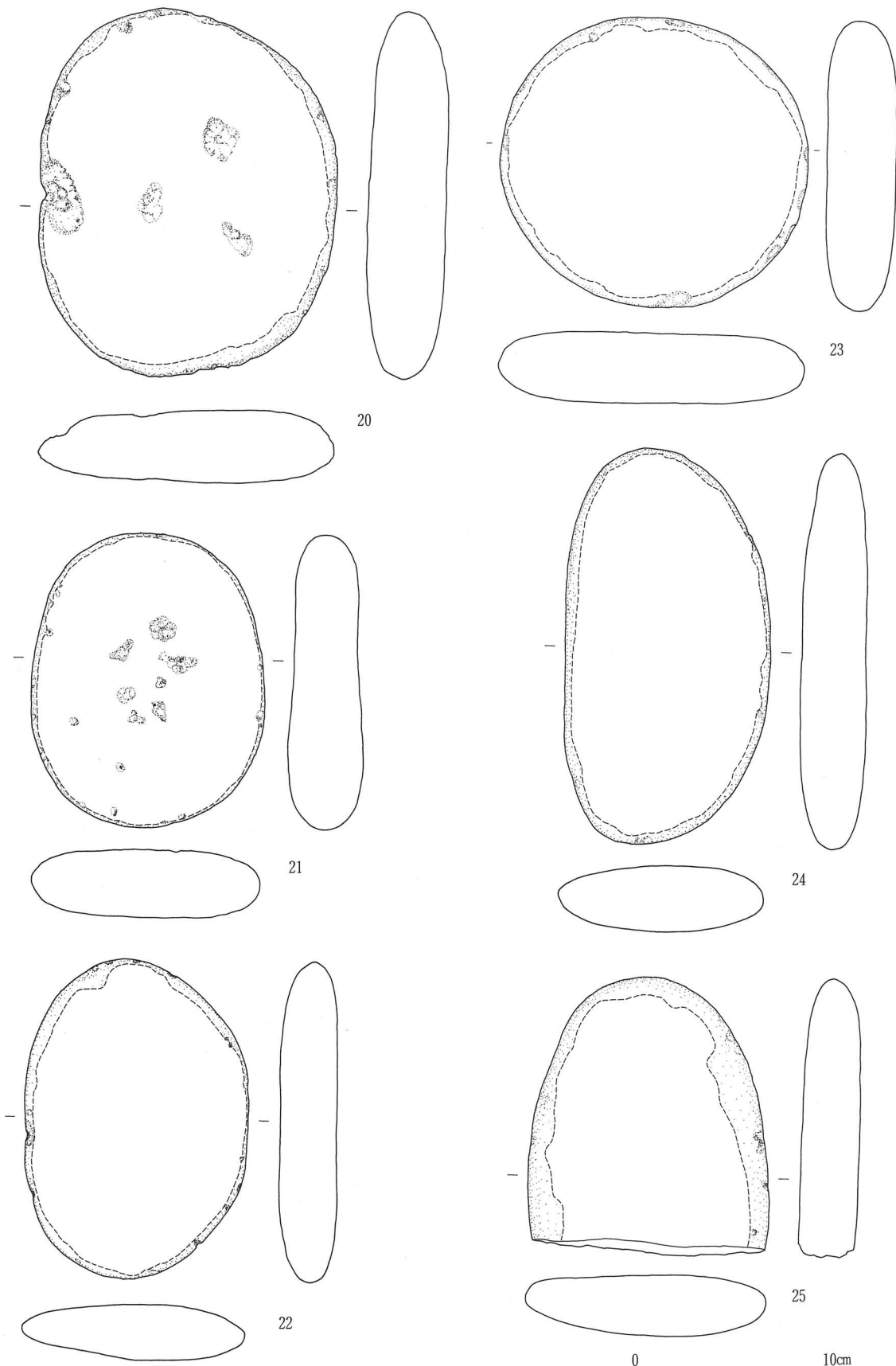
第28図 石器 1 (1/3)



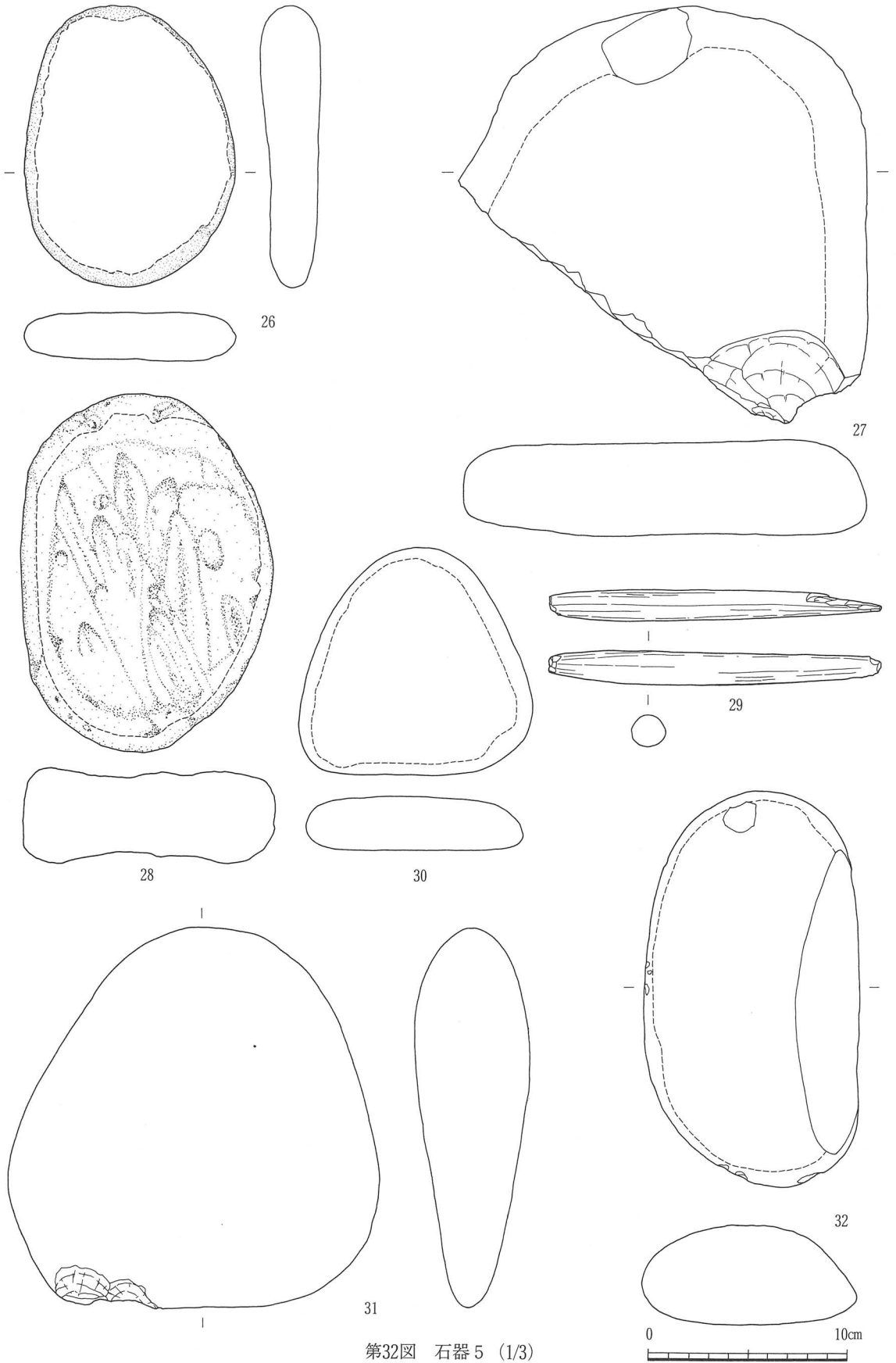
第29图 石器 2 (1/3)



第30图 石器 3 (1/3)



第31図 石器4 (1/3)



第32图 石器 5 (1/3)

第4節 押野大塚遺跡からの石器の石質についての一考察

藤 則雄（金沢大学地球科学教室）

1. はじめに

押野大塚遺跡から出土した石器数は総計33点で、最も多いのが凹石・磨石16点（約50%）で、これに次いで打製石斧9点（約30%）が多く、これ等以外の石器は砥石3点・その他3点・石皿1点・石棒1点と僅少である。石鏃・磨製石斧・石錘・玉類等は出土していない。

概して、当該遺跡が当時代において重要な、または富める遺跡であったかを判断する一指標として、上述の磨製石斧・玉類の出土点数とその石質の種類がある。

そのような意味においては、本遺跡は磨製石斧や玉類の出土が皆無であることから見て、当時においてそれ程重要な遺跡であったとは考えられない。

2. 各石器の石質

（1）打製石斧

打製石斧9点の石質は5種類で、これ等の中で出土点数の最高頻度の石質は火山礫凝灰岩5点である。緑色凝灰岩1点と珪化凝灰岩1点を含めた凝灰岩類の出土総点数は7点に及んでいる。何れの凝灰岩も手取川中流域に多産するが、利用されている石材の大きさから判断すると、本遺跡が立地する手取川扇状地の扇端域を構成する礫層の中に多く含まれている。

（2）石 皿

石皿1点の石質は、緑色凝灰岩からなり、原地性の石材である。

（3）砥 石

本遺跡からの砥石の出土は3点で、その石質は中生代の砂岩2点と凝灰岩1点である。

（4）凹石・磨石・敲石

本遺跡からの凹石・磨石・敲石の出土は16点で、その石質は表に示すように中生代の砂岩類と第四紀の角閃石安山岩とがある。前者は14点で、後者は2点である。前者の砂岩類は、その石質から中粒砂岩（10点）と細粒砂岩（4点）とに細分できる。

砂岩類の源分布は手取川上流域に限定されるがその礫は手取川扇状地にも分布するので、恐らくは扇状地を構成する礫がこの石器に利用されたものと推定された。

第四紀の角閃石安山岩は脆いので、手取川扇状地には礫として殆ど分布していないため交易によって運ばれて来た石材の可能性はある。

(5) 石 棒

石棒は1点で、その石質は古生代の粘板岩である。その源分布は九頭竜川上流または新潟県青海であるので、何れにしても交易によって入って来たものと推定される。

(6) その他

その他の石器とされたものの石質は、表に示されているように、石英安山岩（1点）と中粒砂岩（中生代2点）である。何れの岩石も手取川扇状地の礫として分布しており、それが利用されたものと判断される。

表-1 押野大塚遺跡の石器の石質

石器の種類	石 質	個体数 (個)	頻度(%)	最寄りの分布地	全体対 頻度(%)
石 皿	緑色凝灰岩	1		手取川中流	3
石 棒	粘板岩	1		九頭竜川・糸魚川上流	3
砥 石	細粒砂岩（中生代）	1	33	手取川上流	9
	中粒砂岩（中生代）	1	33	手取川上流	
	白色凝灰岩	1	33	手取川中流	
打製石斧	変朽安山岩	1	11	手取川中流	27
	緑色凝灰岩	1	11	手取川中流	
	珪化凝灰質岩	1	11	手取川中流	
	珪質岩	1	11	手取川中流	
	火山礫凝灰岩	5	56	手取川中流	
	複輝石角閃石安山岩	2	12	手取川上流(白山火山)	
凹石・磨石 ・敲石	細粒砂岩（中生代）	2	12	手取川上流	46
	中粒砂岩（中生代）	9	56	手取川上流	
	粗粒砂岩（中生代）	3	20	手取川上流	
そ の 他	変朽石英安山岩	1		手取川上流	10
	中粒砂岩（中生代）	2		手取川上流	

第5節 まとめ

扇状地端部の標高12mの平地に営まれた押野大塚遺跡は、縄文時代後期前葉後半頃と弥生時代後期後半を主体とする集落跡で、縄文時代晩期後半と弥生時代中期初頭の遺物がみられる複合遺跡である。

縄文時代

遺構は1号炉1基と自然石の集石を確認したにすぎない。集石A群の広がりには竪穴住居の平面形とも想定しうるが、遺構覆土と地山の区別が出来ないため1号炉付近での柱穴が不明に終わったことなど調査には課題が残るものである。それにしても、砥石として用いられた1号炉の炉石の一つは、炉の傍らに腰をおろし暖や明かりをとりながら玉などを磨いている情景を想い浮かばせるものである。

後期前葉の土器群は気屋Ⅱ式に属するもので、能登地域には一定量の出土があるものの加賀地域では僅かしか確認されていない。深鉢は道下元町遺跡（西野1985）、上田うまばち遺跡（高堀・西野1985）、真脇遺跡（米沢1986）に類似例が見られる。しかし、類似例は口唇部が先細りとなる本遺跡のB類に属するもので内面に沈線と縄文が施されるものが多く、口唇部の面に縄文を施し内面に沈線が無い本遺跡のA類とは違いが見られる。また緩い波状口縁の波頂口唇部に押圧を加える手法を内面に施すものが真脇遺跡で確認できる。深鉢B類の割合は少なく、8・16・26（同一個体）の文様は逆Z字状に屈折する上部の沈線とこの下には幾何学的な文様が考えられるもので、出土地点や幅広となる沈線、多条平行沈線間を縄文帯と無文帯の交互にするなどA類とは違いがある。本遺跡で主体となるA類と少量のB類は時間差が考えられるもので、B類の類似例での口縁内面における沈線や縄文の施文は、口唇部先細りの結果からA類における口唇部縄文の施文位置の移動として生じたもの想定したい（木下哲夫氏の教示を得ている）。36はいわゆる堀之内Ⅱ式に該当するもので、県内で唯一文様構成が判明する寺家遺跡出土土器とは横位区画帯や内面に沈線が無いなどの違いがあり、古相となるものであろう。浅鉢43の小突起や沈線内の連続刺突は、気屋式の特徴とされる三角形連続刺突文と突起の造作手法を受け継いだものであろうか。また、「く」の字状に内折する器形は西日本の影響を受けたものと考えられ、福井県福井市上河北遺跡（木下他1978）に類似がみられる。

簡単に後期の土器を概観したが、北加賀地域の空白部分を埋める後期前葉の土器群はB類とこれに先行するA類がみられるもので気屋Ⅱ式内での先後関係の手がかりになるものにとらえておきたい。現在のところ野々市町内では最も古い時期の土器群である。

晩期後葉の土器が少量ながらも出土している。深鉢や鉢に施される工字状文は、長竹遺跡（中島・湯尻1977）での楕円工字状文が簡略化された印象を受けるもので、綾杉状文を施すコップ形の90・92は長竹遺跡では確認していない。また、弥生前期に位置づけられる指頭による幅広の凹線を施す土器がみられないことから、この土器群は下野式後半期の長竹遺跡と同時期かやや後出するものと考えられよう。

弥生時代

調査面積が狭いため遺跡の内容は十分に把握することが出来なかった。検出した遺構は後期に属するもので、主要な遺構は竪穴式住居に推定する建物1棟、掘立柱建物1棟、土坑7基以上、溝6条である。しかし、住居及び掘立柱建物の時期は出土土器の量的な関係から時期の比定が難しいものである。遺構の分布はAⅠ区でやや密度が高いもののBⅠ区までは散発的な状況で、これから東のBⅡ区では遺構を確認していない。遺跡は現在住宅地となっているAⅠ区の南側に広がりをもちことが考えられる。

出土土器は全体の様相から法仏式～月影Ⅱ式の時期幅が考えられるものである。しかし、一見すると月影Ⅱ式とされるものは僅かで、遺構出土土器は法仏Ⅱ式～月影Ⅰ式に比定されるものと思われる。遺物を出土した1～3・6・7号土坑、2・3・5号溝は法仏Ⅱ式期の所産であろう。BⅠ区のP-12から出土した重厚な器台は法仏Ⅰ式の所産と考えられる。

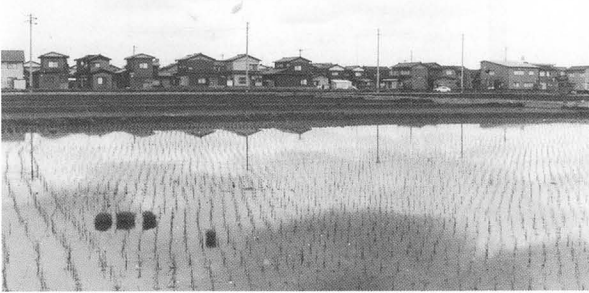
近接する押野タチナカ遺跡は南方600mに位置し、本遺跡は立地的に下流域となる。両集落は併存する時期を有し分村関係などが今後の課題となるもので、集落が増加傾向をみせる当該期の周辺集落の動向も含め検討されるべきものである。

僅かであるが中期の土器が出土した。不明のものもあるが、第17図1・2・4は矢木ジワリ遺跡(増山1987)に類例がみられる。4は指ナデ凹線第3段階、1・2は東海地方岩滑式に平行するもので、どちらも中期初頭に位置づけられよう。

小字名として残る「オオツカ」は古墳を指すものと推察されるが、今回の調査では古墳時代の遺構遺物は検出していない。しかし第151図「押野館跡図」には塚の大きさを表す「周廻四十間計」の記述がある。換算すると周廻約73m、円形と推定すれば径約23mの大きさとなる塚が19世紀初頭にはこの周辺に存在していたことになる。削平の時期は不明だが押野館跡と併せ旧地籍図の検討により位置の特定を図っていきたい。

引用・参考文献

- 石川考古学研究会編 1986 『シンポジウム「月影式土器」について』
石川県石川郡押野村史編集委員会 1964 『石川県押野村史』
木下 哲夫他 1978 『上河北遺跡』福井県教育委員会
西野 秀和 1983 『上田うまばち遺跡』押水町教育委員会・石川考古学研究会調査団
中島 俊一・湯尻 修平 1977 『松任市長竹遺跡発掘調査報告』石川県教育委員会
西野 秀和 1985 『門前町道下元町遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
久田 正弘 1988 『八田中遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
増山 仁 1987 『金沢市矢木ジワリ遺跡・金沢市矢木ヒガシウラ遺跡』金沢市教育委員会
谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会
米沢 義光 1986 「気屋式土器」『真脇遺跡』真脇遺跡調査団・能都町教育委員会
米沢 義光 1988 「縄文時代の遺物」『寺家遺跡』石川県立埋蔵文化財センター



遺跡遠景（北東から）



A I 区（東から）



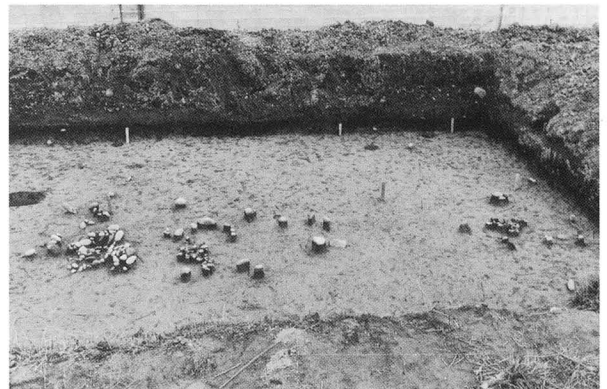
調査区近景（東から）



B I 区（西から）



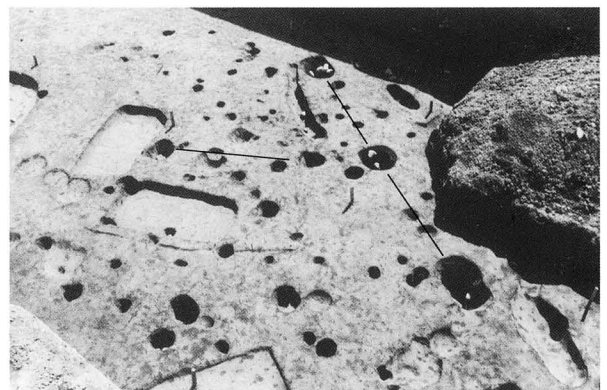
調査区近景（西から）



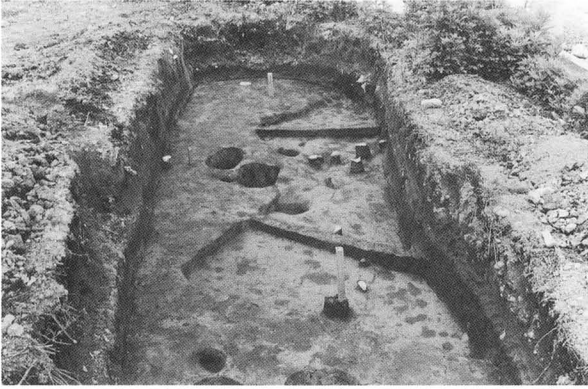
B I 区遺物出土状況（北から）



A I 区（西から）



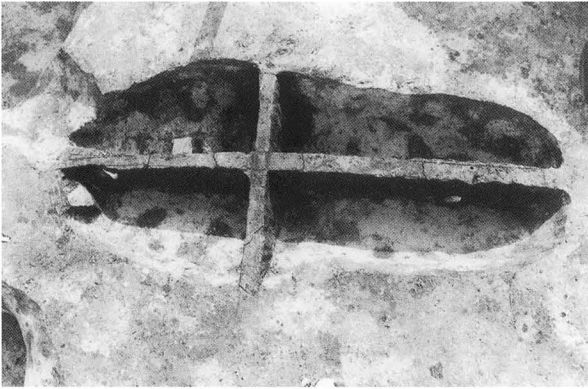
1号住居・1号掘立柱建物（北西から）



1号(上)・2号土坑 (東から)



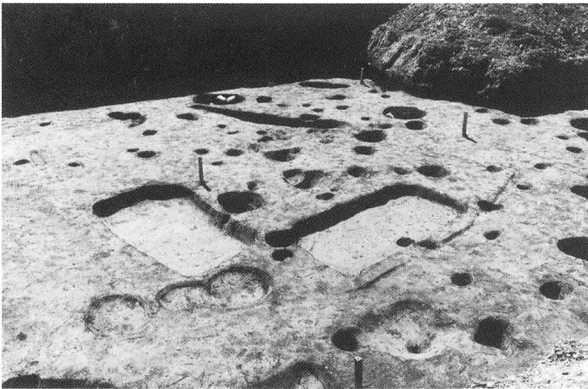
1号溝 (東から)



3号土坑



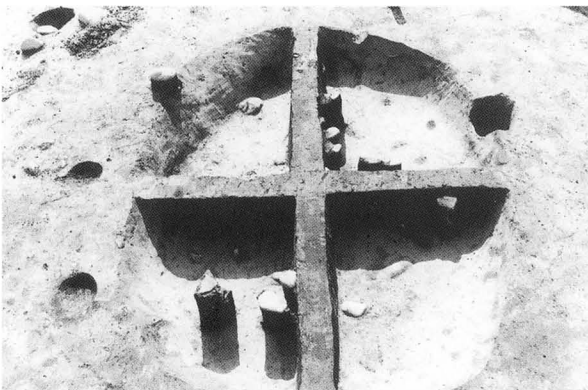
2号溝 (東から)



4号(右)・5号土坑 (北東から)



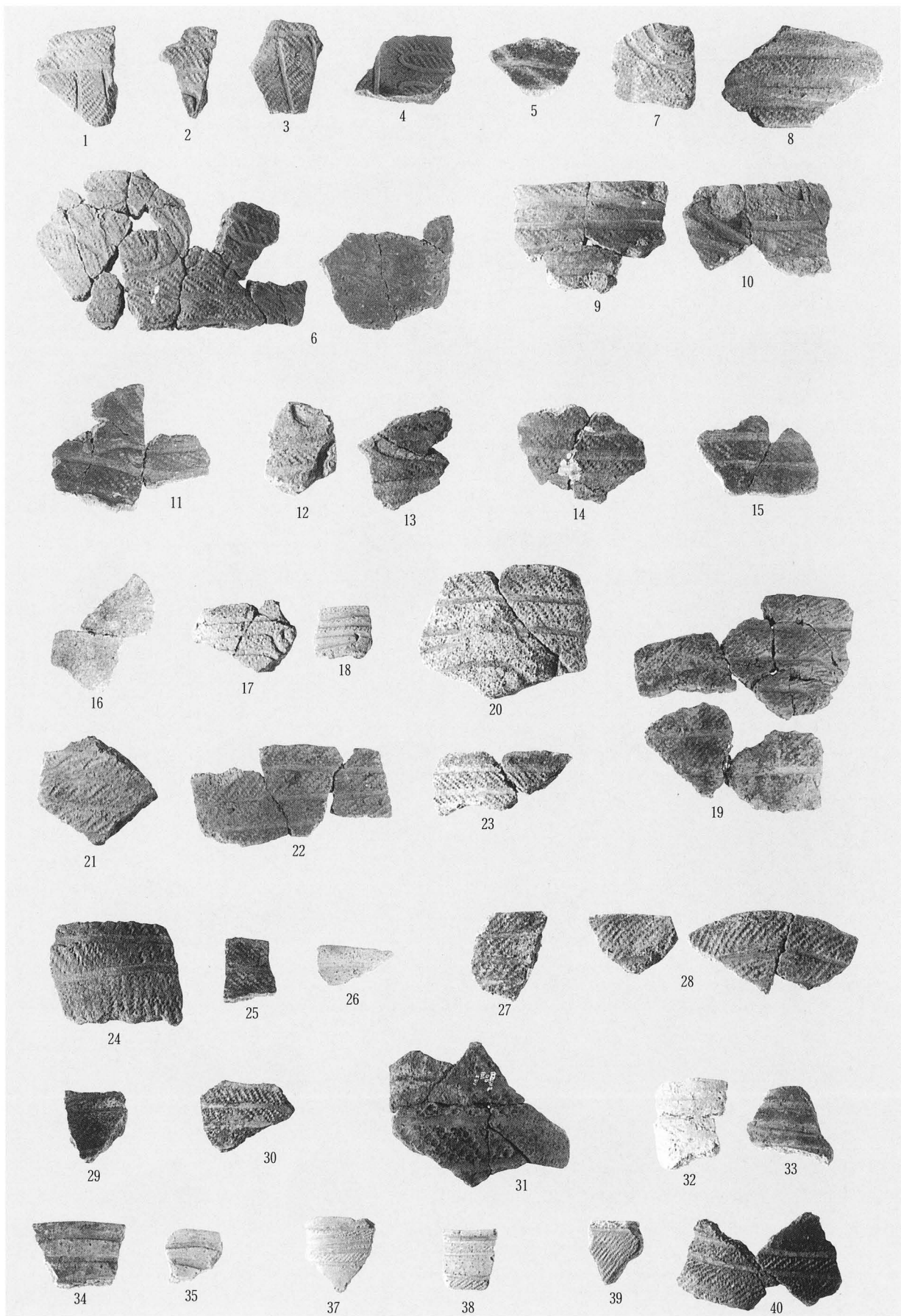
3号溝 (西から)

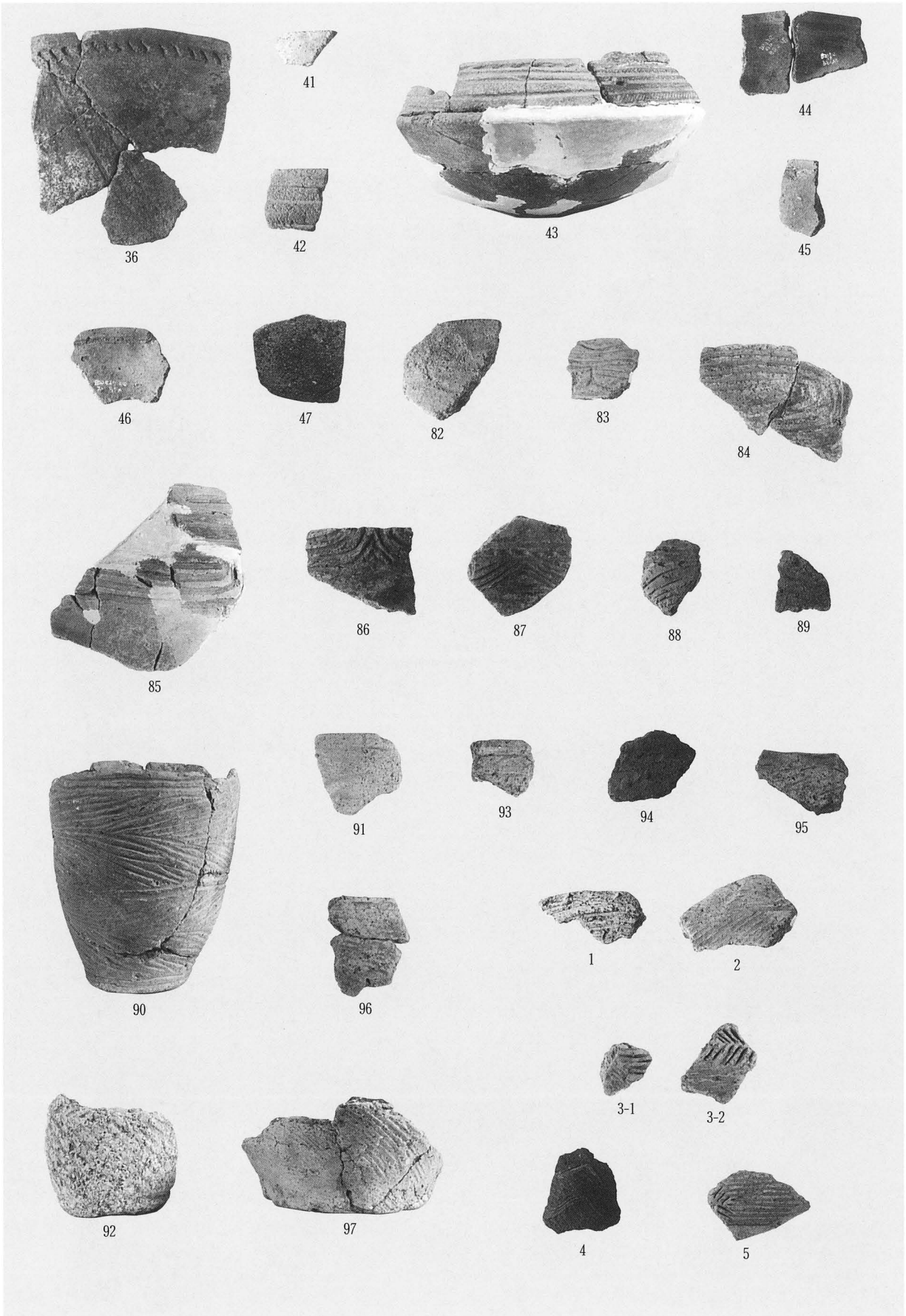


6号土坑



P-13







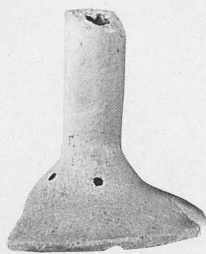
19-2



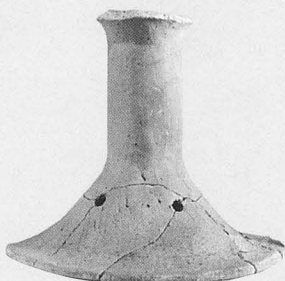
19-3



19-13



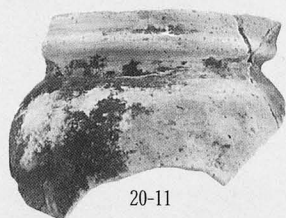
19-16



19-15



20-8



20-11



20-12



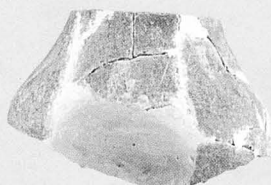
20-14



22-1



22-19



22-14



21-2



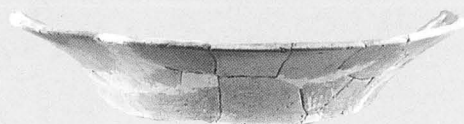
23-5



23-1



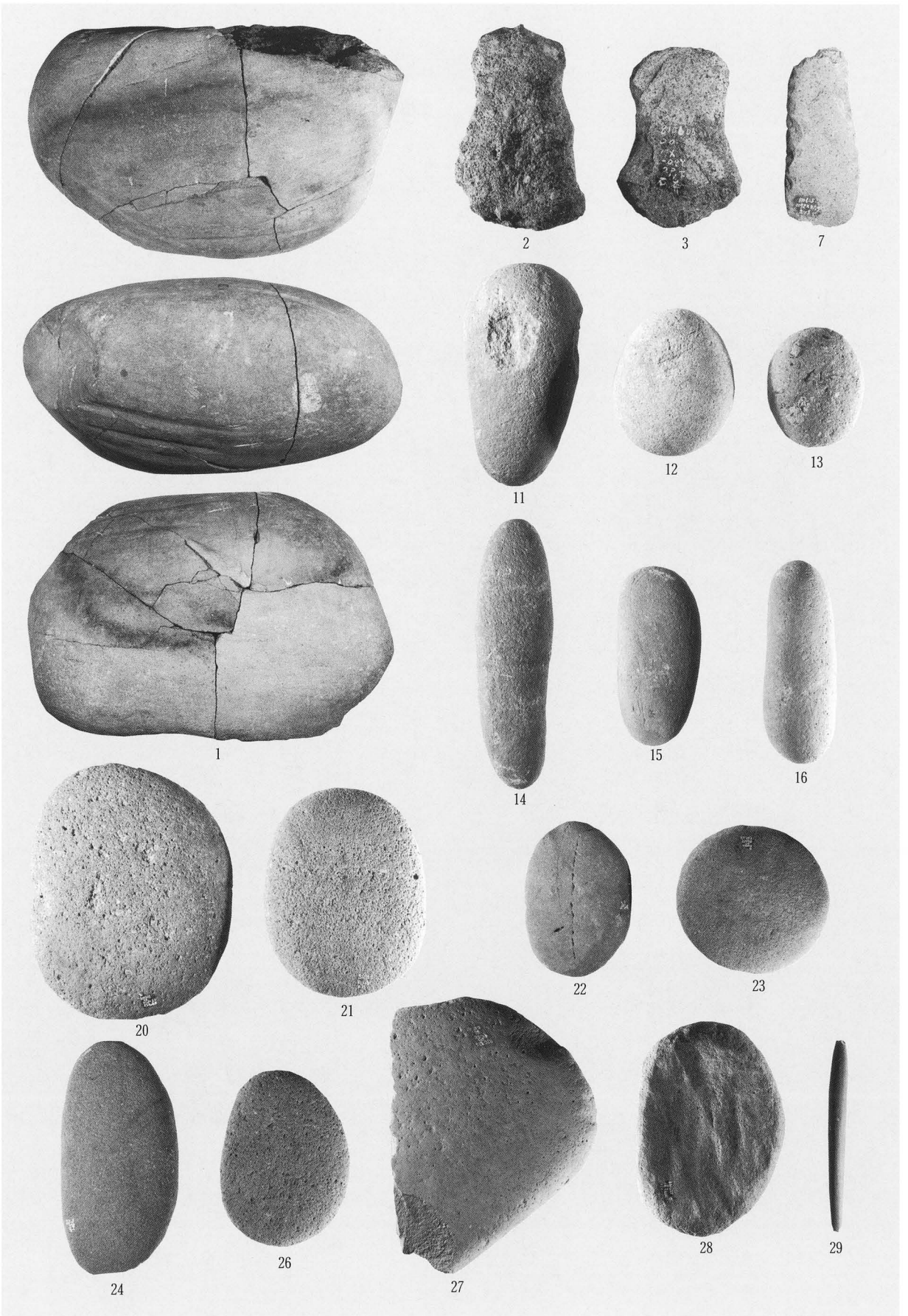
26-1



23-2



24-1



押野夕十力遺跡・押野大塚遺跡

発行日 1989年3月

発行者 野々市町教育委員会

〒921 石川県石川郡野々市町本町5丁目4-1

電話 0762-46-2344

印刷 北國書籍印刷株式会社
